沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第49集

首　里　城　跡

－京の内跡発掘調査報告書（Ⅱ）－

平成21（2009）年　３月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序

昭和47年５月15日の本土復帰の日に国指定史跡として指定された首里城跡は、琉球王国の王城として500有余年にわたって沖縄の歴史・文化の中心的な核となって沖縄の歴史と文化の礎を築き上げてきたグスクとして国内外に知られています。

また、平成12年12月２日にユネスコ世界遺産条約に基づき「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として「世界遺産」（文化遺産）に登録されました。

首里城は沖縄独自の建築技術や石積みなどの建築や土木技術の粋を集めて完成された県内最大規模のグスクであったが、アジア太平洋戦争末期に起きた沖縄戦による戦過で旧国宝（昭和８年１月23日指定）であった首里城正殿、歓会門、瑞泉門、白銀門などの多くの建造物や城壁の石積みはことごとく破壊され、消失しました。

戦後は、首里城跡に琉球大学が昭和25年に創設され、キャンパスとして昭和57年まで使用されました。

県民の首里城復元に関する熱い期待と要請により昭和60年度から沖縄開発庁（現在の内閣府）、建設省（現在の国土交通省）、文部省（現在の文部科学省）、沖縄県によって首里城跡の復元整備事業が開始され古都首里城の歴史的風土にふさわしい区域として今日まで継続的に遺構確認調査に基づく復元整備が進められてきました。

首里城跡の復元整備の中で平成４年度には首里城正殿の復元と北殿、南殿、奉神門などの施設が再建され、在りし日の姿を現在に写し出すかたちで首里城公園として一部公開されました。その後、平成11年に白銀門、平成12年系図座・用物座及び二階殿、平成15年に京の内、平成19年には書院・鎖之間などの新たな建造物群が復元されています。

本書に収録された首里城の「京の内」と称された区域は、正殿、北殿、南殿、奉神門の存在する政治的建造物空間が集中する区域とは離れた内郭の南西地域にあり、文献や伝承に拠ると首里城の聖域的空間として国王即位の儀式をはじめ琉球王国の重要な儀式や祭祀がおこなわれた空間として位置付けられています。また、京の内には、首里城築城以前に古いグスクがあった場所としても考えられているようです。

このような中で、「京の内」跡の復元整備事業に必要となる位置確認、規模、遺構の変遷などを解明する目的で平成６年度から平成９年度まで継続的に発掘調査が沖縄県教育委員会によって実施されました。この調査で平成６年度に1459年の火災で消失した倉庫跡が発見され、当時の琉球王国の海外交易によって将来された中国をはじめとする東南アジア（タイ、ベトナム）、本土を含めた各地域の陶磁器1,162個体と多くの金属製品やガラス製品が確認されました。

これらの陶磁器や金属・ガラス製品は、平成12年６月27日付けで国の重要文化財「沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器518点　附一、金属製品一括　附一、ガラス玉一括」として戦前・戦後をとおして、沖縄県ではじめて考古資料の部で指定されました。

国の重要文化財として指定された京の内跡の倉庫跡から出土した陶磁器については、平成10年３月に沖縄県教育委員会によって報告書が刊行されています。

本書では、文化庁美術学芸課の担当調査官から指導や助言を受けて早急に国指定の重要文化財京の内跡出土品で未報告であった金属製品とガラス玉の報告、および指定された陶磁器の中から新たに追加発見された接合可能な破片資料などを中心に報告することになりました。

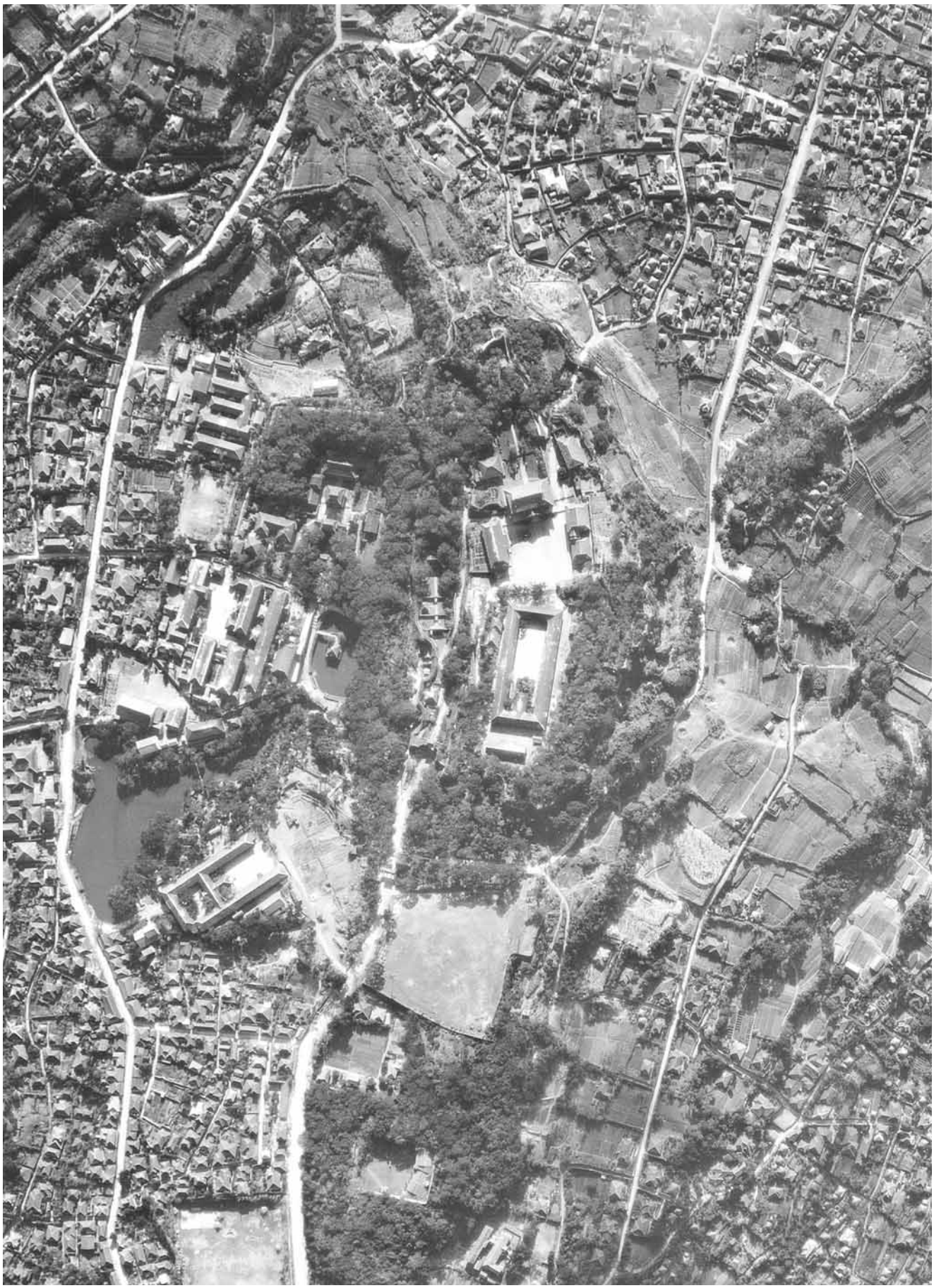
本書が首里城跡の城郭研究や考古学、民俗学、歴史の各研究分野に寄与することができれば幸いに存じます。

末尾ながら発掘調査や資料整理の際に、文部科学省美術学芸課の担当調査官をはじめに、内閣府 沖縄総合事務局 沖縄記念公園事務所の各担当官のご指導やご協力をいただきました。また、調査にご協力をいただきました関係各位に深く敬意を表すとともに心より厚く御礼申し上げます。

平成21年３月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長　名嘉　政修

巻首図版 1　首里城跡（航空写真）



巻首図版２　1945年４月２日　米軍撮影（CV20－103－63）の首里城周辺
（財団法人沖縄県文化振興会　公文書管理部　史料編集室　所蔵）

巻首図版３　首里城航空写真（1944年）の米軍撮影

（①首里城跡、②真玉橋、③豊見城グスク、④御物グスク、⑤屋良座森グスク、⑥三重グスク、⑦硫黄グスク）

巻首図版４　上段：調査区全景（東側より望む）　**下段：調査区の東半分を望む**

巻首図版５　上段：調査区の西半分を望む　下段：調査区西側遺構の状況

巻首図版６　上段：南側より中央付近にあるSK01（倉庫跡）を望む
下段：西側よりSK01（倉庫跡）を望む

巻首図版７　上半分　：SK01（倉庫跡）検出直後の状況（1.西側より、2.東側より、3.北側より、4.西側より）
下半左上：SK01（倉庫跡）の遺物堆積状況（5.西側より）
下半分　：SK01（倉庫跡）の完掘後（6.南側より、7.東側より、8.西側より）

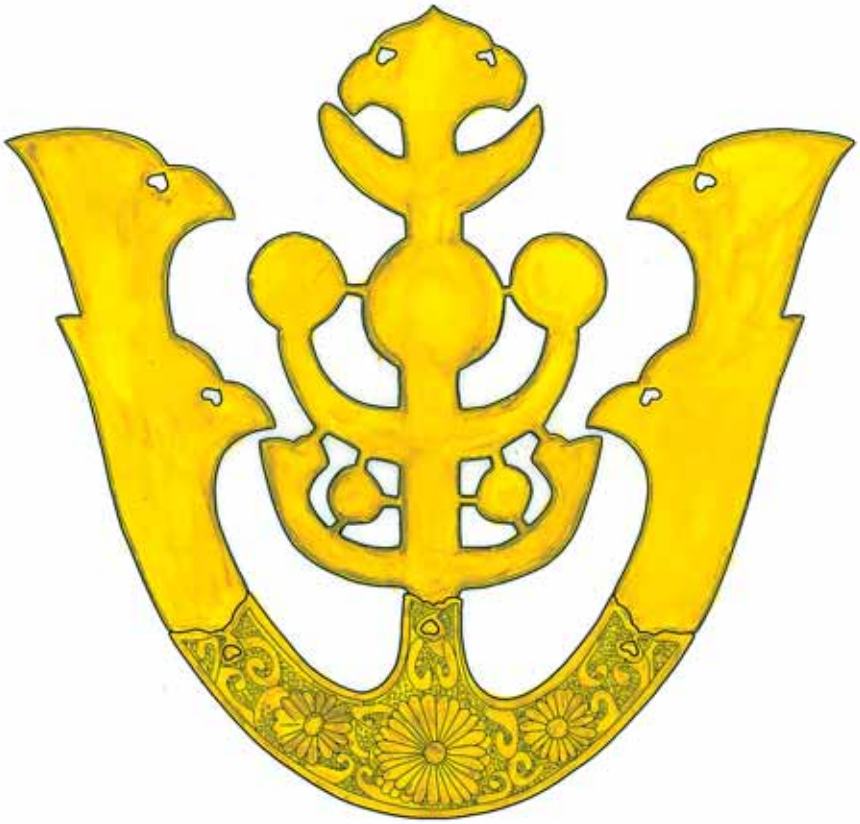
巻首図版８　上半分　：石積みSA33・34の完掘後（1.南側より、2.東側より、3.西側より）
上半右下：SK01（倉庫跡）の遺物検出状況（4.中央が青銅製香炉の把手）
下半分　：SK01（倉庫跡）出土の中国産陶磁器（国指定重要文化財の一部）

巻首図版９　国指定重要文化財　金属製品
上段：鏡（背面）、中段左：錠、中段右：香炉把手、下段：香炉胴部

巻首図版10　国指定重要文化財　金属製品
上段:長柄付片口銚子の容器、中段上:立物中央飾り、中段下:三鍬形台（祓立台）
下段:八双金物

巻首図版11　国指定重要文化財　金属製品およびガラス玉
上段左:鎖帷子、上段右および中段左:刀剣の鍔、中段右:切羽と銭貨、下段:ガラス玉

巻首図版12　国指定重要文化財　金属製品
兜鉢の眉庇に固定されていた立物（1.立物中央飾り、2･3.鍬形、4.三鍬形台）



巻首図版13　SK01（倉庫跡）より出土した立物の破片から全体像を推定復元

例　言

1　本事業は国営首里城公園整備事業に伴うもので、内閣府 沖縄総合事務局 国営沖縄記念事務所からの委託（受託）を受けて沖縄県教育委員会が実施したものである。なお、発掘調査事業の総括及び業務調整等は所管課の沖縄県教育庁文化課が行い、発掘調査及び資料整理等については沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。

2　本報告書は、平成６年度に実施した国営首里城公園（約４ha）の京の内北側地区（調査面積約2,000㎡）で検出された土壙SK01（石積みSA19・20、SA28）を完掘後に倉庫跡（以下、「倉庫跡」）として改めた。倉庫跡より出土した陶磁器518点、金属製品とガラス製品については、平成12年６月27日付けで国の重要文化財（考古資料の部）で「沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器 518点　附一、金属製品一括　附一、ガラス玉一括」で指定された。陶磁器については、平成10年３月に刊行した首里城京の内発掘調査報告書（Ⅰ）で報告したが、その後、下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡及び京の内石積みSA33・34より出土した陶磁器と重要文化財に指定された陶磁器との接合破片が確認された。

これらの資料の取扱いについては、文化庁美術学芸課担当官の指導を受けて、重要文化財に指定された陶磁器と新たに接合ができる破片資料が区別できるようなかたちで報告する事となった。

また、倉庫跡より出土した金属製品・ガラス玉一括資料については、重要文化財の数量把握を主要目的として位置付けた。その他、火災によって埋め戻された整地層より出土した資料と重要文化財との接合資料、そして京の内北側地区内の石積みSA33・34（倉庫跡の陶磁器が一部廃棄された遺構）より出土資料等についても報告をおこなう。

3　本報告書で使用したカラーの航空写真は、国土地理院の93OKINAWA49-12を複写した。白黒の航空写真は、財団法人 沖縄県文化振興会 公文書管理部 史料編集室の1945年４月２日米軍撮影（CV20-103-63）首里城周辺を複写した。また、本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/25,000、1/50,000の地形図を使用した。

4　報告書抄録に掲載した座標系は、地形測量及び写真測量業務で委託した成果をインターネットで公開（http：//Vldb.gsi.jp/sokuchi/tky2jgd/）されているWeb版TKY2JGDを利用した。日本測地系から世界測地系に変換した。入力方法を例示すると、入力値は平面直角座標を選択し、日本測地系「15系」を選択後に「X座標：23598.267m、Y座標：21971.191m」を入力後に変換方法を「世界測地系→日本測地系」を選択した。計算結果は「北緯：26° 12′ 32.15599″ 、　東経：127° 43′ 18.24229″」が求められたものを記した。

5　出土遺物の同定および分析データの掲載については、下記の方々に御協力をいただいた。明記して謝意を表します。

金属製品全般……京都国立博物館 工芸室長　久保 智康
金属製品甲冑・武器……元国立歴史民俗博物館 情報資料研究系教授 宇田川 武久
中国産・本土産陶磁器……元九州陶磁文化館 館長 大橋 康二
瓦……沖縄国際大学総合文化学部社会文化学科 教授 上原 静
石器・石質……おきなわ石の会 会長 大城逸郎（理学博士）
漆器……漆器文化財科学研究所 所長 四柳嘉章

6　本報告書は、金城亀信を中心に、伊集ゆきの・瑞慶覧尚美・赤嶺雅子・又吉純子ほかの協力を得て、編集を行った。なお、発掘調査・資料整理などの調査体制については、第Ⅰ章の第３節に記してある。

7　出土遺物の観察については、LEAF アクロマートルーペ ALC－20X（20倍）を使用した。

8　本書で使用した武具の凡例は『図録 日本の甲冑・武具事典』、『図録 日本の合戦武具事典』柏書房株式会社発行のものを許可を得て複写掲載した。

9　本報告書に掲載された現場の写真撮影は全て、金城亀信がおこなった。出土遺物の撮影及び現像・焼付けは矢舟章浩・伊禮若奈がおこなった。また、軟Ｘ線撮影と現像は調査班主任の知念隆博がおこなった。

10　発掘調査で出土した遺物及び実測図、写真等の記録は、すべて沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管している。

目　次

序
巻首図版
例言

第Ⅰ章　序　章 …… 1
　第１節　首里城跡公園整備事業に至る経緯 …… 1
　第２節　調査に至る経緯 …… 4
　第３節　調査の体制 …… 6
　第４節　調査の経緯 …… 13

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 17
　第１節　地理的環境 …… 17
　第２節　歴史的環境 …… 19

第Ⅲ章　調査の概要 …… 23
　第１節　調査地域 …… 23
　第２節　調査区の設定 …… 35

第Ⅳ章　遺構 …… 37
　第１節　遺構の概要 …… 37
　　Ａ．遺構の種類と概略 …… 37
　　Ｂ．各時期別の遺構 …… 44
　　Ｃ．土壙SK01（SA19・SA20、SA28） …… 46
　　　１．層序 …… 46
　　　２．遺構 …… 54
　　Ｄ．石積みSA33・34 …… 54
　　　１．層序 …… 54
　　　２．遺構 …… 59

第Ⅴ章　出土遺物 …… 61
　第１節　出土遺物の概要 …… 61
　第２節　国指定重要文化財 …… 61
　　１．金属製品 …… 61
　　２．銭貨 …… 86
　　３．ガラス玉 …… 87
　　４．陶磁器類 …… 89
　第３節　土壙ＳＫ01（倉庫跡）出土の遺物 …… 107
　　１．土器 …… 107
　　２．瓦質土器 …… 107
　　３．坩堝 …… 107
　　４．瓦製品 …… 107
　　５．タイ産土器 …… 107
　　６．元青花 …… 107
　　７．黒釉陶器 …… 107
　　８．瑠璃釉 …… 107

9．三彩 ……107
10．中国産陶器 ……107
11．ベトナム産陶器 ……107
12．中世陶器 ……107
13．沖縄産無釉陶器 ……107
14．本土産磁器 ……107
15．円盤状製品 ……107
16．金属製品 ……114
17．銭貨 ……141
18．炉壁・羽口 ……146
19．ガラス玉 ……149
20．朱漆器の塗膜 ……169
21．石製品 ……172
22．木製品・骨製品 ……174
23．ガラス質の滓 ……174
第４節　土壙ＳＫ01（倉庫跡）覆土ほか出土の遺物 ……175
1．土器 ……175
2．瓦質土器 ……175
3．須恵器 ……175
4．中国産褐釉陶器 ……175
5．黒釉陶器 ……175
6．瑠璃釉 ……175
7．三彩 ……175
8．沖縄産無釉陶器 ……176
9．中世陶器 ……176
10．陶質土器 ……178
11．本土産磁器 ……178
12．円盤状製品 ……178
13．近・現代の銭貨 ……178
14．金属製品 ……180
15．銭貨 ……186
16．石器 ……188
17．ガラス製品（勾玉） ……188
18．骨製品 ……188
第５節　石積みＳＡ33・34出土の遺物 ……189
1．土器 ……189
2．坩堝 ……189
3．土製品 ……189
4．瓦質土器 ……190
5．青磁 ……192
6．白磁 ……195
7．青花 ……198
8．中国産褐釉陶器 ……199
9．三彩 ……200
10．タイ産褐釉陶器 ……201
11．中世陶器 ……203
12．陶質土器・沖縄産無釉陶器・沖縄産施釉陶器 ……204
13．タイ産土器 ……205
14．金属製品 ……206
15．壁材 ……211
16．石器・石製品 ……211
17．京の内（石積みSA33・34、土壙SK01）及び下之御庭跡ほか出土の接合された大型青磁 ……212
第６節　植物種子 ……215
第７節　微小貝類遺存体 ……221
第８節　貝類遺存体 ……223
第９節　動物遺存体 ……233

第Ⅵ章　調査の成果 ……243

附編
平成16年度・平成17年度「重要文化財」沖縄県首里城京の内跡出土品（附一、金属製品）保存処理 ……319
琉球王国・首里城関係年表 ……342

報告書抄録

挿図目次

図目次

第１図　沖縄（琉球王国）の位置と周辺諸国 …… 3
第２図　磁気異常測定位置 ……16
第３図　首里城跡とグスク時代の周辺遺跡 ……18
第４図　発掘調査地域（上段）と『首里古地図』（1700年）（下段） ……25
第５図　首里城熊本鎮台沖縄分遣隊配置図（1893年） ……27
第６図　首里城平面図（島袋良徳氏所蔵） ……27
第７図　首里城平面図（昭和６年頃） ……28
第８図　旧首里城跡図（旧琉球大学校舎配置図） ……28
第９図　首里城京の内の空間変遷 ……29
第10図　首里城京の内地区の平成６・７年度の主要遺構 …30
第11図　京の内地区で検出された御嶽及び区画石積みから推定した京の内空間の復元案 ……31
第12図　「京の内」跡遺構配置図およびグリッド設定 ……36
第13図　遺構全体図 ……39
第14図　京の内北地区第Ⅲ期（15世紀中頃）遺構の推定復元 ……47
第15図　層序（A-14・15グリット北壁とSA28の畦） ……51
第16図　B-15 土壙ＳＫ01（SA19・20、SA28）内の遺物検出状況 ……52
第17図　B-15 土壙ＳＫ01（SA19・20、SA28）の完掘後の石積み立面及び断面 ……53
第18図　C-13・14 石積みSA33・34の完掘後の状況 ……55
第19図　層序（C-13・14グリット内　SA33・34） ……60
第20図　札の各部の名称 ……63
第21図　兜及び立物の各部名称と頂辺の座及び総角付の鐶の各部名称 ……64
第22図　大鎧の各部名称 ……65
第23図　鎧の各部名称、畳具足、八重鎖 ……66
第24図　札の形と名称、刀剣及び付属品・薙刀の各部名称 ……67
第25図　国指定重要文化財（保存処理済み）金属製品（1鋲、2錠、3蝶番、4金銅製環状製品、5鏡） ……69
第26図　国指定重要文化財（保存処理済み）金属製品（6香炉口縁、7香炉胴部、8香炉把手、9・10鈴） ……71
第27図　国指定重要文化財（保存処理済み）金属製品（11・12長柄付片口銚子の容器） ……73
第28図　国指定重要文化財（保存処理済み）金属製品武具（13・14兜鉢の斎垣、15・16兜鉢の矧板） ……75
第29図　国指定重要文化財（保存処理済み）金属製品武具 立物（17～22鍬形、23立物中央飾り、24三鍬形台） ……77
第30図　国指定重要文化財（保存処理済み）金属製品武具（25・26八双金物の留め金具、27・28八双金物、29据文金物の菊座、30～39札） ……79
第31図　国指定重要文化財（保存処理済み）金属製品武具（鎖帷子） ……81
第32図　国指定重要文化財（保存処理済み）金属製品武具（鎖帷子） ……83
第33図　国指定重要文化財（保存処理済み）金属製品刀剣（53～57鍔、58～60切羽 ……85
第34図　銭貨の各部計測点（左：平面、断面 右：断面拡大図） ……86
第35図　国指定重要文化財 銭貨・ガラス玉（61～67銭貨、68・69ガラス玉の塊） ……88
第36図　新資料（倉庫跡出土品）の追加で復元・修正された重要文化財 白磁（1.瓶）、中世陶器（2.擂鉢） ……90
第37図　新資料（倉庫跡出土品）の追加で復元・修正された重要文化財　明青花（碗） ……91
第38図　新資料（倉庫跡出土品）の追加で復元・修正された重要文化財　明青花（5.碗、6.瓶）、ベトナム明青花（7.水注） ……92
第39図　新資料（下之御庭跡ほか出土品）の追加で復元・修正された重要文化財 青磁（1.酒会壷、2.大鉢） …97
第40図　新資料（下之御庭跡ほか出土品）の追加で復元・修正された重要文化財 青磁（3.瓶）、元青花（4.馬上杯） ……98
第41図　新資料（下之御庭跡ほか出土品）の追加で復元・修正された重要文化財 元青花　大合子 ……99
第42図　重要文化財と類似する下之御庭跡ほか出土の資料明青花　花瓶 ……103
第43図　新資料（下之御庭跡ほか出土品）の追加で復元・修正された重要文化財 白磁（7.杯）、褐釉磁器（8.碗or鉢）、ベトナム青花（9.水注） ……104
第44図　重要文化財と類似する下之御庭跡ほか出土の資料ベトナム青花 瓶 ……105
第45図　重要文化財と類似する下之御庭跡ほか出土の資料紅釉 水注 ……106
第46図　土壙SK01（倉庫跡）土器、瓦質土器、坩堝、瓦製品、タイ産土器 ……109
第47図　土壙SK01（倉庫跡）元青花、黒釉陶器、瑠璃釉、三彩、中国産陶器、ベトナム産陶器 ……111
第48図　土壙SK01（倉庫跡）中世陶器 ……112
第49図　土壙SK01（倉庫跡）沖縄産無釉陶器、本土産磁器、円盤状製品 ……113
第50図　国指定重要文化財（保存処理未）① 金属製品……120
第51図　国指定重要文化財（保存処理未）② 金属製品……122
第52図　国指定重要文化財（保存処理未）③ 金属製品……124
第53図　国指定重要文化財（保存処理未）④ 金属製品……126
第54図　国指定重要文化財（保存処理未）⑤ 金属製品……128
第55図　国指定重要文化財（保存処理未）⑥ 金属製品……130
第56図　国指定重要文化財（保存処理未）⑦ 金属製品……133
第57図　国指定重要文化財（保存処理未）⑧ 金属製品……135
第58図　国指定重要文化財（保存処理未）⑨ 金属製品……137
第59図　国指定重要文化財（保存処理未）⑩ 金属製品……140
第60図　国指定重要文化財（保存処理未）⑪ 銭貨……143
第61図　国指定重要文化財（保存処理未）⑫ 銭貨……145
第62図　国指定重要文化財（保存処理未）⑬ 銭貨……146
第63図　土壙SK01（倉庫跡）炉壁、羽口 ……148
第64図　ガラス玉の計測図 ……149
第65図A　国指定重要文化財（保存処理未）⑭ ガラス玉……158
第65図B　国指定重要文化財（保存処理未）⑮ ガラス玉……159
第66図　土壙SK01（倉庫跡） 石器・石製品 ……173
第67図　土壙SK01（倉庫跡）木製品 ……174
第68図　土壙SK01（倉庫跡）骨製品 ……174
第69図　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか出土品① 瓦質土器、須恵器、中国産褐釉陶器、黒釉陶器、瑠璃釉、三彩、沖縄産無釉陶器、中世陶器 ……177
第70図　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか出土品② 陶質土器、沖縄産無釉陶器、本土産磁器、円盤状製品、近・現代の銭貨 ……180
第71図　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか出土品③ 金属製品 ……183

第72図　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか出土品④
金属製品……185
第73図　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか出土品⑤ 銭貨…187
第74図　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか出土品⑥
ガラス製品（勾玉）……188
第75図　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか出土品⑦
骨製品……188
第76図　石積みSA33・34出土品① 土器・坩堝・土製品…189
第77図　石積みSA33・34出土品② 瓦質土器 ……191
第78図　石積みSA33・34出土品③ 青磁 ……194
第79図　石積みSA33・34出土品④ 青磁 ……195
第80図　石積みSA33・34出土品⑤ 白磁 ……197
第81図　石積みSA33・34出土品⑥ 青花 ……198
第82図　石積みSA33・34出土品⑦ 中国産褐釉陶器 …199
第83図　石積みSA33・34出土品⑧ 三彩 ……201
第84図　石積みSA33・34出土品⑨ タイ産褐釉陶器 …202
第85図　石積みSA33・34出土品⑩ 中世陶器 ……203
第86図　石積みSA33・34出土品⑪ 陶質土器、沖縄産無釉陶器、沖縄産施釉陶器 ……204
第87図　石積みSA33・34出土品⑫ タイ産土器 ……205
第88図　石積みSA33・34出土品⑬ 金属製品 ……208
第89図　石積みSA33・34出土品⑭ 金属製品 ……210
第90図　石積みSA33・34出土品⑮ 壁材 ……211
第91図　石積みSA33・34出土品⑯ 石器（砥石） ……211
第92図　石積みSA33・34出土品⑰
1a:京の内地区石積みSA33・34出土、1b:下之御庭地区出土、1c:同一個体の1a・1bを図上で復元、2:京の内地区SA33・34土壙SK01（倉庫跡）出土と下之御庭地区出土の同一個体を図上で復元 ……213
第93図　石積みSA33・34 出土品⑱
1a:京の内地区石積みSA33・34出土、1a´・1b:下之御庭地区出土、1c:同一個体の1a・1a´・1bを図上で復元……214
第94図　立物
1・2.首里城跡南殿跡出土の立物（祇立台に入る中央の立物）、3.首里城跡北殿跡出土の立物（祇立台に入る中央の立物）、4～14.首里城跡京の内跡SK01（倉庫跡）立物（4.三鍬形台、5・6.鍬形、7～14.祇立台に入る中央の立物） ……248
第95図　推定復元の立物 ……252

表目次

第１表　1994年度「京の内」跡検出遺構件数の新旧関係 …14
第２表　磁気異常測定値一覧 ……15
第３表　當銘氏論文の内容を基に作成したフローチャート ……20
第４表　切石積みの外面と内面の関係 ……43
第５表　第Ⅲ期（15世紀中頃）遺構観察一覧 ……54
第６表　第Ⅲ期（15世紀中頃）遺構観察一覧 ……59
第７表　国指定重要文化財（保存処理済み）金属製品観察一覧 ……68
第８表　国指定重要文化財（保存処理済み）銭貨観察一覧 ……86
第９表　国指定重要文化財（保存処理済み）ガラス玉観察一覧 ……87
第10表　ガラス玉の分類概念 ……87
第11表　国指定重要文化財の保存処理済み点数 ……87
第12表　国指定重要文化財（保存処理済み）陶磁器類観察一覧 ……89
第13表　国指定重要文化財（保存処理済み）陶磁器類観察一覧 ……93
第14表　土壙SK01（倉庫跡）土器出土状況 ……108
第15表　土壙SK01（倉庫跡）瓦質土器出土状況 ……108
第16表　土壙SK01（倉庫跡）土器類観察一覧 ……108
第17表　土壙SK01（倉庫跡）陶磁器類観察一覧 ……110
第18表　土壙SK01（倉庫跡）中世陶器観察一覧 ……111
第19表　土壙SK01（倉庫跡）沖縄産無釉陶器出土状況…113
第20表　土壙SK01（倉庫跡）円盤状製品出土状況 ……113
第21表　土壙SK01（倉庫跡）陶磁器類観察一覧 ……113
第22表　国指定重要文化財（保存処理未）金属製品出土状況 ……115
第23表　国指定重要文化財（保存処理未）金属製品観察一覧 ……119
第24表　国指定重要文化財（保存処理未）銭貨出土状況 …141
第25表　国指定重要文化財（保存処理未）銭貨観察一覧 …142
第26表　土壙SK01（倉庫跡）炉壁・羽口出土状況 ……147
第27表　土壙SK01（倉庫跡）焼土出土状況 ……147
第28表　土壙SK01（倉庫跡）炉壁・羽口観察一覧 ……147
第29表a　全体の色別点数 ……149
第29表b　全体の色別点数（円グラフ） ……149
第30表a　Ⅰ類～Ⅳ類までの直径と重量 ……150
第30表b　Ⅰ類～Ⅳ類までの直径と重量（棒グラフ） ……150
第31表a　Ⅰ類の直径と重量 ……151
第31表b　Ⅰ類の直径と重量（棒グラフ） ……151
第32表a　Ⅱ類の直径と重量 ……152
第32表b　Ⅱ類の直径と重量（棒グラフ） ……152
第33表a　Ⅲ類・Ⅳ類の直径と重量 ……153
第33表b　Ⅲ類・Ⅳ類の直径と重量（棒グラフ） ……153
第34表　国指定重要文化材（保存処理未）ガラス玉観察一覧 ……154
第35表　ガラス玉（写真のみ）計測一覧 ……160
第36表　朱漆器の塗膜観察一覧 ……171
第37表　土壙SK01（倉庫跡）石器・石製品出土状況 …172
第38表　土壙SK01（倉庫跡）石器・石製品観察一覧 …172
第39表　土壙SK01（倉庫跡）木製品・骨製品・ガラス質の滓観察一覧 ……174
第40表　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか瓦質土器出土状況 ……176
第41表　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか沖縄産無釉陶器出土状況 ……176
第42表　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか陶磁器類観察一覧 ……176
第43表　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか陶磁器類観察一覧 ……179
第44表　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか金属製品出土状況 ……181
第45表　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか金属製品観察一覧 ……182
第46表　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか 銭貨観察一覧…186
第47表　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか 銭貨出土状況…188
第48表　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか 石器出土状況…188
第49表　石積みSA33・34　瓦質土器出土状況……190
第50表　石積みSA33・34　青磁出土状況……192
第51表　石積みSA33・34　青磁観察一覧……193
第52表　石積みSA33・34　白磁出土状況……195
第53表　石積みSA33・34　白磁観察一覧……196
第54表　石積みSA33・34　青花出土状況……198
第55表　石積みSA33・34　青花観察一覧……198
第56表　石積みSA33・34　中国産褐釉陶器出土状況…200
第57表　石積みSA33・34　タイ産褐釉陶器出土状況…201

第58表　石積みSA33･34　中世陶器出土状況……203
第59表　石積みSA33･34　陶質土器出土状況……204
第60表　石積みSA33･34　沖縄産無釉陶器出土状況…205
第61表　石積みSA33･34　沖縄産施釉陶器出土状況…205
第62表　石積みSA33･34　タイ産土器出土状況……205
第63表　石積みSA33･34　金属製品出土状況……206
第64表　石積みSA33･34　金属製品観察一覧……207
第65表　石積みSA33･34　石器・石製品出土状況……211
第66表　植物種子出土状況……216
第67表　植物種子観察一覧……217
第68表　微小貝（海産）出土状況……222
第69表　微小貝（陸産）出土状況……222
第70表　貝類生息場所類型表……224
第71表　貝類出土状況（1）巻貝……225
第72表　貝類出土状況（2）二枚貝……229
第73表　魚類出土量……235
第74表　ブタ出土量……239
第75表　カニ出土一覧……241
第76表　ウミガメ出土一覧……241
第77表　ヘビ出土一覧……241
第78表　トリ出土一覧……241
第79表　ニワトリ出土一覧……241
第80表　ネズミ出土一覧……241
第81表　ジュゴン出土一覧……241
第82表　ウマ出土一覧……241
第83表　ブタ歯出土一覧……241
第84表　ウシ出土一覧……241
第85表　ウシ歯出土一覧……241
第86表　祇立台立物飾り「瑞雲日月星文」文様の宗教及び思想的背景とその影響

図版目次

巻首図版1　首里城跡（航空写真）
巻首図版2　1945年４月２日 米軍撮影（CV20-103-63）の首里城周辺
巻首図版3　首里城航空写真（1944年）の米軍撮影
巻首図版4　上段：調査区全景（東側より望む）
下段：調査区の東半分を望む
巻首図版5　上段：調査区の西半分を望む
下段：調査区西側遺構の状況
巻首図版6　上段：南側より中央付近にあるSK01(倉庫跡)を望む
下段：西側よりSK01（倉庫跡）を望む
巻首図版7　上半分：SK01（倉庫跡）検出直後の状況
下半分：SK01（倉庫跡）の遺物堆積状況
下半分：SK01（倉庫跡）の完掘後
巻首図版8　上半分：石積みSA33･34の完掘後
上半分：SK01（倉庫跡）の遺物検出状況
下半分：SK01（倉庫跡）出土の中国産陶磁器
巻首図版9　国指定重要文化財　金属製品　上段：鏡（背面）
中段左：錠、中段右：香炉把手、下段：香炉胴部
巻首図版10　国指定重要文化財　金属製品
上段：長柄付片口銚子の容器、中段上：立物
中央飾り、中段下：三鍬形台（祇立台）
下段：八双金物
巻首図版11　国指定重要文化財　金属製品およびガラス玉
上段左：鎖帷子　上段右および中段左：刀剣
の鍔　中段右：切羽と銭貨　下段：ガラス玉
巻首図版12　国指定重要文化財　金属製品
兜鉢の眉庇に固定されていた立物（1立物の中央飾り、2・3鍬形、4三鍬形台）
巻首図版13　SK01（倉庫跡）より出土した立物の破片から全体像を推定復元
図版1　土壙SK01（倉庫跡）ガラス玉（写真のみ）……161
図版2　土壙SK01（倉庫跡）ガラス玉（写真のみ）……163
図版3　土壙SK01（倉庫跡）ガラス玉（写真のみ）……165
図版4　土壙SK01（倉庫跡）ガラス玉（写真のみ）……167
図版5　土壙SK01（倉庫跡）火熱を受けて湯玉状に再凝固した玉類の滓……168
図版6A　漆器塗膜顕微鏡写真……170
図版6B　土壙SK01（倉庫跡）朱漆器の塗膜……171
図版7A　微小貝　海産（番号は表と一致）……222
図版7B　微小貝　陸産（番号は表と一致）……222
図版8a　ガラス小玉の端し合わせ技法……255
図版8b　ガラス小玉の端し合わせ技法の拡大……255
図版9a　瓦質土器製の蓋の劈開面で混入物として確認された細片化した布切れ……255
図版9b　図版9aの布切れの拡大……255
図版10　国指定重要文化財（保存処理済み）軟X線写真
金属製品（1.鎹、2.錠、3.蝶番、4.金銅製環状製品、5.鏡）……258
図版11　国指定重要文化財（保存処理済み）金属製品
（1.鎹、2.錠、3.蝶番、4.金銅製環状製品、5.鏡）…259
図版12　国指定重要文化財（保存処理済み）軟X線写真
金属製品（6.香炉口縁、7.香炉胴部、8.香炉把手、9･10.鈴、11.長柄付片口銚子の容器）……260
図版13　国指定重要文化財（保存処理済み）金属製品
（6.香炉口縁、7.香炉胴部、8.香炉把手、9･10鈴、11.長柄付片口銚子の容器）……261
図版14　国指定重要文化財（保存処理済み）軟X線写真
金属製品（12.長柄付片口銚子の容器、13･14.兜鉢の斎垣、15･16.兜鉢の矧板）……262
図版15　国指定重要文化財（保存処理済み）金属製品
（12.長柄付片口銚子の容器、13･14.兜鉢の斎垣、15･16.兜鉢の矧板）……263
図版16　国指定重要文化財（保存処理済み）軟X線写真
金属製品　武具 立物（17～22.鍬形、23.立物中央飾り、24.三鍬形台）……264
図版17　国指定重要文化財（保存処理済み）金属製品
武具 立物（17～22.鍬形、23.立物中央飾り、24.三鍬形台）……265
図版18　国指定重要文化財（保存処理済み）軟X線写真
金属製品　武具（25･26八双金物の留め金具、27･28.八双金物、29.据文金物の菊座、30～39.札）……266
図版19　国指定 重要文化財（保存処理済み）金属製品
武具（25･26八双金物の留め金具、27･28.八双金物、29.据文金物の菊座、30～39.札）……267
図版20　国指定重要文化財（保存処理済み）軟X線写真
金属製品　武具（鎖帷子）……268
図版21　国指定重要文化財（保存処理済み）金属製品
武具（鎖帷子）……269
図版22　国指定重要文化財（保存処理済み）軟X線写真
金属製品　武具（鎖帷子）……270
図版23　国指定重要文化財（保存処理済み）金属製品
武具（鎖帷子）……271
図版24　国指定重要文化財（保存処理済み）軟X線写真
金属製品　刀剣（53～57.鍔、58～60.切羽）…272
図版25　国指定重要文化財（保存処理済み）金属製品
刀剣（53～57.鍔、58～60.切羽）……273
図版26　国指定重要文化財（保存処理済み）軟X線写真
銭貨……274
図版27　国指定重要文化財（保存処理済み）銭貨……275
図版28　国指定重要文化財（保存処理済み）
ガラス玉（ガラス玉の塊）……275

図版29　土壙SK01（倉庫跡）土器、瓦質土器、坩堝、瓦製品、タイ産土器……276
図版30　土壙SK01（倉庫跡）元青花、黒釉陶器、瑠璃釉、三彩、中国産陶器、ベトナム産陶器……276
図版31　土壙SK01（倉庫跡）中世陶器……277
図版32　土壙SK01（倉庫跡）沖縄産無釉陶器、本土産磁器、円盤状製品……277
図版33　国指定重要文化財（保存処理未）① 金属製品…278
図版34　国指定重要文化財（保存処理未）② 金属製品…279
図版35　国指定重要文化財（保存処理未）③ 金属製品…280
図版36　国指定重要文化財（保存処理未）④ 金属製品…281
図版37　国指定重要文化財（保存処理未）⑤ 金属製品…282
図版38　国指定重要文化財（保存処理未）⑥ 金属製品…283
図版39　国指定重要文化財（保存処理未）⑦ 金属製品…284
図版40　国指定重要文化財（保存処理未）⑧ 金属製品…285
図版41　国指定重要文化財（保存処理未）⑨ 金属製品…286
図版42　国指定重要文化財（保存処理未）⑩ 金属製品…287
図版43　国指定重要文化財（保存処理未）⑪ 金属製品…287
図版44　国指定重要文化財（保存処理未）⑪・⑫ 銭貨…288
図版45　国指定重要文化財（保存処理未）⑫・⑬ 銭貨…289
図版46　土壙SK01（倉庫跡）炉壁・羽口……290
図版47　国指定重要文化財（保存処理未）⑭ ガラス玉…291
図版48　国指定重要文化財（保存処理未）⑮ ガラス玉…292
図版49　土壙SK01（倉庫跡）石器・石製品……293
図版50　土壙SK01（倉庫跡）木製品……294
図版51　土壙SK01（倉庫跡）骨製品……294
図版52　土壙SK01（倉庫跡）ガラス質の滓……294
図版53　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか出土品① 瓦質土器、須恵器、中国産褐釉陶器、黒釉陶器、瑠璃釉、三彩、沖縄産無釉陶器、中世陶器……295
図版54　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか出土品② 陶質土器、沖縄産無釉陶器、本土産磁器、円盤状製品、近・現代の銭貨……295
図版55　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか出土品③ 金属製品……296
図版56　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか出土品④ 金属製品……297
図版57A　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか出土品⑤ 銭貨…298
図版57B　図版57A掲載銭貨10の軟X線透過写真……298
図版58　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか出土品⑥ ガラス製品（勾玉）……298
図版59　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか出土品⑦ 骨製品……298
図版60　石積みSA33・34 出土品① 土器、坩堝、土製品……299
図版61　石積みSA33・34 出土品② 瓦質土器……299
図版62　石積みSA33・34 出土品③・④ 青磁……300
図版63　石積みSA33・34 出土品⑤ 白磁……301
図版64　石積みSA33・34 出土品⑥ 青花……301
図版65　石積みSA33・34 出土品⑦ 中国産褐釉陶器…302
図版66　石積みSA33・34 出土品⑧ 三彩……302
図版67A　石積みSA33・34 出土品⑨ タイ産褐釉陶器…302
図版67B　石積みSA33・34 出土品⑩ 中世陶器……303
図版68　石積みSA33・34 出土品⑪ 陶質土器、沖縄産無釉陶器、沖縄産施釉陶器……303
図版69　石積みSA33・34 出土品⑫ タイ産土器……303
図版70　石積みSA33・34 出土品⑬ 金属製品……304
図版71　石積みSA33・34 出土品⑭ 金属製品……305
図版72　石積みSA33・34 出土品⑮ 壁材……305
図版73　石積みSA33・34 出土品⑯ 石器（砥石）……305
図版74　石積みSA33・34 出土品⑰ 1a：京の内地区石積みSA33・34出土、1b：下之御庭地区出土、1c：同一個体の1a・1bを図上で復元、2：京の内地区SA33・34、土壙SK01（倉庫跡）出土と下之御庭地区出土の同一個体を図上で復元……306
図版75　石積みSA33・34 出土品⑱ 1a：京の内地区石積みSA33・34出土、1a´・1b：下之御庭地区出土、1c：同一個体の1a・1a´・1bを図上で復元……306
図版76　植物種子（1）……307
図版77　植物種子（2）……308
図版78　植物種子（3）……309
図版79　植物種子（4）……310
図版80　貝類（1）　巻貝（番号は表と一致）……311
図版81　貝類（2）　巻貝（番号は表と一致）……312
図版82　貝類（3）　二枚貝（番号は表と一致）……313
図版83　骨（1）　サカナ……314
図版84　骨（2）　左上：ウミガメ・ウマ　右上：ニワトリ　右下：ヘビ・ネズミ　下：ウシ……315
図版85　骨（3）　ブタ……316

附編1

図版1　国指定重要文化財　平成16年度　金属製品保存修理（修理前）1 鏡、2 香炉口縁、3香炉胴部、4香炉把手、5～7長柄付片口銚子の容器……324
図版2　国指定重要文化財　平成16年度　金属製品保存修理（修理後）1 鏡、2 香炉口縁、3香炉胴部、4香炉把手、5～7長柄付片口銚子の容器……325
図版3　国指定重要文化財　平成16年度　金属製品保存修理（修理前）8鍬形、9三鍬形台、10八双金物、11～20札、21・22鎖帷子……326
図版4　国指定重要文化財　平成16年度　金属製品保存修理（修理後）8鍬形、9三鍬形台、10八双金物、11～20札、21・22鎖帷子……327
図版5　国指定重要文化財　平成16年度　金属製品保存修理（修理前）23～26鎖帷子、27～29鍔、30・31切羽、32～38銭貨……328
図版6　国指定重要文化財　平成16年度　金属製品保存修理（修理後）23～26鎖帷子、27～29鍔、30・31切羽、32～38銭貨……329
図版7　国指定重要文化財　平成17年度　金属製品保存修理　1.鐙、2.錠、3.蝶番、4.金銅製環状製品（A：修理前、B：修理後）……336
図版8　国指定重要文化財　平成17年度　金属製品保存修理　5・6.鈴、7・8.兜鉢の斎垣、9.兜鉢の矧板（A：修理前、B：修理後）……337
図版9　国指定重要文化財　平成17年度　金属製品保存修理　10.兜鉢の矧板、11～13.鍬形（A：修理前、B：修理後）……338
図版10　国指定重要文化財　平成17年度　金属製品保存修理　14・15.鍬形、16.立物中央飾り、17・18.八双金物の留め金具（A：修理前、B：修理後）…339
図版11　国指定重要文化財　平成17年度　金属製品保存修理　19.八双金物、20.据文金物の菊座、21～23.鎖帷子（A：修理前、B：修理後）……340
図版12　国指定重要文化財　平成17年度　金属製品保存修理　24～27.鎖帷子、28・29.鍔、30.切羽（A：修理前、B：修理後）……341

第Ⅰ章　序　　章

第１節　首里城跡公園整備事業に至る経緯

沖縄県の県庁所在地のある那覇市（第１図・第３図～第７図）には、室町時代から明治時代までの約500年に亘って第一尚氏（1406年～1469年）、第二尚氏（1470年～1879年）の尚氏王統の居城である首里城があった。琉球王国の政治・経済・文化の中心として役割を果たしてきた首里城は歴代の琉球国王によって、当時の琉球王国の土木・建築技術などの粋を集めて築城された沖縄の代表的なグスク（城郭）であった。グスク内には正殿、北殿、南殿などの多くの建築物が存在し、そのいくつかは旧国宝（正殿、守礼門、歓会門、瑞泉門、白銀門、園比屋武御嶽石門の６件）として大正14年（1925年）に指定されていた。

琉球王国の遺産でもあった首里城も昭和20年（1945年）のアジア・太平洋戦争末期に起きた沖縄戦で、米軍の艦船及び航空機などからの集中砲火を受け、正殿や南殿・北殿などの多くの建造物が徹底的に破壊され、灰燼に帰してしまった。更に戦後は、首里城跡に琉球大学が昭和25年（1950年）に創られ、造成工事によって改変がなされ、キャンパスとして使用された（第８図）。

首里城及びその周辺文化財の整備に至るまでの時系列的な経過として、昭和45年（1970年）に当時の琉球政府文化財保護委員会によって首里城跡及び周辺文化財の復元整備計画を策定した。その後に、この構想を踏まえて日本政府が第一次沖縄復帰対策要綱を策定し、閣議決定された。沖縄が本土に復帰した昭和47年度（1972年）から第一次沖縄振興開発計画（1972年～1981年までの10カ年）が着手され、この中で戦災文化財の復元を積極的に推進することが明記されている。この計画を踏まえて昭和57年（1982年）『第二次沖縄振興開発計画』（1982年～1991年）では、より具体的な公園計画の位置付けがなされ、この計画で首里城一帯の整備が提言された。現在の公園整備計画の骨子となったのが、同年度に那覇市が策定した首里金城地区歴史的地区環境整備基本計画であった。同計画を基本にして、二年後の昭和59年度（1984年）に沖縄県が都市計画公園を決定する目的で調査を実施し、首里城と一体となる周辺文化財も含めた歴史的な風致を構成している区域約18haを公園の範囲とした。本計画が今日の首里城の復元整備の指針となった「首里城公園基本計画調査報告書」（註１）であった。

その後、昭和61年度（1986年）に首里城内郭の約４haを沖縄県の本土復帰を記念して国営公園区域として「都市公園整備事業（国営沖縄記念公園首里城地区）」として復元整備をおこなうことが閣議決定された（第４図上段）。翌年の昭和62年度（1987年）には、沖縄県が国営公園区域を除いた城郭の外側の区域約14haを「県営首里城公園」として位置付け、建設大臣より都市計画事業の認可を受けて「首里城公園基本設計」（註２）を策定し、計画に基づいて整備が実施されている。

以上のような計画を踏まえながら首里城跡の復元に伴う遺構確認の発掘調査後に復元整備が実施されてきた。

最初に復元整備が成されたのは、昭和49年（1974年）に竣工した歓会門であった。次いで昭和59年（1984年）竣工の久慶門であった。首里城正殿の復元工事は、平成元年（1989年）から始まり、同時に北殿、南殿・番所、奉神門、廣福門などの復元工事も実施された。平成４年（1992年）には首里城正殿を含めた建造物群が復元整備され、「首里城公園」として一部が公開されている。その後、系図座・用物座（平成12年３月復元竣工）、京の内（①平成13年度：工事着手、②平成15年度：復元竣工）、下之御庭首里森御嶽（平成９年12月復元竣工）、二階殿（①平成10年度：敷地造成及び外構整備着手、②平成10年度：建築工事着手、③平成11年度：復元竣工）、書院・鎖之間（①平成15年度：外構整備着手、②平成16年度：建築工事着手、③平成19年度１月：復元竣工）が順次整備され、一部地域（二階殿、書院・鎖之間）を除いて一般に公開されている。その間の平成12年（2000年）12月２日には『琉球王国のグスク及び関連遺産群』（註３）として首里城跡・園比屋武御嶽石門を含む９の資産がユネスコ「世界遺産」に登録されている。平成20年には書院・鎖之間の庭園が復元（註４）され一般に公開されている。

次に首里城跡の復元整備に伴う遺構確認調査などについて時系列的にその概略を記すと、沖縄が本土に復帰した昭和47年度（1972年）から沖縄開発庁の補助を受けて沖縄県教育委員会が「首里城城郭等復元整備事業」と

して、首里城外郭の歓会門復元整備事業から着手した。順次年度計画に沿って外郭を半時計回りに復元整備が実施され、久慶門、木曳門、西のアザナ（物見）の石積み、京の内南側物見石積み、継世門、東のアザナ（物見）の石積み、そして本事業の最終年度にあたる平成13年度（2001年）に右掖門北側城郭の石積みの復元工事をもって、首里城外郭の石積みや櫓門（歓会門、久慶門、継世門）及び石門（木曳門）の全てが復元整備（註５）された。なお、復元整備された首里城外郭の全長は、1,080m（その内、10mは管理用道路）であった（第４図）。

ところで首里城正殿を初めとする内郭の施設等の整備に伴う遺構確認調査は、昭和59年度（1984年）から歓会門・久慶門内側地区（調査面積：約4,000㎡、調査期間：８月20日～12月14日迄）の遺構確認調査（註６）から開始された。昭和60・61年度（1985・86年）に首里城正殿跡の遺構確認調査（調査面積約1,500㎡、調査期間：昭和60年８月～10月迄、昭和61年７月～３月迄）が実施され、正殿跡から５時期（Ⅰ期基壇～Ⅴ期基壇：14世紀代～1945年）の基壇跡（註７・８）が検出されている。この成果や沖縄県立図書館に収蔵されている阪谷良之進製図の「旧首里城図（昭和６年頃）」などを基にして首里城正殿の設計がなされ、昭和63年（1988年）に首里城正殿の設計が完了し、平成元年（1989年）から首里城正殿の建築工事が始まり平成４年（1992年）に復元竣工している。

以下、昭和63年から平成20年度までに実施された遺構確認調査を便宜的に番号を冠し、時系列的に調査年度と調査地区などを記す。

① 昭和63年度（1988年）南殿・北殿跡の遺構調査（調査期間：６月24日～平成元年３月25日迄）。② 平成元年度（1989年）御庭跡・奉神門跡の遺構調査（調査期間：６月５日～平成２年３月）。③ 平成元年度（1989年）下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡（調査面積5,240㎡、調査期間：元年10月10日～平成３年３月26日迄）。④ 平成２年度（1990年）右掖門及び周辺地区発掘調査（調査面積：850㎡、調査期間：10月18日～平成３年３月26日）。⑤ 平成５年度（1993年）東のアザナ地区発掘調査（調査面積約700㎡、調査期間：10月５日～平成６年９月26日）。⑥ 平成６年度（1994年）京の内（北側）地区（調査面積約2,000㎡、調査期間：11月21日～平成７年３月28日迄）。⑦ 平成７年度（1995年）京の内（南側）地区（調査面積1,000㎡、調査期間：11月21日～平成８年３月28日迄）。⑧ 平成８年度（1996年）京の内（西側）地区（調査面積1,000㎡、調査期間：７月１日～平成９年３月28日迄）・下之御庭首里森御嶽地区（調査面積64㎡、調査期間：平成９年２月20日～３月21日迄）。⑨ 平成９年度（1997年）二階殿地区（調査面積1,300㎡、調査期間：８月４日～平成10年３月20日迄）。⑩ 平成13・14年度（2001年・02年）書院・鎖之間地区発掘調査（調査面積850㎡、調査期間：９月17日～平成14年３月15日）。⑪ 平成15年度（2003年）黄金御殿地区発掘調査（調査面積450㎡、調査期間：６月２日～12月27日迄）。⑫ 平成16年度（2004年）淑順門地区発掘調査（調査面積：570㎡、７月20日～平成17年３月１日迄）。⑬ 平成17年度（2005年）御内原西地区（調査面積565㎡、調査期間：８月１日～平成18年１月31日迄）・黄金御殿地区発掘調査（調査面積50㎡、調査期間：10月24日～12月１日迄）。⑭ 平成18年度（2006年）銭蔵跡発掘調査（調査面積300㎡、９月１日～平成19年３月14日迄）。⑮ 平成19年度（2007年）銭蔵跡・御内原北地区発掘調査（調査面積300㎡、９月３日～平成20年２月29日迄）実施されている。

このような中で、首里城内でも最も重要な聖域であった「京の内」地域の復元整備の気運が高まり、「京の内」地域の実施計画に必要な当時の石積み遺構などを検出して、「京の内」の実施計画に反映させるべき情報の収集を目的として内閣府 沖縄総合事務局 国営沖縄記念公園事務所 首里出張所からの委託を受けて沖縄県教育委員会の文化課が遺構調査を平成６年度から平成８年度まで「京の内」地区遺構確認を目的とする発掘調査を実施した。

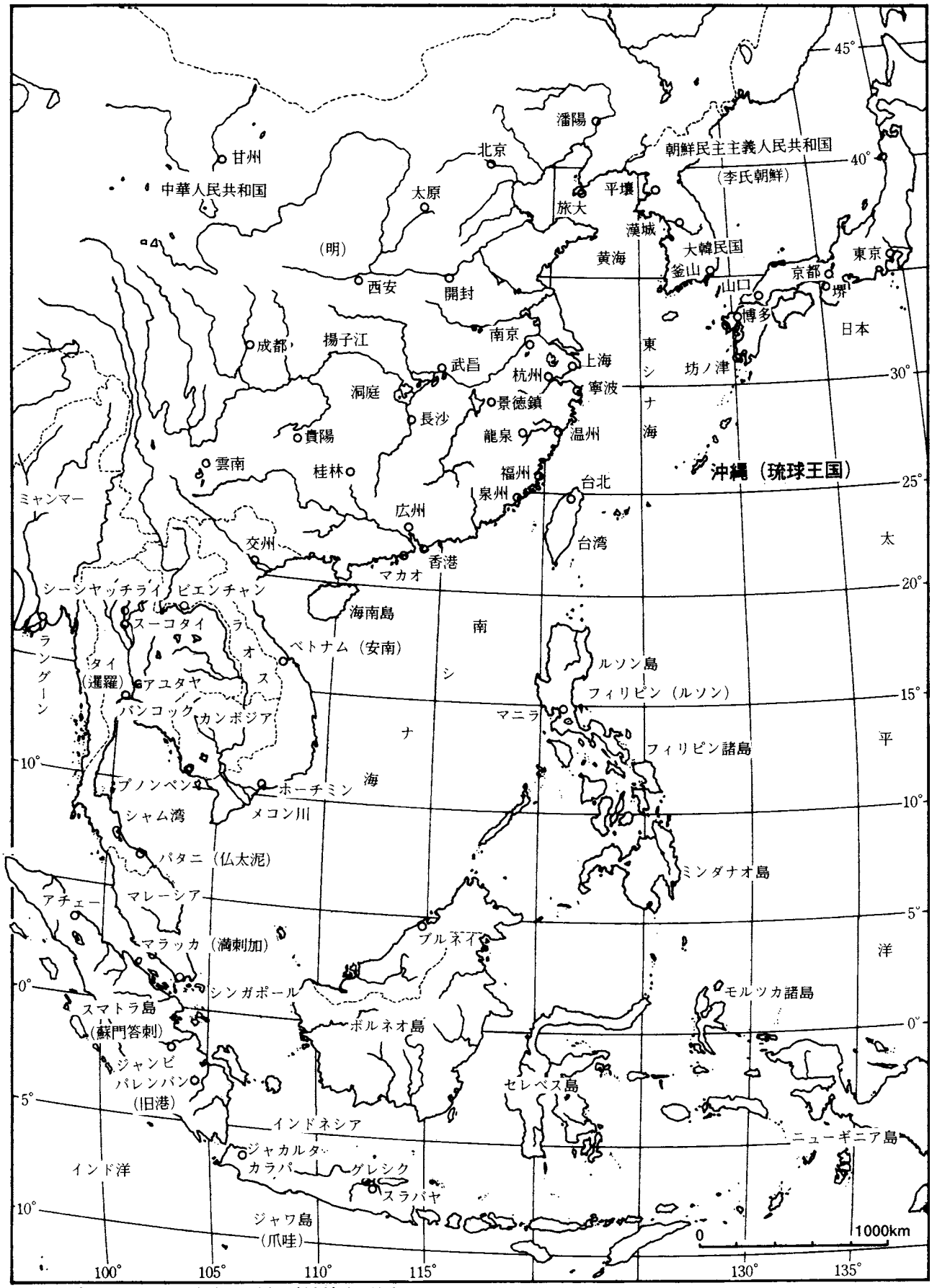
註文献・引用文献

註１．首里城公園基本計画調査委員会『首里城公園基本計画調査報告書』1984年９月。

註２．沖縄県土木建築部『首里城公園基本設計』1986年３月。

註３．文化庁・沖縄県教育委員会監修『世界遺産 琉球王国のグスク及び関連遺産群 - 玉陵・園比屋武御嶽石門・今帰仁城跡・座喜味城跡・勝連城跡・中城城跡・首里城跡・識名園・斎場御嶽 -』「琉球王国のグスク及び関連遺産群」世界遺産登録記念事業実行委員会（沖縄県教育委員会 教育庁文化課気付）2001年２月８日。

註４．沖縄タイムス「書院・鎖之間庭園を復元」・「首里城公園内あすから公開」（内容：17世紀の首里城内書院・鎖之間庭園が復元された。



14世紀末～16世紀の琉球王国主要対外交易国

日本、李氏朝鮮、明（中国）、呂宋（フィリピン）、安南（ベトナム）、暹羅（タイ）、満剌加（マラッカ）、蘇門答剌（スマトラ）、旧港（パレンバン）、爪哇（ジャワ）

第１図　沖縄（琉球王国）の位置と周辺諸国

首里城内にあった三つの庭園の中でも本格的に復元。絵図や古文書、古写真などを根拠資料として、岩場は琉球石灰岩を使用し、樹種はソテツやリュウキュウマツを植栽、芝生は与那国島から取り寄せ、当時の姿に地形を再現した。庭園は17世紀中頃に冊封使などの接待に使用。）沖縄タイムス社2008年（平成20年）７月31日（木）朝刊。

註５．平成14年度版『文化行政要覧』沖縄県教育庁文化課 2002年11月。

註６．沖縄県教育委員会『首里城跡－歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査－』1998年３月。

註７．沖縄県教育委員会 『旧首里城正殿跡位置確認調査報告書』1986年３月。

註８．當眞嗣一・上原　靜「首里城正殿跡の調査」『文化課紀要』第４号　沖縄県教育委員会 1987年３月。

参考文献（発行年度順に記載）

１．沖縄県『首里城公園整備計画調査』1986年６月。

２．内閣府 沖縄総合事務局 国営沖縄記念公園事務所・社団法人 日本公園緑地協会『首里城地区造園土木基本設計報告書』1988年３月。

３．沖縄県教育委員会『首里城跡－南殿・北殿跡の遺構調査報告書－』1995年３月。

４．沖縄県教育委員会『首里城跡－御庭跡・奉神門跡遺構調査報告書－』1998年３月。

５．沖縄県教育委員会『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）－』1998年３月。

６．沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡－下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書』2001年３月。

７．沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡－右掖門及び周辺地区発掘調査報告書－』2003年３月。

８．沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡－東のアザナ地区発掘調査報告書－』2004年３月。

９．財団法人 海洋博覧会記念公園管理財団『国営沖縄記念公園首里城地区整備計画』1995年３月。

10．沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡－二階殿地区発掘調査報告書－』2005年３月。

11．沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡－書院・鎖之間地区発掘調査報告書－』2005年３月。

12．沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡－淑順門地区発掘調査報告書－』2006年３月。

13．沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡－御内原地区発掘調査報告書－』2006年３月。

14．沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡－御内原西地区発掘調査報告書－』2007年３月。

15．沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡－黄金御殿地区発掘調査報告書－』2007年３月。

16．沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡－下之御庭首里森御嶽地区発掘調査報告書－』2008年３月。

第２節　調査に至る経緯

首里城跡の復元整備が動き出してきたのは、昭和42年（1967年）から始まった琉球大学の移転とこれに伴う跡地利用計画で三つの構想｛①県立芸術大学構想（県企画調整部）、②広域史跡公園構想（那覇市）、③首里城復元を核とした史跡整備構想（県教育庁・県文化財保護審議会)｝（註１）が検討されたが、最終的に首里城正殿などの文化遺産を復元し、首里城を含む地域を歴史的な都市公園として整備（註２）することで構想が決まり、「首里城公園基本計画報告書」（註３）で確定した。なお、琉球大学の移転開始と終了時期は、昭和56年（1981年）から始まり、翌年の昭和57年（1982年）までの二ヶ年間を要して、現在の西原町字千原へ移転した。

琉球大学の移転直後から沖縄県教育委員会は、沖縄開発庁の補助を受けて昭和60年（1985年）に国指定史跡首里城跡の現状変更申請の手続きを経て、戦後初めての城内の歓会門・久慶門内郭地域の発掘調査が実施された。

この発掘調査と平行して沖縄県教育委員会は、県単独の予算で昭和60年（1985年）10月２日から昭和61年（1986年）２月14日までの期間、旧首里城正殿跡の位置確認を目的とした発掘調査が実施された。

昭和61年度（1986年）に首里城内郭の約４haを沖縄県の本土復帰を記念して国営公園区域として「都市公園整備事業（国営沖縄記念公園首里城地区)」として復元整備をおこなうことが閣議決定され、首里城内郭の約４haの復元整備に伴う遺構確認調査が昭和63年（1988年）から内閣府 沖縄総合事務局 国営沖縄記念公園事務所からの委託を沖縄県教育委員会が受けて、復元整備に伴う遺構確認のための発掘調査が今日まで継続的に実施されてきている。

復元整備に伴う内郭の遺構確認調査は、昭和63年（1988年）の南殿跡・北殿跡地域の発掘調査から始まっている。翌年の平成元年（1989年）は、特に調査対象面積が広範囲となり、その対象地域が御庭跡・奉神門跡地域、及び下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門まで達した。平成２年度（1990年）は右掖門及び周辺地区の発掘調査が実施された。これらの発掘調査で確認された遺構などの調査成果を基にして

首里城正殿・南殿・北殿などを含めた建造物が復元整備され、平成４年（1992年）に首里城公園の第一期開園部分として首里城正殿を初めとする多くの建造物が一部が公開されて今日に至っている。

首里城内の復元整備や遺構確認のための発掘調査の進捗に伴い、未整備地域の首里城南側にある「京の内」地域の復元整備が課題となり、整備に必要な基礎資料となる石積み遺構などの情報の収集を兼ねて平成６年（1994年）より調査が開始された。「京の内」地域の一部は、明治11年（1936年）に伊東忠太、鎌倉芳太郎の両氏によって発掘調査が実施され、その報告（註４）では首里城の第一拡張時期に造成された古い段階の郭であると解釈がなされているのみであり、復元整備に必要な情報としては不足しているようである。その後、伊藤・鎌倉の両氏が発掘した首里城京の内跡から出土した明代の華南彩釉陶（三彩手軟陶器）の研究を行った亀井明徳氏は、華南彩釉陶が国内で最も多量、且つ器種も豊富に出土していることを確認（註５）している。伊東・鎌倉の両氏の情報や現存する「首里城古図」・「首里城図」などの古絵図の手掛かりを経て発掘調査の事前調査とした。

ところで「京の内」地域は正殿、南殿、北殿、奉神門の存在する政治的建造物が集中する区域とは離れていて、内郭の南西側にあったようであり、首里城の発祥とも関係のある聖域的な場所でもあった。

古絵図からの情報に基づくと「京の内」には、五つの御嶽が存在していたようである。南側の最も高い箇所には首里森御嶽、西南側に真玉森御嶽、北西には「京の内之三御嶽」と称された三つの御嶽があったようである。

その他に首里森御嶽の東隣りや奉神門と番所の南西には家屋型の建物が２・３棟存在していたようである。また、「京の内」の内郭には御嶽や建物空間を仕切る石積みが四基程度と、最も高い南側地域には、西側から入る階段と石造りのアーチ門が存在していたようである。

以上の配置を念頭に入れながら発掘調査を平成６年（1994年）11月21日から平成７年（1995年）３月28日までの期間実施した。

註文献

註１．琉球新報「難航する琉大跡地利用／県立芸大／史跡公園／首里城復元／三構想の意見対立」琉球新報社 1980年（昭和55年）９月16日 火曜日 朝刊。

註２．沖縄タイムス「首里城公園を国営公園に／復帰20年事業へ／正殿67年度までに復元／植木構想を発表」沖縄タイムス社 1984年（昭和59年）６月13日 水曜日 朝刊。

註３．首里城公園基本計画調査委員会『首里城公園基本計画調査報告書』1984年９月。

註４．伊東忠太・鎌倉芳太郎『南海古陶瓷』宝雲舎　1937年

註５．亀井明徳「明代華南彩陶をめぐる諸問題」三上次男博士喜寿記念論文集　陶磁編　三上次男博士喜寿記念論文集編集委員会　1985年

参考文献

１．糸数兼治・當眞嗣一・上原　靜『旧首里城正殿跡位置確認調査報告書』沖縄県教育委員会　1986年３月。

２．當眞嗣一・上原　靜「首里城正殿跡の調査」『紀要』第４号　沖縄県教育委員会 文化課　1987年３月。

３．沖縄県教育委員会『首里城跡－歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査－』1998年３月。

４．沖縄県教育委員会『首里城跡－南殿・北殿跡の遺構調査報告書－』1995年３月。

５．首里城研究グループ『首里城入門－その建築と歴史－』ひるぎ社 1989年。

６．『首里城公園ガイドブック』財団法人 海洋博覧会記念公園管理財団首里城公園管理センター 2000年３月。

第３節　調査の体制

京の内跡の発掘調査は、平成６年度（1994年）～平成８年度（1996年）までの三カ年実施され、資料整理については京の内発掘調査報告書（Ⅰ）の刊行年度である平成９年度（1997年）と今回の報告書作成年度となった平成19年度（2007年）・平成20年度（2008年）に限定して下記のような体制で実施した。

◎ 平成６年度（1994）組織　（遺構調査年度）

○ 事業主体　沖縄県教育委員会　教育長　嘉陽　正幸
○ 事業所管　沖縄県教育庁文化課　課　長　西平　守勝
同　上　副参事　上原　武次
○ 事業総括　同　上　課長補佐　知念　勇
同　上　課長補佐　新垣　末子
○ 事業事務　沖縄県教育庁文化課　管　理　係　係　長　比屋根　正治
同　上　〃　主　査　新垣　和子
同　上　〃　副主査　新崎　文子
同　上　〃　副主査　宮城　直子
同　上　〃　主　事　伊波　盛治
○ 事業実施　沖縄県教育庁文化課　埋蔵文化財係　係　長　大城　慧
同　上　〃　主任専門員　岸本　義彦
同　上　〃　主　任　島袋　洋
同　上　〃　専　門　員　長嶺　均・専　門　員　金城　透
同　上　〃　指導主事　西銘　章
同　上　埋蔵文化財係　史跡整備班　班　長　上原　靜（発掘総括者）
同　上　〃　〃　指導主事　運天　和夫
同　上　〃　〃　指導主事　我那覇　念
同　上　〃　〃　主　任　盛本　勲
同　上　〃　〃　主　任　金城　亀信（発掘担当者）
同　上　〃　〃　調査嘱託員　高宮とり・渡邊尚子
○ 専門調査指導・助言（遺構調査、資料整理　平成６年度～平成８年度）
文化庁記念物課　調査係　整備部門　主任文化財調査官　田中哲雄　平成６年
同　上　〃　史跡部門　文化財調査官　伊東正義　平成７年
同　上　〃　史跡部門　文化財調査官　増渕　徹　平成８年
奈良国立文化財研究所　元所長　坪井清足　（平成６年）
同　上　飛鳥藤原宮跡発掘調査部　元部長　牛川喜幸（庭園　平成６年）
中国福建省文化庁文物所　副所長　鄭　國　珍　（陶磁器・城郭　平成７・８年）
福建省博物館　副研究員　楊　琮　（陶磁器・城郭　平成６年）
ベトナム　国立ハノイ考古学研究所　主任研究員　チン・カオン・トゥホンー（Trinh Cao Tuong）
カナダ　トロント大学　教　授　リチャード・ピアソン（R.J.Pearson）
九州大学　文学部　教　授　西谷　正　（城郭　平成７年）
専修大学　文学部　教　授　亀井明徳　（陶磁器　平成６年）
愛媛大学　法文学部　助教授　村上恭通　（鉄製品　平成８年）
東京外国語大学　専任講師　小川英文　（フィリピン・東南アジア考古学　平成６年）
青山学院大学　文学部　教授　田村晃一　（考古学　平成６年）
熊本大学　法文学部　元教授　白木原和美（考古学　平成６年）

鹿児島大学　法文学部　教授　上村俊雄　（考古学　平成６年）
名古屋大学　文学部　　教授　渡邊　誠　（考古学　平成７年）
沖縄国際大学　文学部　教授　高宮廣衞　（考古学　平成６・８年）
ノルウェー科学アカデミー　博士　トゥール　ハイエルダール（Thor Heyerdahl）（平成８年）
鎌倉考古学研究所　　所長　手塚直樹　（陶磁器　平成８年）
漆器文化財科学研究所　所長　四柳嘉章　（漆器　平成６年）
沖縄県指定無形文化財保持者　前田孝允　（琉球漆器　平成６年）
沖縄県文化財保護審議会　委員長　嵩元政秀　（史跡・名勝・考古学　平成６年）
沖縄県文化財保護指導委員　玉津博克　（史跡・名勝　平成６・７年）
福岡市美術館　学芸員　尾崎直人　（タイ・ベトナム陶磁　平成７年）
福岡市教育委員会　埋蔵文化財係　主事　佐藤一郎　（陶磁器　平成８年）
宇佐市教育委員会　文化課　文化財係　技師　江藤和幸　（史跡・考古学　平成８年）
浦添市美術館　学芸員　金城聡子　（漆器　平成６年～８年）
那覇市教育委員会　文化課　課長　金武正紀　（陶磁器・考古学・史跡　平成６年～８年）
同　上　〃　主査　島　弘　（考古学　平成６～８年）
同　上　〃　主事　玉城安明・主事　仲宗根　啓（考古学　平成６・７年）
那覇市教育委員会　壺屋焼物博物館準備室　室長　渡名喜　明　（美術・工芸　平成７・８年）
同　上　非常勤学芸員　我部太郎　（美術史　平成７・８年）
北谷町教育委員会　文化課　主　事　山城安生　（考古学　平成６年）
南風原町教育委員会　文化課　学芸員　上地克哉　（考古学　平成６年～８年）
玉城村教育委員会　社会教育課　主　事　西平　剛　（史跡・考古学　平成６年～８年）
糸満市教育委員会　文化課　主　事　湖城　清　（考古学　平成７年）
同　上　〃　主事補　大城一成　（考古学　平成７年）
中城村教育委員会　生涯学習課　主事　渡久地　真　（史跡・考古学　平成６年）
今帰仁城跡整備研究委員会　委員　名嘉正八郎　（歴史　平成７年）
同　上　委員　赤嶺和男　（建築　平成８年）
財団法人　沖縄県文化振興会　史料編集室　主幹　安里嗣淳（考古学　平成６～８年）
沖縄県立博物館　学芸課長　當眞嗣一　（史跡・考古学　平成６年）
琉球大学　元教授　仲松弥秀　（民俗・地理学　平成７年）
法政大学　文学部　元教授　外間守善　（国文学　平成６年）
琉球大学　法文学部　教授　池宮正治　（国文学　平成６～８年）
琉球大学　法文学部　教授　高良倉吉　（歴史学　平成６～８年）
浦添市教育委員会　文化課　主幹　安里　進　（考古学　平成８年）
琉球大学　法文学部　教授　池田榮史　（考古学　平成６・７年）
基山町教育委員会　係長　山田　正　（史跡・考古学　平成８年）

○ 聞き取り調査および情報提供者（平成６～８年度）

阿波根直盛・新垣幸有・石川逢仁・上江洲安英・上間秀政・大城宜英・我喜屋宗徳・我喜屋　満桂　辰哉・小橋川興永・島　秀範・城間富吉・高江洲良吉・田場典喜・仲本政治・真栄平房敬
宮城盛長・屋嘉比朝勇・屋比久益貞・首里城復元期成会・琉球大学

○ 発掘調査協力者（遺構実測など　平成６～８年度）

県教育庁文化課　埋蔵文化財係　主任　島袋　洋・金城　透（平成６～８年）
同　上　〃　指導主事　西銘　章（平成６年）
同　上　〃　嘱託調査員　新城　恵・田中ゆきの・仲座久宜（平成６・７年）

県教育庁文化課	埋蔵文化財係	嘱託調査員	上原　清乃・仲與根ゆかり（平成６～８年）
同　上	〃	〃	仲間　留美・又吉　純子（平成６～８年）
同　上	〃	〃	長田　剛（平成７・８年）
同　上	史跡整備係	嘱託調査員	矢沢　秀雄（平成６～８年）
同　上	〃	〃	上原　久（平成６・７年）
石垣市教育委員会	文　化　課	主　事	島袋　綾野（平成６年）
下地町教育委員会	文化財係	主　事	川満　邦弘（平成７年）

○ 発掘調査作業員（平成６年度）

呉屋正一・小波津夏子・山畑キミ・玉城富子・呉屋光子・大城輝子・小波津ヨシ子・幸地ヨシ子・小橋川恵子・小橋川幸子・永吉弘子・小湾清美・仲程喜美子・川鍋敬子・稲嶺フミ子・仲里ハル子・玉城信子・嘉数キミエ・呉我フジ子・新垣美智子・中田邦子・嘉手納　太・諸見里幸子・島袋文子・松本倫子・柚木崎末子・堀切邦子。

琉球大学 学生　米須美津・北谷 香・比嘉宮子・神里利恵子。富山大学 学生 古屋聡洋。

○ 資料整理作業員（平成６年度）

安和千代子・平良貴子・外間　瞳・島袋春美・金城礼子・西銘パトロシニア・仲村恒子・島　京美・備瀬枝美子・座間味美津子・立津春枝・島袋里美・喜屋武さおり・源河秀子・玉城恵美利・知念純子・石嶺眞由美・新垣千恵子・川満奈美子・喜舎場かおり・高良三千代。

別府大学　学生 城間　肇。

○ 発掘調査協力者（平成６年度）

金成淳一・松本　茂（以上２名　富山大学　学生）。山本 正昭（奈良大学　学生）。

松竹　譲・喜屋武盛世・宮里富二男（以上３名　松竹重機）。澤岻直彦（与那嶺測量設計）

国営沖縄記念公園事務所 首里出張所・海洋博覧会記念公園 管理財団首里城管理センター

◎ 平成７年度（1995年）組織　（遺構調査年度）

○ 事業主体	沖縄県教育委員会	教 育 長	仲里　長和	
○ 事業所管	沖縄県教育庁文化課	課　長	西平　守勝	
	同　上	副 参 事	濱比嘉　勝	
○ 事業総括	同　上	課長補佐	日越　国昭	
	同　上	課長補佐	新垣　末子	
○ 事業事務	沖縄県教育庁文化課	管 理 係	主幹兼係長	比屋根　正治
	同　上	〃	主　査	新垣　和子
	同　上	〃	副 主 査	宮城　直子
	同　上	〃	副 主 査	新崎　文子
	同　上	〃	主　事	伊波　盛治
○ 事業実施	沖縄県教育庁文化課	史跡整備係	係　長	上原　靜（発掘総括者）
	同　上	〃	指導主事	運天　和夫
	同　上	〃	指導主事	我那覇　念
	同　上	〃	主　任	盛本　勲
	同　上	〃	主　任	金城　亀信（発掘担当者）
	同　上	〃	嘱託調査員	高宮とり・渡邊尚子
○ 事業協力	沖縄県教育庁文化課	埋蔵文化財係	係　長	大城　慧
	同　上	〃	主　任	島袋　洋
	同　上	〃	指導主事	西銘　章
○ 事業協力	沖縄県教育庁文化課	埋蔵文化財係	専 門 員	金城　透

○ 発掘調査作業員（平成７年度）

大城輝子・仲程喜美子・永吉弘子・島袋文子・稲福フミ子・仲里春子・玉城信子・小波津ヨシ子・
柚木崎末子・城間智子・呉屋正一・小波津夏子・山畑キミ・呉屋光子・幸地ヨシ子・玉城富子・
小橋川恵子・小橋川幸子。
別府大学 学生 城間　肇、琉球大学 学生 米須美津、富山大学 学生 金成淳一・松本　茂
沖縄国際大学 学生 上原　久

○ 資料整理作業員（平成７年度）

伊波小百合・新垣千恵子・石橋朝子・小嶺禮子・浜元春江・又吉純子・仲間留美・大村広美・高良三千代
玉城恵美利・安和千代子・平良貴子・金城　薫・知念純子・岡村綾子・上原園子・外間 瞳・津波古好子
比嘉登美子・折田衣代・金城美折・金城さおり・長田　剛・伊波和歌子・又吉亜由美

◎ 平成８年度（1996年）組織　（遺構調査年度）

○ 事業主体	沖縄県教育委員会	教 育 長	仲里　長和	
○ 事業所管	沖縄県教育庁文化課	課　　長	大城　将保	
	同　　上	副 参 事	川満　一成	
○ 事業総括	同　　上	課長補佐	日越　国昭	
	同　　上	課長補佐	稲嶺　靖子	
○ 事業事務	沖縄県教育庁文化課	管 理 係	主幹兼係長	比屋根　正治
	同　　上	〃	主　　査	村山　佐代
	同　　上	〃	副主査	新垣　敏子
	同　　上	〃	主　　任	當間　保智
	同　　上	〃	主　　事	上原　直樹
○ 事業実施	沖縄県教育庁文化課	史跡整備係	係　　長	上原　靜（発掘総括者）
	同　　上	〃	指導主事	運天　和夫
	同　　上	〃	指導主事	我那覇　念
	同　　上	〃	主　　任	盛本　勲
	同　　上	〃	主　　任	金城　亀信（発掘担当者）
	同　　上	〃	嘱託調査員	高宮とり・渡邊尚子
	同　　上	〃	嘱託調査員	矢沢秀雄・稲垣千明
○ 事業協力	沖縄県教育庁文化課	埋蔵文化財係	係　　長	大城　慧
	同　　上	〃	主　　任	島袋　洋
	同　　上	〃	指導主事	比嘉　聡
	同　　上	〃	専 門 員	長嶺　均・金城　透
	同　　上	〃	専 門 員	上地　博・仲座　久宜

○ 発掘調査作業員（平成８年度）

大城輝子・仲程貴美子・永吉弘子・小波津ヨシ子・桃原隆信・瑞慶覧長祐・瑞慶覧繁美・真栄城千枝子・
宮城澄子・中原ミツ子・安次富マサ子・諸見里幸子・金城和也・城間 肇・山本正昭・喜舎場盛安・
安次富正寿・桃原佐恵美・仲村トヨ子・山内利江子・小松博幸・中塚末子・呉我フジ子・宮国恵子・
与那嶺勢津子・大城愛子・大城かおる・外間徳男

○ 資料整理作業員（平成８年度）

米田愛子・知念純子・岡村綾子・新垣千恵子・伊波小百合・嘉数禮子・金城 薫・備瀬枝美子・浜元春江
玉寄智恵子・石橋朝子・石垣奈美・津波昭史・島袋春美・仲宗根三枝子・城間千鶴子・田場直樹・
當山慶子・金城美祈・我那覇悠子・比嘉孝子

◎ 平成９年度（1997年）組織　（「京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）」報告書刊行年度）

○ 事業主体　沖縄県教育委員会　教 育 長　安室　肇

○ 事業総括　沖縄県教育庁文化課　課　長　大城　将保
同　上　課長補佐　日越　国昭
同　上　課長補佐　稲嶺　靖子

○ 事業事務　沖縄県教育庁文化課　管理係　主幹兼係長　大浜　節
沖縄県教育庁文化課　管理係　主　査　村山　佐代
同　上　〃　主　査　砂川　邦子
同　上　〃　主　事　上原　直樹

○ 事業実施　沖縄県教育庁文化課　史跡整備係　係　長　上原　靜
同　上　〃　充指導主事　運天　和夫
同　上　〃　充指導主事　我那覇　念
同　上　〃　主　任　盛本　勲
同　上　〃　主　任　金城　透
同　上　埋蔵文化財係　主　任　金城亀信
同　上　〃　補 助 員　渡邊尚子・花城五百子・宮城利香・崎浜陽子
同　上　〃　嘱託調査員　矢沢秀雄・島袋春美・赤嶺雅子・玉寄智恵子
同　上　〃　嘱託調査員　又吉純子・比嘉優子・城間　肇

○ 資料整理指導および協力者

文化庁　記念物課　埋蔵文化財部門　文化財調査官　坂井秀弥（中国陶磁）
文化庁　〃　〃　文化財調査官　小池伸彦（考古学　生産遺跡）
出光美術館理事（元東京国立博物館　次長）　長谷部楽爾（中国陶磁）
出光美術館　学芸課長　弓場紀知　（同　上）
国立歴史民俗博物館　考古研究部教授　吉岡康暢　（中世陶器）
財団法人　市原市文化財センター　調査研究員　牧野光隆　（考古学）
財団法人　沖縄県文化振興会　史料編集室　主幹　安里嗣淳
沖縄県教育庁文化課　埋蔵文化財係　係　長　大城　慧
同　上　〃　主任専門員　岸本義彦
同　上　〃　主　任　島袋　洋
同　上　〃　専 門 員　上地　博
同　上　〃　充指導主事　比嘉　聡
沖縄県立博物館　学芸課　主幹兼課長　當眞嗣一　（「京の内」出土品展関係者）
同　上　〃　充指導主事　津波古　聡（「京の内」出土品展指導助言）
同　上　〃　学 芸 員　仲間留美　（「京の内」出土品展示協力）
佐賀県教育庁文化課　課長補佐　大橋康二
沖縄県教育庁文化課　文化財係　有形文化財（美術工芸）主任　園原　謙
同　上　〃　民俗文化財　充指導主事　桃原茂夫
財団法人岩手県文化振興事業団　埋蔵文化財センター調査課　課長補佐　高橋與右衛門
那覇市教育委員会　文化課　課長　金武正紀
岡山県古代吉備文化財センター調査第二課長　伊藤　晃
東洋陶磁学会会員　森本朝子
山口県立萩美術館　学芸員　宮田絵津子

○ 発掘調査作業員（平成９年度）

小波津ヨシ子・大城輝子・大嶺愛子・永吉弘子・仲程喜美子・瑞慶覧 長祐・瑞慶覧 繁美・諸見里幸子・安次富マサ子・勢理客智也・真栄城千枝子・宮城澄子・中原ミツ子・桃原隆信・島袋朝輝・桃原さおり・島仲恵子・比嘉清恵・比嘉 剛・浦崎京子・伊佐美幸・上間宏美

沖縄国際大学卒業生 藤崎　京。別府大学卒業生 城間　肇。奈良大学 学生 山本正昭。

○ 資料整理作業員（平成９年度）

請盛智秋・嘉数禮子・備瀬枝美子・石橋朝子・知念純子・岡村綾子・伊波小百合・玉城恵美利・源河秀子渡邊尚子・牧志加代子・国吉春美・池原直美・瑞慶覧尚美・謝名元かずみ・茂太春枝・川上貴美子・上原富士子

○ 資料整理作業協力者（平成９年度）

比嘉孝子・新垣利津代・比嘉登美子・大城勝江・上原園子・城間千鶴子・外間　瞳・仲宗根三枝子・安和千代子・永友和子・村山理代・折田衣代・長田　剛・田中ゆきの・金城洋子・高良三千代・玉榮さとみ・吉田昌子・金城　薫・手嶋永子

◎ 平成19年度（2007年）組織　（「京の内跡発掘調査報告書（Ⅱ）」資料整理年度）

○ 事業主体	沖縄県教育委員会	教　育　長		仲村　守和
	同　上	教育指導統括監		金武　正八郎
○ 事業総括	沖縄県教育庁文化課	課　長	千木良　芳範	
	同　上	副参事	比嘉　敏子	
○ 事業事務	沖縄県教育庁文化課	文化班	班　長	識名　敦
	同　上	〃	主　任	仲間　ひろみ
	同　上	記念物班	班　長	島袋　洋
	同　上	〃	指導主事	金城　透
	同　上	〃	専門員	新垣　力
	同　上	〃	専門員	瀬戸　哲也
○ 事業実施	沖縄県立埋蔵文化財センター		参事兼所長	名嘉　政修
	同　上	副所長兼庶務課長		瑞慶覧　康博
	同　上	庶務課	主　査	山田　恵美子
	同　上	〃	主　査	玉寄　秀人
	同　上	〃	主　任	村吉　由美子
	同　上	調査課	課　長	岸本　義彦
	同　上	〃	主任専門員	金城　亀信（資料整理・報告書作成担当）
	同　上	〃	主　任	仲座　久宜（銭蔵・御内原地区発掘調査担当）
	同　上	〃	文化財調査嘱託員	岸本　竹美・小橋川　剛
	同　上	〃	文化財調査嘱託員	天久　瑞香・比嘉　優子

○ 資料整理指導および協力者

文化庁　美術学芸課　考古（有史）資料部門　調査官　原田昌幸（保存修理指導）

国立歴史民俗博物館　教授 宇田川 武久（金属製品解釈指導）

佐賀県立九州陶磁文化館　館長 大橋 康二（陶磁器）

○ 資料整理作業（平成19年度）

埋蔵文化財資料整理嘱託員　喜屋武 朋子・金城 克子・照屋 利子・仲地 和美・野村 知子・比嘉 なおみ

○ 資料整理作業協力者（平成19年度）

埋蔵文化財資料整理嘱託員 比嘉優子・仲宗根三枝子・上原美穂子・伊集ゆきの・又吉純子・桑江恭子

○ 資料整理作業員（平成19年度）玉城　幸子

◎ 平成20年度（2008年）組織　（「京の内跡発掘調査報告書（Ⅱ）」報告書刊行年度）

○ 事業主体　沖縄県教育委員会　教　育　長　仲村　守和
同　上　教育指導統括監　金武　正八郎

○ 事業総括　沖縄県教育庁文化課　課　長　千木良　芳範

○ 事業事務　沖縄県教育庁文化課　文化班　班　長　識名　敦
同　上　〃　主　任　篠田　卓也

○ 事業事務　沖縄県教育庁文化課　文化班　主　事　勅使川原　朋恵
同　上　記念物班　班　長　島袋　洋
同　上　〃　指導主事　伊禮　良栄
同　上　〃　主　任　瀬戸　哲也

○ 事業実施　沖縄県立埋蔵文化財センター　参事兼所長　名嘉　政修
同　上　総務班　班　長　嘉手苅　勤
同　上　〃　主　査　山田　恵美子
同　上　〃　主　任　村吉　由美子
同　上　〃　再任用主査　知念　百合子
同　上　〃　臨任主事　照屋　文香
同　上　調査班　班　長　岸本　義彦
同　上　〃　主　幹　金城　亀信（資料整理・報告書作成担当）
同　上　〃　主　任　仲座　久宜（銭蔵・御内原地区発掘調査担当）
同　上　〃　文化財調査嘱託員　岸本　竹美・大堀　皓平

○ 資料整理指導（平成20年度）
文化庁　美術学芸課　考古（有史）資料部門　調査官兼文化財管理指導官　原田昌幸（保存修理指導）
千葉県立中央博物館　動物学研究科　上席研究員　黒住 耐二（貝類分析解釈指導）
佐賀県立九州陶磁文化館　館　長　大橋 康二（陶磁器）
糸満市役所 経済観光部 商工労働課　課長　金城　善（歴史民俗関係指導）

○ 資料整理作業（平成20年度）
埋蔵文化財資料整理嘱託員　赤嶺雅子・池原直美・照屋利子・喜屋武朋子・金城敬子・上原留美・伊藝由希・上原園子・翁長涼子・我那覇悠子・又吉純子・新垣利津代・平良貴子・大村由美子・上原美穂子・久保田有美・伊禮若奈・中山まり・比嘉孝子・荻堂さやか・久田慎子・森屋明子

○ 資料整理作業協力者（平成20年度）
沖縄県立埋蔵文化財センター 調査班　主 任　知念　隆博（金属製品・ガラス製品 軟X線撮影・現像）
埋蔵文化財資料整理嘱託員　伊集ゆきの・玉寄智恵子・吉村綾子・友利映子・瑞慶覧尚美・高良三千代・石嶺敏子・玉城恵美利・譜久村泰子・崎原美智子

○ 資料整理作業員　永玉栄美香・玉城実子

第４節 調査の経緯

首里城京の内跡の発掘調査は、1994年（平成6年）11月21日から開始して翌年の3月28日までの約5ヶ月間にわたって実施された。なお、事前に不発弾検出のための磁気探査を9月19日・20日の二日間実施し、異常点の掘削探査に立ち合った。

調査地区の発掘前の状況は、1992年（平成4年）の首里城正殿、北殿、南殿、奉神門、廣福門などの復元整備が完了し、首里城公園として一部が開園した。開園に伴って京の内地域は、北側の下之御庭から南側の斜面地まで客土がなされ、全面に芝張りで暫定的な仮整備が行われていた。客土は琉球大学の基礎跡より上になされていて、調査は仮整備の芝の除去から始まり、次に客土の除去をバックホウ（クローラ型）でおこない琉球大学の旧地表面まで剥ぎ取った後に磁気探査（水平探査）をおこなった。磁気探査の測線間隔は、１m間隔の35測線で探査の総距離程は2,432mであった（第２図）。磁気探査の結果、発掘調査地区内で異常点が61ヶ所（第２表）確認された。掘削を伴う確認探査で61ヶ所の内、29ヶ所が鉄筋コンクリート、鉄筋、鉄パイプ、鉄片、鉄筋コンクリート板、鉄屑、鉄管、番線（針金）入りコンクリート、マンホールの9種類が確認された。磁気探査での磁気異常測定から反応した磁気量は、5ガウス～50ガウス以上で鉄屑・鉄片・鉄パイプのサイズなどの差で、磁気量が変化するようであった。異常点61ヶ所の内、深度が90cm～100cmまでの範囲内で、磁気量が14ガウス～60ガウスの範囲内に収まった10ヶ所については、調査員が立ち合いで往時の遺物や遺物包含層を確認する目的も兼ねて不発弾の検出を行った。磁気探査の結果、琉球王国時代の遺物や沖縄戦で使用された不発弾等は検出されなかった。

この時点で磁気探査を終了したが、琉大地盤を東側から西側へバックホウ（クローラ型）で慎重に旧表土を削平しながら掘り下げたところ手榴弾4発、砲弾2発を検出した為、関係機関に連絡を入れて処理を依頼した。その後、遺構内の崩れた栗石を手作業による除去をおこなっていた調査員が持ち上げた石の下から完形の不発弾（写真からの推定サイズは長さ64.2cm、幅17.1cmで、野戦砲155ミリ砲弾以上から203ミリ未満の砲弾とみられる。弾頭信管が東を向いている事から米軍が那覇の西方13kmのチービシにある神山島に重砲陣地を構築、この陣地から発射された砲弾の可能性がある。）が見つかり、調査員は手に持った石（25kg）を下ろすわけにもいかず、そのままゆっくりと栗石の中を歩きながら10数m離れた土砂置き場まで石を運んだ。急ぎ、調査員が戻って不発弾の状況を確認したところ砲弾先端に青錆が発生し、危険な状態にあると判断して土嚢袋に土砂を入れて、土嚢袋で不発弾の周辺を囲い、更に直射日光が当たらないようにブルーシートで覆い、直ちに警察に通報し、自衛隊へ不発弾処理を依頼した。

不発弾も無事撤去されたが、磁気探査は地表面から１m以内しか反応しないことが後になって判った。また、発見された不発弾は、砲弾が回転しながら飛来し、回転しながら遺構内の栗石に潜り込んで、砲弾先端部分が栗石に衝突することなく栗石と栗石の間に挟まったまま停止して不発弾となったことが判明した。

このような状況で琉球王国当時の地表面と首里第一尋常高等小学校（1912年～1945年）当時の地盤までバックホウ（クローラ型）や手掘りで掘り下げたが、調査地区の南側半分は琉球大学校舎（短大管理棟、理科実験室、教育校舎及び同ビル別館、法文校舎及び同ビル別館Bなど）建築の際の造成により琉球石灰岩の掘削や削平がなされ、遺構の残り具合は悪かった。逆に北側は琉大校舎地盤のレベルより低い地域は、道路、中庭、各校舎への通路と利用されたことと校舎などの構築物が建設される事がなかった事が幸いして、旧表土レベル内での軽微な攪乱を受けている程度で、全体的に遺構の保存状態は良好であった。遺構検出に際しては、遺構直上までバックホウで慎重に削平しながら遺構を確認しながら掘り下げた。この辺はオペレーターの松竹譲氏の長年の経験（10年）と技術が生かされ5cm前後の誤差で剥ぎ取りが可能となり、調査がスムーズに進行していった。遺構直上より下部の発掘調査は、人力による手作業で遺構を露出させながら掘り下げていった。

遺構の検出に際しては確認され次第、下記のように遺構の形状などから記号と番号を検出順に冠していった。また、遺構の性格や時期を具体的に把握する目的で、遺構沿いにトレンチを入れながら発掘調査を進行させた。結果として検出された遺構は51基（調査終了時点で、遺構番号に重複が発生）を数えた。その後、遺構の整理（途切れた石積み遺構同士が繋がり一つの遺構として整理、SA19・SA20・SA28が土壙SK01の倉庫跡となる

など）と検討をすすめたところ最終的に39基となった。

これらの遺構発掘調査で約５ヶ月を要したが、土層図や遺構の断面図の作成などで時間を要し、実測図が完成したのは、1995年（平成7年）12月14日までの期間となり、実に発掘調査開始から終了までの期間は１年１ヶ月間（1994年11月21日～1995年12月14日）を要した。その間、国営沖縄記念公園事務所より新たに平成7年度事業で、京の内南側一体の1,000㎡を受託事業として県教育委員会が発掘調査を実施することとなり、管理用道路の北側一帯を「京の内北地区」（平成6年 2,000㎡）と同道路の南側一帯を「京の内南地区」（平成7年 1,000㎡）と地区を分けて、平成7年度の南地区の発掘調査と平行しながら平成6年の北地区の図面実測作業を行い、両地区とも無事に作業を1995年（平成7年）12月14日に終了した。引き続き、1996年（平成８年）７月１日～３月28日までの９ヶ月間、京の内西側地区（調査面積約1,000㎡）を実施した。

第１表　1994年度「京の内」跡検出遺構件数の新旧関係

NO.	種　類	遺構の記号と番号	旧件数（1994年時点）	新件数（2000年時点）
1.	石積み	SA01～SA27・SA29～SA34	33基	17基
2.	石　列	SR01・SR02	２基	２基
3.	石敷き・塼敷き	SS01～SS03	３基	６基
4.	溝	SD01～SD07	７基	10基
5.	土　壙	SK01～SK03	３基	３基
6.	建　物	SB01・SB02	２基	１基
7.	階　段	SA28	１基	０基
遺　構　合　計			51基	39基

1994年（平成6年）に実施した京の内北地区（約2,000㎡）の埋め戻しは、1996年（平成8年）２月29日に遺構や往時の面を保護するために白砂を15cm前後の厚さで岩盤の石灰岩を含む調査区2,000㎡に敷いて、その上に残土を50～70cmの厚さで盛って埋め戻した。この埋め戻しに際しては、重機（バックホウ、タイヤショベル、ローラー）を使用するため、埋め戻しの方法について協議しながら行った。遺構面については調査員立会の基で人力による埋め戻しを実施した。

引用及び参考文献

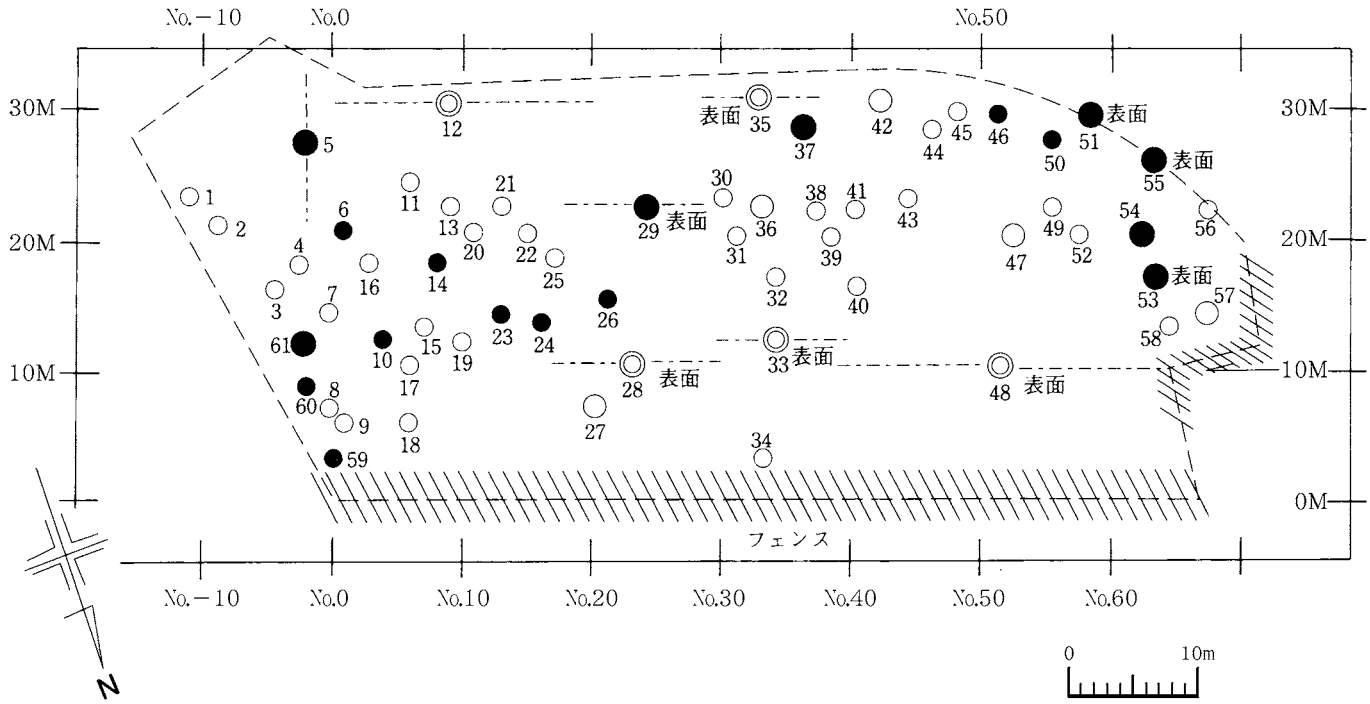
1．沖縄県文化財調査報告書第132集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）－』沖縄県教育委員会 1998年（平成10年）３月。
2．金城亀信「首里城跡「京の内」跡出土の輸入陶磁器－紅釉水注を中心に－」『特集 琉球考古学最新情報』　考古学ジャーナル NO.437 1998年。
3．金城亀信「首里城「京の内」跡の発掘調査概要」重要文化財指定記念 特別企画展 『首里城京の内展－貿易陶磁からみた大交易時代－』沖縄県立埋蔵文化財センター 2001年３月。
4．沖縄県不発弾対策協議会『不発弾等処理対策便覧』2004年３月。
5．平成15年度 大規模駐留軍用地等利用推進調査事業 文化庁委出委任『埋蔵文化財広域発掘手法検討調査業務概要－物理探査及び検証発掘調査の検討成果－』沖縄県教育委員会 2004年３月。
6．平成15年度 文化庁委出委任 『物理探査を利用した埋蔵文化財広域発掘調査手法－物理探査実施マニュアルおよび解説－』沖縄県教育委員会・社団法人物理探査学会 2004年３月。
7．金城亀信「沖縄における物理探査の現状」『文化財と探査』vol.6 No.2 日本文化財探査学会 2005年８月。

第２表①　磁気異常測定値一覧

異常点番号	異常物反応記号	磁気量(ｶﾞｳｽ・cm²)	埋設深度(m)	位置		確認された磁気異常物品名・寸法（単位・㎝）
				NO	距離(m)	
1	○	1	0.2	№-10	23.0	
2	○	4	0.6	№-８	20.0	
3	○	1	0.3	№-４	15.0	
4	○	3	0.8	№-２	17.0	
5	●	42	0.7	№-１	26.0	鉄筋コンクリート　Ｌ＝90　φ＝1.2
6	●	8	0.5	№１	20.0	鉄　筋　Ｌ＝65　φ＝0.9
7	○	6	0.5	№０	14.0	鉄パイプ　Ｌ＝35　φ＝1.5
8	○	1	0.3	№０	7.0	
9	○	2	0.1	№１	6.0	
10	●	5	0.7	№４	12.0	鉄　片
11	○	1	0.3	№６	24.0	
12	◎	50以上	0.5～1.0	№９	30.0	鉄筋コンクリート板
13	○	3	0.7	№９	22.0	
14	●	2	0.4	№８	18.0	鉄　筋　Ｌ＝40　φ＝1.2
15	○	2	0.4	№７	13.0	
16	○	1	0.3	№３	18.0	
17	○	1	0.3	№６	10.0	
18	○	2	0.3	№10	6.0	
19	○	2	0.3	№10	12.0	
20	○	1	0.4	№11	20.0	
21	○	2	0.4	№13	22.0	
22	○	2	0.4	№15	20.0	
23	●	6	0.7	№13	14.0	鉄　片
24	●	9	0.9	№16	13.0	鉄　屑
25	○	1	0.4	№17	18.0	
26	●	7	0.5	№21	15.0	鉄　片
27	○	10	0.4	№20	7.0	鉄　管　φ＝12
28	◎	50以上	0	№23	10.0	番線入りコンクリート
29	●	50以上	0	№25	22.0	鉄パイプ
30	○	4	0.7	№30	23.0	
31	○	2	0.3	№31	20.0	
32	○	1	0.1	№34	17.0	
33	◎	50以上	0	№33	12.0	鉄筋コンクリート
34	○	3	0.6	№33	17.0	
35	◎	15	1.1	№33	22.0	鉄　屑
36	○	50以上	0	№33	30.0	鉄　屑
37	●	37	0.9	№36	28.0	鉄パイプ・鉄筋
38	○	2	0.6	№37	22.0	
39	○	1	0.2	№38	20.0	
40	○	3	0.4	№40	16.0	

第２表②　磁気異常測定値一覧

異常点番号	異常物反応記号	磁気量 (ｶﾞｳｽ・cm²)	埋設深度 (m)	位置 NO	位置 距離(m)	確認された磁気異常物 品名・寸法（単位・cm）
41	○	3	0.4	№40	22.0	
42	○	12	1.1	№42	30.0	鉄　　屑
43	○	3	0.8	№44	23.0	
44	○	4	0.7	№46	28.0	
45	○	4	0.4	№48	29.0	
46	●	7	0.9	№52	29.0	番　　線
47	○	10	0.5	№52	20.0	鉄　　片
48	◎	50以上	0	№51	10.0	鉄筋コンクリート
49	○	4	0.5	№56	21.0	
50	●	6	0.9	№55	27.0	マンホールの影響
51	●	29	0	№58	29.0	マンホール
52	○	2	0.3	№57	20.0	
53	●	45	0	№63	17.0	鉄　　筋
54	●	27	0.8	№62	20.0	鉄　　片
55	●	38	0	№63	29.0	鉄　　屑
56	○	2	0.5	№67	22.0	
57	○	13	0.3	№67	14.0	鉄筋コンクリート
58	○	2	0.4	№64	13.0	
59	●	6	0.4	№0	3.0	鉄筋コンクリート
60	●	6	0.4	№-2	7.0	鉄　　屑
61	●	26	0.9	№-2	12.0	鉄パイプ　　L＝50　φ＝2



第２図　磁気異常測定位置

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

首里城跡は、1972年（昭和47年）５月15日の本土復帰の際に国の史跡として指定された。その後、2000年（平成12年）12月２日に国際連合教育科学文化機関「ユネスコ（UNESCO）」の世界遺産（文化遺産）として首里城跡を含む９資産が「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として登録され今日に至ってる。

国指定史跡首里城跡は、沖縄県庁の所在地である沖縄本島南部の那覇市にあり、地番が那覇市首里当之蔵3丁目1番となっている。かつては琉球大学が所在した場所でもあった（第３・４・８図）。

那覇市の総面積は、2007年（平成19年）２月現在で39.23㎢（参考：1995年の総面積は38.74㎢）を有している。那覇市の総人口は、2008年６月末現在で315,925人、世帯数132,018世帯である（参考：1996年10月1日現在の人口は300,809人、世帯数105,638世帯）。気候は亜熱帯気候に属している。

那覇市の2006年（平成18年）３月現在の気象概要は、平均気温は23.5℃、最高気温35.0℃、最低気温10.2℃、総降水量2,068.0㎜であった（参考：京の内跡の発掘調査を最初に実施した1994年の那覇市の平均気温は23.0℃、最高気温33.7℃、最低気温10.3℃であった）。

曾て琉球王国の王都であった首里の町は、那覇市内でも比較的に標高の高い地域にあり、概ね70～135m程度を有する第四紀層の琉球石灰岩台地に形成された町でもある。町の南側にある標高100～135ｍの丘陵上に首里城が立地している（第３図）。

首里城跡（第３図）の北には、末吉の丘陵があり、西から西森（標高102.1m）や虎頭山（標高132.5m）、そして北東には王府時代に旧暦の正月・五月・九月に国王の親祭がなされた弁ヶ嶽（標高165.6ｍ）と称される丘へと途切れながら小丘陵が点在する。これらの丘陵と首里城の間を儀保川が西へと流れ注いでいる。弁ヶ嶽の南側には、南風原町との境界となるナゲーラ川が南西へと流れる。南側には首里城眼下を流れる金城川と識名丘陵を望むことができる。首里丘陵の南側から西側一帯は急傾斜や緩斜面となり、金城川や真嘉比川が安里・大道の区域を流れて漸次、緩い傾斜をもって平坦地の那覇市内へと移行する。

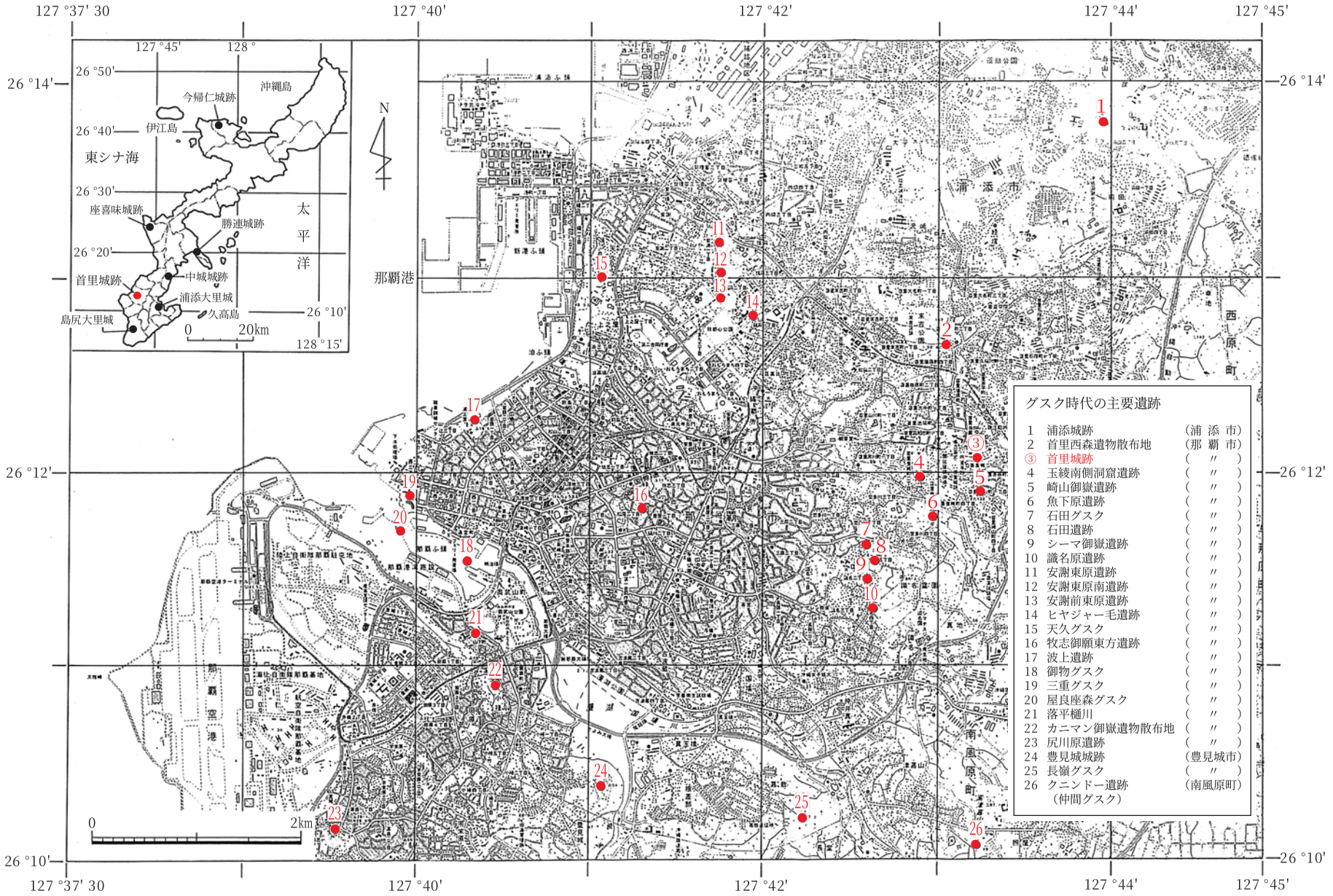
首里城を中心に周辺地形をみると東側および南・北の両側は、三方向に丘陵や河川による自然地形が城の障壁となっていて、西側の一部（松川・大道方面）と北西側の一部（松島・古島方面）が丘陵の尾根となり、緩やかな斜面となっている。この尾根緩斜面の内側が急斜面となり漸次、南西方向へ扇状に開いたような盆地状の地形となっている。首里周辺の地質の基盤は新第三紀与那原層下部シルト岩（泥岩）で、その上部に前述した琉球石灰岩（第四紀層琉球層群下部）が堆積している。

このように首里の南側丘陵地の西寄りの高所（標高100～135m）に城を普請するには最良の適地であったものとして理解される。また、首里城内の東のアザナ（135.5m）、西のアザナ（125.5m）、京の内の物見（135m）からは、北は座喜味城跡・浦添城跡の立地する丘陵、東は久高島や大里城跡・糸数城跡の所在する丘陵地を確認することができる。南に目を向けると遠くは多々名グスク・八重瀬グスクのある丘陵地も確認できる。西側は天候が良ければ久米島・渡名喜島・粟国島までが視野に入る日もある。

今回報告の対象となる地域は、首里城の内郭下之御庭に接する南側の地域で琉球王国時代（第４図）においては3～7m程度の高い石積みで区画されていた。俗に「京の内」と呼称されていた区域である。京の内は首里城の中でも聖域として崇められていた場所でもあった。京の内の南側は城内でも高い位置にあり、標高は135mを有し、北側に向かって傾斜しながら標高121mの平坦地である下之御庭へ移行する。下之御庭の北側から下位の久慶門・歓会門の内側地域は、1984年（昭和59年）の発掘調査で斜面の中間から下は琉球王国時代の土木事業による造成で埋め立てられた人工の地盤であることが確認されている。

参考および引用文献

・沖縄県統計協会　『1998　県民手帳』　生産性出版　1998年度版。
・那覇市教育委員会　『那覇市歴史地図―文化遺産悉皆調査報告書―』　1986年。



第3図　首里城跡とグスク時代の周辺遺跡

・沖縄タイムス社　『沖縄大百科事典』　1983年。
・木崎甲子郎編著　『琉球弧の地質誌』　沖縄タイムス社　1985年。
・沖縄県文化財調査報告書 第88集 『首里城跡－歓会門・久慶門内側地区の復元整備にかかる遺構調査－』 沖縄県教育委員会 1988年 3月。
・沖縄県文化財調査報告書 第132集 『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）－』 沖縄県教育委員会 1998年 3月。
・那覇市役所 「那覇市」公式ホームページwww.city.naha.okinawa.jp 更新日：2008年1月18日。

第２節　歴史的環境

1982年（昭和57年）に那覇市教育委員会が報告した遺跡の実数は、38遺跡（註１）が確認されていたが、22年後の2004年（平成16）に沖縄県立埋蔵文化財センターが県内各市町村に依頼作成した「市町村別遺跡情報一覧（暫定)」に拠ると那覇市内には79遺跡が登録されている（註２)。22年間で遺跡数が41件増加している。増加の原因は、個人住宅及び公共施設の建て替えによるものや1987年（昭和62）に米軍用地（牧港ハウジングエリア）が返還され、これに伴う土地区画整理事業で古墓群やグスク期の遺跡が21箇所（註３）発見され、発掘調査が実施された。那覇市文化課のひとつの考え方として、首里城周辺を「城下町的遺跡群」、那覇港周辺を「港町的遺跡群」などとして位置づけているようである（註４)。

首里周辺での遺跡調査（第３図）で、南側の識名丘陵では沖縄県農業試験場跡地の西方にある識名台地東縁の琉球石灰岩崖下に嵩下原第Ⅰ洞穴（旧石器時代）・嵩下原貝塚（縄文後期相当）の報告（註１）がある。識名台地内では識名原遺跡（弥生～平安時代相当～近世・近現代。註５）・識名シーマ御嶽遺跡（グスク時代。註６）などが確認されている。そして、首里城の南側に近接する崎山御嶽遺跡からは奄美諸島で形式設定された縄文後期の面縄東洞式土器や石斧などが報告（註７）があり、首里城城郭南側斜面（京の内南側崖下一帯）からも面縄東洞式土器が２片と荻堂式若しくは大山式土器１片、弥生～平安時代相当の土器１片などが報告（註８）されている。

更に首里城内郭の下之御庭～木曳門地区の調査では、面縄東洞式土器２片、嘉徳Ⅱ式系統の土器１片が報告（註９）されている。

次に首里城の北側に位置する末吉丘陵の東南縁及び周辺には、末吉町シカ化石出土地や首里西森遺物散布地（縄文後期・グスク時代）が報告（註１）されている。また、鳥堀から儀保に延びる石灰岩丘陵を「虎頭山」と称しているが、この丘陵地内で石斧が１点出土した虎頭山石器出土地（註１）がある。首里城の北に隣接した第一尚氏の墓陵であった天山陵（註10）の所在する丘陵西端近くに約2,500年前の山川貝塚（縄文晩期相当）が報告（註１）されている。

首里城に関する文献資料で京の内との兼ね合いから特に高世層理殿に関する主要な文献や最新の研究成果を記載する。

僧侶の袋中上人が記した『琉球神道記（1608年編集)』（註11）には、「この国の国王で、大世の主と申しあげる方は、毒蛇を恐れて高楼を建立し、厚い板で囲いを作った。・・後略・・」と記載がある。

『中山世鑑（1650年編集)』（註12）には、1392年（洪武25年）に「察度王モ後ニハ驕奢ノ御心ヤ出来ケン高ヨサウリトテ数十丈ノ高楼ヲ作リ遊観ヲシ給ケル・・（後略)」と、中山王察度が数十丈の高楼の“高ヨサウリ”（高世層理殿）にて遊観していることが記載されている。

『蔡鐸本中山世譜（1697年～1701年編集)』（註13）の洪武25年の項にも「王後驕奢建造数十丈之高楼・・後略・・」と記載されている。

『琉球國由来記（1713年編集)』（註14）項目の「楼」には、「當國、楼者、察度王、始高世層裡、造營於下之玉庭之南（向北方)」と記載されている。

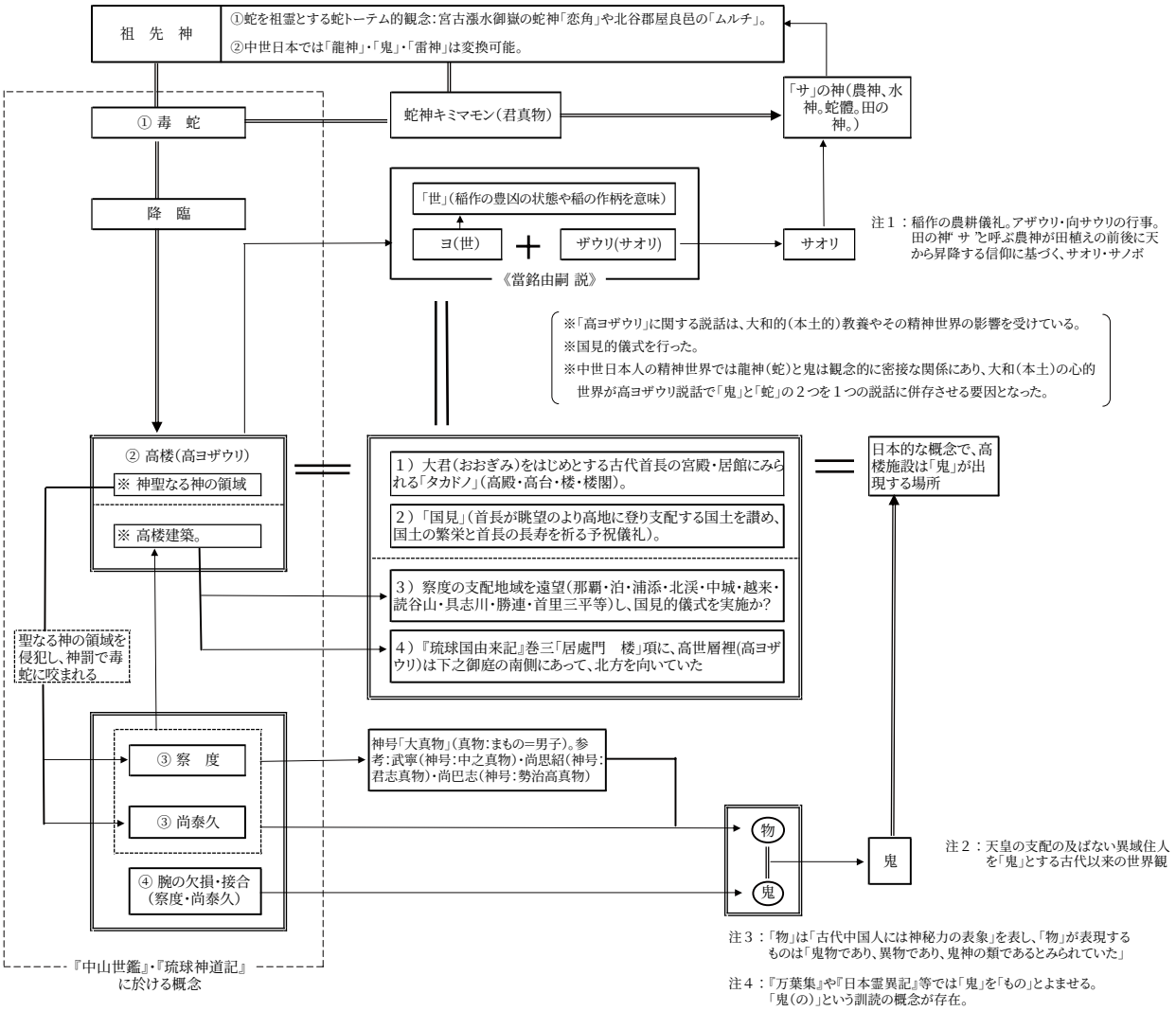
『球陽（1743年～1876年編集)』（註15）の察度王43年（1392年）項目「高楼を建造して以て遊観に備る」に、「是れに由りて王、稍驕奢にして、数丈の高楼を建造し、以て遊観に備ふ。一日、楼に登り戯言して曰く、予此の楼に居る。誰か敢へて害を加へんやと。・・後略・・」と記載されている。

以上のように、この高世層理殿が浦添城内にあったとする解釈と首里城内に存在したとする二つの解釈があったが、真栄平房敬氏の研究では、「・・・京ノ内には古くは「高よそうり殿」をはじめいくつかの殿舎がたっていたであろうが、長い歴史の中であるいは焼けた（向氏湧川家々譜に1576年高よそうり殿の炎上の記あり)」（註16）と記している。また、県内の家譜を整理・研究をおこなった比嘉朝進氏は、向氏湧川家々譜関係で、向

氏一世越来王子朝理（尚宣威王長男）の五世を次いだ朝首の解説で、「1576年に天界寺（守礼門と玉陵の中間にあった）が失火し、火の手は城内の高楼に燃え移った。しかし、高所なのでだれも消しに登るものはなく、朝首ひとりが登って火を消し止めた。（中略）十一世朝略のとき湧川に改名。」（註17）と記載されている。

その他、當銘由嗣氏による「察度」や「高ヨザウリ」説伝に関する研究論文（註18）がある。當銘氏論文については、内容を整理して第３表のフローチャートを作成した。

第３表　當銘氏論文の内容を基に作成したフローチャート



當銘氏は、「察度」・「高ヨザウリ」の名称やそのもの本来有する語意などについて文献資料などを駆使し、高世層理の機能として、「高ヨザウリ」を、ヨ（世）＋ザウリ（サオリ）であると考え、ヨ（世）は稲の作柄を意味するものと解釈し、ザウリ（サオリ）は、「サの神」が降臨することを意味しているのではなかろうかと推察している。また、高ヨザウリにおいて国王による国見的儀式が行われたという認識が過去にあったのではないだろうかと推察し、その根拠として『中山世鑑』（註12）に記載された事項を整理して、英祖王統第４代の玉城王の時代に琉球が北山・中山・南山の三山に分裂し、首里城を王城とする中山に支配する領域を那覇・泊・浦添・北溪・中城・越来・読谷山・具志川・勝連・首里三平等があり、これらの地域は、概ね首里城の北側に望むことができ、高ヨザウリが北を向くとされたのは中山王である察度が自分の支配地を遠望して国見的儀式を行ったとの事ではないかと想定している。その他、當銘氏は、高ヨザウリ説話に関して「察度（神号：大真物）」＝「物」＝「鬼」と「蛇」＝蛇神（キミマモン：君真物）＝「サ」の神＝祖先神という２つの視点から考察を加え

て、中世日本人の精神世界では龍神（蛇）と鬼は観念的に密接な関係から、その大和（本土）の心的世界の影響が高ヨザウリ説話において「鬼」と「蛇」の２つを１つの説話に併存させる要因となったのではないかと考察している。高楼「高ヨザウリ」に関する説話は、純粋に琉球の内的世界からのみ生じたものではなく、大和的（本土的）教養やその精神世界の影響を色濃く受けているものと結論付けている。高世層理の位置については、『琉球国由来記』（註14）の記載にある「高ヨザウリ（高世層裡）は首里城の下之御庭の南側にあって、北方に向いていたという。」と記述している。

以上のような状況から家譜資料の調査などから首里城内に“高ヨザウリ”が存在していたことがほぼ確定的となっているようである。

その他に、察度の子である中山王武寧を第一尚氏王統二代の尚巴志が1406年（永樂４年）に攻め滅ぼした城は、浦添城ではなく首里城であったことが上記した高世層理殿の内容などからも推測されるところである。

また、第一尚氏王統の尚巴志が首里城に居住してたであろう察度王統の中山王武寧を滅ぼした事については、『おもろそうし』（註19）第四巻 あおりやゑさすかさのおもろ御双紙（一連番号206)、第六巻 しゅり大君せんきみ君がなしもゝとふみあがり　きみのつんじのおもろ御双紙（一連番号292)、第二十巻 くめすおもろ御双紙（一連番号1375）の三巻に謡の節回しの題目は異なるものの以下に記した同じ内容の謡が重複した形で謡が存在することからも首里城内に察度王統による御嶽の創建が在った事を、この謡からも推察できる。

第四巻 あぢおそいしょょしられが節
第六巻　あぢそいしょょせりが節
第二十巻　あぢおそいしょょしれが節

「一　首里大君ぎや　末　選びやり　降れわちへ　君ぎゃせぢ　もちよる成ちへ　みおやせ　又　鳴響も国守りぎゃ　真末　選びやり　降れわちへ　又　首里杜　ちょわる　英祖にや末按司襲い　又　真玉杜　ちょわるてだが末按司襲い　又　見物内の真庭に　国揚がりは　煽らちへ　又　かわるめの御内に　君撓い　煽らちへ　又　聞声大君ちよ　ゑりちよ　遣り交わちへ」（大意：鳴り轟く首里の大君、国守り神女が、神の末裔選びをして降り給いて、首里杜、真玉杜にまします英祖様の末裔、太陽神の末裔の国王様は、城内の見物内の真庭、かわれめの御内に、国揚がり、君撓いを煽らして、国を守ろう。神女の持つ霊力をきらめき輝かせて国王様に奉れ。）

ところで、首里城の城主となった尚巴志は、三山統一前の1427年（宣徳2年）に城下の北西隣の安国山に池を掘り“龍潭”の完成と、その記念碑である“安国山樹樺木記碑”を建立している。その２年後の1429年（宣徳4年）には南山王の他魯毎を滅して三山統一を成しとげたようである。

1985年（昭和60年）から1986年の首里城正殿跡の発掘調査（註20）で、正殿の創建は14世紀前半～中葉もしくは14世紀代に第Ⅰ期の正殿の創建がなされていたのではないかとの見解が示されている。少なくとも15世紀初頭～前半には察度を滅ぼした第一尚氏の尚巴志によって首里城内郭（当時は外郭）と“龍潭”が整備されたようである。

このことは、戦前の1936年（昭和11年）12月29日～1937年１月11日までの期間に伊東忠太・鎌倉芳太郎の両氏によって正殿前（北殿西側）１ヶ所、京の内北西側下（露頭した大岩斜面地に包含層か）２ヶ所、西ノアザナ東南側下１ヶ所の合計４ヶ所で発掘調査を実施している。伊東・鎌倉両氏の結論として「此の三地點の出土品は略一致して、首里城第一次擴張時代と推察される永樂16年（西紀1416年）～宣徳2年（西紀1427年）の頃の埋蔵であろうと想定される。」（註21）と記している。この三地点とは正殿前・京の内北西側下（東)、西ノアザナ東西側下である。また、次のようにも記している「此の第一次擴張の際には、瑞泉門から京の内西面の城門に至る線以西を、埋め立てたのではなかろうか･･･中略･･･北面の低地に對しては、石垣を築いて其の中に盛土し、更に其の石垣を地盤の鞏固な瑞泉門で支えてゐる。･･･中略･･･それ故に埋立地北部の城壁は、一方に於いて降雨の際の水壓の防備を考へ 、一方に於いては雨水を瑞泉門に集中するように工作してあるらしい」。この見解は今日の発掘調査の成果からも卓越された見解であることが確認されている。

第二尚氏の初期に尚真王により中央集権の体制が築かれ強固な琉球王国の基礎ができあがり、首里城外郭であ

る歓会門や久慶門の両門（1447年～1526年）が普請され、その頃に外郭の整備がなされたようであるが、外郭の着工時期や完成時期についてはよくわかっていないようである。

尚真の後を次いだ尚清王は、尚真によって確立した王国の基礎を継承し、発展させる。1546年（尚清25年）には首里城石垣の補強工事と1553年の那覇港の防備拠点であった屋良座森城の築造などが行われ、倭寇の侵入による対策が取られたようである。

尚真・尚清の両王統の頃に城の整備と城下の整備などが積極的に推進されたものとして考えられているようである。

1879年（明治12年）の廃藩置県により首里城の500余年にわたる歴史も最終の琉球王国となった尚泰王によって明治政府に首里城を明け渡して王城を去る。首里城の明け渡しと同時に熊本鎮台沖縄分遣隊の首里城入城があり、1897年（明治29年）の撤退するまでの17年間が分遣隊が配備された（第５図）。その後は沖縄県師範学校・第一小学校などの文教施設として利用（第７図）され、1944年（昭和19年）には首里城地下に第32軍指令部壕が造られ、1945年（昭和20年）４月には首里城は灰盡に帰してしまった。このように首里城は幾多の歴史的な変更を経て今日に至っている。

註

註１．那覇市文化財調査報告書 第５集 『那覇市の遺跡－詳細分布調査報告書－』 那覇市教育委員会　1982年３月。
註２．「遺跡分布地図情報システム作成事業」 『市町村別遺跡情報一覧（暫定）』 沖縄県立埋蔵文化財センター　2004年３月。
註３．那覇市文化財調査報告書 第59集 『銘苅古墓群（Ⅳ）－那覇新都心土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査報告ⅩⅢ－天久公園整備事業に伴う緊急発掘調査Ⅳ－』 那覇市教育委員会 2004年３月。
註４．1997年5月27日に那覇市教育委員会文化課の島 弘主査に遺跡数を確認した際に教示を戴いた。実数については遺跡を大系的に整理した上でしか判断はできないとのことであった。
註５．那覇市文化財調査報告書 第49集 『識名原遺跡－識名上間線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告－』 那覇市教育委員会　2001年３月。
註６．那覇市文化財調査報告書 第34集 『識名シーマ御嶽遺跡－真地配水池建設事業に伴う緊急発掘調査報告－』 那覇市教育委員会　1997年３月。
註７．那覇市文化財調査報告書 第67集 『崎山御嶽遺跡－首里崎山公園整備事業に伴う緊急発掘調査報告書－』 那覇市教育委員会　2005年３月。
註８．沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第19集 『首里城跡－城郭南側下地区発掘調査報告書－』 沖縄県立埋蔵文化財センター 2004年３月。
註９．沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第３集 『首里城跡－下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－』 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001年３月。
註10．安里嗣淳・盛本　勲 「天山陵跡調査の概略」 『紀要』 第1号　沖縄県教育委員会文化課　1984年。
註11．弁蓮社袋中 著・訳注 原田禹雄 『琉球神道記（1608年編集）』 榕樹書林　2001年７月。
註12．沖縄県教育委員会 『重新校正中山世鑑』 巻二 「洪武二十九年（中略）不思議ナケン高ヨサウリトテ数十丈ノ楼ヲ作り遊観ヲシ給ケルカ或時此楼ニ上リ戯言ニ常ニ此楼上ニ居給程ナラハ毒蛇ノ恐モ無物ヲトソ宣ケル」。昭和57（1982）年10月。
註13．嘉手納宗徳『第二巻 蔡鐸本中山世譜（上）（1697年～1701年編集）』 訳注松涛書屋史料叢書全三十巻 沖縄史料館松涛書屋発行 昭和58（1983）年５月。
註14．伊波普猷・東恩納寬淳・横山　重 『琉球國由来記（1713年編集）』 風土記社　昭和63（1988）年２月。
註15．島尻勝太郎・嘉手納宗徳・渡口真清・名嘉順一・糸数兼治・外間守善 『球陽（1743年～1876年編集）』 読み下し編　沖縄文化史料集成５　球陽研究会編　角川書店　昭和57（1982）年５月。
註16．真栄平 房敬 『首里城物語』 ひるぎ社 1991年。
註17．比嘉朝進 『沖縄のサムレー』 風土社 1990年。
註18．當銘由嗣 「高ヨザウリ説話に関する一考察」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』 第25号 読谷村立歴史民俗資料館 2001年。
註19．校注者 外間守善 『おもろさうし』（上・下）全２冊　岩波書店 2006年11月6日第３刷発行。
註20．當眞嗣一・上原　静 「首里城正殿跡の調査」『紀要』第4号　沖縄県教育委員会文化課　1987年。
註21　a. 伊東忠太・鎌倉芳太郎 「B　琉球Riukiu発掘」 『南海古陶瓷』　宝雲社　1937年。
　　b. 鎌倉芳太郎 『セレベス　沖縄発掘古陶瓷』 国書刊行会　1971年。

参考および引用文献

・沖縄県教育委員会　『首里城跡』　歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構調査　1988年。
・沖縄タイムス社　『沖縄大百科事典』　1983年。
・首里城公園基本計画調査委員会　『首里城公園基本計画報告書』 事務局沖縄県土木建築部　1984年９月。
・首里城復元期成会・那覇出版社編集部　『写真集　首里城』　那覇出版社　1987年。
・金城亀信 「首里城「京の内」跡の発掘調査概要」 重要文化財指定記念 特別企画展 『首里城京の内展－貿易陶磁からみた大交易時代－』 沖縄県立 埋蔵文化財センター　2001年３月。

第Ⅲ章　調査の概要

第１節　調査地域

京の内地域については第Ⅰ章第２節でも概略を記したように首里城内でも最も神聖な聖域であった。また、京の内は、首里城発祥の“古グスク”として創建されたとする見解（註１）もある。ここでは京の内の性格について述べることにする。

最初に「京の内」の語義については『おもろさうし』（註２）で「きやのうち」・「けおのうち」・「けよのうち」と表現され、「けお」は「せぢ」の同義語で“霊力”の意味を持つ「きおのうち」は「せぢ“霊力”のある場所“聖域”」（首里城内の聖域）として考えられているようである（註３）。

民俗学の研究によると「きよう」の意味として、知念村の斎場御嶽内にある三庫理に入る右手側の大岩の頂上を“キヨウノハナ”（ギョウノハナ）と称し、大岩直下の香炉から岩の上の“キヨウノハナ”を拝み、香炉の側にあったクバの神木を足掛かりにしてアマミキヨが天降りされたといわれている（註４）。また、仲松弥秀氏は「神の来臨のことであるが、（中略）その前方に微小島が存在する場合は、神は一たんその小島に上陸滞在される。（中略）このような浜前の岩島や小島を、沖縄では「トングヮ」と称しているが、「京」（きょう）と称している村もある。」（註５）と記している。「京」（きょう）という表現に関する民俗事例として名護市嘉陽の集落前面の東方海上にある神が来訪する聖なる小島を“きょう”と称しているとのことである（註６）。

以上のようなことから「京の内」の「きょう」は神が降臨もしくは来訪する場所の意味合いと「うち」は“聖域”・“区域”などの意味もあることから「京の内」は神が降臨もしくは来訪する聖域として位置づけて整理ができるようである。その他に首里城の立地する丘陵一帯が、「京の内」と称されていたともいわれている（註１・７）。

首里城「京の内」については、「首里城古図」（註８）や「首里城略図」（註９）などの古絵図や『おもろさうし』・『琉球國由来記』（註10）などの文献がある。これらの資料や古絵図などから「京の内」地域には、御嶽と家屋型の建物２棟の他に四・五条の区画石積みが確認される。

古絵図の描かれた時代差によっては御嶽が８基程度存在する時期もあったようであるが、基本的には５基（第11図）の御嶽で構成されていたものとして解釈がなされるところである。

「京の内」の五つの御嶽として、“京の内之三御嶽”（神名アガルイノ大御イベ、ソノイタジキノ御イベ、シキヤヂシキヤダケノ御イベの三神）と称される三つの御嶽と真玉森御嶽（神名玉ノミヤノ御イベ）・首里森御嶽の二つの御嶽である。京の内の御嶽構成は５基の御嶽が基本的なパターンとみられる。この五つの御嶽の内、“京の内の三御嶽”が北西側の平坦地から緩い傾斜地にあったようである。真玉森・首里森の両御嶽は南側の内郭石積み沿いや石灰岩丘陵頂部（標高135m）に存在していたようである。“京の内之三御嶽”の神名を『琉球國由来記』（註10）から共通の神名の有無を検索したところ久志間切嘉陽村の濱板敷御嶽の神名がソノイタジキノ御イベであった。“京の内之三御嶽”のひとつの御嶽と神名が一致していることが判った。将来において名護市嘉陽の濱板敷御嶽での祭祀を含めた研究をとおしてソノイタジキノ御イベがどのように嘉陽の濱板敷御嶽から京の内の御嶽へ来訪するのかを解明することができる鍵となるかもしれない。ところで北部のソノイタジキノ御イベが南下して首里城へ来訪するとなれば、第一・第二尚氏が伊平屋と伊是名を出自としているため、名護市嘉陽の濱板敷御嶽と京の内之三御嶽との関係が解明されれば、琉球王国の祭祀や儀式を紐解くことのできる興味深い結論が導き出せるのではないだろうか。

首里城は聖名を“首里森グスク”あるいは“真玉森グスク”と称されるのは、京の内に所在した首里森御嶽・真玉森御嶽の名に由来するようである（註11）。両御嶽の中でも首里森御嶽は、沖縄の開闢神であるアマミキヨがつくられた御嶽とされ、御嶽の前庭に“キャウノ内ノ前ノ御ミヤ首里ノ御イベ”があったようである。この首里森御嶽では降臨神である天神または陽神のキミテズリ（君手摩）の神を琉球王国高級神女三十三君と最高神女である聞得大君を中心に歴代琉球国王に“世おそうせぢ”（世を治める霊力）が高まるように“オボツ・カグラ”と“ニライ・カナイ”の神に祈願し、託宣を下した御嶽でもあったようである（註12）。

真玉森御嶽については、『球陽』（註13）巻二 尚徳王の項に「附 腓城由来」に次のように記載されている「遺老伝に説く。尚徳王薨じ世子幼冲にして国人皆叛く。王妃・乳母、世子を擁着して以て乱難を避け、皆真玉城に隠れる。軍兵追ひて之を弑し、遂に之れを王城巖下に葬る。」と記載されていることから、尚徳王の王妃・世子らが隠れた場所が、京の内の平成７・８年度に実施した洞穴が該当するのではないかと考えられる。この洞穴が『球陽』に記載された真玉森城、即ち真玉森御嶽ではないかと推定される（第10図）。

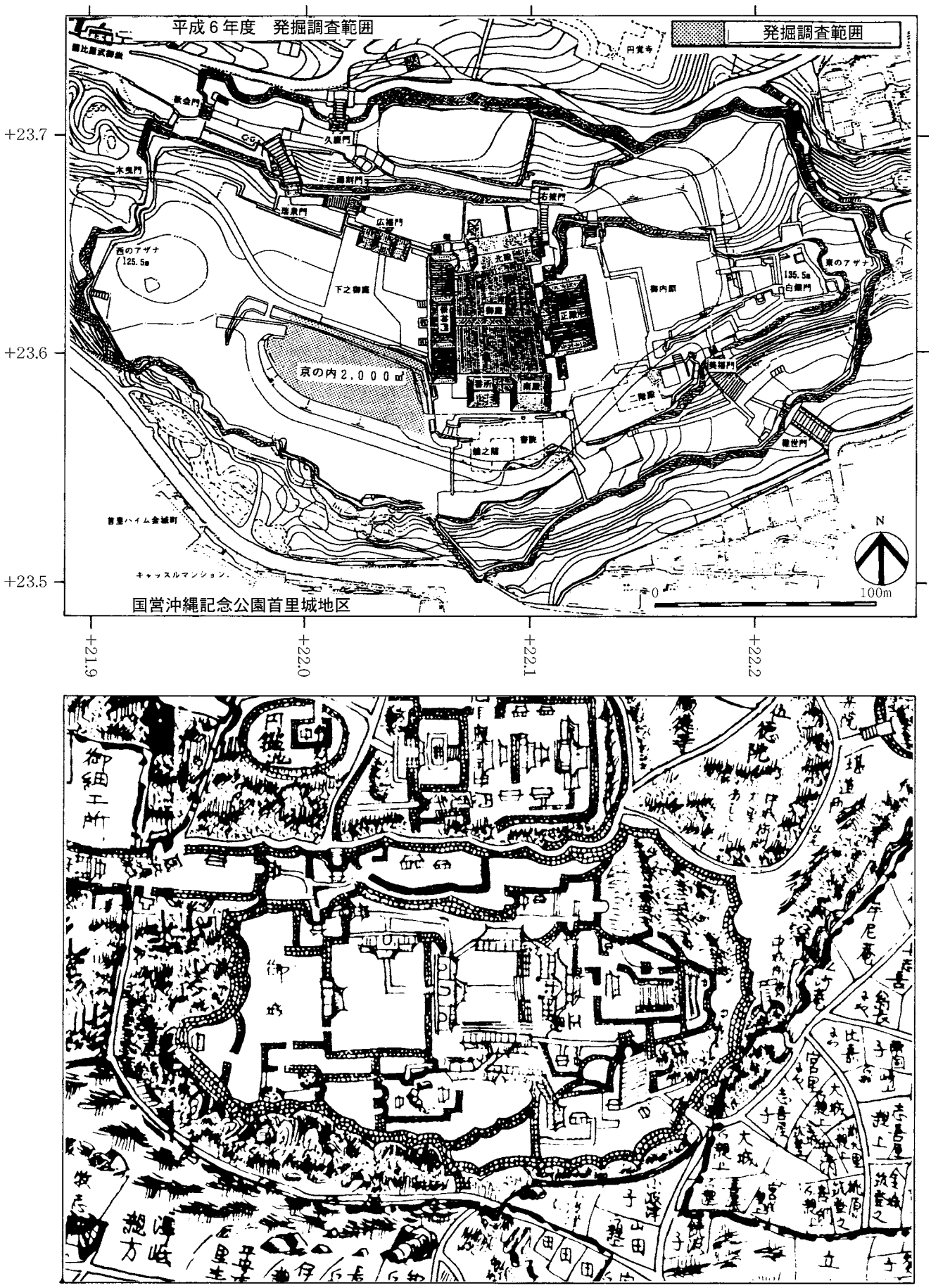
ところで宮城栄昌氏は「神女は沖縄社会の政治的発展に即応してカミ→ノロ→キミの順序で発生し、キミ（君）は少なくとも神女の政治的組織化が進んだ段階に現れたもので、中央集権制国家が確立した尚真王代（1477年～1526年）のころの『おもろさうし』では、ほとんどの神が君と化している。」（註14）と記している。首里森御嶽の降臨神キミテズリ（君手摩）は、聞得大君を中心とする三十三君の君々に神が乗り降って琉球国王へ神託を伝えたパターンが完成するようである。三十三君の大部分は王室関係の女性であったようである。従って歴代の琉球国王と京の内の神事などを掌る高級神女組織とは密接な祭政一致の関係にあったことが推察される。

ところで第一尚氏王統（1406年～1469年）の最高神（神女）は佐司笠（さすかさ）であったが、第二尚氏王統（1470年～1879年）には、その地位を聞得大君に譲るが、佐司笠の地位は依然として高い神格であったようである（註15）。15世紀中頃まで京の内での祭祀や儀式において、その最高神は佐司笠であったことが理解されるところである。

京の内については、『中山世鑑』（註16）にあるように察度が1392年（洪武25年）に数十丈の高楼“高ヨザウリ”（高世層理殿）を造り遊観したことが記されている。高世層理殿については、第Ⅱ章第２節で詳細に記してあるので参照されたい。高世層理殿の位置については、『琉球國由来記』（註10）に高ヨザウリは下之御庭の南側にあって、北方に向いていたと記載されていることから京の内地域で物見のできる高台は、南側の標高135mにある首里森御嶽のあった一帯に高楼があったものと考えられる。平成７年度の遺構確認調査で礎石と瓦溜まりなどが検出されている（第10図）。この礎石や瓦溜まりの遺構が高世層理殿の建物基礎として考えられる。この建物基礎（礎石、瓦溜まり）などが、1392年に察度が遊観した高世層理殿の基礎なのか、或いは1576年の家譜資料（註３）にみえる天界寺が失火し、その火の手は城内の高楼に燃え移った際の高楼（高世層理殿）の礎石のいづれかに該当するものとして考えられるところである。

京の内の区画石積みや御嶽の位置が変更された時期として、1453年（尚金福4年）に起きた王位継承をめぐる志魯・布里の乱の直後と1470年（尚円元年）の第二尚氏王統の始まりの直後、そして、1576年の失火した高楼（高世層理殿）の取り壊しなどによって「京の内」の区画石積みや御嶽の再建と位置の変更がなされたのかもしれないところである。

京の内の性格を概略的に述べたが、平成６年度の調査地区は、京の内の総面積約5,000㎡の内の北側部分約2,000㎡を対象とした。当該地域を京の内の北側に位置することから発掘調査地域を「京の内北地区」として仮称した（第４図上段）。平成７年度の発掘調査地域は、京の内の南側に位置することから「京の内南地区」、平成８年度の調査地域を京の内の西側に位置することから「京の内西地区」と仮称している（第11図）。



第４図　発掘調査地域（上段）と『首里古地図』（1700年）（下段）

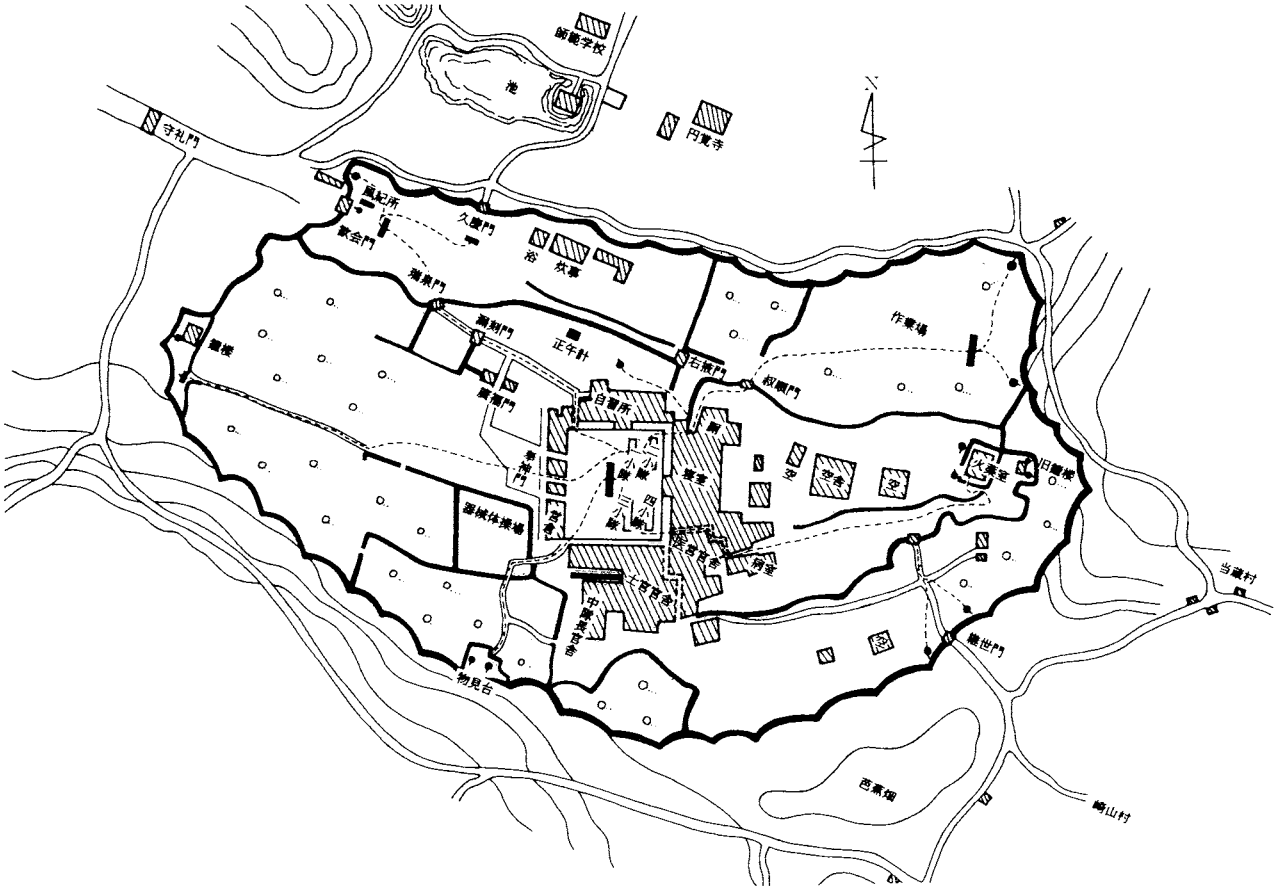
「琉球国絵図資料集第三集付録」1994年より複写：原図は沖縄県立図書館所蔵

註文献

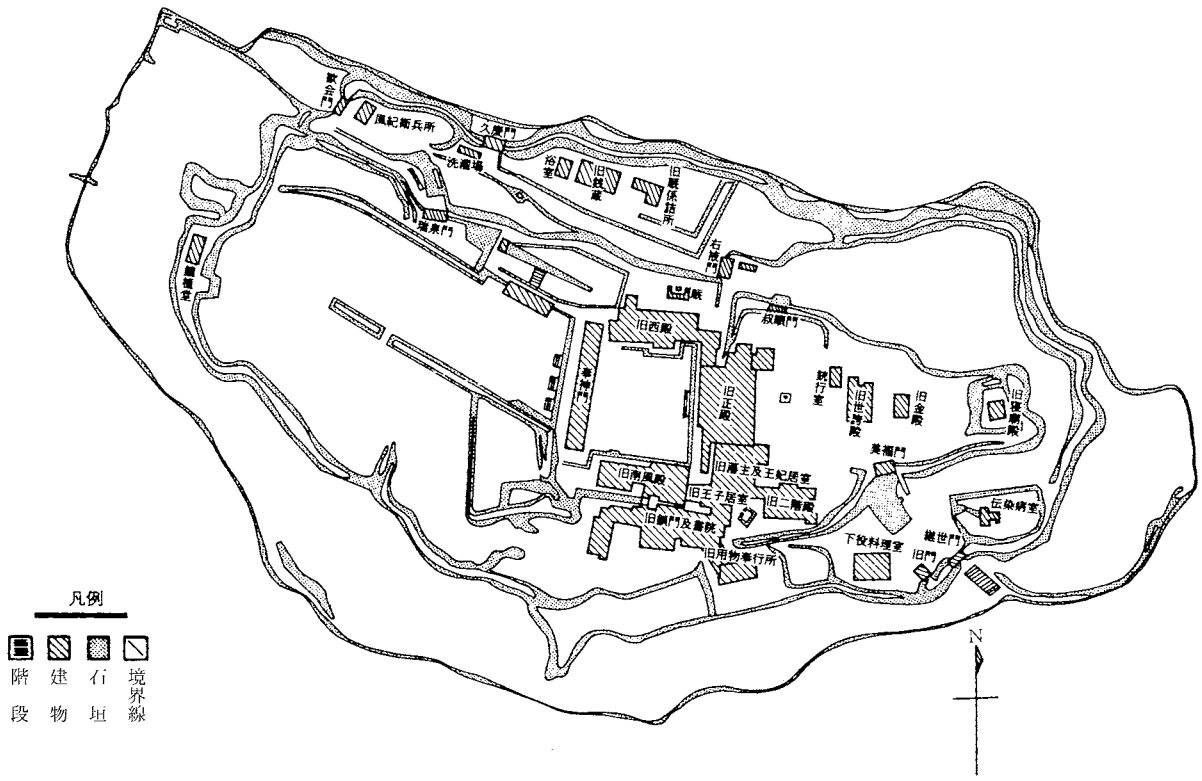
註１．首里城研究グループ『首里城入門－その建築と歴史－』ひるぎ社　1991年。
註２．外間守善・西郷信綱「おもろさうし」『日本思想大系』18　岩波書店　1972年。
註３．註１・２に同じ。
註４．仲松弥秀「新垣孫一翁よりの聞き書き」『知念城跡・斎場御嶽及び周辺整備基本構想・基本計画』1993年。
註５．仲松弥秀（三、来訪神の経路）「南島の海神祭」『古層の村』沖縄民俗文化論　タイムス選書４　沖縄タイムス社　1977年。
註６．平成９年に沖縄県教育庁文化課民俗文化財指導主事の桃原茂夫氏より教示を戴いた。
註７．真栄平房敬『首里城物語』ひるぎ社　1991年。
註８．加藤三吾『琉球の研究』文一路社　1906年。
註９．鎌倉芳太郎『セレベス　沖縄発掘古陶瓷』国書刊行会　1975年。
註10.「琉球国由来記」『琉球史料叢書』　第２巻　東京美術　1972年。
註11－a．伊波普猷「三、きみよし考－守護神の成長に関する試論－」『伊波普猷選集』下巻　沖縄タイムス社　1962年。
b．平敷令治「首里森グスク」『沖縄大百科事典』中巻　沖縄タイムス社　1983年。
c．平敷令治「真玉森グスク」『沖縄大百科事典』下巻　沖縄タイムス社　1983年。
註12．平敷令治「きみてづりのももかほうごと」『沖縄大百科事典』　上巻　沖縄タイムス社　1983年。
註13．島尻勝太郎・嘉手納宗徳・渡口真清・名嘉順一・糸数兼治・外間守善『球陽』読み下し編　沖縄文化史料集成５　球陽研究会編　角川書店　1982年。
註14．宮城栄昌「三十三君」『沖縄大百科事典』上巻　沖縄タイムス社　1983年。
註15．宮城栄昌「佐司笠」『沖縄大百科事典』中巻　沖縄タイムス社　1983年。
註16．沖縄県教育委員会『重新校正 中山世鑑』1982年。

参考文献

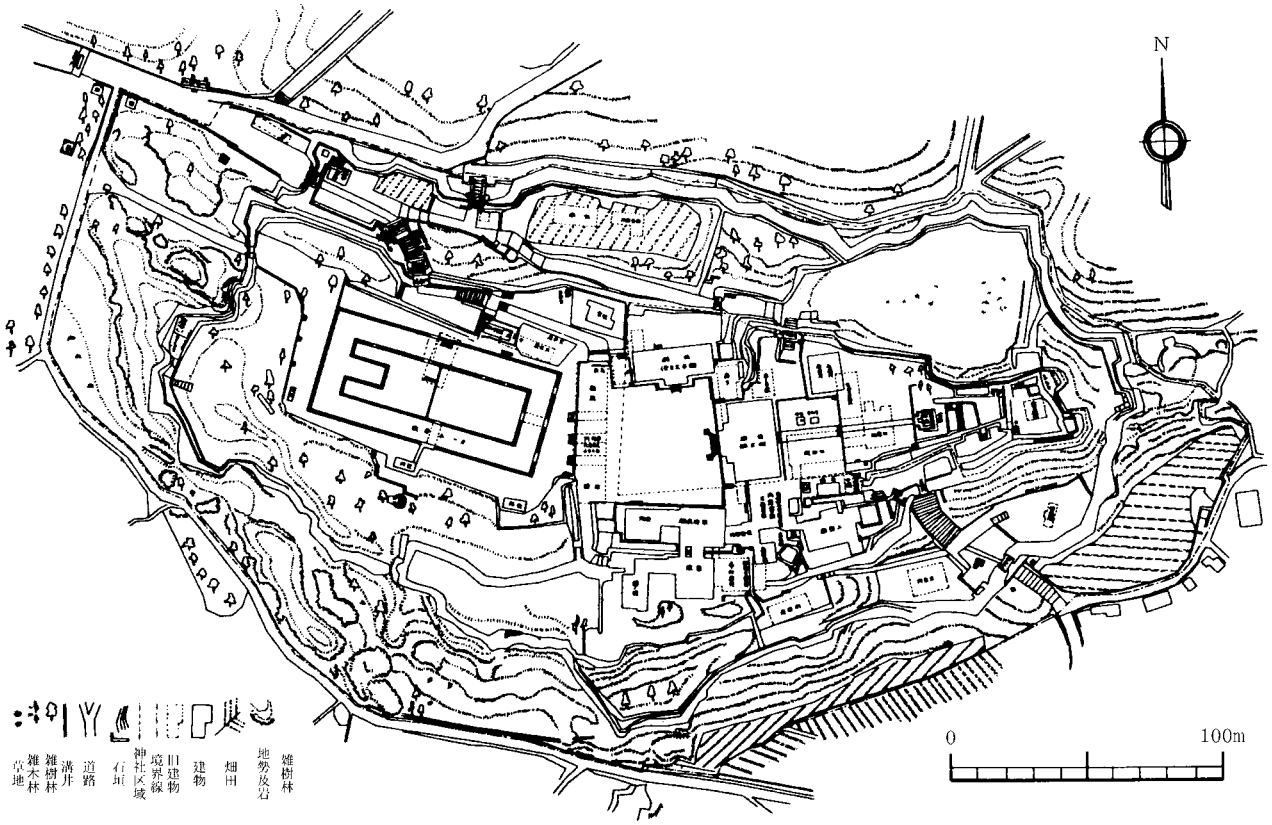
・仲松弥秀　『神と村　－沖縄の村落－』　伝統と現代社　1968年。
・沖縄県教育委員会『首里城跡－南殿・北殿跡の遺構調査報告－』1995年。
・社団法人 日本公園緑地会「平成11年度 首里城京の内地区調査検討会（第１回）説明資料」1998（平成11）年12月10日



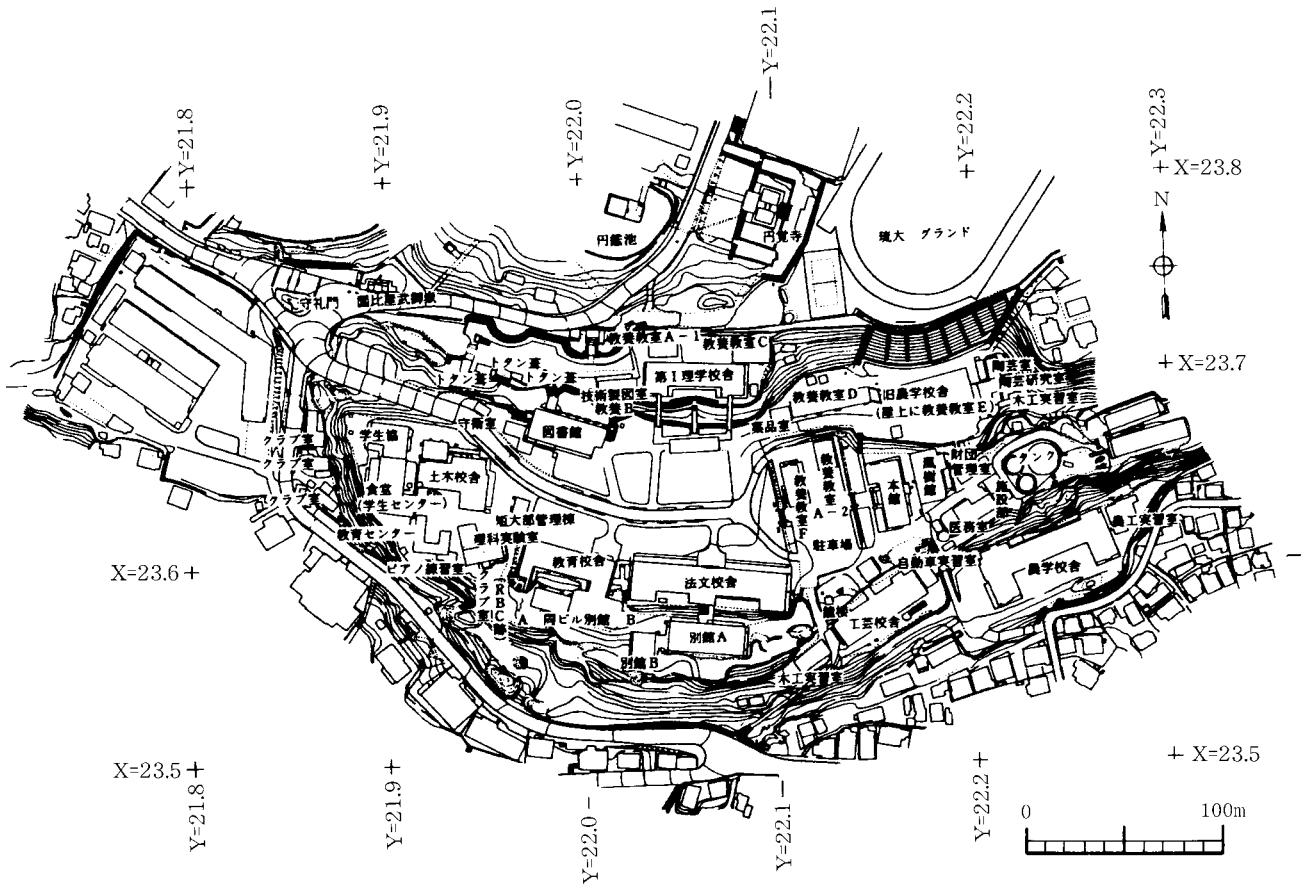
第５図　首里城熊本鎮台沖縄分遣隊配置図（1893年）
『首里城跡』（1995年より複写）原図は沖縄県史編集室蔵（方位のみを加筆）



第６図　首里城平面図（島袋良徳氏所蔵）『首里城跡』（1995年より複写）



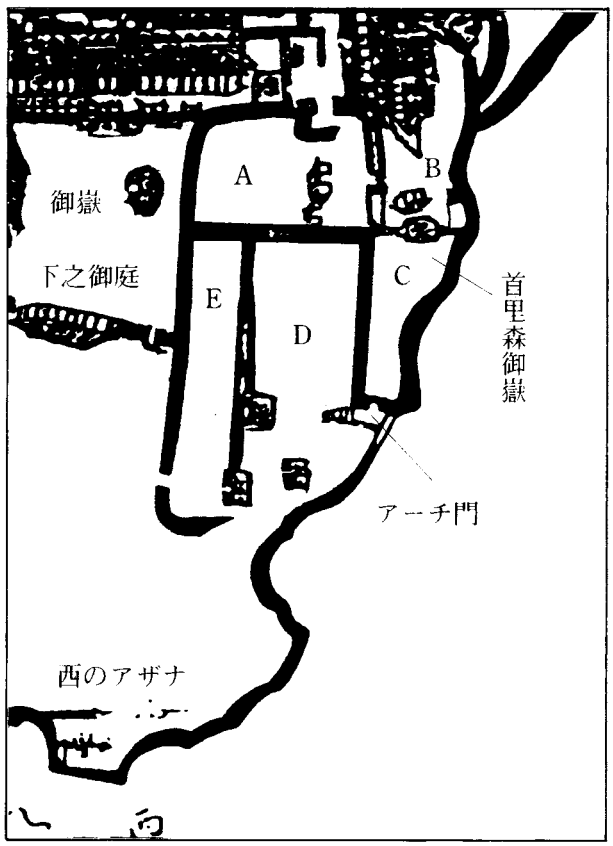
第７図　首里城平面図（昭和６年頃）『首里城跡』（1995年より複写し、スケールを加筆する）



第８図　旧首里城跡図（旧琉球大学校舎配置図）
『首里城跡』（1995年より複写し、座標とスケールを加筆する）

図A　首里城京の内空間の変遷

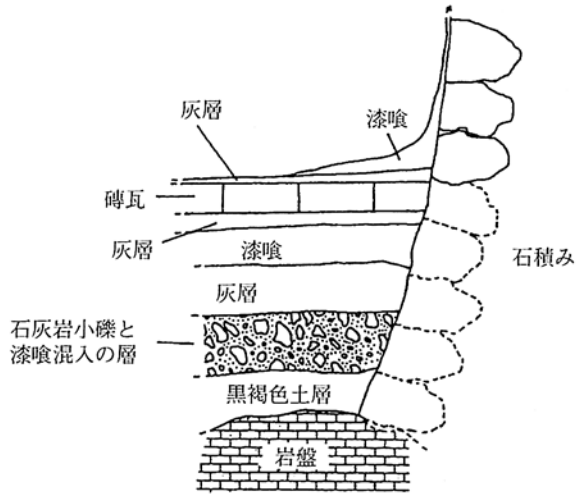
①『首里城古絵図』（1703年～1707年か）
②『首里古地図』（1700年、1854年）
③『琉球建築』（1937年）
④『首里城熊本鎮台分遣隊配置図』（1893年）
⑤『貳百年前首里城鳥瞰図』



図B『首里城古絵図』
（1703～1707年か）に修正・加筆

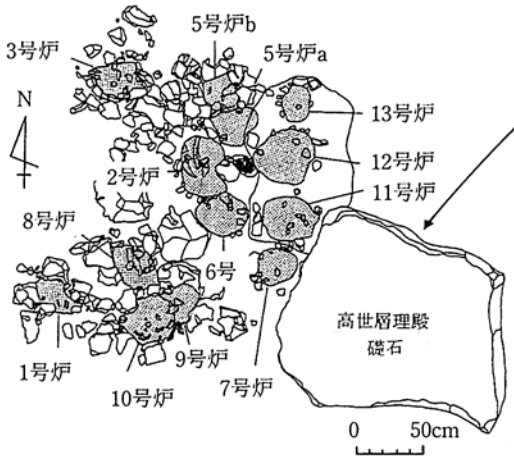
第9図　首里城京の内の空間変遷（特別企画展『首里城京の内展－貿易陶磁からみた大貿易時代－』沖縄県立埋蔵文化財センター　2001年3月より転載）

図A：1459年失火の倉庫跡（SK01）検出直後の状況（平成６年度）

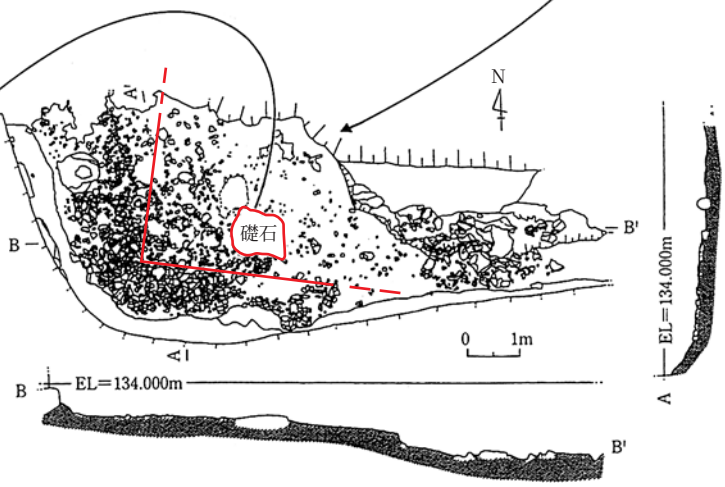


図C：洞穴内遺構（SX01）真玉森御嶽洞穴内部の土層模式図（平成７年度）

図B：G-15の遺構平面　洞穴（SX01）
高世層理殿跡（SB02）（平成７年度）

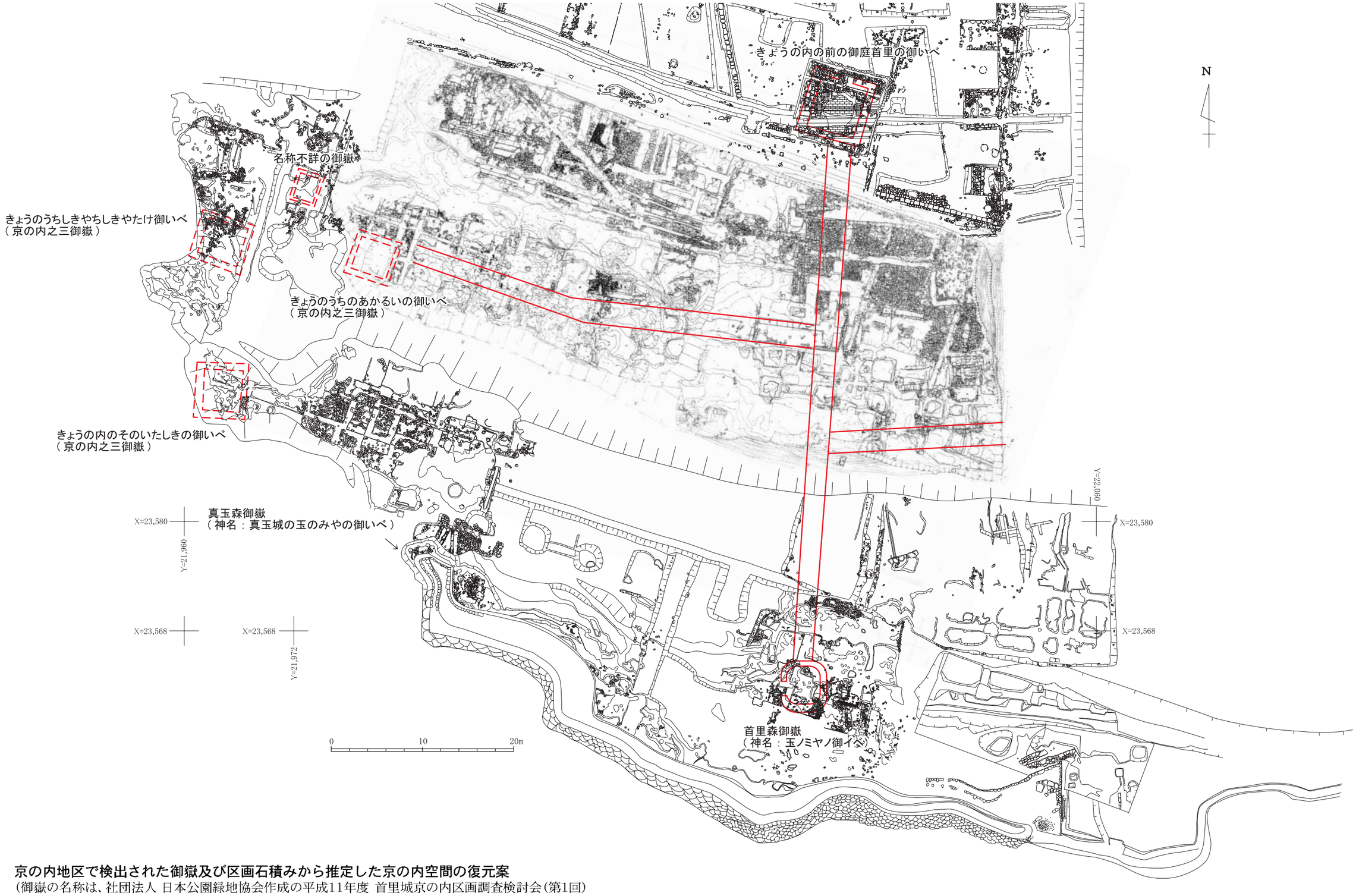


図E：G-15の第３層面検出の
小鍛冶群（青銅滴が出土）（平成７年度）



図D：G-15の第２層面検出の高世層理殿跡（SB02）（平成７年度）

第10図　旧首里城京の内地区の平成6・7年度の主要遺構
（図D：朱線は高世層理殿跡の南西隅、朱色の囲いは高世層理殿跡と礎石）



第11図　京の内地区で検出された御嶽及び区画石積みから推定した京の内空間の復元案
（御嶽の名称は、社団法人 日本公園緑地協会作成の平成11年度 首里城京の内区画調査検討会（第1回）
説明資料 平成11年12月10日を参考に修正した）

第２節　調査区の設定

平成6年度の京の内跡の発掘調査地区は、第Ⅰ章第4節でも記したように京の内北地区2,000㎡が発掘調査の対象となった。首里城地下には昭和20年（1945年）アジア・太平洋戦争末期に起きた沖縄戦の際に第32軍司令部壕が昭和19年（1944年）に構築されたことにより米軍の集中砲火を受けている事から事前に調査区内に不発弾等の有無確認を目的とした磁気探査を実施し、磁気異常のあった61箇所（第２表）について調査員立ち合い（グスク時代～近世期の金属製品が反応する）の基で異常箇所の掘削を行った。

磁気探査の磁気異常箇所の有無を確認し終了後に本格的な発掘調査を平成6年11月21日から開始して、平成7年の３月28日までの約５ヶ月間実施した。

発掘調査で検出された遺構のプランを基に京の内の復元整備の計画がなされるため遺構保護を目的として、調査地区内全域に保護砂の白砂を厚さ10cm～15cmを敷きならした後に廃土で埋め戻した。

埋め戻しによって遺構の位置関係が直接的に把握ができなくなるので、調査地区及びその周辺に基準点測量の三点（基－１、基－２、基－３）を測量業務に委託した。基準点の成果は下記のとおりである。

	X＝23622.856		X＝23594.909		X＝23606.382
基－１	Y＝21998.541	基－２	Y＝21985.276	基－３	Y＝22047.613
	H＝125.009m		H＝126.486m		H＝125.054m

グリッドの設定は、１グリッドの規模が10m×10mを単位とした。基準となった杭は下之御庭の南側にあった東西に延びるコンクリート製側溝の南側縁より50cmの地点に基準杭Ａ－11を設定した。以下、側溝と平行させながら東西方向に10m間隔でＡ－12からＡ－17の杭を設定した。南北方向には基準杭Ａ－11からＡ－17を視準し、これを軸線としてＡ－17からW90° 0′ 00″ Ｓに振って10m間隔でＢ－11・Ｃ－11・Ｄ－11の杭を設置し、グリット番号は東から西へ10・11・12･･･と数字を冠した。グリッドの番号はアルファベットを採用し、北から南へＡ・Ｂ・Ｃ･･･とした。グリッド名は記号と番号を組み合わせてＡ－10・Ｂ－10･･･と標記した。グリッド名はグリッド内の東南隅に冠して、将来の調査に使用できるように設定した（第12図）。

基準杭Ａ－11とＡ－17を結ぶ軸線（南北基準座標軸N° 19′ 00″ Wに偏る座標軸）からW180° 0′ 00″ Ｅへ振って、Ａ－11から東側へ170cmの箇所にある奉神門基檀と丁度、かち合うように基準杭Ａ－11を設定した。

調査地区の北東のＡ－11、北西のＡ－17、東南のＤ－10、南西のＤ－18の4点のＸ座標とＹ座標については、写真測量図の読み取りから下記の結果が得られた（第12図）。

Ａ－11（X＝23604.474　Y＝22047.078）　　Ａ－17（X＝23623.565　Y＝21990.239）

Ｄ－10（X＝23572.885　Y＝22047.018）　　Ｄ－18（X＝23598.267　Y＝21971.191）

その他にＡ－11から東側にある奉神門基壇とかち合う接点（170cm）から奉神門南側階段がとり付けられた基壇（階段南側縁と基壇との接点）までの直線距離は６ｍを読み取った。

平成６年（1994）度の京の内跡から検出された遺構については下記のとおりに記号化した。
石積み（SA）……SA01～SA18-A・B、SA19～SA25-A・B、SA26～SA35（37基）
石敷き・塼敷き（SS）……SS01～SS03-A・B、SS04、SS05（６基）
土壙（SK）……SK01～SK03（３基）
溝（SD）……SD01～SD04-A・B、SD05、SD06-A・B、SD07-A・B（10基）
建物（SB）……SB01（１基）
石列（SR）……SR01、SR02（２基）
※検出遺構の合計……（59基）
※記号は必ずしも遺構そのものの性格を示したものではない。将来において遺構番号等の追加がある。
※遺構の配置は写真測量図より縁石ライン等をトレースしたものである。

No.1	A-11	X=23,604.474 Y=22,047.078
No.2	A-17	X=23,623.565 Y=21,990.239
No.3	D-10	X=23,572.885 Y=22,047.018
No.4	D-18	X=23,598.267 Y=22,971.191

第12図　「京の内」跡遺構配置図およびグリッド設定

第Ⅳ章　遺　構

第１節　遺構の概要

Ａ．遺構の種類と概略

平成6年（1994年）度の首里城京の内跡の発掘調査で検出された遺構の種類として、石積み（階段を含む)、石敷き（塼敷きを含む)、土壙、溝、建物、石列などがある。検出された遺構の主軸は、大部分が真北に対し、やや西に振れるものと西よりに振れるもの、二者が存在した（第12図・第13図)。

各種の遺構は、発掘直前に推定された遺構の種類や性格によって記号化し、検出された順に番号を冠したため、建物に付属する溝、石敷き、石積みの外面や内面にも個別に記号と番号を用いた。また、個別の遺構として取り扱っていたものが完掘後に一連の遺構となり、種類や性格も明らかとなった遺構もある（第１表)。これについては古い記号と番号を尊重しながら新しい記号と番号を付して新旧の番号と記号を併用した。

基本的に同一遺構であっても調査時点に冠した記号や番号の改正などは実施しなかった。これは記号や番号の改正などによって図面整理や資料整理（出土した遺物への注記作業の変更など）で時間を費やし、資料整理の進捗に支障を来すことが予想されたからである。遺構の記号は以下のとおりであるが、必ずしも遺構の種類と性格を示すものではないことを付する。

参考までに、県内遺跡で遺構の記号による標記を採用した発掘調査報告書は、佐敷グスク（註１）が初見である。首里城京の内跡の記号標記は、奈良国立文化財研究所が発行した平城宮跡の発掘調査報告書（註２・３）を参考にした。

遺構の種類として石積み（ＳＡ)、石敷き・塼敷き（ＳＳ)、土壙（ＳＫ)、溝（ＳＤ)、建物（ＳＢ)、石列（ＳＲ）の６種類である。以下、遺構別に性格などを略記する。

石積み（ＳＡ）

石積みの大部分はその上部を欠くため上部の構造については不明である。石積みは外面と内面を並行に南北方向や東西方向に配置する区画石積みが主であった。古絵図（第４図・第９図）にみられた区画石積みに空けられた通用門は戦後の造成（岩盤の削平と掘り下げ）で破壊され確認されていない。他に基壇状の建物の縁石や倉庫の壁石などのように外面のみが検出されたものもある。これは石積みの位置変更や幾度となる造成による嵩上げなどで内面が破壊されたためであろう。その他に完掘の結果、階段や階段の脇石積みとして判明した石積みもある。石積みも大半が根石のみが存在する状況にあった。根石は粗加工の切石や野面石に粗い加工を加えたものを用いて造成土盤（遺物包含層を二次的に使用）や削平した岩盤上に直接的に配置し、その上から切石を積み上げているものが主であった。石積みの外面と内面において、外面は切石で、内面が野面積みを用いたものがある。内面に野面積みを用いた理由として、内面側の土盤の仕上げ高が高い位置にあった為、野面石を基礎石として積み上げ途中から設定された土盤近くから切石に変更がなされたからであろう。この方法を用いた例は二例のみ確認されている。

他にも例外的ではあるが野面積みを積み上げ途中から裏込目石の代りに礫混りの土砂を投入する特殊な石積みもあった。

発掘調査の結果、明確な石積みとなったのは、切石積みでは東西方向に延びる石積みが13基（ＳＡ03～ＳＡ06、ＳＡ08、ＳＡ10、ＳＡ14、ＳＡ17、ＳＡ18－Ｂ、ＳＡ25－Ａ、ＳＡ27、ＳＡ33、ＳＡ35）で、南北方向に延びるものは12基（ＳＡ07、ＳＡ11～ＳＡ13、ＳＡ15、ＳＡ18－Ａ、ＳＡ19、ＳＡ20、ＳＡ25－Ｂ、ＳＡ30、ＳＡ32、ＳＡ34）が確認されている。野面積みは1基（ＳＡ24）のみで南北方向に延びていたようである。その他に建物の基壇や建物の縁石が３基（ＳＡ01、ＳＡ02、ＳＡ09)、階段およびその脇石積み３基（ＳＡ16、ＳＡ19、ＳＡ28)、側溝の縁石２基（ＳＡ26、ＳＡ29)、石積みの裏込目石の集石が２基（ＳＡ21、ＳＡ23）があった。以上の36基が石積み（ＳＡ）として取り扱ったものである。

石敷き・塼敷き（ＳＳ）

石敷きは細粒砂岩製（俗称・ニービヌフニ）と琉球石灰岩製の二種類が存在し、板状に薄く仕上げたものである。主に細粒砂岩製のものが主流であった。石敷きの方向は東西方向に途切れながら検出されている。これは後代の造成で破壊されたためである。塼敷きとしたものは塼瓦が敷かれた状態で検出されたのではなく、塼敷きが破壊されたままの状態で検出されたものである。

石敷きの細粒砂岩製のものは建物の縁石と礎石を伴うものであり、建物に付属する取り付けの回廊などの施設であったものとして推察されるところである。石灰岩製の石敷きは側溝の底板であった。

石敷きの細粒砂岩製のものは４基（ＳＳ01、ＳＳ02、ＳＳ03－Ｂ、ＳＳ04）が存在し、建物に伴う一連の遺構とみられた。石敷きの石灰岩製のものは１基（ＳＳ03－Ａ）のみであったが、後述する排水溝と関係し、一連のものとみられる。塼敷きは１基（ＳＳ05）のみで、破壊された状態で検出されている。以上の６基を石敷き・塼敷き（ＳＳ）とした。

土壙（ＳＫ）

手掘りによる掘り込みや自然地形の部分的な落ち込みを利用したものなどを総称して土壙とした。土壙は北西側に集中する傾向が窺え、検出直後に他の遺構と同レベルで確認されたもの、掘り下げの途中から確認されたもの、完掘後に確認されたものの３種類があった。これらの土壙は４基（ＳＫ01～ＳＫ04）が確認されている。ＳＡ19、ＳＡ20、ＳＡ28は完掘後に最終段階で倉庫内部であることが判明し、ＳＫ01と名称を付けたものもある。

ＳＫ02は岩盤の窪みを造成土（遺物包含層を二次的に使用）で埋めたもので、造成土（ＳＫ02）直上にＳＡ15、ＳＡ31の石積みがなされている。

ＳＫ03はＳＡ24の石積みと同レベルで検出されたもので、ＳＡ24の西側を埋めた造成土（遺物包含層を用いる）であり発掘の結果、ＳＡ24の外面の石積みが検出された。以上の４基を土壙（ＳＫ）として処理した。

溝（ＳＤ）

建物や石積みに伴う溝と便所となったものなどをＳＤと記号化した。建物に付属する排水溝で東西方向に延びるものは３基（ＳＤ06－Ａ・Ｂ、ＳＤ07）が存在する。南北方向に延びるものを３基（ＳＤ04－Ａ、ＳＤ05、ＳＤ07－Ｂ）が確認された。他に岩盤を溝状に掘り込んだ現代の建物基礎２基（ＳＤ01、ＳＤ02）や近代～現代の便所跡2基（ＳＤ03、ＳＤ04－Ｂ）が存在していた。以上の10基を溝とした。

建物（ＳＢ）

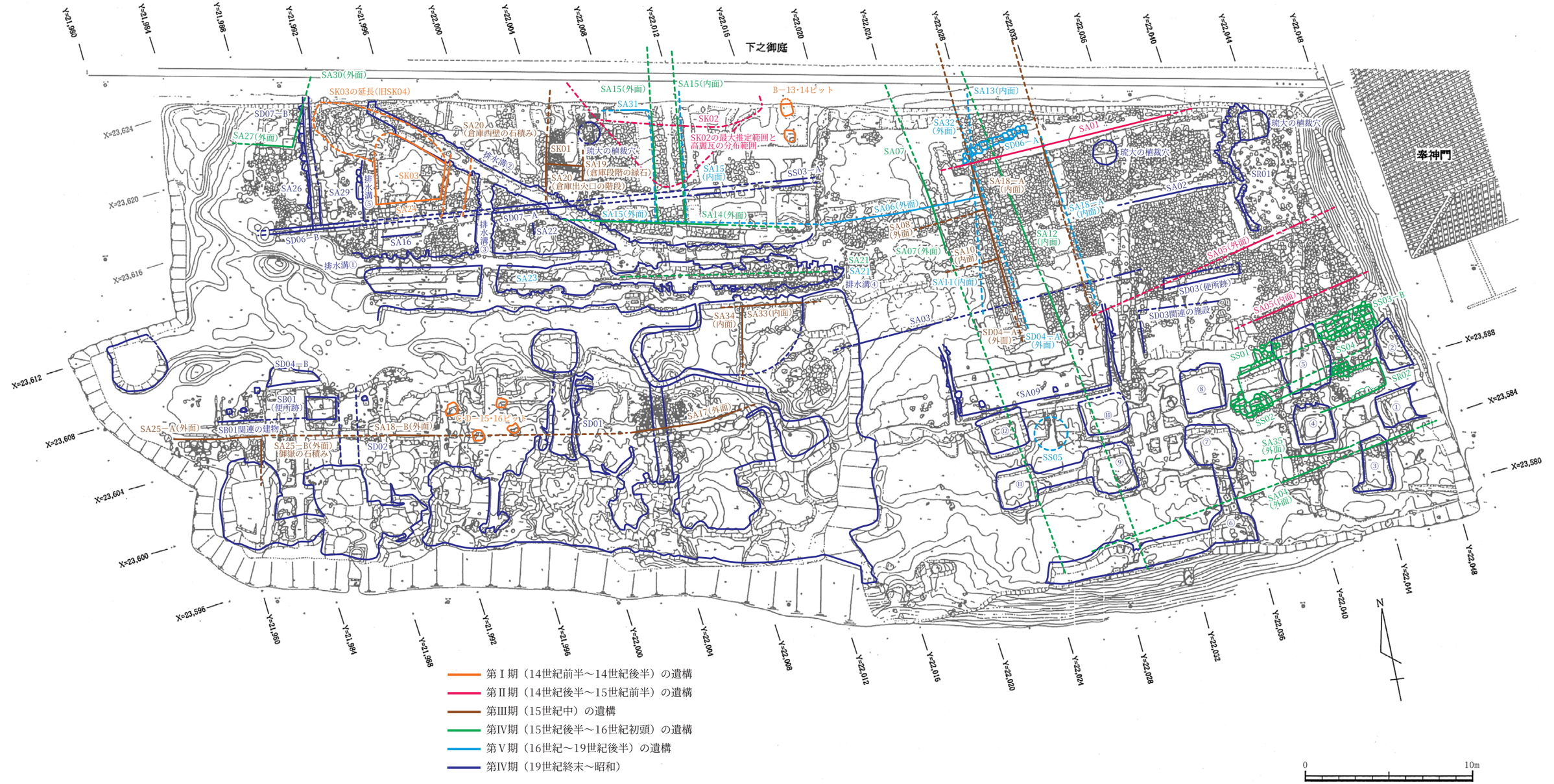
便所の覆い屋や基礎石、縁石、踊り場の施設がセットで検出されたものを建物とした。１基（ＳＢ01）のみであった。ＳＢ01の建物の中にはＳＤ04－Ｂの便所跡が伴っている。

石列（ＳＲ）

擁壁跡の裏込目石や建物の縁石が列状に検出されたものを石列とした。擁壁の裏込目石は北東隅から南北方向に弧状に曲がりながら延びていたもので1基（ＳＲ01）のみ確認されている。建物の縁石は石敷き遺構（ＳＳ01、ＳＳ02、ＳＳ03－Ｂ、ＳＳ04）の東南隅から検出され、東西方向に延びたものが１基（ＳＲ02）のみ検出されていて、前述した石敷き遺構（ＳＳ01ほか３基）と関連する一連のものとみられる。以上の２基を石列（ＳＲ）とした。これら59基の遺構は、繋がりのある一連の遺構もあるが、独自或いは個別の機能を尊重した為、重複するものなども含まれている。大雑把に大別すると以下のa～dまでの４種類に分類と整理ができる。

a. **石積み（30基）**

イ．切り石積み（ＳＡ03～ＳＡ08、ＳＡ10～ＳＡ15、ＳＡ17、ＳＡ18－Ａ・Ｂ、ＳＡ19、ＳＡ20、ＳＡ25－Ａ・Ｂ、ＳＡ27、ＳＡ30、ＳＡ32～ＳＡ35）･･･25基。


下之御庭
奉神門
SA30(外面)
SK03の延長(旧SK04)
SA15(外面)
SA15(内面)
B−13・14ピット
SA13(内面)
SA31
SK02
SK02の最大推定範囲と
高麗瓦の分布範囲
SA32
(外面)
SA01
SD06−A
琉大の植裁穴
SD07−B
SA27(外面)
SA20
(倉庫西壁の石積み)
SK01
琉大の植裁穴
SA19
(倉庫段階の縁石)
SA20
(倉庫出入口の階段)
SA15
(内面)
SS03−A
SA07
SA18−A
(内面)
SR01
SA02
SA26
SA29
排水溝⑤
SK03
SA24
SA15(外面)
SA14(外面)
SA06(外面)
SA08
(外面)
SA12
(内面)
SA18−A
(内面)
SD07−A
SA22
SD06−B
SA16
排水溝①
排水溝③
SA23
SA21
SA21
排水溝④
SA07(外面)
SA10
(内面)
SA11(内面)
SA05(外面)
SD03(便所跡)
SD03関連の施設
SA05(内面)
SS03−B
SA34
(内面)
SA33(内面)
SA03
SD04−A
(外面)
SD04−A
(外面)
SS01
SS04
SR02
SD04−B
SB01
(便所跡)
SA25−A(外面)
SB01関連の建物
SA18−B(外面)
C・D−15・16ピット
SD01
SA17(外面)
SA09
SS02
SA25−B(外面)
(御嶽の石積み)
SD02
SS05
SA35
(外面)
SA04
(外面)
X=23,624
X=23,620
X=23,616
X=23,612
X=23,608
X=23,604
X=23,600
X=23,596
X=23,588
X=23,584
X=23,580
Y=21,980
Y=21,984
Y=21,988
Y=21,992
Y=21,996
Y=22,000
Y=22,004
Y=22,008
Y=22,012
Y=22,016
Y=22,020
Y=22,024
Y=22,028
Y=22,032
Y=22,036
Y=22,040
Y=22,044
Y=22,048
N
第Ⅰ期（14世紀前半～14世紀後半）の遺構
第Ⅱ期（14世紀後半～15世紀前半）の遺構
第Ⅲ期（15世紀中）の遺構
第Ⅳ期（15世紀後半～16世紀初頭）の遺構
第Ⅴ期（16世紀～19世紀後半）の遺構
第Ⅳ期（19世紀終末～昭和）
0
10m

第13図　遺構全体図

ロ．野面石積み（ＳＡ24）･･･１基。
ハ．排水施設を伴う切り石積みと関連する遺構（ＳＤ04－Ａ、ＳＤ06－Ａ）･･･２基。
ニ．拝所の一部となる切り石積みと関連する遺構（ＳＡ25－Ａ・Ｂ）･･･２基。

b. 建物および付属遺構（７棟）
イ．基壇を有する建物の面石（ＳＡ01）･･･１棟。
ロ．排水溝や階段に取り付けられた建物２棟。
１棟目（ＳＡ09、ＳＤ05)、２棟目(ＳＡ26、ＳＤ07－Ｂ、ＳＤ06－Ｂ、ＳＡ16、ＳＡ22、ＳＤ07、ＳＳ03－Ａ)･･･２棟。
ハ．便所を伴う建物遺構は２棟が存在する。
１棟目（ＳＡ02、ＳＤ03)、２棟目（ＳＢ01、ＳＤ04－Ｂ）･･･２棟。
ニ．石敷き・縁石・礎石を伴う遺構（ＳＳ01、ＳＳ02、ＳＳ03－Ｂ、ＳＳ04、ＳＲ02）･･･１棟。
ホ．倉庫遺構（取り付け階段を含む）（ＳＡ19・ＳＡ20、ＳＡ28）･･･１棟。

c. 土壙（４基）
イ．倉庫遺構と重複するＳＫ01（ＳＡ19、ＳＡ20、ＳＡ28）･･･１基。
ロ．土壙直上に遺構が存在するＳＫ02（ＳＡ15、ＳＡ31）･･･１基。
ハ．石積みを埋めたＳＫ03（ＳＡ24）・SK04･･･２基。

d. その他（６基）
イ．塼敷き遺構（ＳＳ05）･･･１基。
ロ．石積みの裏込目石の集石遺構（ＳＡ21、ＳＡ23）･･･２基。
ハ．擁壁の裏込目石の集石遺構（ＳＲ01）･･･１基。
ニ．建物の基礎堀り溝（ＳＤ01、ＳＤ02）･･･２基。

第４表　切石積みの外面と内面の関係

南北方向			東西方向		
No.	外側	内側	No.	外側	内側
①	SD04－AとSA32か	SA18－A	①	SA03	既に消失
②	SA07	SA12	②	SA04	未確認
③	既に破壊され消失	SA13・SA11	③	SA05	SS03－B北側に野面積み
④	SA15（西側）	SA15（東側）	④	SA06	SA10か
⑤	消失	SA25－B（拝所）	⑤	SA08	SA10か
⑥	SA30	未確認	⑥	SA14	既に破壊か。SA21か
⑦	未検出	SA31	⑦	SA21か（既に破壊か）	SA33
⑧	既に破壊され消失	SA32	⑧	SA17・SA18－B	
⑨	既に破壊され消失	SA34		SA25－A	既に破壊
			⑨	SA27	未確認
			⑩	SA35	既に破壊
合計　9基			合計　10基		

以上のように大別すると51基が遺構として整理ができる。更に石積みで切り石積みの外面と内面を対応整理した場合、上記a.イの切り石積みは33基の内ＳＡ19･20を除外すると17基となり、実質的な遺構数は総計39基（第１表）となる。

B．各時期別の遺構

平成６年度の首里城京の内地区の発掘調査時に各遺構の切り合いや遺構周辺のトレンチ内から出土した陶磁器類などを参考にして下記の第Ⅰ期～第Ⅵ期までの６時期（註４）までの試案を試みた。今後、各遺構の切り合い関係や遺構周辺のトレンチ内から出土した陶磁器類を主とする遺物の資料整理が終了しないと正式な時期を絞り込むことができないので暫定的な資料として呈示する（第13図）。

なお、第Ⅰ期～第Ⅵ期までの各時期別の遺構や特徴・規模などについては、『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）－』（註４）に掲載してあるので参照されたい。

第Ⅰ期（14世紀前半～14世紀後半）
第Ⅱ期（14世紀終末～15世紀前半）
第Ⅲ期（15世紀中頃）
第Ⅳ期（15世紀後半～16世紀初頭）
第Ⅴ期（16世紀前半～19世紀後半）
第Ⅵ期（19世紀終末～昭和）

ここでは、前回報告した平成６年度の首里城京の内跡の発掘調査で検出された遺構の分類整理をとおして今後の発掘調査や資料整理に役立てる目的で暫定ではあるが以下に再度、呈示した。

第Ⅰ期～第Ⅴ期までの石積み遺構や建物跡などの配置状況を各期別に記した。なお、首里城跡の復元整備の基本的な考え方は18世紀初頭に再建された正殿を基本（註５）にして、発掘調査によって確認された遺構や古絵図など解析をとおして整備されているので、直接的に関係の薄い第Ⅵ期（19世紀終末～昭和）は対象外であった為、除外した。

第Ⅰ期（14世紀前半～14世紀後半）

① 野面石積み　ＳＡ24　1基
② 土壙　ＳＫ01　1基

第Ⅱ期（14世紀終末～15世紀前半）

① 基壇状建物の縁石　ＳＡ01　1基
② 切石積み　ＳＡ05　1基･･･第Ⅴ期まで存続か。
③ 土壙ＳＫ02　1基

第Ⅲ期（15世紀中頃）

① 南北方向の石積み
・ＳＡ08（外面）とＳＡ10（内面）　1基
・ＳＤ04－Ａ（外面）・ＳＡ32（外面）とＳＡ18－Ａ（内面）　1基･･･第Ⅴ期まで存続。
・ＳＡ34（内面）　1基
② 東西方向の石積み
・ＳＡ17・ＳＡ18－Ｂ・ＳＡ25－Ａ（全て一連の石積みで外面のみ残存）　1基･･･第Ⅴ期まで存続か。
③ 拝所（御嶽）石積み　ＳＡ05（外面）　1基･･･第Ⅴ期まで存続か。
④ 倉庫　ＳＫ01（ＳＡ19・ＳＡ20・ＳＡ28）　1基･･･第Ⅱ期頃から使用か。
⑤ 土壙　ＳＫ02　1基･･･第Ⅱ期まで遡る。

第Ⅳ期（15世紀後半～16世紀初頭）

① 南北方向の石積み
・ＳＡ07（外面）とＳＡ12（内面）　1基
・ＳＡ15（両面）　1基
・ＳＡ30（外面のみ残存）　1基

② 東西方向の石積み
・ＳＡ04（外面）　1基
・ＳＡ14（外面）　1基
・ＳＡ35（外面）　1基
③ 建物　ＳＳ01・ＳＳ02・ＳＳ03－Ｂ・ＳＳ04・ＳＲ02（一連の施設）　1基･･･第Ⅴ期まで存続か。

第Ⅴ期（16世紀前半～19世紀後半）

① 南北方向の石積み
・ＳＡ11（内面）とＳＡ13（内面）　1基
・ＳＡ31（内面のみ残存）　1基
・ＳＡ32（内面のみ残存）　1基
② 東西方向
・ＳＡ06（外面）・ＳＡ10（内面）　1基
・ＳＡ27（外面のみ残存）　1基
③ 石積み裏込目　ＳＡ23（両面欠落）　1基
④ 排水溝　ＳＤ06－Ａ　1基
⑤ 塼敷き　ＳＳ05　1基

今回の報告では、第Ⅲ期（15世紀中頃）の遺構であるSK01（SA19・SA20・SA28）と関連するSA33・SA34についてのみ記述する。なお、当該の遺構の特徴や規模などについては観察表に呈示することにする。

イ．第Ⅲ期（15世紀中頃）（第14図）

この時期に該当する遺構として石積み、土壙、倉庫の三種類がある。石積みは南北方向に延びるものが３基存在し、１基はＳＡ08（外面）とＳＡ10（内面）が対応する。他の１基はＳＤ04－ＡとＳＡ32が外面でＳＡ18－Ａの野面積みの基礎石（捨て石）を二列に配置するものと外面が消失し内面が僅かに残るＳＡ34がある。

東西方向に延びる石積みとして２基が存在する。１基はＳＡ17・ＳＡ18－Ｂ・ＳＡ25－Ａの一連の石積みとみられるもので外面のみ検出されていて、内面は戦後の琉球大学校舎建築時の造成に伴う岩盤を削平した際に破壊されたようである。他の1基は内面のみ残存するＳＡ33である。土壙ＳＡ01は完掘後に仮称したものであり、ＳＡ19・ＳＡ20とＳＡ28は土壙ＳＫ01に包括し、倉庫として判断した遺構である。この土壙ＳＫ01は最終的に1459年の失火で消失した倉庫（註６）などの時期が想定された。倉庫内から出土した一括遺物は古くは14世紀中頃～15世紀中頃までの陶磁器が保管されていたものと推定され、主体となる時期を検討した場合、15世紀初頭～15世紀中頃が予想されるところである。倉庫の使用時期を考えるとすれば第Ⅲ期の1453年以降頃から始まり、倉庫機能の停止時期が第Ⅲ期の1459年頃として考えられるが一応、該期に設定してみた。土壙ＳＫ02は石灰岩の窪みに二次的に包含層を持ち込んだ造成土を主体とするが、下層においては高麗系灰色瓦の破片が多量に包含する層が確認されている。土壙ＳＫ02直上にＳＡ15・ＳＡ31の時期の異なる石積みが存在する点などから第Ⅱ期～第Ⅲ期にかけて存在した遺構として解釈した。今回は、第Ⅲ期の遺構で考古資料の部で国の重要文化財として指定された倉庫跡（SK01）出土の陶磁器518点（註７）及び倉庫跡出土の遺物（指定された陶磁器を含めて倉庫跡から1,162個体と推定）と接合ができた資料が石積みSA33・34の内側から倉庫消失後の火事場掃除後に倉庫跡から持ち出されて廃棄された資料について報告する。その他の遺構（SA08、SA10、SA17、SA18－Ａ・B、SA25－Ａ・B、SD04－Ａ以上の10基）については出土品も含めて後日報告したい。

ここでは、SK01（SA19・20、SA28）と石積みSA33・34について記述する。

C．土壙ＳＫ01（ＳＡ19･ＳＡ20、ＳＡ28）

Ｂ－15グリット内から検出された土壙ＳＫ01（ＳＡ19・ＳＡ20、ＳＡ28）について述べることにする。

土壙ＳＫ01はＳＡ19・ＳＡ20、ＳＡ28の内部を完掘し終えた時点で、北東寄りの壁面近くで新たなる土壙（ＳＫ02）が検出されてきたので区別する意味で仮称したものである。

土壙ＳＫ01は発掘当初、石積みの面石が検出された段階で石積みＳＡ19・ＳＡ20、ＳＡ28として名付けた。三つの遺構がどのように展開するか予想ができなかったのでＳＡ28から南北方向に80cm幅の土層観察用の畦を設定したが遺構の展開を注視しながら掘り下げ途中でＳＡ28寄りの畦が造成土であることが判明したので畦を残した状態で、下位にある遺物包含層直上の遺物を露出させる作業に入った。畦の北側は過去の発掘調査終了時に一部、白砂が敷かれていたので北側の一辺は三角形と歪な形状となっている。

以下、土壙ＳＫ01（ＳＡ19・ＳＡ20、ＳＡ28）の層序と遺構について概略を記すことにする。

1．層序

層序については、土壙ＳＡ01（ＳＡ19・ＳＡ20、ＳＡ28）の北側1m程度にある東西方向に存在する調査区Ｂ－15グリッドの北壁と土壙ＳＫ01内に設定したＳＡ28から北方向に幅80cm、長さ3m40cmで設けた観察用の畦について以下に記す。

①北　壁（第15図）

Ｂ－15グリットで北壁土層の第１層から第３層は平成元年度～平成３年度に仮称：下之御庭地区（下之御庭跡・用持座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡）の発掘調査（註８）を実施した際に埋め戻した土砂と公園整備で使用した客土である。第３層は調査終了時点に投入した白砂であり、将来の発掘調査に備えて調査をスムーズに進行させる目的と下部にある遺構保護の為に目印として敷いたものである。第６層の暗褐色混礫土層を掘り込んだ石積みＳＡ31は東側から延びてきて途中で切れている。石積みＳＡ15の北西隅上部からＳＡ31が延びているような状況にあった。第７層は赤色土で部分的に堆積した土層で厚さが２cm前後と薄い。持ち込みによる造成土の一部とみられる。第８層はＳＡ15の石積みの下位にあり、石積みを安定させる目的で敷きならした土盤材の一種として考えられた黄褐色の礫層である。本層直下にある第９層は黒褐色土層で高麗系灰色瓦（高麗瓦）の破片が多量に出土した層であり、第９層より下位の層序は土壙ＳＫ02と仮称した。このSK02の第９層直上よりＳＡ15の根石が設置されていた。

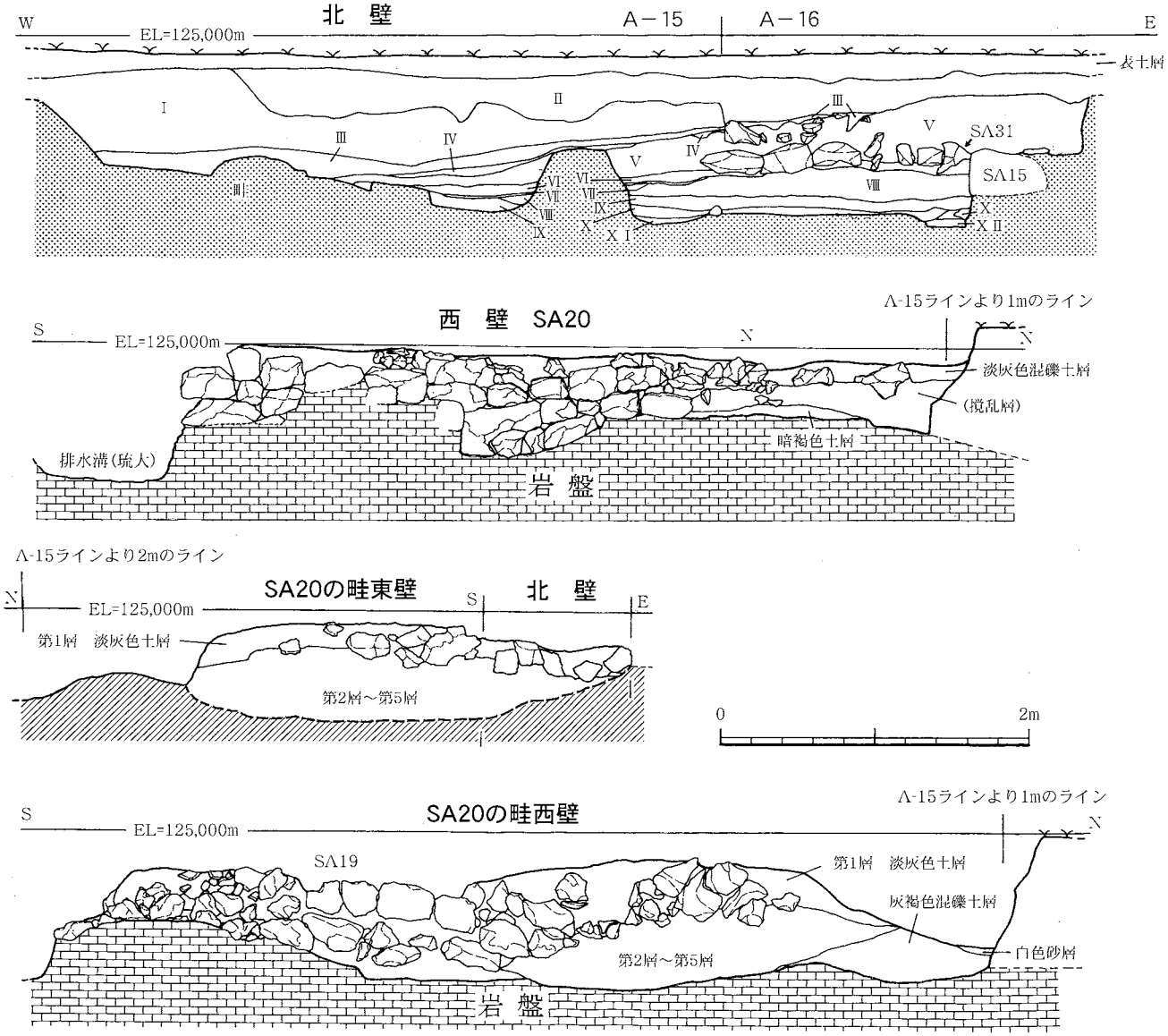
② 畦（第15図）

図化した畦はＳＡ28の中央付近に設定した幅80cm×長さ340cmで、上述した北壁にすり付けて設定した。畦と北壁面とは畦北側が過去の発掘調査の際に切ってしまったようであり、北壁と畦の層序は合致しなかった。しかしながら土壙内から出土した多量の遺物を露出させながら北壁近くまで追い掛けた結果、北壁の第９層中に含まれていた高麗系灰色瓦（高麗瓦）が灰褐色の混礫土層（造成土が部分的に入る間層）を挟んで、間層直下から北壁でみられた第９層に含まれた高麗系灰色瓦（高麗瓦）の破片が多く検出されてきたため、第９層よりも灰褐色の混礫土層や土壙ＳＫ01は後代のものであることが判明した。

畦は第１層が淡灰色土層で下部に石灰岩の小礫が集中し、大振りの石は畦上面からその一部が露出していた。淡灰色土層中には僅かではあるが赤土が持ち込まれて敷かれている状況が窺え、造成土の一部であることが判明したのでそのまま下層にある土壙ＳＫ01内の遺物の検出（第16図）に入り遺物の拡がりを確認してから掘り下げた。土壙ＳＫ01内の露出させた遺物の大半は二次的に火熱を受けた状況にあることが判明した。多量の遺物が含まれた包含層中には土砂の堆積がなく遺物のみであった。発掘調査を慎重に実施する目的で僅かに遺物包含層に含まれた僅かに残った砂の色合いの変化を基に第２層から第５層までに分けたが完掘後に層を観察した結果、任意に分けた層は一枚の包含層であることが判明したので短期間に一括で廃棄された包含層であることが事実として確認できた。

第Ⅲ期(15世紀中頃)
石積み　SA08(外面)・SA10(内面)、SD04－A(外面)・SA18－A(内面)、SA17(外面)・SA18－B(外面)・SA25－A(外面)、SA33・34(外面)
御嶽石積み　SA25－B
倉庫石積みおよび階段　SA19・20、SA28
土壙SK01(倉庫内部)
＊土壙SK01、石積みSA19・20、SA28は1459年に失火した倉庫のひとつとみられる。

第14図　京の内北地区第Ⅲ期（15世紀中頃）遺構の推定復元



第15図　層序（A－14・15グリット北壁とSA28の畦）

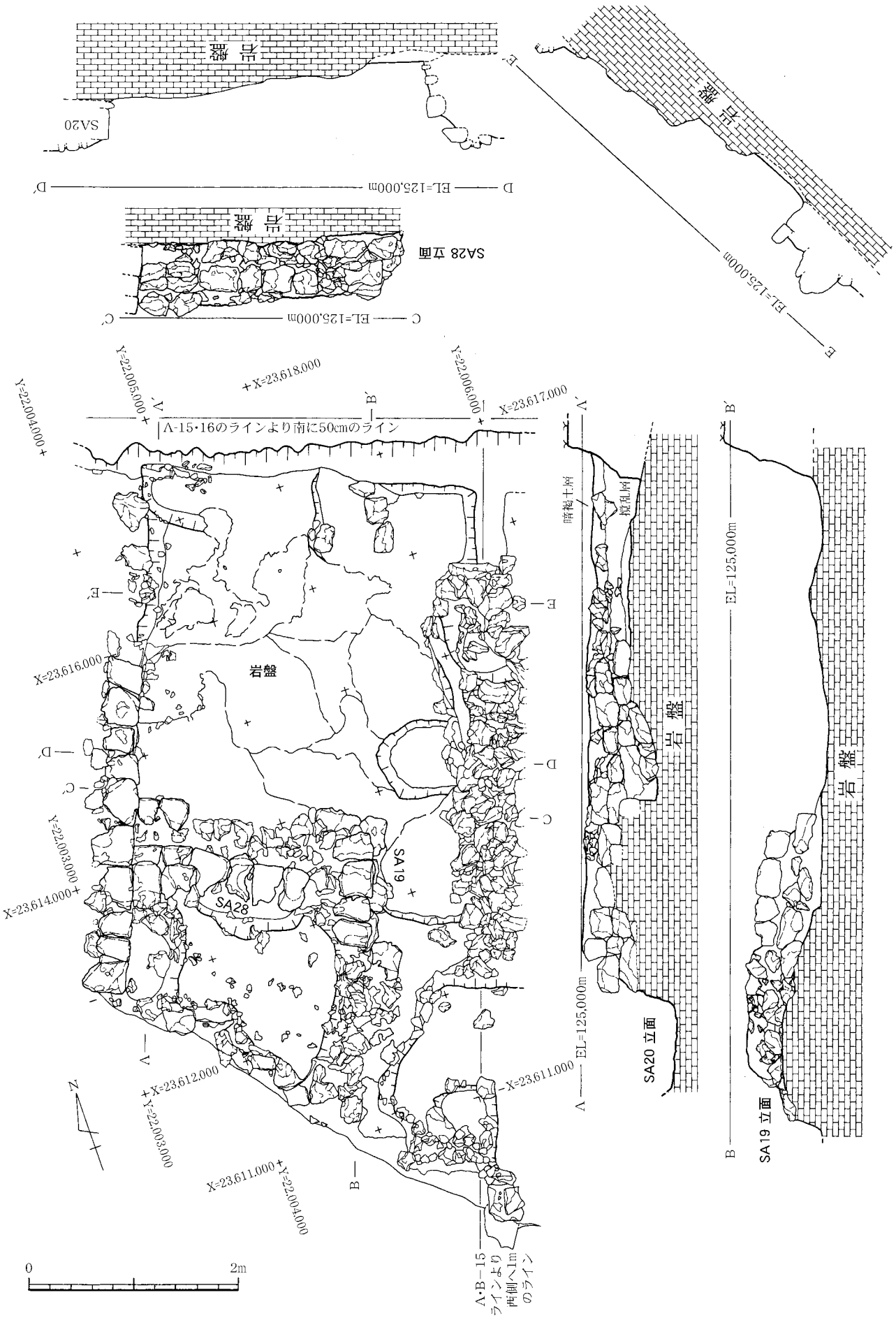
A－14・15グリット北壁

表土層　芝及び腐養土
Ⅰ（第１層）　淡褐色混礫土層(客土)
Ⅱ（第２層）　暗褐色混礫土層(客土)
Ⅲ（第３層）　白色砂層(平成２年の客土)
Ⅳ（第４層）　暗褐色土層
Ⅴ（第５層）　茶褐色混礫土層
Ⅵ（第６層）　暗褐色混礫土層
　(SA31の基礎土盤)
Ⅶ（第７層）　赤色土層(造成土)
Ⅷ（第８層）　貴褐色礫層
　(SA15の根石を安定させた土盤材
　および基礎土盤)
Ⅸ（第９層）　黒褐色土層
　(高麗瓦の破片を多く含む包含層)
Ⅹ（第10層）　暗褐色混礫土層
　(第２層より黒味を帯びた土層で
　本層をSK02と仮称)
ⅩⅠ（第11層）　暗褐色土層
ⅩⅡ（第12層）　赤褐色土層（地山）

SA28の畦（東壁・西壁）

第１層　淡灰色土層（1459年の倉庫失火直後の客土）
第２層～第５層　土砂が存在しなかった遺物包含層
　（土壙SK01）
灰褐色混礫土層（A－14・15の第９層黒褐色土層の
　上に堆積した土層）
白色砂層（平成２年に投入した遺構保護と発掘調査
　の目印用の白砂）

第16図　B－15　土壙SK01（SA19・20、SA28）内の遺物検出状況



第17図　B－15　土壙SK01（SA19・20、SA28）の完掘後の石積み立面及び断面

２．遺　構

Ｂ－15グリットの土壙ＳＫ01（第17図）は完掘後に仮称したことについては前記したとおりである。ＳＡ19は完掘の結果、ＳＡ28の側面の脇石石積みであることが判った。ＳＡ28は階段であり、階段は北方向に下るもので段数は三段を数えた。最下段の石積みは踏面長42cm、石積み高さ（蹴込み高）18cmと他よりも長い。二段目は踏面長14cm、蹴込み高13cmと最も小規模であった。最上段は踏面長が30cm＋Ｘ、蹴込み高23cmを測った。ＳＡ28が階段遺構であることが確認されたためＳＡ19は階段東側の脇石であることが判断された。ＳＡ20はＳＡ28の階段にすり付けられていて、北端と南端が破壊されている。ＳＡ20の外面は火熱を受けて縁石が脆くなり、石内部に罅が入り易い状況にあった。結論としてＳＡ19・ＳＡ20、ＳＡ28の外面から出土した多量の遺物から倉庫施設として判断された。ＳＡ19・ＳＡ28が階段であり、ＳＡ20が倉庫内部の西壁であったものとみられた。倉庫内部の床面の状況については、遺物が岩盤直上まで堆積していたため判らなかった。

なお、当該遺構の規模や主軸方向などについては第Ⅲ期（15世紀中頃）遺構観察一覧に呈示した。

第５表　第Ⅲ期(15世紀中頃)遺構観察一覧

地　区 遺構番号 挿図番号	遺構残存長 残　存　幅 残　存　高	遺　　構 性格･形状･工法･機能の推定時期など	遺 構 の 主軸方位	石 積 み 種　　類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚み 控え長 (cm)	備　　考 (関連遺構・遺構の重複)
B-15 ＳＡ19 第14図	1m17cm 39cm 65cm	琉球王国時代の倉庫階段の東側縁石。南北方向に短く残る。岩盤上に基礎となる野面石や栗石を用いた石積み。15C中頃。	N24°15'E	切石積み 90°	22～36 20～26 34～39	SA20とほぼ同一方向にありSA28の階段の東縁の石積みであった。SA20、SK01と関連。
B-15 ＳＡ20 第14図	3m17cm 50cm 63cm	琉球王国時代の倉庫西壁の石積み。南北方向に延びているが、両端が欠落。岩盤を一部成形し、直接岩盤上に石積み。石積みは小振りのものを多用し、横目地がとおる箇所が存在する。15C中頃。	N22°15'E	切石積み 90°	14～51 8～33 27～39	SA19、SA28とは切り合いながら併存。SA19とほぼ同一方向。 SA20の石積みは火災で火熱を受けて脆くなり、橙色に変色する石が目立っている。
B-15 ＳＡ28 第14図	2m25cm 1m3cm 47～70cm	琉球王国時代の倉庫へ下って入るための階段。岩盤や造成土の上から小振りの粗加工の切石を石積みし、二・三段踏み石として配置する。15C中頃。	N64°00'E	切石積み 90°	24～36 15～25 24～42	SA19･SA20と直接関連。SA28の階段は現存する最上段でSA20とは直角の関係にあり、かつ、SA19ともほぼ直角の関係にある。計画的に設計された倉庫か。階段の二段目が７°程度外側に傾く。
B-15 ＳＫ01 第14図	2m90cm 2m47cm 深さ45cm	琉球王国時代の倉庫内部で、火災により一括で焼けた多量の遺物が堆積。倉庫の輪郭は歪な形状。岩盤を雑に成形した面が床面か。1459年の火災で機能を終える。	南北の主軸はSA19とSA20の方位と同じ。東西はSA28の方位と同じ。	－	－	SA19、SA20、SA28が倉庫の縁石および階段で、その内部をSK01とした。

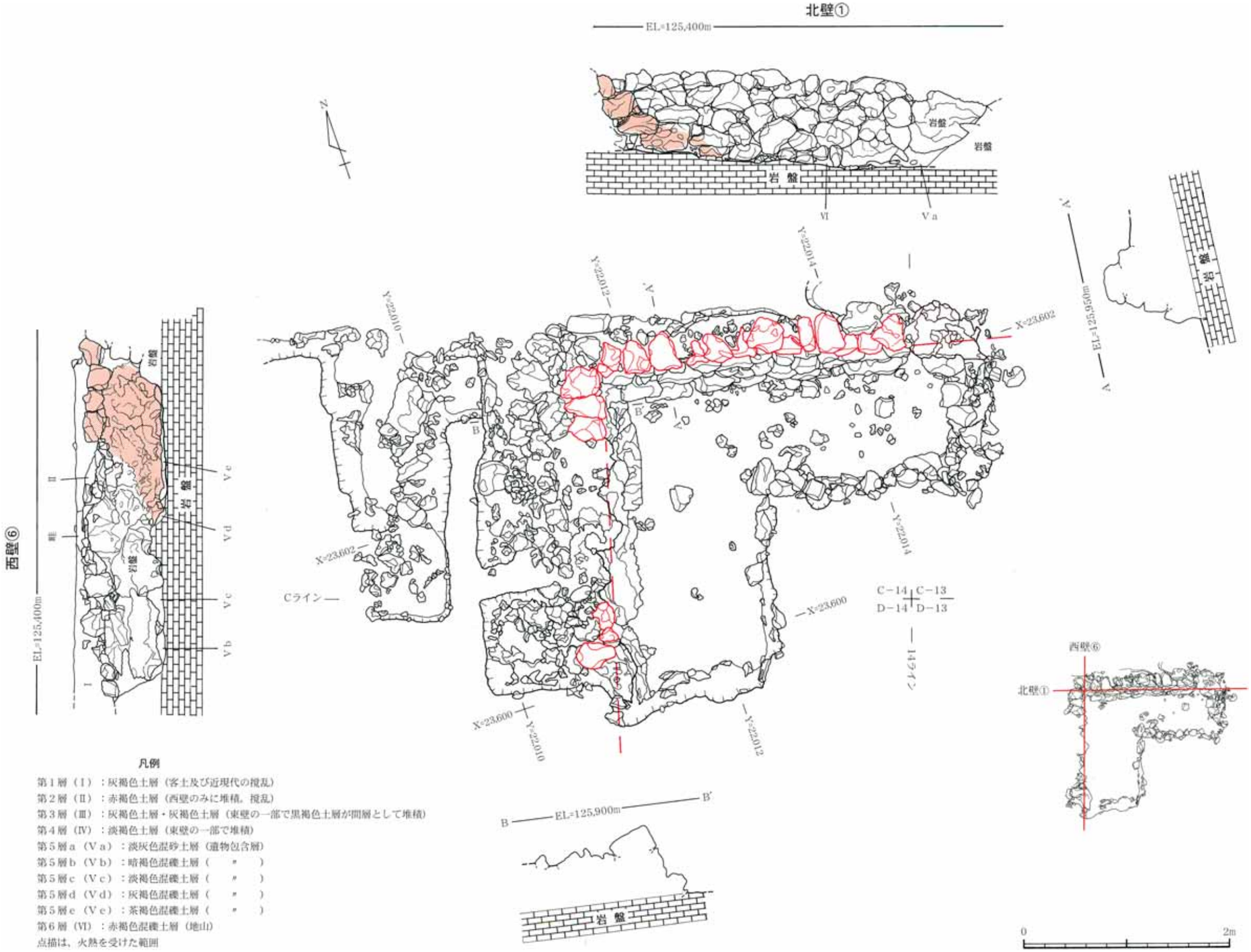
Ｄ．石積みSA33・34

Ｃ－13グリットの北西側で検出されたSA33・34は、客土を除去しながら石積みが検出された順にSA33・34と名称を冠した。SA33・34の根石検出途中で前述した土壙SK01（ＳＡ19・20、ＳＡ28）内から出土した陶磁器と同じように二次的な火熱を受けた陶磁器片などが出土していたので、土壙SK01の倉庫消失後に火事場の後始末で、当該遺構の石積みSA33・34の内側に一括で廃棄した事が調査の時点で陶磁器の時期や内容などから共通している事で解釈していたが、実際に資料整理を進めると土壙SK01の陶磁器と石積みSA33・34の陶磁器との接合ができることが確認され、その一部を報告（註４）した。今回、両遺構の間の陶磁器類について再度接合を進めた結果、下之御庭跡一帯（註８）から出土した陶磁器とも接合ができたことが大きな成果であった。

１．層序

石積みSA33・34の基本的な層序は、下記のとおりであった。

第１層は、客土（灰褐色土層）で近現代の攪乱層で中国産青花片、赤瓦、コンクリート片が混入し、遺構を覆っていた。第２層も近現代の攪乱層で客土である。土の色合いは灰褐色土を帯びている。東壁よりでは石灰岩の



第18図　C－13・14　石積みＳＡ33・34の完掘後の状況

小礫を含む。第４層も攪乱を受けた淡褐色土層で部分的に黒褐色（層厚２㎝、長さ35㎝程度）の間層がみられる。第５層は遺物包含層で、便宜的に土色の違いからa～eまでの五つに分けた。第５層bは暗褐色混礫土層、同層cが淡褐色混礫土層とし、同層dは灰褐色混礫土層、同層eが茶褐色混礫土層とした。いずれも石灰岩の小礫を含む点で共通するが大きな差はない。第６層は赤褐色混礫土層で地山である。

層序を大きく分けると第１層～第４層までは客土や攪乱層で、第５層が遺物包含層、第６層の地山の三枚である。

石積みSA34は第６層の地山を掘り込んで岩盤直上より根石を設置して野面石を積み上げている。

２．遺　構

石積みSA33・34の新旧関係は、両遺構の切り合い関係からSA33が古くSA34が新しい。両遺構とも外面が後代の土木工事等で破壊され、把握できない。石積みSA33・34の具体的な機能については判然としないが、第14図第Ⅲ期（15世紀中頃）の遺構配置からすると土壙SK01（倉庫跡）と当該遺構間の直線距離は12m50㎝を測り、土壙SK01（倉庫跡）との関係は薄いようである。寧ろ、SA33・34の南側に隣接する区画石積み(SA17、SA18－B、SA25－A・B)、そして東側に展開する遺構（SA08、SA10、SA18－A、SD04－A）との関連が強いようである。今のところ石積みSA34は、南側のSA17にすり付くような区画石積みなどが考えられる。SA34から直角に折れた石積みSA33は、東側に延びているが対応する石積み遺構は確認できない。今のところSD04－Aにすり付くものと判断され、区画石積みの可能性もあるが外面の石積みが消失しているため判然としない。石積みSA34は掘り下げられた岩盤の琉球石灰岩上から根石を配置し、小振りの石灰岩礫を裏込め石を用いて根石を安定させている。石積みSA34は、層序で記述したように琉球石灰岩の岩盤直上から根石を配置している。石積みSA33・34の角の部分の石積みや石灰岩が煤けて黒ずんでいる事から土壙SK01の倉庫が消失して間もなく実施された火事場の掃除で陶磁器類が冷え切らない間に廃棄したものと考えられる。当該遺構の規模や主軸方向などについては第６表の第Ⅲ期（15世紀中頃）遺構観察一覧に呈示した。

第６表　第Ⅲ期（15世紀中頃）遺構観察一覧

地　区 遺構番号 挿図番号	遺構残存長 残　存　幅 残　存　高	遺　　構 性格・形状・工法・機能の推定時期など	遺構の 主軸方位	石積み 種　類 根石勾配	石のサイズ 幅 厚み 控え長 (cm)	備　　考 （関連遺構・遺構の重複）
C-13・14 SA33 第14図	3m00㎝ 73㎝ 85㎝	琉球王国時代の区画石積み。東西方向に短く残る。東西の端は欠落。造成土や岩盤の上から石積み。15C中頃で、SA10が機能しなくなった直後の時期まで存続か。	N78°10'W	粗加工の野面石積み。 70°	13～48 12～30 29～39	勾配は根石から二番石までが65°である。SA34が西端ですり付いている。SA08、SA10、SA14、SA21が間接的に関係する遺構とみられる。
C-13・14 SA34 第14図	2m92㎝ 94㎝ 75㎝	〃。　南北方向に途切れながらSA33と直交する。粗加工の根石下端は岩盤を深さ50～60 程度掘削し、岩盤の縁沿いに根石を直接に乗せる。15C中頃。	N18°55'E	粗加工の根石。 84°	12～24 12～24 20～40	根石のみ残存。SA33に北端がすり付く。SA08、SA10、SA14、SA21、SA17が間接的に関係する遺構とみられる。

註文献

註１．當真嗣一・岸本義彦・宮里末廣ほか『佐敷グスク－佐敷グスク発掘調査報告－』 佐敷村教育委員会 1980年。

註２．奈良国立文化財研究所『昭和50年度 平城宮跡発掘調査部 発掘調査概報』 昭和51年（1976年）。

註３．奈良国立文化財研究所『1992年度 平城宮跡発掘調査部 発掘調査概報』1993年。

註４．沖縄県文化財調査報告書第132集 『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）－』沖縄県教育委員会　平成10（1998）年３月。

註５．池宮正治・高良倉吉 監修『首里城公園ガイドブック』編集 沖縄開発庁 沖縄総合事務局 国営沖縄記念公園事務所 2000年３月31日第１刷発行。

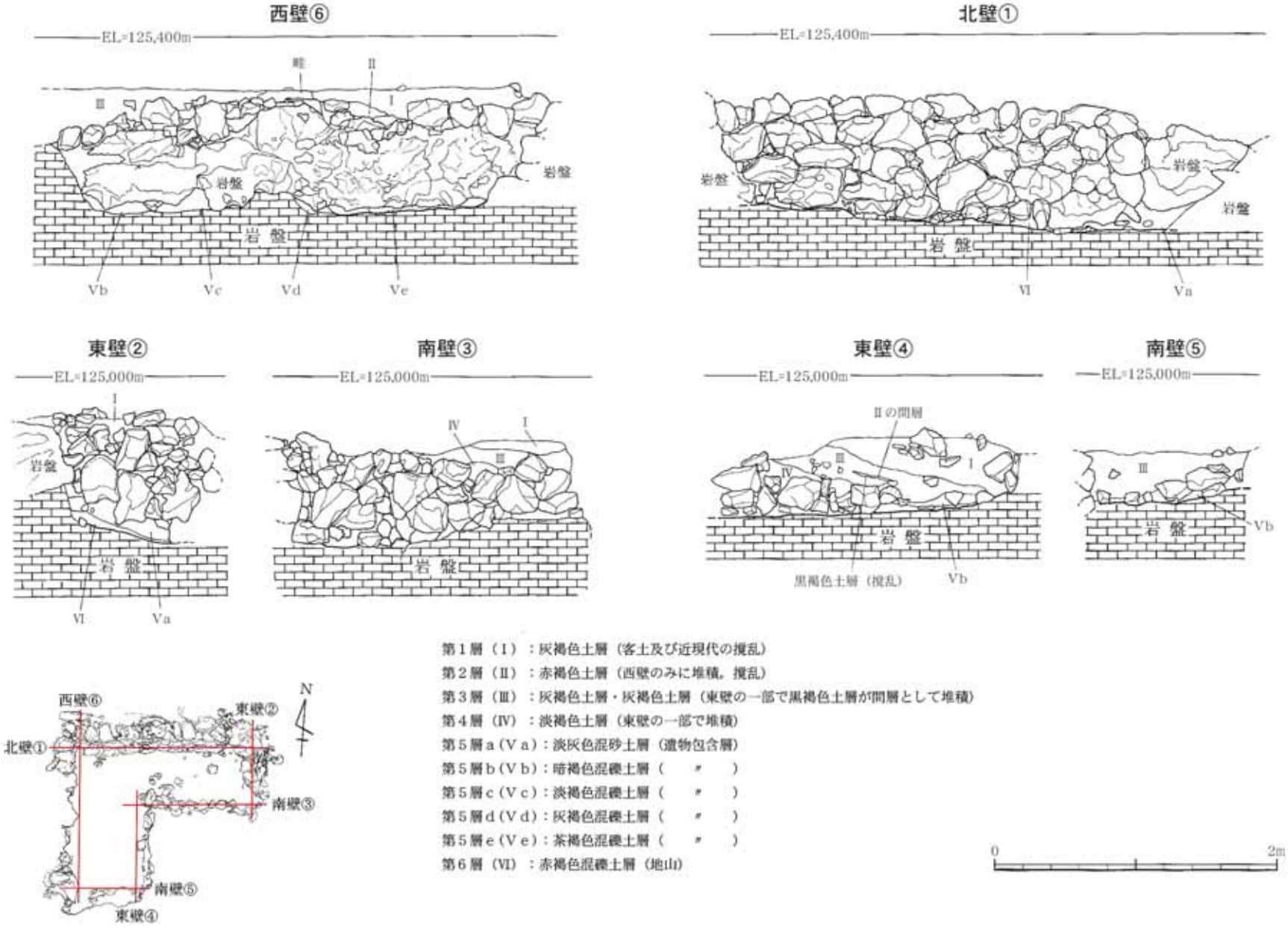
註６．1459年の倉庫などの失火については、明實録之部　英宗実録、巻301に「天順三年三月癸未朔〔甲申〕　禮部奏、琉球國中山王尚泰久奏稱本国王府失火、延焼倉庫銅銭貨物･･･云々」の記録がある。

註７．平成12年６月27日付け文部省告示第120号 考古資料の部 「沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器518点　附一、金属製品一括　附一、ガラス玉一括」官報告示。

註８．沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡－下之御庭跡・用持座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－』 2001年。

参考文献

◎ 日本史料集成編纂会『中国・朝鮮の史籍における日本史料集成明實録之部1』　国書刊行会　1979年。



第19図　層序（C－13・14グリット内　SA33・34）

第Ⅴ章　出土遺物

第１節　出土遺物の概要

首里城京の内跡の倉庫跡から出土した一括資料である陶磁器類については、平成10年３月に沖縄県教育委員会によって報告（註１）がなされているので、報告書を参照されたい。平成10年３月に刊行された一括資料の陶磁器類については、平成12年６月27日付けで「沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器518点　附一、金属製品一括　附一、ガラス玉一括」国の重要文化財として指定されている。

今回の報告する出土遺物は、国の重要文化財である「附一、金属製品一括　附一、ガラス玉一括」の中から保存処理を終了した資料と保存処理が未だ実施されていない倉庫跡出土の金属製品やガラス玉及び倉庫跡の覆土や客土などに含まれていた遺物、そして1459年に起きた倉庫火災で焼失後に行われた火事場清掃によって一部の陶磁器が廃棄された石積みSA33・34出土の陶磁器類及び覆土や客土などに含まれていた遺物、その他、平成２年度に実施された下之御庭跡・用物座跡・木曳門跡（以下、「下之御庭地区」と標記する）の遺構確認調査の際に京の内の倉庫跡北側部分も一部が発掘（註２）されたようである。この下之御庭地区の発掘調査の成果は、平成13年３月に刊行された報告書に網羅されているので参照されたい。下之御庭地区で報告された陶磁器と京の内地区の倉庫跡出土の重要文化財指定の陶磁器と接合ができることを確認した為、両地区の資料を図上で復元した形で報告することにする。また、下之御庭地区出土の陶磁器と石積みSA33・34出土の陶磁器とも接合ができた資料も得られたので、これについても図上復元をおこなった。その他、下之御庭地区・京の内地区（倉庫跡）・石積みSA33・34の三箇所から得られた陶磁器が接合できた例もあり、これについても報告する。

報告に際しては、便宜的に節を設けて「国指定重要文化財」、「土壙SK01（倉庫跡）出土の遺物」、「土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか出土の遺物」、「石積みSA33・34出土の遺物」の順に記する。

註文献

註１．沖縄県教育委員会『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）－』1998年３月。

註２．沖縄県立埋蔵文化財センター『首里城跡－下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡－』2001年３月。

第２節　国指定重要文化財

前述したように未報告であった金属製品及びガラス玉について、個々の特徴など第７表～第９表を参照されたい。なお、重要文化財に指定された金属製品については、平成16年度・平成17年度に文化庁の国庫補助事業で保存処理が完了している。

１．金属製品（第25図１～第33図60）

金属製品の分類は国指定重要文化財の金属製品、土壙SK01（倉庫跡）出土の未処理（保存処理）の金属製品、石積みSA33・34出土の金属製品について便宜的に共通の分類で整理し、下記に呈示する。なお、武器・武具類についての名称は第21図～第24図に呈示したので参照されたい。

A．工具類・生産用具
- 接続・固定金具
  - 釘・鎹など
  - 蝶番・錠（飾金具）
- 生産用具
  - 刀子・鎌など

B．装身具
- 簪・指輪など

C．祭祀用具
- 鏡・香炉・鈴・柄杓（銚子）など

D．生活用具
- 鍋・鋏

E．武具 ― 鎧金具（札・八双金物・鎖籠手・骨牌鉄鎖具足など）
　　└ 兜金具（鉢・立物など）

F．武器 ― 刀剣（鍔・切羽など）
　　└ 石火矢（弾・砲身ほか）

G．銭貨

（1）工具類・生産用具（第25図１～３）・(図版11－１～３）

接続及び固定金具として鎹（第25図１）・錠（同図２）・蝶番（同図３）の３点出土している。倉庫本体の梁・扉などに取り付けられた金具として判断される。個々の特徴などは第７表①の観察表を参照されたい。

（2）装身具（第25図４）・(図版11－４）

装身具とみられる金銅製環状製品が１点出土している。指輪としての可能性が今のところ考えられる。特徴などは観察表（第７表①）に記した。

（3）祭祀用具（第25図５、第26図６～10、第27図11・12）・(図版11－５、図版13－６～11、図版15－12）

祭祀関係の用具として考えられたのは、鏡（第25図５）・香炉(第26図６～８）・鈴(同図９・10)、他に沖縄県の遺跡から初めて長柄付片口銚子(第27図11・12)が出土している。個々の特徴は、第７表①～③に呈示した。

香炉については、口縁破片（第26図６）と胴部（同図７）、そして把手（同図８）の三点が得られている。

同図６は口縁が方形状に肥厚し、頸部から下2cmの箇所に「雷文」を型で起こしている。同図７の胴部資料については、『南島考古だより』(註１）で紹介したが、主な特徴等を略記すると胴部の最大径が31.8cmである。胴部の縦位の刻目凸帯に沿うように鋳型の繋ぎ目の痕跡が縦方向に走っている。文様は縦位刻目凸帯で区画し、その両側に饕餮文系（紀元前403年～紀元前22年）の「虺龍文」、「雷文」を配置し、胴上部に「波文」とみられる文様を型で起こしている。同図８は香炉の把手部分で両面に「饕餮文」を主文にして「雷文」を型で起こしている。把手上面の両側に歪な長方形状の孔が開いている。製作地は中国かとみられる。年代は15世紀前半～中頃。

参考までに同図７は化学分析調査を実施し、その成果を報告（註２）した。化学分析の調査によると当該製品は鉛入り青銅であり、その成分構成は、Pb（鉛）9.7%：Sn（錫）9.2%：Cu（銅）90.7%となっている。

最近、沖縄県教育委員会によって金工品関係資料調査が実施され、その報告によると饕餮文系の香炉が４点程紹介されている。その内の一点には「琉球國中山／王尚質憑于／・・・／日光山奉納／大猷院殿／廟前／承應二歳／癸巳拾月日」（承応２年：1653年）と刻銘された花瓶が紹介され、製作地が「琉球か」と紹介されている(註３)。

第27図11・12は長柄付片口銚子の容器のみが出土しているが長柄の柄部は検出されていない。これについては、京都国立博物館学芸課工芸室長の久保智康氏の同定結果（註４）を踏まえ長柄付片口銚子として取り扱った。

長柄付片口銚子については、『おもろさうし』（註５）第６巻の「うちいでは大きみ御まへが節」330番に「玉御柄杓」、第11巻「おにのきみはいややほうひちへが節」586番に「金(こがね)の御柄杓(みしゃく)・・・真玉(まだま)の御柄杓」などと謡で表現されたもので、『おもろさうし』で謡われた御柄杓と同一、或いは類似の銚子（柄杓）として今のところ推察される。京の内資料からは長柄付片口銚子（柄杓）の形状が判りにくいので、参考までに鈴木規夫氏の『日本の美術　酒器』（註６）と国立歴史民族学博物館刊行の『東アジア中世海道－海商・港・沈没船－』（註７）に掲載された古絵図などを参考にして長柄付片口銚子の図化を試みたのが第26図Aである。

次に第26図９・10の鈴との関連で、興味深いのが『おもろさうし』第５巻の「あおりやへが節」226番に「嶽の鈴鳴り」の謡があり、「鈴鳴り」が神女名のようである。実際にこのような鈴が祭祀などで神女が使用したのであれば『おもろさうし』の内容と符号するのかもしれない。その他、鈴の使用例について『おもろさうし』からみると第11巻「しのくりやわよなれがみの節」627番に「金若子(かねわかこ) 紐鈴(ひもすづ)は 下げて　又　金(かね)みさき　鳴(な)り鈴(すづ)は

下げて」（金若子・金みさきは刀の美称で、刀の装飾品として紐に付けた鈴を下げている）とあることから鈴は刀の柄頭の猿手に紐をとおして下げていたものと考えられるところである。県内の遺跡から鈴の出土例を挙げると今帰仁城跡志慶真門郭（註８）、天界寺跡（註９）などで出土している。また、風鈴の出土例は糸数グスク(註10)、今帰仁城跡主郭（註11）などで出土しているが、鈴および風鈴の出土例は非常に少ないようである。

註文献

註１．金城亀信「－資料紹介－首里城京の内出土の青銅器」『南島考古だより』第52号 沖縄考古学会 1995年６月２日

註２．大澤正巳「首里城跡出土の青銅製品の化学分析調査」沖縄県文化財調査報告書第132集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）－』沖縄県教育委員会1998年３月。

註３．沖縄県史料調査シリーズ第４集・沖縄県文化財調査報告書第146集『沖縄の金工品関係資料調査報告書』沖縄県教育委員会2008年３月。

註４－a．久保智康氏執筆の「琉球の飾金具」を調査した際に沖縄県立埋蔵文化財センターで実見。また、平成15年度～平成19年度に沖縄県教育委員会が実施した「沖縄の金工品関係資料調査」で久保智康が調査。

－b．久保智康「琉球の飾金具」『日本の美術10』第437号 監修 文化庁 東京国立博物館／京都国立博物館／奈良国立博物館発行 至文堂 2002年10月。

註５．外間守善校注 『おもろさうし』（上下）全２冊 岩波書店 2006年11月６日第２刷発行。

註６．鈴木規夫「酒器」『日本の美術７』第266号 監修 文化庁 東京国立博物館／京都国立博物館／奈良国立博物館発行 至文堂1988年７月。

註７．国立歴史民俗博物館『東アジア中世海道－海商・港・沈没船－』毎日新聞社2005年３月22日。

註８．今帰仁村文化財調査報告書第９集『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ－志慶真門郭の調査－』今帰仁村教育委員会 1983年３月。

註９．沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第２集『天界寺跡（Ⅰ）－首里杜館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査－』沖縄県立埋蔵文化財センター2001年３月。

註10．玉城村文化財調査報告書第１集『糸数城跡－発掘調査報告書Ⅰ－』玉城村教育委員会 1991年３月。

註11．今帰仁村文化財調査報告書第14集『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ－主郭（俗称本丸）の調査－』今帰仁村教育委員会 1991年３月。

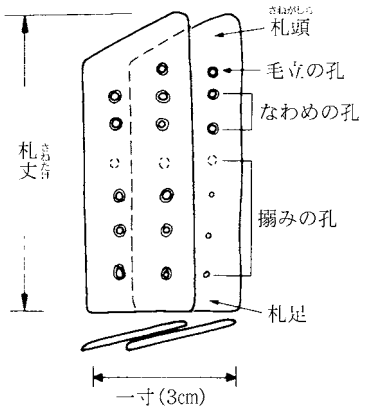
（４）武具（第28図13～16、第29図17～24、第30図25～39、第31図40～43、第32図44～52）・
（図版15－13～16、図版17－17～24、図版19－25～39、図版21－40～43、図版23－44～52）

武具関係の資料として、兜鉢関係の金具として考えられたのが、兜鉢の斎垣（第28図13・14）、兜鉢の矧板(同図15・16)、兜鉢の立物〔鍬形（第29図17～22)、三鍬形台の祓立台に差し込まれる立物中央飾り（同図23)、三鍬形台（同図24)〕がある。鎧の飾り金物として、小さな菊花を施した八双金物の飾り金具（第30図25・26)、鎧の化粧板の縁に配置した八双金物（同図27・28)、据文金物の菊座（同図29)、鎧の札（同図30～39)、八重鎖の鎖帷子（第31図40～43、第32図44～52）が出土している。これらの製品の特徴などは、第７表④～⑧に示した。参考までに第20図に掲載した札（小札）の各部名称は、上原 靜氏の原図（註１）を使用した。

註文献

註１．上原 靜「第１節 武器 武具類 勝連城跡、三の郭の遺構調査」『勝連城跡－北貝塚、二の郭および三の郭の遺構調査－（１)』
勝連町の文化財第11集 勝連町教育委員会 1990年３月。

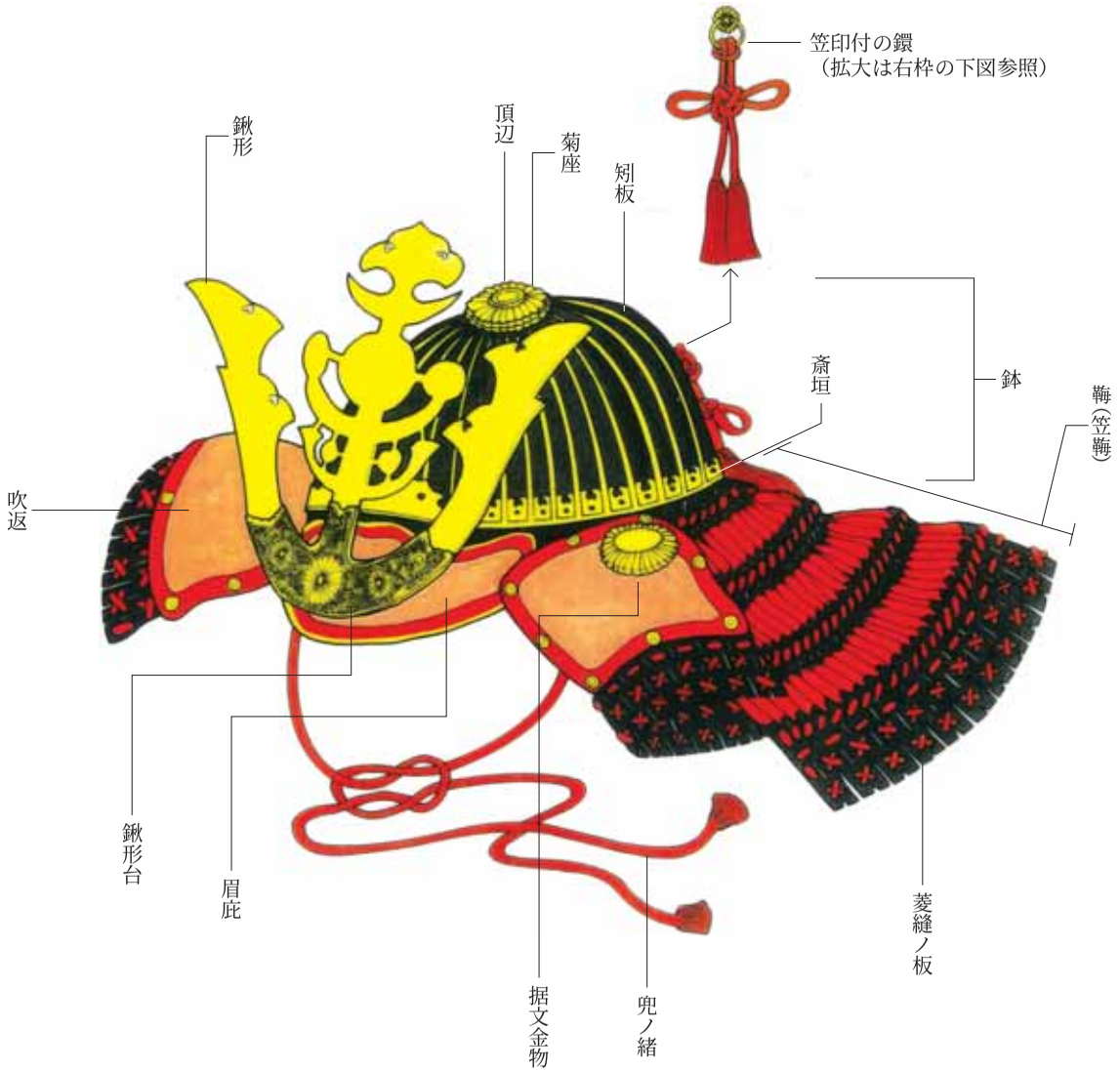
第20図　札の各部の名称

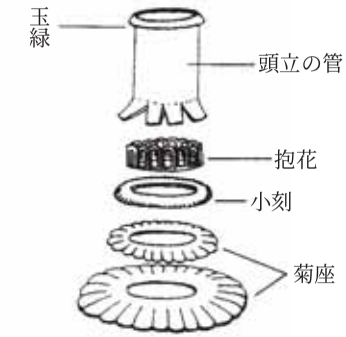


『勝連城跡』(1990年3月)収録の
上原靜作成原図を複写

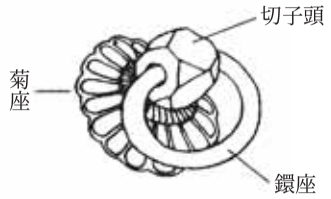
（５）武器（第33図53～60）・(図版25－53～60)

武器関係の資料として、刀剣の鍔（第33図53～57)、切羽（同図58～60）が出土している。刀剣資料で（同図57）は鍔の縁を平坦に仕上げている点と刀身の茎が入る孔が他の鍔と比較して厚み1.3cmと厚い点などから長刀の鍔とみられる。なお、個々の特徴などは第７表⑨に示した。





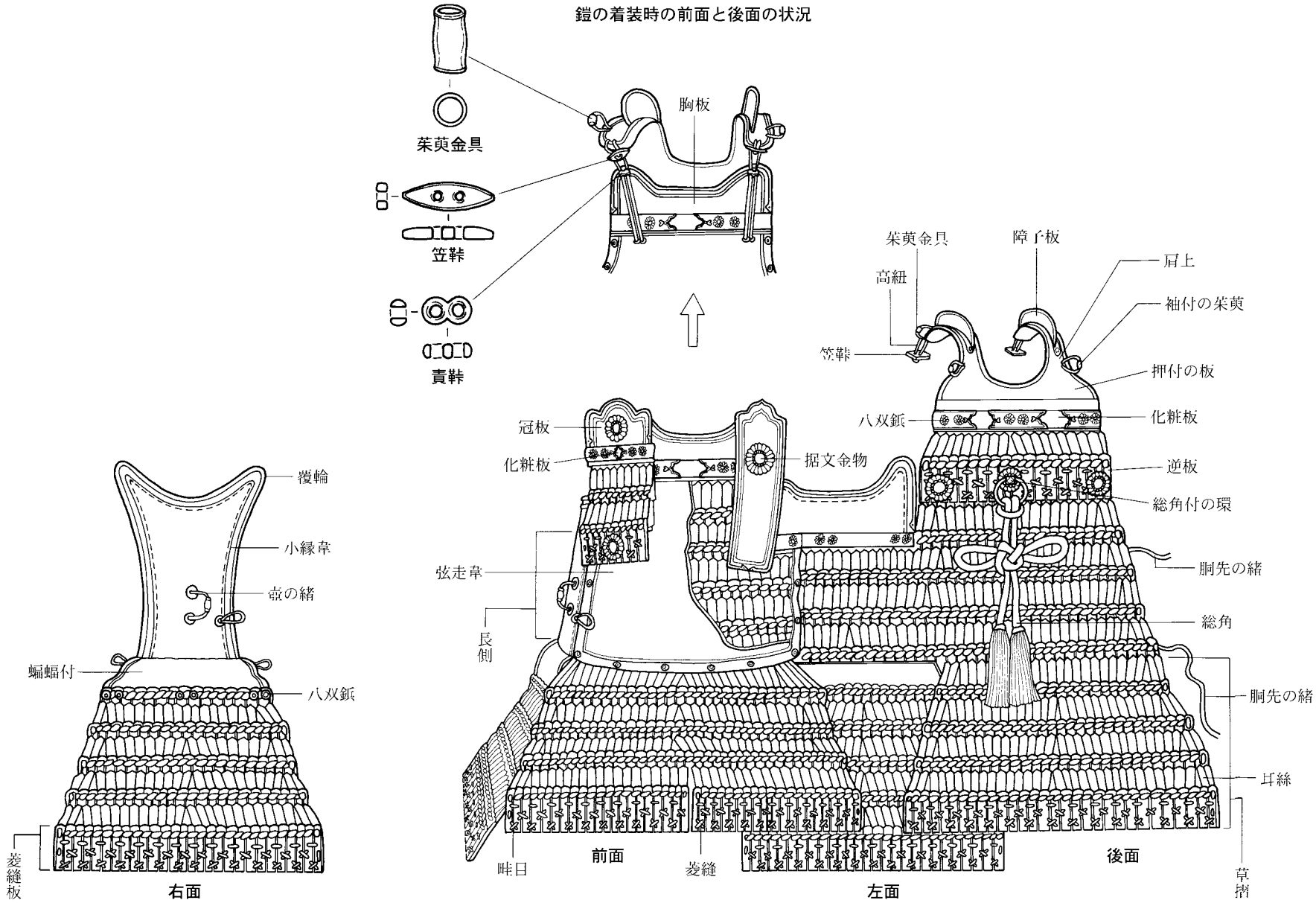
頂辺（天辺）の座の各部名称



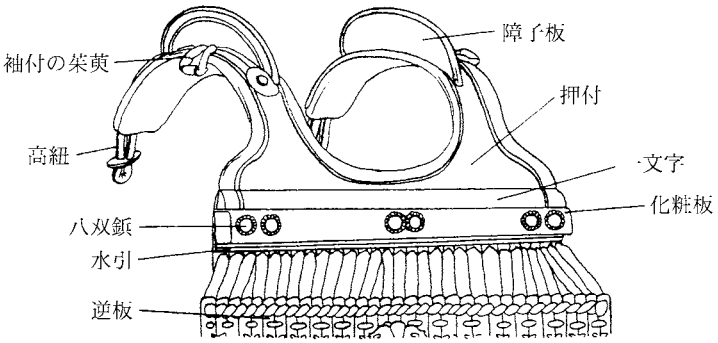
総角付（笠印付）の鐶の各部名称

笹間良彦『図録　日本の甲冑　武具事典』
柏書房 1981年より複写

第21図　兜及び立物の各部名称と頂辺の座及び総角付の鐶の各部名称

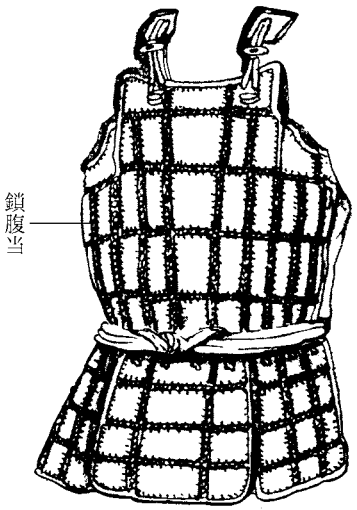


第22図　大鎧の各部名称（原図：金城亀信）

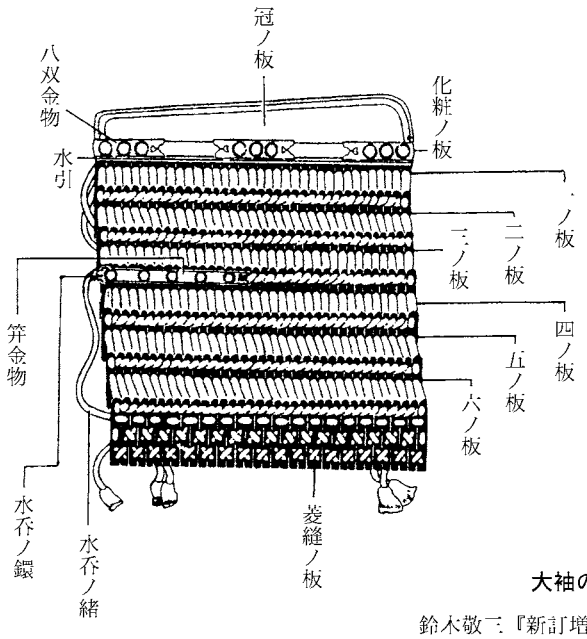


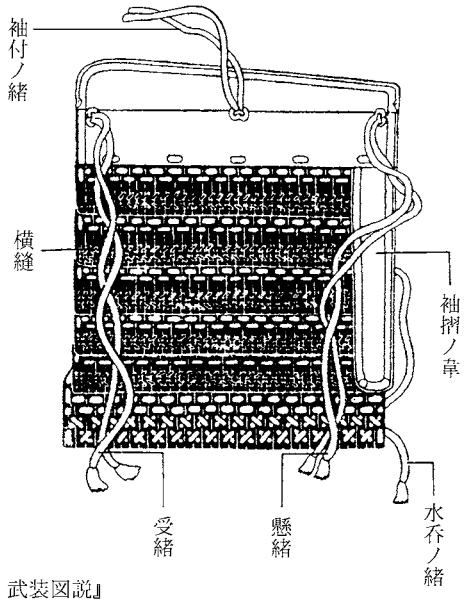
大鎧の押付と化粧の板

笹間良彦『図録　日本の甲冑　武具事典』柏書房
1981年より複写、図を追加



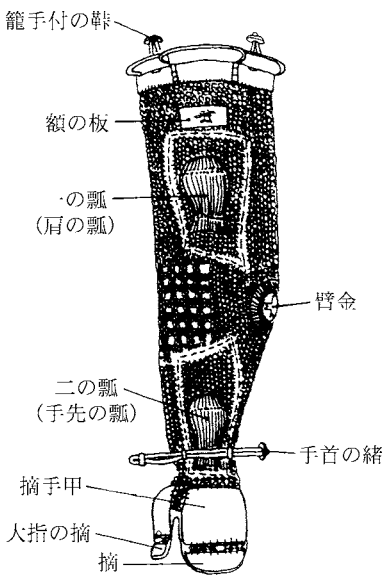
畳具足

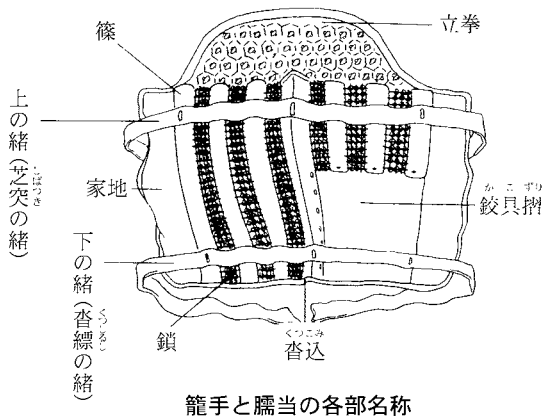




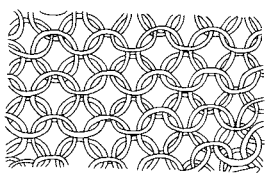
大袖の各部名称

鈴木敬三『新訂増補故実叢書35　武装図説』
明治図書 1954年より複写





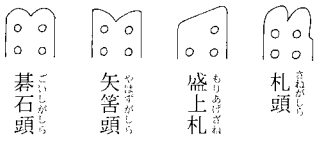
籠手と臑当の各部名称



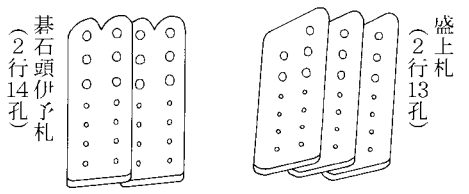
八重鎖

笹間良彦『図録 日本の甲冑　武具事典』柏書房 1981年より複写し、図を追加

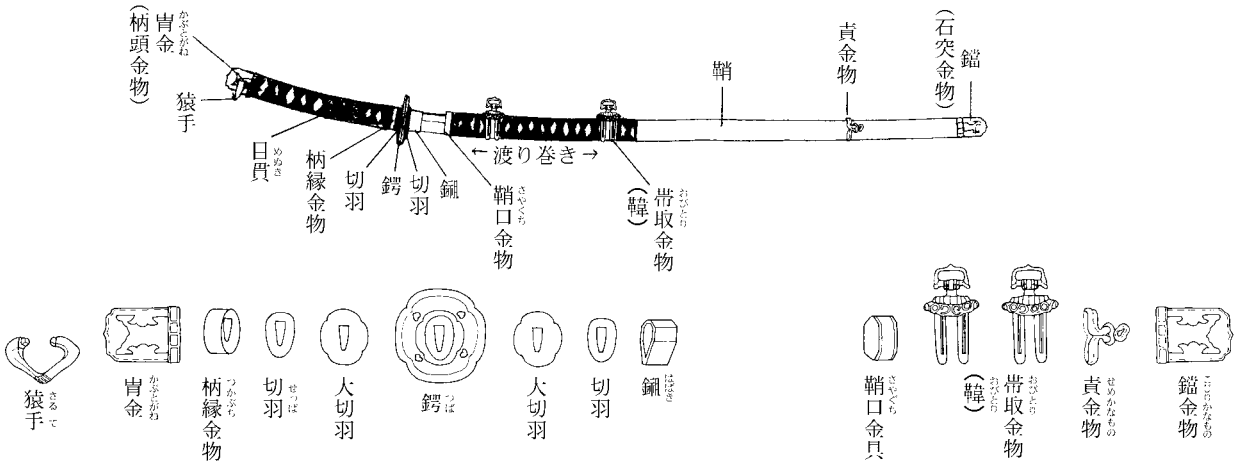
第23図　鎧の各部名称（詳細）、畳具足、八重鎖



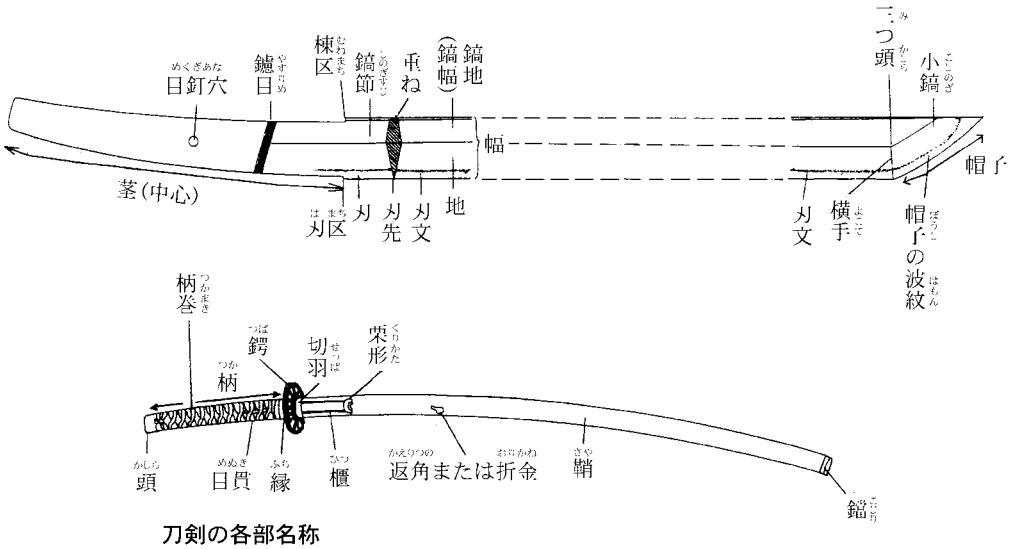
札の形と名称



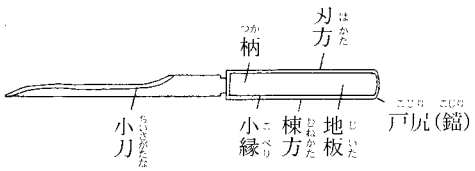
山上八郎・山岸素夫『鎧と兜』保育社 1975年より複写



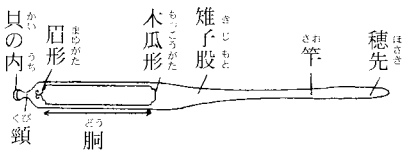
笹間良彦『図録　日本の合戦武具事典』柏書房 1999年より複写し、図を追加



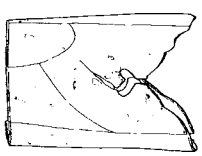
刀剣の各部名称



小柄の各部名称

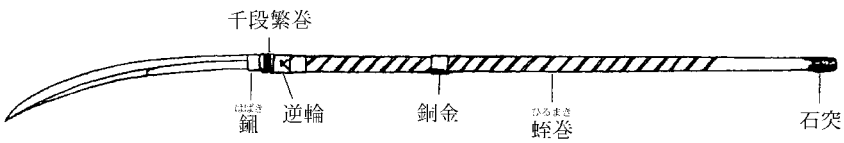


笄の各部名称



逆輪

古式の蛭巻の薙刀の各部名称

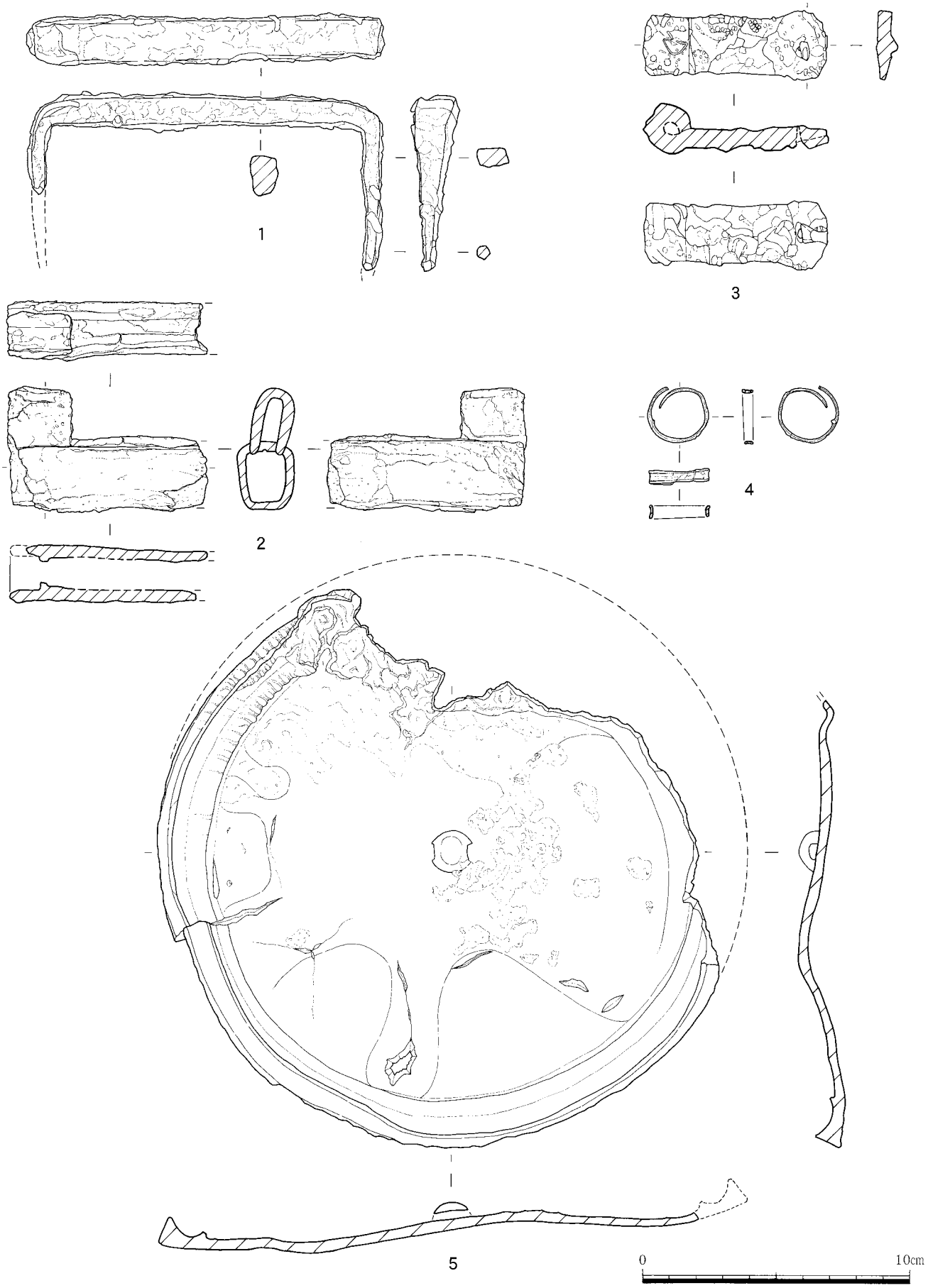


笹間良彦『図録　日本の甲冑　武具事典』柏書房 1981年より複写し、図を追加

第24図　札の形と名称、刀剣及び付属品（小柄・笄）・薙刀の各部名称

第７表①　国指定重要文化財(保存処理済み)金属製品観察一覧　　単位：㎜/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	分類	名称 仮称	材質	残存長 (縦)	残存幅 (横)	残存最大厚 残存最小厚 残存重量	観　察　事　項
第25図 図版11 1	工具類・ 生産用具	鋸	鉄製品	左： 34.0 右： 61.1	130.0	18.0 5.0 110	建築部材(梁や柱など)を連結・接合の際に使用した鋸で、左側の身部の大半が欠けている。右側は身部の先端が僅かに欠いている程度であるが、形状の窺える唯一の資料である。全体的に錆で覆われ、罅(クラック)が多く観察される。全体的に錆に覆われている為、素材が脆い状態にある。
〃 〃 2	〃	錠	〃	46.0	74.0	7.0 3.0 68.4	倉庫の扉などを締め切る金具の錠である。錠は左下と右側の大半を欠いている。錠は全体的に錆で覆われ罅(クラック)が多くみられる。錠の構造を外観から窺うと下位の方柱状のものは一枚の鉄板を折り曲げて上部で繋ぎ合わせている。上部の繋ぎ目は断面が「⌐」字状に折り曲げた幅8.7㎜の帯状の板材で塞いでいる。「⌐」字状に折り曲げた部分は左側の突起部分に隠れている。左側の突起は帯状(幅22.9～24.3㎜、厚さ1.9～2.6㎜)の鉄板を逆さ「U」の字状に折り曲げて本体と接合しているこの「U」の字状の突起金具と本体接合部分は、「U」の字状の金具が入るように本体左側上面を「コ」の字状に切り取られている。「U」の字状の突起と本体接合部分は本体内部に方形状に加工された輪金具が取り付けられている。図版10の２参照。
〃 〃 3	〃	蝶番	〃	26.0	68.0	18.0 2.0 33.7	倉庫扉や窓などの可動部分に取り付けられたとみられる蝶番の一部である。右端の隅丸形状となる部分に釘穴があり、この釘穴には打ち込まれた釘が折れた状態で釘穴を塞いでいる。他に釘穴の有無について軟X線写真(図版10－３)で精査した結果、釘穴は右側の一カ所のみであった。左側の筒状(内径4.1～5.4㎜)は折り曲げて成形し軸棒の入る部分にあたる。
〃 〃 4	装身具	金銅製 環状製品	青銅 製品	21.1	22.4	1.0 1.0 2.3	指輪などの金具として考えられる。外面にのみ鍍金が観察され、両端の一端を斜位に金切り鋏で切り取って尖らせた後に先端を内側に折り曲げて環状に仕上げている。外側の端は破損している。上下端部も金切り鋏で切り取ったため、断面が外側に湾曲している。側面の一部は金属疲労によって一部が延びている。
〃 〃 5	祭祀 用具	鏡	〃	206.0	208.5	11.0 2.0 760	鏡背面の断面形状や文様の有無から三角縁の無文鏡と判断される。背面縁の三角縁が最も厚くなる。外区と内区の境に圏帯の小さな三角形(３㎜程度身部から突出)で分割されている。紐通しの紐の形状は、扁平な半円形で所謂半球紐(円紐)と称されるタイプである。紐の廻りの紐座が省略された素朴な鏡である。火災による火熱で破損部分に溶解、再凝固の痕跡がみられる。

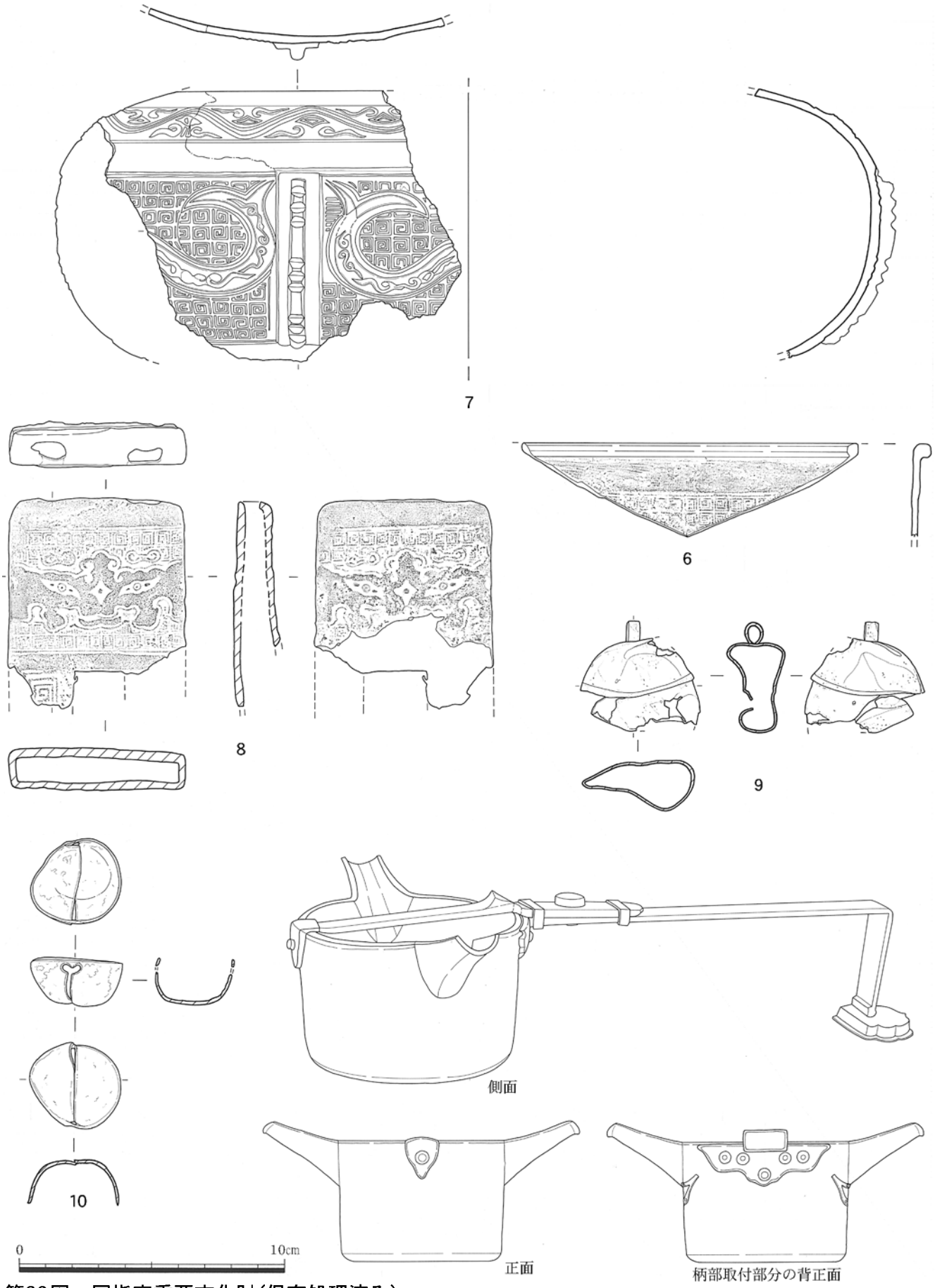


第25図　国指定重要文化財（保存処理済み）
金属製品（1鏃、2錠、3蝶番、4金銅製環状製品、5鏡）

第７表②　国指定重要文化財（保存処理済み）金属製品観察一覧

単位：㎜/g

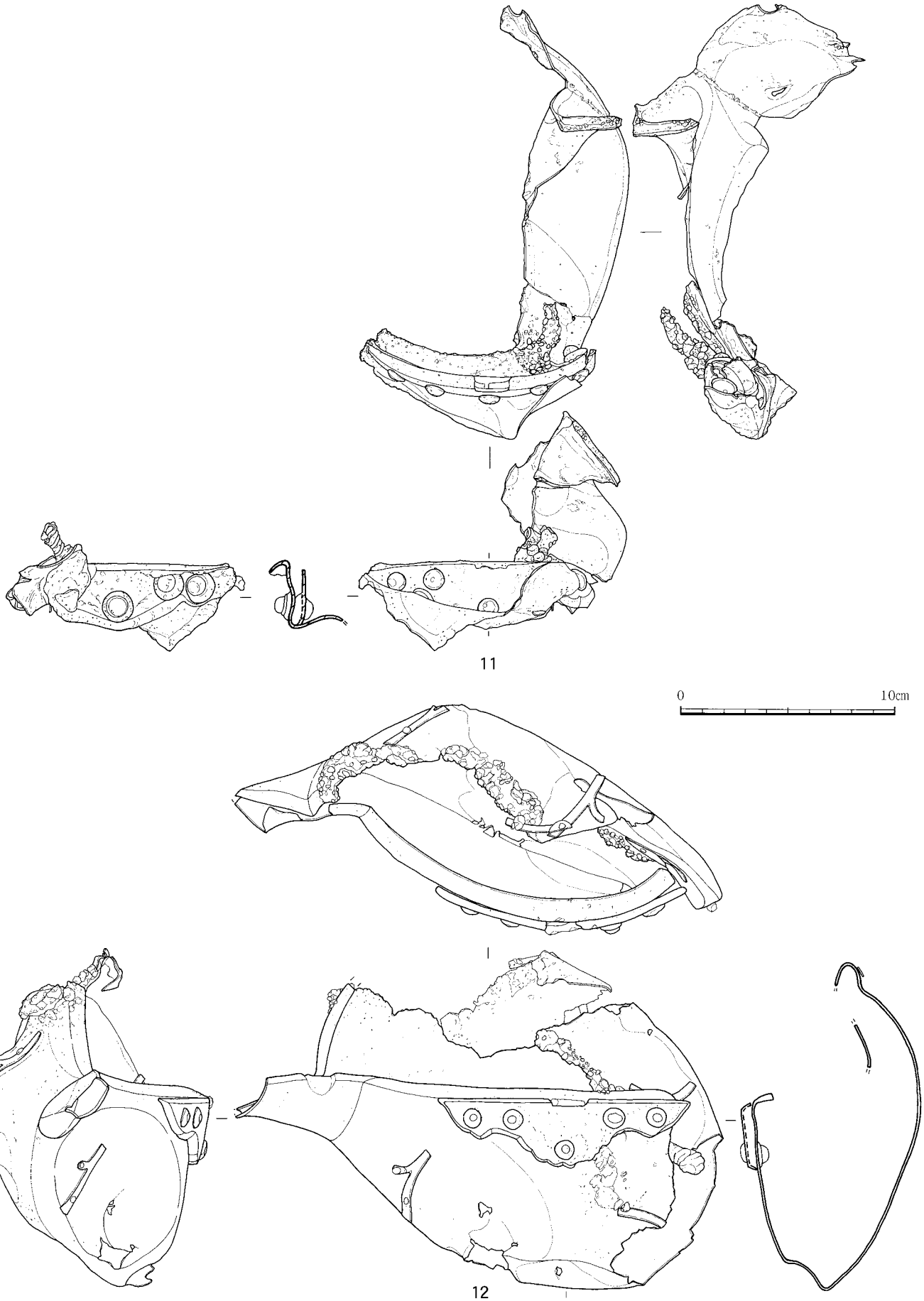
挿図番号 図版番号 遺物番号	分類	名称 仮称	材質	残存長 （縦）	残存幅 （横）	残存最大厚 残存最小厚 残存重量	観　察　事　項
第26図 図版13 6	祭祀 用具	香炉 口縁	青銅 製品	35.0	126.0	6.5 2.0 70.9	型物成形の香炉。口縁破片で口縁は直口する。口縁が逆さ「L」字状の肥厚となる。口唇の幅は７㎜、肥厚部の幅が５㎜を計る。残存部位から口縁の口径を推算した結果、口径が38.5㎝と求められた。表面の口縁左側の肥厚帯下端で抉れのない部分があり、この部分は幅６㎜と平坦な面となっていることから鋳型の繋ぎ目と関係する部位かもしれない。表面にある文様は型で起こしている。浮文の「圏線」で口縁上部とを区画し、圏線直下に「雷文」を施している。表面の口縁直下には製作直後に実施された器面調整の粗い線状痕が左斜目方向から右下に向かって施されている。口唇部の左側に砥石やヤスリの様な工具で研いだ線状痕が内側から外方向（内面口縁の右斜目方向に入る）に走っている。裏面は青緑色の錆で半分程度覆われていて、部分的に錆による腐蝕で地金が灰色となる。青錆の一部は表面の文様部分で主に観察される。
〃 〃 7	〃	香炉 胴部	〃	101.0	136.0	8.7 2.0 385	口縁・底部が欠落した香炉の胴部破片。外面の区画帯となる縦位の刻目凸帯と沿うような形で鋳型の繋ぎ目の痕跡が縦方向に走る。文様の配置は、胴部が区画帯を挟んで左右に反転した形の「虺龍文」と「雷文」を型で起こして浮文とする。胴上部には「波文」を型で起こしている。頸下部での内径は21.4㎝、胴部での最大径は31.8㎝が推定された。
〃 〃 8	〃	香炉 把手	〃	77.0	67.0	4.0 2.0 205	把手の表裏面に「饕餮文」を主文にして「雷文」を型で起こした浮文とする。把手下部は方形状に中空となっている。把手上面の両側には歪な長方形状の粗孔が観られる。把手内部には木質の素材が炭化した状態で詰まっている状況から判断すると製品製作時の鋳型成形と関係する木質の物質かと思われる。
〃 〃 9	〃	鈴	〃	41.0	45.8	1.0 0.5 14.2	潰れて変形の著しい球形の鈴。色合いは赤茶色を呈し部分的に青錆がみられる。鈴下部に1.3㎜の小孔は錆による腐食とみられる。紐通しの突起は、帯状の板材（幅4.8㎜、厚さ1.1～1.3㎜）を紐通しの輪（直径4.6～5.6㎜）を丁寧に折り曲げて成形し、二股のヘアピン状に仕上げたものを鈴上部の孔から差し込んで鈴内部で二股となった部分を広げて鈴の本体と接合している。鈴下部の一文字の孔の両端は二股でハート形に加工されている。
〃 〃 10	〃	〃	〃	34.9	32.0	1.5 0.9 10.5	球形の鈴で上部が欠落し、下半部のみ残存する。色合いは赤茶色を呈し、部分的に青錆がみられる。鈴下部の一文字の孔の両端は二股でハート形に加工されている。



第26図　国指定重要文化財（保存処理済み）
金属製品（6 香炉口縁、7 香炉胴部、8 香炉把手、9・10鈴）
A 参考資料：「第17図鶴丸紋沈金片口銚子」鈴木規夫『日本の美術』第266号「酒器」第17図1988年及び国立歴史民族博物館『東アジア中世海道－海商・港・沈没船』2005年などを参考に図化した。

第７表③　国指定重要文化財（保存処理済み）金属製品観察一覧　　単位：㎜/g

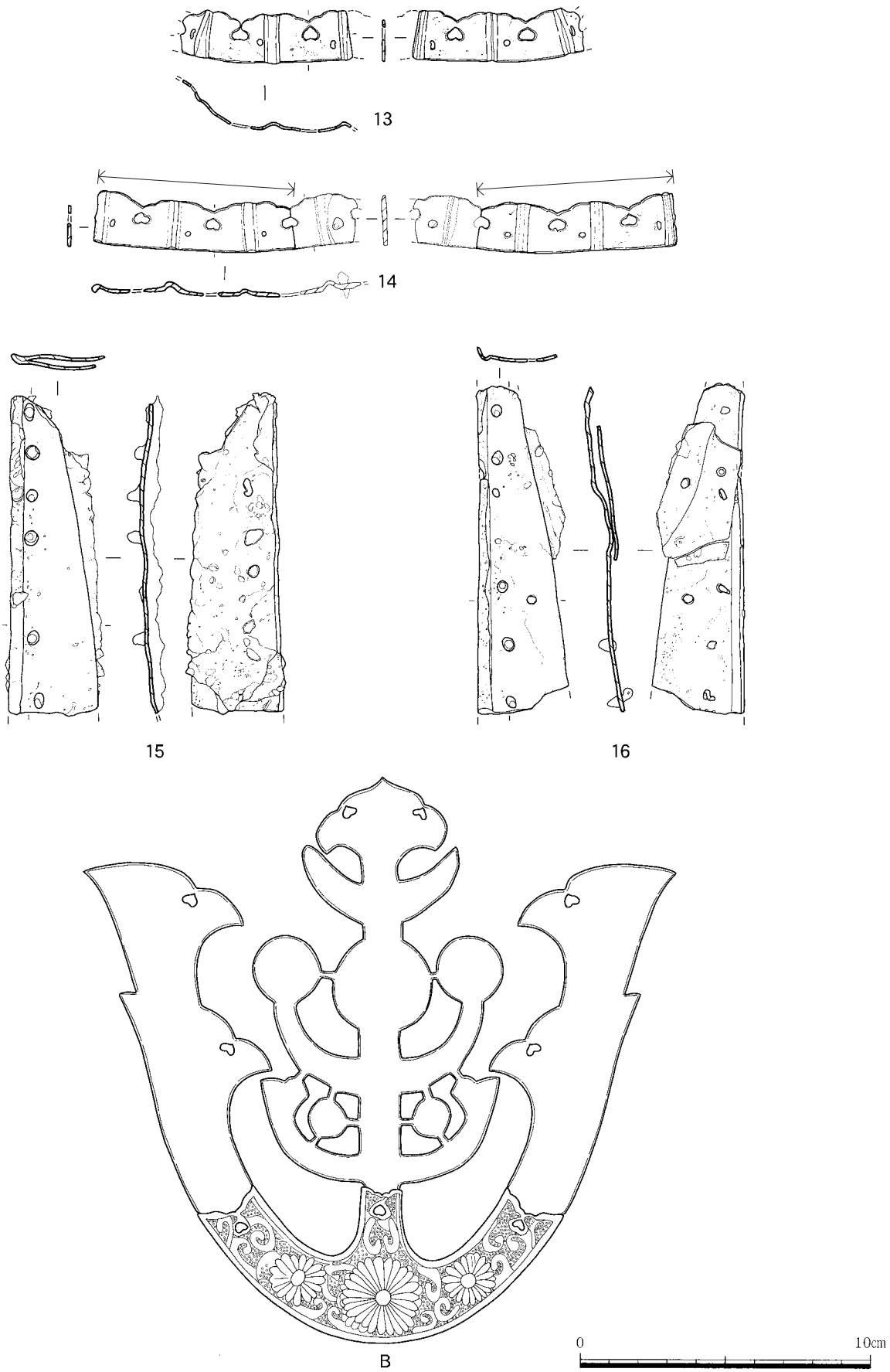
挿図番号 図版番号 遺物番号	分類	名称 仮称	材質	残存長 （縦）	残存幅 （横）	残存最大厚 残存最小厚 残存重量	観　察　事　項
第27図 図版13 11	祭祀 用具	長柄付片口銚子の口縁（柄杓の容器）	青銅 製品	82.0	200.0	18.0 1.0 198.1	長柄付片口銚子の身部（容器本体）及び柄部取り付け部分の破片（第26図A参照）。柄を受ける部分は長方形状の切り込みがあり、切り込みのサイズは、横15.5㎜、縦６㎜である。柄を受ける金具は、逆さの浮文で「雲形」を呈し、容器本体との接合で丸鋲を五カ所で使用して固定している。柄を受ける金具と容器本体の間には、帯状の金具が挟まっている。恐らく柄を固定する際に使用された金具かもしれない。丸形頭の鋲は、頭の直径が8.4㎜の物を使用し、鋲の身は断面が円形状で直径３㎜を計った。鋲は容器の内から外に向かって鋲の身を入れて、鋲の先端を外側で潰して固定している。内側の鋲は小振りの菊座金具（直径10㎜）と大降りの菊座金具（直径14.6㎜）の中を通してから外へ抜いている。この鋲は外側の無文座金具（直径9.5㎜）を抜いてから鋲の先端を潰している。上面右側中央寄りが注ぎ口で大部分が欠けている。火災による火熱を受けて身の内側では銅素材が溶けてケロイド状となる。注ぎ口近くで身部の底部から口縁の方向に向かって縦位の繋ぎ目が確認される補修の目痕とみられる。繋ぎ目を補修した材料は不明。銚子の色合いは茶黒色を基調とするが、全体的に青錆がみられる。
〃 図版15 12	〃	〃	〃	156.0	223.0	13.0 0.5 393.4	〃　　。柄を受ける部分は長方形状の切り込みがあり、切り込みのサイズは、横14.4㎜、縦4.5㎜である。この切り込み部分に柄を固定していた帯状の金具が表に露出している。柄を受ける金具は、逆さの浮文で「雲形」を呈し、容器本体との接合で丸鋲を五カ所で使用し固定している。丸形頭の鋲は、頭の直径が8.2㎜の物を使用し、鋲の身の断面は不明。鋲は容器の内から外に向かって鋲の身を入れて、鋲の先端を外側で潰して固定している。内側の鋲は大降りの菊座金具（直径12.4㎜）を通してから外へ抜いている。この鋲は外側の無文座金具（直径9.4㎜）を抜いてから鋲の先端を潰している。注ぎ口は左側に突出した状態で残存しているが僅かに口が欠けている。火災による火熱を受けて身の外側で銅素材の一部が溶けてケロイド状となる。容器本体に「小枝」や「柳葉」を小さな丸鋲（頭の直径３㎜、身のサイズは不明。鋲の先端が潰れた部分で直径は3.4㎜を計った）で容器の正面と柄部寄りの４箇所に取り付けられているが「柳葉」と「小枝」が組み合わさって残っているのは一箇所のみであった。繋ぎ目を補修した材料は不明。銚子の色合いは茶黒色を基調とするが、全体的に青錆がみられる。



第27図　国指定重要文化財（保存処理済み）
金属製品（11・12長柄付片口銚子の容器）

第７表④　国指定重要文化財(保存処理済み)金属製品観察一覧　　単位：㎜/g

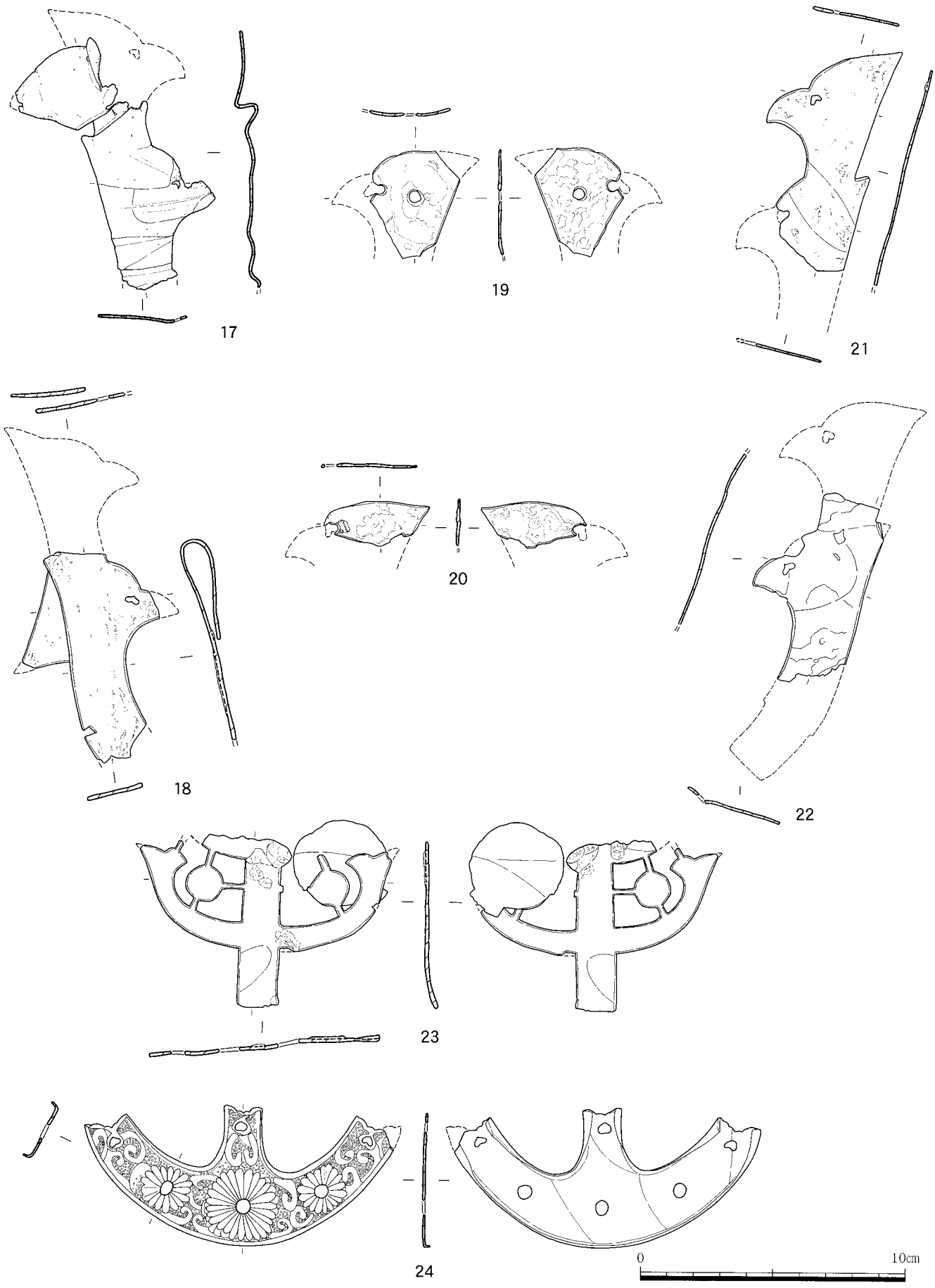
挿図番号 図版番号 遺物番号	分類	名称 仮称	材質	残存長 (縦)	残存幅 (横)	残存最大厚 残存最小厚 残存重量	観　察　事　項
第28図 図版15 13	武具	兜鉢 斎垣	青銅 製品	17.0	58.0	0.8 0.5 6.5	兜鉢の外側縁沿いに取り付けられた斎垣(桧垣とも称する)の破片(第21図参照)。本来は内側に湾曲するが、本資料は外側に弓状に反っている。兜鉢の筋が入る部分は断面を凸状に加工し、筋と筋の間を魚尾状に切り取り、その直下に逆さハート形(半円形状の鏨でハート形となるように三箇所を打ち抜いている)に打ち抜いている。斎垣と兜鉢を固定する際に穿孔した孔は、筋近くに三孔穿たれているが粗孔である。両端の二孔は穿孔の際に失敗したため、穿孔位置が上下にずれて縦長の孔となっている。
〃 〃 14	〃	〃	〃	18.0	68.5	3.0 1.0 8.9	〃　。本来、湾曲するものであるが、平坦に延びきっている。逆さハート形の打ち抜きは三箇所に残存するが、左側が歪な状態で打ち抜いている。斎垣と兜鉢を固定する際に穿孔した孔は、筋近くに三孔穿たれているが、左側の孔のみ穿孔の際に失敗し、穿孔位置が上下にずれて縦長の歪な孔となっている。
〃 〃 15	〃	兜鉢 矧板	青銅と鉄を組み合わせる	109.0	31.7	10.0 0.8 44.1	星入り筋兜の矧板の一枚。表面が青銅製の矧板で裏面が鉄製の矧板である。表面の矧板には筋を入れて素材を強固とする。裏面の鉄製矧板の上に青銅製の筋入りの矧板を接合することも考慮して星形の鋲(単に星とも称する。或いは鋲頭とも称す。)を外から入れて内側で折り曲げている。星形の鋲は６個が残存する。残りの１個は根元から欠落する。鋲頭のサイズは長さ５㎜、直径５㎜を最大とする。最小の物は長さ4.4㎜、直径3.5㎜のものが打ち込まれている。矧板を数十枚を重ねながら兜鉢を製作したものとみられる。類例を挙げると奈良県立博物館収蔵の室町時代前期に比定されている重要文化財の四十間四方白星兜鉢に近いようである。
〃 〃 16	〃	〃	〃	116.0	31.4	6.0 0.8 35.6	〃　。〃　。〃　。星形の鋲は５個が残存する。残りの２個は根元から欠落する。いずれも錆で被さっている。鋲頭のサイズは長さ4.4㎜、直径4.5㎜を最大とする。最小の物は長さ4.0㎜、直径3.4㎜のものが打ち込まれている。表面の中央より下の孔は内側からが穿たれている。孔のサイズは2.5～3.0㎜を計測した。裏面の鉄製の矧板は縦方向に「へ」の字状に折れている。この折れは製作時の折れなのか。或いは廃棄破損の際に折れたのかは判然としないが表面の青銅製矧板の筋と鉄製矧板の縁がずれているので前者の可能性が高いものとして考えられた。前記15とサイズが近い為、同一の兜鉢の矧板とみられる。異なる素材の矧板を利用して兜鉢を製作する。



第28図　国指定重要文化財(保存処理済み)
金属製品　武具（13・14兜鉢の斎垣、15・16兜鉢の矧板）
B 復元された立物（中央の祓立台に「瑞雲日月星文」、下位が「菊花三鍬形台」）

第７表⑤　国指定重要文化財(保存処理済み)金属製品観察一覧　　単位：㎜/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	分類	名称 仮称	材質	残存長 (縦)	残存幅 (横)	残存最大厚 残存最小厚 残存重量	観　察　事　項
第29図 図版17 17	武具	兜の立物 (鍬形)	青銅 製品	95.0	42.0	0.9 0.5 11.8	立物の鍬形上部破片(第21図・第28図参照)。鍬形は二重に重ねた形で成形。全体的に変形し、特に先端部分が著しく変形する。下部は波状に変形する。先端の鍬形とその直下にある鍬形の抉れ部分に近い箇所を鏨で逆さハート形に打ち抜いて透彫りの文様を表現する。
〃 〃 18	〃	〃	〃	78.0	48.0	2.0 0.8 22.4	〃　。　〃　。鍬形の中央付近で内側に折れている。先端の鍬形とその直下にある鍬形の抉れ部分近くに鏨で逆さハート形に打ち抜いて透彫りの文様を表現する。裏面に横断するクラック(罅割れ)が横縞状に発生している。両面に青錆が全体的に観察できる。
〃 〃 19	〃	〃	〃	40.0	30.0	0.9 0.5 3.9	立物の鍬形先端部の破片。表裏面とも部分的に青錆がみられる。内側に弓状に湾曲する。中央に在る隅丸方形状の粗孔は錆瘤が破損した際に発生した孔である。参考までに錆の孔は短軸3.8㎜、長軸は4.4㎜を測った。
〃 〃 20	〃	〃	〃	17.0	36.0	1.0 0.5 1.8	立物の鍬形先端破片。左側にハート状に空けられた透彫りの孔が半分程度残っている。表裏面は鍍金され、鍍金は表面より裏面で多く観察できる。表面の鍍金は半分以上青錆で隠れている。
〃 〃 21	〃	〃	〃	87.0	38.0	1.0 0.9 12.4	立物の鍬形上部破片。鍬形は二重に重ねた形で成形。表裏面の一部で緑青が被っている。先端の鍬形とその直下にある鍬形の抉れ部分近くに鏨で逆さハート形に打ち抜いて透彫りの文様を表現するが下部の文様は半分程度欠損する。
〃 〃 22	〃	〃	〃	72.0	42.0	1.0 0.9 10.0	鍬形の上部と下部を欠いた破片。鍬形は他の資料(同図17・18・19)から二重に重ねた形で成形したものと判断した。表裏面の一部で緑青が被っている。鍬形の抉れ部分近くを裏面から鏨で逆さハート形に打ち抜いて透彫りの文様を表現するが、文様は歪な形となっている。
〃 〃 23	〃	祓立台 の立物 (立物中央 飾り)	〃	70.0	93.5	2.0 1.0 22.8	三鍬形台中央の祓立台に取り付けられた立物(第28図参照)。上・下部が欠落する。右側の大きな円盤は本来、中央の幹にあったものが折れて右側に錆汁で付着したようである。この円盤は「日(太陽)」を表現し、小さな鍬形の左右にある小さな円盤が「星」を表現。当該製品も火熱を受けて金属素材が溶解して瘤状に再度、凝固している。
〃 〃 24	〃	三鍬 形台	〃	52.0	115.0	1.0 0.9 27.3	兜鉢の眉庇に固定する際の孔は、菊花文の花芯にあたる部分に三孔穿っている。裏面は三鍬形の先端近くで両側面の縁を内側方向に強く折り曲げた為、両側面の縁の断面が「U」の字状潰されていることから判断すると立物を差し込んで両端の両側縁を折り曲げて固定したものとみられる。三鍬形の先端は魚尾状に抉れ、その近くをハート形に打ち抜いて文様とする。文様を区画する縁の線は、鏨による蹴彫りで仕上げている。主文となる菊花文は、花弁の弁軸を毛彫りで、弁先を半円形の鏨の刃先で打ち込んで文様とする。中央の菊花文は丁寧に鏨で打ち込んだ文様であるが、左右の菊花文の文様は弁軸と弁先が一致しない。文様間を埋める円環状の魚々子は、規格的に打ち込まれてなく粗密のある状態で打ち込まれている事から琉球独自の製品とみられる。

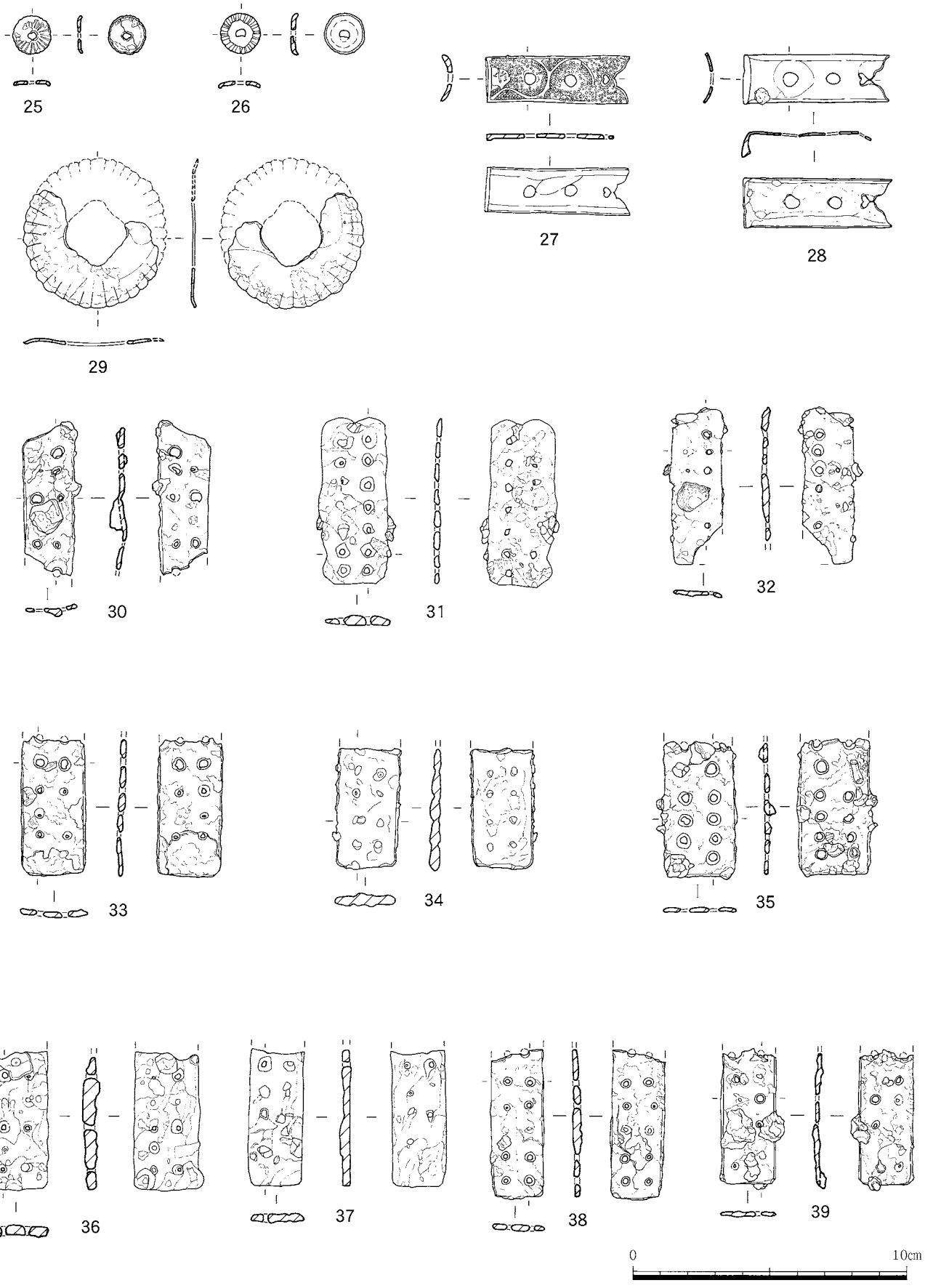


第29図　国指定重要文化財(保存処理済み)
金属製品　武具　立物(17～22 鍬形、23 立物中央飾り、24 三鍬形台)

第７表⑥　国指定重要文化財(保存処理済み)金属製品観察一覧

単位：㎜/g

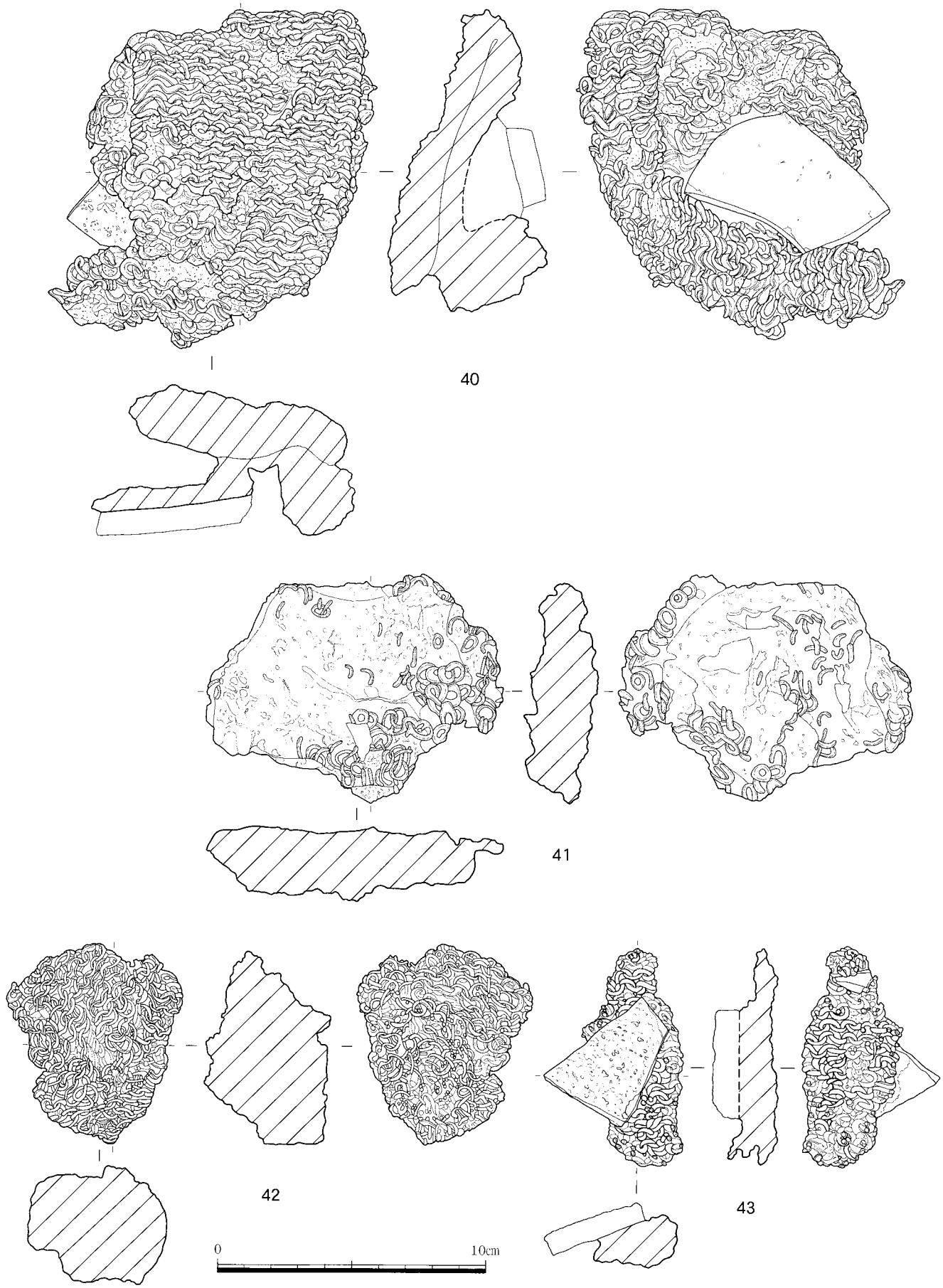
挿図番号 図版番号 遺物番号	分類	名称 仮称	材質	残存長 (縦)	残存幅 (横)	残存最大厚 残存最小厚 残存重量	観　察　事　項
第30図 図版19 25	武具	八双金物の留め金具	青銅製品	13.0	14.0	1.0 1.0 0.6	八双金物とセット関係にある留め金具。菊花文を施した菊座(座金具)で外面に鍍金を施す。内面に木質が付着する。菊花の弁先と弁軸は一致させながら鏨で毛彫りする。中央に歪な粗孔を外側から二回程度穿っている。孔のサイズは、短軸が1.7㎜、長軸で3.0㎜を測った。
〃 〃 26	〃	〃	〃	14.5	14.5	1.5 1.0 1.2	〃　　。菊花文を施した菊座(座金具)で外面にのみ鍍金を施すが中央部分で大きく剥落する。菊花の弁先と弁軸を一致させながら弁軸を鏨で深い毛彫りで打ち込んでいる。内面の孔を穿った際に使用した鏨は隅丸方形状と推定され、一辺が4.0㎜と計測できた。なお、表面には内側から打ち込まれた鏨が隅丸方形状に残っている。隅丸方形状の痕跡は一辺が5.9㎜を測った。内面から穿たれた孔は鏨がずれた状態で打ち込まれていたため、歪な粗孔となる。孔のサイズは、短軸が2.6㎜、長軸で3.8㎜を測った。
〃 〃 27	〃	八双金物	〃	17.0	52.0	2.0 1.0 6.4	鏨で毛彫りと蹴彫りを併用して唐草文を施す。地文は円環状の鏨で魚々子を全体的に丁寧に打ち付けているが、部分的に鱗状となる。文様の縁は蹴彫りで区画する。孔の周辺には魚々子を打ち付けていないことから菊花飾りの鋲(同図25・26)との組み合せて使用されたものとみられる。なお、鍍金は確認できない。左端の屈曲部分で破損している。右端は魚尾状に切り取られている。鋲あるいは鋲入れの孔は二孔とも内側から穿たれている。孔径は左側が3.7㎜×4.0㎜、右側は3.8㎜×4.0㎜を測る。
〃 〃 28	〃	〃	〃	18.0	53.0	3.0 0.5 6.5	無文八双金物で外面にのみ鍍金を施し、内面は地金のままである。左端で内側に屈曲する。右端は魚尾状に切り取られている。鋲あるいは鋲入れの孔は二孔とも外側から穿たれているが粗雑である。孔径は左側が4.7㎜×5.4㎜、右側は4.1㎜×4.8㎜を測る。内面の左側に炭化した麦とみられるものが一粒付着している。
〃 〃 29	〃	据文金物の菊座	〃	42.5	49.0	1.0 0.9 5.0	鍍金は認められない。全体的に内側に窪んで変形する。隅丸方形状の孔を穿っている。孔の長軸は22.5㎜を測る。菊花文の弁先と弁軸は一致する。弁軸は鏨で細線を毛彫りで施す。裏面の一部は火熱を受けてケロイド状となる。
〃 〃 30	〃	札	鉄製品	54.6	18.6	6.0 1.0 6.4	盛上札(第24図参照)の破片で下部の札足(第20図参照)を欠く。孔は半欠の孔を含めて２行10孔が確認される。表裏面とも錆汁が染み出している。表裏面とも赤茶色を全体的に帯びているが部分的に火災の際に消失した木材などの灰が流れて付着し、灰茶色となる。特に裏面は灰の付着が多い。また、錆汁が凝固した際に消し炭なども一緒に付着している。
〃 〃 31	〃	〃	〃	60.0	25.0	4.0 1.0 10.8	碁石頭(第24図参照)の札。ほぼ完形で左側面の下位を僅かに欠いている程度である。孔は肉眼観察では２行11孔を数えるが、軟X線写真撮影の結果では２行14孔が推定された。表裏面とも錆汁が染み出している。両面とも全体的に茶褐色を呈している。部分的に火災の際に消失した木材などの炭化物が付着する。
〃 〃 32	〃	〃	〃	57.0	19.0	3.0 1.0 8.1	盛上札の破片で下部の札足の右隅を欠く。孔は肉眼観察と軟X線写真撮影の結果から２行12孔が確認された。表裏面とも錆汁が染み出して凝固している。両面とも全体的に茶褐色を呈している。正面札頭の左側には火災の際に消失した木材の小破片が付着している。
〃 〃 33	〃	〃	〃	51.0	23.6	2.5 1.0 8.8	札頭を欠いている。札の幅が2.3㎝と幅広となっている状況から推定すると碁石頭の札とみられる。孔は上部の半欠したものも含めて肉眼観察と軟Ｘ線撮影の結果から２行12孔が確認された。表裏面とも錆汁が染み出して凝固している。両面とも全体的に茶褐色を呈している。錆の進行が著しかった為、表裏面の下部で剥離や罅割れがみられる。
〃 〃 34	〃	〃	〃	43.0	22.3	4.0 1.5 10.4	〃　　。札の幅が2.2㎝と幅広であることから推定すると碁石頭の札とみられる。孔は上部の半欠したものも含めて肉眼観察と軟Ｘ線撮影の結果から２行10孔が確認される。表裏面とも錆汁が染み出して凝固している。両面とも全体的に茶褐色を呈している。錆の進行が著しかった為、表裏面で縦方向の罅割れがみられる。
〃 〃 35	〃	〃	〃	49.0	26.2	2.0 1.0 9.3	〃　　。札の幅が2.6㎝と幅広であることなどから推定するとやや幅広の碁石頭の札とみられる。孔は上部の半欠したものも含めて肉眼観察と軟X線撮影の結果から２行12孔が確認される。表裏面とも赤茶色を全体的に帯びているが部分的に火災の際に消失した木材などの灰が流れて付着し、灰茶色となる。特に表面は灰の付着が多い。裏面は部分的に消し炭が付着している。表裏面とも錆汁が染み出して凝固している。両面とも全体的に茶褐色を呈している。正面左側の搦みの孔となわめの孔の二孔には紐革の素材が錆に置換され、折れた角釘の様な状態で残っている。



第30図　国指定重要文化財(保存処理済み)
金属製品　武具(25･26八双金物の留め金具、27･28八双金物、29据文金物の菊座、30～39札)

第７表⑦　国指定重要文化財(保存処理済み)金属製品観察一覧　　単位：㎜/g

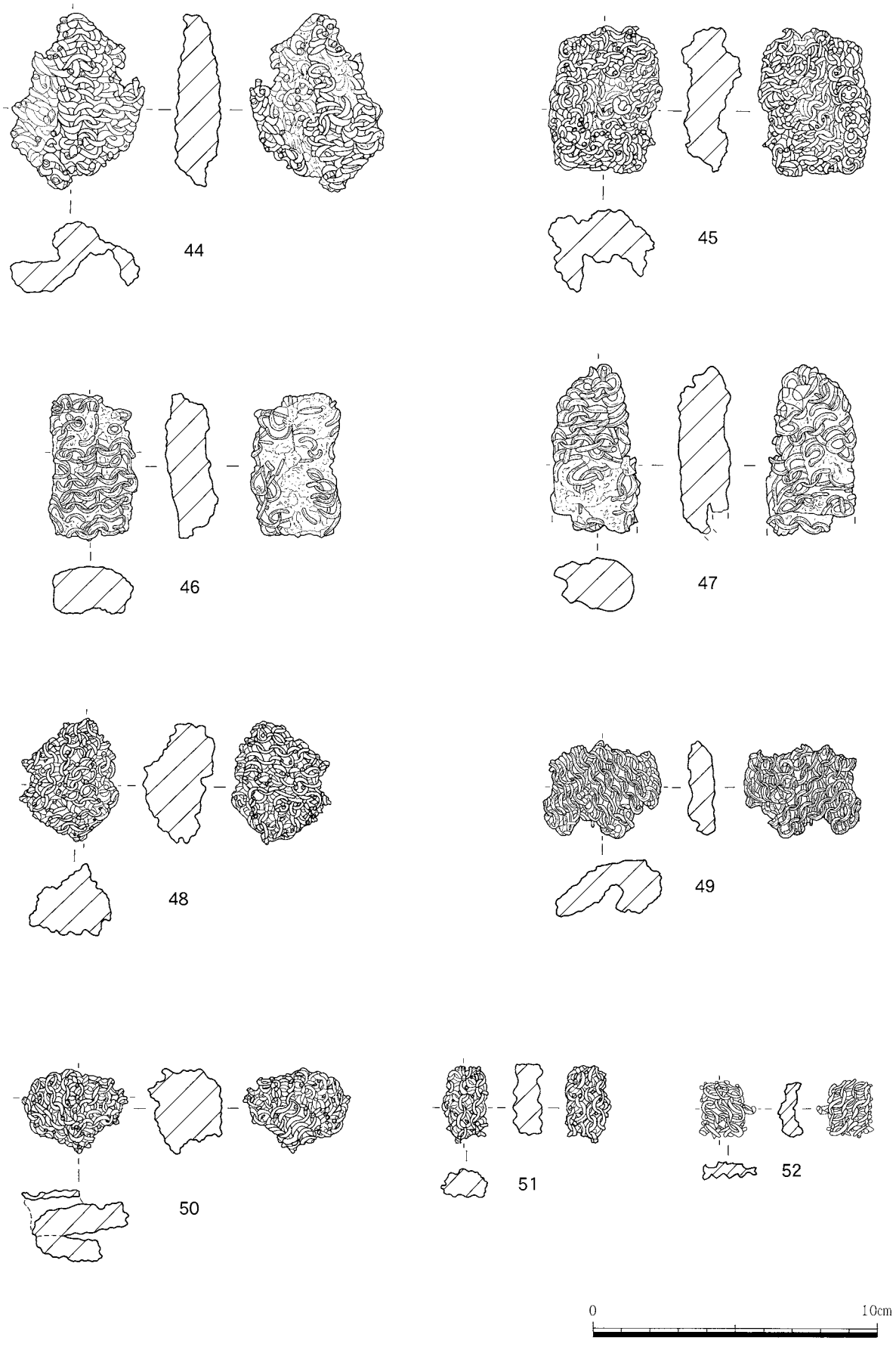
挿図番号 図版番号 遺物番号	分類	名称 仮称	材質	残存長 (縦)	残存幅 (横)	残存最大厚 残存最小厚 残存重量	観　察　事　項
第30図 図版19 36	武具	札	鉄製品	50.4	24.0	3.0 2.0 10.6	札頭を欠いている。札の幅が2.3㎝と幅広であることから推察すると碁石頭の札とみられる。孔は上部の半欠したものも含めて肉眼観察と軟X線撮影の結果から２行10孔が確認された。表裏面とも錆汁が染み出して凝固している。両面とも全体的に茶褐色を呈している。特に表面上部は錆瘤が破裂して地金まで錆で浸食されたようであり、この部分のみ厚みが0.8㎜と極端に薄くなっている。その他、裏面には僅かながら木片が付着するが錆汁の影響を受けて鉄化して磁性をもっている。
〃 〃 37	〃	〃	〃	49.9	19.5	3.0 2.0 7.9	札頭を欠いている。札の幅が1.9㎝と幅が狭いことから判断すると盛上札とみられる。札頭を欠く。孔は肉眼観察と軟Ｘ線写真撮影の結果を２行10孔が確認された。表裏面とも錆汁が染み出して凝固していてる。孔は１孔を除いて塞がっている。両面とも全体的に茶褐色を呈している。裏面に錆汁が溜まって微弱な錆瘤が多くみられる。
〃 〃 38	〃	〃	〃	54.0	19.6	3.0 2.0 8.9	〃　　。札の幅が1.96㎝と幅が狭いことから推定すると盛上札とみられる。札頭を欠く。孔は半欠した孔も含めて肉眼観察と軟X線写真撮影の結果を２行12孔が確認された。表裏面とも錆汁が染み出して凝固している。孔も２・３孔塞がっている。両面とも全体的に茶褐色を呈している。両面に錆汁が溜まって微弱な錆瘤が形成される。罅割れは表裏面とも縦方向に入っている。
〃 〃 39	〃	〃	〃	49.0	20.2	2.0 1.0 8.2	〃　　。札の幅が2.02㎝と幅が狭いことから推察すると盛上札とみられる。札頭を欠く。孔は半欠した孔も含めて肉眼観察と軟X線写真撮影の結果を２行12孔が確認された。表裏面とも錆汁が染み出して凝固していて孔の開いているものは４孔であった。両面とも全体的に茶褐色を呈している。両面に錆汁が発生し、裏面では錆汁が溜まって７～11㎜大の錆瘤が３個形成される。また、裏面では青銅製品の細破片が溶けた状態で付着している。
第31図 図版21 40	〃	鎖帷子	〃	125.0	122.0	59.0 7.0 525	溝のある円柱状の棒に針金を巻き付けて鑿で切り離して鎖の単体を作り、鎖の単体を連結して八重鎖(第23図)とする。京の内倉庫跡から出土した連結鎖の破片は、本資料も含めて13点が「八重鎖」と判断した。13点の資料は、全て火災による火熱を受けて鉄素材の溶解・再凝固、そして錆による素材の劣化などが進行していた。これらの資料は、全て保存処理を終え安定している。当該資料は連結鎖を二つに折り畳んだ状態にあり、正面は概して横位に連結鎖の接続部分の輪が揃うような状態にある。正面は全体的に錆による腐食で赤茶色を呈していて鎖表面から錆汁や錆粉が吹き出したような状態である。単体鎖の中には鎖の表面が錆によって剥離して内部の鉄素材が繊維状となって露出した箇所が部分に散見される。裏面の中央より右側には中国産褐釉陶器壺(釉薬は黄茶色で、釉下に白色の化粧土を塗布)の胴部破片が付着している。裏面上部は火災によって鎖が飴状に溶解し、そのままの状態で凝固した部分がある。また、下半部においては鉄素材の内部に含まれていた水分が錆汁となって表面に染み出してそのまま凝固した状況にある。錆は表面より裏面の錆が進行が著しい。表裏面とも錆による素材の膨張がみられる。単体鎖のサイズは、太さ2.2㎜、内径5.0㎜、外径9.0㎜を計った。
〃 〃 41	〃	〃	〃	85.0	110.0	26.0 3.0 220	〃　　。火災による火熱の影響と錆によって固形化。籠手や佩楯などの部位に使用された連結鎖が考えられる。鎖は全体的に錆の影響が著しく茶褐色を帯び、錆で膨らんでいる。また、鉄素材内部に含まれていた水分が錆汁になって全面に染み出して固まっている。裏面は錆汁がガラス状に変化した部分や鎖表面が剥離して内部が繊維の束状となる部分も散見される。単体鎖のサイズは、太さ1.8㎜、内径3.9㎜、外径8.1㎜を計った。
〃 〃 42	〃	〃	〃	75.0	65.0	44.5 10.0 150	火災による火熱の影響と錆によって固形化した八重鎖で、籠手や佩楯などの部位に使用された連結鎖が考えられる。正面左側に赤錆がみられる。他は灰褐色を帯びる単体鎖の太さは1.3㎜、単体鎖の内径は3.9㎜、外径が6.7㎜を計った。
〃 〃 43	〃	〃	〃	80.0	37.5	18.0 3.0 54.9	火災による火熱の影響と錆によって固形化した八重鎖で、籠手や佩楯などの部位に使用された連結鎖が考えられる。正面中央付近に中国産褐釉陶器の壺とみられる破片が付着する。陶器の釉薬は火災の火熱を受け釉が溶けて小さな気泡(直径１㎜前後)となった状態で固まっている。鎖は表裏面とも錆が著しく、錆脹れや錆汁が固まった状態で観察される。錆の影響で色合いが赤茶色となる部分が両面で観察できる。他は火熱の影響を受けて灰褐色となる。単体鎖の太さは1.8㎜、単体鎖の内径は4.6㎜、外径が7.8㎜を計った。



第31図　国指定重要文化財（保存処理済み）
金属製品　武具（鎖帷子）

第７表⑧　国指定重要文化財(保存処理済み)金属製品観察一覧　　単位：㎜/g

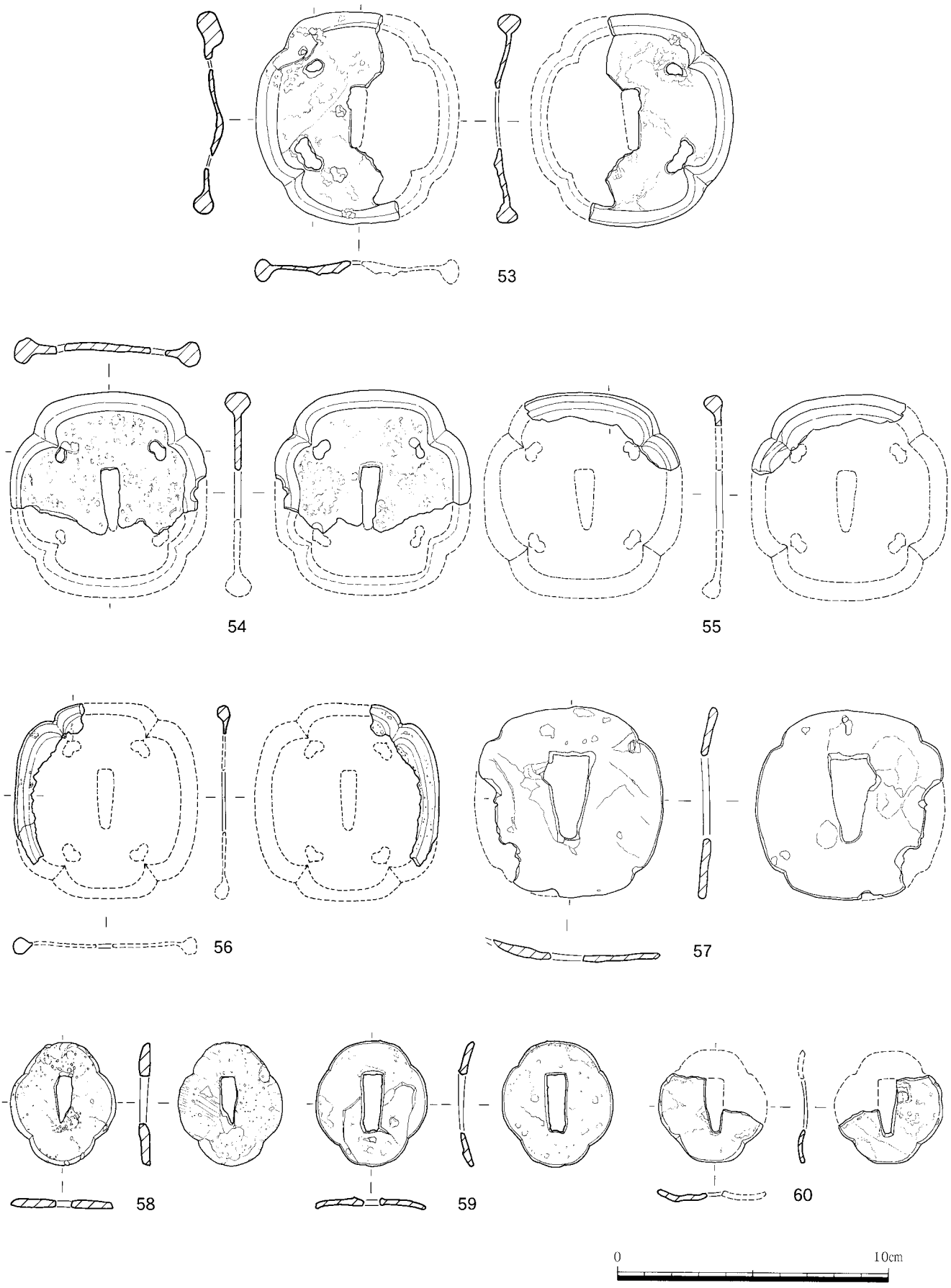
挿図番号 図版番号 遺物番号	分類	名称 仮称	材質	残存長 (縦)	残存幅 (横)	残存最大厚 残存最小厚 残存重量	観　察　事　項
第32図 図版23 44	武具	鎖帷子	鉄製品	61.0	46.5	19.0 2.0 36.5	火災による火熱の影響と錆によって固形化した八重鎖で、籠手や佩楯などの部位に使用された連結鎖が考えられる。単体鎖の連結部分は縦方向に揃っている部分がみられる。錆の進行が著しく、全体的に赤茶色を帯びている。表裏面とも錆脹れや錆汁が発生し、表面の一部で単体鎖の表面剥離によって内部が繊維状の束となって露出している。本資料は横断面からみると波状の形状を呈する。単体鎖の太さは2.5㎜、単体鎖の内径は5.5㎜、外径が7.8㎜を計った。
〃 〃 45	〃	〃	〃	51.0	39.0	25.0 2.0 40.3	火災による火熱の影響と錆によって固形化した八重鎖。籠手や佩楯などの部位に使用された連結鎖が考えられる。鎖の正面は全体的に単体の鎖が錆によって表面が剥落し繊維の束状となっている。色合いは全体的に灰褐色を呈し、正面が僅かに茶褐色に変色する。単体鎖のサイズは、太さ1.6㎜、内径4.2㎜、外径7.15㎜を計った。
〃 〃 46	〃	〃	〃	50.0	31.0	15.0 3.5 30.9	〃　。　〃　。連結鎖の横断面を観察すると左側で折り畳まれている。鎖は全体的に錆脹れや錆汁などの影響を受けて赤茶色に変色する。 単体鎖のサイズは、太さ2.4㎜、内径5.0㎜、外径9.2㎜を計った。
〃 〃 47	〃	〃	〃	57.0	30.0	18.0 3.0 35.9	〃　。　〃　。　〃　。　〃　。単体鎖のサイズは、錆汁が全体を覆っていて内径と外径は計測ができないが、太さのみ2.2㎜を計った。
〃 〃 48	〃	〃	〃	43.0	34.0	24.0 7.5 23.3	〃　。　〃　。正面の鎖は不規則な形で畳み込まれているが、裏面は全体的に縦方向に畳み込まれたような状態にある。色合いは全体的に灰褐色を呈し、正面が僅かに錆の影響を受けて茶褐色に変色する。単体鎖のサイズは、太さ1.4㎜、内径4.0㎜、外径7.8㎜を計った。
〃 〃 49	〃	〃	〃	32.0	40.0	18.0 5.0 15.1	〃　。　〃　。鎖の正面は全体的に同一方向に畳み込まれたような状態にある。色合いは全体的に灰褐色を呈し、正面が僅かに錆の影響を受けて茶褐色に変色する。単体鎖のサイズは、太さ1.6㎜、内径4.0㎜、外径8.05㎜を計った。
〃 〃 50	〃	〃	〃	28.0	37.0	25.5 2.0 14.9	火災による火熱の影響と錆によって固形化した八重鎖。側面の状況から空洞部分が上下二カ所で確認される事から連結鎖を２・３回折り返して畳み込まれているようである。裏面のみ連結鎖が半分程度同一方向に畳み込まれたような状態にある。色合いは全体的に灰褐色を呈し、裏面のみ僅かに錆の影響を受けて茶褐色に変色する。籠手や佩楯などの部位に使用された連結鎖が考えられる。単体鎖のサイズは、太さ1.4㎜、内径4.5㎜、外径7.8㎜を計った。
〃 〃 51	〃	〃	〃	27.0	15.0	10.0 1.0 4.0	〃　。　〃　。正面の鎖は不規則な形で畳み込まれているが、裏面は全体的に縦方向に畳み込まれたような状態にある。色合いは全体的に灰褐色を呈し、正面が僅かに錆の影響を受けて茶褐色に変色する。単体鎖のサイズは、太さ14.5㎜、内径4.1㎜、外径6.8㎜を計った。
〃 〃 52	〃	〃	〃	20.0	19.0	7.0 1.0 2.2	〃　。　〃　。鎖は一枚のみで、鎖が縮まった状態にある。色合いは正面が灰褐色を呈し、裏面が灰黒色を帯びている。籠手や佩楯などの部位に使用された連結鎖が考えられる。単体鎖のサイズは、太さ1.5㎜、内径4.8㎜、外径6.9㎜を計った。



第32図　国指定重要文化財（保存処理済み）
金属製品　武具（鎖帷子）

第７表⑨　国指定重要文化財(保存処理済み)金属製品観察一覧　　単位：㎜/g

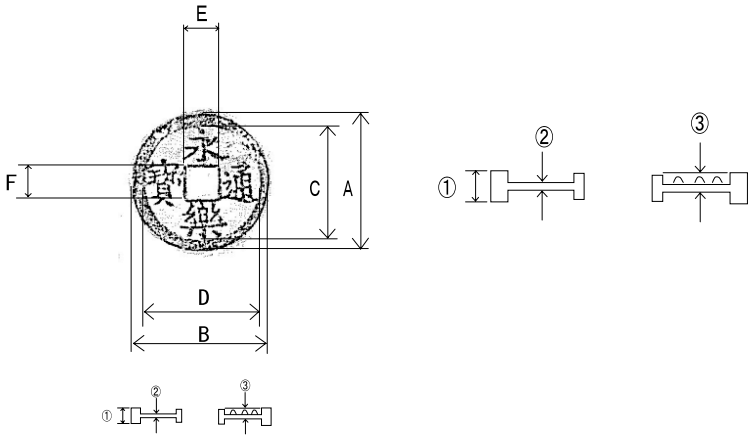
挿図番号 図版番号 遺物番号	分類	名称 仮称	材質	残存長 (縦)	残存幅 (横)	残存最大厚 残存最小厚 残存重量	観　察　事　項
第33図 図版25 53	武器	刀剣 鍔	青銅 製品	77.0	53.0	9.0 1.0 75.5	刀剣の鍔で木瓜鍔の範疇にある。耳(鍔縁)は丸味のある所謂環耳(玉縁状)で、文様は耳近くの抉れた箇所にハート形に透かして中空とする。推定された茎孔は短軸で上端が5.4㎜、下端は1.9㎜程度が推定された。長軸は21.6㎜を測った。鋳型を二種類(鋳鍔本体と耳に分割)を組み合わせて製作されたようである。
〃 〃 54	〃	〃	〃	52.0	72.0	9.0 2.0 82.3	〃　。　〃　。茎孔は短軸で上端が7.0㎜、下端は推定で3.0㎜程度が推定された。長軸の復元は推定で19.5㎜前後となった。　〃　。
〃 〃 55	〃	〃	〃	29.0	57.0	6.5 2.0 19.3	刀剣の鍔で木瓜鍔の範疇にあるタイプで、鍔の上部破片とみられる。耳(鍔縁)は丸味のある所謂環耳(玉縁状)タイプに含まれる鋳型を二種類(鋳型を鍔本体と耳に分割)を利用して仕上げた鍔とみられる。
〃 〃 56	〃	〃	〃	59.0	25.0	6.0 0.8 13.3	同図53と同様の木瓜鍔の範疇にあるタイプで、鍔の縁辺部の破片。耳(鍔縁)は丸味のある所謂環耳(玉縁状)タイプに含まれる。鋳型を二種類(鋳型を鍔本体と耳に分割)を利用して仕上げた鍔とみられる。
〃 〃 57	〃	〃	〃	80.0	67.0	4.0 2.0 70.4	刀剣の鍔で木瓜鍔の範疇にある。鍔の耳(鍔縁)は鍔と同じ均一的な厚さで縁まで続き、縁辺部が面となる所謂角耳である。茎孔は短軸で上端が13.2㎜、下端は4.7㎜程度が推定された。長軸は29.9㎜を測った。茎孔のサイズから薙刀などの鍔が考えられる。
〃 〃 58	〃	切羽	〃	45.0	38.0	4.0 2.0 20.9	切羽の平面形態は木瓜形を呈する。刀剣の茎が入る茎孔は短軸で上部は5.2㎜、下部が1.5㎜を測る。長軸は17.4㎜を計測した。裏面の茎孔及び両側にバリの除去や面を成形した際に生じた削り調整痕が粗い線状痕となっている。鋳型に銅素材を流し込んで製作されたため、裏面の縁辺部に角ができている。
〃 〃 59	〃	〃	〃	46.0	40.0	3.0 1.5 16.6	〃　。刀剣の茎が入る。茎孔は短軸で上部は7.3㎜、下部が5.1㎜を測る。長軸は20.6㎜を計測した。鋳物製品である。表面の縁辺部は丸味があり、裏面の縁辺部は角となっている。
〃 〃 60	〃	〃	〃	32.5	36.0	2.0 1.5 10.9	木瓜形の切羽とみられる資料で表面縁辺部が内側に湾曲した為、茎孔付近で盛り上がっている。茎孔は裏面から表面に向かって斜位に穿っている。刀剣の茎が入る茎孔は、短軸で上部は推定で7.1㎜、下部が2.8㎜を測る。長軸は推定で18.1㎜と図上復元した。鋳型に裏面から流し込んで製作されたため、裏面の縁辺部に角ができている。



第33図　国指定重要文化財（保存処理済み）
金属製品　刀剣（53～57鍔、58～60切羽）

2．銭貨（第35図61～67・図版27－61～67）

重要文化財指定の銭貨は、軟X線撮影及び兵庫埋蔵銭調査会の刊行図書（註１）などを利用して、照合を行なった結果、銭貨は全て中国銭であった。銭貨の種類として北宋銭の至道元寶（初鋳年995年）・治平元寶（初鋳年1064年）・元豊通寶（1078年）・紹聖元寶（初鋳年1094年）・聖宋元寶（初鋳年1101年）の５種類と明銭の洪武通寶（初鋳年1368年）１種類の合計６種類の銭貨が得られている。銭貨の計測に際しては、兵庫埋蔵銭調査会の刊行図書（註１）などを参考にして第34図に呈示した計測部位図を作成した。銭貨の特徴などは第８表に呈示した。



第34図　銭貨の各部計測点（左:平面、断面　右:断面拡大図）

註文献

註１．永井久美男編『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』兵庫埋蔵銭調査会　株式会社ぎょうせい関西支社1994年10月22日　初版第１刷。

第８表　国指定重要文化財(保存処理済み)銭貨観察一覧

単位：㎜/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	銭種	鋳造種類	初鋳年	素材	読み方	状態	書体	肉郭外径 A B	肉郭内径 C D	方穿 E F	断面計測部位 ①	 ②	 ③	重量	観　察　事　項
第35図 図版27 61	至道 元寶	不明	北宋 995年	銅銭	回読	破損	草書	－ 26.1	－ 19.7	5.6 －	1.7	0.8	1.2	2.3	「至」の一字が欠落。肉郭の幅は2.8㎜と幅広である。面の左側破損箇所は火熱を受けて金属素材が溶解し、再凝固の状態で残っている。その為、破損面が丸味を帯びている。
〃 〃 62	治平 元寶	〃	北宋 1064年	〃	〃	〃	篆書	－ －	－ －	－ －	1.5	1.0	1.1	3.0	軟X線写真撮影(図版26－62)の結果、「平」と「元」の二字を判読。書体が治平元寶と一致。火災による火熱で銭貨の半分以上が溶解し、歪な形となって再凝固。背の肉郭が不鮮明である状況から判断すると模鋳銭の可能性が高い。
〃 〃 63	元豊 通寶	〃	北宋 1078年	〃	〃	完形	行書	24.9 24.7	－ －	5.7 5.6	1.8	－	－	4.3	面が全体的に青錆で覆われ、脆弱な状態である。軟X線写真撮影(図版26－63)の結果、「元豊通寶」と判読された。
〃 〃 64	紹聖 元寶	〃	北宋 1094年	〃	〃	〃	〃	24.8 24.9	19.0 18.5	6.3 6.4	1.3	1.3	1.3	4.1	面が全体的に青錆で覆われた状態であり、銭の文字部分が一部摩滅している。軟X線写真撮影(図版26－64)の結果、「紹聖元寶」と判読された。
〃 〃 65	聖宋 元寶	〃	北宋 1101年	〃	〃	〃	〃	25.1 24.6	19.9 20.5	5.5 5.8	1.6	1.0	1.2	3.6	面と背の一部は火熱を受けて溶解しケロイド様に再凝固。肉郭2.0㎜～2.2㎜と幅広である。背の孔郭の縁幅が0.9㎜～1.7㎜と面側の孔郭より幅広である。
〃 〃 66	洪武 通寶	〃	明 1368年	〃	対読	〃	楷書	22.3 22.2	18.9 19.2	5.7 5.8	1.6	1.0	1.4	4.4	火熱を受けて面の左側が水滴の様に溶けて再凝固。背上部は縦皺様に溶解し、再凝固。面文字は鮮明。青錆は背より面に集中的に発生。
〃 〃 67	洪武 通寶	〃	明 1368年	〃	〃	〃	行書	22.9 23.0	19.1 18.8	6.1 5.8	1.6	0.7	1.1	3.5	上記66と同様に火熱を受けて面の右下に水滴の様に溶けて再凝固。面文字はやや鮮明。

注「－」：計測不可

3．ガラス玉（第35図68・69）・（図版28－68・69）

ガラス玉（単独の玉や数珠を含む）の分類に関しても、国指定重要文化財のガラス玉、倉庫跡出土の未指定のガラス玉、石積みSA33・34出土のガラス玉と便宜的に共通の分類で整理した。

第35図68・69は倉庫で保管されたものが火災による加熱で溶解・再凝固したガラス玉であるが、これらのガラス玉の分類に際しては、側面の形状や成形などの特徴から第10表に呈示したⅠ類～Ⅴ類までの５種類に分類した。なお、個々の特徴などを第９表に整理した。

第９表　国指定重要文化財(保存処理済み)ガラス玉観察一覧

単位：㎜/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	形状分類	色調	サイズ 長軸 短軸	サイズ 厚さ	孔径 最大 最小	重量	素材	残存状況	2次的加熱の有無	観察事項
第35図 図版28 68	Ⅱ･Ⅳ	青色 白濁	3.00 2.80	1.5 0.7	0.90 0.50	9.5	ガラス	脆い	有	ガラス製小玉の塊。淡青色のガラス小玉が火災による火熱を受けて溶解・再凝固したガラス小玉の塊。裏面はガラス小玉が溶けて灰白色を帯びている。部分的に灰黒色を呈する。表面の観察から製作方法を推定すると、溶けた青色ガラスを針金状の棒（残存する小玉の内径から0.5㎜を計った。恐らく棒の太さは0.5㎜程度と推定される。）に巻き付けて製作された。巻き付け技法である。外観からのガラス小玉の形状（第10表参照）は、概ね臼形（扁楕円形）のⅡ類を主体とし、歪な形状となるⅣ類が含まれている。
〃 〃 69	Ⅱ･Ⅳ	青色	7.70 5.30	3.7 0.5	0.90 －	125.4	ガラス	脆い	有	ガラス製小玉の塊。ガラス小玉（淡青色の小玉を主体に緑色、赤色、白色の四色が用いられている）が火災による火熱を受けて溶解・再凝固したガラス小玉の塊。裏面はガラス小玉が溶けて茶白色を帯びている。部分的に灰白色や灰黒色を呈する。表面の観察から製作方法を推定すると、溶けたガラスを針金状の棒（残存する小玉の内径から0.9㎜を計った。恐らく棒の太さは0.9㎜程度と推定される。）に巻き付けて製作された。巻き付け技法である。外観からのガラス小玉の形状（第10表参照）は概ね臼形（扁楕円形）のⅡ類を主体とし、歪な形状となるⅣ類が僅かに含まれているようである。表面の右下から裏面左下までの範囲内にはガラス小玉を収納した際に使用した布袋などが、火災による火熱を受けて溶解したガラスと布繊維（0.2㎜四方）が密着した状態で消失した事を示す繊維痕が観察できる。

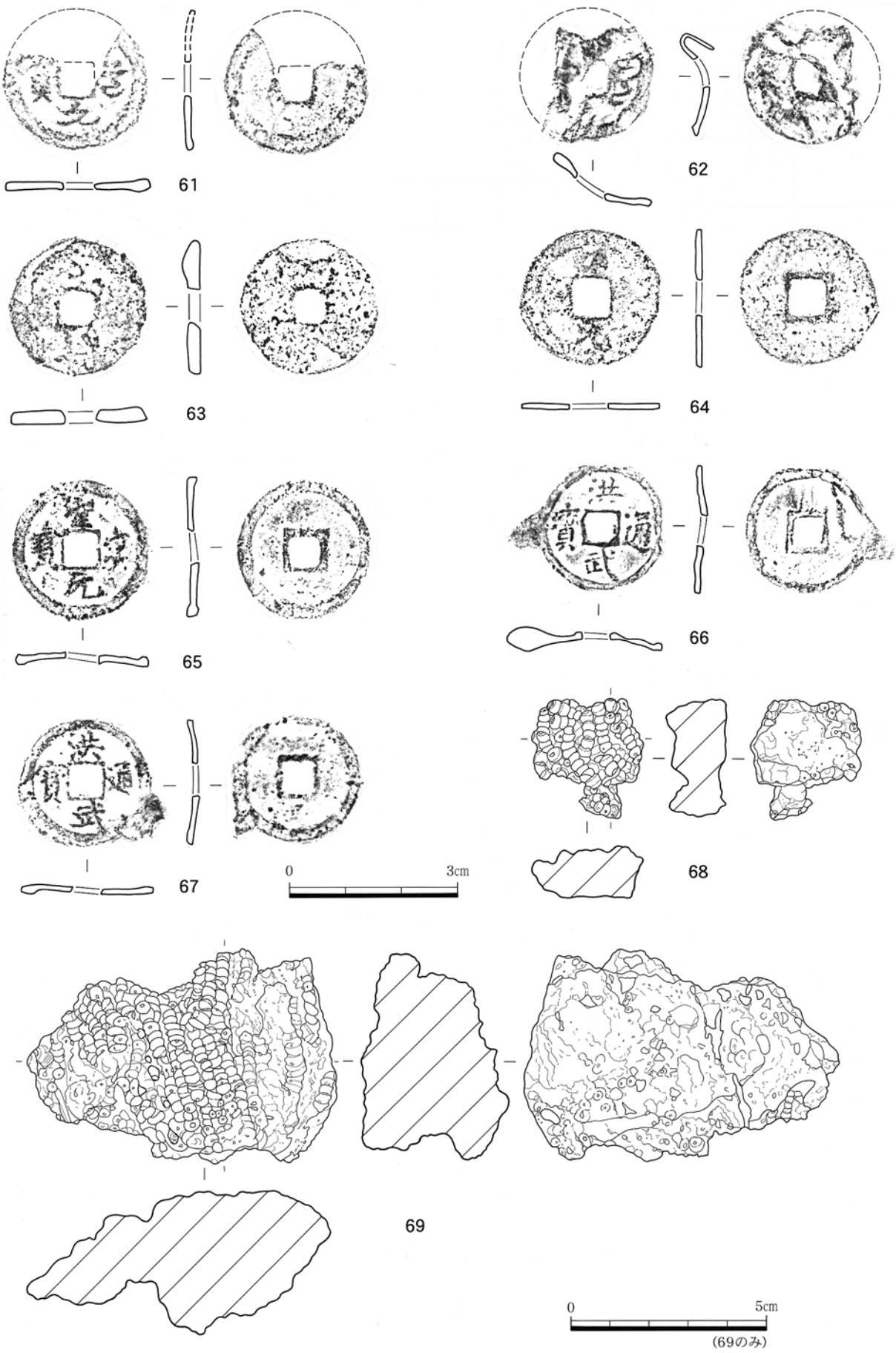
注「－」:計測不可

第10表　ガラス玉の分類概念

種類	形状	特徴など
Ⅰ類		側面観が正円、若しくは円形となるもの
Ⅱ類		側面観が臼形、若しくは扁楕円形のもの
Ⅲ類		側面観が隅丸三角形、若しくはこれに近似するもの
Ⅳ類		側面観が成形時に崩れて歪な形状となるもの
Ⅴ類	－	火熱を受け癒着・溶解したガラス玉の塊で不定形となるもの

第11表　国指定重要文化財の保存処理済み点数

分類	種類			個数
工具類・生産用具	鋸		鉄	1
	錠		〃	1
	蝶番		〃	1
装身具	金銅製環状製品		青銅	1
祭祀用具	鏡		〃	1
	香炉	口縁部	〃	1
	香炉	胴部	〃	1
	香炉	把手	〃	1
	鈴		〃	2
	長柄付片口銚子	口縁部	鉄	2
武具	兜鉢	斎垣	青銅	2
		矧板	青銅と鉄	2
		立物（鍬形）	青銅	3
		立物	〃	3
	祓立台	立物	〃	1
	三鍬形台		〃	1
	八双金物	留め金具	〃	2
	八双金物		〃	2
	据文金物	菊座	〃	1
	札		鉄	10
	鎖帷子		〃	13
武器	刀剣鍔		青銅	5
	切羽		〃	3
銭貨				7
合計				67



第35図　国指定重要文化財
銭貨・ガラス玉（61～67 銭貨、68・69 ガラス玉の塊）

4．陶磁器類（第36図１・２、第37図３・４～第38図５～７）

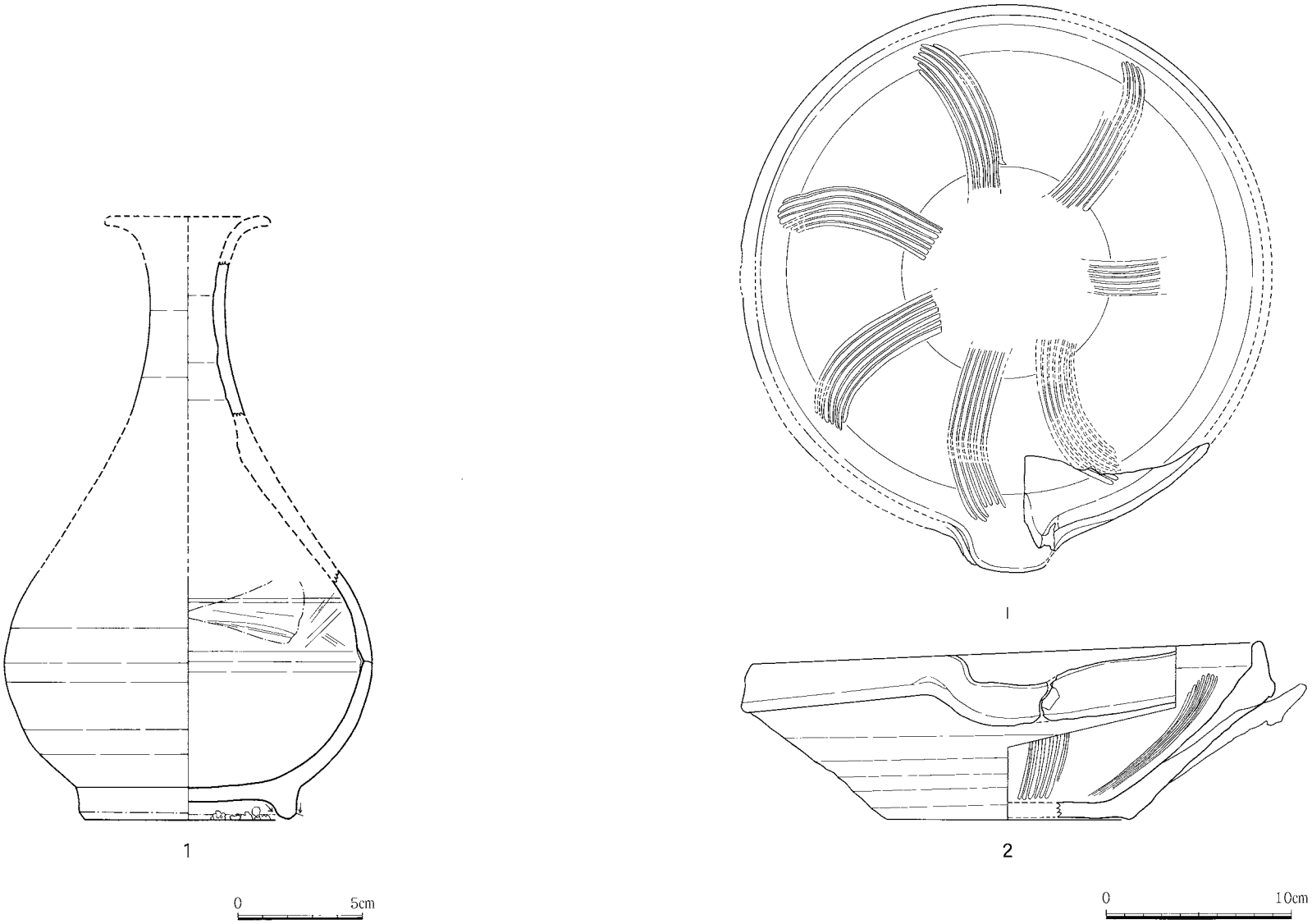
国の重要文化財に指定された陶磁器518点の中から新たに土壙SK01（倉庫跡）より出土した破片の接合を進めた結果、７点が接合できたので改めて報告する。個々の特徴については、第12表に記した。

第12表　国指定重要文化財(保存処理済み)陶磁器類観察一覧

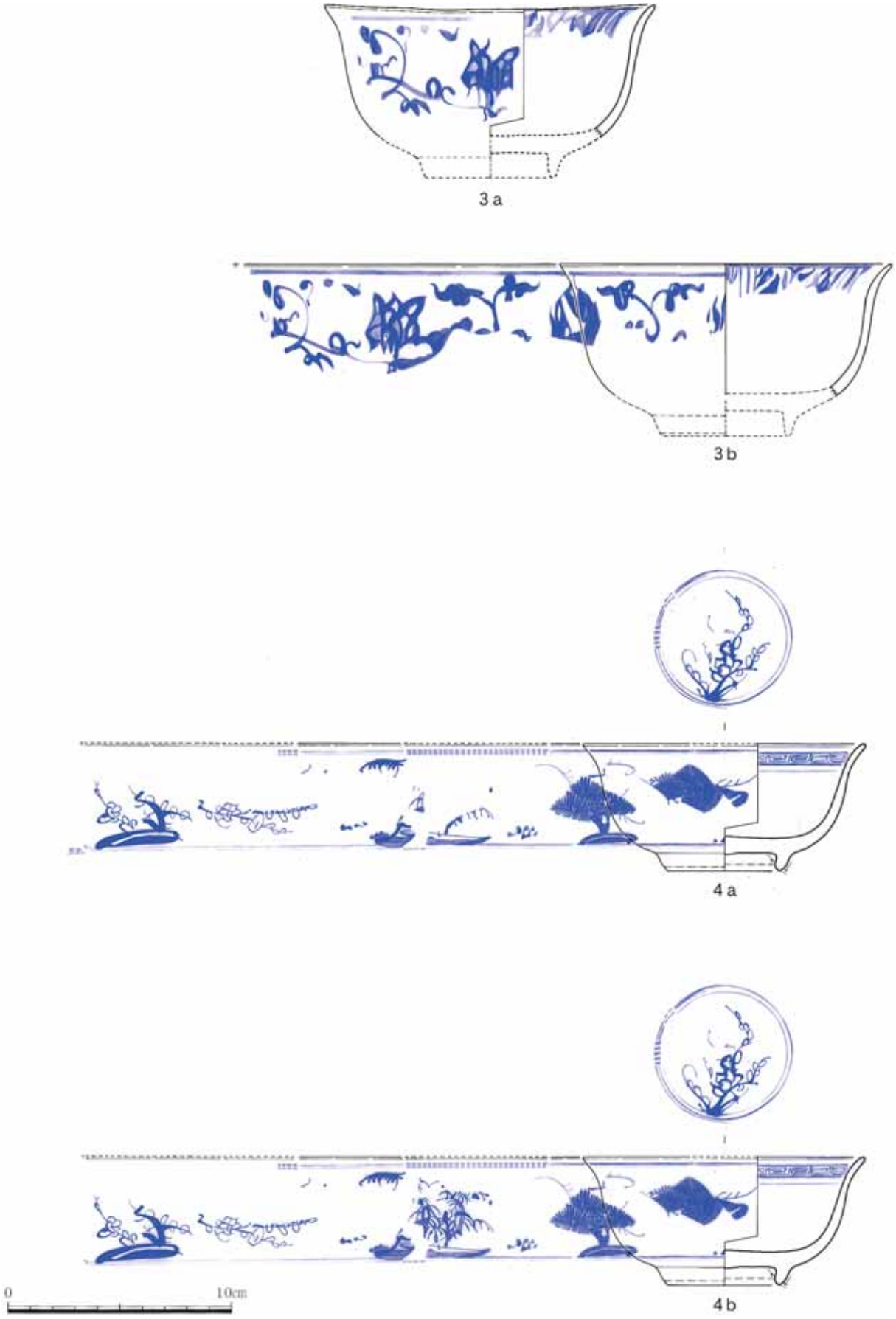
単位：cm

挿図番号 遺物番号	名称・ 仮称	口　径 器　高 高台径	素地･釉色	施釉･呉須(藍色)の発色	観　察　事　項　等	出土地点 出土層
第36図 1	白磁瓶 （玉壺春瓶）	(6.6) (24.3) 8.8	灰白色の微粒子。劈開面から微細な気泡痕が僅かに観察できる。青白色の透明釉。	外面全体を総釉後に畳付の釉薬を掻き取って露胎とする。瓶の内部に注ぎ込んだ釉薬は全体に掛かるように施すが、腰部中央付近で釉薬が掛かっていないところが発生したようである。その部分のみ露胎する。	腰下部に胴継ぎの痕跡が確認される。畳付の内端と外端は丸味を持たせて成形。高台内面途中から外底面縁辺部分は丸味のある削りで成形している。両面には粗い貫入がある。内面の成形は雑で、粗い条痕様の調整が斜位方向や横位の方向に入っている。新たに接合できた部位は、腰部上部、高台脇、高台であった。 参考：首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）－沖縄県教委1998年刊行の第68図28参照。	SA20 第2層・ 第3層・ 第4層
〃 2	備前擂鉢	28.4 8.3～9.5 13.4	茶紫色の粗粒子。素地に細かい白色や黒色鉱物を多量に含む。希に２㎜×６㎜大の粗い白色や淡茶色の鉱物を含む。	自然釉とみられる茶色の釉が外面の口縁部で部分的に観察できる。	口縁部は盤口状の肥厚帯に注ぎ口を設けている。内面のおろし目は７条で一組の単位を基本とする。櫛目(幅２㎝)は底面から口頸部近くまで施している。外面の成形は内面より雑である。新たに接合できた部位は、注ぎ口の破片と注ぎ口直下の胴部片であった。新たな破片資料の追加で注ぎ口の形状が明確となった。 参考：同上発掘調査報告書（Ⅰ）沖縄県教委1998年刊行の第82図１参照。	SA20 第2層・ SA19 第2層
第37図 3	明青花碗	14.8 5.9 7.7	淡灰白色の細粒子。淡灰白色の透明釉。貫入なし。	残存部位(口縁～腰下部)は総釉。呉須の発色は悪く不鮮明。呉須が釉上で浮遊する。	外面の口縁と腰下部に各一条の界線(界線は幅広で2.5～3.0㎜)、胴部に主文の宝相華唐草文を描く。内面の口縁に一条の界線と四方襷文を描いているが、呉須は釉上で流れて浮遊する為、文様が確認しにくい。新たな破片(口縁～胴部)資料の追加で、主文となる花文が胴部５箇所に配置されたことが明かとなった。 参考：同上発掘調査報告書（Ⅰ）沖縄県教委1998年刊行の第57図５参照。	SA19･20 畦第2層・ 第4層 SA20 第3層
〃 4	明青花〃	12.6 5.7 5.1	淡灰白色の微粒子。淡青白色の釉。貫入なし。	両面に総釉した後に畳付外端から高台内面途中までの釉を掻き取って露胎とする。呉須の発色は鮮明。	外面の口縁と腰下部に二条一組の界線、胴部に松竹梅の文様を描く。内面は口縁に雷文を施し、その上下に一条の界線で区画界線とする。内底(見込み)に月が欠落した梅月文を描き、これを二重圏線で閉じる。新たな破片(口縁･胴部)資料の追加で、竹文の展開が明確となった。 参考：同上発掘調査報告書（Ⅰ）沖縄県教委1998年刊行の第59図26参照。	SA19 第2層・ 第3層・ 第4層
第38図 5	明青花〃	(15.6) (7.5) 5.4	淡灰白色の細粒子。淡灰白色の釉。貫入なし。	口縁端部が欠損するが総釉後に畳付外端から高台内面途中までの釉を掻き取って露胎する。呉須はやや鮮明であるが呉須一部釉上に浮遊し茶黒色に黒ずむ。	外面の口縁には省略した雷文と二条一組の界線を描き、胴部に草花文を描いている。腰下部にも二条一組の界線を描く。内面は口縁に梵字？と二条一組の界線を施す。内底(見込み)には如意頭雲文(霊芝雲文)と二重圏線が描かれている。新たな破片(胴部)資料により、渦巻き模様の草花文の一部が追加された。 参考：首里城跡京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）沖縄県教委1998年刊行の第58図11参照。	SA19･20 畦第2層・ 第4層
〃 6	明青花瓶	－ － －	淡灰白色の細粒子。劈開面から微細な気泡痕が多く観察できる。淡灰白色の釉。二次的な火熱を受けて釉の表面がアバタ状となる。貫入なし。	残存部の頸部は総釉。呉須の発色はやや鮮明。	頸部には梵字文を並列した形で描いている。この梵字文の上下に二条一組の界線を描き、上位にある界線から蕉葉文の一部が描かれているようである。下位の界線から下には宝相華唐草文の一部が描かれている。新たな破片(胴部)資料により、宝相華唐草文の渦巻き模様の唐草文が追加され、宝相華唐草文と推定された。 参考：同上発掘調査報告書（Ⅰ）沖縄県教委1998年刊行の第62図49参照。	SA19･20 畦第3層
〃 7	青花ベトナム水注	－ － －	光沢のある灰白色の微粒子。劈開面から細かい気泡痕が多く観察できる。淡灰白色の釉。〃　。　〃　。	外面は底面を除いて総釉し、内面が無釉で露胎となる。呉須は暗青色で鮮明。	三爪龍型の水注で龍の頭と尾などが欠落する。龍の胴部の部分は龍の身を輪切りにしたような複数の型から起こした物を継ぎ足して完成させている。内面に継ぎ足しの痕跡が顕著に窺える。また、注ぎ口も龍の尾または首を縦に切ったような型から起こした物を中央で貼り合わせている。鈎爪は底部近くに三爪が描かれている。新たに追加された破片は龍の背中の鰭の破片が接合された。 参考：同上発掘調査報告書（Ⅰ）沖縄県教委1998年刊行の第77図11参照。	SA20 第2層

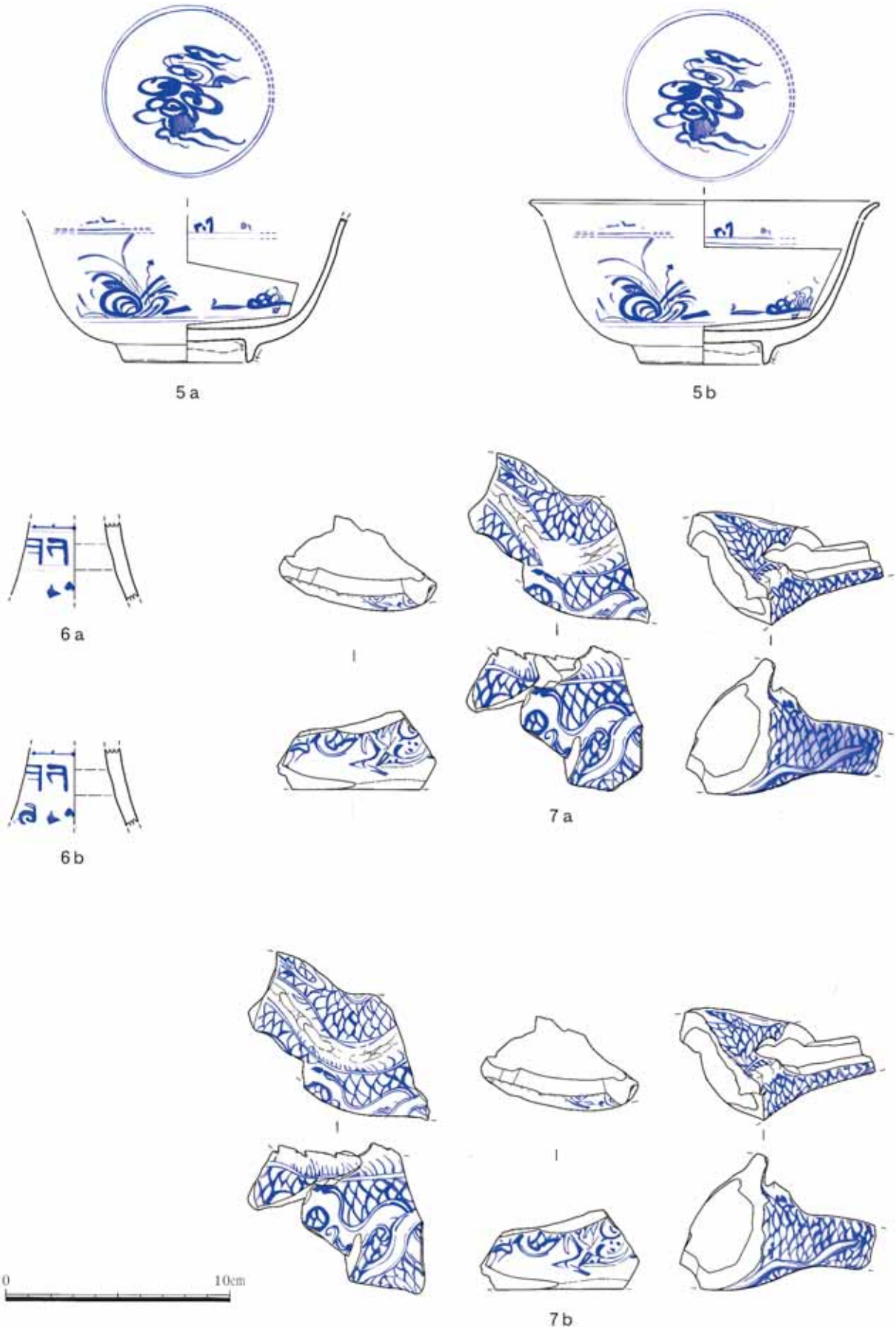
注（　）:推定､「－」:計測不可



第36図　新資料（倉庫跡出土品）の追加で復元・修正された重要文化財　白磁（1.瓶）、**中世陶器**（2.擂鉢）



第37図　新資料（倉庫跡出土品）の追加で復元・修正された重要文化財
明青花（３・４.碗）　a：接合前、b：接合後の図



第38図　新資料（倉庫跡出土品）の追加で復元・修正された重要文化財
明青花（5.碗、6.瓶）　**ベトナム明青花**（7.水注）
a：接合前、b：接合後の図

５．国指定重要文化財の陶磁器類と新たに接合できた資料（第39図１･２、第40図３･４、第41図５、第42図６、第43図７～９、第44図10、第45図11）

国指定重要文化財として指定されている京の内倉庫跡より出土した陶磁器類で、京の内地区以外のその他の地域（下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡）から新たな破片資料の発見があった。

この新資料の発見により重要文化財との接合が可能となったものや、新資料によって判然としなかった陶磁器類の文様展開、そして陶磁器類のセット関係などが判明した。

以下に重要文化財の陶磁器類と新たに接合できた資料と新たに追加された破片資料を含めて報告するが、個々の特徴などは第13表①～④に記した。

重要文化財との新たな接合や破片資料の追加によって特に注目された資料について、記すると第40図４の元青花は、京の内出土の同図４aでは龍の左前足や見込みの花文あやめ科の「ひおうぎ」などが図化されていたが、同図４aの資料追加により龍の全体形が類似資料などから復元が可能となった事は大きな成果であった。その他、第42図の明青花双耳環瓶が二個体、第44図のベトナム青花瓶二個体、第45図の紅釉水注二個体が存在することが確認でき、二個で一組のセットとして中国やベトナムから将来されたものとみられる。

第13表①　国指定重要文化財(保存処理済み)陶磁器類観察一覧

単位：cm

挿図番号 遺物番号	名称・ 仮称	口　径 器　高 高台径	素地・釉色	施釉・呉須 (藍色)の発色	観　察　事　項　等	出土地点 出土層
第39図 1	青磁壺（小型壺）	10.8 13.5 8.6	淡灰白色の微粒子。明緑色の釉。貫入なし。	内外面全体を総釉後に釉の掻き取りを実施している。釉の掻き取り箇所は、外面口縁端から口唇部、そして内面口縁端までを露胎とする。その他、外面の底部近くから畳付・高台内端までの範囲を露胎する。外底面の中央付近は露胎となる箇所があり、釉を掛け忘れたのかもしれない。	丸味を帯びた壺で口頸部の屈曲は緩く、口縁がやや内側に内傾する。口頸部と胴上部に叉状の工具とみられるもので二条一組の界線を施し、胴上部の界線直下から幅広の丸筆様工具(最大幅７㎜)で蓮弁文を描いている。新たに底部破片が確認され、壺の形状が明確となった。 参考：首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(Ⅰ)－沖縄県教委1998年刊行の第46図２および首里城跡－下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－沖縄県立埋文センター2001年刊行の第17図147参照。	京の内資料 SA20第2層 下之御庭跡 ほか資料 木曳門跡
〃 2	青磁大鉢	27.0 12.9 11.0	淡灰白色の微粒子。淡緑色の釉。貫入なし。	全面施釉後に外底面の釉を蛇ノ目状に掻き取っている。	外面口縁に片切り彫りで雷文帯を描き、雷文は最初に時計回りで中心に向かって描き、次に中心から反時計回りに外側に向かって描いて完成させている。雷文帯直下から高台脇まで片切り彫りの工具と三本櫛を用いて牡丹唐草文を描いている。内面にも口縁から内底まで外面で使用した片切り彫りの工具と三本櫛で牡丹唐草文を描いている。内底面(見込み)には圏線はなく波状の花弁と七宝繋ぎ文を描くようである。新たに口縁部の破片が接合でき、口縁部が９割近く接合可能となった。 参考：首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(Ⅰ)－沖縄県教委1998年刊行の第51図１および首里城跡－下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－沖縄県立埋文センター2001年刊行の第19図157参照。	京の内資料 SA20第2層 下之御庭跡 ほか資料 下之御庭跡
第40図 3	青磁瓶（玉壺春瓶）	－ － 7.4	灰色の微粒子。濃緑色の釉。貫入なし。	外面の残存部(頸下部から高台まで)は総釉後に畳付を露胎とする。内面は頸下部から腰下部まで釉が掛かり、底部は露胎のままである。	文様は胴部に型で起こしたものであり、陽刻の二重線の窓枠の中に陽刻牡丹唐草文を起こしている。窓枠と窓枠の間に小さな菊花と草文を枠の上下に施している。 参考：首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(Ⅰ)－沖縄県教委1998年刊行の第53図３および首里城跡－下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門発掘調査報告書－沖縄県立埋文センター2001年刊行の第20図172･174参照。	京の内資料 SA19･20 第2層・ 第3層 下之御庭跡 ほか資料 木曳門跡

注（　）:推定、「－」:計測不可

第13表②　国指定重要文化財(保存処理済み)陶磁器類観察一覧

単位：cm

挿図番号 遺物番号	名称・ 仮称	口　径 器　高 高台径	素地・釉色	施釉・呉須 (藍色)発色	観　察　事　項　等	出土地点 出土層
第40図 4	元青花高足杯（馬上杯）	14.2 (11.8) (4.7)	淡灰白色の微粒子。 淡青白色の釉。 貫入なし。	残存部位は総釉。呉須の発色は鮮明。	口唇部を呉須で縁取っている。外面の胴部には三爪龍と雲文を描いている。内面の口縁部には蔓唐草文を描き、その真下に界線を一条施している。内面胴部には型で起こした陽刻の三爪龍文が施されている。内底面(見込み)にはあやめ科の「ひおうぎ」を描いている。新たな破片(口縁・胴部・底部)資料の追加で、三爪龍が一対であることが判明し、龍文の全体像を描くことができた。 参考：首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(Ⅰ)－沖縄県教委1998年刊行の第55図９および首里城跡－下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－沖縄県立埋文センター2001年刊行の第27図１参照。	京の内資料 SA20 第2層 下之御庭跡 ほか資料 木曳門跡
第41図 5	元青花大合子	蓋 口径：30.4 器高：7.1 蓋甲直径：24.4	灰白色の細粒子。 淡青白色の釉。 貫入なし。	蓋：内外面に総釉後に口唇部から内面口縁までの釉を掻き取って露胎とする。呉須は暗青色でやや鮮明。 中蓋：口唇部から内面全体に総釉する。外面口縁から底面までを露胎とする。呉須はない。 身：露胎とする範囲は、外蓋と中蓋が接触する段違い二重(外側と内側)口縁の口唇部から内面口縁までの範囲と畳付から外底面までの範囲である。呉須は暗青色でやや鮮明。	蓋甲頂周に構図の中心となる人物を中央に配置(日輪とみられる円形文を描いていることから皇帝、皇太子、地方の国主、八仙人などが考えられる。)し、左右に付き人とみられる女性を配置しているようである。左側の人物は鳥の羽で作られたとみられる大きな団扇を持っているようである。人物の周辺には松、蕉葉文、草文とみられる文様を描いている。蓋甲上面の周辺部には波濤文を描く。この波濤文を内側と外側に二条一組の区画帯となる界線で囲繞する。蓋甲上面の縁辺部は段差を設けて、段差の上下に前述した区画帯となる二条一組の界線がある。更に蓋甲外面より下位にも段差を設けて、段差の上下に二条一組の界線を施している。この界線を境に上位に下向きのラマ式蓮弁を描き、弁内に八宝文(珊瑚、陰陽板、銀錠、火炎宝珠)と樹花木を描いている。下位には菊唐草文を描き、その真下を一条の界線で囲繞して文様を区画する。中蓋は、蓋の外面口縁が身の内側口縁部に架かるように口縁の断面を方形状に成形して、肥厚帯とする。中蓋の内面中央寄りに輪状の仕切りを作って貼り付けている。この輪状の仕切りを中心にして、板状に加工した仕切り板を5箇所に貼り付けて区画を作っている。中蓋を6区画に仕切った盛り付け用の容器としての利用が考えられる。身は、外側と内側に段違いの二つの口縁を作っている。所謂二重口縁と称されるものの範疇にある。外側の口縁は外蓋を受け、内側口縁で中蓋を受けるように製作されている。外蓋がずれないように内側に7㎜近く深く削り込んで蓋受けの口唇とする。外側口縁端部から内面までの厚みは10.3㎜を測る。参考までに内側の口唇部の幅は3㎜を測った。高台は高めに成形されているが、外底面は平坦に浅く削り取られている。畳付の外端を斜位に削り出して面を取っている。高台内面も斜位に成形したため、畳付の幅は1.9～3.6㎜と狭くなっている。 高台脇から胴下部までは丸味を持たせながら開いてきて、胴中央付近の段差を境にして、胴部中央から口縁までほぼ垂直に移行する器形である。身の外面口縁部には、蓋甲外面にみられる菊唐草文を描き、上下に一条の界線を廻らして文様を区画する。胴下部の段差直下と高台脇に一条の界線で区画し、この区画内にラマ式蓮弁文と垂下三葉文と滴文を描いている。内底面(見込み)にも段差がある。この段差を利用して陰圏線を表現したようである。新たな破片(①蓋甲上面、⑩・⑪身の口縁、⑬身の胴)部下部を含む15片が確認)資料により、大合子の文様展開がある程度、把握できた。 参考：首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(Ⅰ)－沖縄県教委1998年刊行の第56図10～12および首里城跡－下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－沖縄県立埋文センター2001年刊行の第27図1～4参照。人物の髪型は、特別展『吉祥－中国美術にこめられた意味』収録の「89　八仙祝寿螺鈿八角盒子」(直径36.0㎝、高さ23.4㎝。元時代14世紀。個人蔵。)東京国立博物館1998年10月13日発行を参考にした。	京の内資料 蓋 SA20第2層 中蓋 SA19・20 畦2層 身 SA19第3層 下之御庭跡 ほか資料 ①城郭下 ⑩漏刻門 ⑪・⑬木曳門
		中蓋外側 口径：28.6 器高：2.8 底径：27.5				
		中蓋内側 口径：10.7 器高：3.2				
		身 口径外側：30.4 口径内側：28.6 器高：10.2 高台径：22.6				
		蓋と身を含む全体の器高：17.3				

注 ( ):推定、「－」:計測不可

第13表③　国指定重要文化財(保存処理済み)陶磁器類観察一覧

単位：cm

挿図番号 遺物番号	名称・ 仮称	口　径 器　高 高台径	素地・釉色	施釉・呉須 (藍色)の発色	観　察　事　項　等	出土地点 出土層
第42図 6	明青花花瓶	京の内資料: 14.0 41.4 12.8 下之御庭跡ほか資料: 13.9 41.2 11.0	京の内資料：灰白色の微粒子。淡灰白色の透明釉。 下之御庭跡ほか資料：灰白色の微粒子。淡青白色の透明釉。	京の内資料：釉は内面口縁から外面の底部近くまで施す。呉須の発色はやや鮮明。 下之御庭跡ほか資料：釉は内面頸部付近から底部近くまで施す。呉須の発色は鮮明。	京の内資料:頸部に輪を銜えた獅子の面を二箇所に貼り付けた双耳(把手)花瓶である。口頸部からラッパ状に開いて、口縁を盤口とする。頸部下部より丸味を持たせながら肩部に移行し、そのまま腰部まで緩やかに窄まりながら、腰下部で一端くびれてから脚部で開いて、内側に閉まり気味にほぼ垂直に近い状態で底面まで移行する。下之御庭跡ほか出土資料も同一の器形であるが、胴部での器厚が10～13㎜と厚く均一的に調整されている。京の内資料の文様は、口縁に蔓唐草文、頸上部が蕉葉文を描いている。頸部中央には花唐草文、頸下部が下向きの蕉葉文を描く、胴部には主文となる松・竹・梅樹を描く。腰下部に雲堂手の波濤文を描き、脚部に幅広(12㎜)の界線を一条廻らす。その他に１条の界線を口縁端部、口縁部、頸部、脚部に囲繞する。二条一組の界線を頸部中央と下部および腰下部に施している。下之御庭跡ほか出土資料で、京の内資料と異なる箇所は、頸下部の下向きの蕉葉文が省略されている。表現方法では頸上部に描かれた蕉葉文の表現が京の内資料は中央葉脈を太く描き、白抜き葉脈の外周も太く描いているが、下之御庭跡ほか出土資料は、中央葉脈と外周の線が細い。また、主文の一つである松葉も京の内資料は細かく密に描くが、下之御庭跡ほか資料は松葉の線がやや太く粗目である。全体的に京の内資料より主文の表現が粗いようである。下之御庭跡ほか出土資料には胴部の主文に雲堂手の滝(縦線)と滝壺(渦巻き文)とみられるものが描かれている。下之御庭跡ほか出土資料も二次的な火熱を受けているものが多く、内面が黒く煤けるものが多い。外面への火熱の影響は少ない為、釉薬に透明感があり、呉須も鮮明なものが多い。下之御庭跡ほか出土資料の新たな追加で、京の内資料と二個で一組のセットとして使用されたことが可能性として高くなった。 参考:首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(Ⅰ)－沖縄県教委1998年刊行の第64図57および首里城跡－下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－沖縄県立埋文センター2001年刊行の第31図18参照。	京の内資料 SA19・20 畦第3層 下之御庭跡ほか資料 用物座跡、木曳門跡、廣福門跡北西城郭下
第43図 7	白磁口禿杯	10.5 6.9 5.2	灰白色の微粒子。淡灰白色のやや透明な釉。	露胎する部位は、口唇部から口縁内面、畳付、見込み(内底)の三箇所である。特に見込みの釉は蛇ノ目状に掻き取っている。 他面は総釉。	円筒形の杯。高台が若干外側に開き、高台は器壁が薄く、丁寧に仕上げている。本来、口縁部に金環を被せたものとみられるが欠落している。外面口縁から高台際まで、主文となる片切り彫りで蓮花を二箇所に配置している。中国金朝(1114年～1234年)の時期に河北省曲陽縣定窯で製作された製品である。今回、新たに確認(胴部～高台)された資料とは、同一個体であり復元が可能となった。 参考:首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(Ⅰ)－沖縄県教委1998年刊行の第67図21および首里城跡－下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－沖縄県立埋文センター2001年刊行の第26図49参照。	京の内 資料 SA20 第3層 下之御庭跡ほか資料 廣福門跡
〃 8	褐釉磁器碗か鉢	15.8 － －	淡灰白色で光沢ある微粒子。茶褐色の釉。	残存部位は総釉。	薄手の外反碗、若しくは鉢。胴部で軽く外側に開きながら口縁部に移行し、口縁で緩やかに外反する。口縁部から胴部までの器厚が1.6㎜～2.5㎜と非常に薄く仕上げられている。器厚の薄さと、劈開面及び釉上からの観察では轆轤調整痕が認められない状況から判断すると轆轤成形ではなく、型物成形が考えられる。茶褐色の釉を外面に施しているが内外面の口縁端部は、黒斑状に黒ずむ部分がみられることから焼成時のものか。或いは二次的な火熱を受けて黒く変色したのかどうかについては判然としないが、この部分のみ火熱の影響を受けてケロイド状となる。中国景徳鎮窯の製品。類例はトルコのイスタンブールにあるオスマン・トルコ帝国の古城であるトプカプ・サライ博物館にあるようである。 参考:首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(Ⅰ)－沖縄県教委1998年刊行の第71図および首里城跡－下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－沖縄県立埋文センター2001年刊行の第53図参照。	京の内資料 口縁部 SA19・20 第2層 胴部 SA20第3層 下之御庭跡ほか資料 木曳門跡
〃 9	ベトナム青花水注	－ － －	黄灰色から灰白色の細粒子。劈開面から微細な黒色鉱物を少量みられるが、希に1.2㎜のサイズの茶褐色の鉱物が観察できる。釉は黄白色の透明釉。	残存部位では外底面のみが露胎となる。やや鮮明な濃青色の呉須で濃淡を付けて描く。	鳥形の水注で、鳥の胴下部から尾までの破片。型物水注で、内面の長軸方向には底面から胴部まで繋ぎ目があり、これを雑に篦状の工具でナデ消している。尾の部分は中空きで、胴部の成形後に貼り合わせている。外底面は二次的な火熱を受けて煤けて黒ずんでいる。文様は羽と羽毛以外に右足のかかと及び指が一本確認されている。新たな資料(底部:鳥の足)により、鳥の首と考えられていた部分が鳥の尾であることが判明した。 参考:首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(Ⅰ)－沖縄県教委1998年刊行の第77図10および首里城跡－下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－沖縄県立埋文センター2001年刊行の第56図20参照。	京の内資料 SA19・20 畦第3層・ 第4層 下之御庭跡ほか資料 用物座跡、城郭下 (漏刻門一帯)

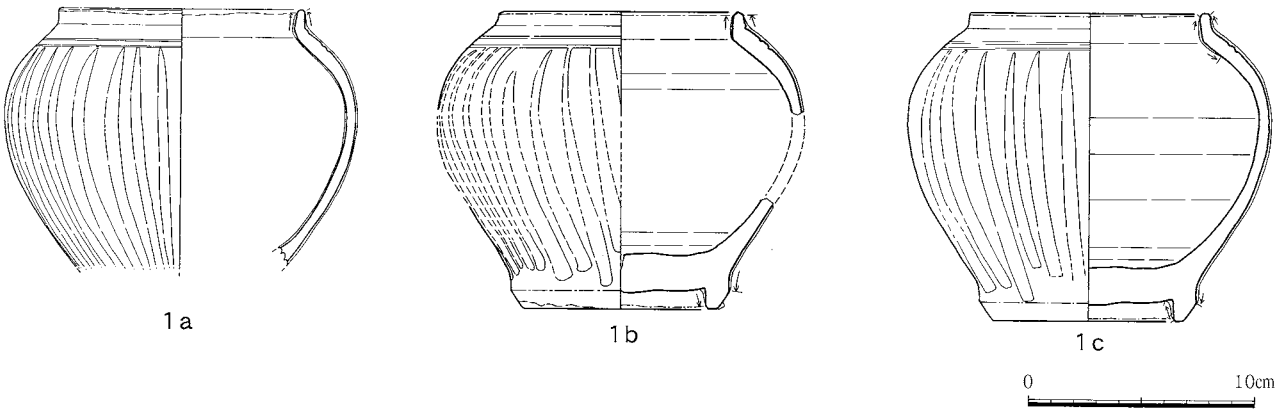
注 ( ):推定、「－」:計測不可

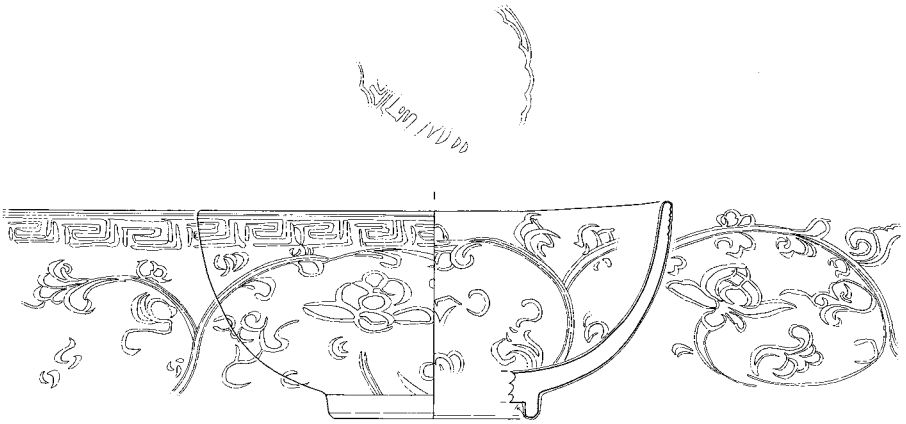
第13表④　国指定重要文化財(保存処理済み)陶磁器類観察一覧

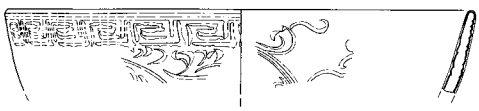
単位：cm

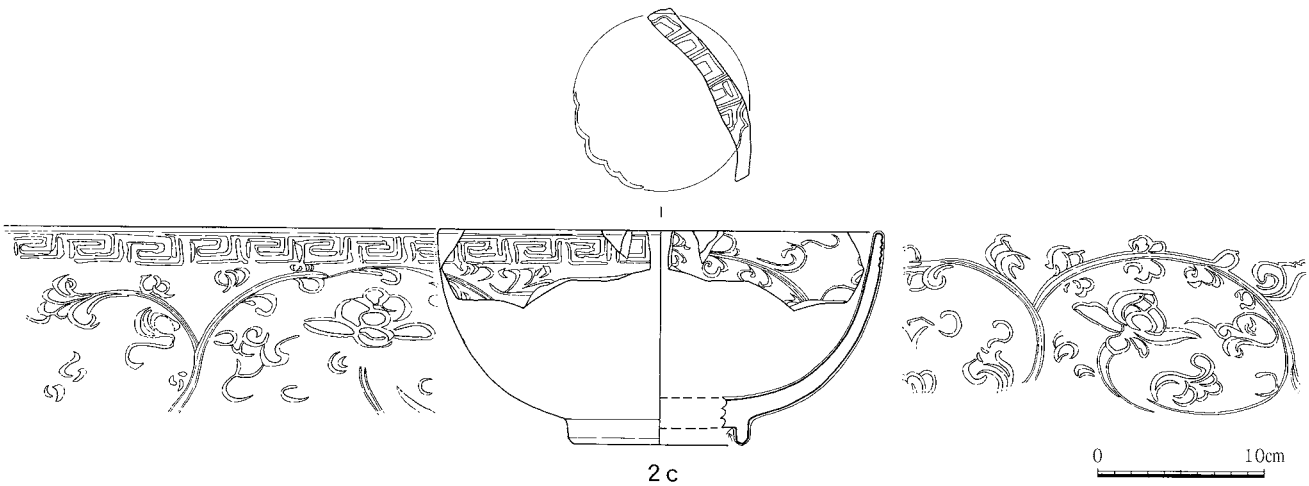
挿図番号 遺物番号	名称・ 仮称	口　径 器　高 高台径	素地・釉色	施釉・呉須 (藍色)の発色	観　察　事　項　等	出土地点 出土層
第44図 10	ベトナム青花瓶（玉壺春瓶）	京の内資料: 8.9～9.2 30.8 9.0 下之御庭跡ほか資料: 7.4～8.0 29.9 9.0～9.4	京の内資料:光沢のある灰白色の微粒子。素地に僅かに微細な灰黒色の鉱物を含む。劈開面から微細な気泡痕が多く観察できる。灰白色のやや透明な釉。 下之御庭跡ほか資料:素地及び劈開面の状況や釉色は京の内資料と同じであった。	京の内資料:外底面の畳付を除いて両面に施釉。外底面は鉄釉が雑に施され赤茶色となる。呉須は鮮明。 下之御庭跡ほか資料:口縁および胴部は両面に施釉。高台は内面と高台外面まで施釉。畳付及び高台内面から外底近くまでが露胎となる。呉須の発色はやや鮮明。	京の内資料:玉壺春瓶型の資料。口縁が八面に面取りされ、外側に外反する。口縁の上面観が花弁状となる。八面の面取りは口縁から胴上部まで実施され、胴上部では丸味のある４面となり、胴下部から面が取れて正円となっている。貼り付け文は一部弁先の尖った丸味のある花弁を窓枠として胴上部(４個)、胴中央(４個)、胴下部(４個)に貼り付けている。窓枠は12個となる。窓枠内には本資料の主体文様が透かし彫りの浮き文が貼り付けられていたようであるが、大半が剥落するため判然としない。主文のあった窓枠をはじめ他の窓枠は、当初から貼り付けを想定して、窓枠が配置される部分は白抜きとし、周辺を呉須で窓枠を縁取るように輪郭を二重線で描き囲饒する。呉須による文様は、口縁から頸部中央まで蕉葉文、頸部中央に鋸歯文を上下に噛み合うような文様を描き、その上下に二条一組の界線で文様の区画帯とする。この区画帯直下から高台際までの文様と文様の間には細かい菱形の格子目状の文様で空間を埋めている。花唐草文は頸下部から高台脇まで描いている。 下之御庭跡ほか資料:口縁が八面に面取りされ、高台が６面に成形されている。窓枠は胴部に京の内資料と同様の花弁が貼り付けられている。文様は外面口縁に鮮明な呉須で蕉葉文を描き、内面口縁の八角縁に沿うように二重界線と垂下文を八角縁の角に描いている。胴部には花唐草文を上下に描き、文様空間をベタ塗りで空白を埋めている点が京の内資料(格子目状の文様)とは異なっている。高台際に青海波文とみられる文様を描き、その直下の高台脇に界線を一条施している。この青海波文は京の内資料では確認できない。下之御庭跡ほか出土資料の新たな追加で、京の内資料と二個で一組のセットとして使用されたことが可能性として高くなった。 参考①:首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(Ⅰ)－沖縄県教委1998年刊行の第67図21および首里城跡－下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－沖縄県立埋文センター2001年刊行の第26図49参照。参考②:「前略･･･京の内から出土したベトナム製の青花貼花文面取瓶である。･･･最近、ベトナム中部のホイアン沖合いから引き揚げられた沈没船のなかに、完全な形のこの瓶がみつかった。窓の部分には鳳凰や竜の形が貼付けられていた。この沈没船からは、同じようなものが数点発見されたが、･･･」亀井明徳(ベトナム青花貼花文瓶)「首里城京の内展によせて貿易陶磁から見た大交易時代」４ 琉球新報　平成13年３月28日(水)朝刊。	京の内資料 SA19･20 畦 第3層･ 第4層 下之御庭跡 ほか資料 木曳門跡、 用物座跡
第45図 11	紅釉水注（仙盞瓶）	京の内資料: 6.5 25.7 9.6 下之御庭跡ほか資料： 6.2 25.7 9.6	京の内資料:灰白色の微粒子。外面は紅釉(二次的な火熱を受けて赤銅色に変色)、内面及び外底面が青白色の透明釉。 下之御庭跡ほか資料:口縁部は内外面とも京の内資料と同じ。高台外面は全体的に濃赤銅色を帯び、部分的に紅釉。高台内面と外底面は青白色の透明釉。	京の内資料:蓋は外面のみ施釉で、内面が露胎。畳付(高台外面途中から高台内面途中まで露胎)を除いて内外面に施釉。 下之御庭跡ほか資料:口縁部は両面とも施釉。畳付(高台外面途中から高台内面途中まで露胎)を除いて両面に施釉。	京の内資料:口縁が盤口状となる仙盞瓶。頸下部は下張れの扁壺気味となる水注。胴部の左側面には把手の根本が残り、右側面に注ぎ口の一部が僅かに残存する。胴部中央に胴継ぎの痕跡がある。高台の正面観はやや楕円形を呈する。文様は胴部に主文となる陽蓮弁の花弁を一枚大きく逆さハートの様に高台際から型で起こしたようである。花弁は両端を尖らせたものとみられる。左側面の把手の根本部分は型起こしで、パルメット文(若しくは垂下三葉文)を浮き文様で貼り付けている。 下之御庭跡ほか資料:文様は胴部から高台際に京の内資料と同一とみられる陽蓮弁文の花弁の一部が残存する。この陽蓮弁文に内側に金彩を施した痕跡と浅い沈線で細く文様を描いているが構図が判然としない。新たに確認された紅釉水注から二個一組で使用されたことが可能性として高くなった。また、下之御庭跡ほかの資料から紅釉水注の主文となる陽蓮弁文の中に金彩や文様を施していたことが確認できた。 参考:首里城跡－京の内跡発掘調査報告書(Ⅰ)－沖縄県教委1998年年刊行の第69図5～9および首里城跡－下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－沖縄県立埋文センター2001年刊行の第33図18参照。	京の内資料 SA19･20 畦 第3層･ 第4層 SA20直上･ 第3層 C-16 栗石内 下之御庭跡 ほか資料 廣福門跡、 木曳門跡、 下之御庭跡

注 ( ):推定、「－」:計測不可

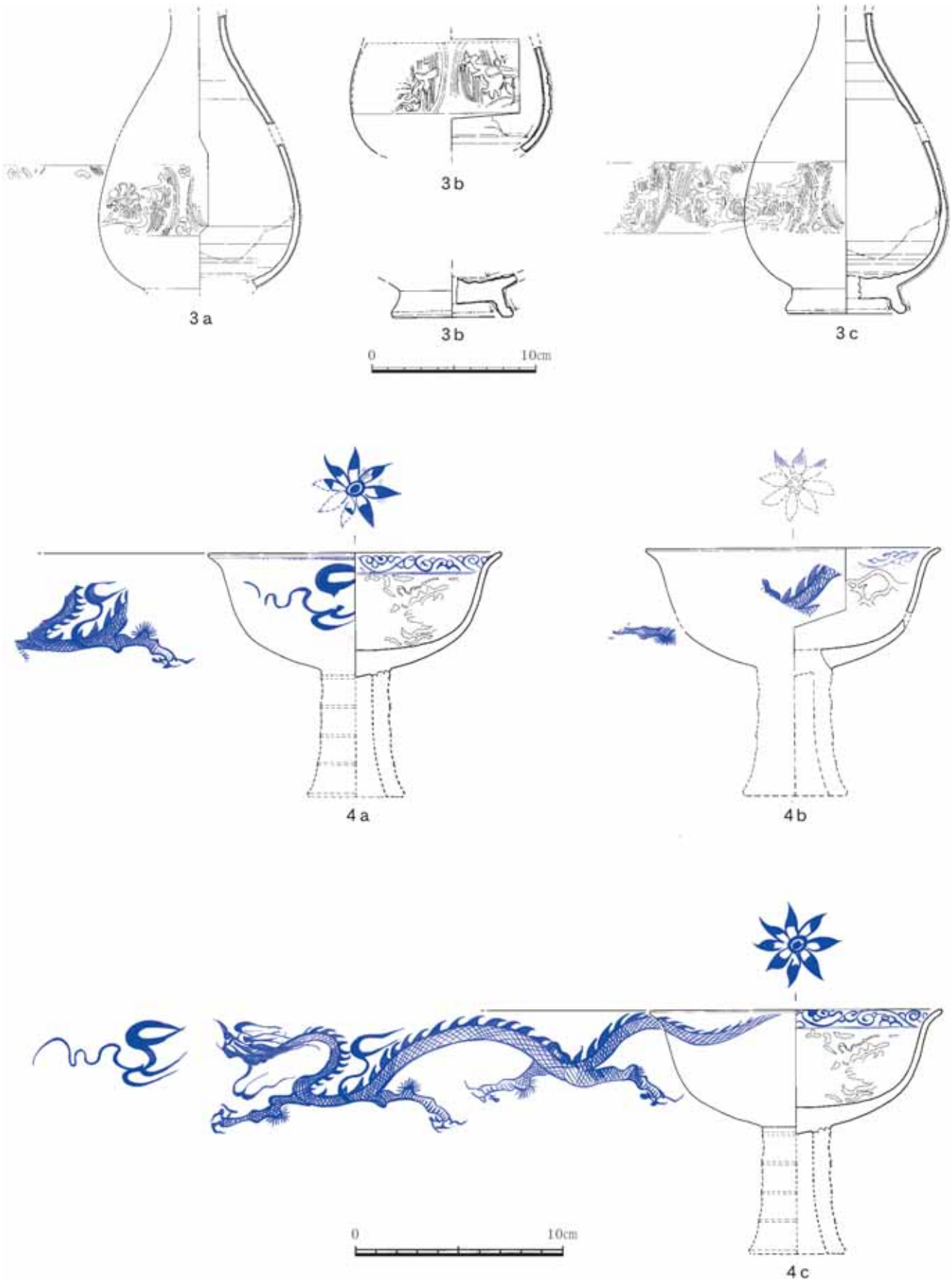




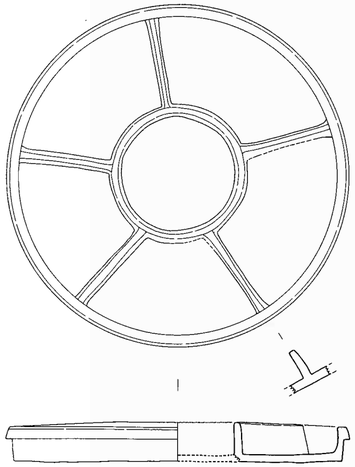




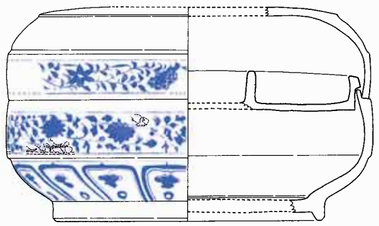
第39図　新資料（下之御庭跡ほか出土品）の追加で復元・修正された重要文化財
青磁（1.酒会壺、2.大鉢）
a：京の内出土、b：下之御庭出土、c：京の内と下之御庭の復元図



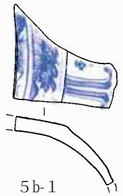
第40図　新資料（下之御庭跡ほか出土品）の追加で復元・修正された重要文化財
青磁（3.瓶）、**元青花**（4.馬上杯）
ａ：京の内出土、ｂ：下之御庭出土、ｃ：京の内と下之御庭の復元図



5a-1



5a-2

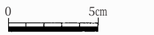


5b-1
①城郭下

5b-1
⑩漏刻門

5b-3
⑪木曳門

5b-4
⑬木曳門

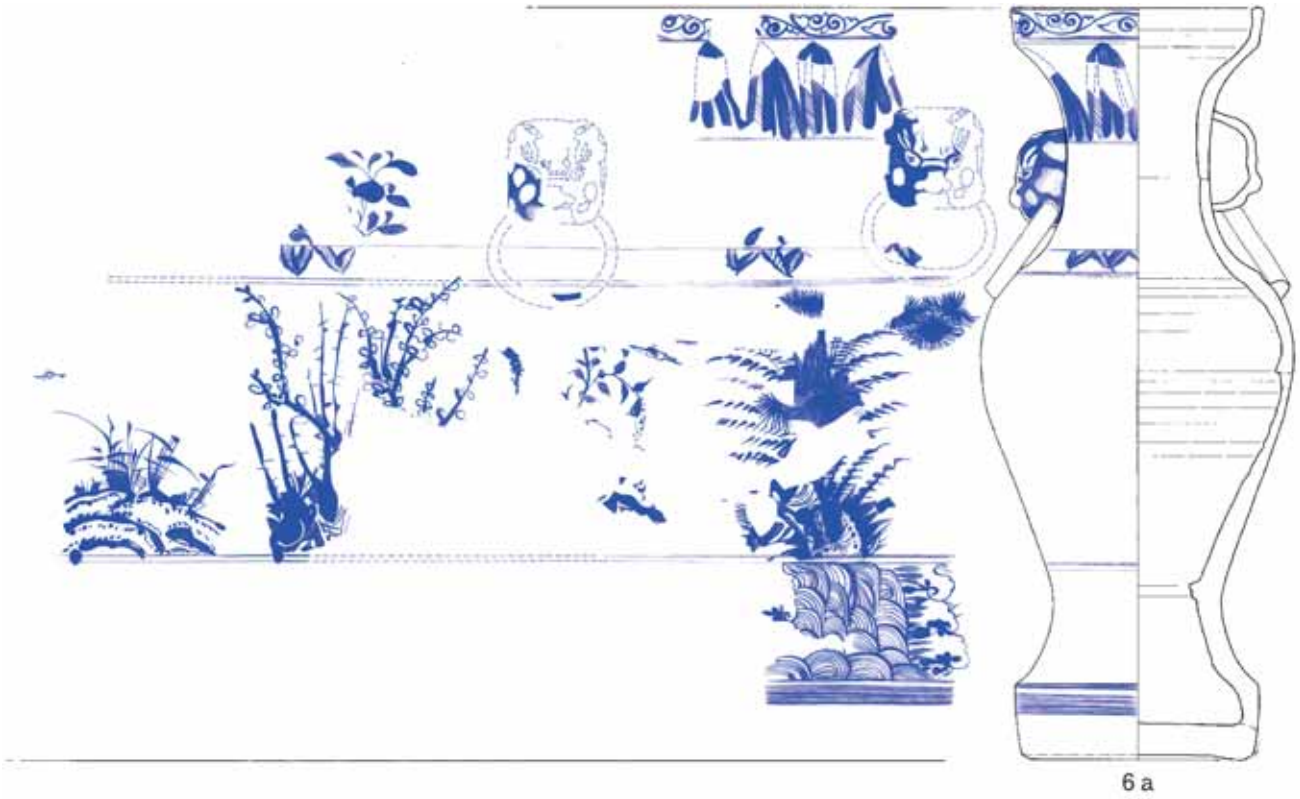


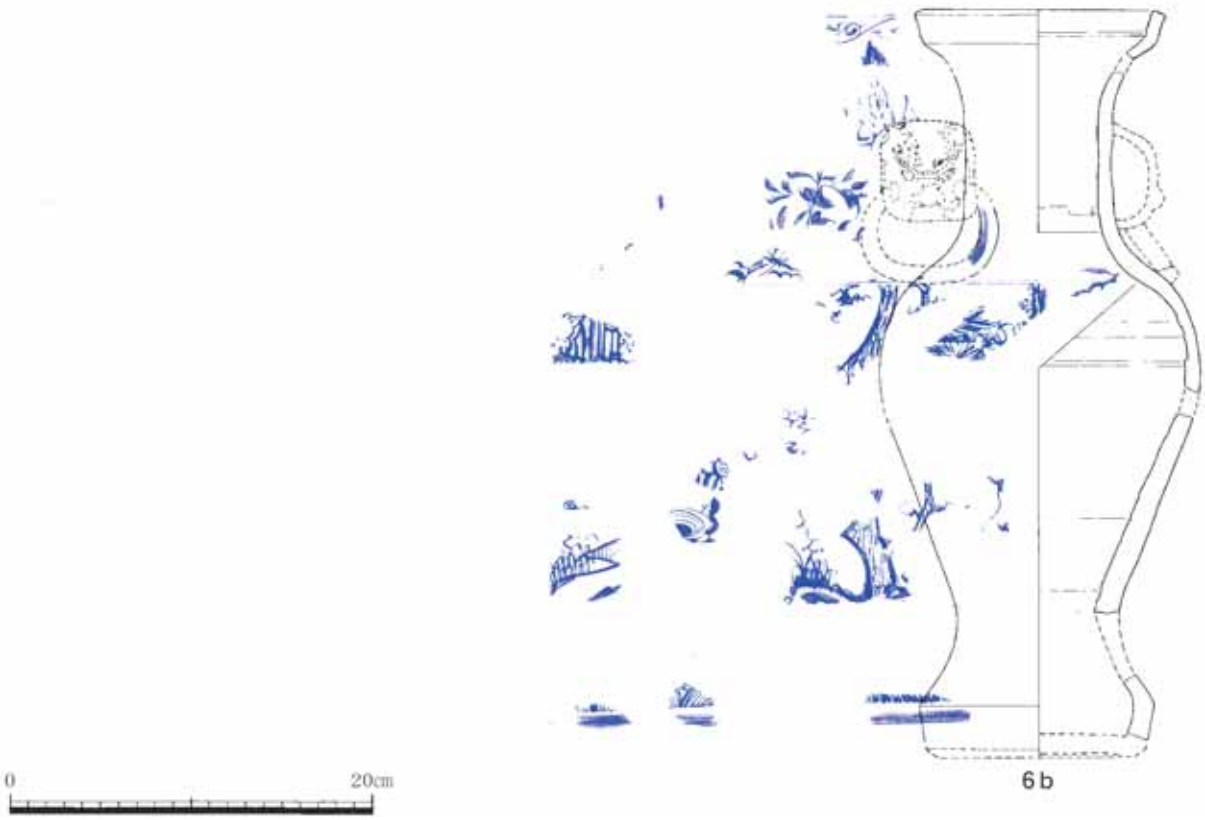
復元及び接合された
元青花大合子の出土一覧

番号	出土地
①	城郭下
②	木曳門
③	木曳門
④	京の内
⑤	用持座
⑥	木曳門、下之御庭
⑦	木曳門
⑧	奉神門
⑨	木曳門
⑩	漏刻門
⑪	木曳門
⑫	奉神門、京の内
⑬	木曳門
⑭	京の内
⑮	用持座、京の内

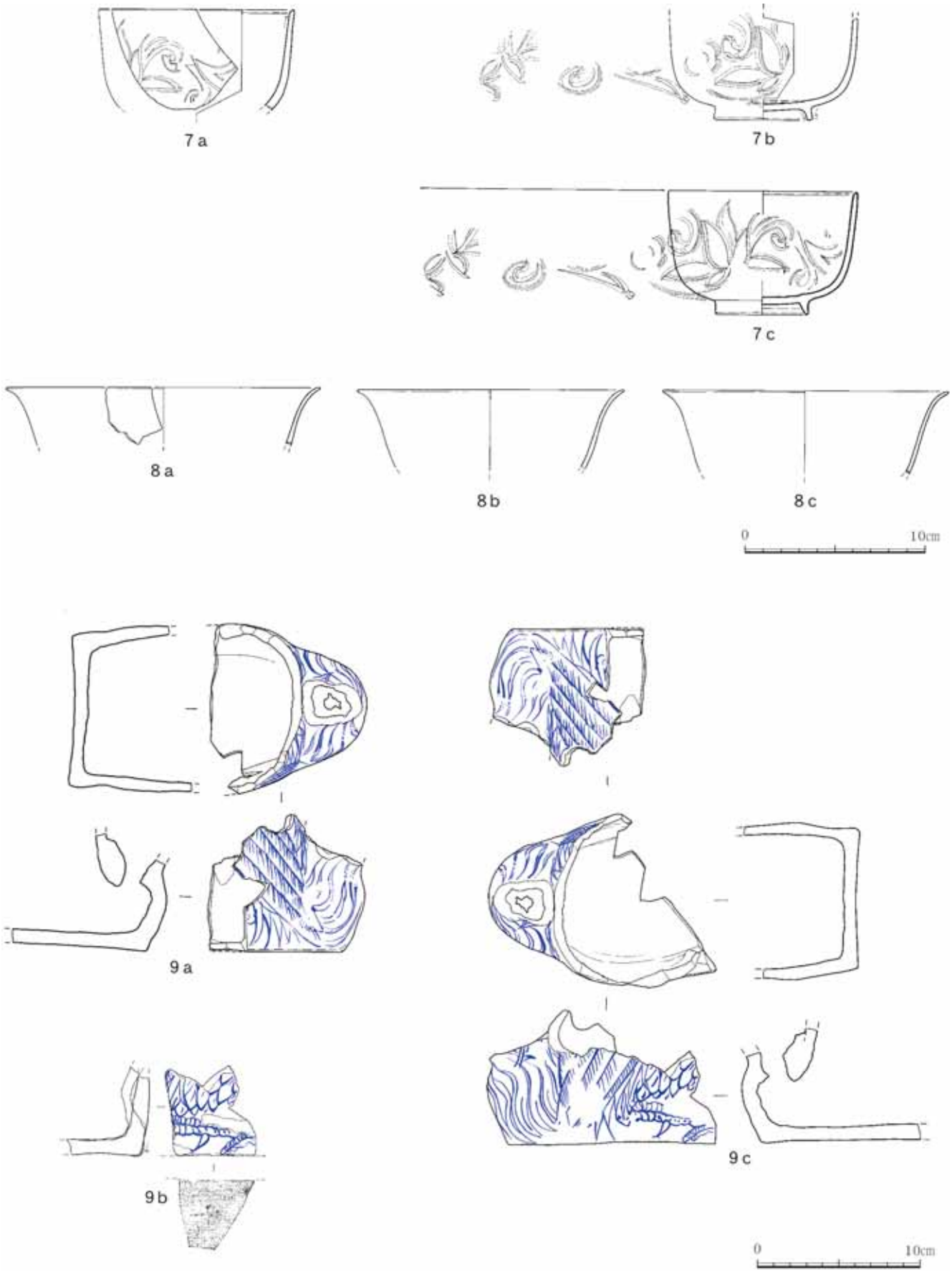
5c

第41図　新資料（下之御庭跡ほか出土品）の追加で復元・修正された重要文化財
元青花（5.大合子）
a：京の内出土、b：下之御庭出土、c：京の内と下之御庭の復元図

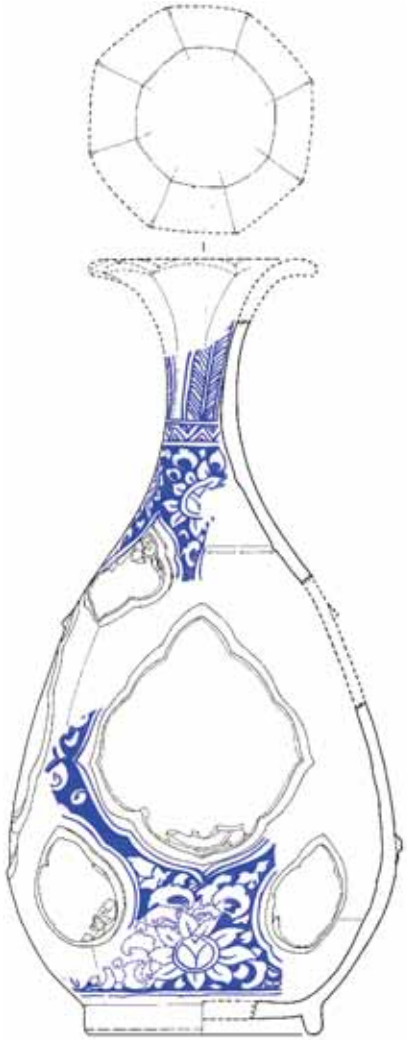




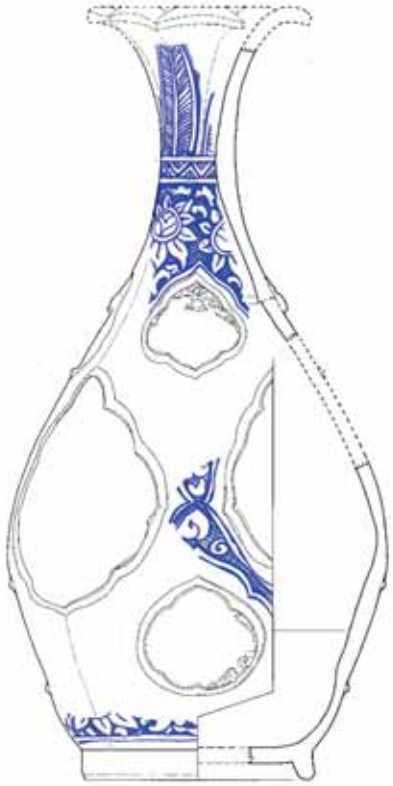
第42図　重要文化財と類似する下之御庭跡ほか出土の資料
明青花（6.花瓶）
a：京の内出土、b：下之御庭出土



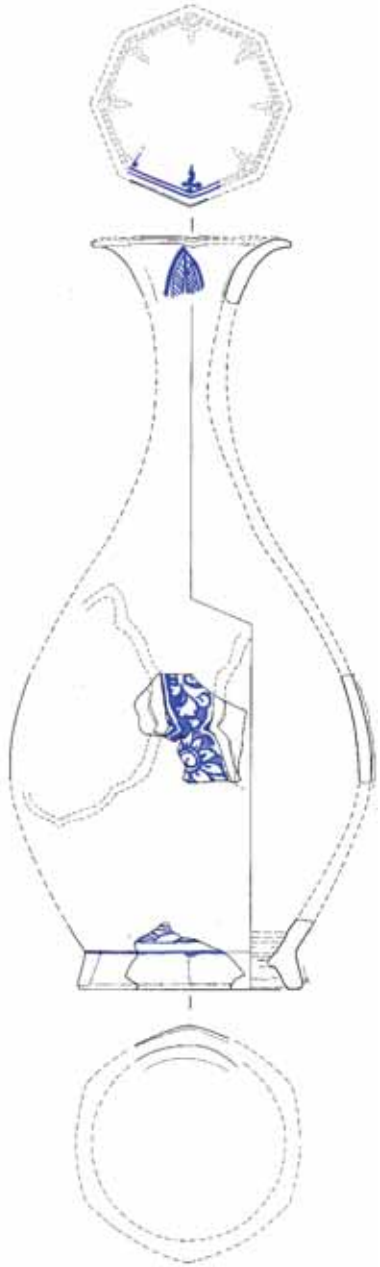
第43図　新資料（下之御庭跡ほか出土品）の追加で復元・修正された重要文化財
白磁（7.杯）、**褐釉磁器**（8.碗 or 鉢）、**ベトナム青花**（9.水注）
ａ：京の内出土、ｂ：下之御庭出土、ｃ：京の内と下之御庭の復元図



10a-1

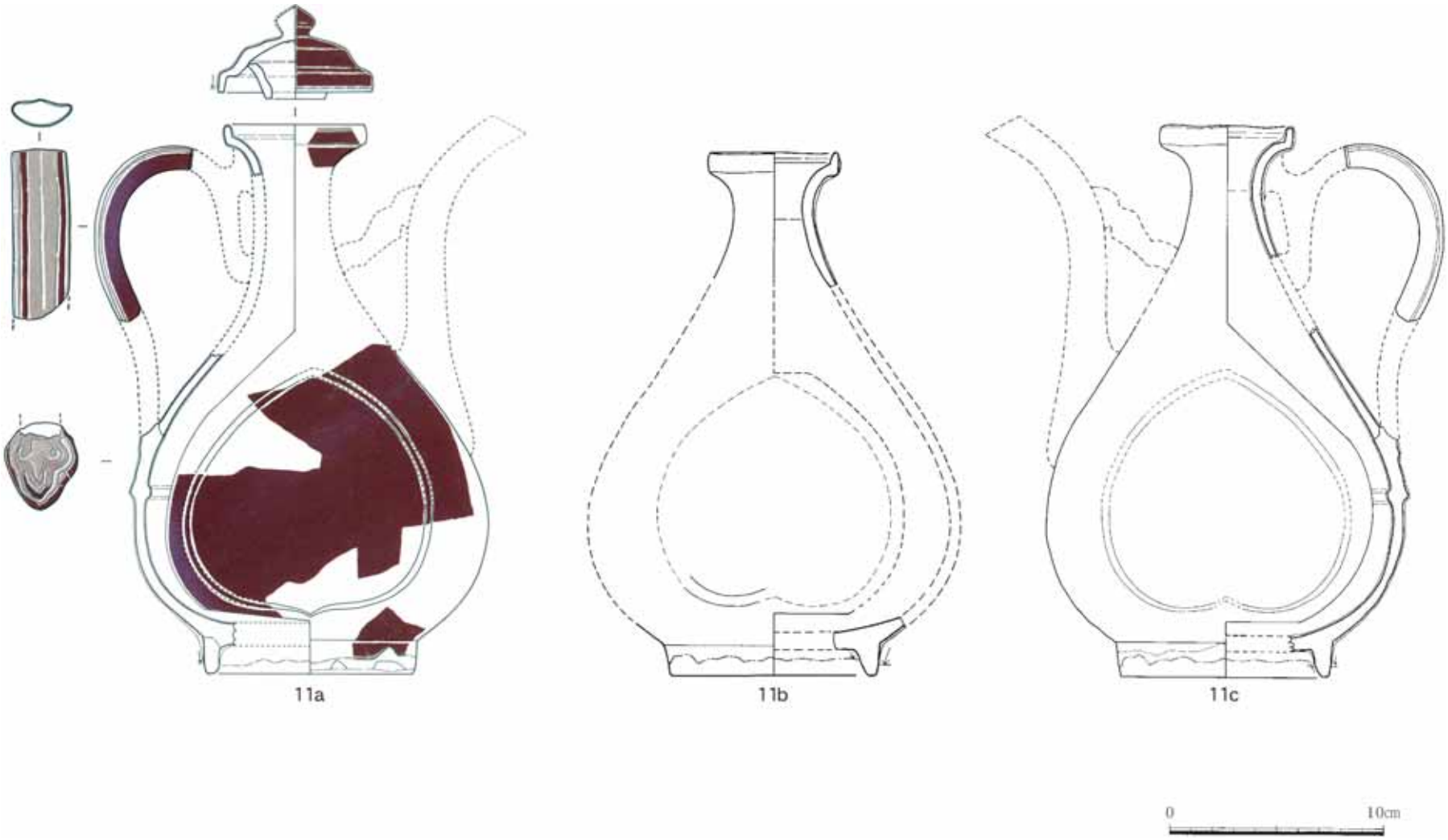


10a-2



10b

第44図　重要文化財と類似する下之御庭跡ほか出土の資料
ベトナム青花　（10.瓶）
a：京の内出土、b：下之御庭出土



第45図　重要文化財と類似する下之御庭跡ほか出土の資料
紅釉　（11. 水注）
ａ：京の内出土、ｂ：下之御庭出土、ｃ：京の内と下之御庭の復元図

第３節　土壙SK01（倉庫跡）出土の遺物

本節では、基本的に土壙SK01（倉庫跡）内の第１層（覆土、客土、栗石）及びSA19･20の観察用畦などから出土したものや前回の報告にもれた資料及び新たに確認された資料などを報告する。資料の中には、1459年に起きた失火による倉庫火災の時期と合わない資料もあり、これらは発掘調査中に周辺から流れ込んできたものや倉庫跡より下位に位置するSK02の時期に該当する資料も含まれている。また、下之御庭跡ほかより出土したものと京の内倉庫跡出土資料と接合ができたものがあり、これについても取り扱うことにする。以下、主な特徴については観察表（第16表～第18表、第21表）に記した。

１．土器（第46図１･２）･(図版29－１･２)

土器は、広義のフェンサ上層式土器（註１）やグスク土器（註２）の範疇にあるものを取り扱った。壺形土器の同一個体とみられる口縁（同図１）と底部（同図２）の破片が各々１点ずつ出土している(第16表１・２)。その他の本資料以外に第14表に呈示した土器の胴部破片が８点出土している。

２．瓦質土器(同図３)･(図版29－３)

３に図化した資料以外に第15表に呈示したように破片資料が19点出土している。特徴は第16表３に記す。

３．坩堝（同図４)･(図版29－４)

坩堝(第16表４)の胴部破片とみられる資料が１点得られていたので、これを図化した。

４．瓦製品(同図５)･(図版29－５)

瓦質の方柱状の製品が１点得られている。特徴は第16表５に記した。

５．タイ産土器(同図６)･(図版29－６)

タイ産の半練(土器)の蓋が１点出土している。本資料は倉庫跡から出土した蓋と下之御庭跡ほか出土の蓋が直接接合できたものである。特徴などについては、第16表６に記述した。

６．元青花大合子(第47図１)･(図版30－１)

重要文化財の元青花大合子の中蓋と類似する資料であるが、両者を比較したところ口縁の肥厚部が若干長い点と器壁が薄いなどの点が異なっている。特徴などの観察事項は第17表１に記した。

７．黒釉陶器(同図２～４)･(図版30－２～４)

所謂、天目茶碗の口縁部１点と胴下部の資料２点が出土している(第17表２～４)。

８．瑠璃釉(同図５)･(図版30－５)

瑠璃釉の碗、若しくは鉢の胴部とみられる資料が１点得られたので、これを図示した(第17表５)。

９．三彩(同図６～８)･(図版30－６～８)

明代華南三彩(註３)の瓶の頸部破片及び鶴形水注とみられる胴部の破片が３点出土している(第17表６～８)。

10．中国産陶器(同図９)･(図版30－９)

鉄釉で文様を描いた壺の破片が１点得られている。外面に白濁した釉を掛けた資料である(第17表９)。

11．ベトナム産陶器(同図10)･(図版30－10)

ベトナム産の瓶が１点得られている。特徴などについては第17表10に記述した。

12．中世陶器(第48図１～４)･(図版31－１～４)

備前焼の壺の破片が４点出土していたので、これを図化した(第18表１～４)。

13．沖縄産無釉陶器(第49図１･２)･(図版32－１･２)

陶器の蓋が二片得られている(第21表１･２)。その他の本資料以外に壺の胴部片が５点(第19表)出土している。

14．本土産磁器(同図３)･(図版32－３)

近代の本土産磁器の碗が１点(第21表３)出土していたので、これを図化した。

15．円盤状製品(同図４･５)･(図版32－４･５)･(第21表４･５)

褐釉陶器の破片を円盤状に打ち欠いた遊具が５点（第20表）出土していたので、良好な資料を２点図化した。

註文献

註１．友寄英一郎・嵩元政秀「フェンサ城貝塚概報」『琉球大学文学部紀要』社会篇 13号 1969年３月。

註２．金城亀信「グスク土器の出現」『月刊 考古学ジャーナル』N0.320（通巻）ニュー・サイエンス社 1990年６月号。

註３．亀井明徳「明代華南三彩陶をめぐる諸問題」『三上次男博士喜寿記念論文集（陶磁編）』平凡社 1985年。

第14表　土壙SK01(倉庫跡)土器出土状況

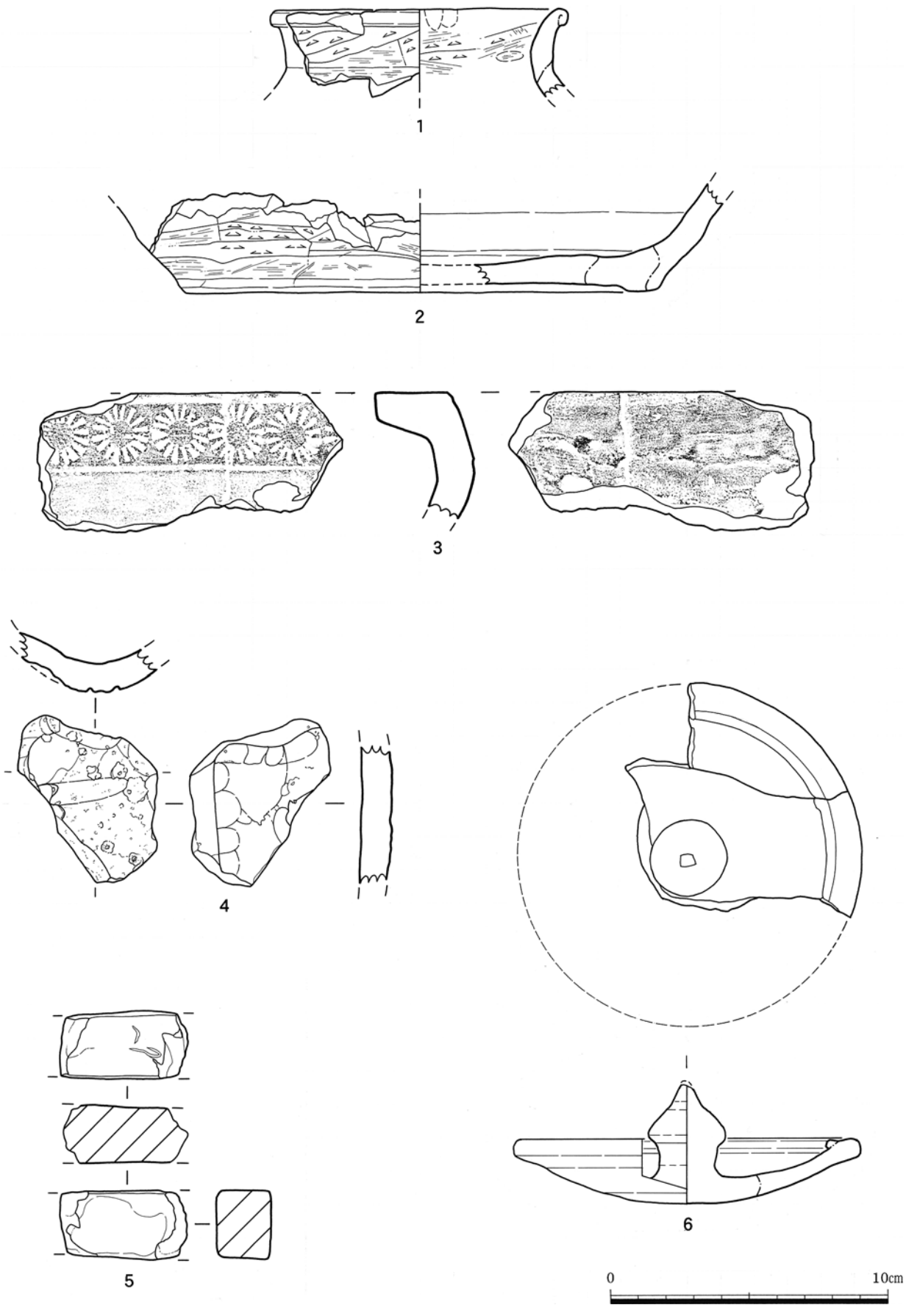
種類＼出土地			SA19 一括遺物3層	SA19 一括遺物4層	SA19・20 畦第2層	SA19・20 畦床面清掃	SA19と20の間一括遺物	SA28 第1層	SK01 A下層第5層	SA19・20 畦第1層+第2層+SA19第4層	合計
グスク土器	壺	口縁部						1			1
		底　部								1	1
	不明	胴　部	1	2	1	2	1		1		8
合　計			1	2	1	2	1	1	1	1	10

第15表　土壙SK01(倉庫跡)瓦質土器出土状況

器種＼出土地		SA19 第3層	SA19 一括遺物3層	SA19 第4層	SA20 一括遺物第1層	SA20 一括遺物2層	SA20 第3層灰黄色土層	SA19・20 畦床面清掃	SA19・20 畦2層	合計
蓋(円盤状)			9	1	1					11
鉢	胴　部	1								1
浅鉢	口縁部			1						1
不明	胴　部		2			1	2	1	1	7
合　計		1	11	2	1	1	2	1	1	20

第16表　土壙SK01(倉庫跡)土器類観察一覧

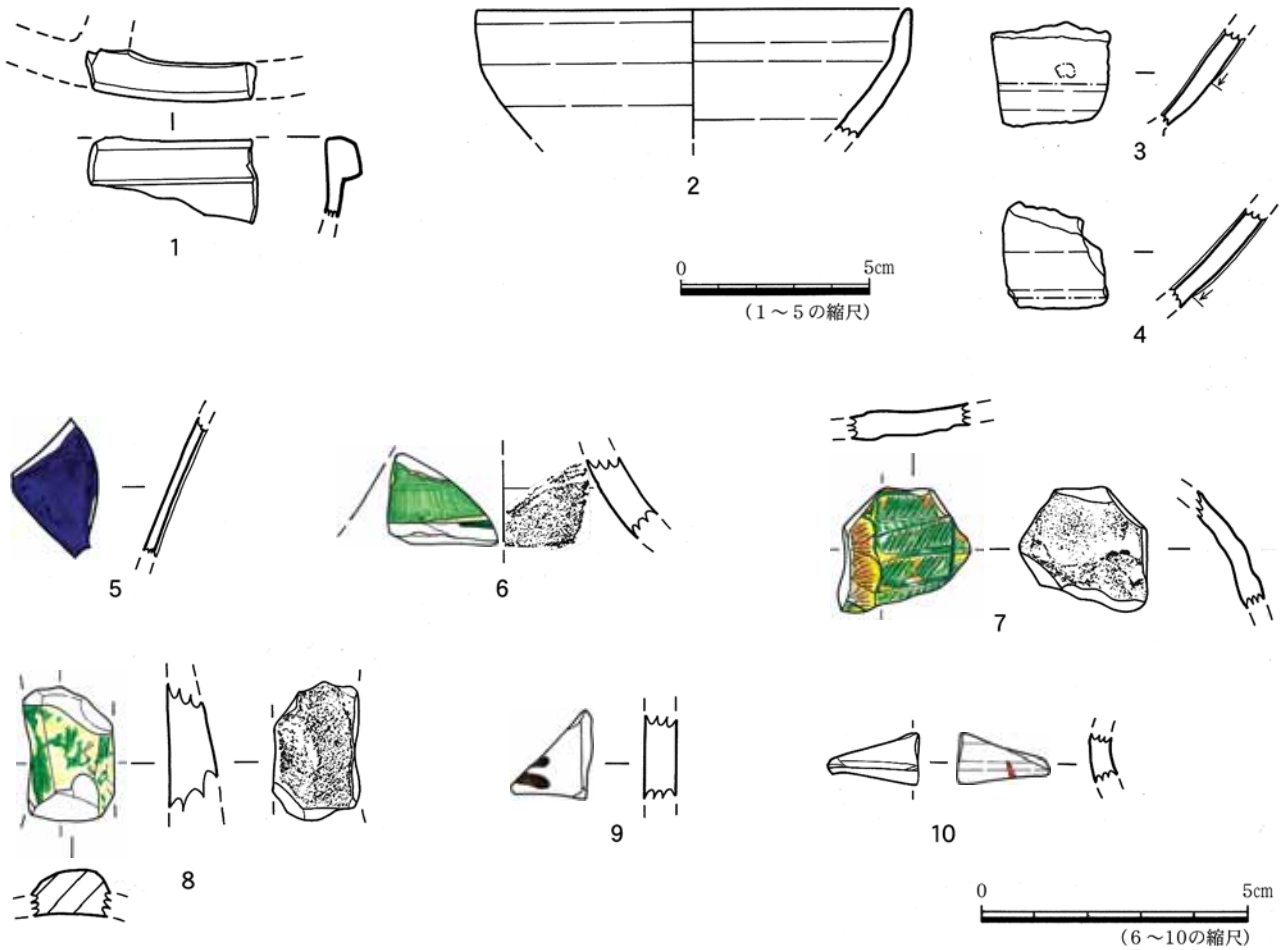
挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	素地・混入物・色調・釉色	観　察　事　項　等	出土地点 出土層
第46図 図版29 1	土器(グスク土器)・壺形土器の口縁	胎土は泥質で細かい。胎土に細かい石灰質の砂粒を多量に含む。僅かに粗密(0.5～3.3㎜)な茶褐色及び灰黒色の物質(焼土？)を含む。色調は淡橙色を主体とするが、部分的に暗茶色や灰褐色を呈する。焼成は堅緻。	壺の口縁破片。口縁は玉縁状に肥厚する。器面調整は内外面ともナデで仕上げているが、外面は内面より雑に仕上げている。内面には篦削りの痕跡がある。推算された口径は10.8㎝と求められた。	SA28 第1層
〃 〃 2	土器(グスク土器)・壺形土器の底部	胎土は泥質で細かい。胎土に細かい石灰質の砂粒を多量に含む。僅かに粗密な茶褐色及び灰黒色の物質(焼土？)を含む。特に茶褐色の物質は、粗目(５㎜前後)のものが多く含まれ、目立っている。色調は淡橙色を基調とするが、部分的に外面が灰褐色を呈する。焼成は堅緻。	上記１と同一個体とみられる。底面からの立ち上がりの部分は、指圧を加えた後に、雑なナデ調整を加えている。立ち上がり部分より上は篦削りや雑なナデ調整がみられる。内底面は雑な指ナデで仕上げるが、それ以外は丁寧ナデで仕上げている。外底面は雑なナデで調整を主体とするが、ナデ消しが徹底せず指圧や刷毛目が観察される。推算底径17.2㎝。	SA19・20 畦第1層・ 第2層 SA19第4層
〃 〃 3	瓦質土器・浅鉢(深皿)	胎土は瓦質で細かい。胎土に微細な雲母や白色鉱物を少量ながら含まれている。色調は灰白色。焼成は堅緻。本土産の瓦質土器の可能性が高い。	植木鉢の受け皿などに利用されたものとして考えられる。口縁が内側に湾曲した浅鉢(深皿)で、口径推算が52.8㎝と求められた。口縁に直径２㎝の菊花文を型で起こした文様を施す。菊花文の上下には区画帯となる界線(幅2.4㎜)が施されている。口唇部及び外面には回転篦削りが観察される。内面は陶土の継ぎ足し部分に指圧を加えるが、消えきっていない。他は刷毛目様のナデ調整が雑に施されている。	SA19 第4層
〃 〃 4	坩堝	胎土は泥質で細かい。胎土に細かい石灰質の砂粒を多量に含む。僅かに粗密な茶褐色及び灰黒色の物質(焼土？)を含んでいる。色調は外面が灰褐色を主体とするが、部分的に煤けたように黒ずんでいる。内面は灰色を呈する。焼成は堅緻。	外面は器面の保持が悪く、軽石のようにアバタ状となっている。僅かに存在する面は爛れている。内面も同様に剥落する。残存する面にはナデ調整が施されている。上記した１・２の土器と近似した素地と混入物である。	SA20 第3層
〃 〃 5	瓦製品 (用途不明)	胎土は瓦質で細かい。胎土に微細な雲母や細かい白色及び黒色の鉱物が少量含まれている。色調は灰白色。焼成は堅緻。本土産の瓦製品の可能性が高い。	断面が方形状(短辺19㎜、長辺23㎜)となる用途不明の製品。表面は摩滅する部分が多く、部分的に指圧痕をナデ消しが確認される。上下の側面は篦削りをナデ消した痕跡やナデ調整が観察される。裏面は陶土を継ぎ足した様な痕跡と僅かな指圧痕が観察される程度である。全体的に大きな罅割れが三面で確認されたことから生乾きの状態で型などから当該製品を取り出した際に罅が発生したものとみられる。	SA19 栗石内
〃 〃 6	タイ産土器 (半練)蓋	胎土は泥質で細かい。胎土に細かい石英？を多量に含む。希に粗い(2㎜)黒色の鉱物を含む。色調は外面が灰白色を主体とし、部分的に暗褐色や黒色となる。内面は淡橙白色を主体とするが、部分的に暗褐色を呈する。焼成は堅緻。	タイ産土器の蓋については、前回報告した京の内発掘調査報告書(Ⅰ)では、62個体が推定されている。本資料を加えると63個体が出土したこととなる。落し蓋で中央に宝珠形の摘を作る。内面は蓋端部を折り返して、小さな方形状の肥厚を作っている。肥厚帯の外端を篦とみられる工具を使用して削っている。内面は丁寧で同心円状にナデ調整を加えている。外面はナデを主体に施しているが部分的に篦削りがみられる。ナデの方向は一定しないが丁寧である。直径12.4㎝。	京の内資料 SA20第3層 下之御庭跡 ほか資料 城郭下(廣福門～漏刻門一帯か)



第46図　土壙SK01（倉庫跡）
土器（1・2）、瓦質土器（3）、坩堝（4）、瓦製品（5）、タイ産土器（6）

第17表　土壙SK01(倉庫跡)陶磁器類観察一覧

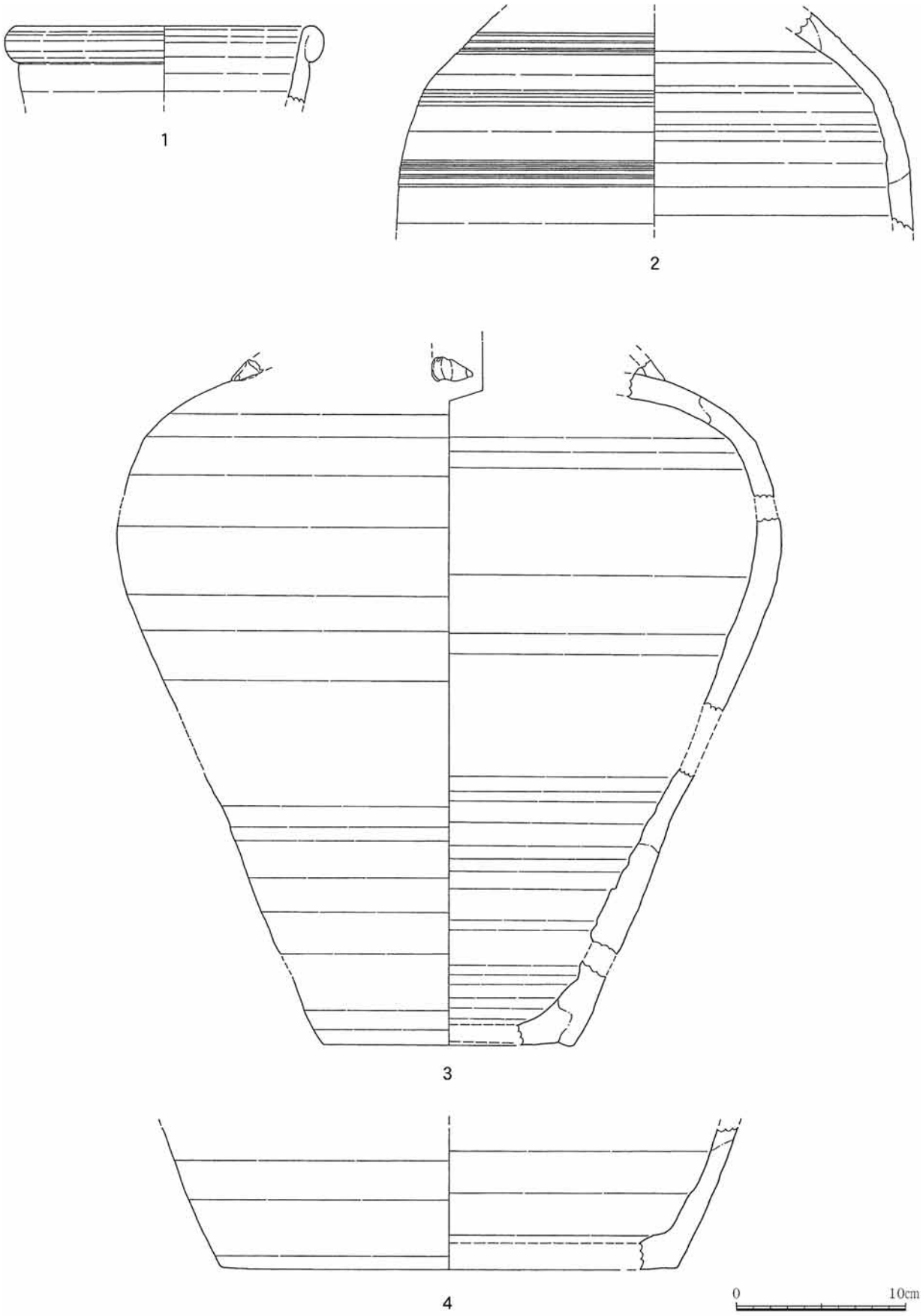
挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	素地・混入物・色調・釉色	観　察　事　項　等	出土地点 出土層
第47図 図版30 1	元青花 大合子 (中蓋)	素地は灰白色の細粒子。釉色は淡青白色の釉。貫入はない。	第41図5に報告した元青花大合子の中蓋と同一の資料とみられるが、器壁が3.27㎜と薄い点や肥厚帯の幅などから直線的に接合ができなかった。同一個体の可能性もあるが判然としなかった。口縁に方形状に成形して、肥厚帯を作る。内面口縁には内側を区画する板状の仕切りを貼り付けた痕跡がある。釉は口唇から内面に施されている。外面は露胎する。外面口縁から口唇部の一部には鉄錆が付着する。内面は火熱を受けて黒い斑点がみられる。	SA20 第2層
〃 〃 2	黒釉陶器 (天目茶碗・ 口縁)	素地は濃灰色の粗粒子。微細な黒色鉱物や長石を含む。劈開面に微細な気泡痕が多く観察される。釉色は黒色の釉。貫入はない。	いわゆる「建盞」タイプの口縁に近い破片。推算された口径が11.5㎝と求められた。口縁部のひねり返しが明瞭で、直口口縁となる。口唇部を舌状に尖らせている。口唇部の釉は薄く、褐色を呈する。福州閩候縣南嶼窯産。	SA20 第2層
〃 〃 3	黒釉陶器 (天目茶碗・ 胴部)	素地は黄白色の細粒子。微細な黒色鉱物を僅かに含む。劈開面に微細な気泡痕が僅かに観察される。釉色は茶褐色の釉。貫入はない。	高台脇から破損した胴部破片。釉は残存部位の外面胴中央から内面に施釉。胴下部は露胎。閩候縣鴻尾窯産。	SA19・20 畦第3層
〃 〃 4	黒釉陶器 (天目茶碗・ 胴部)	素地は灰白色の細粒子。微細な黒色や白色の鉱物を少量含む。釉色は黒色の釉。貫入はない。	高台際に近い胴部破片。釉は残存部位の外面胴中央から内面に施釉。胴下部は露胎。福州寧徳市飛鸞窯。	SA20 第3層
〃 〃 5	瑠璃釉 (碗か鉢)	素地は灰白色の微粒子。釉色は藍色の釉。貫入はない。	胴部破片。金彩は確認できない。中国景徳鎮窯。	SA19 畦第2層
〃 〃 6	三彩 瓶か緑釉瓶	素地は黄白色の粗粒子。微細な黒色鉱物を僅かに含む。釉色は淡緑色。微細な貫入が観察できる。	中国華南三彩瓶、若しくは緑釉瓶とみられるもので、瓶頸部の破片である。丸彫りで界線(幅1.4㎜)を施す。内面の器面調整は丁寧な回転擦痕。	SA19・20 畦第2層
〃 〃 7	三彩 鶴形水注か 鴨形水注・ 胴部	素地は黄白色の粗粒子。微細な黒色の鉱物が僅かに含まれているが、僅かながら粗い長石(2.9㎜×4.9㎜)も確認できる。釉色は淡緑色を主体に部分的に黄色と茶褐色の二色が確認される。微細な貫入が観察できる。	中国華南三彩鶴形水注、若しくは鴨形水注の羽の部分にあたる破片。羽の文様は型で起こした陽文。内面は陶土を型に押し込んだ際の指圧痕や指ナデが観察できる。	SA19・20 畦第2層
〃 〃 8	三彩 鶴形水注・ 胴部	素地は黄白色の粗粒子。微細な茶褐色の鉱物が僅かに含まれている。釉色は淡緑色のみが確認できる。微細な貫入が観察できる。	中国華南三彩鶴形水注の側面破片(型から取り出した陶土を合わせるために側面の補強をおこなった陶土の継ぎ足し部分の破片)。内面に器面調整で施された右上がりの丁寧な指ナデが観察できる。	SA19・20 畦第2層
〃 〃 9	中国産陶器	素地は橙白色の粗粒子。細かい長石？と粗い茶褐色の鉱物を少量含む。下地に白化粧土を施し、絵付け後に白濁した透明釉を施す。細かい貫入がみられる。	鉄釉による文様とみられるものを描いた壺の胴部破片。文様は筆書きでなされているが、構図は不明である。内面に雑な指ナデがみられる。内面に淡い茶色の透明釉が垂れている。	SA19北側延長部分で確認されたSK02 第9層出土
〃 〃 10	ベトナム産 の壺か瓶	素地は灰白色の細粒子。微細な黒色及び白色の鉱物を少量含む。劈開面から微細な気泡痕が多くみられる。外面は露胎のままであるが、内面に灰白色の釉が垂れている。	壺か瓶の頸部破片。外面に轆轤成形時の回転擦痕(指ナデ)を主体に刷毛目状の擦痕が部分的にみられる。内面にも回転擦痕が丁寧に施されているが、擦痕の目は外面よりも粗い。	SA19 栗石内



第47図　土壙SK01（倉庫跡）
元青花（1）、黒釉陶器（2～4）、瑠璃釉（5）、三彩（6～8）、中国産陶器（9）、ベトナム産陶器（10）

第18表　土壙SK01（倉庫跡）中世陶器観察一覧

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	素地・混入物・色調・釉色	観　察　事　項　等	出土地点 出土層
第48図 図版31 1	備前焼 壺の 口縁	素地は灰褐色の粗粒子。素地に粗い茶黒色や白色（長石？）の鉱物を多量に含む。劈開面から白色の陶土が縞状に入っている。自然釉とみられ暗茶色の釉が内面口縁から外面まで掛かっている。焼成は堅緻。	口縁の玉縁は陶土を折り返して肥厚とする。肥厚帯下端に削りを加えて軽く成形する。外面の肥厚帯と口縁は主に目の細かい擦痕で調整しているが、部分的に指圧痕が確認できる。裏面は雑で目の粗い回転擦痕で調整する。推算された口径は17.6cmと求められた。	SA20 第3層
〃 〃 2	備前焼 壺の 肩部～ 底部	素地は光沢のある灰褐色の粗粒子。素地に粗い茶黒色や白色（長石？）の鉱物を多量に含む。自然釉とみられ黄緑色の釉が外面にのみ観察できる。焼成は堅緻。	文様は肩上部と胴部に施されている。肩上部に４本単位の櫛目をもちいて横位の沈線を廻らし、胴部は６本単位の櫛目で横位の沈線を施している。上下の櫛描き沈線の間に本来描かれるはずの櫛目波状文が欠落している。外面の器面調整は釉などで隠れてみえないが部分的に篦削りの痕跡が確認できる程度である。内面は雑な轆轤成形痕（回転擦痕）が観察できる。胴部の最大径は29.8cmを求めた。	SA19・20 畦第2層 ・第3層
〃 〃 3	備前焼 壺の 肩部～ 胴部	素地は光沢のある灰褐色の粗粒子。素地に粗い白色（長石？）の鉱物を多量に含み、希に茶褐色の鉱物を含む。自然釉とみられ茶褐色の釉が外面の肩部から胴部で観察できる。但し、肩部は火熱を受けて釉が暗褐色や茶白色に変色する。焼成は堅緻。	肩部に断面が歪な扁楕円形状の耳（把手）を貼り付けている。肩部に不鮮明な重ね焼きの際の目跡が帯状に観察される。外面の肩部から胴部までは丁寧に器面を調整しているようであるが、胴下部から雑な状態となり、篦削りを消し忘れている部分がみられる。底部も篦削りをナデ消しているが徹底せず、雑な仕上げとなっている。内面も外面と同様に肩部から胴部まで比較的に丁寧にナデ様の轆轤成形を加えているが、底部は轆轤痕が深めに粗く残っている。胴部の最大径は39cm、底部は14.8cmを求めた。	SA19・20 畦第2層 ・第4層
〃 〃 4	備前焼 壺の 底部	素地は灰褐色の細粒子。素地は他と比較して細かく、微細な白色（長石？）の鉱物を多量に含み、希に茶褐色の鉱物を含む。施釉は認められない。露胎である。焼成は堅緻。	底面からの立ち上がりは、内側に若干、閉じ気味に直線的に胴部へ移行するようである。外面は雑な回転擦痕がみられる。特に底面から立ち上がり部分は雑に仕上げている。内面は外面よりやや丁寧な回転擦痕がみられるが、底面は轆轤痕が消されていない。器色は両面とも灰褐色を主体とし、部分的に赤茶色を帯びている。底部は26.8cmを求めた。	SA19・20 畦第2層 SA19第3層



第48図　土壙SK01（倉庫跡）
中世陶器（１～４）

第19表　土壙SK01(倉庫跡)
沖縄産無釉陶器出土状況

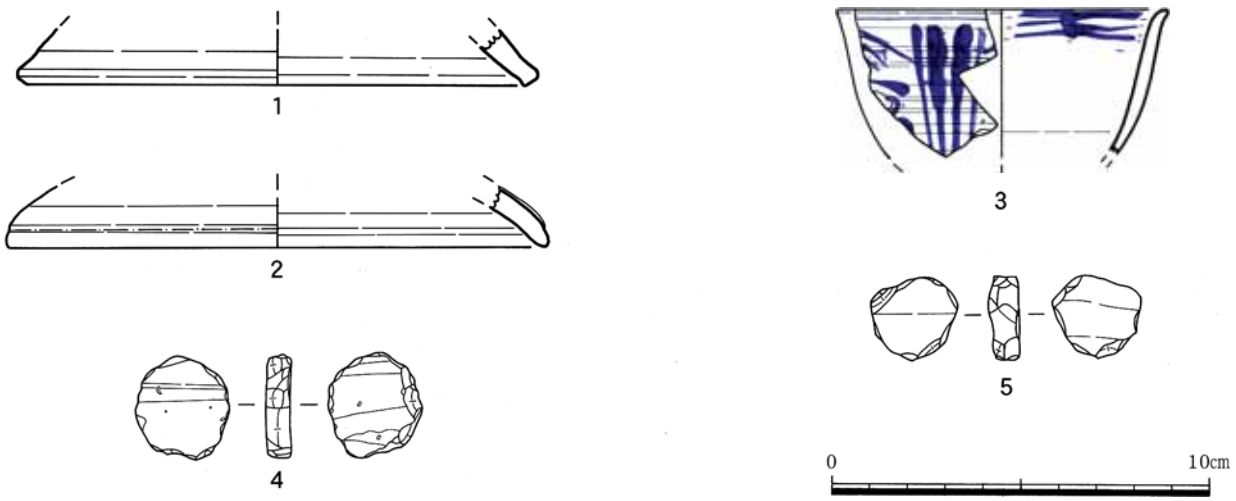
器種・部位＼出土地	SA19 栗石内	SA19 一括遺物2層	SA20 一括遺物2層	SA20 第3層	SA20 第4層	SA19・20 畦3層	合計
蓋	1					1	2
壺 胴部		1	1	1	1	1	5
合　計	1	1	1	1	1	2	7

第20表　土壙SK01(倉庫跡)円盤状製品出土状況

種類＼出土地	SA19 第3層	SA20 第3層	SA19・20 畦3層	SA19・20 畦4層	合計
褐釉陶器	1	2	1	1	5
合　計	1	2	1	1	5

第21表　土壙SK01(倉庫跡)陶磁器類観察一覧

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	素地・混入物・色調・釉色	観　察　事　項　等	出土地点 出土層
第49図 図版32 1	沖縄産無釉陶器 蓋	素地は茶紫色の細粒子。微細な白色鉱物を少量含む。無釉。焼成は堅緻。	蓋甲外端部を方形状に成形。内外面ともに回転擦痕がみられる。外面の擦痕は目が細かい。推算直径13.6m。	SA19 栗石内
〃 〃 2	沖縄産無釉陶器 蓋	素地は茶紫色の細粒子。素地に細かい白色鉱物を多量に含む。希に粗い茶褐色の鉱物がみられる。外面にのみ濃緑色の釉を施す。焼成は堅緻。	蓋甲外端部を舌状に成形。外面は釉で覆われていて器面調整は確認できないが、端部近くが露胎するため、当該部分ではナデ(水引き)のようである。内面は回転擦痕がみられる。推算直径14.4㎝。	SA19・20 畦第3層
〃 〃 3	本土産磁器 小碗	素地は光沢のある淡灰白色の微粒子。淡灰白色の釉。呉須は濃青色。	小碗の口縁破片で、口縁端部で僅かに外反する。文様は外面口縁に界線で囲繞し、その直下に筆書きで縦位に四本の線を描くが、内側の二本は太い筆書きで描く。左側に竹葉文と字款とみられるものを描いている。内面には歪で横広がりとなった崩れた四方襷文を描いている。	SA19 覆土
〃 〃 4	円盤状製品 (遊具)	素地は橙白色の細粒子。外面に黄緑色の釉を施す。内面は茶褐色の釉が掛かっている。	中国産褐釉陶器の胴部破片を遊具として加工したものである。加工は打割調整のみで実施されていて、主に外面から打ち欠いている。	SA19・20 畦第3層
〃 〃 5	円盤状製品 (遊具)	素地は黄白色の細粒子。両面に茶褐色の釉を施す。	中国産褐釉陶器の胴部破片を遊具として加工したものである。加工は打割調整のみで実施されている。打割調整は外面から三回程度打ち欠き、内面から４回程度打ち欠いているようである。	SA19 第3層



第49図　土壙SK01(倉庫跡)
沖縄産無釉陶器(1・2)、本土産磁器(3)、円盤状製品(4・5)

16. 金属製品　保存処理未(第50図１～第59図126)・(図版33－1～図版42－124)

国指定の重要文化財に指定されている京の内倉庫跡出土の金属製品一括資料の中には、第11表に呈示したとおり67点が保存処理を終了している。今回の報告書作成で金属製品の分類や集計を試みたところ、未処理の金属製品が1794点（第22表）の存在が確認された。金属製品の中には、明らかに現地表面や壁面から落ちて紛れ込んできた近・現代の丸釘17点、戦時中の砲弾破片９点が含まれている。これらの金属製品の中から形状を窺い知ることのできる資料や重要な資料、そして特異な資料などを含めた124点を図化した。

掲載した実測図や写真を基にして、将来において保存処理が円滑に実施できるように金属製品の照合や保存処理を優先すべき資料の選別などが容易となるように整理した。

なお、金属製品の分類については、第Ⅴ章の第２節 1.金属製品を参照されたい。

（1）**工具類・生産用具**（第50図１～15、第51図16～26･28･29、第56図80･81、第59図126)・(図版33－１～15、図版34－16～26･28･29、図版39－80･81、図版42－126)

工具類及び生産用具として、釘（第50図１～12)・針？（同図13)・鋲（同図14)・留め金具（同図15)・受け金具（第51図16～19)・蝶番関係金具（同図20･21･24)・把手（同図22)・装飾金具（同図23･25･26･28･29)・縁金具（第56図80･81)・引手金具の鋲（第59図126）が得られている。以下、特徴などについては、第23表①～③、同表⑧、同表⑫に呈示した。

（2）**装身具**（第51図27･30)・(図版34－27･30)

装身具は、第51図27･30に図示した簪の一種類のみが確認されている。特徴などは第23表③に示したので参照されたい。

（3）**祭祀用具**（第52図31～35、第53図39～42)・(図版35－31～35、図版36－39～42)

祭祀用具は、鈴（第52図31～33)・花瓶（第52図34・35)・長柄付片口銚子（第53図39～42）の３種類を取り扱った。個々の特徴などは第23表③・同表④に示した。

（4）**生活用具**（第52図36～38、第56図80･81)・(図版35－34～38、図版39－80･81)

生活用具として、鍋（第52図36～38)・縁金具（第56図80)・調度品の金具（同図81）を図示した。特徴などについては第23表③に呈示した。

（5）**武具**（第54図43～54、第55図55～69、第56図70～79･82～84、第57図85･87～104、第58図－105～113)・(図版37－43～54、図版38－55～69、図版39－70～79･82～85･87、図版40－88～104、図版41－105～113)

武具の種類として、兜金具（頭立の管：第54図43、鉢：同図44～49、斎垣：同図50、眉庇：同図51、立物：同図52～54・第55図55～69、鍬形台：第56図70～72)、笠鞲（同図73)、責鞲（同図74)、覆輪（同図75)、鎧の胴部金具（同図76～78)、籠手？（同図79)、八双金物（同図82～84)、総角付けの鐶座（第57図85・87)、札（同図88～104、第58図105～109)、鎖帷子（同図110・111)、立挙？（同図112)、籠手の摘（同図113）が得られている。各々の特徴などについては、第23表④～同表⑪に示した。

（6）**武器**（第57図86、第58図114～120、第59図121～124)・(図版39－86、図版41－114～120、図版42－121～124)

武器の金具として、刀剣の目貫（第57図86)、鍔（第58図114)、切羽（同図115～119)、薙刀の逆輪（同図120)、石火矢の弾（第59図121)、石火矢の筒および締め金具（同図122～124）が得られている。特徴などの記述は第23表⑨、同表⑪・⑫に呈示した。

（7）**銭貨**（第59図125)・(図版42－125)

その他として取り扱った資料は、倉庫内に保管されていた銭貨の束が、火災によって溶解・凝固した塊である。観察事項は第23表⑫に記した。

第22表　国指定重要文化財（保存処理未）金属製品出土状況

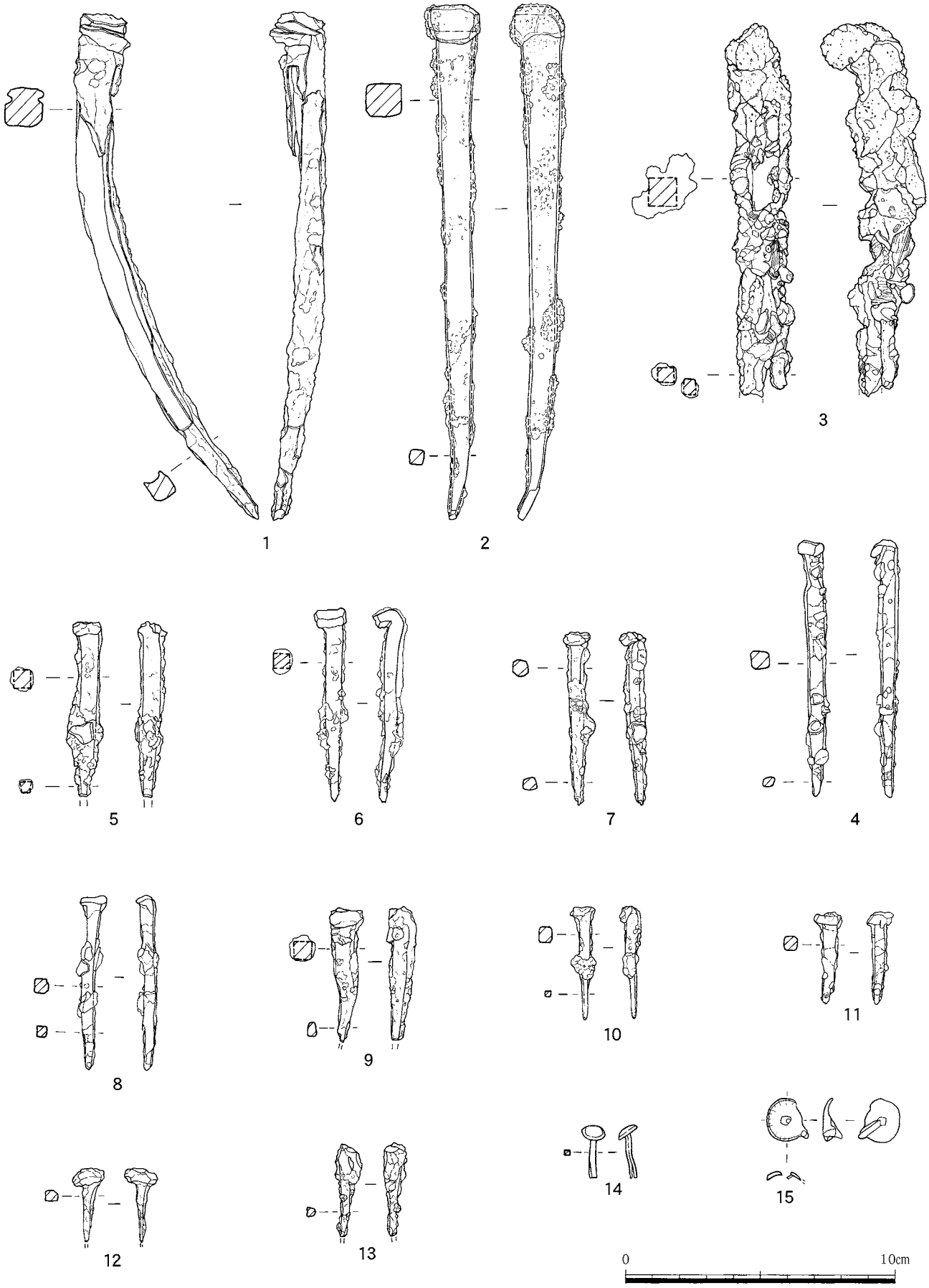
分類・種類				出土地	SA19										SA20								SA19と20の間	SA19・20										SK01				SA19・20畦	SA19・20	合計	
分類	種類	細分	サイズ	材質	第2層	第3層	第4層	第5層	一括遺物（裏栗の中）	一括遺物（裏栗の下）	一括遺物（延長東側）	一括遺物2層	一括遺物3層	一括遺物4層	一括遺物1層	一括遺物2層	一括遺物3層	第2層	第2層（南側延長）	第3層	灰黄色土第3層	第4層	第1層（焼土面）	畦地山直上	床面畦	畦床面清掃	畦2層	畦3層	畦4層	畦5層（灰層）	第2層	第3層	第4層	SK01-A 上層（2層）	SK01-A 中層（4層）	SK01-B 黒褐色土層	SK01-C 淡褐色土層（上層）	第1層+畦第2層	第2層+不明	合計	
工具類・生産用具	丸鋲	完形	小	鉄														1																						1	
工具類・生産用具	丸鋲	先端部欠損	中	鉄																							1													1	
工具類・生産用具	丸釘	完形	中	鉄							1						1			1									1											4	
工具類・生産用具	丸釘	先端部欠損	中	鉄							1									1																				2	4
工具類・生産用具	丸釘	先端部欠損	不明	鉄									1															1												2	
工具類・生産用具	丸釘	頭部欠損	中	鉄													2																							2	
工具類・生産用具	丸釘	先端+頭部欠損	中	鉄							6																													6	7
工具類・生産用具	丸釘	先端+頭部欠損	不明	鉄																								1												1	
工具類・生産用具	角釘	完形	中	鉄	2	6	1	4					1		1		1	10	1	39	4	2				1	14	15	16											118	186
工具類・生産用具	角釘	完形	小	鉄		3	2					1	1		1			1		34	4	2				3	4	2	7								3			68	
工具類・生産用具	角釘	先端部欠損	大	鉄									1																											1	381
工具類・生産用具	角釘	先端部欠損	中	鉄		1	8	1	1	1	7	5	1	3	2	6	5	33	3	57		12				7	31	19	33											236	
工具類・生産用具	角釘	先端部欠損	小	鉄		4			1						2	2	3	9		32		6					7	23	9								2			100	
工具類・生産用具	角釘	先端部欠損	不明	鉄														1		27						1		3	12											44	
工具類・生産用具	角釘	頭部欠損	大	鉄			1																																	1	190
工具類・生産用具	角釘	頭部欠損	中	鉄			3				3	1	3	1	1			7	1	18		11			1	2	15	5	14											86	
工具類・生産用具	角釘	頭部欠損	小	鉄			3											3		18							5	13	19								2			63	
工具類・生産用具	角釘	頭部欠損	不明	鉄			2								2		2			24	2					1		3	4											40	
工具類・生産用具	角釘	先端+頭部欠損	大	鉄																1																				1	248
工具類・生産用具	角釘	先端+頭部欠損	中	鉄	1	4	10	1		1		3	4		4	4		26		19		14	1			4	17	20	24		5									162	
工具類・生産用具	角釘	先端+頭部欠損	小	鉄			1					1				1				12							6	21	1						1					44	
工具類・生産用具	角釘	先端+頭部欠損	不明	鉄									1				6	3		13	3				1		4	6	3								1			41	
工具類・生産用具	角釘	先端部欠損+真ん中欠損	中	鉄																				1			2													3	
工具類・生産用具	角釘	頭部のみ	不明	鉄																				1																1	
工具類・生産用具	角釘	不明	不明	鉄									2															4												6	
工具類・生産用具	釘	頭部欠損	不明	鉄																																1				1	
工具類・生産用具	釘	不明	不明	鉄																																	3			3	
工具類・生産用具	受け金具			鉄														2										1												3	4
工具類・生産用具	受け金具			青銅																						1														1	
工具類・生産用具	蝶番受け金具			鉄																		1																		1	
工具類・生産用具	蝶番			青銅																								2												2	
工具類・生産用具	装飾金具			青銅												1										1	1	1												4	
工具類・生産用具	把手			青銅																1																				1	
工具類・生産用具	透かし飾り金具			青銅																1																				1	
工具類・生産用具	縁金具			青銅																1								1												2	
工具類・生産用具	板状製品			鉄														3									1	4												8	
工具類・生産用具	刀子			鉄											1																									1	
工具類・生産用具	簪			青銅											1	1																								2	
工具類・生産用具	鐶状の鋲			青銅																																	1			1	
工具類・生産用具	鋲			鉄			1											1				1						1												4	8
工具類・生産用具	鋲			青銅			1																					2	1											4	
工具類・生産用具	座金具?			青銅																									1											1	
工具類・生産用具	八双金物の止め金具			青銅																							1													1	
祭祀用具	香炉			青銅	11																							1												12	
祭祀用具	鈴			青銅																								6												6	
祭祀用具	鈴のつまみ			青銅																									1											1	
祭祀用具	花瓶			青銅																								2												2	
祭祀用具	長柄付片口銚子	口縁		青銅		2																																		2	4
祭祀用具	長柄付片口銚子	胴部		青銅		1																																		1	
祭祀用具	長柄付片口銚子	補強金具		青銅		1																																		1	
生活用具	針？			鉄																1																				1	
生活用具	鍋			鉄		1												1																						2	
生活用具	鍋or蓋			鉄														1																						1	
武具	札			鉄	2	2		1			1	6	3			2	5	23		10							8	10	5			2					1			82	87
武具	札			青銅																							3	2												5	
武具	鎖帷子			鉄	1		1						2			4		69		14		5					16	7	3			1								123	127
武具	鎖帷子			青銅		1												1								2														4	
武具	八双金物			青銅																2								3	1											6	
武具	笠鞐			青銅																								1	1											2	
武具	責鞐			青銅																								1												1	
武具	兜の鉢or鎧の胴部			鉄														2																						2	
武具	兜鉢or鎧の総角付の鐶座			青銅																									1											1	
武具	鎧の化粧板			青銅																1																				1	
武具	鎧の胴部			鉄	1							1	1													2	3	3												11	
武具	鎧の総角付の鐶座			青銅																								1												1	
武具	籠手？			鉄														1																						1	
武具	籠手の摘			青銅									1																											1	
武具	覆輪			青銅														1		2							2	5	1				1							12	
武具	立拳？			青銅												1																								1	
武具	兜の頭立の管			青銅																																	1			1	
武具	兜鉢			鉄								2	3					14		4							5	6												34	38
武具	兜鉢			青銅																								1	3											4	
武具	斎垣			青銅																							1													1	
武具	眉庇			鉄																									1											1	
武具	兜鉢の立物（鍬形）			青銅																1							17	6										1		25	
武具	兜鉢の立物			青銅	1	1						1								4							4	3											1	15	
武具	兜鉢の鍬形台			青銅														1		1							1													3	
武具	武具or調度金具			青銅																								5												5	
武具	不明			鉄								1	1							2																				4	
武器	刀の鞘(金具)			青銅																								1												1	
武器	刀剣の目貫			青銅												1																								1	
武器	刀剣の鍔			青銅	1																						1													2	
武器	切羽			青銅		1										1											1	1									1			5	
武器	薙刀の逆輪			青銅																							1													1	
武器	石火矢の筒			青銅																							1													1	
武器	石火矢の鐶金具？			青銅																								1												1	
武器	締め金具			青銅								1																												1	
武器	銅弾			青銅																								1												1	
武器	砲弾片			鉄							1						3	1		1																				6	9
武器	砲弾片			青銅								2															1													3	
鍛冶関連(湯玉と鉄滓)				鉄																1								2	3				2							8	
鍛冶関連(湯玉)				鉄									12	9		2				25						2	3	4	14				1							72	
鍛冶関連(鉄滓)				鉄									1	4		1				5						2	1	2	6											22	
用途不明				鉄		2	4									4	4	9		23						2	9	19	5	2		2		1			6			92	218
用途不明				青銅		16						3	6	10				4		16	4	5					21	32	5								4			126	
合計					20	46	38	7	2	2	20	28	45	27	15	31	32	228	5	412	18	59	1	2	2	31	208	274	195	2	5	5	4	1	1	1	25	1	1	1794	

注　釘のサイズは、大：5寸半以上(15.75㎝以上)、中：1寸半～5寸まで(3.75㎝～15.75㎝未満)、小：1寸まで(～3.75㎝未満)

第23表①　国指定重要文化財(保存処理未)金属製品観察一覧

単位：㎜/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	分類 名称 仮称	材　質	残存 重量	残存長 (縦)	残存幅(横) 残存厚	頭　部		観　察　事　項	出土地点 出土層
第50図 図版33 1	工具類・ 生産用具 釘	鉄製品	93.4	194.5 (　6寸 4分)	18.7 15.8	16.2	17.0	頭部の大部分と尖端の一部が破損した角釘。錆による劣化が著しく非常に脆い状態にある。正面の一部と左側面に本来の形状を留めている程度で他面は、剥離して地金が露出した状況にある。正面の右側は身に沿うように頭部から尖端方向に罅が入っている。	SA20 第3層
〃 〃 2	〃 釘	鉄製品	115.5	188.7 (　6寸 2分)	20.8 15.4	19.5	20.8	頭部の大部分が破損した角釘。各面とも錆による罅が入り、両側面に剥離が発生し非常に脆い状態にある。右側面の尖端近くで剥離がみられ地金が露出している。	SA19 第4層
〃 〃 3	〃 釘	鉄製品	74.4	136.3 (　4寸 5分)	22.0 22.3	28.5	18.1	頭部の大部分と尖端の一部が破損した角釘。火災によって焼失した建築部材などの木片や炭などの細片が各面に多量に付着していて釘の形状が把握しにくいため、角釘の頭部及び身部が殆ど観察できない。	SA20 第3層
〃 〃 4	〃 釘	鉄製品	13.4	93.2 (　3 寸)	7.8 7.5	7.7	9.4	頭部の大部分が破損した角釘。身の尖端は使用によって潰れて小さな磨面となっている。表面の錆には罅が入っている。右側面と裏面に一部は錆が剥離し地金が露出している。また、裏面の一部には小さな錆汁が凝固した錆瘤がみられる。	SA19･20 畦2層
〃 〃 5	〃 釘	鉄製品	10.8	64.4 (　2寸 1分)	8.5 7.8	7.8	10.0	頭部の大部分と尖端の一部が破損した角釘。正面の身部中央より下に錆瘤が発生し表面に石灰岩の細片や炭などが付着する。錆で釘全体が覆われて観察が困難ではあるが、各面の縁端部分で僅かに釘の形状を窺い知ることができる程度である。	SA20 第4層
〃 〃 6	〃 釘	鉄製品	9.9	70.2 (　2寸 3分)	7.4 7.44	8.59	10.2	頭部の大部分と尖端の一部が破損した角釘。各面には錆や罅が入っている。表面の身部中央付近は錆の進行が著しく地金まで達し、身が細くなっている。	SA20 一括遺物 1層
〃 〃 7	〃 釘	鉄製品	6.8	63.2 (　2 寸)	5.4 6.3	9.7	9.3	〃　。身の下半部で形状を窺い知ることができる程度、他の面は錆で覆われている。右側面中央付近に錆瘤が破裂している。裏面の身中央より下は錆による罅が観察される。	SA20 第3層
〃 〃 8	〃 釘	鉄製品	5.9	63.6 (　2 寸)	4.6 4.2	6.2	9.6	〃　。頭部近くの身上部では錆による地金の侵食で身幅が3.5㎜と細くなっている。表裏面とも罅が身に沿うような形で入っている。身下部分も地金が浸食されている。	SA19･20 畦2層
〃 〃 9	〃 釘	鉄製品	7.0	69.0 (　1寸 6分)	8.6 7.2	7.9	11.6	尖端部が僅かに欠損した角釘。身部が楔に近い形状や類例などから判断すると船釘などに多用される特殊な釘に近似するようである。表裏面とも錆汁が凝固する際に細片化した炭を取り込んでいる。	SA20 一括遺物 1層
〃 〃 10	〃 釘	鉄製品	2.5	41.0 (　1寸 3分)	4.1 3.6	—	—	身部の屈曲部分から折れ曲った角釘。身部の中央から下は形状が比較的に残っている。中央付近に錆瘤が観察できる。	SA19･20 畦2層
〃 〃 11	〃 釘	鉄製品	2.3	33.5 (　1寸 1分)	4.7 4.6	—	9.6	頭部が錆で脹れる。尖端が使用によって潰れて丸味を持った角釘。全体的に錆で覆われている。裏面の頭部近くに小さな罅割れが縦方向に入っている。	SA19･20 畦4層
〃 〃 12	〃 釘	鉄製品	2.0	27.1 (　8 分)	3.2 3.1	10.6	9.2	頭部の半分程度が欠落し、身の大半が破損した角釘。身の大半が錆によって地金を損失し、身の横断面が歪な菱形状となる。頭部は錆脹れや錆瘤の破裂がみられる。	SK01-A 中層 (4層)
〃 〃 13	〃 針？	鉄製品	2.2	33.2 (　1寸 弱)	4.5 2.9	5.6	7.6	頭部の作りは頭部となる部分を三角形状に尖らせてから尖端を折り曲げて身と接着する。身上部の頭部に近い部分は身より若干厚みが薄い。尖端は使用によって潰れている。ほぼ完形か。	SA20 第3層
〃 〃 14	〃 鋲	青銅 製品	0.8	18.9	2.0 全体1.7 (0.7/0.6)	8.3	8.1	武具や調度品などに使用された飾り鋲とみられるもので、頭部の表面を段上(圏線を表現か)に成形する。頭部裏面は窪んでいて、窪みの中央に二股にわれた身を取り付けている。	SA19 第4層
〃 〃 15	〃 八双金物の 留め金具	青銅 製品	1.4	—	— 2.6	15.3	13.4	一部を欠損した菊座金具で、二股鋲の身(全体の厚み2.3㎜、単独での厚み1.2㎜と1.4㎜。)が接着している。鋲の孔は方形を呈し、サイズは一辺が2.7㎜四方であったものが、一部が使用によって変形し五角形状の孔となっている。座の破損面及び周辺から青錆が発生している。菊花は弁先と弁軸(花弁を一枚ずつ表現している為、弁軸が二本単位となる)が一致していて丁寧であるが、青錆による侵食や使用時の潰れなどでやや不鮮明である。	SA19･20 畦2層

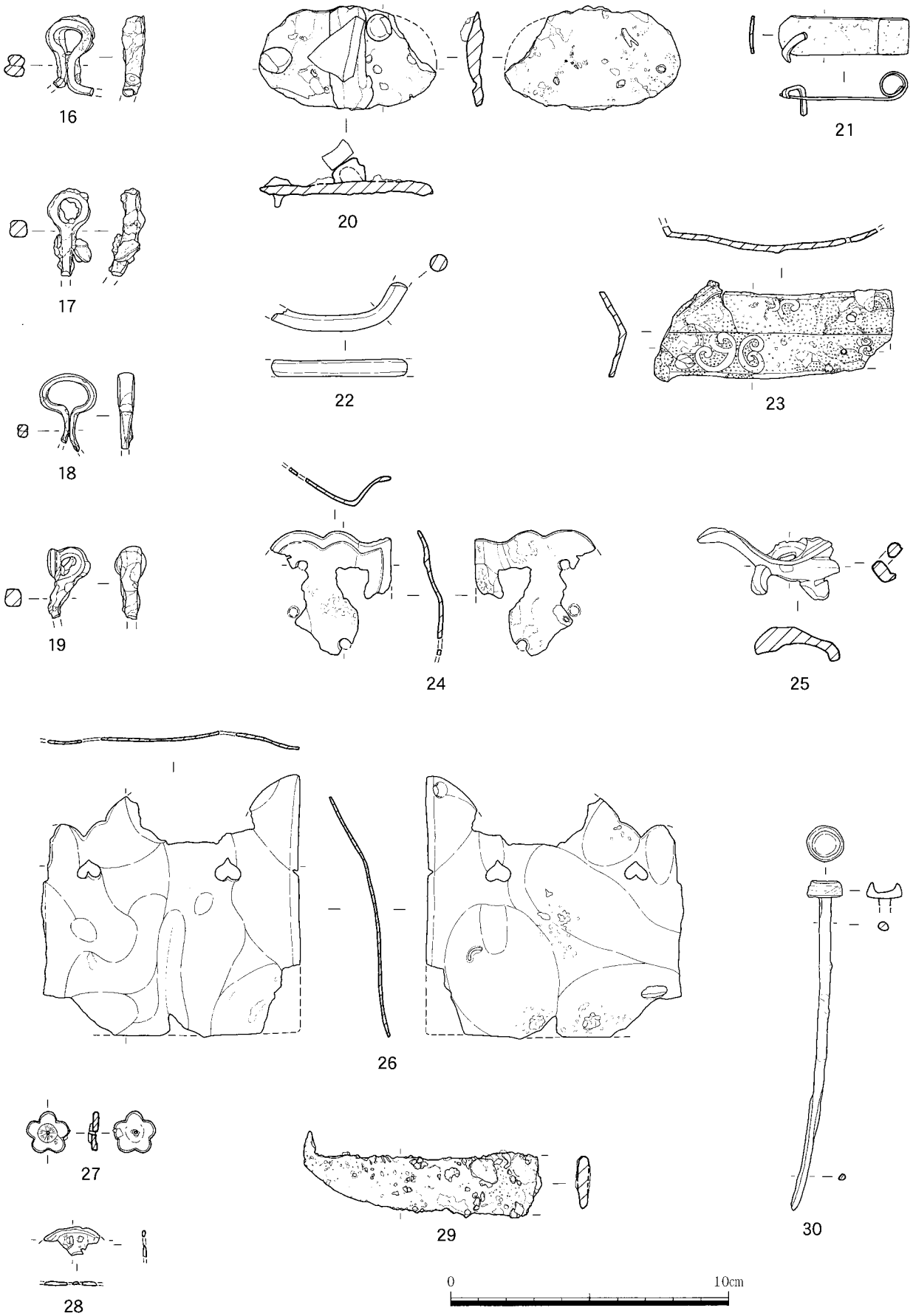


第50図　国指定重要文化財（保存処理未）①
金属製品　工具類・生産用具（1～12釘、13針？、14鋲、15留め金具）

第23表②　国指定重要文化財(保存処理未)金属製品観察一覧

単位：㎜/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	分類 名称 仮称	材質	残存 重量	残存長 (縦)	残存幅 (横)	残存 厚	観　察　事　項	出土地点 出土層
第51図 図版34 16	工具類・ 生産用具 受け金具	鉄 製 品	4.8	26.9	16.0	6.0	環状の受け金具は厚さ2.4～3.3㎜、幅4.9～6.1㎜の棒状となった鉄板を輪状に加工した軸受け金具である。受け金具の内径は8.4㎜を測る。外側の受け部の下端から二股に折れた屈曲部までの長さは7.5㎜を測ることから使用された板材は厚さ7.5㎜程度が推定される。表面は全体的に錆で覆われていて部分的に錆汁がバリ状に身からはみでている。罅割れも観察される。	SA19・20 畦3層
〃 〃 17	〃 受け金具	鉄 製 品	4.0	30.2	13.2	4.5	形状や身の折り曲げがないことから柱や厚手の板材に打ち込んで使用した環状の受け金具とみられる。受け金具は厚さ3.3～3.5㎜、幅4.5㎜に棒状となった鉄板を折り曲げて軸受け金具として製作。受け部の輪は変型はしているが輪の歪みが小さいところでは内径が5.5㎜を測る。身の中央には錆瘤や錆汁が凝固し、身からはみでている。	SA20 第2層
〃 〃 18	〃 受け金具	青 銅 製 品	4.5	27.7	19.7	5.7	両端の尖った青銅製の板材を環状に加工した受け金具。板材の厚さは1.2～2.4㎜、幅2.7～5.7㎜板材を折り曲げて製作。受け金具の内径は8.6～13.8㎜を測る。外側の受け部下端から二股に折れた屈曲部までの長さは7.7㎜を測ることから使用された板材は厚さ7.7㎜程度が推定される。頭部は板材への打ち込みで楕円形状に変形している。青錆は表面に露出した部分に集中し、板材に打ち込まれた身部は錆が極端に少ない。	SA19・20 畦床面 清掃
〃 〃 19	〃 受け金具	鉄 製 品	3.3	26.1	—	6.0	環状の受け金具は厚さ2.4～3.1㎜、幅4.3～6.0㎜の棒状となった鉄板を輪状に加工した軸受け金具である。受け金具の内径は4.6㎜を測る。外側の受け部下端から二股に折れた屈曲部までの長さは12.0㎜を測ることから使用された板材は厚さ12.0㎜程度が推定される。全体的に錆で覆われている。特に表面の頭部左側は錆汁が円形状に凝固したバリとなって頭部からはみでている。	SA20 第2層
〃 〃 20	〃 蝶番受け 金具	鉄 製 品	36.8	36.3	62.9	身2.9 身と 軸受け 12.2	蝶番受け金具。正面観が扁楕円形となる受け金具で中央に軸受けの筒金具が折り返しによって製作されている状況から判断すると鋳物製法で製作された可能性がある。正面軸受けの左側には、隣接した形で頭部が丸形となる鉄鋲を軸受の中央よりに上下2ヶ所、左端に１ヶ所、計三ヶ所に打ち込んでいる。左側の鋲は錆で覆われ、確認しにくいが、裏面では折れた鋲の身部などが三ケ所で確認できる。正面右側も軸受けに隣接するように上下2ヶ所に打ち込まれているが、下位の鋲は頭部が欠落している。右端の鋲は欠損している。使用された丸形鋲の直径は9.6㎜を測った。軸受け内部は鉄汁などで孔の空間が塞がれているが、錆汁など形状から直径3.7㎜程度の孔が推定される。軸受けの中央には中国産褐釉陶器壺の胴部片が錆汁によって付着している。	SA20 第4層
〃 〃 21	〃 蝶番	青 銅 製 品	7.7	12.4～ 13.7	84.4	身0.6 身と 軸受け 11.0	青銅製の蝶番受け金具。正面観が隅丸の短冊状となる受け金具で、右端に軸受けの筒を設けている。軸受けの筒は鉄製の棒などに巻き付けながら製作したようである。正面左端は鋏、若しくは鑿で切り落とされている。端よりに直径2.7㎜の小孔が穿たれている。孔の中には折れた鋲の身部が残っている。軸受けの内径は6.2～7.4㎜を測る。	SA19・20 畦3層
〃 〃 22	〃 把手	青 銅 製 品	9.2	46.4	5.6	5.6	把手のサイズや形状などから推定すると小振りの調度品や小型の容器などに取り付けられたものと推察される。把手表面は無造作に細かく削り込んだような調整があり、削り様の調整後に、多面となった稜の潰しを兼ねた研磨が施されている。屈曲部分の内側には折り曲げの際に発生した罅が二・三箇所で確認できる。把手右上端面は他の金具との接合部とみられこの面から折れている。	SA20 第3層
〃 〃 23	〃 調度品 飾金具 (縁金具)	青 銅 製 品	18.1	縦28.4 ～34.2	横67.5 ～86.3	0.4～ 0.6	大型の櫃など調度品の角縁に使用された飾金具。文様は火災の影響を受けて表面がケロイド状となる部分が多く、主体となる文様は不明であるが、葉文と唐草文の二種類が確認できる程度である。縁沿いの沈線は蹴彫りで表現される。文様間の隙間を埋める魚々子は規則的に並列に打ち付けた部分とまばらに充填打とする部分がみられる。縁金具の右側に二箇所の小孔(上位の孔径は2.4㎜、下位の孔径が1.9㎜)を穿っている。上位の孔には青銅製の丸釘が填った状態で折れている。左端沿いの角縁は、別の飾金具との接合部分に当たり、当該部位の下部は火熱を受けて溶けて氷柱状に固まっている。裏面も大半が火災の影響を受けてケロイド状となる。緑青は表面上部に多くみられる。	SA19・20 畦2層
〃 〃 24	〃 蝶番？	青 銅 製 品	7.9	44.2	42.8	0.5～ 1.1	蝶番金具、若しくは扉金具とみられる。正面観が花弁を半裁した花弁形の金具で、釘孔の痕跡が三箇所で確認されている。釘孔は3.2㎜を測る。 火災による火熱の影響で金属が溶けている部分やケロイド状となる箇所が表裏面で観察できる。花弁は形状(幅2.4㎜)に合わせて表面に鏨を打ち込んで、単線を繋ぎ合わせるように蹴彫りで花弁を表現している。他の文様は緑青や火熱の影響でケロイド状となるため判然としない。	SA19・20 畦3層
〃 〃 25	〃 装飾金具	青 銅 製 品	12.8	30.1	49.2	1.4～ 4.4	調度品や容器などに取り付けられたと考えられる飾金具の破片。鋳型による型物製品で、内面が大きく窪んで凹面となる。縁沿いの縁辺部と裏面は火災による影響を受けてケロイド状となっている。部分的に二次的な火熱を受けて素材が溶けて、再度凝固している。文様の構図は植物なのか動物なのか不明。	SA20 一括遺物 2層
〃 〃 26	〃 装飾品？	青 銅 製 品	32.4	8.5	9.2	0.1 0.05	調度品などに利用された装飾品、若しくは刀剣や薙刀などの逆輪が開いたような製品。上部が魚の尾鰭状となり、尾鰭の根本近くを逆さハート形に刳り取っている。ハート形の刳り抜き以外に釘孔はない。表面は緑青で全体的に覆われている。内面は外面よりも面の保持が悪く、緑青の進行によって黄白色や白色を帯びる部分がみられる。その他に鉄錆汁が固まったものや青銅片などの不純物が付着している。	SA19・20 畦3層

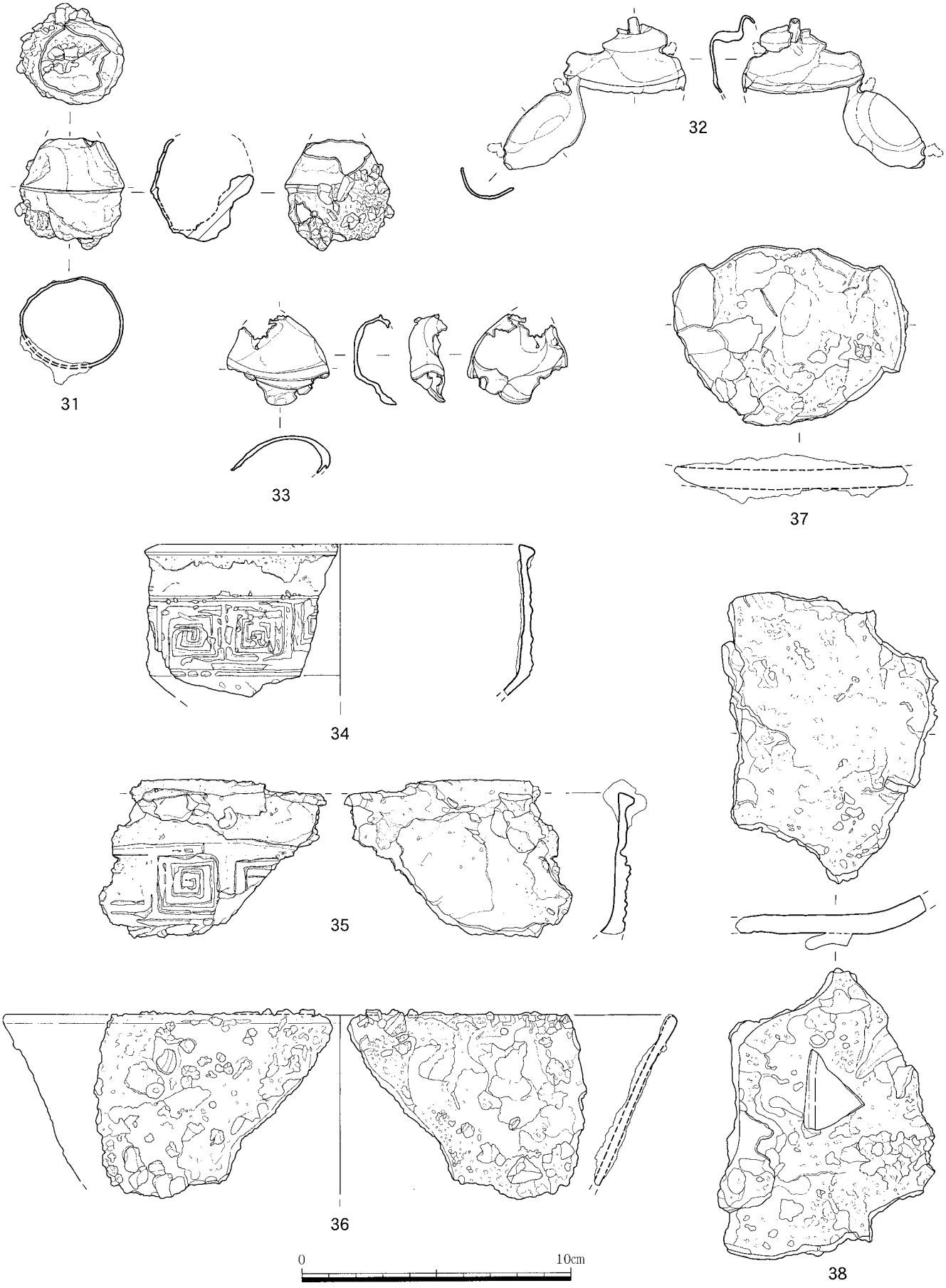


第51図　国指定重要文化財（保存処理未）②
金属製品　工具類・生産用具（16～19受け金具、20・21・24蝶番関係金具、22把手、23・25・26・28・29装飾金具）、装身具（27・30簪）

第23表③　国指定重要文化財(保存処理未)金属製品観察一覧

単位：㎜/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	分類 名称 仮称	材質	残存重量	残存長(縦)	残存幅(横)	残存厚	観　察　事　項	出土地点 出土層
第51図 図版34 27	装身具 簪	青銅製品	1.4	12.6	14.5	1.4 2.5	簪(髪差)の頭部(カブ)。表面の一部と裏面は火災の影響を受けてケロイド状となっている。特に裏面は火災の影響が著しい。カブは精巧な梅花を表現したものとみられ、中央の凸部に雄蕊の花糸と葯(花粉の入った袋)を陽刻(別途で文様の型を彫り込んだ工具で打ち抜いた為、中央の凸部から文様がずれている)で表現している。中央に竿と連結する際の四角形状の小孔(１㎜四方)が穿たれている。	SA20 一括遺物 2層
〃 〃 28	工具類・ 生産用具 透し飾り 金具	青銅製品	0.7	9.7	19.2	0.7～1.3	透しのある飾り金具の破片で、二次的な火熱の影響を受けて表裏面ともケロイド状となり器面の保持が悪く、文様の構図が把握できない。中央付近の透しは、二箇所のみ残存し歪な扁楕円形状となっている。縁辺部は摩滅している。	SA20 第3層
〃 〃 29	〃 刀子	鉄製品	18.9	18.4～ 21.7	84.4	1.6～2.2	切先の先端にみられる突起は、錆汁が凝固して膨らんだもので錆瘤とみられる。表裏面とも錆で覆われていて錆汁が凝固しケロイド状となる。刃から切先までは緩やかに湾曲する。刃の欠落箇所は使用時に欠損したのか、或いは錆によって欠落かどうかについては判然としない。	SA20 一括遺物 1層
〃 〃 30	装身具 簪	青銅製品	9.1	116.6	頭部 12.6	2.8～3.6	全体的に錆の影響を受けていて竿の上部に鉄分が付着して赤茶色となる。竿上部から先端までは緑青による腐蝕で面の保持が悪い。髪差頭部(カブ)の花径は上部10.4㎜、下部が12.5㎜、花厚5.4㎜を測る。竿長は110.9㎜を測る。竿の断面は丸形となっている。カブの側面には二条の沈線(幅1㎜)が囲繞する。カブの上面は凹面で、中央から若干ずれた箇所に竿が接続されている。	SA20 一括遺物 1層
第52図 図版35 31	祭祀用具 鈴	青銅製品	23.3	37.1	31.4～ 37.0	0.7～0.9	球形の鈴で上部が欠落する。全体的に緑青で覆われ、下部は錆汁によって取り込まれた石灰岩の小礫(５㎜×10㎜)や砂礫などが付着する。また、鈴内部にも青銅製品の破片や砂礫が溜まっている。鈴下部の一文字の孔の両端は二股でハート形に空いている。	SA19･20 畦3層
〃 〃 32	〃 鈴	青銅製品	11.7	27.8	紐通しの輪: 3.7 身:76.4	紐通しの輪:1.1 身:0.7 ～0.8	鈴が縦方向に割れたものが再度、錆汁で付着した資料で、左側が鈴の下部で一文字の孔を境に割れている。右側が鈴上部の破片で紐通しの輪が残っている。表裏面とも火災の影響を受けて表面がケロイド状となる。緑青は右側の内面に集中し、液体のように染み込んだ痕がみられる。紐通しの輪と鈴上部の接合は強固で隙間がない。	SA19･20 畦3層
〃 〃 33	〃 鈴	青銅製品	10.0	33	38.4	0.7	上記、32と同一の個体。鈴上部と下部が重なった状態にある。表面は鈴上部と下部を接合する際の凸帯があり、その直下に鈴下部に設けられた一文字の孔が観察できる。内面は火災による高温で鈴上部が虫食いの様な状態で消失し、一部は素材が溶けて密着している。緑青は両面で部分的に観察できる。	SA19･20 畦3層
〃 〃 34	〃 花瓶	青銅製品	114.8	62.7	133.9	肥厚部: 6.1 身:1.6	口縁部が半分近く残存。推算された口径は14.5cmであった。口縁の肥厚は断面が三角縁状を呈する。腰下部で「く」の字状に屈曲する。口縁形態や腰下部の屈曲状況などから類似資料を求めると、時代は下るが18～19世紀に琉球で製作された龍耳花瓶(沖縄県立博物館･美術館収蔵品)の口縁部などに近似するようである。緑青が器面全体に広がり、一部に於いては地金が白く変色する部分もみられる。器面の保持が悪く、非常に脆くなっている。外面には陽刻の鋳型で雷文帯と二条一組の界線を雷文帯の上位と下位に施している。単体の雷文は二種類の文様パターンで構成され、左側の雷文は、雷文の中心で反時計回りと時計回りに外側方向に広がっている。右側の雷文は中心から時計回りに外側に広がっている。	SA19･20 畦3層
〃 〃 35	〃 花瓶	青銅製品	73.6	58.0	75.9	肥厚部: 5.2 身:1.6	上記、34と同一の個体とみられる。外面の口唇付近と内面に他の破片が密着した状態で重なっている。合計３枚の破片が重なっている。口縁の肥厚は断面が三角縁状を呈する。腰下部で「く」の字状に屈曲する。緑青が器面全体に広がっている。外面には陽刻の鋳型で雷文帯と二条一組の界線を雷文帯の上位と下位に施している。雷文は一種類のみ文様の展開パターンが確認される。確認された雷文の文様展開のパターンは中心から時計回りに外側に広がっているものであった。内面の一部は地金が白く変色する部分や罅割れもみられる。器面の保持が悪く、非常に脆くなっている。	SA19･20 畦3層
〃 〃 36	生活用具 鍋	鉄製品	69.2	71.4	87.9	1.4～3.1	口径の推算が25.4cmと求められた資料である。器形は、口縁部が外側に逆さ「ハ」の字状に外傾するタイプの鍋で、口縁部が微弱に外反する。表裏面とも錆で厚く覆われ、錆汁がそのまま凝固する部分が目立ち、表面は錆瘤も観察できる。裏面には錆汁が凝固する際に、中国産褐釉陶器の細片が３片と石灰岩の細片が取り込まれている。	SA20 第2層
〃 〃 37	〃 鍋？or蓋	鉄製品	160.0	65.8	87.1	2.1～6.9	円盤状に割れた製品。残存部の右側縁辺部は側面に面を形成する状況や重量感があることなどから判断すると急須などの容器に付属する蓋などが想定されるが、外観の観察では摘みの欠落や蓋底に取り付く突起の有無などが確認できない為、明確に言及することができない。表裏面とも全体的に錆で覆われて錆汁の凝固や錆瘤、罅割れの発生が観察できる。その他に石灰分が付着して灰白色を帯びた部分も散見される。	SA20 第2層
〃 〃 38	〃 鍋	鉄製品	130.7	110.3	78.2	3.8	鍋の底部破片。底面からの立ち上がりの部分で緩やかに丸味を保持しながら外側に大きく開いて胴部に移行するタイプの鍋が推定される。内外面は錆で厚く覆われている。両面とも錆汁の凝固、錆瘤、罅割れ、石灰分の付着などが観察できる。特に錆瘤は底面で大きく成長している。その他に底面には錆汁が凝固する際に取り込まれた中国産青磁碗の破片が付着している。	SA19 第3層

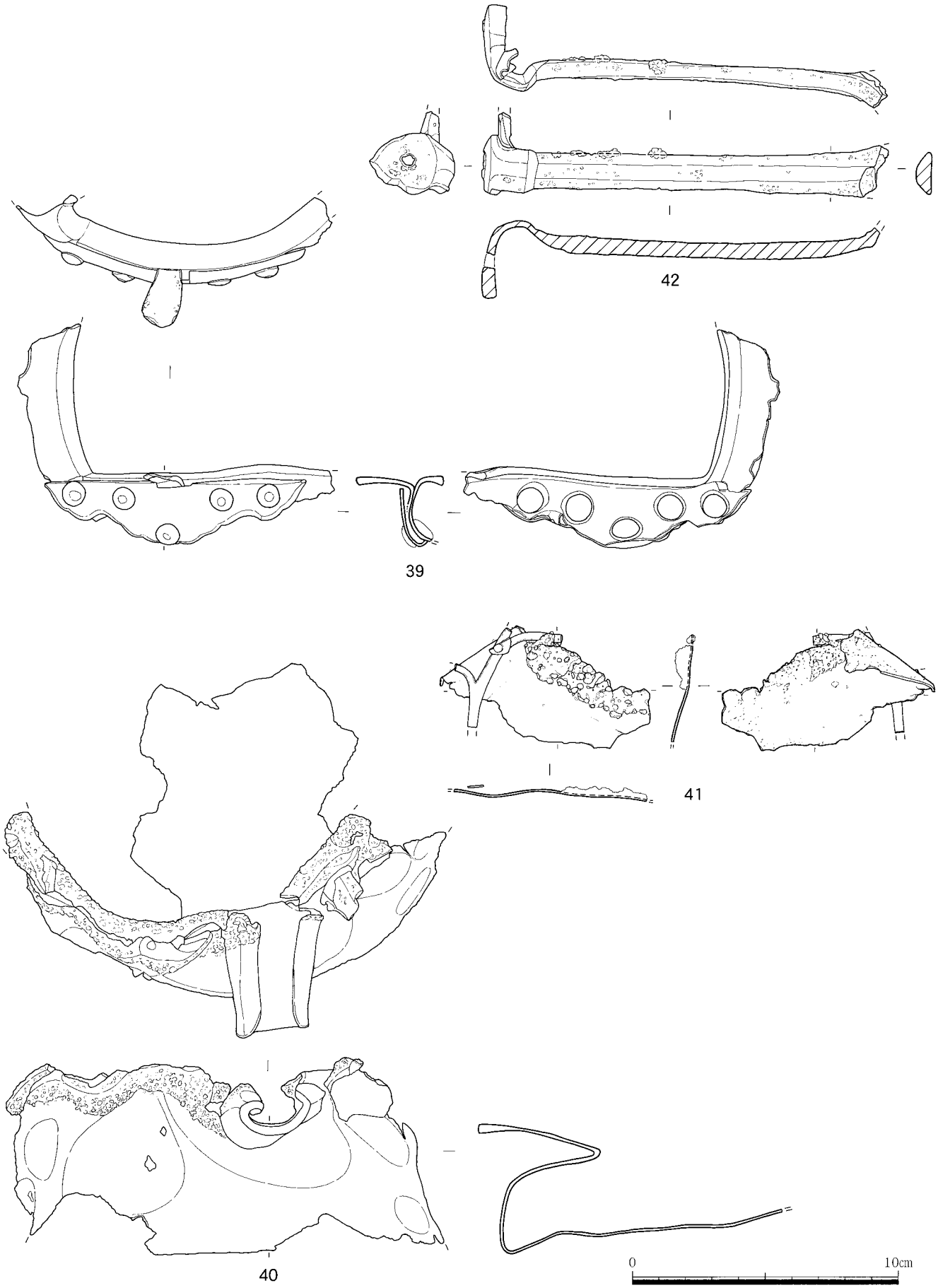


第52図　国指定重要文化財（保存処理未）③
金属製品　祭祀用具（31～33鈴、34・35花瓶）、生活用具（36～38鍋）

第23表④　国指定重要文化財(保存処理未)金属製品観察一覧

単位：㎜/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	分類 名称 仮称	材質	残存 重量	残存長 (縦)	残存幅 (横)	残存厚	観　察　事　項	出土地点 出土層
第53図 図版36 39	祭祀用具 長柄付片口銚子の口縁 (柄杓の容器)	青銅製品	58.8	左側:75.4 右側:30.0	107.1	口唇部外端:2.9 胴部:0.5 柄部の取付金具:2.0	長柄付片口銚子の身部(容器の口縁)および柄部取り付け部分の破片(第26図A参照)。柄を取り付ける金具の上部には長方形状の切り込みがあり、そのサイズは横12.8㎜、縦2.7㎜を測る。切り込み部分には、金具の断面が逆さ「L」字状となる金具が差し込まれている。柄を受ける金具は、逆さの浮文で「雲形」を呈し、容器本体との接合には丸鋲を５カ所で使用して固定している。丸形頭の鋲は、頭の直径が9.0～1.2㎜を使用し、無文の座金具(直径12.0㎜)と一緒に内側から外側に向けて打ち込まれている。外側は穴あきの無文丸形座金具(直径8.6～9.6㎜)を使用して、鋲の身部を座から抜いてから鋲の先端を潰している。銚子の色合いは茶黒色を基調とするが、表面の一部と裏面の大半は緑青がみられる。	SA19 第3層
〃 〃 40	〃 長柄付片口銚子の口縁 (柄杓の容器)	青銅製品	160.4	69.7	164.3	口唇部外端:3.6 胴部:0.7 底部:0.9	長柄付片口銚子の身部(容器の口縁～底部)の破片(第26図A参照)。唯一銚子の注ぎ口が確認された資料であり、注ぎ口の反対側にも取り付けられた注ぎ口の破片も得られているが直接は接合ができないようである。注ぎ口のサイズは長さ46.3㎜、先端部分での外幅26.9㎜、内幅21.1㎜、厚み2.4～3.8㎜を測った。注ぎ口は胴部と一本化していることと、容器の厚みが薄いことなどから判断すると鋳型による成型の可能性は低い。仮に鋳型成型となる高度な技術が存在したものとして考えられる。口唇部の大部分と底面の一部は火災の影響でケロイド状となる。銚子の色合いは茶黒色を基調とする。緑青は表裏面の一部と底部(内外面)でみられる。緑青による影響で素材が脆くなっている。	SA19 第3層
〃 〃 41	〃 長柄付片口銚子の胴部 (柄杓の容器)	青銅製品	18.4	45.0	80.2	装飾品 (小枝:1.0 葉:0.2 胴部: 0.4～1.2	長柄付片口銚子の身部(容器の胴部と装飾品)の破片(第26図A参照)。本資料は保存処理を終えた第27図12と接合できた破片資料であり、当該製品も第27図12に図示してある。銚子の全体的な記述については、これを参照されたい。ここでは第27図12から分離(接合前に図化)したものを掲載し、特徴などを記す。表面の上部は火災による火熱で素材が溶けてケロイド状となっている。裏面の一部は火災によって面が消失している。装飾品の小枝の先端と身部が溶けて固まっている。装飾品の小枝や三つ枝が分かれている。葉は枝が二つ分かれはじめたところに小型の丸鋲を身の内側から差し込んで予め穿たれた枝や葉の孔を抜いてから鋲の先端を潰して固定している。銚子の色合いは茶黒色を基調とし、緑青は表裏面の一部で観察できる。緑青による影響で素材が脆くなっている。	SA19 第3層
〃 〃 42	〃 長柄付片口銚子の補強金具 (柄杓の柄と身を連結した金具)	青銅製品	53.6	渡し部分:13.1～17.0 固定部分:16.1～21.5	151.3	渡し部分:5.7～6.8 固定部分:5.0～7.1	長柄付片口銚子の柄と身部を補強した連結金具の破片(第26図A参照)。型抜きの鋳造品で仏具の如意に近似したデザインである。柄から身の反対側まで延びる渡し金具の部分は型で抜き取った後に裏側から新たに靴べら状に加工された板材を接着して強度を高めている。身に固定する如意頭部分には直径4.1～5.0㎜の粗孔が空いている。粗孔の周辺には身部を固定した際に使用された座金具や鋲を通した痕跡が窺える。参考までに表面で使用された座金具の痕跡は直径12.7㎜である。裏面は粗孔周辺部の一部が破損しているが座金具の推定直径は11.5㎜内外のものを使用したようである。当該製品も火災による火熱の影響で部分的にケロイド状となっている。また、身の一部破片が溶解して癒着している。渡し金具の色合いは茶黒色を基調とするが、緑青が裏面で部分的に観察できる。	SA19 第3層
第54図 図版37 43	武具 兜 頭立の管	青銅製品	5.0	12.5	管頭部:28.2 管身部:20.6	管頭部:0.6 管身部:0.7	兜鉢頂辺(天辺)の座金具を固定する頭立の管(第21図参照)。頭立の管は、頭部が外径28.2㎜、内径18.4㎜。身部は外径20.6㎜、内径19.9㎜を測る。身下部には７カ所で切り込みが設けられていたようであり、存在する４カ所での切り込みの間隔は幅7.4～8.4㎜であった。この頭立の管に設けられた切り込みは各種の座金具を通した後で兜鉢内部で外側に押し広げて固定したようである。頭立の管の頭部は各種の座金具が抜け落ちないように外側に折り曲がっている。頭部外端から身下部の切り込み上端までの長さは5.8㎜を測った。表裏面とも全体的に緑青で覆われていて部分的に灰色や白色を帯びる部分がみられる。その他に錆脹れや剥離も一部でみられる。	SK01-C 淡褐色土層 (上層)



第53図　国指定重要文化財（保存処理未）④
金属製品　祭祀用具（39～42長柄付片口銚子）

第23表⑤　国指定重要文化財(保存処理未)金属製品観察一覧

単位：㎜/g

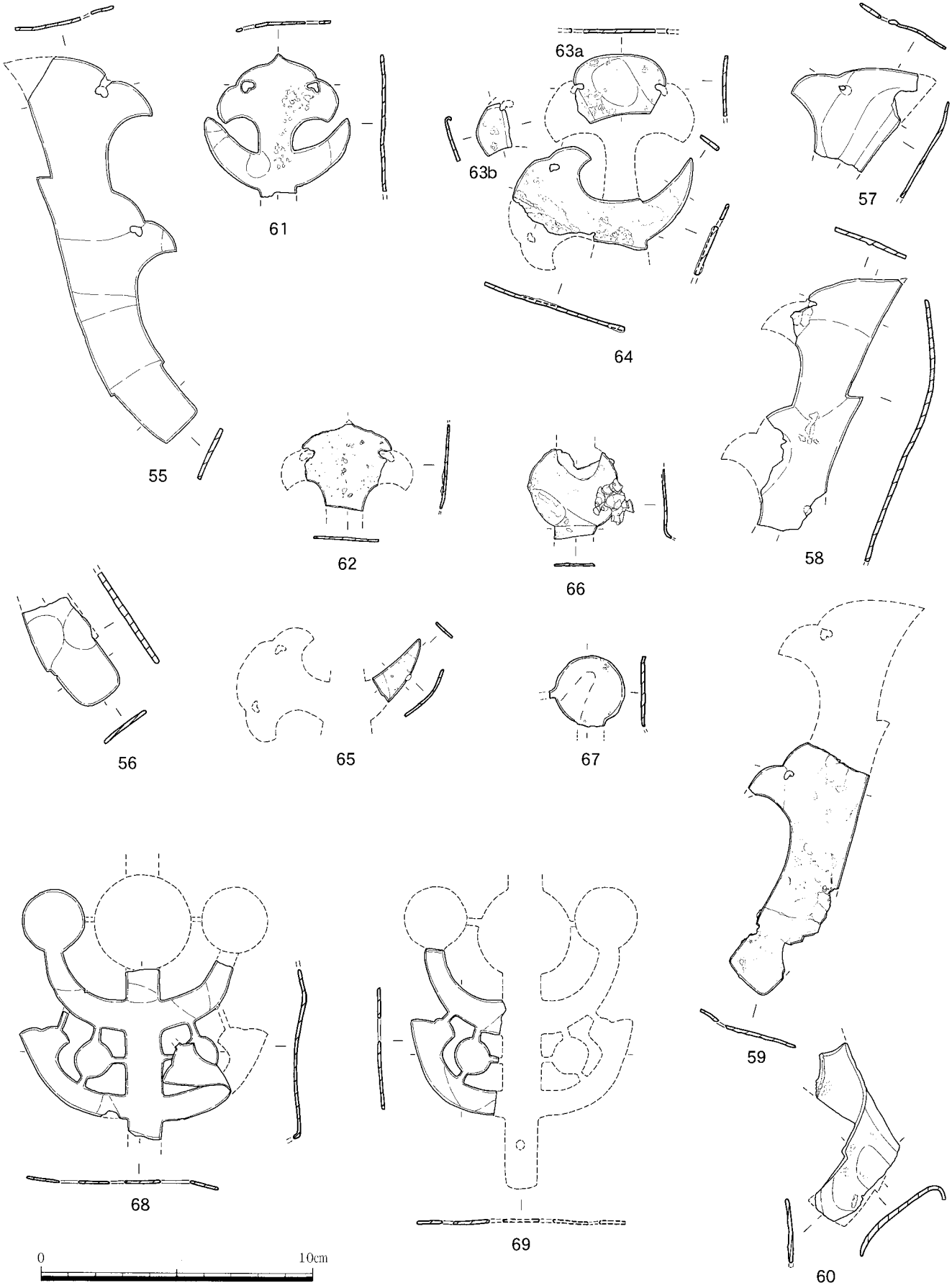
挿図番号 図版番号 遺物番号	分類 名称 仮称	材質	残存 重量	残存長 (縦)	残存幅 (横)	残存厚	観　察　事　項	出土地点 出土層
第54図 図版37 44	武具 鉢	鉄と青銅を組み合わせる	37.7	64.3	81.8	外部 青銅板: 1.0 内部 鉄製板: 0.1～0.7	一枚張筋伏せの兜。矧重ねによる構成ではなく、一枚の鉄板を半球状に打出して星鋲で留めた兜鉢(平安～鎌倉時代)とみられるタイプ。この形式の兜は高度な鍛鉄技術の発達の基で製作されたようである。本資料は半球状となった鉄鉢と青銅の鉢を星形鋲で打ち付けて一本化させた特殊な兜鉢とみられる。兜鉢の破片には筋が四条観察される。兜鉢の下部には、兜鉢と鞠(しころ)の最上段と重なる腰巻板(鉢付板)を取り付けた際の鎖が4カ所で確認される。身部を二股とする星形の鋲は、座をとおして表面から差し込んで、二股の身部の先端を内側で開いて固定している。座は錆で覆われ判然としないが錆の具合や座表面の形状などから判断すると菊座とみられる。星形の鋲は５カ所が残存し、残りの１カ所は鋲の頭部と一緒に座金具が剥がれ落ちている。鋲頭の直径は6.5～7.3㎜を測る。座の直径は9.5～11.5㎜であった。表面(青銅)は、裏面の鉄製鉢からの錆の影響を受けて鉄錆と緑青がみられ、青銅の一部は地金が白色化して腐蝕する。その他に罅割れも発生している。裏面も表面同様に罅割れがみられ、それ以外に鉄汁の凝固によって砂粒が付着する。また、表面の青銅や青銅製星形鋲の影響を受けて緑青がみられる。	SA19･20 畦3層
〃 〃 45	〃 鉢	鉄と青銅を組み合わせる	24.3	56.2	54.8	外部 青銅板: 1.0～1.3 内部 鉄製板: 0.15～ 0.6	星入り筋兜の矧板。鉄製の矧板が二枚重なった破片。潰れた星形の鋲とみられるものが中央より下で１本確認される。星形鋲の頭とみられる部分の直径は9.8㎜を測る。筋は矧板の左端に二条確認され矧板の縁を横断面が「L」字状となるように折り曲げて強度を上げている。表面は錆で覆われていて錆汁の凝固や錆瘤が二カ所(内、一カ所は星形鋲に被さる)で観察される。錆汁凝固の際に中国産青磁の小破片を取り込んでいる。表裏面には一部緑青が付着している。裏面も表面と同様に錆で覆われ、錆汁が凝固して砂粒などが付着している。	SA20 第2層
〃 〃 46	〃 鉢	鉄製品	12.0	36.6	45	1.0～1.4	星入り筋兜の矧板。鉄製の矧板が二枚重なった破片。右端に星形の鋲、若しくは錆瘤とみられるものが存在するが全体が錆で覆われていて判断できない。筋は矧板の右端で二条確認され、矧板の縁を横断面が「L」字状に折り曲げて強度を上げている。表裏面とも全体的に錆で覆われ膨張している。両面とも錆汁の凝固や錆瘤が観察される。特に表面は錆汁凝固の際に砂粒や青銅の細片を取り込んでいる。裏面では錆瘤が破裂した箇所が２カ所で確認される。	SA20 第3層
〃 〃 47	〃 鉢	鉄製品	7.6	42.3	29.4	0.9～1.4	〃　。鉄製矧板の破片。筋は矧板の右端に一条確認され鉄板の縁を横断面が「L」字状となるように折り曲げて強度を上げている。表裏面とも錆で覆われ錆脹れや錆汁の凝固が確認される。上部にある小孔(2.1～2.8㎜)は錆瘤の破裂などによって空いたようである。	SA20 第3層
〃 〃 48	〃 鉢	鉄と青銅を組み合わせる	13.3	3.6	4.08	外部 青銅板: 0.5～1.3 内部 鉄製板: 1.0～1.4	〃　。〃　。筋は矧板の右端に二条確認され矧板の縁を横断面が「L」字状となるように折り曲げて強度を上げている。下部には鉄製の鉢を表面から覆っていた青銅製の鉢の一部が観察される。青銅製の鉢から緑青が発生している。表面は部分的に錆脹れや錆汁の凝固などの他に緑青が付着している。裏面は全体的に錆で覆われ大きな錆瘤(18.2㎜×54.2㎜)とみられるものが発生している。一部に緑青が付着している。	SA20 第2層
〃 〃 49	〃 鉢	鉄製品	11.9	59.4	30.5	1.2～1.3	〃　。〃　。〃　。全体的に錆で覆われ、錆瘤や罅割れが発生し非常に脆弱である。裏面の一部で緑青が発生している。鉄製矧板の先端部分、若しくは先端に近い破片とみられる。	SA20 第3層
〃 〃 50	〃 斎垣	青銅製品	3.3	17.4	23.3	0.8～1.2	兜鉢の外側縁沿いに取り付けられた斎垣(第21図参照)の破片。第28図14に掲載資料と接合できたものであり、全体的な記述はこれを参照されたい。ここでは接合破片の資料のみ記載する。本資料は兜鉢の筋が入る部分を凸状に盛り上げて加工し、筋の右脇に尖り気味の星形鋲を打ち付けている。斎垣上部は筋と筋の間を魚の尾鰭状に加工し、その直下に逆さハート形の透かしが両脇に半分ずつ残っている。星形鋲のサイズは直径3.9㎜、頭の長さ4.9㎜、身部直径2.2㎜、残存長9.0㎜を測る。	SA19･20 畦2層
〃 〃 51	〃 眉庇	鉄製品	8.5	32.5	57.2	1.1～1.7	兜鉢の正面に取り付けられた眉庇とみられる。左側縁辺部が「く」の字状となる部分が眉庇の角に該当するようである。表裏面とも錆で覆われ、錆によって破損面が岩石の節理のように錆の層が薄く重なって器面が剥離しやすい状況にある。表裏面の錆瘤や剥離している部分は地金が脆くなっている。	SA19･20 畦4層
〃 〃 52	〃 立物 (鍬形)	青銅製品	6.6	43.4	45.3	0.7	立物の鍬形上部(先端部)の破片。鍬形の抉れ部分に近いカ所を鏨で逆さハート形に打ち抜いて文様を表現する。両面に緑青が部分的にみられ、裏面では緑青によって白く変色している。	SA19･20 畦2層
〃 〃 53	〃 立物 (鍬形)	青銅製品	7.7	57.2	41.0	0.6	〃　。鍬形の抉れ部分に近い部分が欠損し、逆さハート形の透かし文様が半分程度残っている。緑青が表面では下部で部分的にみられが、裏面では半分近く広がっている。	SA19･20 畦2層
〃 〃 54	〃 立物 (鍬形)	青銅製品	4.9	36.3	34.6	0.6～0.9	立物の鍬形を二重に重ねた鍬形で、破片は下位の鍬形である。鍬形の抉れ部分に近いカ所を鏨で逆さハート形に打ち抜いて文様を表現するが、歪なハート形の孔となっている。両面とも緑青で覆われて、錆汁が凝固する際に鉄製鋲の身部(長さ9.5㎜、直径2.1㎜)とみられる破片や砂粒などを取り込んでいる。	SA20 第3層

第54図　国指定重要文化財（保存処理未）⑤
金属製品　武具：兜金具（43頭立の管、44～49鉢、50斎垣、51眉庇、52～54立物）

第23表⑥　国指定重要文化財(保存処理未)金属製品観察一覧

単位：㎜/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	分類 名称 仮称	材質	残存 重量	残存長 (縦)	残存幅 (横)	残存 厚	観　察　事　項	出土地点 出土層
第55図 図版38 55	武具 兜鉢の 立物 (鍬形)	青銅 製品	21.5	復元長: 14.8	中段鍬形: 57.9 鍬形基部: 17.5～ 20.4	0.7～ 0.9	立物の鍬形破片。本資料は鍬形の中央付近で「U」の字状に折れ曲がって破損したものを図上で復元したものである。鍬形上部の左側の先端が欠落する程度で鍬形の形状を窺い知ることのできる良好な資料である。鍬形は二重に鍬形を重ねた形で成形されている。上部と下部の鍬形の抉れ部分に近い箇所に鑿で逆さハート形の打ち抜いて透彫りの文様とする。鍬形の色調は緑青が変色し暗褐色を帯びている。緑青は表裏面とも観察できるが、特に裏面で緑青が広がり部分的に灰白色を呈している。鍬形が三鍬形台に差し込まれる鍬形の下部付近では幅が23.2㎜幅を測り、差し込み部分(根本)で20.4㎜と幅が狭くなっている。差し込み部分の幅は先端で17.5㎜、根元20.4㎜。長さが22.7～25.4㎜を測る。	SA19･20 畦3層
〃 〃 56	〃 兜鉢の 立物 (鍬形)	青銅 製品	4.8	43.3	22.3	0.8～ 1.1	〃　。鍬形下部の破片。両面は緑青によって覆われている。鍬形が三鍬形台に差し込まれる鍬形の下部付近では幅が22.3㎜を測り、差し込み部分(根本)で19.7㎜と幅が狭くなっている。差し込み部分の幅は先端で17.9㎜、根元で19.7㎜。長さが19.2～19.9㎜を測る。	SA19･20 畦2層
〃 〃 57	〃 兜鉢の 立物 (鍬形)	青銅 製品	7.5	41.3	40.7	0.7～ 1.0	〃　。鍬形上部(先端)の破片で右端が欠落する。上部の鍬形の抉れ部分に近い箇所に鑿で打ち抜いて透彫りの文様とするが、形が歪で滴状の文様となっている。両面とも緑青で覆われ錆脹れている。また、両面とも錆汁の影響で全体的にケロイド状となる。	SA19･20 畦3層
〃 〃 58	〃 兜鉢の 立物 (鍬形)	青銅 製品	13.4	103.9	44.1	0.6～ 1.1	〃　。鍬形の下部が欠落したもので、鍬形を二重に鍬形を重ねた形で成形されている。上部に鍬形の抉れ部分に近い箇所に鑿で逆さハート形に打ち抜いて透彫りの文様とするが、ハート形の透かしは半分程度が残っている。鍬形は全体的に緑青で覆われ、部分的に白色に変色する箇所もみられる。特に裏面では錆が濃青色に変色した部分も観察される。	SA19･20 畦3層
〃 〃 59	〃 兜鉢の 立物 (鍬形)	青銅 製品	15.2	94.5	44.6	0.5～ 0.9	〃　。鍬形上部の大半と差し込み部分の一部を欠いた資料である。鍬形の抉れ部分に近い箇所に鑿で逆さハート形に打ち抜いて透彫りの文様とする。鍬形は全体的に緑青で覆われていて罅割れも観察できる。特に裏面は錆汁が凝固する際に砂粒や炭片などが付着し、部分的に白色に変色する箇所もみられる。全体的に緑青の影響を受けて脆弱である。鍬形が三鍬形台に差し込まれる鍬形の下部付近から差し込み部分(根本)の右側縁辺が欠落している。残存する差し込み部分の幅は先端で18.7㎜。左側縁辺部の長さは20.5㎜を測る。	SA19･20 畦1層 畦2層
〃 〃 60	〃 兜鉢の 立物 (鍬形)	青銅 製品	7.6	67.9	37	0.5～ 1.2	〃　。鍬形上部の半分以上と差し込み部分の一部を欠いた資料である。鍬形は全体的に緑青で覆われていて錆の影響を受けて表裏面がケロイド状となる。錆の影響を受けて脆弱である。鍬形が三鍬形台に差し込まれる鍬形の下部付近から差し込み部分(根本)の右側縁辺部が欠落している。残存する差し込み部分の左側縁辺部の長さ21.8㎜を測る。	SA19･20 畦3層
〃 〃 61	〃 兜鉢の 立物	青銅 製品	10.0	51.5	52.6	0.8～ 0.9	三鍬形台中央の祓立台に取り付けられた立物の先端破片。文様は先端に如意頭雲、その直下に三日月が配置されている。前記、如意頭雲の左右に抉れた部分に近い箇所に逆さハート形を鑿で打ち抜いて透彫りとする。表裏面とも緑青の錆汁が凝固する際に鉄分を多量に取り込んだ為、全体的に黄茶色を帯びる。一部は茶褐色を呈する。緑青の部分は僅かに観察される程度である。その他に両面には炭の細片や砂粒などの付着がみられる。本資料と近似するサイズのものが西のアザナ周辺(15世紀～16世紀に青銅製品の加工生産や鋳銭生産跡)で出土している。西のアザナ資料は鍍金されていることから判断すると当該製品も鍍金の可能性が高い。	SA20 第3層
〃 〃 62	〃 兜鉢の 立物	青銅 製品	3.3	31.5	32.5	0.6～ 0.7	〃　。先端の如意頭雲は左右に抉れた部分から破損し、抉れた部分には逆さハート形となるように鑿で打ち抜いて透彫りとするが、両側のハート形の透かしは半分程度欠けている。表裏面とも緑青の影響を受けての罅割れや錆汁凝固の際に表面がケロイド状となり、同時に炭の細片も取り込んで付着している。	SA19･20 畦3層
〃 〃 63	〃 兜鉢の 立物	青銅 製品	63a: 3.4 63b: 0.7	63a: 22.8 63b: 16.8	63a:33.9 63b:12.4	63a: 0.8 63b: 1.0	図63aと図63bは、同一の破片ではないが、破片の部位を理解を助ける目的で整理した。二点もと三鍬形台中央の祓立台に取り付けられた立物の先端破片及び関連破片である。図63aは、如意頭雲の先端は尖りがなく。扁平な半円形状に成形する。如意頭雲の左右に抉れた部分から破損し、抉れた部分に近い箇所に逆さハート形となるように鑿で打ち抜いて透彫りとするが、両側のハート形の透かしは半分程度欠けている。表面は緑青が全体的に広がっている。部分的に濃青色を呈する。裏面も緑青の影響を受けて錆汁凝固の際に砂粒などを取り込んでいる。図63bは、如意頭雲文が左右に広がる雲文の何れかの破片である。上部の雲文は抉れた部分と逆さハート形の透彫りが施された部分から縦位に破損している。緑錆は両面で観察され、表面はケロイド状となっている。裏面は緑青によって白く変色している。	SA19･20 第2層 不明
〃 〃 64	〃 兜鉢の 立物	青銅 製品	9.6	35.7	66.9	0.7～ 0.9	三鍬形台中央の祓立台に取り付けられた立物上部破片。文様は左側に如意頭雲、右側に三日月を配置し、雲に隠れた三日月を表現か。如意頭雲は上記した図63aと同じタイプで先端の尖りがない。如意頭雲の抉れた部分に近い箇所に逆さハート形を鑿で打ち抜いて透彫りとするが、如意雲の下位は欠落する。表裏面とも緑青で全体的に覆われている。火災による火熱の影響を受けて溶解し、再凝固した部分がみられる。緑青の影響で地金がアバタ状に浸食する箇所もみられる。	SA19･20 畦3層
〃 〃 65	〃 兜鉢の 立物	青銅 製品	0.9	10.2	22.3	0.5～ 0.8	三鍬形台中央の祓立台に取り付けられた立物上部の一部破片。立物上部にあった三日月の先端破片。表裏面とも緑青で全体的に覆われている。表面は緑青の錆汁が凝固した際に砂粒や炭の細片を取り込んでいる。裏面は緑青の小さな錆瘤がみられる。	SA19･20 畦2層



第55図　国指定重要文化財（保存処理未）⑥
金属製品　武具：兜金具（55～69立物）

第23表⑦　国指定重要文化財(保存処理未)金属製品観察一覧

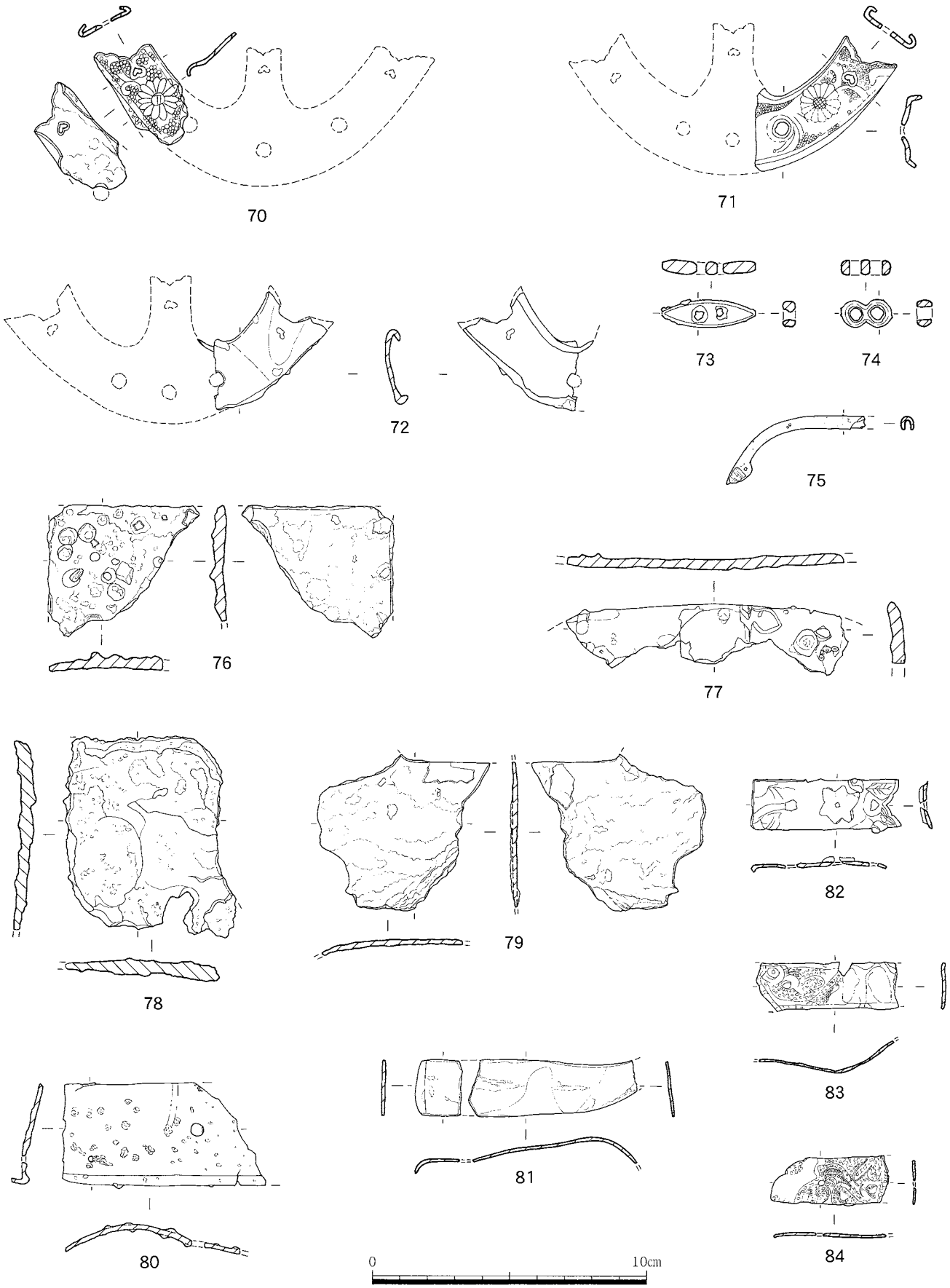
単位：㎜/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	分類 名称 仮称	材質	残存 重量	残存長 (縦)	残存幅 (横)	残存 厚	観　察　事　項	出土地点 出土層
第55図 図版38 66	武具 兜鉢の 立物	青銅製品	6.6	32.9	34.8	0.8～ 0.9	三鍬形台中央の祓立台に取り付けられた立物中央部(中心)にあたる破片。円形文は日輪(太陽)を表現したものと判断される。円形文の上下・左右に延びる枝板が折れている。表裏面とも緑青で全体的に覆われている。表面の右下には鉄錆の汁が付着して凝固したようである。両面とも緑青の進行が著しく、非常に脆い。裏面では緑青の錆瘤が固まりとなって白色化している部分もみられる。裏面は錆汁凝固の際に折れた小さな円盤(小さな円形文)が取り込まれている。この小さな円形文(直径17.0㎜、厚さ0.7㎜)は、星を表現したものと判断される。その他に炭の細片が付着している。	SA19・20 畦2層
〃 〃 67	〃 兜鉢の 立物	青銅製品	2.2	23.7	24.3	0.6～ 0.9	三鍬形台中央の祓立台に取り付けられた立物中央部から左右に配置された小さな円形文の一部。小さな円形文は星を表現したものとみられる。小さな円形文は左側と下側が折れている。表裏面とも緑青で全体的に覆われている。鉄錆が凝固してケロイド状となっている。錆汁が凝固した際に周辺にあった砂粒を取り込んでいるようである。	SA19・20 畦3層
〃 〃 68	〃 兜鉢の 立物	青銅製品	19.6	92.0	76.0	0.5～ 0.8	三鍬形台中央の祓立台に取り付けられた立物の下部破片。中心の枝(幅12.6㎜)から左上に円形文(直径22.5～22.8㎜)が配置される。下段には中心の枝から左右対称の鍬形が延びていて、鍬形の途中から上方に小さな円形文(左側：直径13.7㎜、右側：直径13.8㎜)が左右に配置されているが、右側は鍬形が内側に折れて隠れている。左上の円形文と下段の小さな円形文は星を表現したものとみられる。表面は緑青で部分的に観察される。裏面は緑青が汚れて暗褐色を帯びる。緑青が白く変色する部分や錆が凝固してケロイド状となる部分もみられる。	SA19・20 畦2層
〃 〃 69	〃 兜鉢の 立物	青銅製品	6.2	56.9	33	0.8～ 0.9	三鍬形台中央の祓立台に取り付けられた立物の下部破片。下段の中心の枝が折れて、左側が半分程度残っている。下段の鍬形の途中から上に小さな円形の星文(直径12.9㎜)が配置されている。表裏面とも大部分が緑青で覆われ、緑青の凝固によってケロイド状となる部分や小さな錆瘤の他に錆脹れがみられる。	SA20 第3層
第56図 図版39 70	〃 兜鉢の 鍬形台	青銅製品	6.3	22.6	41.3	0.8～ 1.0	三鍬形台の左側破片。左端の鍬形先端部は魚の尾鰭状に二股に抉られ、抉れ部近くにハート形の文様を鑿で打ち抜いて透かし文とするが、透彫りも雑でハート形の文様が「く」の字状となる。菊花文の右側には外側から孔(推算直径5.4㎜)を穿っているが、孔の大部分は破損している。左端は縦位の断面が「U」の字状を呈し、この部分に立物の根元を差し込んでから両側の屈曲部分を締め付けて固定していたようである。文様を区画する線は鏨による蹴彫りで点線同士を繋ぐような方法で線を表現するが、線のずれや隙間がみられ雑な仕上げである。菊花文の弁先は多様で、丸くなるもの、剣先状に尖るもの、波状となるもの、など三種類が混在し、雑な表現となっている。花芯には格子目状に鑿で文様を入れるが、線もずれて、横線と縦線が完全にずれて、格子目文となっていない。菊花と葉の間に円環状の鑿を密に打ち詰めた魚々子を施すが、魚々子が不完全な半円となるものが多く、中には魚々子が菊花や葉の部分まで打ち込んでいる。緑青は表裏面に部分的に観察され、一部は緑青の上に鉄分が付着する。裏面には破損時に発生した小さな罅割れがみられる。	SA20 第2層
〃 〃 71	〃 兜鉢の 鍬形台	青銅製品	12.2	29.9	62.8	0.8～ 1.1	三鍬形台の右側破片。右端の鍬形先端部は魚の尾鰭状に二股に抉られ、抉れ部近くにハート形の文様を鑿で丁寧に打ち抜いた透かし文を施す。菊花文の左斜め下には内側から孔(直径4.8～5.0㎜)を穿っている。鍬形先端から16.6～22.6㎜の範囲は縦位の断面が、「U」の字状に折り曲げられていいる。この部分に立物の根元を差し込んでから両側の屈曲部分を締め付けて固定したようである。他の縁沿いは「L」字状に折り曲げられているが、中央の破損部分は外側に開いている。文様を区画する線は鏨による蹴彫りで丁寧に細かく打ち込んで点線同士を繋いで線として表現されている。菊花文の弁先を半円形の鑿で比較的、丁寧に打ち込んで弁先を丸く仕上げる。花芯には菱形様の格子目文様を入れる。菊花と葉の間に円環状の鑿を密に打ち詰めた魚々子も丁寧に施された区画線や文様の輪郭に沿うように並列に打ち付けた部分もみられる。表面よりも裏面が緑青で覆われ、地金が観察できない。裏面には緑青が凝固する際に砂粒や小さな鉄鋲の身部(直径1.8㎜)を取り込んでいる。	SA20 第3層
〃 〃 72	〃 兜鉢の 鍬形台	青銅製品	8.7	22.5	49.3	0.7～ 0.9	〃　。右端の鍬形先端部は魚の尾鰭状に二股に抉られ、抉れ部分は火災による火熱の影響を受けて溶けて爛れている。抉れ部近くのハート形の文様は鑿で雑に打ち抜いた透かし文を施す。透かし文以外は、他の文様は認められない無文の三鍬形台とみられる。左側破損部分の中央近くには内側から穿孔された半欠の孔(推算直径4.5㎜前後)がある。鍬形先端から15.9～30.1㎜の範囲は縦位の断面が、「U」の字状に折り曲げられている。この部分に立物の根元を差し込んでから両側の屈曲部分を締め付けて固定していたようである。他の縁沿いは破損時の潰れなどによって内側に強く折れて断面が「V」字状に折れた部分もみられる。表裏面とも緑青で覆われている。特に表面は火災による火熱の影響を受けて火膨れやケロイド状となる。	SA19・20 畦2層
〃 〃 73	〃 笠鞐	青銅製品	4.7	9.7	33.3	3.5～ 4.3	笠鞐。表裏面とも緑青で全体的に覆われ、錆の表面がケロイド状となる。錆汁が凝固した際に石材の細片などを取り込んでいる。錆瘤などもみられる。紐通しの孔は二孔開いているが、孔(左側：3.8～4.6㎜、右側：4.2～4.4㎜)の大きさは一定しない。孔のサイズが一定しないのは、笠鞐に通された二本の紐に掛かった異なった加重の偏りによる紐ズレなどが原因で孔の大きさや形が変形したのかも知れない。	SA19・20 畦3層
〃 〃 74	〃 責鞐	青銅製品	3.2	右：9.1 左：9.4	17.4	5.3	責鞐。上記、73とセット関係にある金具。二本一組で使用される紐を束ねて紐の輪を作って笠鞐に引っ掛けて、紐の輪を締めつけて間接的に固定するなどの機能が主である。その他、紐の捩れ防止を兼ねたものとみられる。現代風に言い換えればボタンやフックの穴を締める際の金具やループタイの締め金具に近似するものである。紐通しの孔は二孔が開いている。孔の大きさは右側が直径5.1㎜、左側で4.6㎜を測った。全体的に緑青で覆われ、器面が錆でケロイド状となってる。裏面は緑青の影響で地金の浸食が進行し、白く変色している部分がみられる。	SA19・20 畦3層

第23表⑧　国指定重要文化財(保存処理未)金属製品観察一覧

単位：㎜/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	分類 名称 仮称	材質	残存 重量	残存長 (縦)	残存幅 (横)	残存 厚	観　察　事　項	出土地点 出土層
第56図 図版39 75	武具 覆輪	青銅製品	4.5	身:4.1 先端: 6.7	50.5	0.9～ 1.1	覆輪の縁部分の破片。製作方法は左側先端付近に鋲孔の穿孔と如意頭文を型取ってから内側へ「U」の字状に折り曲げている。先端の半分に折れた如意頭文に穿たれた孔の直径は外側が1.3㎜、内側で1.9㎜を測った。覆輪の横断面は「U」の字状となり、溝の内幅は、2.3～2.4㎜を測った。この溝に鉄製板の縁が入る。全体的に緑青で覆われ、先端部分に炭片が付着している。また、緑青は部分的に白く変色している。	SA20 第3層
〃 〃 76	〃 鎧の胴部	鉄製品	20.1	47.6	54.9	1.8～ 2.3	鎧の胴部(胸板、脇板など)、冠板、大袖板などに使用されたとみられる板材の破片。左隅は角の部分とみられる。両面とも錆で覆われ、表面は錆瘤が多く発生し、錆瘤の破裂している部分もみられる。裏面は表面と異なり、錆汁がケロイド状に凝固している。全体的に錆の影響を受けて脹れている。	SA19 一括遺物 2層
〃 〃 77	〃 鎧の胴部	鉄製品	17.3	22.1	102.9	2.9	〃　。残存部の両側がやや丸味を持った形状となっていることから部位を推定するとすれば、障子板が考えられる。両面とも錆で覆われ、錆で脹れている。表面は部分的な錆瘤の発生や錆瘤が破裂した痕跡が窺える。裏面は部分的に錆汁がケロイド状に凝固している。錆汁が凝固する際に陶磁器の細片も取り込んでいる。	SA19･20 畦2層
〃 〃 78	〃 鎧の胴部	鉄製品	42.8	60.8	71.8	2.2～ 3.0	〃　。残存部の角が丸味を持った部分と緩やかに反り返っている部分から推定するとすれば、胸板が考えられる。縁辺部には青銅製の覆輪が取り付けられていたようであるが、緑青による地金の損失や鉄板の膨張など覆輪の形状が損なわれている。両面とも錆で覆われ、錆で脹れている。表面は部分的に錆瘤が破裂した痕跡が窺える。両面とも錆汁がケロイド状に凝固しているが、特に裏面は著しい。	SA19 第2層
〃 〃 79	〃 籠手？	鉄製品	15.8	5.6	5.5	0.25 0.1	断面の形状などから籠手の摘手甲などの板材の破片が考えられるが判然としない。両面とも錆で器面が損なわれ、地金のみが残存し、その表面も錆が発生し表面がケロイド状となり、部分的な剥離もみられる。また、断面からの観察では錆が節理状となっているところもみられる。この節理状となる部分の表面に剥離が集中している。	SA20 第2層
〃 〃 80	生産用具 縁金具	青銅製品	20.7	36.5	74.2	1.0～ 1.3	鎧の胴部(胸板、化粧板)などの使用が考えられるが、素材が青銅である事や幅が36.5㎜を測る事などから大型の櫃などの調度品に使用された縁金具の可能性が高い。左下の隅寄りと中央寄り右側に孔が穿たれている。左隅寄りの孔は直径2.4㎜、右側の孔が直径4.6㎜を測る。下部の縁沿いは玉縁状に肥厚させてから内側に「L」字状に折り曲げて突出させている。突出部分での幅は屈曲部分から縁辺部まで6.0㎜を測る。両面とも緑青で覆われ、錆汁がケロイド状に凝固し、錆瘤(0.5～11.4㎜)が全体的に観察される。錆瘤が破裂している部分もみられ、その内部は白色を呈していることから地金が損なわれているようである。その他、錆汁がケロイド状に凝固する際に炭の細片も取り込んでいる。	SA19･20 畦3層
〃 〃 81	〃 調度品の 金具？	青銅製品	12.6	左側: 19.7 右側: 20.3	左側: 17.3 右側: 61.2	左側: 1.0 右側: 0.9～ 1.0	調度品などに利用されたとみられる無文の金具。左右とも同一個体であるが、直接は接合ができなかった。左側の金具は部分的に鍍金が確認される。この金具の横断面は「L」字状に折り曲げられ、部分的に外側に開いている。右側の金具は鋲や釘を打ち込んだ孔は確認されていない。両資料とも全体的に緑青がみられるが、特に左側が緑青で覆われている。右側は部分的に緑青の影響で白く変色している。	SA19･20 畦床面 清掃
〃 〃 82	武具 八双金物	青銅製品	7.8	17.7～ 18.3	54.6	0.6～ 0.8	六枚花弁の座を鋲で八双金具に取り付けたものである。右側を魚尾状に抉り、根本近くにハート形に鑿で透して文様とする。左端を「L」字状に折り曲げているが屈曲部の先端を欠いている。左側に方形状(3.6～3.9㎜)の孔を穿っている。六枚花弁の座の裏側の孔は歪で辺(長さ2.1㎜)のある円形(直径3.9㎜)である。六枚花弁の座金具の下に菊花文の弁先とみられるものが確認される。この菊花文の花芯とずれた位置に六枚花弁の座を取り付けている。葉文は丁寧に葉脈を鏨で彫っている。その他の文様は、表面に発生した緑青による侵食や錆瘤などで把握できない。裏面は部分的に緑青で覆われ、緑青の一部が白色化しているところがある。	SA19･20 畦3層
〃 〃 83	〃 八双金 物？	青銅製品	4.6	16.0～ 16.4	52.8	0.5～ 0.9	八双金物か調度品の飾金具とみられる。金具が上下に二枚組み合わせてひとつの文様となるように左側は魚の尾鰭を半分のみ抉り取っていることから組み合せの金具で上位にある金具。金具の上縁は折り曲げていたようであるが、折れ部の大半は残っていない。残存する範囲内には孔が確認できない。文様は鏨で蹴彫りし区画線や蕨手様の唐草文を彫っている。円環状の鏨で魚々子を丁寧に文様や区画沈線に沿うように打ち付けている。文様の施文状況などから図84と同一個体、若しくは図84と組み合わる金具とみられる。表面は部分的に火災による火熱の影響で文様が溶けたのか、或いは緑青による地金表面の損傷で文様が消えたのかは判然としない。表面の左側に緑青が部分的にみられる。裏面は地金を成形･加工の段階で地金を延ばす際に生じたとみられる工具による調整痕(粗い条痕様の痕跡)が部分的に斜位方向に観察できる。裏面の大半に緑青がみられる。部分的に緑青が白く変色し地金を浸食している。	SA19･20 畦3層
〃 〃 84	〃 八双金 物？	青銅製品	3.4	16.3～ 17.0	42.4	0.6～ 0.8	八双金物か調度品の飾金具とみられる。金具が上下に二枚組み合わせてひとつの文様となるように左側は魚の尾鰭を半分のみ抉り取っていることから組み合せの金具で下位にある金具。金具の下の縁は折り曲げていたようであるが、折れ部の大半は欠落する。左側に直径2.2㎜の孔が穿たれている。文様は鏨で蹴彫りし区画線や蕨手様の唐草文を彫っている。円環状の鏨で魚々子を丁寧に文様や区画沈線に沿うように打ち付けている。表面は部分的に火災による火熱の影響で文様が溶けたのか、或いは緑青による地金表面の損傷で文様が消えたのかは判然としない。この部分のみ暗褐色に変色する。表面の緑青は部分的にみられるが、一部は濃青色となっている。裏面は地金を成形･加工時に地金を延ばす際に生じたとみられる工具による調整痕が(粗い条痕様の痕跡と細かい擦痕様の痕跡)斜位方向に観察できる。裏面にも半分程度、緑青の発生がみられる。	SA19･20 畦3層

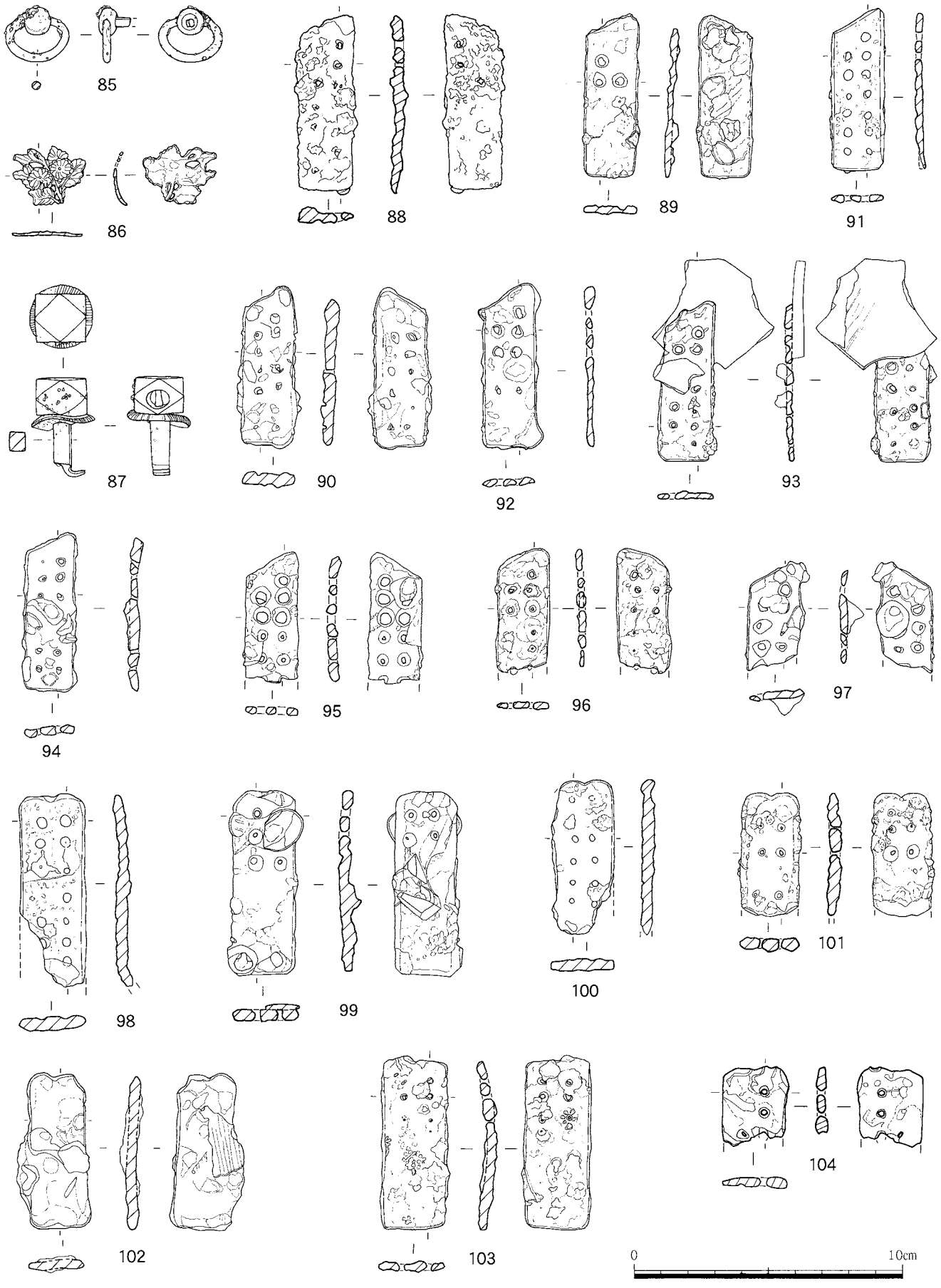


第56図　国指定重要文化財（保存処理未）⑦
金属製品　武具（70～72立物鍬形台、73笠鞲、74責鞲、75覆輪、76～78鎧の胴部金具、79籠手？、82～84八双金物）、生産用具（80縁金具、81調度品の金具？）

第23表⑨　国指定重要文化財(保存処理未)金属製品観察一覧

単位：㎜/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	分類 名称 仮称	材質	残存 重量	残存長 (縦)	残存幅 (横)	残存 厚	観　察　事　項	出土地点 出土層
第57図 図版39 85	武具 兜鉢or鎧 の総角付 の鐶座	青 銅 製 品	5.4	鋲頭: 10.2 鐶座: 15.0	鋲頭: 10.4 鐶座: 23.5	鋲頭: 6.3 鐶座: 2.8	兜鉢後面の総角付きの鐶(笠印付きの鐶)、若しくは鎧後面に取り付けられる総角付の鐶(水呑の鐶)。鐶の大きさなどから兜鉢後面の総角付きの鐶の可能性が高い。鋲頭は無文で、形状が饅頭に近似する。鋲の身は途中から欠落し、頭に近い部分が残っている。鋲の身は断面が四角形(3.2㎜四方)で身が二股(身の各断面サイズ:幅3.2㎜×厚み1.6㎜。幅3.2㎜×厚み2.0㎜)に割れている。鐶が潰れて楕円形となる。鋲頭の両側には鐶を通す孔がある。左側の孔は緑青が被さり隠れているが右側の孔は縦長の楕円形状の孔(縦:4.9㎜、横:3.1㎜)である。鐶の断面は円形で厚みが2.7～2.9㎜を測る。全体的に緑青で覆われ錆汁が凝固した際に砂粒などを取り込んでいる。部分的に緑青が白く変色している。	SA19･20 畦4層
〃 〃 86	武器 刀剣の 目貫	青 銅 製 品	3.1	22.5	26.8	1.2～ 1.3	刀剣の柄に装飾された目貫。文様は菊を立体的に透かしている。菊花(花弁を八重とし立体感を表現)と葉(葉脈)を丁寧に表現。菊花の花芯も格子目状に表現される。表面の左下の葉と左上の茎の一部は二次的な火熱の影響と緑青の影響で爛れている。縦位の断面は扁平な半円形状で柄に取り付けやすい形状となるように成形。裏面は平坦面ではなく、微弱な起伏面が主体であり、部分的に工具による篦状工具による調整痕などが確認されることから鋳造品とみられる。緑青は表裏面とも部分的に観察される。	SA20 一括遺物2 層
〃 〃 87	武具 鎧の総角 付の鐶座	青 銅 製 品	38.8	鋲頭: 18.8 鐶座: 23.7	鋲頭: 19.1 鐶座: 23.4	鋲頭: 13.1 鐶座: 1.1	鎧後面に取り付けられる総角付の鐶(水呑の鐶)に付属する鋲。鋲頭は切子頭の無文鋲。鋲頭は面取りがなされていて、菱形(６面)、三角形(８面)の合計14面で構成されている。両側面には直径6.9～7.7㎜の孔が開いている。孔内部には鋲身の尖った身の一部が確認できる。鋲頭と鋲の身の間には菊座が挟まっている。菊座の花弁は細かく弁先の幅が0.9㎜～1.2㎜間隔で鏨などで打ち込んでいる。菊座の裏面は凹面となり、座の孔は側面観察から四角形であることから孔のサイズは身の断面サイズに近似した四角形のようである。鋲の身は先端(身上部は細身の三角錐)が尖り、途中から断面が四角形(6.1㎜×7.7㎜)となっているが身の下部で二股(身の断面サイズ:幅6.8㎜×厚み2.1㎜)に割れているが、一端は根本から折れている。切子頭の鋲は全体的に緑青が観られ、部分的に白く変色している。菊座の表面は半分程度、緑青や白く変色する箇所もみられる。菊座の裏面は緑青で覆われ錆汁が凝固した際に砂粒や鉄の細片などを取り込んでいる。	SA19･20 畦3層
〃 図版40 88	〃 札	鉄 製 品	14.0	64.0	19.4	2.1～ 2.3	盛上札(第24図参照)。ほぼ完形の札で孔の大半は錆で塞がれているが、孔の部分の錆は浅く窪んでいる事などから孔の位置の推定が容易であった。孔の数は２行13孔を数えた。表裏面とも錆で覆われていて部分的に錆瘤が観られる。表面には錆汁が凝固した際に陶磁器の細片を取り込んでいる。	SA20 一括遺物3 層
〃 〃 89	〃 札	鉄 製 品	7.2	59.5	19.4	1.6～ 2.0	〃　　。完形の札で孔は錆で塞がれていて確認できる孔は2行7孔のみであった。表裏面とも錆で覆われている。裏面は錆で脹れて、錆瘤も観られる。表面には錆汁が凝固した際に石材の細片を取り込んでいる。	SA20 第2層
〃 〃 90	〃 札	鉄 製 品	13.3	58.3	18.6	2.3	〃　　。完形の札で孔の大半は錆で塞がれているが、孔の部分の錆は浅く窪んでいる事などから孔の位置の推定が容易であった。孔の数は２行13孔を数える。表裏面とも全体が錆で覆われていて錆で脹れている。表面は錆汁と錆瘤が観られる罅割れが発生している。裏面は錆汁でケロイド状となり、凝固の際に石材の細片などを取り込んでいる。	SA20 第2層
〃 〃 91	〃 札	鉄 製 品	10.1	59.4	19.6	2.1	〃　　。完形の札で孔は、５孔が開いている程度で残りは錆で塞がれているが、孔の部分の錆は浅く窪んでいる事などから孔の位置の推定が容易であった。孔の数は２行13孔を数えた。表裏面とも全体が錆で覆われていて錆で脹れている。表面は錆汁でケロイド状となっている。裏面は錆汁が凝固した際に石材の細片などを取り込んでいる。裏面の一部には石灰分が薄く付着している。	SA19 一括遺物 2層
〃 〃 92	〃 札	鉄 製 品	9.0	60.2	19.7	2.1	〃　　。完形の札で孔は、７孔が開いている程度で残りは錆で塞がれているが、孔の部分の錆は浅く窪んでいる事などから孔の位置を推定すると孔の数は２行13孔が考えられる。表裏面とも全体が錆で覆われていて錆で脹れている。表面は錆汁でケロイド状となり、錆瘤も発生している。裏面も表面と同様に錆瘤が観察される。その他に裏面では錆汁が凝固した際に炭の細片などを取り込んでいる。	SA19 一括遺物3 層
〃 〃 93	〃 札	鉄 製 品	18.8	58.4	18.6	2.1	〃　　。完形の札で孔は、９孔が開いている程度で残りは錆で塞がれていが、孔の部分の錆は浅く窪んでいる事などから孔の位置を推定すると孔の数は２行13孔が考えられる。表裏面とも全体が錆で覆われていて錆で脹れや錆汁でケロイド状となる。表面には錆瘤も発生している。両面には錆汁が凝固した際に中国産褐釉陶器壺(釉薬は灰白色)破片１点と同陶器の細片などを取り込んでいる。	SA19･20 畦4層
〃 〃 94	〃 札	鉄 製 品	12.2	58.9	19.1	2.2	〃　　。完形の札で孔は、11孔が開いている程度で残りは錆で塞がれているが、孔の部分の錆は浅く窪んでいる事などから孔の位置を推定すると孔の数は２行13孔が考えられる。表裏面とも全体が錆で覆われていて錆で脹れや錆汁でケロイド状となり、錆瘤も発生している。裏面の一部では石灰分が薄く付着する。裏面の一部では縦方向に罅割れが発生している。	SA20 第2層
〃 〃 95	〃 札	鉄 製 品	5.6	48.6	18.9	1.6～ 2.0	〃　　。札の札足(第20図参照)を欠いている。札の孔は、９孔が開いていて、残り２孔は孔が僅かに痕跡と留める。合計11孔が確認される。表裏面とも全体が錆で覆われ、錆脹れや錆瘤も観られる。裏面では部分的に小規模な罅割れが観られる。	SA20 第2層
〃 〃 96	〃 札	鉄 製 品	5.6	45.5	18.4	1.7	〃　　。〃　　。札の孔は、８孔が開いていて、残り2孔は孔が僅かに痕跡と留める。残り１孔は錆で塞がっている。孔は計11孔が存在する。表裏面とも全体が錆で覆われていて錆脹れや錆瘤も観られる。両面とも下部に於いては錆による剥離が進行し、厚みが極端に薄く(0.6㎜)なっている。	SA19 一括遺物2 層

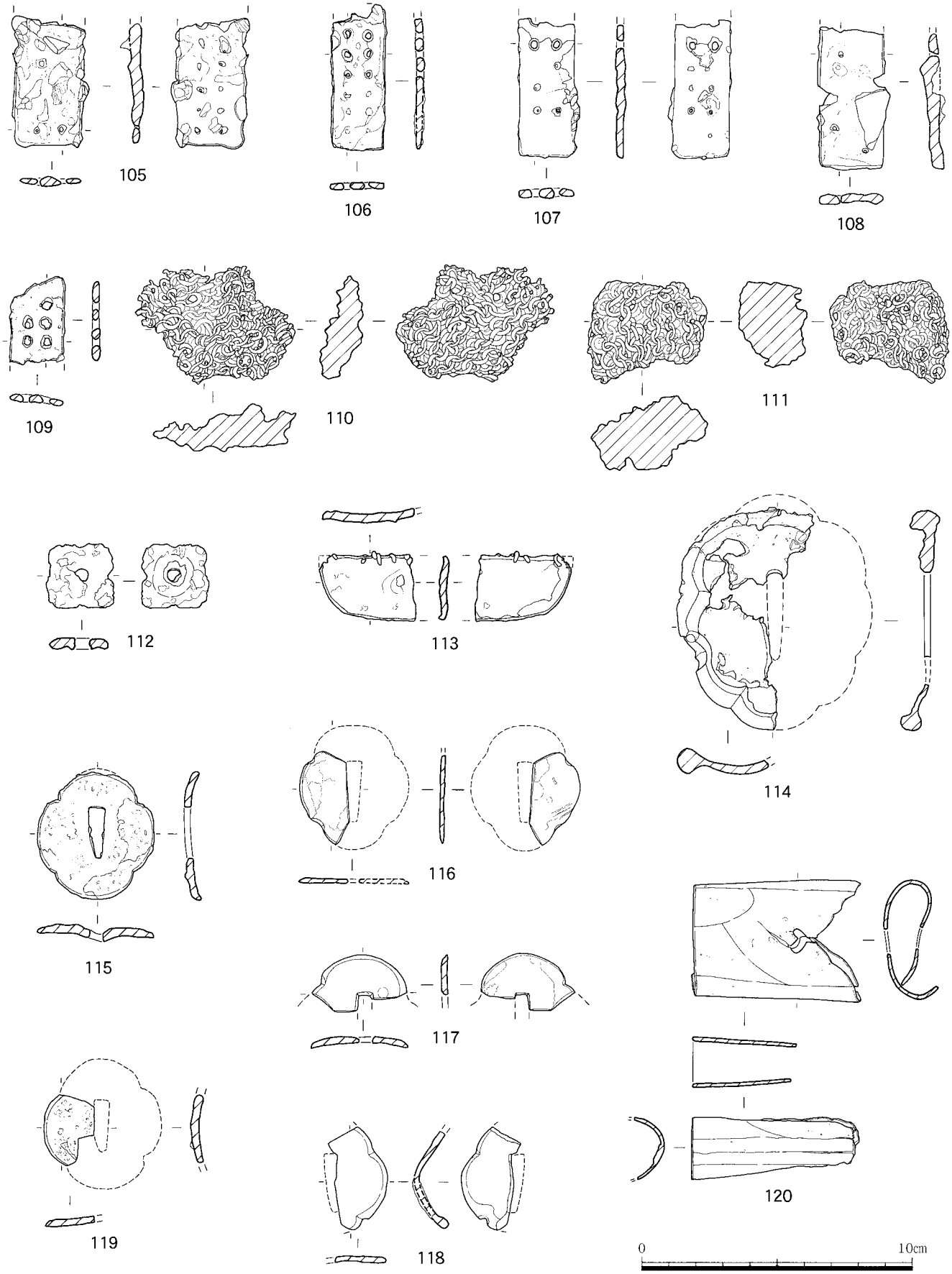


第57図　国指定重要文化財（保存処理未）⑧
金属製品　武具（85・87総角付けの鐶座、88～104札）、武器（86刀剣の目貫）

第23表⑩　国指定重要文化財(保存処理未)金属製品観察一覧

単位：㎜/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	分類 名称 仮称	材質	残存 重量	残存長 (縦)	残存幅 (横)	残存 厚	観　察　事　項	出土地点 出土層
第57図 図版40 97	武具 札	鉄 製 品	5.6	40.6	18.4	1.9	盛上札(第24図参照)。札の札足(第20図参照)を欠いている。札の孔は、６孔が開いていて、残り2孔は孔が僅かに痕跡を留めるものと孔錆で塞がっているものである。孔は計８孔が存在する。表裏面とも全体が錆で覆われていて錆脹れや錆瘤も観られる。表裏面は錆汁が凝固する際に石材の細片や炭の細片を取り込んでいる。	SA20 第3層
〃 〃 98	〃 札	鉄 製 品	20.3	70.7	23.7	2.6	碁石頭(第24図参照)の札。札の札足と左側下端を欠いている。碁石頭の孔の数は２行14孔を基本とするが、孔の大半は錆で塞がれているが、孔の部分が錆で浅く窪んでいる箇所と欠落の孔を数えると13孔を数える。表裏面とも錆で覆われ、全体的に錆瘤の破裂による剥離や罅割れが観られる。	SA19･20 畦2層
〃 〃 99	〃 札	鉄 製 品	20.2	67.4	22.4	2.7	〃　。ほぼ完形。孔は4孔が開いていて、残りの孔は錆で塞がれているが、孔の部分が錆で浅く窪んでいる箇所と欠落の孔を数えると5孔を数える程度であった。表裏面とも錆で覆われ、錆で脹れている。表面は錆瘤が2箇所で観察される。裏面では錆瘤の破裂による剥離と錆汁が凝固する際に中国産褐釉陶器の破片2点を取り込んでいる。	SA20 一括遺物 3層
〃 〃 100	〃 札	鉄 製 品	11.9	56.1	22.6	2.6	〃　。右側の札足(第20図参照)を欠いている。孔は錆で塞がれているが、孔の部分が錆で浅く窪んでいる箇所と欠落の孔を数えると10孔を数える程度であった。表裏面とも錆で覆われ、錆で脹れている。表裏面とも錆によってケロイド状となり、器面の剥離痕や新たな剥離が両面で観察される。器面の保持が悪い。	SA19･20 畦2層
〃 〃 101	〃 札	鉄 製 品	10.3	45.2	21.4	3.1	〃　。札の札足(第20図参照)を欠いている。孔は3孔が開いていて、残りは錆で塞がれている。孔の部分が錆で浅く窪んでいる箇所と欠落の孔を数えると8孔を数える程度であった。表裏面とも錆で覆われ、錆で脹れている。表裏面とも錆によってケロイド状となる。両面とも小さな錆瘤が観察される。一部では罅割れが観られる。	SA19･20 畦2層
〃 〃 102	〃 札	鉄 製 品	14.5	58.1	20.3	2.3	〃　。ほぼ完形であるが、右側札頭の一部を欠いている。孔は全て錆で塞がれている。表裏面とも錆で厚く覆われ、錆脹れや錆瘤がみられる。表裏面とも錆によってケロイド状となる。裏面の中央には錆汁が凝固する際に板材の破片を取り込んでいる。札足(第20図参照)近くで横位方向の罅割れがみられる。	SA20 一括遺物 2層
〃 〃 103	〃 札	鉄 製 品	16.2	62.4	23.5	2.2	〃　。完形であるが、孔は7孔のみ開いていて残りは錆で塞がっている。表裏面とも錆で厚く覆われ、錆脹れや錆瘤がみられる。表裏面とも錆によってケロイド状となる。表面は錆汁が凝固する際に砂粒などを取り込んで白く変色している。	SA19･20 畦4層
〃 〃 104	〃 札	鉄 製 品	3.8	29.1	23.2	2.1	〃　。札頭を除いて大半が欠落する。孔は3孔のみ開いている。他の１孔は半分程度欠けている。残りは錆で塞がっている。表裏面とも錆で覆われケロイド状となり、錆脹れや錆瘤もみられる。裏面は器面が全体的に剥離している。小規模な罅割れも観られる。	SA20 第2層
第58図 図版41 105	〃 札	鉄 製 品	13.5	48.1	23.6	1.6	札頭(第20図参照)を欠いている。孔は2孔のみ開いていて、残りの孔は錆で塞がっているが、孔の部分が錆で浅く窪んでいる箇所と欠落の孔を数えると12孔を数える。表裏面とも錆で覆われていて錆で脹れている。また、錆汁や錆瘤が観られる。表面には錆汁が凝固する際に中国産白磁の細片や木片などを取り込んでいる。	SA20 第3層
〃 〃 106	〃 札	鉄 製 品	8.8	53.3	19.5	1.9	札頭(第20図参照)の一部を欠いているが、残存部位から碁石頭(第24図参照)の札と観られる。孔の数は6孔のみ開いていて、残りの孔は錆で塞がれているが、孔の部分が錆で浅く窪んでいる箇所と欠落の孔を数えると12孔を数える。表裏面とも錆で覆われていて錆脹れや錆瘤の破裂が確認される。また、錆の進行で剥離し、罅割れも両面で観察される。	SA19 第3層
〃 〃 107	〃 札	鉄 製 品	7.5	50.8	20	1.5	札頭(第20図参照)を欠いている。孔は2孔のみ開いていて、残りの孔は錆で塞がれているが、孔の部分が錆で浅く窪んでいる箇所と欠落の孔を数えると11孔を数える。表裏面とも錆で覆われていて錆脹れによる膨張で器面が全体的に剥離している。部分的に錆瘤や罅割れが確認できる。	SA20 第3層
〃 〃 108	〃 札	鉄 製 品	14.2	51.7	23.6	3.0	〃　。孔は2孔のみ開いていて、残りの孔は錆で塞がれているが、孔の部分が錆で浅く窪んでいる箇所と欠落の孔を数えると6孔を数える。表裏面とも錆で覆われ、裏面は錆瘤の破裂や剥離によって大半が失われている。表面には錆汁が凝固した際に中国産褐釉陶器の細片を取り込んでいる。	SA20 第2層
〃 〃 109	〃 札	鉄 製 品	4.6	31.8	19.2	2.4	盛上札(第24図参照)の札頭。孔は5孔のみ開いていて、残りの孔は半欠した1孔が確認される。欠落した孔を含めると6孔が存在する。表裏面とも錆で覆われている。錆による剥離が著しく進行した為、身の厚みがなくなり痩せている。また、小規模な罅割れも観られる。	SA19 第3層
〃 〃 110	〃 鎖帷子	青 銅 製 品	29.3	41.9	59.6	6.9～ 16.0	溝のある円柱状の棒に針金を巻き付けて鏨で切り離して鎖の単体を作り、単体の鎖を連結して八重鎖(第23図参照)とする。本資料は裏面の状況(連結鎖の輪が平行に揃っている)からすると連結した鎖を二つから三つに折り畳んだ状態で破損したようである。火災による火熱を受けて鉄素材は溶解・再凝固している。裏面は錆が半分程度広がっている。また、部分的に錆の影響で鎖の表面が剥離して内部の鉄素材が繊維状となって露出する箇所もみられる。単体鎖のサイズは、太さ1.2㎜、内径4.3㎜、外径6.7㎜を測った。	SA20 第2層



第58図　国指定重要文化財（保存処理未）⑨
金属製品　武具（105～109札、110・111鎖帷子、112立挙？、113籠手の摘）、
武器（114鍔、115～119切羽、120薙刀の逆輪）

第23表⑪　国指定重要文化財(保存処理未)金属製品観察一覧

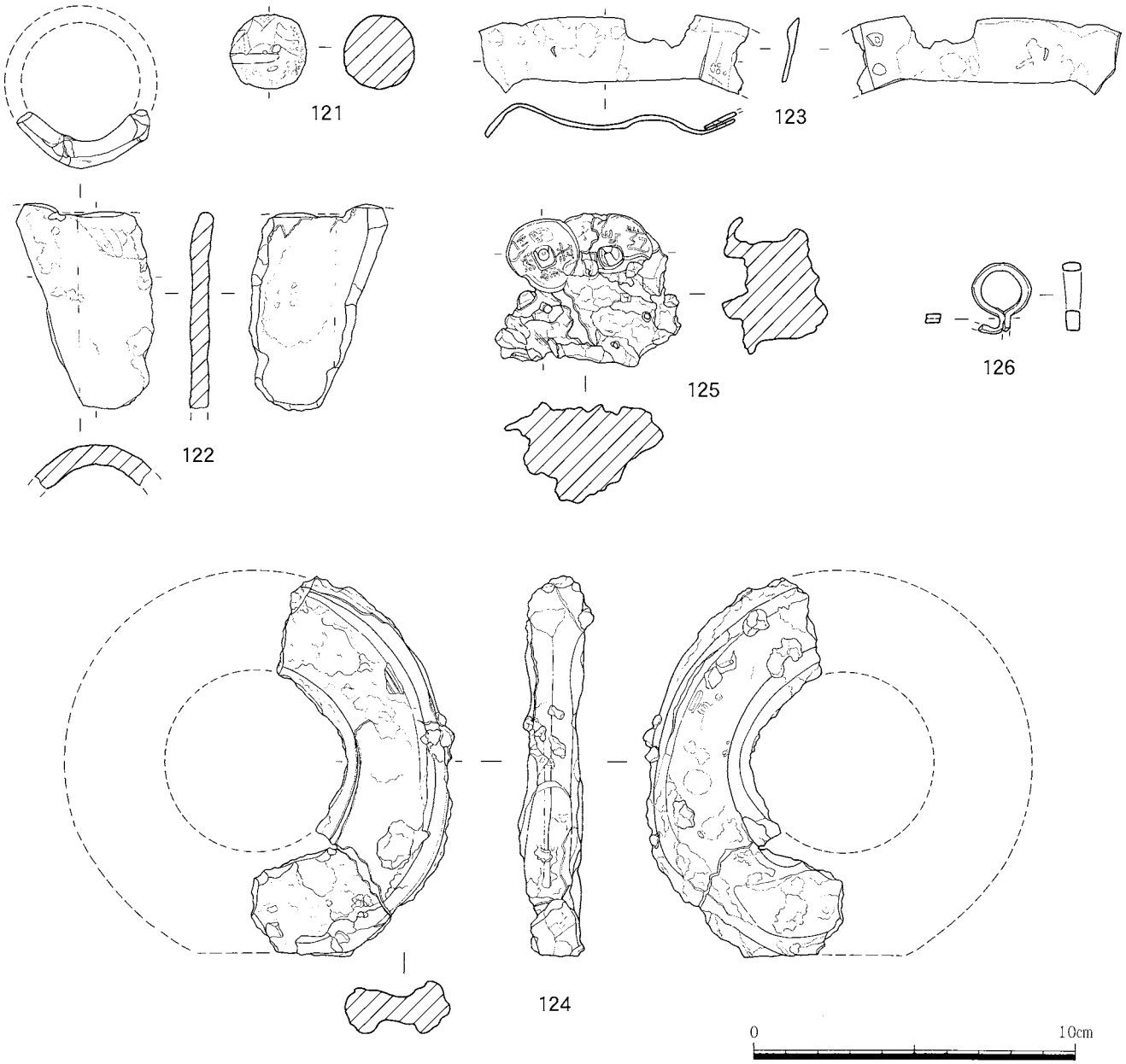
単位：㎜/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	分類 名称 仮称	材質	残存重量	残存長 (縦)	残存幅 (横)	残存厚	観　察　事　項	出土地点 出土層
第58図 図版41 111	武具 鎖帷子	青銅製品	33.4	39.4	44.2	12.1～ 21.7	溝のある円柱状の棒に針金を巻き付けて鏨で切り離して鎖の単体を作り、単体の鎖を連結して八重鎖(第23図参照)とする。本資料は裏面の状況(連結鎖の輪が平行に揃っている)からすると連結した鎖を三つに折り畳んだ状態で破損したようである。火災による火熱を受けて鉄素材は溶解・再凝固している。全体的に鉄が炭化したような雰囲気がある。錆は表面の右下で僅かに観察される。また、表面の左下から左側面の下半部には石灰分が付着して白くなっている。単体鎖のサイズは、太さ1.3㎜、内径4.2㎜、外径7.1㎜を測った。	SA19 第層
〃 〃 112	〃 立拳？	青銅製品	4.6	23.4	24.8	1.9	臑当(第23図参照)の立拳の一部か、若しくは臑当飾り金具として考えられたものであるが、明確な用途については不明である。形状は方形状を呈する。中央に直径5.1㎜の孔が開いていて、上下左右の各辺の中央部が抉れている。内面の孔の周辺は鍔を取り付けたようであるが錆で盛り上がっている。表裏面とも錆で覆われ、錆脹れや錆瘤が部分的に観られる。錆による剥離は表裏面で確認される。特に裏面の大半は剥離によって損なわれ浅く窪んでいる。表面も剥離によって本来の面を失なって錆によってケロイド状となっている。	SA20 一括遺物 2層
〃 〃 113	〃 籠手の摘	青銅製品	5.4	23.8	35.4	1.3～ 1.8	籠手(第23図参照)の摘とみられる破片。摘は指や拳の保護を目的とする為、指や拳の形状に合わせて表面を凸状に盛り上げ、内面を凹状となるように製作されている。また、摘の縁辺も指や拳の保護目的で、軽く外側に折り曲げている。摘の上部は、籠の摘手甲とを繋ぐ鉄製の輪が4個程度残っている。輪の1個は歪な扁楕円形状(太さ1.6㎜、内径1.8㎜×2.9㎜、外径4.0㎜×5.4㎜)となり、残りの3個の輪は1/2～2/3程度が破損している。輪は4.1㎜～6.1㎜間隔で取り付けられているようである。表裏面とも錆で覆われ、表面は錆瘤や罅割れなどが観られる。内面は剥離が縁沿いで観察され、剥離面から地金が露出している。	SA19 一括遺物 3層
〃 〃 114	武器 刀剣の鍔	青銅製品	57.9	79.6	54.9	1.9～ 7.9	刀剣の鍔で木瓜鍔の範疇にあるタイプ。耳(鍔縁)は丸味のある環耳(玉縁状)で、文様は環耳の抉れた箇所にハート形の透かしで中空きであったが、火災による火熱の影響を受けてハート形の透かしが歪に変型(左下はハート形の頭が観られる。左上は消失や爛れで形状不明)している。推定された茎孔は短軸で上端が5.4㎜、下端2.8㎜、長軸31.9㎜であった。鋳型を二種類(鍔本体と環耳に分割)組み合わせて製作されたようである。	SA19 2層
〃 〃 115	〃 切羽	青銅製品	21.3	46.0	42.6	2.0	切羽の平面形態は木瓜形を呈する。刀剣の茎が入る茎孔は短軸で上部が6.1㎜、下部は2.5㎜を測った。長軸は18.7㎜を計測した。鋳型に銅素材を流し込んで製作された鋳物であることから裏面の縁辺部に角が生じている。表裏面とも緑青で覆われている。	SA19・20 畦3層
〃 〃 116	〃 切羽	青銅製品	4.8	34.5	17.7	1.8	〃　。切羽の1/4程度が残存する。刀剣の茎が入る茎孔を推定で復元したところ、短軸上部は4.6㎜、下部2.2㎜、長軸22.2㎜となった。鋳型に銅素材を流し込んで製作された鋳物であることから裏面の縁辺部に角が生じている。表裏面とも緑青で覆われている。	SA20 一括遺物 2層
〃 〃 117	〃 切羽	青銅製品	5.9	20.6	33.4	2.1	〃　。切羽の上部破片。刀剣の茎が入る茎孔のサイズは、短軸の上部で4.9㎜を測った。鋳型に銅素材を流し込んで製作された鋳物であることから裏面の縁辺部に角が生じている。表裏面とも緑青で覆われている。部分的に緑青で地金がケロイド状となっている。	SK01-C 淡褐色土層 (上層)
〃 〃 118	〃 切羽	青銅製品	8.2	25.2	17.7	2.0	〃　。切羽と判断できる程度の小破片。鋳型に銅素材を流し込んで製作された鋳物であることから裏面の縁辺部に角が生じている。表裏面とも緑青で覆われ、全体的に緑青で地金がケロイド状となり面の保持が悪い。錆汁が凝固する際に細片化した炭を取り込んでいる。	SA19 第3層
〃 〃 119	〃 切羽	青銅製品	4.4	36.8	25.6	1.8	〃　。切羽の1/2以上が欠落する。縦位の断面が「く」の字状に折れ曲がっている。鋳型に銅素材を流し込んで製作された鋳物であることから裏面の縁辺部に角が生じている。表裏面とも緑青で覆われている。表面は錆によってケロイド状となり器面の保持が悪く、部分的に小さな剥離がみられる。裏面は錆で脹れて、錆瘤によって面に小さな凹凸ができている。	SA19・20 畦2層
〃 〃 120	〃 薙刀の 逆輪	青銅製品	42.4	41.6～ 45.3	60.4	1.0	薙刀の逆輪(第24図参照)。右側を魚尾状に抉り込んでいて、抉れ部分に近い箇所にハート形の透かしで中空きとする。表面の下側面は縁辺の端同士を合わせている。この接合部分の裏側には幅5.8㎜、長さ61.5㎜、厚さ0.6～1.0㎜の板材が接着されている。表裏面とも緑青が全体的にみられ、緑青の一部は白く変色している。	SA19・20 畦2層

第23表⑫　国指定重要文化財(保存処理未)金属製品観察一覧

単位：㎜/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	分類 名称 仮称	材質	残存 重量	残存長 (縦)	残存幅 (横)	残存厚	観　察　事　項	出土地点 出土層
第59図 図版42 121	武器 銅弾	青銅製品	50.6	23.9	24.2	21.7	石火矢の弾。青銅製の球体で、弾鋳型によって製作された鋳物製品として考えられるが全体的も緑青で覆われ鋳型の繋ぎ目が観察できない。部分的に緑青の影響を受けて白色や灰褐色に変色する。文献記録では確認できない唯一、年代の特定できる貴重な石火矢の弾である。京の内以外で首里城内では此までに青銅製の弾が18点が出土している。弾のサイズは最小で直径1.4㎝、最大が直径2.8㎝と山本正昭(『紀要　沖縄埋文研究　2』2004年3月)によって紹介されている。文献記録では1450年に小型の「火筒(石火矢)」が記録されている。また、1466年に琉球の使者が室町幕府の将軍足利義政に謁して、辞去に際して「火砲(石火矢)」を鳴らして京人を驚かす。文献記録からみても年代の特定できる石火矢の弾で実存する最古の資料とみられる。	SA19･20 畦3層
〃 〃 122	〃 石火矢の 筒(砲身)	青銅製品	65.2	64	36.9	3.5～5.4	石火矢の筒(砲身)破片とみられる。推定復元による砲身の内径は、36.6㎜であった。表裏面とも全体的に緑青で覆われ、緑青の影響を受けて白色や灰褐色に変色する。特に内面は緑青による変色が著しい。破損した右側面の上部には鉄錆が付着している。文献記録では確認できない唯一、年代の特定できる貴重な石火矢の筒である。文献記録では1450年に小型の「火筒(石火矢)」が記録されている。また、1466年に琉球の使者が室町幕府の将軍足利義政に謁して、辞去に際して「火砲(石火矢)」を鳴らして京人を驚かすとあり、文献記録からみても第59図121の弾と同様に年代の特定できる石火矢の筒破片として考えられ実存する最古の資料とみられる。	SA19･20 畦2層
〃 〃 123	〃 締め金具	青銅製品	12.8	19.8	82.5	0.6	石火矢の筒(砲身)を締め付けた金具とみられる。右端近くに金具を重ねて鋲を二個を使用して締め付けたものとみられる。鋲は内側より差し込んで外側で潰している。鋲の頭は扁平な円形で直径3.4㎜を測る。身の断面は、鋲を通した孔(孔径1.7㎜)内部に残る身の状況から判断すると断面が円形である。表裏面とも緑青が観察され、特に内面は緑青が2/3以上広がっている。表裏面とも部分的に錆瘤がみられる。錆瘤の周辺や一部では小規模ながら緑青が白く変色する。	SA19 一括遺物 2層
〃 〃 124	〃 石火矢の 鐶金具？	青銅製品	151.3	116.7	60.6	7.0～ 17.0	中空きの鐶金具で、特殊な断面構造となっていることなどから石火矢の砲身と関係する鐶金具かもしれない。表面の外側縁辺部と裏面内側縁辺部を玉縁の肥厚帯を作っていて、肥厚する玉縁の位置が内側のみ裏面で肥厚する。外側の肥厚部は厚さ15.4㎜、内側の肥厚部が10.3㎜を測る。推定復元による鐶の外径は縦位と横位とも12.0㎝、内側の内径は5.7㎝を求めた。表裏面とも火災による火熱の影響を受けて裏面の大半と表面の一部が爛れている。また、緑青により全体が被覆し、錆で脹れて部分的な亀裂がみられる。また、緑青の影響で一部は表面がケロイド状となる箇所や白く変色する箇所もみられる。	SA19･20 畦3層
〃 〃 125	銭貨の塊	青銅製品	141.0	46.5	56.2	4.5～ 28.9	火災により火熱を受けて溶解・凝固した銭貨の固まりとみられる。表面には楷書体の洪武通寶(1368年初鋳造)と不明銭貨(「寶」の一字のみ判読)の二枚が青銅の固まり中で溶けて固まっている。表面は青銅が火熱により歪で起伏のある不定形な状態で溶けて固まったようである。表面で観察できた銭貨は上記した二枚以外に銭貨の破片が10枚程度確認されるが、その大部分は溶けて窪んだ隙間から観察できる。裏面は銭貨の破片8枚が固まりの中から観察でき、空洞化した部分が多く目立っている。銭貨の固まりは、表裏面とも緑青がみられ、錆の進行は停滞気味のようである。表面および裏面には火熱を受けて溶解した際に、白色のガラス製品の一部が溶けて一緒に固まっている。	SA20 一括遺物 2層
〃 〃 126	工具類・ 生産用具 鐶状の鋲	青銅製品	3.9	21.9	17.3	鐶鋲頭: 2.3 鐶鋲身: 1.2	調度品などの紐金具(引手金具)の一部とみられる。厚さ1.2㎜(身部先端)～2.3㎜(鐶鋲頭)、幅3.1(身部先端)～5.6㎜(鐶鋲頭)の青銅の板材を鐶状に折り曲げて加工し、両端は鋲の身となるように二股の身部を作って使用したものである。身部の先端は欠落する。鐶鋲頭の下端から身の内側屈曲部までの長さは4.1㎜を測ることから対象となった素材の厚みは4㎜程度が考えられる。緑青は表裏面で部分的に観察される程度であり、強度の高い素材とみられる。	SK01-C 淡褐色土 層(上層)



第59図　国指定重要文化財（保存処理未）⑩
金属製品　武器（121銅弾、122石火矢の筒、123・124石火矢の締め金具）、銭貨（125銭貨の塊）、工具類・生産用具（126鋲）

17．銭貨　保存処理未（第60図１～第62図22）・（図版43－１～図版45－22）

国指定の重要文化財に指定されている京の内倉庫跡出土の金属製品一括資料に含まれる銭貨で、既に保存処理を終えたものが７点（第35図61～67）である。今回の報告書で図化した資料は22点（第60図１～10、第61図11～20、第62図21・22）である。この資料を含めた保存処理未の点数は、第24表に示した32点である。未処理の銭貨32点の内訳を出土量の多い順に記すと、洪武通寶（９点）、永樂通寶（９点）、不明銭（６点）、元豊通寶（２点）、無文銭（２点）、政和通寶（１点）、紹聖元寶（１点）、開禧通寶（１点）、厭勝銭（１点）となっていて、洪武通寶が最も多く出土している。

これに、前述した保存処理済みの銭貨を加えると京の内の倉庫跡から出土した銭貨の点数内訳は、以下のとおりとなる。洪武通寶（11点）、永樂通寶（９点）、不明銭（６点）、元豊通寶（３点）、無文銭（２点）、紹聖元寶（２点）、政和通寶（１点）、聖宋元寶（１点）、開禧通寶（１点）、至道元寶（１点）、治平元寶（１点）、厭勝銭（１点）の39点となる。不明銭や無文銭および厭勝銭を除いた銭貨の鋳造時代別にみると北宋銭（至道元寶１点：995年初鋳造、治平元寶１点：1064年初鋳造、元豊通寶３点：1078年初鋳造、紹聖元寶２点：1094年初鋳造、聖宋元寶１点：1101年初鋳造、政和通寶１点：1111年初鋳造）の９点、南宋銭（開禧通寶１点：1205年初鋳造）１点、明銭（洪武通寶11点：1368年初鋳造、永樂通寶９点：1408年初鋳造）20点となる。

銭貨で注目された資料は、第62図22の厭勝銭である。この銭の面には文字、若しくは絵が鋳型で起こされている。また、孔郭が六角形のいわゆる亀甲穿である。この種の六角形の孔を持つ使用は管見の限りでは、県内遺跡からの出土はないようである。国内での中世遺跡で厭勝銭の出土した例として志海苔出土２枚（亀甲穿で、二羽の鳥が対となる雙鳥銭１枚と判読不能１枚）、長崎県鷹島町神崎免の鷹取海底遺跡で１枚（「福録壽昌」文字）の３枚である。京の内出土の厭勝銭は、これに次ぐ資料とみられる。その他、韓国新安海底遺物から円形孔の開いた円穿２枚（「天下太平」・「花紋銭」）が報告されているようである。

参考資料

・陸原 保『改訂版 東洋古銭価格図譜 全』万国貨幣洋行　1975年５月28日。
・永井久美男『新版 中世出土銭の分類図版』高志書院 2002年４月20日。
・鷹島町文化財調査報告書第６集『鷹島海底遺跡Ⅶ－長崎県北松浦郡神崎港改修工事に伴う発掘調査概報－』長崎県鷹島町教育委員会 2002年３月。

第24表　国指定重要文化財(保存処理未)銭貨出土状況

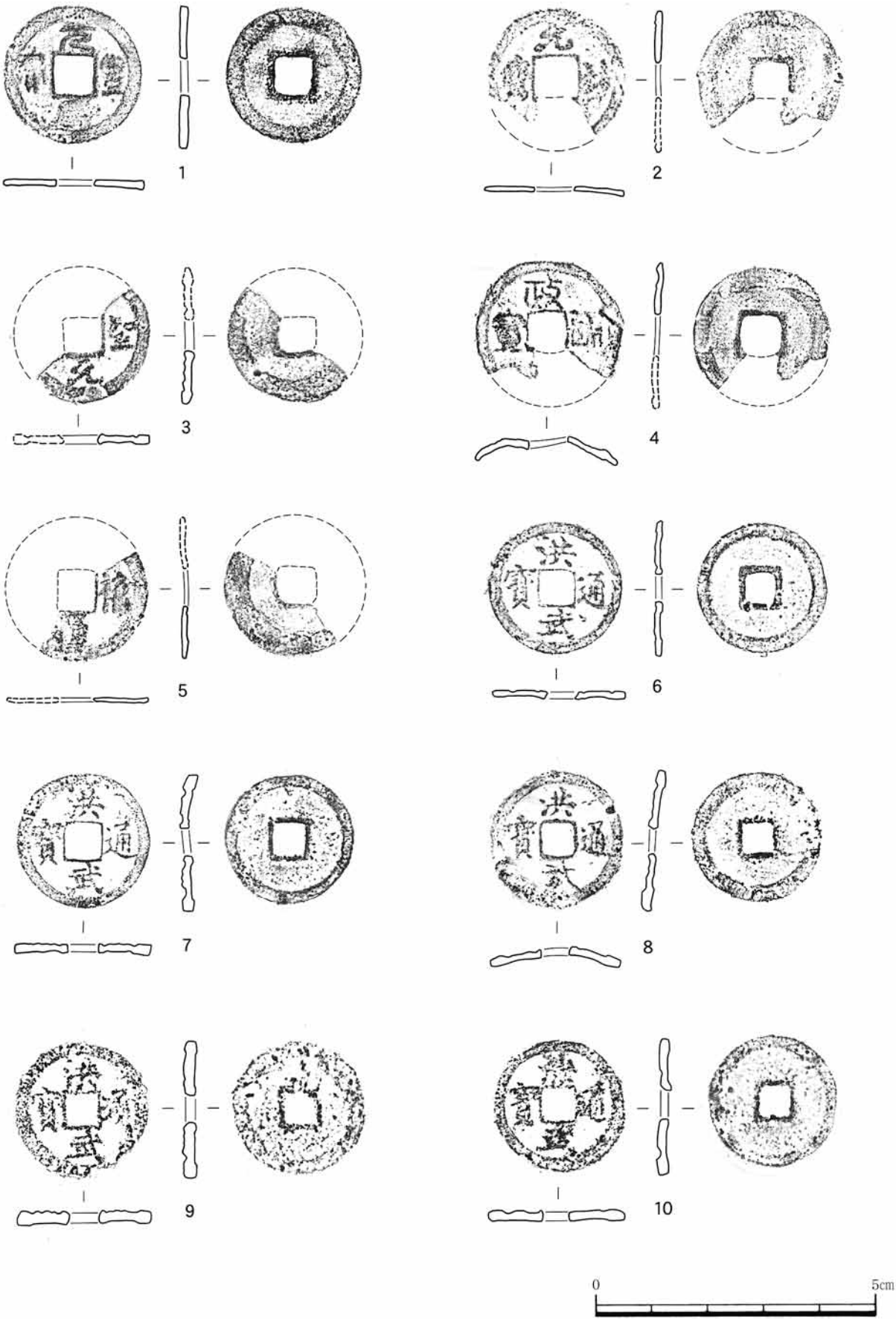
種類＼出土地		SA19			SA20				SA28	SA19・20			SK01-C	合計	
		延長	栗石内	一括遺物3層	東側トレンチ壁	第2層	第3層	第4層	トレンチ第2層灰黄色堀(覆土直下)	畦床面清掃	第2層	第3層			
元豊通寶	完形	1												1	2
	破損					1								1	
紹聖元寶	破損											1		1	
政和通寶	破損					1								1	
開禧通寶	破損		1											1	
洪武通寶	完形					6	1							7	9
	破損					1						1		2	
永樂通寶	完形					1	2		1			1		5	9
	破損			1	1	1						1		4	
厭勝銭	破損						1							1	
無文銭	破損			1		1								2	
不明	破損							2		1	1	1	1	6	
合　計		1	1	2	1	12	4	2	1	1	1	5	1	32	

第25表①　国指定重要文化財(保存処理未)銭貨観察一覧(計測部位は第34図参照)

単位：㎜/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	銭種	鋳造種類	初鋳年	素材	読み方	状態	書体	肉郭外径 A B	肉郭底径 C D	方穿 E F	断面計測部位 ①	 ②	 ③	重量	観察事項	出土地点 出土層
第60図 図版43 1	元豊 通寶	公 鋳 銭	北宋 1078 年	銅 銭	回 読	完 形	篆 書	24.6 24.9	19.9 20.2	7.3 7.1	1.5	1.0	1.3	4.2	面・背ともに摩耗し、特に背は肉郭および孔郭の縁までが摩滅している。面で明瞭な文字は「元」の一字のみで、他の三文字は字の表面が摩耗し、「豊」・「寶」の二文字が拓影で確認された。「通」の一字は完全に摩滅し判読ができない。面の肉郭は幅2.7㎜を測る。	SA19 延長
〃 〃 2	元豊 通寶	公 鋳 銭	北宋 1078 年	銅 銭	回 読	破 損	行 書	― 24.7	― 20.4	7.6 6.7	1.1	1.0	1.2	2.2	〃　。1/4程度が欠落し、面で明瞭な文字は「元」の一字のみで、「豊」・「寶」の二文字が辛うじて拓影で確認された。面の肉郭は幅2.5㎜を測る。	SA20 第2層
〃 図版44 3	紹聖 元寶	公 鋳 銭	北宋 1094 年	銅 銭	回 読	破 損	行 書	― ―	― ―	― ―	1.8	1.2	1.5	2.1	面の保持は良好であるが、背は摩耗が著しい。面の文字と肉郭はやや明瞭で、「聖」と「元」の二文字が確認できる。面の肉郭は幅2.3㎜を測る。	SA19・20 畦3層
〃 〃 4	政和 通寶	模 鋳 銭	北宋 1111 年	銅 銭	対 読	破 損	篆 書	― 25.3	― 20.5	6.9 6.7	1.3	0.8	1.2	2.5	面の文字は「政」の文字が明確であり、「通」・「寶」は若干、火災による火熱と緑青の影響を受けている。「通」の文字の右側肉郭には青銅製の鋲や釘の先端部(長さ4.0㎜、厚さ0.9㎜)が折れたものが付着している。面の肉郭は幅2.1㎜を測る。	SA20 第2層
〃 〃 5	開禧 通寶	不 明	南宋 1205 年	銅 銭	回 読	破 損	楷 書	― ―	― ―	― ―	1.2	0.9	1.1	1.5	銭貨の1/2強を欠落する。面・背ともに摩耗する。面の文字は不鮮明ではあるが「禧」の一字のみが判読できるが、「通」の文字は摩耗が著しく拓影で確認された。肉郭の幅は面・背で大きく異なっている面で幅2.5㎜、背が4.3㎜と幅で1.8㎜の差が生じている。	SA19 栗石内
〃 〃 6	洪武 通寶	公 鋳 銭	明 1368 年	銅 銭	対 読	完 形	楷 書	23.5 23.5	19.6 19.7	6.5 6.7	1.4	0.7	1.3	3.4	他の資料と比較して面・背ともに両面の保持は良好である。若干、背が軽く摩耗する程度である。「武」の一字のみが、火災による火熱の影響を受けて一部がケロイド状となる。他の三文字は字が鮮明である。面の肉郭は幅1.7㎜を測る。	SA20 一括遺物 3層
〃 〃 7	洪武 通寶	公 鋳 銭	明 1368 年	銅 銭	対 読	完 形	楷 書	23.8 23.7	19.9 19.4	6.1 6.1	1.9	1.0	1.5	4.5	火災による火熱の影響を受けて面の「洪」・「寶」の二文字と背の一部がケロイド状となる。緑青は面で僅かに観察できる程度であるが、背では孔郭の部分に緑青が集中している。面の肉郭は幅2.1㎜を測る。	SA20 第2層
〃 〃 8	洪武 通寶	公 鋳 銭	明 1368 年	銅 銭	対 読	完 形	楷 書	23.9 22.7	19.5 19.1	6.1 6.0	1.6	0.6	1.0	3.3	火災による火熱の影響を受けて面の「武」・「寶」の二文字と背の一部がケロイド状となる。緑青は面で僅かに観察されるが、背では肉郭部分に集中する。面の肉郭には銅素材が火熱で溶解・凝固した際に細片化した炭や鉄、そして細片化した黒釉天目の破片も取り込んでいる。面の肉郭は幅2.1㎜を測る。	SA20 一括遺物 2層
〃 〃 9	洪武 通寶	公 鋳 銭	明 1368 年	銅 銭	対 読	完 形	楷 書	24.7 24.2	19.4 18.8	5.1 5.3	2.5	1.4	2.1	4.4	面・背ともに火災による火熱の影響を受けていて、面の「洪」・「通」・「寶」の三文字がケロイド状となり、背も全体的にケロイド状となっている。緑青は面の肉郭の一部で観察されるが、背では肉郭に集中して肉郭の3/4におよんでいる。部分的に鉄分が付着する。緑青の影響で肉郭の一部が浸食されている。面の肉郭は幅2.1㎜を測る。	SA20 第2層
〃 〃 10	洪武 通寶	公 鋳 銭	明 1368 年	銅 銭	対 読	完 形	楷 書	24.2 23.8	19.2 19.1	5.6 5.5	1.8	1.0	1.4	4.3	面・背ともに火災による火熱の影響を受け文字もケロイド状となり、背も全体的にケロイド状となる。緑青は面の「通」と孔郭の一部で観察されるが、背では小規模にみられる程度である。特に面では緑青が白く変色する部分もみられる。面の肉郭は幅2.0～2.7㎜を測る。肉郭の幅のバラツキは銭鋳型のずれなどが考えられる。断面観察では面・背の鋳型のずれによって縁の断面の一部が垂直ではなく丸味のある「く」の字状となっている。	SA20 第2層

注　「―」：計測不可



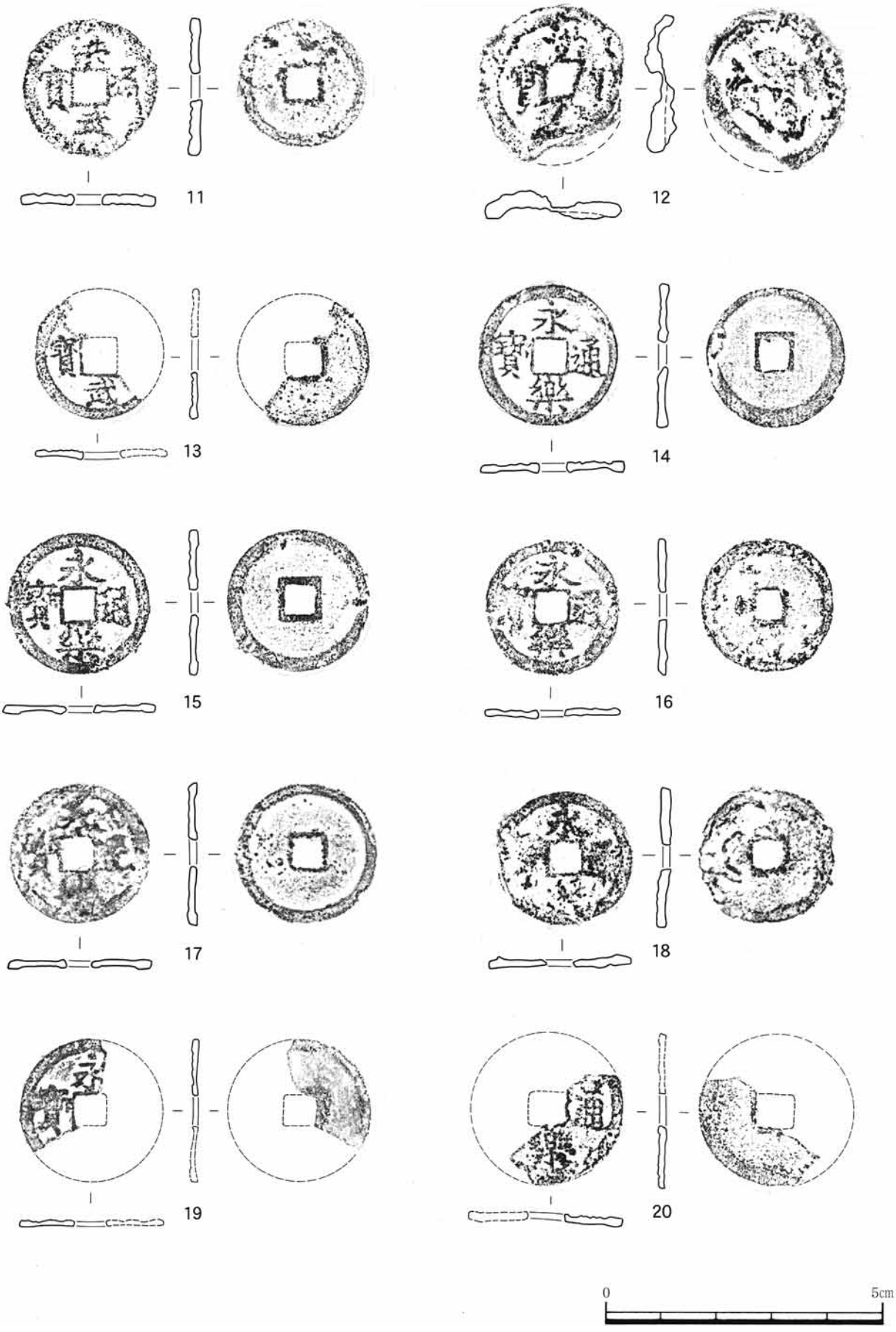
第60図　国指定重要文化財（保存処理未）⑪
銭貨

第25表②　国指定重要文化財(保存処理未)銭貨観察一覧(計測部位は第34図参照)

単位：㎜/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	銭種	鋳造種類	初鋳年	素材	読み方	状態	書体	肉郭外径 A B	肉郭底径 C D	方穿 E F	断面計測部位 ①	 ②	 ③	重量	観察事項	出土地点 出土層
第61図 図版44 11	洪武通寶	公鋳銭	明 1368 年	銅銭	対読	完形	楷書	23.8 23.6	19.4 19.1	5.5 5.5	2.1	1.3	1.7	4.9	面・背とも火災による火熱の影響を受けて素材そのものが脹れて全体がケロイド状となり、微細な気泡痕が多くみられる。銭貨が脆弱な状況にある。面及び背の肉郭の一部は火熱や緑青の影響で欠落する。文字も爛れてケロイド状となる為、不鮮明である。面の肉郭は幅2.8㎜を測る。	SA20 第2層
〃 〃 12	洪武通寶	不明	明 1368 年	銅銭	対読	破損	楷書	28.0 26.2	21.9 19.4	4.9 5.5	2.4	1.0	1.8	6.3	面・背とも火災による火熱の影響を強く受けて素材の溶解と変形で全体がケロイド状となる。その影響で面や背に微細な気泡痕が発生し、脆くなっている。確認された「洪」と「寶」の字は、前者が一部欠落し、後者は変形する。「通」・「武」の字は火熱や緑青の影響でケロイド状となり、判読できない。内面の孔郭は溶けて孔が塞がり位置も不明である。面の肉郭は幅3.2㎜を測る。	SA19・20 畦3層
〃 図版45 13	洪武通寶	模鋳銭	明 1368 年	銅銭	対読	破損	楷書	― ―	― ―	― 6.6	1.7	0.9	1.3	1.8	銭貨の1/2程度が欠落する。面は背よりも火熱の影響は微弱である。「武」・「寶」の字はやや鮮明である。背は火災や緑青の影響を受けてケロイド状となる。面の肉郭は幅1.6㎜を測る。	SA20 第2層
〃 〃 14	永樂通寶	公鋳銭	明 1408 年	銅銭	対読	完形	楷書	25.4 25.2	21.1 21.2	6.4 6.2	1.6	0.7	1.2	4.0	面と背の一部は素材の銅が火熱で溶けて再凝固している。文字は鮮明であるが、一部分に再凝固した銅が被さっている。鋳造時に銭鋳型のズレが発生して面の孔郭と背の孔郭の位置がずれている。背のズレが大きく肉郭の幅が1.3㎜～3.2㎜と1.9㎜の差が生じている。	SA28 ﾄﾚﾝﾁ第2層灰黄色土層(覆土直下)
〃 〃 15	永樂通寶	公鋳銭	明 1408 年	銅銭	対読	完形	楷書	25.7 25.5	21.1 21.4	5.3 5.4	1.6	0.6	1.1	3.7	面は全体的に火熱や緑青の影響を受けてケロイド状となる。銅素材の一部は溶けて「通」の字に流れ被さって再凝固し、緑青で腐蝕する。文字は比較的に鮮明であるが、「寶」部分は緑青の影響で潰れ気味となる。「樂」の字には鉄錆が付着する。背は面よりも火熱の影響は軽微であるが、部分的に緑青の錆瘤や鉄分の付着が観察される。面の肉郭は幅は2.0～2.4㎜を測る。	SA19・20 畦3層
〃 〃 16	永樂通寶	模鋳銭	明 1408 年	銅銭	対読	完形	楷書	24.2 24.1	19.9 20.0	5.7 5.7	1.2	0.8	1.3	3.2	面・背とも火災による火熱の影響を受けてケロイド状となる。「永」と「樂」の二字はやや鮮明であるが、「樂」の字は摩滅している。「通」の字は潰れ気味で辛うじて判読ができる。「寶」の字は「ウ冠」を除いて潰れている。背は部分的に緑青が凝固する際に細片化した炭を取り込んでいる。面の肉郭は幅1.7～2.7㎜を測る。	SA20 第3層
〃 〃 17	永樂通寶	公鋳銭	明 1408 年	銅銭	対読	完形	行書	25.7 25.8	21.2 20.9	5.0 5.2	1.6	0.7	1.2	3.6	面は背よりも火災による火熱の影響が著しく全面がケロイド状となる。文字も摩滅の傾向が見受けられ「永」の字が辛うじて判読できる程度である。「通」・「寶」の字には鉄分の付着や緑青の白錆がみられる。背は全体的に観察され鉄分の付着や緑青による影響で白く変色する部分がみられる。肉郭の一部は緑青に侵食されている。面の肉郭は幅1.6～2.2㎜を測る。	SA20 第2層
〃 〃 18	永樂通寶	不明	明 1408 年	銅銭	対読	完形	楷書	25.3 24.3	20.5 20.2	5.3 5.5	1.8	1.2	1.8	3.8	〃　。文字も摩滅の傾向が見受けられ「永」の字が辛うじて判読できる程度である。残りの三文字は火熱の影響で爛れてケロイド状に潰れている。緑青は面の一部と背の全面にみられる。背は緑青の上に細片化した炭や石灰分が付着している。背の肉郭部分で罅割れがみられる。面の肉郭は幅1.7～2.5㎜を測る。	SA20 第3層
〃 〃 19	永樂通寶	公鋳銭	明 1408 年	銅銭	対読	破損	楷書	― ―	― ―	― ―	1.3	0.7	1.0	1.2	銭貨の2/3程度が欠落する。面・背ともに摩耗する。火災による火熱の影響は軽微であるが若干、面がケロイド状となっている。「永」・「寶」の字はやや鮮明であるが、字の上に鉄分が付着している。背は全体的に緑青が被さってケロイド状となる。面の肉郭は幅2.2㎜を測る。	SA20 東側 ﾄﾚﾝﾁ壁
〃 〃 20	永樂通寶	公鋳銭	明 1408 年	銅銭	対読	破損	楷書	― ―	― ―	― ―	1.7	1.4	1.6	2.4	銭貨の1/2強が欠落する。面・背ともに火災による火熱の影響は軽微であるが若干、面がケロイド状となっている。「通」・「樂」の字は比較的に鮮明である。背は全体的に緑青が被さってケロイド状となる。面の肉郭は幅2.5㎜を測る。	SA20 第2層

注　「―」：計測不可



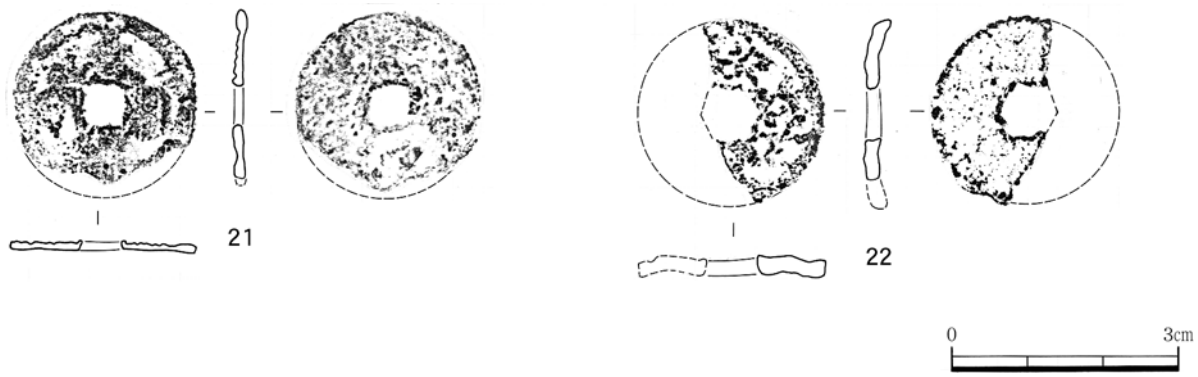
第61図　国指定重要文化財（保存処理未）⑫
銭貨

第25表③　国指定重要文化財(保存処理未)銭貨観察一覧(計測部位は第34図参照)

単位：㎜/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	銭種	鋳造種類	初鋳年	素材	読み方	状態	書体	肉郭外径 A B	肉郭内径 C D	方穿 E F	断面計測部位 ①	 ②	 ③	重量	観察事項	出土地点 出土層
第62図 図版45 21	永樂通寶	模鋳銭	明 1408 年	銅銭	不明	破損	不明	24.9 ―	― ―	5.3 6.0	1.4	1.2	―	2.7	摩滅の著しい銭貨が火災による火熱の影響を受けて背の全てと面の一部がケロイド状となり脆くなっている。摩滅が著しい為、字は判読しがたいが、「永」と「樂」の一部が拓影で確認できる程度である。背は緑青で覆われ、一部に錆瘤と緑青により侵食され白く変色する。面の肉郭は幅2.4㎜を測る。	SA19 第3層
〃 〃 22	厭勝銭	不明	明 1408 年?	銅銭	不明	破損	不明	― ―	― ―	― ―	2.3	1.2	1.8	2.2	銭貨の1/2近くが欠落する。火災による火熱の影響を強く受け、脹れてケロイド状となる。火熱の影響で文字も脹れて判読ができない。面には文字、若しくは絵の一部が緑青で覆われている。背は面よりも火災による火熱の影響を強く受けてケロイド状となり、その上から緑青が被さっている。孔郭が亀甲郭(六角形の孔)となっていることから特殊な銭貨とみられる。面の肉郭は幅2.3㎜を測る。	SA20 第3層

注　「―」：計測不可



第62図　国指定重要文化財（保存処理未）⑬
銭貨

18. 炉壁・羽口（第63図１～７）・(図版46－１～７)

京の内土壙SK01（倉庫跡）からは、陶磁器や金属・ガラス製品以外に壁材か炉壁、或いは羽口とみられる資料が12点（第26表）出土している。その他に第27表に示した焼土片や焼土塊が17点出土している。

ここでは、泥質の粘土を用いて製作された壁材・炉壁・羽口と明確に区別する事が出来なかった為、便宜的に次のⅠ類～Ⅲ類の三つに分類した。Ⅰ類は「炉壁」として考えられるもの。Ⅱ類が「炉壁、若しくは羽口」のいずれかに含まれるもの。Ⅲ類は「羽口」とみられるものである。なお、個々の特徴などについては、第28表の観察一覧に呈示した。

Ⅰ・Ⅱ類（第63図１～６）に関する主な特徴を挙げると、Ⅰ類（第63図１～４）の４点は、断面の形状では片面が凸レンズ状となるようである。Ⅱ類（同図５・６）の２点は、５は一側面が弧状に湾曲した面を有す事などから羽口の可能性も考えられた。６は裏面のみが残存面であり、正面は粘土が剥離した面である。炉壁か羽口かについては判然としなかった。Ⅰ類（同図１～４）とⅡ類（同図５・６）で共通する要素として、素地が瓦質土器に近似する泥質の粘土を使用し、素地には多量の籾殻や稲藁、或いは稲藁を混入させて焼成しているところが共通している。その他に可能性として、Ⅱ類の６は正面の剥離面が、粘土を継ぎ足した部分から剥離している事などから類推すると第77図２～５「瓦質製の蓋」と同様の型枠による製法が考えられる事からⅠ・Ⅱ類（同図１～６）と分類した資料については、将来の類似資料の増加などに拠って用途や機能毎に「炉壁」・「羽口」・「蓋」などに分類や整理がなされるものと解されるところである。次にⅢ類の羽口としたものは、素材そ

のものが細粒砂岩製である。類似資料（素材・形状など）が西表島の上村遺跡（註１）や船浦スラ所跡（註２）などで出土している。羽口の特徴等については第28表に記した。なお、首里城内からは砂岩製の羽口は報告されていないが、今後の発掘調査による類似資料の増加と報告が待たれるところである。

註文献

註１．沖縄県文化財調査報告書 第98集『西表島 上村遺跡－重要遺跡確認調査報告－』沖縄県教育委員会　1991年３月。

註２．沖縄県文化財調査報告書 第101集『西表島 船浦スラ所跡－港湾施設用地工事に伴う発掘調査－』沖縄県教育委員会　1991年３月。

第26表　土壙SK01(倉庫跡)炉壁･羽口出土状況

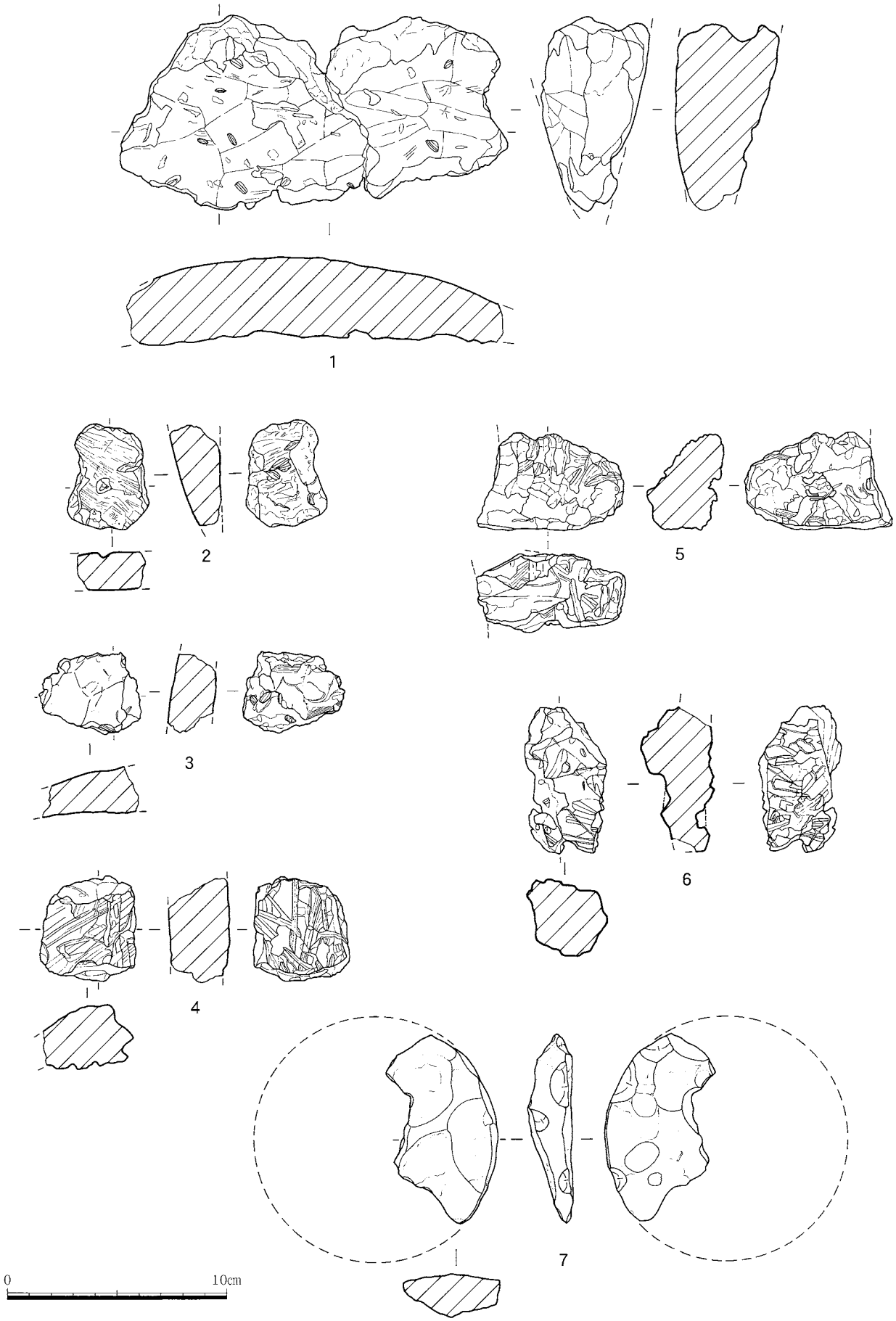
種類＼出土地	SA19	SA20		SA19･20		合計
	第2層	一括遺物 2層	第3層	畦2層	畦3層	
炉壁か	4			1	3	8
炉壁か羽口	1			1		2
羽　口		1	1			2
合　計	5	1	1	2	3	12

第27表　土壙SK01(倉庫跡)焼土出土状況

種類＼出土地	SA19		SA20		SA19･20				合計
	一括遺物 延長東側	一括遺物 2層	第2層	第3層B	畦一括遺物 2層	畦2層	畦3層	畦4層	
焼土	1	2	1	5	1	3	3	1	17
合計	1	2	1	5	1	3	3	1	17

第28表　土壙SK01(倉庫跡)炉壁・羽口観察一覧

挿図番号 図版番号 遺物番号	分類・名称・仮称	素地・混入物・色調・焼成	観　察　事　項　等	出土地点 出土層
第63図 図版46 1	Ⅰ類 炉壁か	胎土は細かい泥質。混入物として多量の籾殻や稲藁の痕跡がみられる。その他に僅かに微細な雲母片や細かい石英が含まれている。希に赤茶色の物質(7.7㎜前後で、焼土の塊とみられる)が観察できる。器色は橙白色。焼成は悪く脆い。	断面及び側面観が凸レンズが割れたような形状となる。上部及び上部側面が灰褐色に変色している状況から鍛冶関係の炉壁や羽口などの破片の可能性もあるが判然としない。外面は雑なナデ調整を主体とするが、ナデ調整が徹底せずに刷毛目様のナデと篦削りの消し忘れが確認できる。内面は器面の大半が剥離し、部分的に篦削りやナデ調整が観察できる。サイズは縦軸8.9㎝、横軸17.5㎝、厚さ2.1～4.6㎝、重さ375.8gを測った。	SA19･20 畦3層
〃 〃 2	Ⅰ類 炉壁か	〃　。　〃　。　〃 。赤茶色の物質は確認できない。器色は橙白色。焼成は悪く脆い。	上記、1と同質の素材で、同一個体の可能性がある。縦断面が凸レンズが割れたような形状となる。内外面はナデで調整されているが、外面は内面より雑な指ナデを施している。サイズは縦軸4.6㎝、横軸3.4㎝、厚さ0.8～2.0㎝、重さ21.7gを測った。	SA19 第2層
〃 〃 3	Ⅰ類 炉壁か	〃　。混入物として多量の籾殻や稲藁の痕跡がみられる。僅かではあるが微細な雲母片や粗い石英が含まれている。器色は外面が暗褐色、内面は茶褐色。焼成は悪く脆い。	横断面が凸レンズが割れたような形状となる。外面は火熱を受けて部分的にケロイド状となり、表面及び側面の破損面に青銅製品などの溶解物が付着している。内面は器面の保持が悪く、判然としないがナデ調整が考えられる。サイズは縦軸3.7㎝、横軸4.8㎝、厚さ1.1～2.3㎝、重さ21.3g。	SA19 第2層
〃 〃 4	Ⅰ類 炉壁か	〃　。　〃　。微細な雲母片や粗密な石英、赤茶色の物質が少量ながら観察できる。器色は外面が橙白色、内面は暗茶色。焼成は悪く脆い。	〃　。内外面ともナデ調整である。内面は外面よりナデが丁寧に施されている。サイズは縦軸4.8㎝、横軸4.4㎝、厚さ1.3～2.7㎝、重さ43.7gを測った。	SA19 第2層
〃 〃 5	Ⅱ類 炉壁か 羽口	〃　。混入物として稲藁の痕跡、微細な雲母片、粗い石英及び赤茶色の物質が多量に観察できる。その他、マンガンノジュルの小さな塊(1㎝前後)が含まれている。器色は灰褐色。焼成は悪く脆い。	下面のみが本来の面であり、他は破損面である。下面は平坦面ではあるが器面の調整が雑であり、ナデと指圧痕がみられる。破損面の一部は火災による影響を受けてケロイド状となる。サイズは縦軸4.3㎝、横軸6.1㎝、厚さは破損のため不明。重さ60.2gを測った。	SA19 第2層
〃 〃 6	Ⅱ類 炉壁か 羽口	〃　。混入物として多量の籾殻や稲藁の痕跡がみられる。少量ながら微細な雲母片、粗密な石英、粗密な茶褐色の鉱物(マンガンノジュルの塊)などが含まれている。その他、巻貝の破片なども観察できる。器色は黄褐色。焼成は悪く脆い。	裏面が本来の面とみられる。正面は素材の継ぎ足し面からきれいに外れた面とみられる。裏面は平坦面であり、全体的に器面の保持が悪く、剥離する面が多く、残存する部分にはナデ調整が観察される。サイズは縦軸7.1㎝、横軸3.7㎝、厚さは破損のため不明。重さ43.6gを測った。	SA19･20 畦2層
〃 〃 7	Ⅲ類 羽口か	細粒砂岩製(俗称:ニービ)。	円筒形の羽口とみられるが風道と木呂が破損しているため、判然としない。推算された直径は11㎝であった。表裏面及び外面にガラス製品が溶けて付着し、ガラス質鉄滓のような状況にある。重さ55.3gを測った。	SA20 第3層



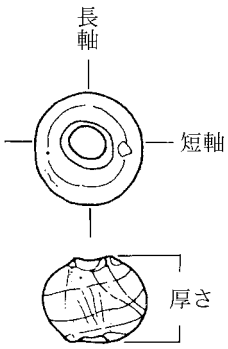
第63図　土壙SK01（倉庫跡）
炉壁、羽口

19. ガラス玉（第65図A１～第65図B52）・（図版47－１～図版48－52）

京の内土壙SK01（倉庫跡）から出土したガラス玉（水晶を含む）の分類は、第10表の分類概念に準じて実施した。但し、第35図68・69（ガラス玉の塊）２点、第65図48～51（ガラス玉の塊）の４点、第65図52（勾玉）の１点を除く。倉庫跡出土のガラス玉（水晶を含む）795点については、ガラス玉の色別（第29表a・b）、分類（Ⅰ類～Ⅳ類まで）毎の直径と重量（第30表a・b）、各類単位での直径と重量（Ⅰ類：第31表a・b、Ⅱ類：第32表a・b、Ⅲ類・Ⅳ類：第33表a・b、）について計測をおこない、直径と重量の相関関係について表（第30表～第33表）に整理した。計測部位は第64図によるものである。

ガラス玉（水晶を含む）795点の中から良好な資料や特異な資料などについては、第65図A・Bに47点を図化した。また、図化を省略した505点については、図版１～４及び計測一覧（第35表①～④）に呈示した。ガラス玉（水晶を含む）全体の出土量は図化を省略した資料を含めると1,300点（第29表aの795点と図化省略の505点の総計より）となる。その他に火災による火熱を受けて湯玉状に再凝固した玉の滓については、図版５に掲載した。

京の内倉庫跡出土のガラス玉（水晶を含む）の色合いで、最も多い色合いは青色系統の玉が全体の67％を占めている。次いで白濁色の26％であった。Ⅰ類～Ⅳ類までの玉の直径と重量については、計測の対象となった619点の内で、直径が3.1㎜以上～3.9㎜以下の範囲内に集中し、全体の64.1％を占めている。重量においては、0.02ｇ以上～0.06g以下に集中（85％を占める）している。以上のようなことから京の内倉庫跡から出土したガラス玉は、小型の玉が多く、青色系統の玉が目立っていることを窺い知ることができた。その他に水晶（第65図２・４～９）の７点を除く、788点のガラス玉の製法について述べると、第65図A34・同図B37・47、の３点と不明の資料を除くと、概ね巻き付け技法で製作されている。除外された３点の内、第65図A34・同図B37（図版８a・ｂ）の２点は溶けたガラス端を合わせて製作された玉で、特異な例である。その他、同図B47の１点は孔の開いていないガラス玉であり、金属製品などに嵌め込んだ象眼用のガラス玉などが考えられる。

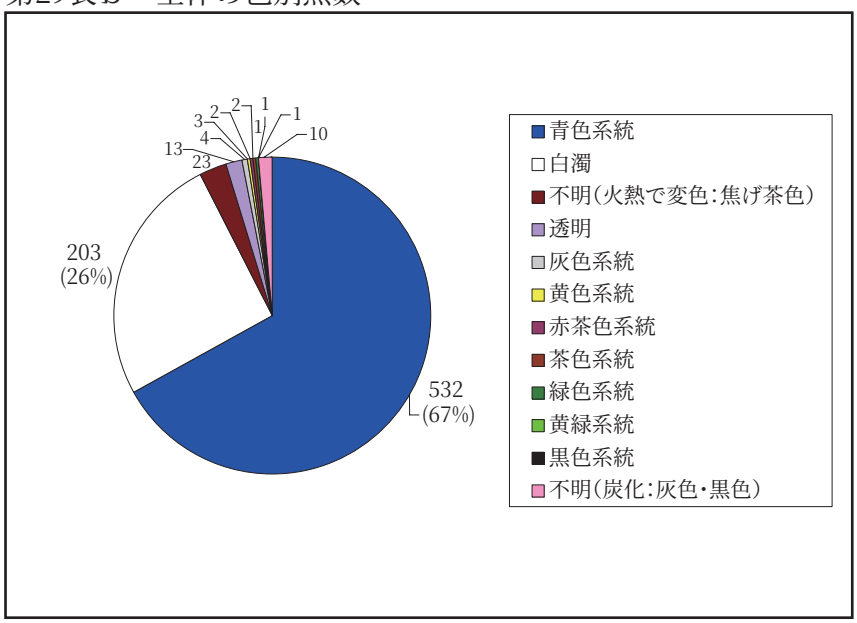


第64図　ガラス玉の計測図

第29表ａ　全体の色別点数

青色系統	532
白濁	203
不明(火熱で変色:焦げ茶色)	23
透明	13
灰色系統	4
黄色系統	3
赤茶色系統	2
茶色系統	2
緑色系統	1
黄緑系統	1
黒色系統	1
不明(炭化:灰色・黒色)	10
合　計	795

第29表ｂ　全体の色別点数

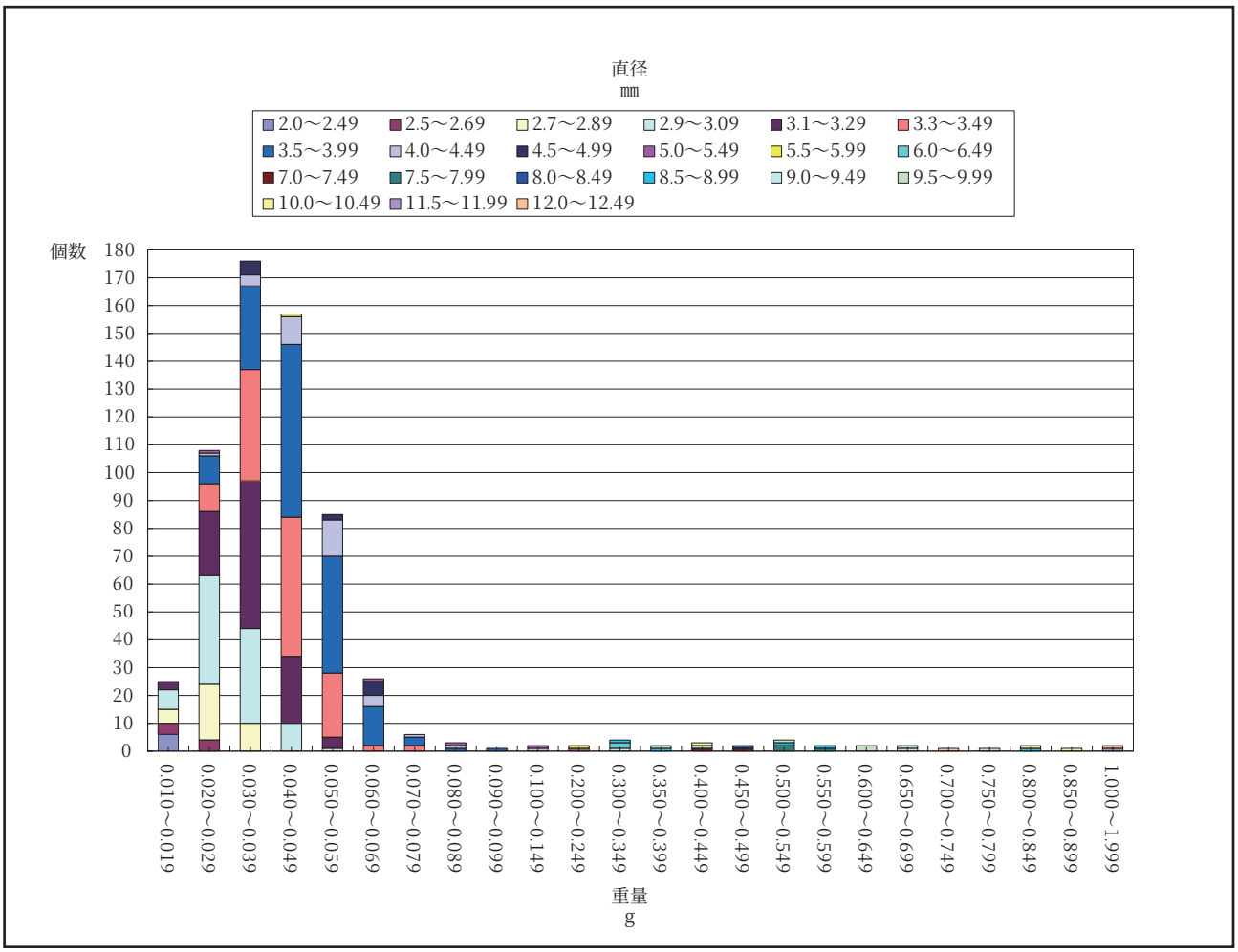


注１. 玉の塊を含む全体の数
注２. 火災による火熱で癒着した玉
資料で実測図を試みた資料は1点づつ数えた。但し、玉の塊を除く、写真のみ掲載した資料は、2～3個癒着したものを1点と数えた。

第30表ａ　Ⅰ類～Ⅳ類までの直径と重量

直径(㎜) ＼ 重量(g)	0.010～0.019	0.020～0.029	0.030～0.039	0.040～0.049	0.050～0.059	0.060～0.069	0.070～0.079	0.080～0.089	0.090～0.099	0.100～0.149	0.200～0.249	0.300～0.349	0.350～0.399	0.400～0.449	0.450～0.499	0.500～0.549	0.550～0.599	0.600～0.649	0.650～0.699	0.700～0.749	0.750～0.799	0.800～0.849	0.850～0.899	1.000～1.999	合計
2.0～2.49	6																								6
2.5～2.69	4	4																							8
2.7～2.89	5	20	10																						35
2.9～3.09	7	39	34	10	1							1													92
3.1～3.29	3	23	53	24	4																				107
3.3～3.49		10	40	50	23	2	2																		127
3.5～3.99		10	30	62	42	14	3	1	1																163
4.0～4.49		1	4	10	13	4	1	1		1															35
4.5～4.99			5		2	5																			12
5.0～5.49		1				1		1		1	1														5
5.5～5.99				1							1														2
6.0～6.49												2													2
7.0～7.49														1	1										2
7.5～7.99																2	1								3
8.0～8.49															1										1
8.5～8.99												1	1			1	1					1			5
9.0～9.49																			1						1
9.5～9.99													1	1		1		2	1		1				7
10.0～10.49														1								1	1		3
11.5～11.99																								1	1
12.0～12.49																				1				1	2
計	25	108	176	157	85	26	6	3	1	2	2	4	2	3	2	4	2	2	2	1	1	2	1	2	619

注　玉の塊を除く

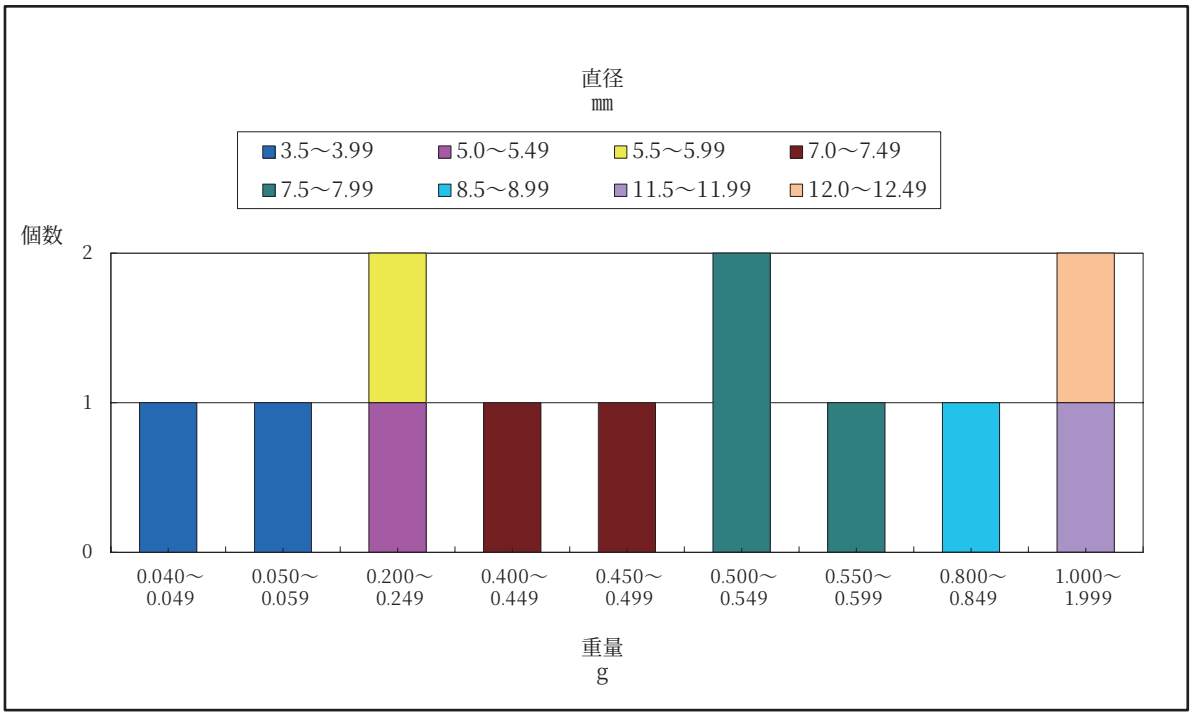


第30表ｂ　Ⅰ類～Ⅳ類までの直径と重量

第31表ａ　Ⅰ類の直径と重量

直径(㎜) ＼ 重量(g)	0.040～0.049	0.050～0.059	0.200～0.249	0.400～0.449	0.450～0.499	0.500～0.549	0.550～0.599	0.800～0.849	1.000～1.999	合計
3.5～3.99	1	1								2
5.0～5.49			1							1
5.5～5.99			1							1
7.0～7.49				1	1					2
7.5～7.99						2	1			3
8.5～8.99								1		1
11.5～11.99									1	1
12.0～12.49									1	1
合　計	1	1	2	1	1	2	1	1	2	12

注　玉の塊を除く

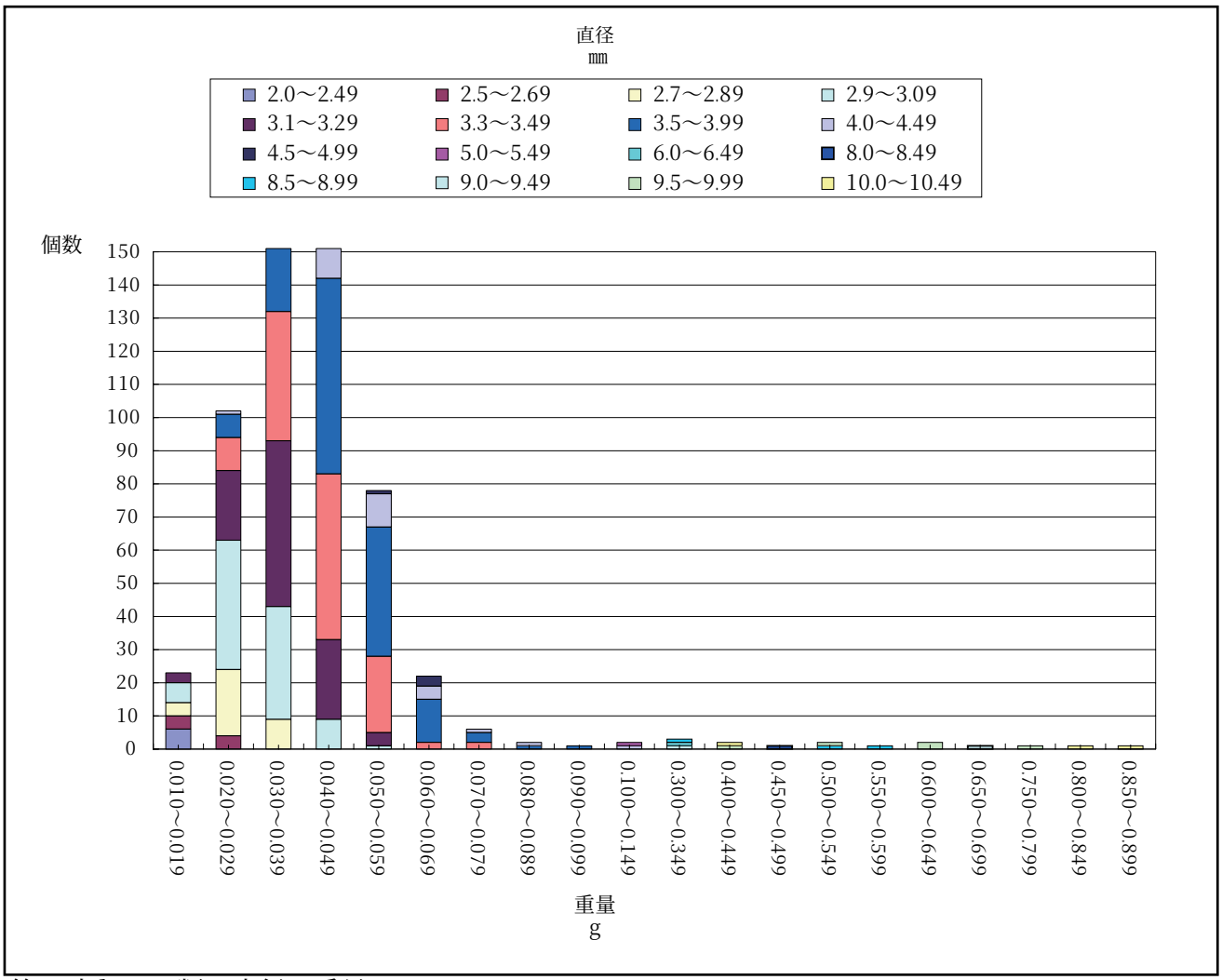


第31表ｂ　Ⅰ類の直径と重量

第32表ａ　Ⅱ類の直径と重量

直径(㎜) ＼ 重量(g)	0.010～0.019	0.020～0.029	0.030～0.039	0.040～0.049	0.050～0.059	0.060～0.069	0.070～0.079	0.080～0.089	0.090～0.099	0.100～0.149	0.300～0.349	0.400～0.449	0.450～0.499	0.500～0.549	0.550～0.599	0.600～0.649	0.650～0.699	0.750～0.799	0.800～0.849	0.850～0.899	合計
2.0～2.49	6																				6
2.5～2.69	4	4																			8
2.7～2.89	4	20	9																		33
2.9～3.09	6	39	34	9	1						1										90
3.1～3.29	3	21	50	24	4																102
3.3～3.49		10	39	50	23	2	2														126
3.5～3.99		7	27	59	39	13	3	1	1												150
4.0～4.49		1	4	9	10	4	1	1		1											31
4.5～4.99			3		1	3															7
5.0～5.49										1											1
6.0～6.49											1										1
8.0～8.49													1								1
8.5～8.99											1			1	1						3
9.0～9.49																	1				1
9.5～9.99												1		1		2		1			5
10.0～10.49												1							1	1	3
合　計	23	102	166	151	78	22	6	2	1	2	3	2	1	2	1	2	1	1	1	1	568

注　玉の塊を除く

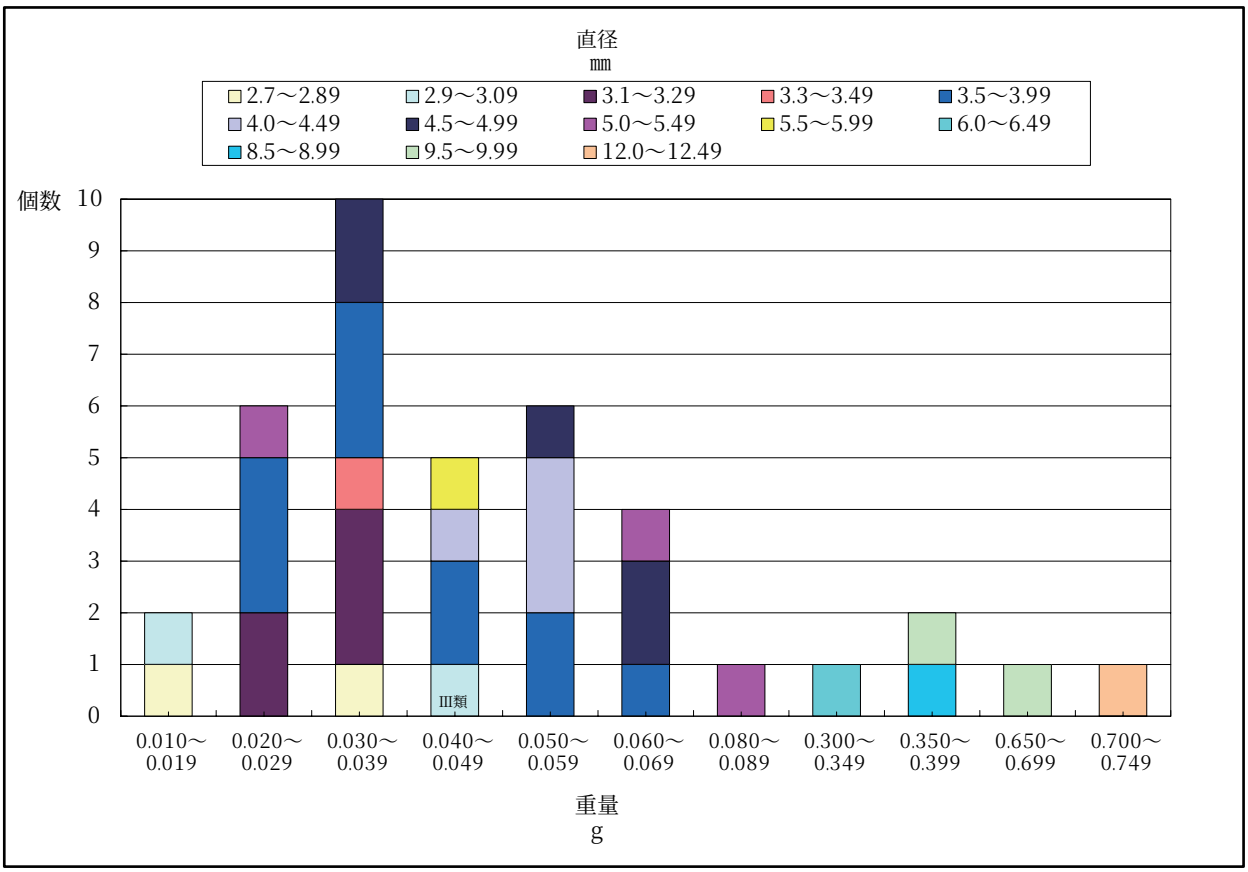


第32表ｂ　Ⅱ類の直径と重量

第33表ａ　Ⅲ類・Ⅳ類の直径と重量

重量(g) / 直径(㎜)	0.010～0.019	0.020～0.029	0.030～0.039	0.040～0.049	0.050～0.059	0.060～0.069	0.080～0.089	0.300～0.349	0.350～0.399	0.650～0.699	0.700～0.749	合計
2.7～2.89	1		1									2
2.9～3.09	1			*1								2
3.1～3.29		2	3									5
3.3～3.49			1									1
3.5～3.99		3	3	2	2	1						11
4.0～4.49				1	3							4
4.5～4.99			2		1	2						5
5.0～5.49		1				1	1					3
5.5～5.99				1								1
6.0～6.49								1				1
8.5～8.99									1			1
9.5～9.99									1	1		2
12.0～12.49											1	1
合　計	2	6	10	5	6	4	1	1	2	1	1	39

注　「*」:Ⅲ類、玉の塊を除く



第33表ｂ　Ⅲ類・Ⅳ類の直径と重量

第34表①　国指定重要文化財（保存処理未）ガラス玉観察一覧（計測部位は第64図参照）

挿図番号 図版番号 遺物番号	形状分類	色調	素材	残存状況	観察事項	出土地点 出土層
第65図A 図版47 1	Ⅰ類	白濁	ガラス	脆い	火災による火熱の影響で、表面がケロイド状となりざらついている。色調は本来の色合いを失い灰褐色を呈する。部分的に煤けている。上位の孔は使用時に生じた細かい剥離痕が若干観察できる。下面の破損部分の観察から巻き付け技法であることが確認できる。サイズ：長軸11.90㎜、短軸11.79㎜、厚さ9.0㎜、重量1.45g。孔径：最大2.64㎜、最小2.56㎜。製法：巻き付け。	SA20 第2層
〃 〃 2		透明	水晶	良好	火災による火熱の影響で、表面が部分的にケロイド状となり、微細な気泡痕もみられる。全体的に罅割れが入っている。色調は本来、無色透明であるが、火熱の影響を受けて半分程度透明感を失い白濁（微細な気泡痕の影響で白濁）している。孔の周辺は使用時に生じたとみられる微細な剥離面が集中する。サイズ：長軸8.57㎜、短軸8.55㎜、厚さ8.1㎜、重量0.80g。孔径：最大1.63㎜、最小1.47㎜。製法：研磨。	SA19・20 畦2層
〃 〃 3		茶色	ガラス	脆い	火災による火熱の影響でアバタ状となる部分もみられるが、表面から内部までは微細な罅割れが全体的に入り、非常に脆い状態にある。本来の色調は不明であるが、現状は茶白色と茶褐色が上部と下部の二つに分かれるような状態にある。上面の孔は真新しい大きな剥離と使用時の微細な剥離痕が観られる。上位と下位の孔の周辺にみられる微細な剥離の縁沿いや剥離面の一部は使用によって摩耗する。サイズ：長軸7.77㎜、短軸7.73㎜、厚さ6.1㎜、重量0.51g。孔径：最大1.84㎜、最小1.74㎜。製法：不明。	SA19・20 畦床面 清掃
〃 〃 4		透明	水晶	良好	火災による火熱の影響で、表面が微細なアバタ状となっている。表面の一部ではケロイド状となり、微細な気泡痕や微細な亀裂もみられる。ケロイド状となる部分は白く変色し、煤が付着しているようである。上位と下位の孔の周辺は使用時に生じたとみられる微細な剥離や大きな剥離がみられ、この部分まで微細な気泡が観察できる。孔の周辺に観られる剥離の縁沿いは使用によって摩耗する。サイズ：長軸7.68㎜、短軸7.56㎜、厚さ6.15㎜、重量0.50g。孔径：最大1.80㎜、最小1.75㎜。製法：研磨。	SA28 灰黄色 土層
〃 〃 5		透明	水晶	良好	〃　。〃　。〃　。側面の一部は火熱の影響で変形し、罅割れが発生している。上位と下位の孔の周辺は使用時に生じたとみられる微細な剥離と微細な気泡が観察できる。孔の周辺に観られる剥離の縁沿いや剥離面は使用によって摩耗する。サイズ：長軸7.43㎜、短軸7.32㎜、厚さ5.86㎜、重量0.44g。孔径：最大1.74㎜、最小1.56㎜。製法：研磨。	SA20 第2層
〃 〃 6		透明	水晶	脆い	〃　。〃　。〃　。〃　。側面の一部は火熱の影響で変形、罅割れ、剥離がみられる。表面には鉄の錆汁が付着している。上位と下位の孔の周辺は使用時に生じたとみられる微細な剥離の縁沿いと剥離面は使用によって摩耗する。孔内側の剥離した縁沿いは紐ズレによって潰れている。サイズ：長軸7.36㎜、短軸7.25㎜、厚さ7.18㎜、重量0.47g。孔径：最大1.87㎜、最小1.63㎜。製法：研磨。	SA19・20 畦覆土
〃 〃 7		透明	水晶	脆い	〃　。〃　。〃　。〃　。表面には白色の溶けたガラスが付着している。この溶けた白色ガラスには微細な繊維とみられる物が凝固の際に取り込まれている。上位と下位の孔の周辺は使用時に生じたとみられる微細な剥離があり、微細な気泡が観察できる。孔の周辺に観られる剥離の縁沿いや剥離面は使用によって摩耗する。孔内側の剥離痕の縁辺部も紐ズレによって潰れている。サイズ：長軸7.88㎜、短軸6.51㎜、厚さ7.14㎜、重量0.58g。孔径：最大1.48㎜、最小0.64㎜。製法：研磨。	SA19・20 畦2層
〃 〃 8	Ⅳ類	透明	水晶	脆い	火災による火熱で割れた玉で、破損面に白色の溶けた素材が付着している。火熱の影響で部分的にケロイド状となり、微細な気泡痕や微細な剥離がみられる。このケロイド状となる部分は白色や黒色に変色している。上位の孔の周辺には微細な剥離が観察できるが、剥離の縁辺部は角が潰れていないことから玉が破損した際に新たな剥離を発生させた可能性が高い。サイズ：長軸ー、短軸ー、厚さー、重量0.29g。孔径：最大ー、最小ー。製法：研磨。	SA19・20 畦11層
〃 〃 9		透明	水晶	脆い	火災による火熱で割れた玉の破片で、火熱の影響で部分的にケロイド状となり、微細な気泡痕がみられる。このケロイド状となる部分は変色して黒ずんでいる。上位の孔の周辺には微細な剥離がある。剥離の縁辺部と孔内側の剥離痕の縁辺部は紐ズレによって角が潰れている。素材や質感などの諸特徴から上記、図8と同一個体の可能性が高い。サイズ：長軸ー、短軸ー、厚さー、重量0.14g孔径：最大ー、最小ー。製法：研磨。	SA19・20 畦2層
〃 〃 10	Ⅰ類	白濁	ガラス	脆い	火災による火熱の影響で、表面がケロイド状となりざらついている。色調は本来の色合いを失い灰褐色を呈する。部分的に煤けている。上位の孔の周辺は小規模な面を形成する。孔の周辺は半分程度垂直に孔が開いていて、孔の周辺の剥離痕は完全に紐ズレで潰れて摩滅している。下位の孔は周辺が大きく破損し、新鮮は剥離面となっている。サイズ：長軸12.43㎜、短軸12.26㎜、厚さ9.25㎜、重量1.42g。孔径：最大2.82㎜、最小2.64㎜。製法：巻き付け。	SA20 第2層
〃 〃 11	Ⅱ類	青色	ガラス	脆い	火災による火熱の影響で、形状が歪となる。表面がケロイド状なりざらつき、微細な気泡痕や部分的な空洞が2ケ所（サイズ：直径0.2～0.4㎜、直径0.7～1.1㎜）みられる。上下の孔の周辺は微細な剥離痕が紐ズレで潰れて白く変色する。サイズ：長軸6.10㎜、短軸5.37㎜、厚さ5.51㎜、重量0.31g。孔径：最大0.94㎜、最小0.86㎜。製法：巻き付け。	SA19・20 畦4層
〃 〃 12		透明	ガラス	良好	表面観察からは火災による火熱の影響は極めて微弱で、火熱を受けた部分は半分程度が白濁する。表面には製作時に溶けて流れた部分があり、その先端は滴状に凝固している。上下の孔の周辺は磨面様となり、孔の周辺の微細な剥離痕の縁辺部は角が潰れて白く変色し目立っている。サイズ：長軸10.22㎜、短軸10.22㎜、厚さ6.75㎜、重量0.87g。孔径：最大4.09㎜、最小3.56㎜。製法：巻き付け。	SA20 第3層
〃 〃 13		透明	ガラス	良好	火災による火熱の影響で半分程度が白濁する。白濁した部分から表面が薄く剥離し、剥離した部分は透明となる。白濁した部分の表面は火熱の影響を受けてケロイド状となり、部分的に虫食い様に溶けて、罅割れも発生している。その他、表面にはガラスが溶け流れて、滴となって痕跡が窺える。この痕跡は製作時によるものとみられる。上下の孔の周辺は磨面様で微細な剥離痕があり、その縁辺部は角が潰れて白く変色し目立っている。サイズ：長軸8.93㎜、短軸8.72㎜、厚さ6.18㎜、重量0.57g。孔径：最大2.92㎜、最小2.68㎜。製法：巻き付け。	SA19 一括遺物 4層
〃 〃 14		青色	ガラス	良好	〃　。白濁部分はケロイド状となり、微細に薄く剥離している。剥離した部分は白く変色している。上下の孔の周辺は剥離痕があり、その縁辺部は角が潰れて白く変色する。サイズ：長軸9.83㎜、短軸9.68㎜、厚さ6.54㎜、重量0.77g。孔径：最大3.52㎜、最小3.30㎜。製法：巻き付け。	SA20 第2層
〃 〃 15		透明	ガラス	良好	透明であった玉の表面が火災による火熱の影響で半分程度が白濁する。白濁した部分から表面が薄く剥離し、剥離した部分が透明となるが、透明な部分もケロイド状となる。白濁した部分の表面は火熱の影響を受けて焼け脹れてケロイド状となり、部分的に虫食い様に溶けている。上位の孔の周辺は磨面様となる。孔の周辺の微細な剥離痕の縁辺部は角が潰れて白く変色している。下位の孔の周辺は破損時の剥離が目立っている。サイズ：長軸9.34㎜、短軸8.75㎜、厚さ6.86㎜、重量0.65g。孔径：最大3.13㎜、最小2.86㎜。製法：巻き付け。	SA19 一括遺物 4層
〃 〃 16		青色	ガラス	良好	青色の玉が火災による火熱の影響で全体的に白濁する。白濁した部分は表面がケロイド状となり、微細な亀裂や焼け脹れ及び微細な気泡痕が観察される。白濁部分の表面が薄く剥離し、剥離した部分は青白色を帯びているところもある。青白色の部分もケロイド状となる。上位の孔の周辺は剥離痕の大半は潰れて光沢があり滑らかである。下位の孔の周辺は破損時の剥離が目立っている。サイズ：長軸8.20㎜、短軸8.17㎜、厚さ5.48㎜、重量0.46g。孔径：最大2.83㎜、最小2.68㎜。製法：巻き付け。	SA19 第2層
〃 〃 17	Ⅳ類	白濁	ガラス	良好	火災による火熱の影響を強く受けて歪に変形している。白濁は玉の外面から内部まで及んでいる。火熱で表面は溶けて歪となる。残存する表面は火熱で爛れ灰褐色となり、微細な気泡痕も観察できる。孔も変形し歪な三角形状となっている。上位の孔の周辺は破損時の剥離痕や使用時の剥離痕が混在して判然としない。上位と下位の孔の周辺は破損時の剥離が目立っている。サイズ：長軸9.98㎜、短軸7.59㎜、厚さ6.22㎜、重量0.38g。孔径：最大2.23㎜、最小1.24㎜。製法：巻き付け。	SA19 東側 ﾄﾚﾝﾁ 栗石直下

第34表②　国指定重要文化財(保存処理未)ガラス玉観察一覧(計測部位は第64図参照)

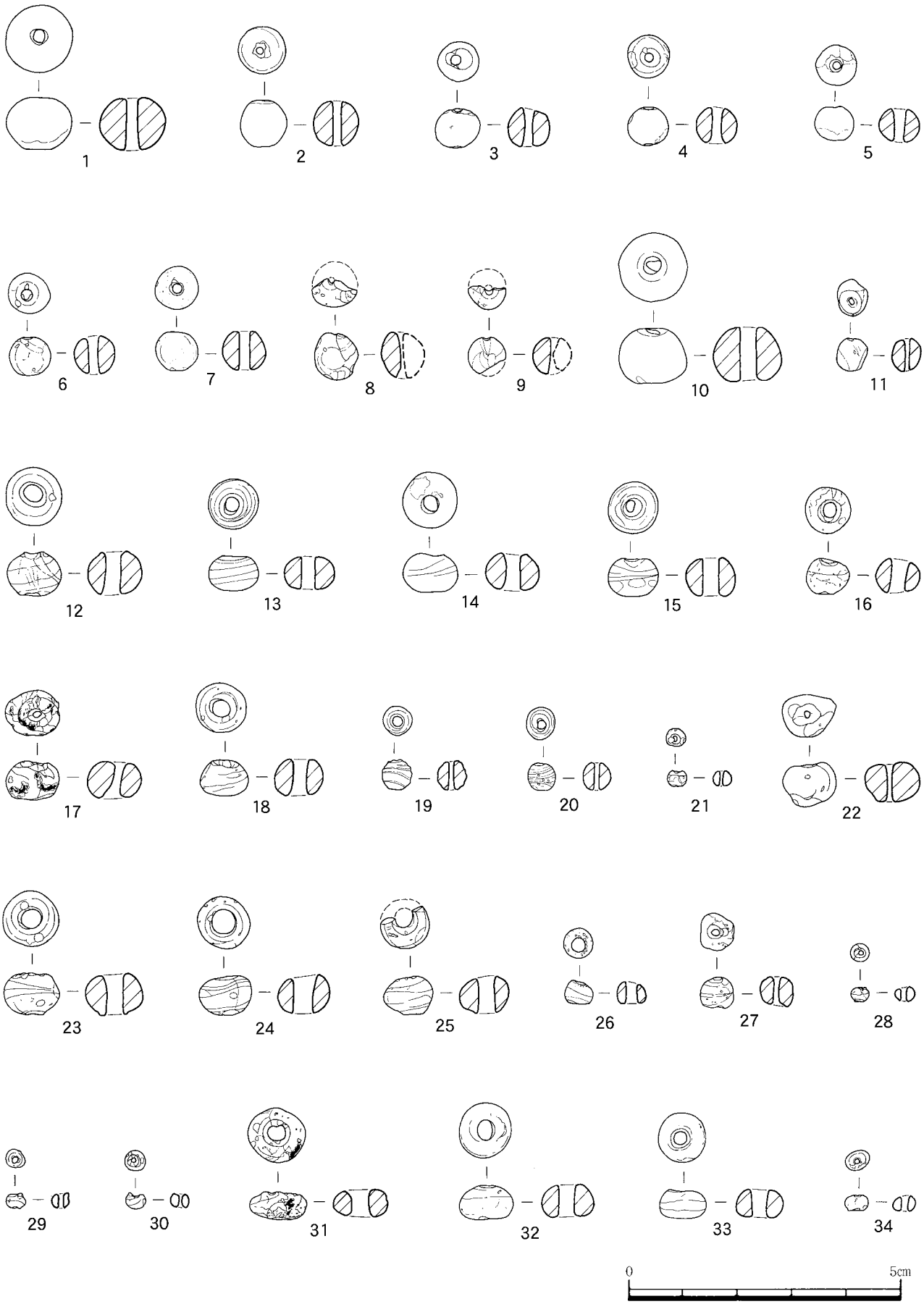
挿図番号 図版番号 遺物番号	形状分類	色調	素材	残存状況	観察事項	出土地点 出土層
第65図A 図版47 18	Ⅱ類	黄色	ガラス	良好	火災による火熱の影響を強く受けて歪に変形している。白濁は玉の外面から内部まで及んでいる。火熱で表面は溶けて歪となる。残存する表面は火熱で爛れ灰褐色となり、微細な気泡痕も観察できる。上位の孔の周辺は破損時の剥離痕や使用時の剥離痕が混在して判然としない。サイズ:長軸8.91㎜、短軸8.88㎜、厚さ5.54㎜、重量0.31g。孔径:最大3.23㎜、最小3.22㎜。製法:巻き付け。	SA28 灰黄色 土層
〃 〃 19	Ⅰ類	白濁	ガラス	良好	玉の表面は火災により大部分が消失し、内部の面が露出した状態となっている。残存する表面は白色を呈している。露出した面はガラスを巻き付けた際の溝が明瞭となる。露出面の表面は火熱の影響を受けてケロイド状となり、微細な気泡痕が多く観察できる。上位と下位の孔の周辺は素材の溶解により判然としない。サイズ:長軸5.46㎜、短軸5.35㎜、厚さ5.35㎜、重量0.21g。孔径:最大1.21㎜、最小0.94㎜。製法:巻き付け。	SA20 一括遺物2 層
〃 〃 20		茶黒色	ガラス	良好	玉の表面は火災により大部分が消失し、内部の茶黒色が面となって露出する。残存する表面は白色を呈している。露出した面はガラスを巻き付けた際の溝が明瞭となる。露出面の表面は火熱の影響を受けて細かい気泡痕が多く観察できる。上位と下位の孔の周辺は気泡痕や素材の溶解により判然としない。サイズ:長軸5.53㎜、短軸5.44㎜、厚さ4.59㎜、重量0.23g。孔径:最大1.47㎜、最小1.40㎜。製法:巻き付け。	SA19 一括遺物4 層
〃 〃 21	Ⅱ類	青色	ガラス	良好	玉の表面は火災により大部分が消失し、内部の淡青色が面となって露出する。残存する表面は白色を呈している。露出した面はガラスを巻き付けた際の細かい溝が確認できる。露出面の表面は火熱の影響を受けて微細な気泡痕が集中的に観察できる。上位と下位の孔の周辺は丸味を帯びていて、部分的に微細な剥離が観察される。上下には巻き付け成形時のガラスを切り離した際の痕跡が歪な突起状となる。サイズ:長軸3.60㎜、短軸3.45㎜、厚さ2.65㎜、重量0.06g。孔径:最大0.79㎜、最小0.67㎜。製法:巻き付け。	SA19・20 畦4層
〃 〃 22	Ⅳ類	透明	ガラス	脆い	玉の表面は火災により大部分が消失し、変形して歪な形状となる。内部の白色が面となって露出する。露出した面はガラスを巻き付けた際の微細な溝が確認できる。露出面の表面は火熱の影響を受けて微細な気泡痕が僅かに観察できる。上位と下位の孔の周辺は破損により不明。サイズ:長軸9.58㎜、短軸7.37㎜、厚さ6.36㎜、重量0.66g。孔径:最大1.23㎜、最小1.21㎜。製法:巻き付け。	SA19 第4層
〃 〃 23	Ⅱ類	透明	ガラス	良好	火災による火熱を受けて表面が部分的に白色となる面が散見される。この白色の面が本来の表面とみられる。露出した面はガラスを巻き付けた際の微細な溝が確認できる。露出面の表面は火熱の影響を受けて部分的に渦巻き様の罅として残っている部分もみられる。大きな気泡痕(直径1.8㎜、直径2.0㎜の二箇所)が観察できる。上位の孔の周辺の剥離痕は摩滅している。下位の孔の周辺の剥離痕は火熱の影響を受けて角が溶けて丸味を帯びている。サイズ:長軸10.07㎜、短軸10.05㎜、厚さ6.67㎜、重量0.80g。孔径:最大3.83㎜、最小3.35㎜。製法:巻き付け。	SA20 一括遺物1 層
〃 〃 24		透明	ガラス	良好	玉の表面は火災により大部分が消失し、内部の白濁した面が露出する。露出した面はガラスを巻き付けた際の微細な溝が確認できる。露出面の表面は火熱の影響を受けて微細な気泡痕が僅かに観察できる。表面の白濁した面にも微細な気泡痕が観察できる。上位の孔の周辺にも微細な気泡痕が多く観察され、微細な気泡痕は剥離面にも現れている。剥離面の縁も溶けている。下位の孔の縁辺部は角がなく、巻き付け成形時のままで丸味をもっている。サイズ:長軸9.58㎜、短軸9.29㎜、厚さ6.01㎜、重量0.64g。孔径:最大3.86㎜、最小3.74㎜。製法:巻き付け。	SA19 東側 ﾄﾚﾝﾁ 栗石直下
〃 〃 25	Ⅳ類	黄色	ガラス	脆い	玉が1/4程度割れた状態で火災による火熱を受けた為、破損面が溶けて丸味を帯びている。表面は火熱を受けてケロイド状となり、微細な気泡痕が観察できる。微細な気泡痕は破損した面でも確認できる。表面の白濁した面にも微細な気泡痕が観察できる。上位の孔の縁は角が無く丸味を保持し、僅かにみられる微細な剥離も火熱の影響を受けて角がない。下位の孔の周辺は平坦な面を持ち孔の縁沿いでは剥離面は確認できない。サイズ:長軸8.89㎜、短軸一、厚さ5.76㎜、重量0.37ｇ。孔径:最大3.47㎜、最小一。製法:巻き付け。	SA19 一括遺物3 層
〃 〃 26	Ⅱ類	青色	ガラス	良好	玉の表面は火災により消失し、内部の面が露出する。露出した面はガラスを巻き付けた際の微細な溝が不鮮明ながら確認できる。全面に火熱の影響を受けて粗密な気泡痕が観察できる。粗い気泡痕は最大で直径1.2㎜を測る。上位と下位の孔周辺にも細な気泡痕が集中し、微細な剥離面は確認できない。サイズ:長軸5.38㎜、短軸5.36㎜、厚さ4.26㎜、重量0.14g。孔径:最大2.57㎜、最小2.45㎜。製法:巻き付け。	SA20 第3層
〃 〃 27	Ⅳ類	青色	ガラス	脆い	玉の表面は火災により大部分が消失し、変形して歪な形状となる。内部の青白色が面となって露出する。露出した面はガラスを巻き付けた際の微細な溝が確認できる。露出面の表面は火熱の影響を受けて微細な気泡痕が全面に観察できる。上位と下位の孔の周辺にも火熱の影響で微細な気泡痕があり、孔の縁沿いが溶けて丸味を帯びている。上位の孔の周辺は小規模な平坦となっている。下位の孔は半分以上が溶けている。サイズ:長軸6.11㎜、短軸5.80㎜、厚さ5.01㎜、重量0.32g。孔径:最大1.61㎜、最小1.42㎜。製法:巻き付け。	SA19・20 畦4層
〃 〃 28	Ⅱ類	青色	ガラス	良好	玉の表面は火災により大部分が消失し、内部の淡青色が面となって露出する。残存する表面は白く変色する。露出した面はガラスを巻き付けた際の細かい溝が僅かに確認できる。露出面の表面は火熱の影響を受けて微細な気泡痕が半分程度観察できる。上位の孔周辺は大きな剥離と火熱で溶けた部分がみられる。下位の孔の周辺は外周が火熱を受けて丸味を帯びている。上位と下位の孔はガラスを切り離した際の痕跡が歪な突起状となる。サイズ:長軸3.42㎜、短軸3.27㎜、厚さ2.02㎜、重量0.04g。孔径:最大0.80㎜、最小0.72㎜。製法:巻き付け。	SA19・20 畦2層
〃 〃 29		青色	ガラス	良好	表面が玉製作時の面なのか、火災によって面が消失したのかどうかについては判然としないが、淡青色の面には微細な気泡痕やケロイド状(製作時か二次的火熱によるものか区別ができない)となる部分が全面に広がっている。ガラスを巻き付けた際の細かい溝が確認でき、この溝に埋まるような形で微細な気泡痕が観察できる。上位と下位の孔の縁辺部は製作時の丸味を保持しているが、下位の孔の周辺は半分程度破損し、剥離面となっている。上位はガラスを切り離した際の痕跡が歪な突起状となる。サイズ:長軸3.29㎜、短軸3.25㎜、厚さ2.202㎜、重量0.04g。孔径:最大0.95㎜、最小0.73㎜。製法:巻き付け。	SA19・20 畦4層
〃 〃 30		青色	ガラス	良好	玉の表面は火災により大部分が消失し、内部の青白色が面となって露出する。残存する表面は火熱を受けて白く変色し、疎に微細な剥離がみられる。露出した面はガラスを巻き付けた際の微細な溝が確認できる。露出面の表面は火熱の影響を受けてざらついている。微細な気泡痕は部分的に観察できる。上位と下位の孔の周辺にも火熱の影響で微細な気泡痕があり、白く変色している。上位と下位の孔の縁辺部は製作時の丸味を保持している。孔の平面観は歪な「↓」状で、孔の内部が製作時に発生した縦罅が2・3本入っている。サイズ:長軸3.60㎜、短軸3.44㎜、厚さ2.15㎜、重量0.05g。孔径:最大0.58㎜、最小0.05㎜。製法:巻き付け。	SA19・20 畦4層
〃 〃 31		白濁	ガラス	良好	火災による火熱の影響で、表面の大半が失われている。残存する表面はケロイド状となり灰褐色を帯びている。黒色の炭化物が付着。露出した面は部分的に焼け爛れて変形し、微細な気泡痕及び亀裂、そして剥離面が観察できる。この気泡痕は疎に全面にみられる。上位の孔の周辺は小規模な面となり、孔の周辺は半分程度垂直に孔が開いていて、残りの剥離痕は完全に火熱の影響で溶けている。下位の孔は周辺は成形時のままで丸味を帯びている。サイズ:長軸10.26㎜、短軸9.44㎜、厚さ4.48㎜、重量0.43g。孔径:最大3.63㎜、最小3.14㎜。製法:巻き付け。	SA19・20 畦床面 清掃
〃 〃 32		白濁	ガラス	良好	火災による火熱の影響で、表面の一部は破損している。表面は白濁し全体的に微細な亀裂やミミズが這ったような溶け方をしている部分もみられる。表面の一部は灰褐色を帯び炭化物が付着する。表面が剥離した面は透明感のない淡茶色となり、巻き付けの際の痕跡が鮮明に窺える。上位の孔の周辺は小規模な平坦面となるが、孔の縁辺部及び周辺は大部分が破損による剥離である。孔周辺の残存する縁辺部は丸味を帯びている。下位の孔の周辺も上位の孔と同様に小規模な平坦面となるが、孔縁辺部は破損し、剥離面となっている。サイズ:長軸9.84㎜、短軸9.57㎜、厚さ5.50㎜、重量0.54g。孔径:最大3 6.7㎜、最小3.29㎜。製法:巻き付け。	SA19・20 第4層

第34表③　国指定重要文化財(保存処理未)ガラス玉観察一覧(計測部位は第64図参照)

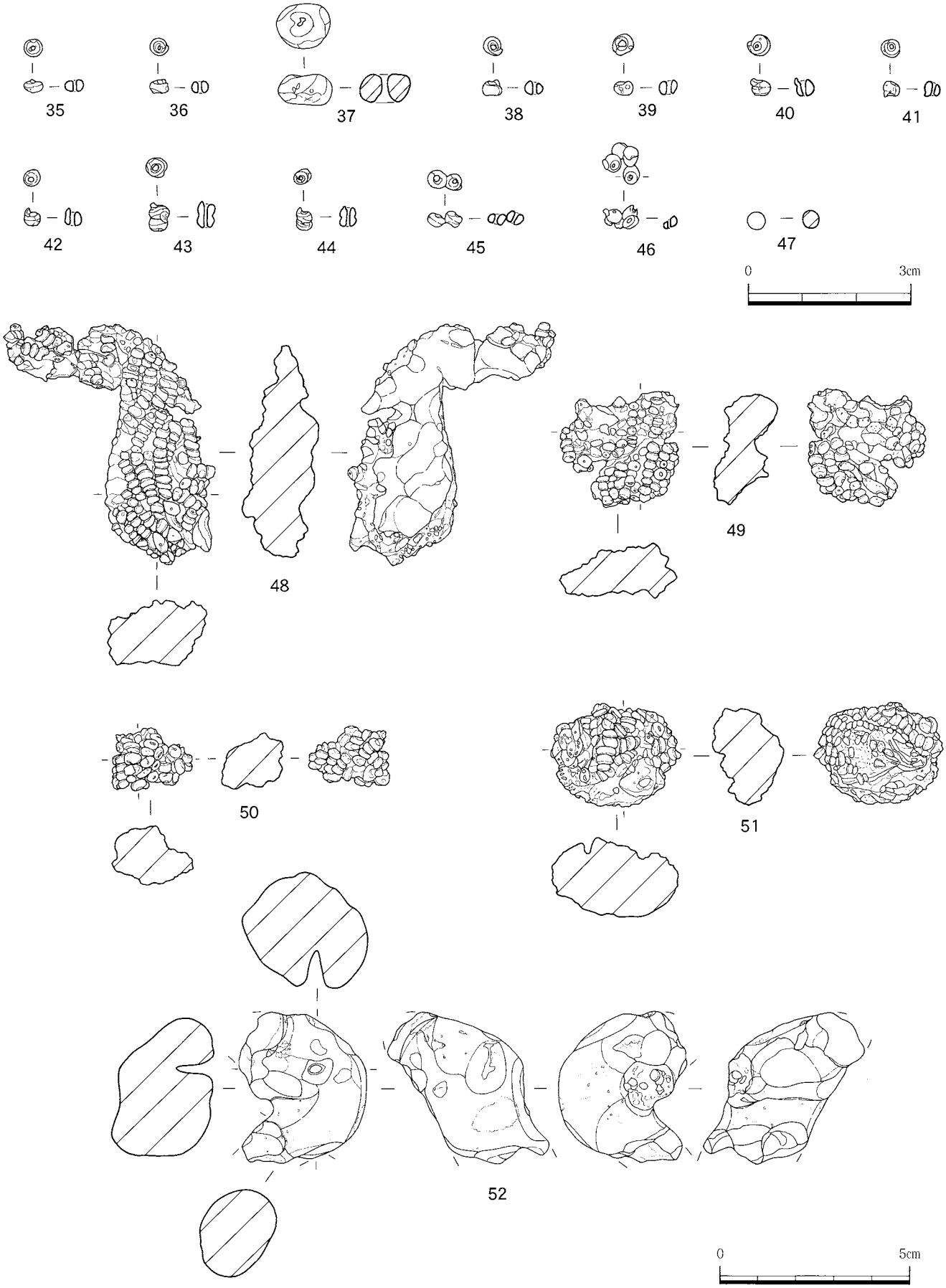
挿図番号 図版番号 遺物番号	形状分類	色調	素材	残存状況	観察事項	出土地点 出土層
第65図A 図版47 33		白濁	ガラス	良好	火災による火熱の影響で、表面の大半が消失している。僅かに残っている表面は黄白色に変色し、爛れている。表面に露出している面は白くなっていて火熱の影響を受けて全面に爛れや微細な気泡痕がみられる。この白色化した面の下に緑青色のガラス面が観察できる。上位の孔の縁辺部及び周辺は大部分が破損による剥離であり、残存する縁辺部は角がある。下位の孔の周辺は小規模な平坦面となるが、孔の縁辺部は大半が破損し、剥離面となっている。残存する縁辺部は丸味を帯ている。サイズ:長軸8.87㎜、短軸8.68㎜、厚さ5.02㎜、重量0.51g。孔径:最大2.78㎜、最小2.66㎜。製法:巻き付け。	SA20 第3層
〃 〃 34		黄色	ガラス	良好	表面観察から火災による火熱の影響は、軽微なものとみられる。光沢が残っていて僅かに火熱で溶けている部分が小規模な範囲で確認できる。微細な気泡痕は上面と下面の孔の周辺に集中する。気泡痕の一部は右下から左斜め上方向に並んだように観察される。また、ガラス内部にも数本筋が斜めに走っていることから巻き付け技法ではなく、溶けたガラスの端同士を合わせて製作されたものと現時点では判断される。上位及び下位の孔の縁辺部は丸味を帯びている。サイズ:長軸4.52㎜、短軸3.63㎜、厚さ2.37㎜、重量0.06g。孔径:最大1.33㎜、最小1.05㎜、製法:端合わせの技法。	SA19・20 畦2層
第65図B 図版48 35		青色	ガラス	良好	表面は火災の影響を受けて全体的にケロイド状となり粗細な気泡痕が部分的に観察できる。また、側面の一部は剥離が観察される。製作時のガラスを巻き付けた際の微細な溝は途切れながら観察でき、溝部分が白くなっている。粗い気泡痕は最大で直径0.5㎜を測る。上位と下位の孔の周辺にも微細な気泡痕が部分的に観察される。孔の縁辺部は上位と下位ともに製作時の丸味を保持しているが、ガラスを切り離した際の痕跡が歪な突起状となる。サイズ:長軸3.67㎜、短軸3.27、厚さ1.96㎜、重量0.04g。孔径:最大0.89㎜、最小0.66㎜。製法:巻き付け。	SA19・20 畦4層
〃 〃 36		青色	ガラス	良好	表面の大半は火災の影響を受けて消失し、全体的にケロイド状となり粗細な気泡痕が部分的に観察できる。残存する表面は白色に変色し、ケロイド状となる。側面の一部は大きく剥離(最長1.7㎜)し、剥離面の一部は白色や黒く煤けた部分が観察される。製作時のガラスを巻き付けた際の微細な溝は上部で僅かに観察できる程度である。上位と下位の孔の周辺にも微細な気泡痕が部分的に観察される。孔の縁辺部は上位と下位ともに製作時の丸味を保持しているが、上位にはガラスを切り離した際の痕跡が歪な突起状となる。下位の切り離し痕の突起は、玉本体に押しつけられるように処理され目立たない。サイズ:長軸3.52㎜、短軸3.38㎜、厚さ2.01㎜、重量0.05g。孔径:最大0.74㎜、最小0.58㎜。製法:巻き付け。	SA19・20 畦4層
〃 〃 37		青色	ガラス	良好	玉の一部が破損している。表面の大半は火災の影響を受けて全体的に変形し、色合いも白く変色している。表面はケロイド状となり粗細な気泡痕や罅割れ、皺などが観察される。破損面は青白色となっている事から本来の玉の色合いに近いものとみられる。破損面からは巻き付けの痕跡は認められないが、全体的に微細な気泡痕がみられる。また、破損面には罅割れが左から右斜め方向に入り、この罅割れの縁辺部が白く変色することなどから巻き付け技法ではなく、溶けたガラスの端同士を合わせて製作されたものと現時点では判断される。その為、孔の平面形状も歪な「L」字状に開いている。上位と下位の孔の縁辺部は製作時に生じた罅が多くみられる。孔の縁辺部は上位と下位ともに製作時の丸味を保持しているが、微細な気泡痕や表面の溶けた剥離面などが部分的に観察される。サイズ:長軸9.53㎜、短軸8.14㎜、厚さ4.85㎜、重量0.43g。孔径:最大3.10㎜、最小2.91㎜、製法:溶けたガラスの端同士を合わせた端合わせの技法とみられる。	SA20 第2層
〃 〃 38	Ⅱ類	青色	ガラス	良好	表面の大半は火災の影響を受けて消失し、残存する表面は僅かであり変色(白色と白濁)している。表面の残存部分はケロイド状となり微細な気泡痕が観察できる。他の面も表面と同様に全体的にケロイド状となり粗細な気泡痕や溶解時にできた窪み(直径0.9×1.2㎜)が観察できる。側面観察から製作時のガラスを巻き付けた際の微細な溝が不鮮明ながら観察できる。上位と下位の孔周辺にも微細な気泡痕が部分的に観察される。孔の縁辺部は上位と下位ともに製作時の丸味を保持しているが、上位にはガラスを切り離した際の痕跡が歪な突起状となる。下位の切り離し痕の突起は、玉本体に押しつけられるように処理され目立たない。サイズ:長軸3.47㎜、短軸3.02㎜、厚さ2.33㎜、重量0.05g。孔径:最大0.80㎜、最小0.58㎜。製法:巻き付け。	SA19・20 畦4層
〃 〃 39		青色	ガラス	良好	表面の大半は火災の影響を受けて消失し、残存する表面は僅かであり変色(白色と白濁)している。表面の残存部分はケロイド状となり微細な気泡痕がみられる。その他に黒色の炭化した物質、微細な繊維状のものが凝固の際に取り込まれている。他の面も表面と同様に全体的にケロイド状となり粗密な気泡痕や溶解時にできた窪み(直径1.5㎜の窪みが2箇所で確認)が観察でき、この窪みの中に黒色の物質が溶け込んでいる。側面観察から製作時のガラスを巻き付けた際の微細な溝が不鮮明ながら観察できる。上位と下位の孔の周辺には気泡痕と製作時に生じた皺が部分的に観察される。下位の孔の周辺にみられる気泡痕の大きさは上位より粗い気泡痕である。孔の縁辺部は上位と下位ともに製作時の丸味を保持しているが、上位と下位はガラスを切り離した際の痕跡が歪な突起状となる。下位の切り離し痕の突起は、切り離しの際に破損して剥離した面となっている。サイズ:長軸3.47㎜、短軸3.39㎜、厚さ2.39㎜、重量0.05g。孔径:最大0.77㎜、最小0.53㎜。製法:巻き付け。	SA19・20 畦4層
〃 〃 40		青色	ガラス	良好	表面の大半は火災の影響を受けて消失し、残存する表面は僅かであり変色(黄茶色と白濁)している。表面の残存部分はケロイド状となり微細な気泡痕がみられる。その他に黒色の炭化した物質(直径0.5～0.6㎜)が凝固の際に取り込まれている。他の面も表面と同様に全体的にケロイド状となり微細な気泡痕が観察できる。側面観察から製作時のガラスを巻き付けた際の溝は確認しにくいが孔の上位でガラスの紐を巻き付け途中で切り離され、ガラスの紐が浮いた状態(蛇が蜷局を巻いた状態に近い)となっている。また、下位の切り離し痕の突起は、玉本体と馴染ませて切り離し、切り口が丸味をもっている。上位と下位の孔の周辺には製作時に生じた皺が部分的に観察される。サイズ:長軸3.26㎜、短軸3.13㎜、厚さ2.51㎜、重量0.05g。孔径:最大0.88㎜、最小0.49㎜。製法:巻き付け。	SA19・20 畦2層
〃 〃 41		青色	ガラス	良好	表面の大半は火災の影響を受けて消失し、残存する表面は僅かに変色(白濁)している。表面の残存部分はケロイド状となる。他の面も表面と同様に全体的にケロイド状となり粗密な気泡痕も観察できる。その他に微細な剥離面もみられる。上位と下位の孔周辺は丸味を帯びている。孔の縁辺部及び孔内部には製作時に発生した縦皺(巻き付け工具によるものか)が5・6本みられる。上位と下位には切り離しの痕跡である突起がみられる。いずれも切り口が丸味を持っている。サイズ:長軸3.51㎜、短軸3.34㎜、厚さ2.01㎜、重量0.04g。孔径:最大0.93㎜、最小0.70㎜。製法:巻き付け。	SA19・20 畦2層
〃 〃 42		青色	ガラス	良好	表面は火災の影響を受けて全体的に消失し、表面は僅かに微細な状態で残存する。表面は白濁している。他の面は全体的にケロイド状となり粗密な気泡痕も観察できる。上位と下位の孔周辺は丸味を帯びている。孔の縁辺部は丸味を保持している。上位と下位には切り離しの痕跡である突起がみられる。上位の突起の切り口は剥離がみられ、下位の突起の切り口が丸味を持っている。サイズ:長軸3.10㎜、短軸3.08㎜、厚さ2.39㎜、重量0.04g。孔径:最大1.13㎜、最小1.04㎜。製法:巻き付け。	SA19 一括遺物 4層
〃 〃 43		青色	ガラス	良好	玉が二個連結した状態で癒着した資料である。火災の影響で表面の大半が青白色に変色し、部分的に白濁している。表面はケロイド状となっている。他の面も全体的にケロイド状となり粗密な気泡痕も観察できる。また、上位の玉には剥離痕(1.4～1.8㎜)がみられ、この面には不純物が付着する。この剥離面は下位から溶解による爛れや気泡痕がみられる。その他に下位の玉が溶解し、垂れたガラスが上位の玉の一部を剥ぎ取った痕が窪んでいる。孔内部も火熱で溶けて塞がっている。上位と下位の孔の周辺には微細な気泡痕が観察できる。孔の縁辺部は上位が丸味を帯びている。下位の孔の縁辺部は平坦面となるが微細な気泡痕やケロイド状となっていることから火熱で付着していた玉が剥がれ落ちたようである。上位の切り離しの痕跡は蛇が蜷局を巻いた様な突起となっている。下位の突起の切り口は火熱による微細な気泡痕やケロイド状となる。サイズ:上位の玉(長軸3.38㎜、短軸2.96㎜、厚さ2.31㎜。孔径:最大1.34㎜、最小0.91㎜)、下位の玉(長軸3.39㎜、短軸3.28㎜、厚さ2.38㎜。孔径:最大1.41㎜、最小0.82㎜)、重量0.09g。製法:巻き付け。	SA19・20 畦2層

第34表④　国指定重要文化財（保存処理未）ガラス玉観察一覧（計測部位は第64図参照）

挿図番号 図版番号 遺物番号	形状分類	色調	素材	残存状況	観察事項	出土地点 出土層
第65図B 図版48 44	Ⅱ類	青色	ガラス	良好	玉が二個連結した状態で癒着した資料である。火災の影響で表面が白色に変色し、部分的に汚れた黄白色となる。上位と下位の玉の表面及び残存面にも全体的にケロイド状となり粗密な気泡痕も観察できる。また、下位の玉には火熱を受けた際に窪み（0.7㎜の魚の目状の窪み）がみられる。上位と下位の孔の周辺部は微細な気泡痕などが観察できるが、縁辺部は丸味を帯びている。上位と下位の玉は、製作後の切り離しを忘れてた為、二個繋がった状態にある。上位と下位の切り離しの痕跡はいずれも蛇が蜷局を巻いた様な突起となっている。サイズ：上位の玉（長軸2.95㎜、短軸2.70㎜、厚さ2.00㎜。孔径：最大0.81㎜、最小0.75㎜）、下位の玉（長軸2.96㎜、短軸2.74㎜、厚さ1.54㎜。孔径：最大1.14㎜、最小0.88㎜）、重量0.09g。製法：巻き付け。	SA19・20 畦2層
〃 〃 45		青色	ガラス	良好	二個の玉が並列気味に上下にずれて連結した状態で癒着した資料である。火災の影響で表面が半分程度、汚れた黄茶色に変色し、一部は汚れた黄白色となる。表面及び他の残存面はケロイド状となり粗密な気泡痕も観察できる。左右の玉ともに巻き付け成形時の溝が不鮮明ながら確認できる。右側の玉の上位の孔は、周辺が火熱で歪な面となり、孔縁辺部に皺や気泡痕などがみられる。右側下位の孔は、歪な平坦面で不純物が付着して観察できないが、孔縁辺部には製作時に発生した皺が2・3本みられる。左側の玉の上位の孔は歪な平坦面で割れ面である。左側下位の孔の周辺及び縁辺部は火熱の影響で微細な気泡痕などが観察される。左右の玉の切り離し部分の突起は、玉本体と馴染んで目立たない。サイズ：右側の玉（長軸3.02㎜、短軸2.91㎜、厚さ1.89㎜。孔径：最大0.85㎜、最小0.76㎜）、左側の玉（長軸3.28㎜、短軸2.97㎜、厚さ1.97㎜。孔径：最大1.14㎜、最小0.87㎜）、重量0.06g。製法：巻き付け。	SA19 一括遺物 4層
〃 〃 46	Ⅳ類	青色 赤茶色	ガラス	脆い	四個の玉が火熱を受けて連結した状態で癒着した資料である。上の二個は赤茶色で、下の二個が青白色の玉である。上の赤茶色の玉の表面は比較的に火災の影響は軽微であるが二個とも半分程度破損する。下の青白色の玉二点の内、一点は半分程度破損し、残り一点の表面が火熱で部分的にケロイド状となり、黄白色や白色となる。火熱を受けた際に他の玉の破片が付着し凝固している。上の赤茶色の玉の右側の孔は気泡痕や皺がみられる。左側の孔の縁辺部は一部破損や変形があるが他は丸味を持っている。下の青白色の玉は、右側の孔の周辺は平坦面ではあるがケロイド状となり粗密な気泡痕が観測できる。右下位の孔は破損面である。左側の上位の孔は丸味を保持しているが、切り離し部の突起に微細な気泡痕が観察できる。左側の下位の孔は比較的良好な形で丸味が残っている。左側の上下二個の玉には切り離しの痕跡を示す突起が観察でき、左上の玉の突起は尖り気味で突起が半分程度破損する。左下の玉には突起の切り離し部分に微細な気泡痕がみられる。上の二個はサイズが破損面が多く計測できない。サイズは左下の玉を計測：長軸3.17㎜、短軸3.12㎜、厚さ2.71㎜。孔径：最大0.82㎜、最小0.67㎜、重量0.17g。製法：巻き付け。	SA20 一括遺物 2層
〃 〃 47	Ⅰ類	黄緑	ガラス	良好	孔が開いていない丸玉で、火災によって溶けたガラス玉が偶然に丸玉のように再凝固したのか、或いは金属製品などに嵌め込んだガラス玉が外れたのか、判然としない資料である。表面には部分的に火熱を受けてケロイド状となり、微細な気泡痕がみられる。ガラス内部には大きな気泡痕や微細な気泡痕がみられる。サイズは長軸3.58㎜、短軸3..35㎜、重量0.05g。製法は不明。	SA20 一括遺物 1層
〃 〃 48	—	白濁 青色	ガラス	脆い	ガラス小玉の塊。淡青色のガラス小玉を主体に白色のガラス小玉が火災による火熱を受けて溶解・再凝固したガラス小玉の塊の一部破片。淡青色の小玉は、概ね縦位の方向（細い糸などで抜かれて束となったものが重ねて保管）に並んでいる。側面からの観察では、小玉の並びを層で数えると16束（5層）が、ほぼ同一方向に切り合いながら重なっている。白色の小玉は左端のみで確認され、小玉の列が3束が並列した状態で表面の一層で観察できる。この白色小玉の下には溶解・再凝固した淡青色の小玉が1層（1束）確認される。表面は火熱を受け、黒く煤けた部分や溶解時の状態で凝固した部分もみられる。全体的にガラス本来の色調を失っている。裏面は灰黒色に煤けて完全に溶解し、小玉の形状が窺えない状態にある。溶解した淡青色ガラス小玉で、良好な小玉の孔の直径は1㎜を測った。残存する淡青色の小玉の表面は微細なケロイド状となっている。面の保持は良好であるが、白色の小玉は表面が火熱の影響を受けてケロイド状となり、侵食・風化した様な状態の面となっていて脆弱である。小玉の製法は残存する淡青色や白色の小玉から巻き付け技法と推定される。残存サイズは、長軸70.93㎜、短軸53.39㎜、厚さ19.69㎜、重量29.93g。	SA19 第2層・ 第3層
〃 〃 49	—	青色	ガラス	脆い	〃　。淡青色のガラス小玉と赤茶色のガラス小玉が火災による火熱を受けて溶解・再凝固したガラス小玉の塊の一部破片。淡青色の小玉の塊の右半分は、概ね縦位の方向（細い糸などで抜かれて束ね重ねて保管）に並んでいる。側面からの観察では、小玉の並びを層で数えると18束（5層）が、ほぼ同一方向に切り合いながら重なっている。赤茶色の小玉は右下で1点と中央付近で破片が1点確認できる。表面は火熱を受け、部分に溶解し、溶けたままの状態で凝固した箇所がみられる。全体的に火熱で表面がケロイド状となっているがガラス本来の色合いを保持している。裏面は大半が煤けて溶解するが、部分的に小玉の形状が窺える。残存する青色ガラス小玉で、良好な小玉の孔の直径は1.03㎜を測った。残存す淡青色の小玉の表面は微細なケロイド状となっているが面の保持はやや良好である。残存する小玉から巻き付け技法と推定される。残存サイズは、長軸31.05㎜、短軸31.64㎜、厚さ16.11㎜、重量11.44g。	SA19・20 畦2層
〃 〃 50	—	白濁	ガラス	脆い	〃　。白色のガラス小玉を主体に黒色の小玉が火災による火熱を受けて溶解・再凝固したガラス小玉の塊の一部破片。白色の小玉の塊の中央から左側は、概ね縦位の方向（細い糸などで抜かれて束ね重ねて保管）に並んでいる。側面からの観察では、小玉の並びを層で数えると8束（3層）が、ほぼ同一方向に切り合いながら重なっている。黒色の小玉は火熱で変形したものが上端で横位に一列（1束）が確認される。表面は火熱を受け、全体的な形状変形と部分溶解、そして再凝固した箇所がみられる。全体的に火熱で表面がケロイド状となり、表面が浸食・風化した様な状況にある。ガラス本来の色合いを失い白濁している。裏面は大半が煤けているが、小玉の形状が窺える。裏面の煤けた小玉は破損面から観察すると青玉、黒色、黄色の小玉の可能性が高いようであるが判然としない。残存する白色小玉の孔は火熱で変形するが、比較的良好な小玉の孔の直径を計測すると0.6×1.08㎜を測った。残存する小玉から巻き付け技法と推定される。残存サイズは、縦軸14.83㎜、横軸21.37㎜、厚さ15.69㎜、重量4.93g。	SA19・20 畦3層
〃 〃 51	—	白色 淡青色 黒色 赤茶色	ガラス	脆い	〃　。表面から裏面に向かって白色、淡青色、黒色、赤茶色のガラス小玉の束が火災による火熱を受けて溶解・再凝固したガラス小玉の塊の一部破片。表面にある白色の小玉は、概ね縦位の方向（細い糸などで抜かれて束ね重ねて保管）に並んでいる。上面からの観察では、小玉の並びを層で数えると9束（4層）が、ほぼ同一方向に切り合いながら重なっている。淡青色の小玉は10束（4層）、黒色の小玉が6束（3層）、赤茶色の小玉は溶解と破損が著しいが残存状況から4束（1層）が推定できる。表裏面の中央から下部は各種のガラス小玉が火熱の影響で溶けて凝固している。表面も小玉の形状が変形したものが全てである。裏面の上部に残存する白色の小玉も変形している。全体的に火熱で表面がケロイド状となり、表面が侵食・風化した様な状況にある。全体的にガラス本来の色合いを失い、灰を被ったような色合いとなっている。残存する白色小玉の孔は火熱で変形するが、比較的良好な小玉の孔の直径を計測すると0.71㎜を測った。残存する小玉から巻き付け技法と推定される。残存サイズは縦軸26.23㎜、横軸33.64㎜、厚さ20.51㎜、重量17.20g。	SA19・20 畦3層
〃 〃 52	—	乳青色	ガラス	脆い	大型のガラス（淡青白色）製勾玉が火災の影響を受けて変形したものとみられる。正面の頭部に孔があるが、反対側では貫通していた孔は途中で塞がっている。孔の直径は、長径8.14㎜、短径5.56㎜を測る。頭部右上は火熱の影響で起伏のあるケロイド状となる。下部は溶解してケロイド状となる部分がみられ先端付近が破損している。右側面の中央付近に勾玉を収納した際に使用した布袋などが火熱を受けて溶解し付着している。ガラスに付着した布繊維の目は0.3㎜目程度ものが観察できる。右側面からは勾玉が火熱の影響で大きく捩れたことが窺える。右側面の頭部は、一部に鉄分の付着がみられる。裏面は火熱で全体的に起伏のあるケロイド状となり、気泡痕がみられる。また、部分的に黒く煤けているところと鉄分が付着したところがある。裏面右側中央付近は溶けたガラスが剥れ落ちた際の痕跡であり、この面は大きな気泡痕が観察できる。この面にある気泡痕の一つは勾玉の孔とみられ、深さが15.5㎜を測る。左側面は頭部が火熱で溶けて中央付近から右上にかけてルーズな平坦面を構成する。下部は火熱で溶けたガラスが剥れ落ちた部分であり、一部は破損面となる。剥れ落ちた部分の窪みには灰が詰まり、周辺が黒く煤けている。サイズ：長軸45.49㎜、短軸32.94㎜、厚さ27.80㎜、重量39.27g。製法は不明。	SA20 第3層



第65図A　国指定重要文化財（保存処理未）⑭
ガラス玉



第65図B　国指定重要文化財（保存処理未）⑮
ガラス玉

第35表① ガラス玉（写真のみ）計測一覧（計測部位は第64図参照）

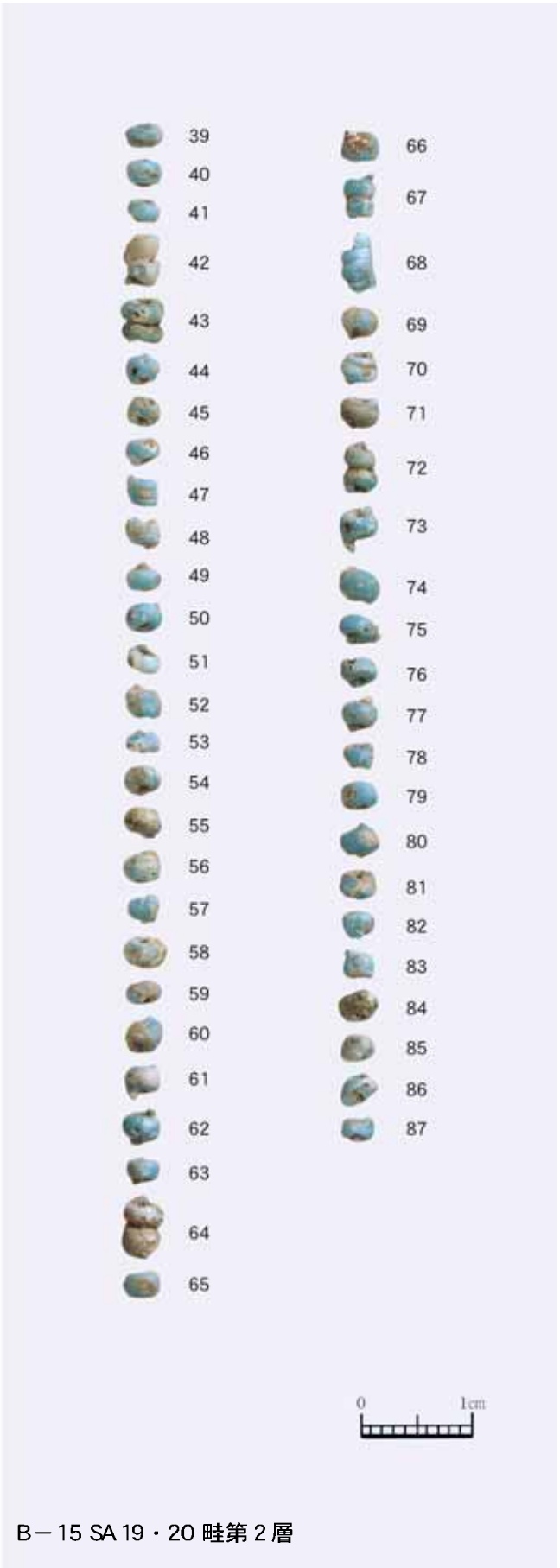
単位：mm/g

図版番号	遺物番号	形状分類	色調	サイズ 長軸	サイズ 短軸	サイズ 厚さ	孔径 最大	孔径 最小	重量	出土地
図版1	1	Ⅱ類	青色	4.03	2.53	2.80	0.82	0.41	0.051	B-15 SA19 第2層
	2			2.83	2.78	2.52	0.63	0.57	0.034	
	3			3.86	2.74	2.33	0.79	0.37	0.035	
	4			3.50	3.19	2.75	1.14	0.90	0.048	
	5			3.20	3.02	1.71	1.02	0.64	0.021	
	6			2.88	2.85	1.94	0.94	0.65	0.025	
	7	Ⅳ類		—	—	—	—	—	0.041	
	8	Ⅱ類		—	—	—	—	—	0.088	
	9			2.89	2.52	2.28	0.83	0.52	0.025	
	10			3.35	3.19	2.18	1.10	0.73	0.037	
	11	Ⅳ類		3.18	2.24	2.48	0.95	0.66	0.029	
	12	Ⅱ類		3.05	2.86	2.03	1.12	0.72	0.037	
	13			2.95	2.83	1.78	0.77	0.48	0.026	
	14			3.67	2.82	2.29	0.99	0.95	0.040	
	15			2.73	2.42	1.69	0.76	0.67	0.019	
	16			2.64	2.58	2.03	0.50	0.28	0.023	
	17			2.53	2.41	2.03	0.49	0.45	0.018	
	18			3.63	3.42	2.27	0.88	0.48	0.048	
	19			3.26	3.17	1.77	0.57	0.34	0.036	
	20			3.73	3.30	1.74	0.88	0.59	0.033	
	21			3.65	3.55	2.22	0.80	0.66	0.043	
	22			3.35	3.27	1.86	0.78	0.74	0.032	
	23			3.43	3.32	1.37	0.70	0.36	0.025	
	24			—	—	—	—	—	0.093	
	25			3.46	3.27	1.90	0.84	0.46	0.038	
	26			3.68	3.37	2.48	0.87	0.33	0.048	
	27			3.41	3.10	2.17	0.62	0.50	0.038	
	28			3.65	3.07	2.63	0.73	0.53	0.041	
	29			3.26	3.15	2.68	0.63	0.53	0.041	
	30			3.61	3.30	2.03	0.69	0.37	0.036	
	31			3.40	3.25	1.75	0.92	0.65	0.032	
	32			3.39	3.36	2.19	0.81	0.73	0.040	
	33			3.18	3.09	2.30	0.75	0.33	0.033	
	34			2.99	2.44	2.15	0.70	0.47	0.033	
	35	Ⅳ類		3.86	3.54	2.97	0.64	0.50	0.069	
	36			3.78	2.85	3.01	0.63	0.36	0.056	
	37	Ⅱ類		3.34	3.23	2.21	0.66	0.53	0.041	
	38			3.55	3.38	2.53	0.38	0.37	0.052	
	39			3.44	2.93	2.25	0.70	0.48	0.033	SA19・20 畦第2層
	40			3.33	3.27	2.49	0.90	0.64	0.039	
	41			3.09	3.05	2.07	0.77	0.70	0.026	
	42	Ⅳ類		—	—	—	—	—	0.073	
	43			—	—	—	—	—	0.076	
	44	Ⅱ類		3.20	2.81	2.59	0.68	0.59	0.037	

※表中の－は、玉の癒着した資料。

図版番号	遺物番号	形状分類	色調	サイズ 長軸	サイズ 短軸	サイズ 厚さ	孔径 最大	孔径 最小	重量	出土地
図版1	45	Ⅱ類	青色	3.00	2.96	2.44	0.68	0.42	0.033	SA19・20 畦第2層
	46			3.14	2.99	2.30	0.81	0.45	0.034	
	47			2.85	2.84	2.43	0.53	0.49	0.036	
	48	Ⅳ類		2.84	2.83	2.45	0.61	0.48	0.032	
	49	Ⅱ類		3.26	3.16	2.59	0.54	0.36	0.036	
	50			3.36	3.21	2.15	0.93	0.49	0.043	
	51			3.17	3.01	1.87	0.67	0.64	0.029	
	52			3.13	3.04	2.69	0.61	0.40	0.045	
	53			2.96	2.94	1.89	0.57	0.30	0.030	
	54			3.37	3.34	2.21	0.72	0.66	0.041	
	55			3.52	3.35	2.29	0.53	0.43	0.049	
	56			3.61	3.38	2.72	0.78	0.65	0.055	
	57			2.93	2.87	2.45	0.52	0.43	0.034	
	58			3.85	3.10	2.52	0.67	0.45	0.045	
	59			3.30	3.04	1.93	0.53	0.38	0.028	
	60			3.12	2.95	2.61	0.58	0.33	0.048	
	61			3.27	3.20	2.72	0.50	0.49	0.048	
	62			3.47	3.43	2.84	0.78	0.38	0.055	
	63			3.06	3.02	2.30	0.63	0.50	0.033	
	64	Ⅳ類		—	—	—	—	—	0.102	
	65	Ⅱ類		3.54	3.38	2.34	0.71	0.48	0.048	
	66			3.61	3.55	2.78	0.55	0.51	0.058	
	67			—	—	—	—	—	0.053	
	68	Ⅳ類		—	—	—	—	—	0.065	
	69	Ⅱ類		3.30	3.18	2.70	0.78	0.59	0.043	
	70			3.36	3.29	2.69	0.64	0.49	0.044	
	71			3.63	3.51	2.68	0.52	0.37	0.058	
	72			—	—	—	—	—	0.068	
	73			3.53	3.32	2.85	0.85	0.78	0.052	
	74			3.66	3.55	2.87	0.49	0.26	0.068	
	75			3.31	3.19	2.29	0.54	0.53	0.041	
	76			3.21	3.18	2.17	0.72	0.47	0.036	
	77			3.25	3.14	2.57	0.44	0.26	0.046	
	78			2.83	2.73	2.34	0.53	0.26	0.029	
	79			3.36	3.12	2.48	0.66	0.44	0.043	
	80			3.62	3.42	2.75	0.41	0.36	0.057	
	81			3.53	3.10	2.43	0.47	0.35	0.046	
	82			2.93	2.77	2.41	0.43	0.22	0.033	
	83			2.70	2.54	2.42	0.43	0.41	0.031	
	84			3.54	3.40	2.30	0.51	0.33	0.043	
	85			3.28	2.98	2.47	0.72	0.43	0.037	
	86	Ⅳ類		3.16	2.96	2.38	0.44	0.38	0.033	
	87	Ⅱ類		2.96	2.65	1.95	0.50	0.49	0.027	

B－15 SA 19 畦第 2 層



B－15 SA 19・20 畦第 2 層

図版 1　土壙SK01（倉庫跡）
ガラス玉（写真のみ、図版番号と計測表の番号は一致）

第35表② ガラス玉（写真のみ）計測一覧（計測部位は第64図参照）

単位：mm/g

図版番号	遺物番号	形状分類	色調	サイズ 長軸	短軸	厚さ	孔径 最大	最小	重量	出土地
図版2	88	Ⅳ類	青色	—	—	—	—	—	0.121	B-15 SA20 第2層
	89	Ⅱ類		—	—	—	—	—	0.067	
	90			3.47	3.41	2.71	0.59	0.52	0.048	
	91			3.42	3.19	3.03	0.58	0.42	0.049	
	92			2.85	2.72	1.94	0.53	0.49	0.023	
	93	Ⅳ類	白濁	4.21	2.76	2.38	0.62	0.48	0.051	
	94			3.47	2.79	2.10	0.42	0.39	0.038	
	95	Ⅱ類		4.19	3.26	2.04	0.69	0.48	0.049	
	96			3.75	3.74	2.34	0.66	0.51	0.047	
	97			—	—	—	—	—	0.053	
	98			2.88	2.78	1.84	0.52	0.33	0.024	
	99			—	—	—	—	—	0.087	
	100			4.08	3.59	1.76	0.86	0.53	0.037	
	101			3.36	3.24	2.89	0.71	0.48	0.048	
	102			3.98	3.54	2.35	0.62	0.55	0.050	
	103			3.70	3.47	2.10	0.82	0.59	0.044	
	104			4.14	3.45	1.82	0.61	0.53	0.044	
	105			3.68	3.15	2.29	0.60	0.45	0.043	
	106			3.17	2.91	1.84	0.78	0.42	0.027	
	107			3.14	2.88	2.39	0.46	0.42	0.028	
	108			3.99	3.24	2.78	0.52	0.44	0.059	
	109			3.90	3.81	1.94	0.77	0.72	0.047	
	110			4.54	3.05	2.14	0.61	0.59	0.050	
	111	Ⅳ類		3.99	3.34	2.16	0.56	0.51	0.048	
	112	Ⅱ類		3.11	3.03	2.61	0.45	0.45	0.041	
	113			3.24	2.92	2.14	0.51	0.48	0.029	
	114			3.54	3.48	2.35	0.49	0.46	0.045	
	115			3.16	2.96	1.78	0.67	0.50	0.034	
	116			3.18	2.57	2.05	0.50	0.37	0.028	
	117			3.40	3.21	2.03	0.50	0.45	0.039	
	118			3.43	3.13	2.07	0.56	0.56	0.034	
	119			—	—	—	—	—	0.082	
	120			—	—	—	—	—	0.069	
	121			4.76	2.97	2.09	0.56	0.50	0.035	
	122	Ⅳ類		3.79	3.10	1.93	0.45	0.42	0.030	
	123			4.08	3.20	3.05	0.51	0.35	0.050	
	124			—	—	—	—	—	0.055	
	125	Ⅱ類		3.16	2.91	1.76	—	—	—	
	126			2.61	2.59	1.44	—	—	—	
	127	Ⅳ類		4.99	3.30	3.50	0.75	0.52	0.065	
	128	Ⅱ類		—	—	—	—	—	0.095	
	129			3.03	2.95	2.19	0.41	0.37	0.035	
	130			3.14	2.93	1.62	0.39	0.32	0.032	
	131			3.68	3.47	2.60	0.47	0.33	0.065	
	132			—	—	—	—	—	0.089	
	133			3.68	3.30	1.65	0.42	0.36	0.036	
	134			3.67	3.47	2.12	0.46	0.41	0.051	
	135	Ⅳ類		3.12	2.86	2.24	0.33	0.25	0.038	
	136	Ⅱ類		4.06	3.22	2.57	0.63	0.55	0.060	
	137			3.68	3.51	2.29	0.47	0.39	0.061	
	138			3.91	3.03	2.64	0.47	0.42	0.064	
	139			3.73	3.07	2.15	0.47	0.35	0.041	
	140			—	—	—	—	—	0.065	
	141			3.20	3.11	2.23	0.47	0.41	0.042	
	142			3.94	2.80	2.07	0.58	0.29	0.034	
	143			3.29	2.84	1.80	0.52	0.34	0.032	
	144			3.56	3.43	1.96	0.59	0.53	0.030	
	145			4.51	3.38	1.80	0.45	0.41	0.038	
	146			3.77	3.43	1.55	0.44	0.41	0.035	
	147			3.65	3.29	2.06	0.55	0.49	0.041	
	148	Ⅳ類		3.65	2.96	2.29	0.41	0.36	0.032	
	149			3.21	3.08	2.30	0.42	0.38	0.038	
	150			5.36	4.12	2.88	0.59	0.52	0.068	
	151	Ⅱ類		3.72	3.58	2.40	0.45	0.42	0.046	
	152			4.08	3.27	1.86	0.47	0.41	0.036	
	153			3.77	3.40	2.36	0.49	0.40	0.050	
	154			2.60	2.55	2.10	0.41	0.37	0.024	
	155	Ⅳ類		3.78	2.82	2.17	0.45	0.39	0.021	
	156	Ⅱ類		3.33	3.14	2.24	0.53	0.35	0.049	
	157			3.75	3.45	2.37	0.44	0.30	0.066	
	158			4.10	3.37	2.44	0.52	0.46	0.045	
	159			3.66	3.28	2.39	0.57	0.41	0.040	
	160			3.77	3.36	1.91	0.76	0.44	0.042	
	161			4.32	3.39	2.18	0.58	0.56	0.050	
	162			2.91	2.41	1.76	0.47	0.42	0.022	
図版2	163	Ⅱ類	白濁	2.70	1.89	2.10	0.56	0.42	0.022	B-15 SA20 第2層
	164			4.55	3.20	2.16	0.52	0.51	0.038	
	165	Ⅳ類		3.97	3.66	2.50	0.64	0.42	0.053	
	166	Ⅳ類		3.50	3.45	1.50	0.49	0.36	0.031	
	167			4.65	3.40	2.47	0.62	0.50	0.058	
	168			4.14	3.04	2.38	0.59	0.35	0.050	
	169	Ⅱ類		3.38	3.28	2.23	0.47	0.37	0.047	
	170			3.76	2.55	1.95	0.58	0.43	0.021	
	171			3.40	3.06	2.24	0.39	0.31	0.029	
	172	Ⅳ類		2.71	2.04	1.77	0.58	0.43	0.010	
	173	Ⅱ類		3.85	3.25	2.08	0.45	0.33	0.030	
	174	Ⅳ類		4.53	3.35	2.15	0.49	0.43	0.061	
	175	Ⅱ類		2.79	2.73	1.56	0.60	0.53	0.019	
	176			3.62	3.12	2.19	0.42	0.27	0.027	
	177			3.19	3.08	1.88	0.47	0.39	0.040	
	178			3.73	3.26	1.91	0.51	0.28	0.046	
	179			3.34	3.16	2.03	0.37	0.21	0.040	
	180	Ⅳ類		3.91	2.63	2.39	0.42	0.40	0.025	
	181	Ⅱ類		2.99	2.71	1.35	0.26	0.24	0.020	
	182			3.52	3.22	2.56	0.36	0.35	0.051	
	183			3.57	3.43	1.96	0.36	0.29	0.042	
	184	Ⅳ類		5.37	3.84	3.31	0.39	0.35	0.086	
	185	Ⅱ類		3.41	3.23	2.04	0.45	0.38	0.024	
	186			2.59	2.57	2.06	0.47	0.39	0.024	
	187			2.94	2.73	1.64	0.39	0.37	0.015	
	188			2.29	2.16	2.29	0.33	0.32	0.019	
	189			3.34	2.98	1.65	0.49	0.44	0.039	
	190			3.72	3.66	1.92	0.42	0.38	0.057	
	191			2.29	2.16	1.28	0.48	0.44	0.010	
	192			—	—	—	—	—	0.099	
	193			2.96	2.90	2.51	0.50	0.33	0.029	
	194			2.95	2.05	2.06	0.36	0.32	0.015	
	195			3.31	2.93	2.30	0.25	0.21	0.054	
	196			3.44	3.07	2.40	0.27	0.22	0.044	
	197			3.60	3.34	2.91	0.45	0.43	0.039	
	198			3.55	3.47	1.87	0.33	0.25	0.050	
	199	Ⅳ類		4.23	3.83	2.81	1.23	1.09	0.048	
	200	Ⅱ類		3.06	2.91	1.66	0.48	0.41	0.029	
	201			3.18	3.13	2.03	0.54	0.33	0.024	
	202	Ⅳ類		3.05	2.49	1.92	0.43	0.39	0.017	
	203	Ⅱ類		—	—	—	—	—	0.096	
	204			2.89	2.76	1.98	0.38	0.37	0.039	
	205			3.14	2.93	1.84	0.55	0.40	0.037	
	206	Ⅳ類		—	—	—	—	—	—	
	207			4.79	2.92	2.59	0.44	0.35	—	
	208			5.58	2.48	2.16	0.33	0.21	0.040	
	209	Ⅱ類		3.09	3.00	1.72	0.38	0.34	0.027	
	210	Ⅳ類		3.23	2.93	2.18	0.44	0.42	0.025	
	211	Ⅱ類		3.28	2.61	2.07	0.57	0.33	0.015	
	212			2.27	2.10	1.67	0.55	0.22	0.014	
	213			2.37	2.07	1.58	0.36	0.23	0.011	
	214			3.14	2.66	2.08	0.44	0.42	0.033	
	215			4.23	2.77	1.84	0.50	0.38	0.030	
	216			2.87	2.18	1.39	0.84	0.70	0.013	
	217			3.04	2.73	1.94	0.59	0.52	0.026	
	218			2.49	2.41	1.94	0.38	0.37	0.019	
	219			3.34	2.76	2.29	0.47	0.40	0.039	
	220			3.97	3.36	2.58	0.58	0.35	0.049	
	221			2.83	2.63	1.58	0.46	0.36	0.023	
	222			4.46	3.14	2.87	0.44	0.43	0.058	
	223			3.63	3.17	2.03	0.47	0.30	0.042	
	224			4.05	3.88	2.36	0.41	0.33	0.071	
	225			—	—	—	—	—	0.127	
	226			3.00	2.70	1.78	—	—	—	
	227			3.29	3.01	2.07	0.45	0.30	0.047	
	228			2.93	2.62	1.74	0.39	0.29	0.023	
	229	Ⅳ類		4.76	3.13	2.24	0.63	0.52	0.035	
	230	Ⅱ類		3.68	3.50	2.16	0.45	0.41	0.049	
	231			3.39	2.90	1.71	0.51	0.37	0.030	
	232	Ⅳ類		3.84	3.54	2.28	0.48	0.39	0.047	
	233			—	—	—	—	—	0.144	
	234	Ⅱ類		3.21	2.44	1.90	0.48	0.35	0.035	
	235			4.41	3.06	2.22	0.57	0.43	0.049	
	236			2.76	2.71	1.64	0.31	0.26	0.028	
	237			3.42	2.87	1.75	0.34	0.23	0.032	

※表中の－は、玉の癒着した資料。

B－15 SA20 第２層

図版２　土壙SK01（倉庫跡）
ガラス玉（写真のみ、図版番号と計測表の番号は一致）

第35表③ ガラス玉（写真のみ）計測一覧（計測部位は第64図参照）

単位：mm/g

図版番号	遺物番号	形状分類	色調	サイズ 長軸	サイズ 短軸	サイズ 厚さ	孔径 最大	孔径 最小	重量	出土地
図版3	238	Ⅱ類	青色	2.88	2.87	2.11	0.48	0.22	0.027	B-15 SA20 一括遺物 2層
	239			3.18	2.94	2.34	0.48	0.36	0.041	
	240			—	—	—	—	—	0.044	
	241			3.11	3.08	2.50	0.43	0.36	0.041	
	242		白濁	3.71	3.53	2.17	0.48	0.45	0.046	
	243			3.76	3.62	2.80	0.28	0.20	0.079	
	244		青色	3.68	3.55	2.98	0.43	0.36	0.068	
	245			3.12	2.97	2.60	0.44	0.28	0.037	
	246			2.75	2.70	1.79	0.45	0.40	0.024	
	247			3.42	3.37	2.49	0.35	0.34	0.051	
	248			3.14	3.13	2.11	0.30	0.29	0.035	
	249			3.74	2.96	2.35	0.31	0.29	0.040	
	250		白濁	3.57	3.02	1.81	0.58	0.40	0.030	B-15 SA19 第3層
	251			3.51	3.32	1.95	0.59	0.42	0.031	
	252	Ⅳ類		3.64	3.02	2.48	0.49	0.34	0.028	
	253	Ⅱ類		3.50	3.05	2.08	0.77	0.64	0.022	
	254			3.53	2.97	1.74	0.36	0.36	0.035	
	255			3.51	2.77	1.86	0.71	0.61	0.031	
	256	Ⅳ類		5.13	4.02	2.54	0.64	0.43	0.022	
	257	Ⅱ類	青色	3.82	3.45	2.29	0.34	0.27	0.038	SA19 3層 一括遺物
	258			3.05	2.39	2.52	0.14	0.13	0.036	
	259			3.39	3.15	2.55	0.29	0.21	0.045	
	260			—	—	—	—	—	0.121	
	261			3.16	3.08	2.10	0.34	0.31	0.036	
	262			—	—	—	—	—	0.076	
	263			—	—	—	—	—	0.075	
	264			3.05	2.80	2.74	0.28	0.26	0.042	
	265			3.24	3.09	2.53	0.47	0.43	0.038	
	266			3.10	3.08	2.48	0.41	0.37	0.046	
	267			2.97	2.83	2.89	0.42	0.28	0.034	
	268			—	—	—	—	—	0.104	
	269		白濁	3.32	3.16	2.63	0.40	0.26	0.035	B-15 SA19・20 畦第3層
	270			2.92	2.89	2.00	0.51	0.43	0.027	
	271		青色	2.86	2.71	2.35	0.62	0.51	0.025	
	272			3.41	2.96	2.82	0.28	0.23	0.040	
	273			3.45	3.04	2.61	0.58	0.34	0.042	
	274			3.50	3.45	2.84	0.44	0.41	0.050	
	275			—	—	—	—	—	0.102	
	276			3.43	3.27	2.90	0.38	0.36	0.053	
	277			3.27	3.07	2.28	0.38	0.25	0.038	
	278			3.40	3.04	3.06	0.41	0.26	0.046	
	279			3.07	2.96	2.63	0.52	0.37	0.040	
	280			3.49	3.19	2.92	0.31	0.21	0.052	
	281			2.94	2.90	2.43	0.23	0.14	0.039	
	282			3.26	3.22	2.67	0.52	0.46	0.045	
	283			—	—	—	—	—	0.071	
	284			3.36	3.17	2.76	0.42	0.28	0.049	
	285			3.39	3.07	1.95	0.60	0.30	0.030	
	286			3.56	3.54	2.53	0.53	0.44	0.046	
	287			3.14	2.98	2.34	0.54	0.51	0.037	
	288			3.41	3.26	2.71	0.39	0.30	0.044	
	289			2.93	2.86	1.91	0.42	0.38	0.028	
	290			3.30	3.23	2.62	0.36	0.35	0.045	
	291			2.95	2.82	2.76	0.39	0.34	0.035	
	292			3.20	2.79	2.50	0.43	0.28	0.039	
	293			—	—	—	—	—	0.174	
	294			—	—	—	—	—	0.127	
	295			3.47	3.12	2.28	0.47	0.37	0.034	
	296			3.33	3.02	2.15	0.42	0.40	0.036	
	297			3.41	3.33	2.56	0.57	0.51	0.050	
	298			3.07	2.92	2.37	0.48	0.47	0.038	
	299			3.06	2.97	2.76	0.47	0.31	0.035	
	300			—	—	—	—	—	0.064	
	301			—	—	—	—	—	0.050	
	302			2.63	2.40	1.74	0.62	0.44	0.017	

※表中の－は、玉の癒着した資料。

図版番号	遺物番号	形状分類	色調	サイズ 長軸	サイズ 短軸	サイズ 厚さ	孔径 最大	孔径 最小	重量	出土地
図版3	303	Ⅱ類	青色	—	—	—	—	—	0.043	B-15 SA19・20 畦第3層
	304			—	—	—	—	—	0.112	
	305			2.90	2.78	2.03	—	—	0.028	
	306			3.42	3.33	2.61	0.49	0.40	0.045	
	307			3.02	2.94	1.37	1.39	1.37	0.015	
	308			2.99	2.97	2.17	0.89	0.77	0.028	
	309			3.09	2.99	2.62	0.43	0.37	0.041	
	310			4.03	3.59	2.37	0.44	0.38	0.052	
	311			3.36	3.00	2.74	0.51	0.33	0.042	
	312			4.03	3.66	2.02	0.60	0.42	0.047	
	313			2.89	2.77	2.28	0.44	0.30	0.036	
	314			3.82	3.26	2.24	0.58	0.38	0.043	
	315			3.73	3.06	1.98	0.85	0.49	0.039	B-15 SA20 第3層
	316			—	—	—	—	—	0.052	
	317			3.91	3.40	1.77	0.30	0.28	0.045	
	318			3.68	3.58	2.56	0.52	0.24	0.056	
	319			2.92	2.43	1.98	0.35	0.18	0.035	
	320			4.06	3.11	2.32	0.63	0.45	0.051	
	321			—	—	—	0.34	0.24	0.034	
	322			4.17	3.21	1.78	0.90	0.28	0.043	
	323			3.03	2.79	1.95	0.43	0.42	0.026	
	324			3.21	3.08	1.40	0.58	0.39	0.037	
	325			3.29	3.23	1.86	0.37	0.21	0.051	
	326			3.19	3.18	2.14	0.38	0.31	0.045	
	327			3.04	2.87	1.72	0.45	0.17	0.033	
	328			3.31	3.18	1.93	0.60	0.49	0.038	
	329			3.29	3.18	1.91	0.37	0.25	0.043	
	330			3.76	3.24	1.72	0.42	0.19	0.053	
	331			3.50	3.49	3.22	0.60	0.44	0.066	
	332			3.36	3.12	2.10	0.67	0.19	0.046	
	333			3.04	2.93	2.02	0.34	0.23	0.035	
	334			3.36	3.26	1.96	0.58	0.24	0.043	
	335			2.89	2.80	2.44	0.59	0.34	0.035	
	336			3.36	3.33	2.26	0.51	0.20	0.064	
	337			3.91	2.74	2.38	0.62	0.37	0.064	
	338			3.33	3.15	2.37	0.35	0.04	0.039	
	339			3.17	2.93	1.97	0.38	0.20	0.031	
	340			3.24	3.18	1.89	0.63	0.20	0.044	
	341	Ⅳ類	青色	4.75	2.09	2.03	0.98	0.58	0.031	
	342	Ⅱ類	青色	2.95	2.67	1.79	0.54	0.49	0.026	
	343			3.51	3.44	2.09	0.89	0.76	0.051	
	344			2.92	2.81	2.09	0.58	0.31	0.025	
	345			3.45	3.14	1.82	—	—	0.031	
	346			3.30	3.24	2.30	0.37	0.28	0.043	
	347			3.48	3.44	2.75	0.51	0.43	0.050	
	348			3.70	3.13	2.32	0.97	0.40	0.039	
	349			2.99	2.76	2.30	0.59	0.51	0.036	
	350			3.56	3.41	1.84	0.60	0.31	0.047	
	351			3.40	3.33	1.93	0.75	0.47	0.044	
	352			3.36	2.94	2.09	0.45	0.38	0.045	
	353			3.43	3.22	2.17	0.54	0.46	0.050	
	354			3.49	3.38	2.17	0.70	0.22	0.043	
	355			3.39	3.23	1.89	0.39	0.31	0.041	
	356			—	—	—	—	—	0.118	
	357			—	—	—	—	—	0.092	
	358			—	—	—	—	—	0.115	
	359			4.25	3.21	2.37	0.71	0.42	0.067	
	360			3.36	3.28	2.26	0.49	0.33	0.043	
	361			3.59	2.73	1.71	0.39	0.17	0.036	
	362			—	—	—	—	—	0.097	
	363			4.22	4.03	2.53	0.25	0.12	0.058	
	364		緑色	3.20	3.16	1.26	1.56	1.51	0.019	
	365		白濁	3.29	3.21	2.22	0.51	0.49	0.038	
	366		青色	—	—	—	—	—	0.097	

図版３　土壙SK01（倉庫跡）
ガラス玉（写真のみ、図版番号と計測表の番号は一致）

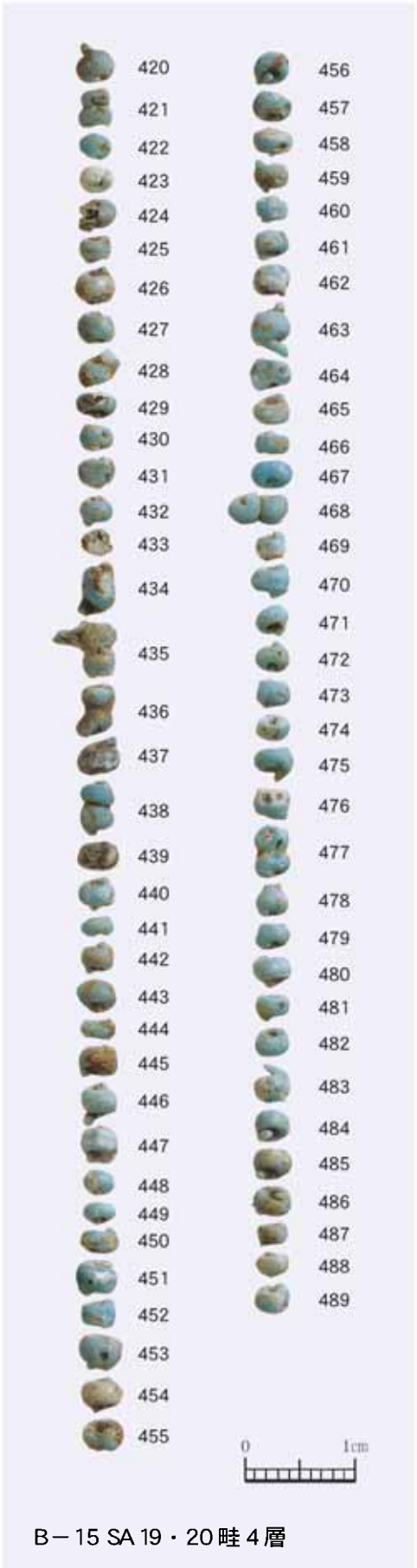
第35表④ ガラス玉（写真のみ）計測一覧（計測部位は第64図参照）

単位：mm/g

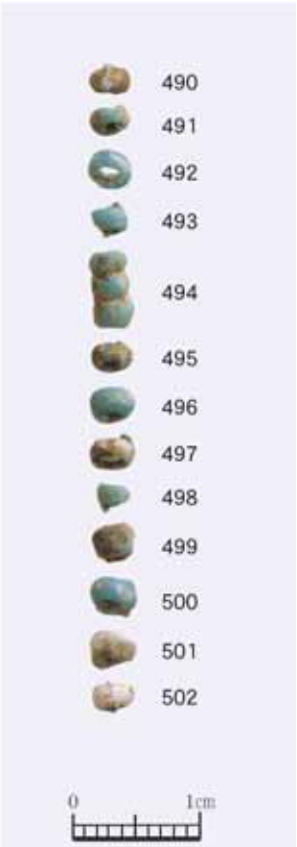
図版番号	遺物番号	形状分類	色調	サイズ 長軸	サイズ 短軸	サイズ 厚さ	孔径 最大	孔径 最小	重量	出土地
図版4	367	Ⅱ類	青色	3.83	3.00	2.47	0.80	0.38	0.051	B-15 SA19 一括遺物 4層
	368			3.44	2.81	2.41	0.34	0.19	0.047	
	369			4.18	3.38	1.67	0.40	0.39	0.037	
	370			—	—	—	—	—	0.090	
	371			3.38	3.09	2.36	0.69	0.41	0.044	
	372			3.71	3.22	1.58	0.30	0.16	0.041	
	373			3.62	3.47	1.84	0.42	0.08	0.050	
	374			3.82	3.49	2.49	0.76	0.74	0.057	
	375			3.81	2.93	1.69	0.41	0.38	0.026	
	376			4.15	3.76	2.02	0.58	0.36	0.065	
	377			3.73	3.15	1.49	0.59	0.38	0.042	
	378			3.09	2.93	2.62	0.51	0.26	0.044	
	379			3.54	3.24	1.97	0.84	0.39	0.035	
	380			4.01	3.41	2.11	0.72	0.35	0.042	
	381			3.29	3.14	2.22	0.58	0.51	0.042	
	382			3.59	3.46	2.00	1.09	1.08	0.034	
	383			2.86	2.79	1.65	0.94	0.62	0.026	
	384			4.44	3.56	2.10	0.51	0.49	0.052	
	385			4.01	3.83	2.47	0.43	0.24	0.059	
	386			3.74	3.52	2.17	0.62	0.48	0.062	
	387			3.26	3.09	1.45	3.21	3.18	0.029	
	388			3.35	3.34	1.91	0.75	0.65	0.042	
	389			2.93	2.63	1.44	0.71	0.50	0.024	
	390			3.99	3.67	2.42	0.94	0.86	0.058	
	391			2.99	2.96	1.73	0.69	0.48	0.030	
	392			3.43	3.41	1.68	1.37	1.26	0.041	
	393			3.70	3.51	1.87	0.65	0.45	0.047	
	394			3.64	3.34	1.37	0.71	0.58	0.036	
	395			3.66	3.54	1.64	0.59	0.52	0.038	
	396			2.95	2.90	1.76	0.71	0.33	0.025	
	397			3.30	2.91	2.00	0.79	0.31	0.029	
	398			3.01	2.86	1.75	0.94	0.93	0.023	
	399			—	—	—	—	—	0.083	
	400			3.39	3.27	2.21	0.65	0.31	0.044	
	401			4.06	3.95	2.71	0.94	0.68	0.059	
	402			4.02	3.47	2.37	0.32	0.04	0.064	
	403			—	—	—	—	—	0.096	
	404			3.05	2.57	2.32	0.34	0.17	0.034	
	405			—	—	—	—	—	0.075	
	406			3.04	2.99	2.05	0.52	0.23	0.034	
	407			3.38	2.99	2.26	0.54	0.18	0.051	
	408			—	—	2.40	0.25	0.23	0.030	
	409			—	—	—	—	—	0.058	
	410			—	—	—	—	—	0.080	
	411			3.46	2.79	2.35	0.71	0.20	0.045	
	412			2.97	2.95	1.61	0.87	0.60	0.030	
	413			3.14	2.81	1.95	0.28	0.17	0.029	
	414			3.27	3.15	2.13	0.49	0.31	0.040	
	415			3.14	3.10	2.27	0.80	0.27	0.039	
	416			3.34	3.24	1.95	0.61	0.40	0.037	
	417			2.95	2.91	1.97	0.57	0.33	0.031	
	418			3.44	3.22	2.76	0.45	0.12	0.056	
	419			3.44	3.13	2.04	0.46	0.16	0.032	
	420			3.73	3.26	2.15	1.27	0.36	0.053	B-15 SA19・20 畦4層
	421			—	—	—	—	—	0.044	
	422			2.94	2.74	1.88	0.61	0.36	0.027	
	423			3.01	2.76	1.36	0.50	0.32	0.021	
	424			4.04	2.78	2.26	0.84	0.52	0.027	
	425			2.68	2.47	1.86	1.00	0.22	0.027	
	426			3.63	3.26	2.52	0.70	0.42	0.028	
	427			3.35	3.10	2.25	0.90	0.34	0.050	
	428			3.35	3.27	2.07	0.71	0.32	0.044	
	429			3.59	3.18	1.68	0.60	0.32	0.036	
	430			3.14	3.03	1.67	1.66	0.42	0.035	
	431			3.35	2.59	2.05	0.73	0.39	0.038	
	432			3.20	2.81	1.85	0.40	0.27	0.038	
	433			—	—	—	0.42	0.28	0.015	
	434			—	—	—	—	—	0.072	
	435			—	—	—	—	—	0.115	
	436			—	—	—	—	—	0.077	
図版4	437	Ⅱ類	青色	3.99	3.61	2.37	0.49	0.20	0.061	B-15 SA19・20 畦4層
	438			—	—	—	—	—	0.075	
	439			3.61	3.42	2.07	0.89	0.63	0.044	
	440			3.40	3.37	2.06	0.83	0.54	0.046	
	441			2.88	2.86	1.58	0.65	0.32	0.023	
	442			3.24	2.87	2.31	0.74	0.17	0.038	
	443			3.75	3.12	2.49	0.69	0.19	0.044	
	444			3.20	2.85	1.64	0.62	0.36	0.028	
	445			3.57	3.44	2.12	0.61	0.06	0.053	
	446			3.40	3.36	2.21	0.98	0.79	0.052	
	447	Ⅰ類	青色	3.76	3.38	2.17	0.79	0.57	0.048	
	448	Ⅱ類	青色	3.06	2.89	1.56	0.77	0.47	0.027	
	449			2.78	2.77	1.04	0.39	0.17	0.022	
	450			3.48	3.04	0.74	0.36	0.17	0.041	
	451			3.35	3.16	2.58	0.69	0.42	0.044	
	452			2.72	2.44	1.62	0.54	0.27	0.023	
	453			3.47	3.41	2.00	0.60	0.52	0.051	
	454			3.17	3.11	1.87	0.72	0.56	0.038	
	455			3.32	3.16	1.77	0.71	0.59	0.026	
	456			3.25	2.99	1.93	0.88	0.46	0.043	
	457			3.55	3.52	2.01	0.96	0.55	0.048	
	458			3.62	3.36	1.87	1.44	0.42	0.042	
	459			3.17	3.11	2.08	0.52	0.16	0.038	
	460			2.93	2.84	1.65	0.91	0.65	0.028	
	461			3.15	2.96	1.88	0.62	0.45	0.037	
	462			3.45	3.43	2.56	0.77	0.51	0.052	
	463			3.60	3.49	3.12	3.54	3.52	0.078	
	464			3.75	2.83	2.13	0.84	0.47	0.049	
	465			3.20	3.02	1.84	0.70	0.41	0.038	
	466			3.11	2.86	2.16	0.82	0.44	0.030	
	467			3.67	3.58	2.07	1.10	0.62	0.042	
	468			—	—	—	—	—	0.081	
	469			2.84	2.75	2.27	0.42	0.33	0.030	
	470			3.56	3.06	2.03	0.80	0.38	0.046	
	471			3.20	3.17	1.56	0.98	0.68	0.030	
	472			3.04	3.30	1.93	0.94	0.52	0.030	
	473			3.20	2.94	2.03	1.13	0.31	0.039	
	474			3.08	3.01	1.74	0.81	0.45	0.028	
	475			3.55	3.47	1.77	0.80	0.50	0.044	
	476			3.35	3.24	2.03	0.73	0.39	0.050	
	477			—	—	—	—	—	0.072	
	478			3.00	2.98	2.99	0.49	0.28	0.038	
	479			3.18	2.96	1.56	0.50	0.43	0.033	
	480			3.49	2.73	1.86	0.89	0.64	0.043	
	481			3.09	3.01	1.66	3.11	3.01	0.031	
	482			3.05	2.95	2.13	0.48	0.40	0.035	
	483			3.54	3.29	1.93	0.76	0.63	0.044	
	484			3.45	3.21	1.74	0.81	0.66	0.041	
	485			3.55	3.28	1.84	0.82	0.43	0.047	
	486			3.47	3.44	2.07	0.80	0.42	0.043	
	487			2.79	2.73	2.12	0.56	0.31	0.025	
	488			3.03	2.97	1.65	0.58	0.42	0.315	
	489			3.41	2.92	2.49	0.58	0.43	0.039	
	490			3.10	2.87	1.97	0.83	0.46	0.032	B-15 SA19・20 畦床面 清掃
	491			3.01	2.91	1.50	0.77	0.23	0.025	
	492			3.39	3.36	1.66	1.78	1.68	0.024	
	493			2.95	2.80	1.69	0.66	0.40	0.027	
	494			—	—	—	—	—	0.100	
	495			3.30	3.08	1.73	0.69	0.21	0.030	
	496			3.72	3.59	2.01	0.71	0.30	0.055	
	497			3.60	3.29	2.01	0.96	0.40	0.041	
	498			2.63	2.44	1.39	0.33	0.16	0.019	
	499			3.57	2.76	2.39	0.31	0.22	0.046	
	500			3.74	3.26	1.85	0.79	0.65	0.050	
	501		白濁	3.64	3.10	2.01	0.65	0.57	0.050	
	502			3.33	3.29	1.94	0.56	0.36	0.037	
	503		青色	2.96	2.84	1.87	0.87	0.39	0.028	不明
	504			3.60	3.30	1.52	0.87	0.42	0.038	
	505		こげ茶	3.80	2.02	2.10	0.51	0.39	0.044	

※表中の－は、玉の癒着した資料。

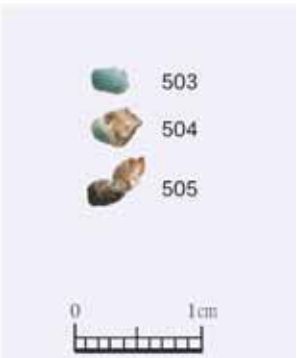
B－15 SA 19―括遺物第４層



B－15 SA 19・20 畦４層



B－15 SA 19・20
畦床面清掃



不明

図版４　土壙SK01（倉庫跡）
ガラス玉（写真のみ、図版番号と計測表の番号は一致）

図版５　土壙SK01（倉庫跡）
火熱を受けて湯玉状に再凝固した玉類の滓

20. 朱漆器の塗膜（図版６B）

土壙SK01（倉庫跡）より出土した朱漆器の塗膜破片から良好な資料については、四柳嘉章氏によって分析と報告（註１）がなされている。今回報告する塗膜片の資料は、前回の分析から除外された４点の資料である。

当該資料は発掘直後から塗膜の変形や歪曲化がみられたものであり、今日まで純水や高級アルコールで保存してきたものである。現時点では塗膜片が比較的安定し、外観からの肉眼観察が可能と判断されたので観察結果を第36表に呈示した。

観察の結果と比較ができるように前回の報告で使用した写真（図版６A）を四柳嘉章氏の承諾を得て再度掲載した。将来において、詳細な分析や比較研究ができるように観察結果などを基にして、以下の二つのグループに分類し、整理をおこなった。

グループ①：表面の朱漆と裏面の木胎および木目が僅かに残存するもの。２点（図版６B－B、図版６B－D）。

グループ②：表面の朱漆と裏面の「地の粉漆下地層」までが残存するもの。２点（図版６B－A、図版６B－C）。

前回、分析を依頼した四柳氏の報告では以下のような塗膜分析の結果と所見が記されている。

塗膜分析（図版６A参照）では、「塗装工程（黎漆）は下から①地の粉漆下地層。層厚最大は121μm。地の粉（鉱物粒子）は斜長石・石英・雲母などから構成されている。二次的焼成はみられない。ごく少量であるが藍色（インジゴ）に粒子がみられ（図版６A－２・４）、その粒径は５～８μm程度である。次に②黒色漆層が施されている。層厚は平均すると30μm前後である。一見すると通有の漆層にみえるが、よく観察すると油煙による黒色顔料が薄く沈殿している（図版６A－２～４）。③上塗は朱漆であり、層厚は平均32μm前後。朱（HgS）粒子は１～0.5μmほどの極めて均一な微粒子から構成されている（図版６A－５）。蛍光X線分析では朱（HgS）の他に若干の鉄分（Fe）に含まれていた。」と報告をおこなっている。所見では「出土漆器については本例が最初となる。・・・本例は木胎が依存しないので困難をともなうが、若干所見を述べておくことにしたい。まず木胎（木地）に上に施される漆下地の地の粉構成物であるが、・・・斜長石・石英・雲母などが確認できた。伝世の琉球漆器の調査では地の粉はすべて焼成されたもので、酸化鉄に富むものとそれが希少なものとに大別され、前者は「火成岩グループ」と、泥岩・砂岩の「堆積岩グループ」に細分した。堆積岩グループに属するクチャはアルカリ性粘土の第三紀泥岩、ニービは斜長石・石英・石灰岩・雲母・鉄分・貝片などを含む第三紀砂岩、コーラルサンドは石灰質砂である。試料に近いのはニービやクチャであるが、情報量の少ない現状では産地の特定はできない。今後の検討課題としたい。」と述べている。その他、四柳氏の所見を踏まえて金城亀信は、「京の内の漆器のインジゴが琉球藍であったと断定はできないとしているものの、本土や中国の漆器の下地に藍を混入した例は現状では認められず、偶然の所産ではあろうが、藍の形質は琉球漆器の特定に重要な材料として検討する価値はある。」と報告（註２）をおこなった。

県内遺跡から出土した漆器の主な例を挙げると首里城正殿基壇部分（註３）、恩納村山田グスク（註３）、うるま市勝連城跡（註３）、などで出土している。近年、渡地村跡（註４）からも朱漆と黒漆が塗布された木篦状の製品が出土するなど、若干の増加が窺えるところである。

註文献

註１．四柳嘉章「首里城京の内跡出土朱漆器の科学的分析」『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）－』沖縄県教育委員会 1998年３月。

註２．金城亀信「首里城京の内跡出土の陶磁器と漆器について」第３回（99年度）琉球漆芸研究会議『琉球漆芸研究会議報告書』浦添市美術館 2001年３月。

註３．奈良国立文化財研究所　埋蔵文化財センター「漆製品出土遺跡分布図－西日本編－」『埋蔵文化財ニュース』 NO.70　1991年１月。

註４．沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第46集『渡地村跡－臨港道路那覇１号線整備に伴う緊急発掘調査報告－』沖縄県立埋蔵文化財センター　平成19（2007）年７月。

朱漆表面の状況

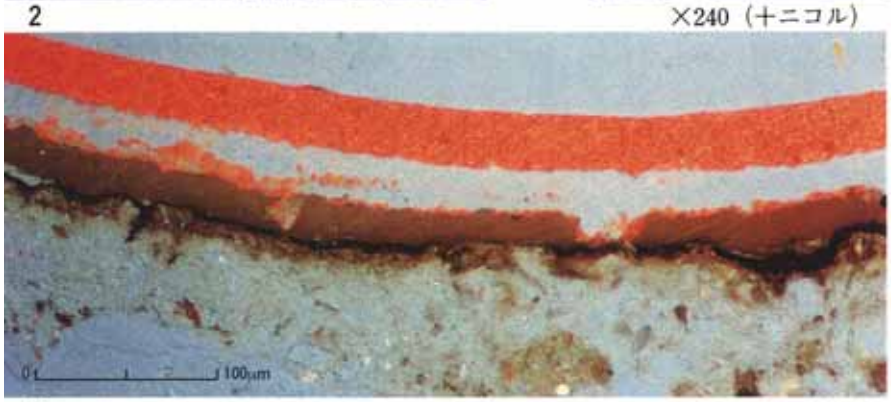
1　×12

朱漆層（剝離）

黒色漆層（油煙が沈殿）

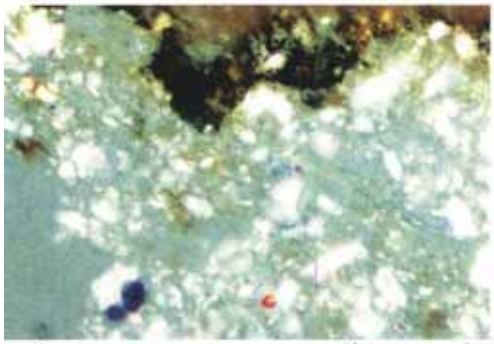
地の粉漆下地層
（微細な藍色粒子が含まれている）

2　×240（十ニコル）

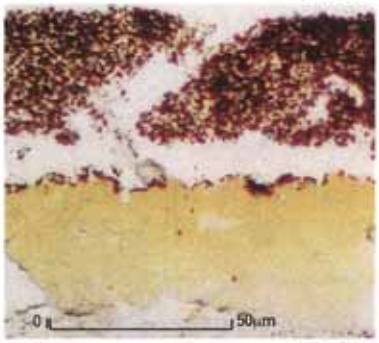


同　上

3　×240

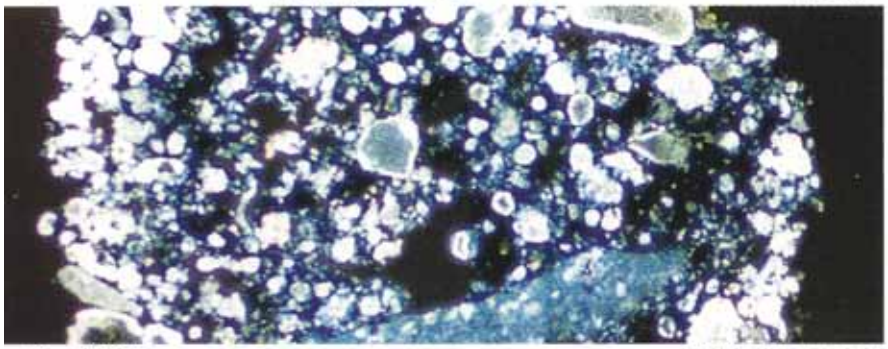


4は下地部分の拡大で藍色粒子の分散が知られる



5は上塗朱漆層の拡大で、細かく均一に破砕された朱粒子であることがわかる

4　×480（十ニコル）　5　×480



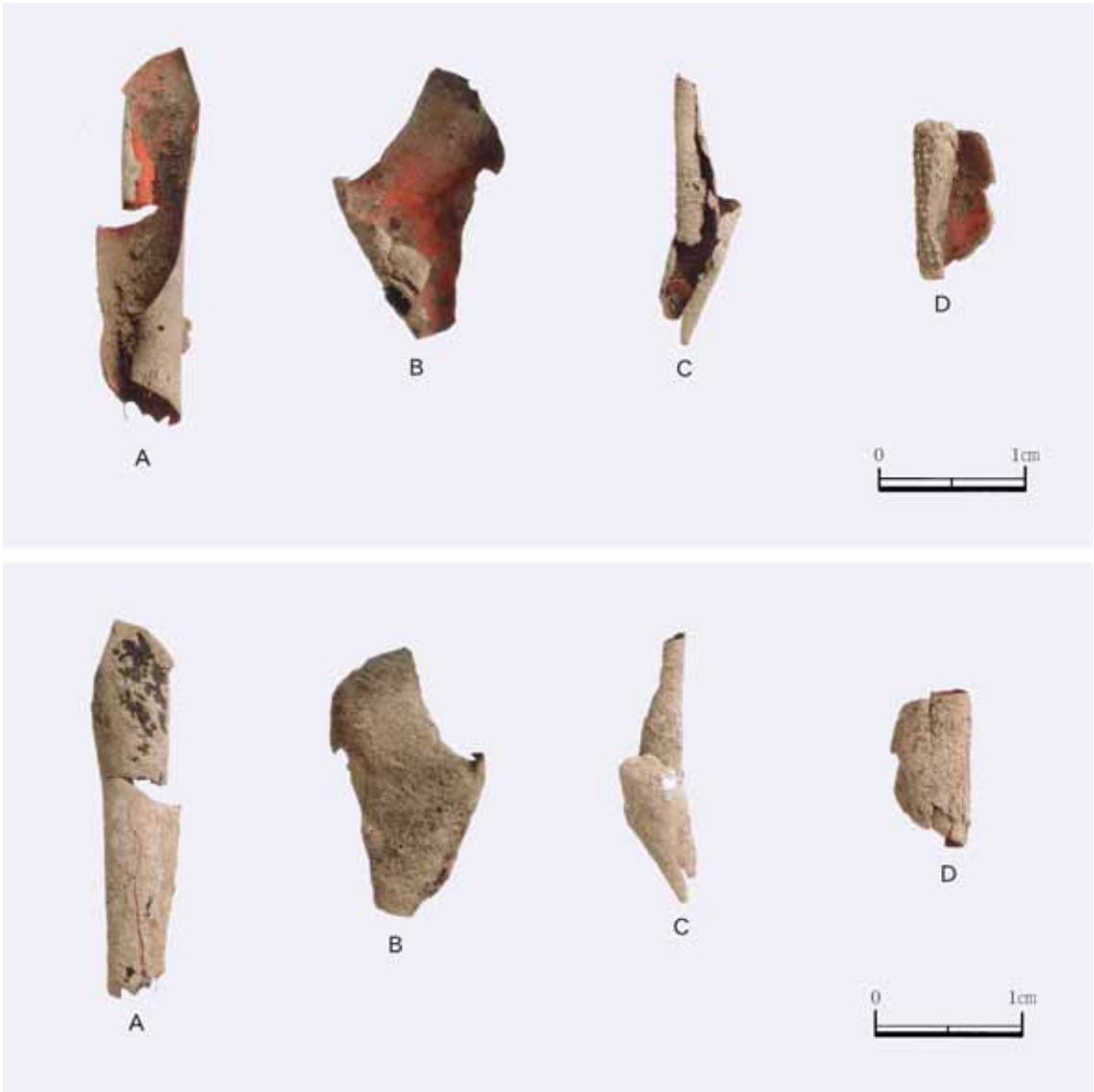
1993年製造の琉球藍（資料提供は浦添市美術館）

6　琉球藍　×120（十ニコル）

図版６Ａ　漆器塗膜顕微鏡写真

第36表　朱漆器の塗膜観察一覧

図版番号	残存法量(㎜/g)	出土地	観　察　事　項
図版６B-A	長軸 26.05 短軸 5.67 重量 0.0344	SA20第３層	残存厚0.17㎜。乾燥による湾曲変形。表面は表の朱漆と地の粉漆下地層がみられる。裏面は地の半分が漆下地層で上部の剥離面から黒色漆層(油煙沈殿)が部分的にみられる。
図版６B-B	長軸 18.60 短軸 9.70 重量 0.0440	SA20第３層	残存厚0.23～1.05㎜。乾燥による湾曲変形。表面の左下に炭化した木胎が僅かに観察できる。また、表の朱漆の大半が煤けて変色し、部分的に煤が付着する。裏面の大半は地の粉漆下地層で粉が付着したような器面となる。中央から下位にアバタ状に黒色漆層がみられる。
図版６B-C	長軸 18.70 短軸 4.28 重量 0.0291	SA20第３層	残存厚0.21㎜。乾燥が極度に進行し強く湾曲した為、円柱状となる。表面は表の朱漆と地の粉漆下地層がみられる。裏面は地の粉漆下地層のみで部分的に黒色漆層(油煙沈殿)がみられる。
図版６B-D	長軸 10.92 短軸 4.90 重量 0.0391	SA20第３層	残存厚0.08～0.46㎜。乾燥によって強く湾曲。表面は表の朱漆と地の粉漆下地層。裏面は大半が地の粉漆下地層であるが屈曲部分に木胎の木目が縦位に２・３条走っている。
重量計(g)	0.1466	※A～D以外の破片(５㎜以上20片)の残存する塗膜片の総重量の合計は0.3787g。	



図版６B　土壙SK01（倉庫跡）
朱漆器の塗膜（上：表、下：裏）

21. 石器・石製品（第66図１～５）・(図版49－１～５)

京の内倉庫跡（土壙SK01）から出土した石器・石材・石製品などの総数は、第37表に示した22点が得られている。石器で確認された器種は、磨石（５点）・砥石（５点）・石弾（11点）の三種類であった。特に石弾片が多いようである。硯は小型の携帯用とみられる硯が１点出土している。その他に細粒砂岩を主体とする石材片が多く出土している。

これらの資料から形状の窺える資料や機能が明確なものなどを第66図１～５に図化した。同図１が磨石、同図２は砥石、同図３・４の二点が石弾である。硯は同５に掲載した。なお、個々の特徴などについては、第38表の観察一覧に記述した。

第37表　土壙SK01(倉庫跡)石器・石製品出土状況

種類＼出土地		SA19		SA20				SA19・20			小計	合計
		第3層	一括遺物3層	一括遺物東壁から崩れ落ち	一括遺物2層	一括遺物3層	第2層	畦2層	畦3層	畦4層		
石器	磨石						1	1	2	1	5	21
	砥石		1			1		1	2		5	
	石弾	1		1	2			4	2	1	11	
石製品	硯								1		1	1
合　計		1	1	1	2	1	1	6	7	2	22	22

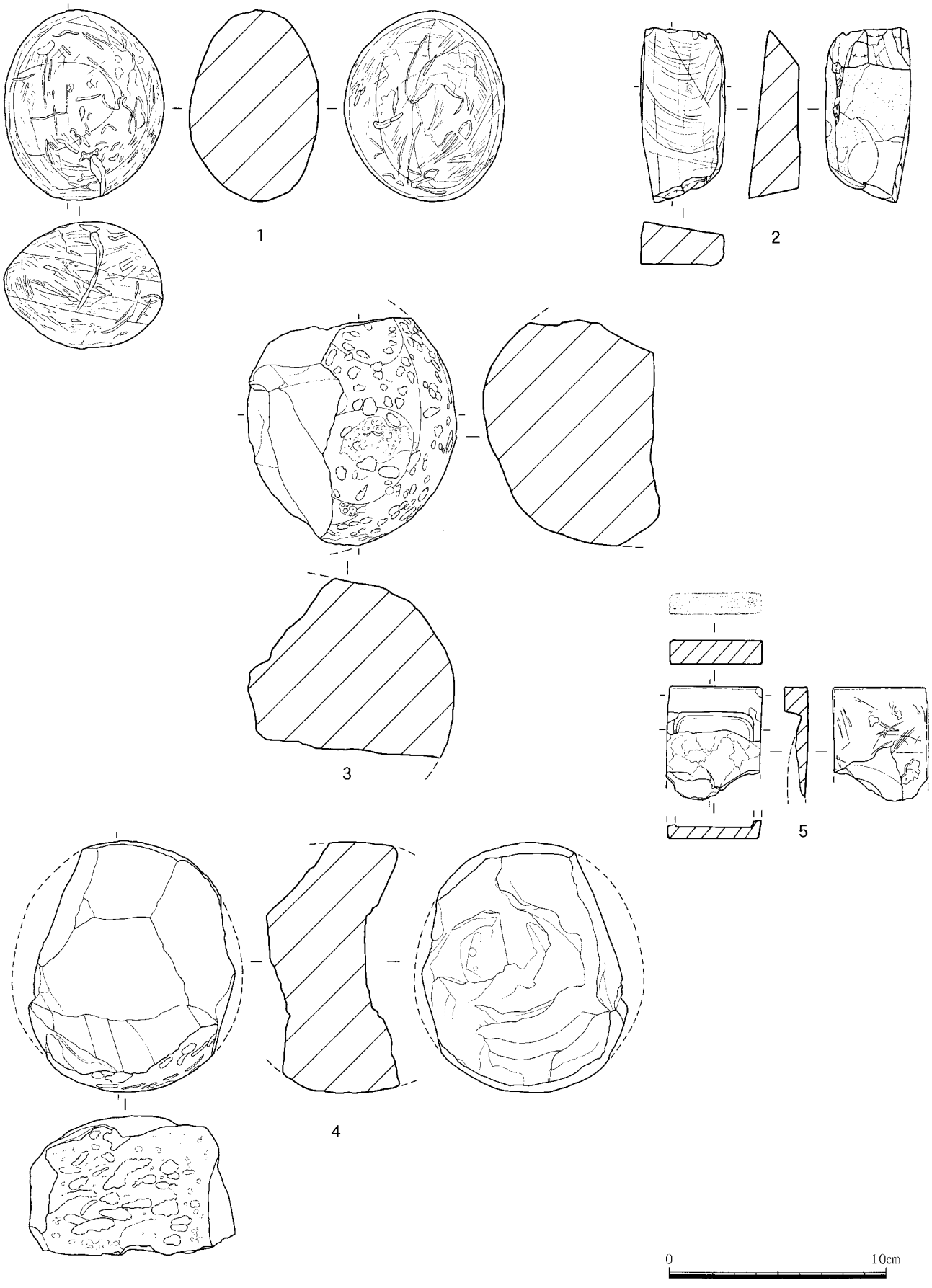
第38表　土壙SK01(倉庫跡)石器・石製品観察一覧

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	観察事項等	出土地点 出土層
第66図 図版49 1	石器 磨石	平面観が扁楕円形状を呈する完形の磨石。手頃な河原石を磨石と利用したもので、敲打痕は上下端部と右側にみられる。正面の中央から左側面中央にかけて浅く窪んだ範囲は使用によって生じた磨面となっている。他の面は自然面である。花崗岩製。長軸8.6cm、短軸7.2cm、厚さ5.6cm、重量470g。	SA20 第2層
〃 〃 2	石器 砥石	平面観が歪な台形状を呈する砥石。正面の左側面は使用によって破損した面であり。石室の節理から縦位に剥離した面である。正面は使用面（砥面）で、使用によって平坦な面となっている。砥面は全体的に光沢が縞状となって残っている。裏面の上位から中央付近は自然に剥離にした自然面であり、下位にのみ使用による砥石面が観察される。裏面の左側面の縁辺部は角を潰した際の調整剥離である。この剥離面の縁辺部は敲打調整後の砥石としての使用などによって敲打痕は潰れて、滑らかな手慣れ様の磨面となっている。裏面の上位から縁辺部は、破損面である裏面下端部は自然面とみられる。砂岩製。長軸7.9cm、短軸3.9cm、厚さ2.4cm、重量111g。	SA19・20 畦第3層
〃 〃 3	石器 石弾	本来は球体状の石弾であったものが、落下などによって破損したものである。倉庫火災の際に保管されたものが落下により破損したしたものとみられる。表面及び破損面に鉄製品や青銅製品が火熱を受けて溶けたものが付着している。残存する表面は鉄製の鑿などによって成形加工されたようであり、成形時の加工痕である敲打痕が全面で観察される。敲打調整は球体に成形する為、緻密に丁寧に施されている。表面の一部は火熱を受けた際に煤が楕円形状に残っている。細粒砂岩（俗称：ニービ）製。長軸10.7cm、短軸9.5cm、厚さ8.07cm、重さ985g。	SA19・20 畦第3層
〃 〃 4	石器 石弾	〃　。　〃　。残存する表面は鉄製の鑿などによって成形加工されたようであり、成形時の加工痕である敲打痕が全面で観察される。敲打調整は球体に成形する為、緻密に丁寧に施されている。細粒砂岩（俗称：ニービ）製。長軸11.3cm、短軸8.5cm、厚さ4.6cm、重さ757g。	SA19 第3層
〃 〃 5	石製品 硯	墨岡の大半を欠いた小型の硯（携帯用硯か）である。硯の墨池が僅かに残る程度である。研磨で仕上げて、研磨面は表裏面・上面・両側面に観察できる。表面の墨池は鑿状の工具で両脇から抉ったようであり、製作時の製作痕とみられる線状痕が縦位に走っている。。裏面は使用時の小さな剥離や傷が部分的に観察される。細粒砂岩（俗称：ニービ）製。長軸11.3cm、短軸8.5cm、厚さ4.6cm、重さ30.8g。	SA19・20 畦第3層

参考文献

１．当眞嗣一「火矢について」『南島考古』第14号　学会創立25周年記念特集号　沖縄考古学会　1994年12月。

２．笹間良彦『図録 日本の合戦武具事典』柏書房株式会社　1999年1月。

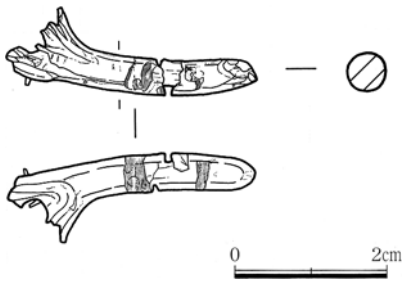


第66図　土壙SK01（倉庫跡）
石器・石製品

22. 木製品・骨製品（第67図・第68図）・（図版50・図版51－１・２）

木製品（１点）と骨製品（２点）が３点出土していたので、これを第67図と第68図１・２に図化した。木製品は籐か竹を利用したものであるが、その用途について判然としないが、サイズや成形などから丸櫃などの骨組みの一部ではないかと考えられる。木製品の一部を青銅製の紐で二箇所を緊縛している。詳細な記述については第39表に表した。

骨製品２点の内、１点は平面観が細身の木葉状となる骨鏃で、他の１点は革製品や布製品などに使用された留め具の一部ではないかと考えられた資料である。以下、個々の特徴などについては第39表に呈示した。



第67図　土壙SK01（倉庫跡）
木製品

23. ガラス質の滓（図版52）

火災によって溶解したガラス製品の一部が、ガラス質の滓となった資料が１点（図版52）出土している。特徴などについては、第39表に記した。

第39表　土壙SK01(倉庫跡)木製品・骨製品・ガラス質の滓観察一覧

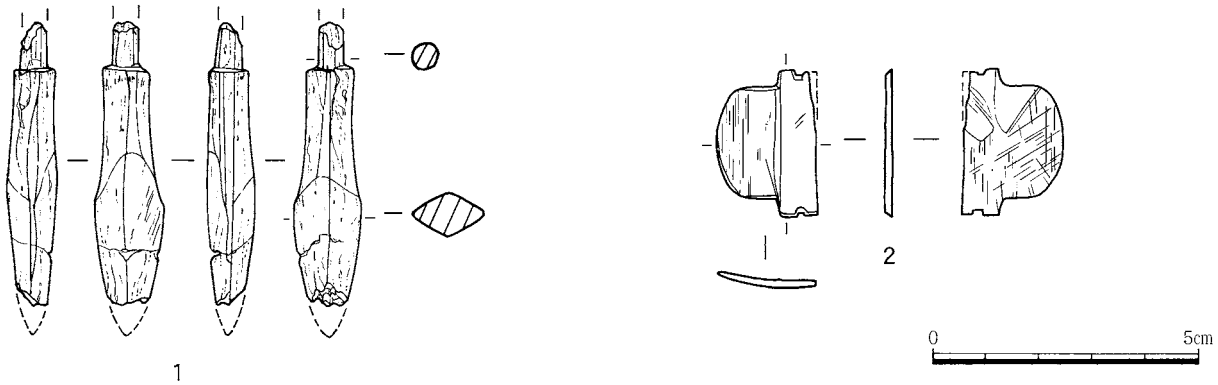
挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	観　察　事　項　等	出土地点 出土層
第67図 図版50	木製品 用途不明	青銅を紐状に加工したもので、緊縛した木製品である。表面の青銅製の紐は残っていないが、緊縛した部分は黒く変色し、緑青が途切れながら観察される。木製品の用途は判然としないが、右側端部のみが砲弾状に尖っている。左側の破損状況からすると、素材が籐、若しくは竹を利用した製品（丸櫃などの蓋や身の骨組み、など）が今のところ考えられる。長さ3.3cm、直径4.6cm。	SA19・20 畦第2層
第68図 図版51 1	骨製品 骨鏃	鏃の先端と茎部の端を欠失した資料である。鏃身の平面形状は先端が細身となる木葉状を呈し、表裏面の先端部中央に明瞭な稜線が走る。先端部の横断面が菱形となる。先端部の両縁の刃は、鉄製の工具で削り出して刃部を製作する。鏃身の基部は横断面が歪な扁楕円形となり、刃部から基端まで雑な削りで成形している。茎部は横断面が歪な楕円形で、鏃身基端から基部を丁寧に削りながら茎部を作製している。基部は途中から欠失している。全面加工品であるため素材が判別しがたいが、ジュゴンやウシではないかと考えられる。長さ5.3cm、鏃身最大幅1.3cm、鏃身最大厚さ9.2mm、鏃身基端8.6mm、茎部直径5.1～5.7mm、重量3.8g。	SA19・20 畦第3層
〃 〃 2	骨製品 留め具	厚さ0.8～1.6mmを測る薄手の製品で、平面観が凸状となっている。右側の上端部と下端部を凹状に削り取っている。この凹状の窪みは、深さ0.8mmを測り、当該製品を対象物へ固定する際に利用された窪みと解される。左側は突出した隅丸半円で、この部分が受け口に入るものとみられる。横断面を観察すると丁度、当該製品を固定した部分は平坦で、受け口に入る箇所が僅かに反っていることなどからズボンの鈎状のホックと形状が近似することから留め具（鈎状のボタン）とした。当該製品より軟質の革や布などをとめる際に取り付けられたものとして考えられる。調整痕は表面右側固定部分では削りの痕跡が研磨で消されているが、挿入部分との境に微弱な段差ができている。正面左側の挿入部分にも研磨による微細な線状痕が観察できるが、左端に近い部分では線状痕が粗くなっている。裏面は刃物による削り成形が雑に施されている。素材が全面加工品であるため、判別しがたいが断面の形状などからウシの骨が考えられる。右側固定部（長さ27.4mm、幅7.2mm）、左側挿入部（縦20.4mm、突出部長さ11.4mm）、重量0.8g。	SA19・20 畦第3層
図版52	ガラス質 の滓	倉庫内火災によって溶解したガラス製品が再凝固したものである。質感が軽石状となり、粗密な気泡痕が多く観察できる。また、重さも見掛けより軽くなっている。表面には青銅製品が溶けて再凝固した部分がシミ状に残っている。長軸5.4cm、短軸3.7cm、厚さ2.6cm、重さ9.28g。	SA19 第3層

参考文献

1．上原　静「第Ⅱ章 二の郭、三の郭、北貝塚 遺物全般」『勝連城跡―北貝塚、二の郭および三の郭の遺構調査―（1）』勝連町教育委員会 1990年３月。

2．平井　勝『考古学ライブラリー　64　弥生時代の石器』　ニュー・サイエンス社 1991年11月。

3．笹間良彦『図録 日本の合戦武具事典』柏書房株式会社 1999年１月。



第68図　土壙SK01（倉庫跡）
骨製品

第４節　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか出土の遺物

京の内土壙SK01（倉庫跡）の覆土（第１層）や攪乱部分、栗石内などから出土した資料（以下、「覆土ほか」と表記）を中心に報告する。覆土ほか出土の遺物として、土器（グスク土器）、瓦質土器、須恵器、中国産褐釉陶器、黒釉陶器、瑠璃釉、三彩、沖縄産無釉陶器、中世陶器などが得られている。

これらの資料には、京の内倉庫が1459年に起きた火災により消失した時代と一致しない古手の須恵器が含まれていたり、或いは極端に時代が懸け離れた近・現代の本土産陶磁器やアルミニウム製の銭貨、戦時中の砲弾破片などがある。以下、遺物の種類毎に分けて報告する。

１．土器

土器は細片化したグスク土器の胴部片が３点（内訳：SA19栗石内から２点、SA19・20第１層より１点）出土している。当該資料は破片が小さかった為、図化を省略した。

２．瓦質土器（第69図１）・(図版53－１)

瓦質土器も全て細片化したものであり確認された器種は、擂鉢・鉢の二器種のみであった。出土点数は第40表に示した７点が出土している。この中から鉢の１点を第69図１に呈示した。特徴などについては、第41表に記載した。

３．須恵器（第69図２）・(図版53－２)

須恵器は徳之島で生産されたカムィヤキ須恵器とみられる胴部破片が１点（第69図２）出土している。特徴などは第41表に示した。

４．中国産褐釉陶器（第69図３）・(図版53－３)

特殊な鉢、若しくは脚台のような中国産褐釉陶器が１点得られていたので、第69図３に図化した。特徴などについては、第41表に呈示した。類似例資料が我謝遺跡で出土しているが、その用途は明確ではない。

参考文献

○西原町文化財調査報告書第５集『我謝遺跡－分譲住宅造成に係る緊急発掘調査－』沖縄県西原町教育委員会 1983年３月。

５．黒釉陶器（第69図４）・(図版53－４)

中国産の黒釉陶器は、いわゆる天目茶碗である。口縁部の破片が１点得られてたので、これを図化（第69図４）した。特徴などについては、第41表の観察表に示した。

６．瑠璃釉（第69図５・６）・(図版53－５・６)

中国景徳鎮窯で生産された瑠璃釉の瓶（胴部）と水注（注ぎ口）の破片が２点（第69図５・６）得られている。個々の特徴などについては、第41表に記した。

７．三彩（第69図７・８）・(図版53－７・８)

中国明代の華南三彩（鶴形水注）の胴部片が２点出土していたので、これを図化（第69図７・８）した。特徴などは第41表に記述した。鶴形水注の類似資料については、豊見城市内や久米島町内で確認されている。

参考文献

○金城亀信「豊見城村内確認の明代三彩鶴型水注」『文化課紀要』第６号 沖縄県教育委員会 1990年３月。
○亀井明徳「久米島における華南三彩陶の新資料」『久米島自然文化センター紀要』第８号　久米島自然文化センター 2008年３月。

8．沖縄産無釉陶器（第69図９、第70図２・３）・(図版53－９、図版54－２・３）

沖縄産無釉陶器は、19点（第42表）が出土している。明確に確認された器種は碗・壺の二種類のみであった。細片化資料が多く、その中から形状が窺うことのできる良好な壺の口縁破片（第69図９）と胴部破片（第70図３）、そして碗の口縁資料（第70図２）に図化した。第42表と第43表に特徴などを記した。

9．中世陶器（第69図10）・(図版53－10）

備前焼の壺の口縁破片と器種不明の底部破片が各々１点ずつ出土している。底部破片はSA19・20畦第１層から出土しているが、特徴が希薄であった為、図化を省略した。壺の口縁のみ図化（第69図10）を試みた。特徴などについては、第41表に呈示した。

第40表　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか 瓦質土器出土状況

器種＼出土地		SA19				SA19･20		合計
		覆土	南側栗石内	東ﾄﾚﾝﾁ栗石内	ﾄﾚﾝﾁ第1層	第1層	畦1層	
擂鉢	胴部	1						1
鉢	胴部				1			1
不明	胴部		1	1		1	1	4
	底部					1		1
合　計		1	1	1	1	2	1	7

第41表　土壙SK01(倉庫跡)覆土ほか 沖縄産無釉陶器出土状況

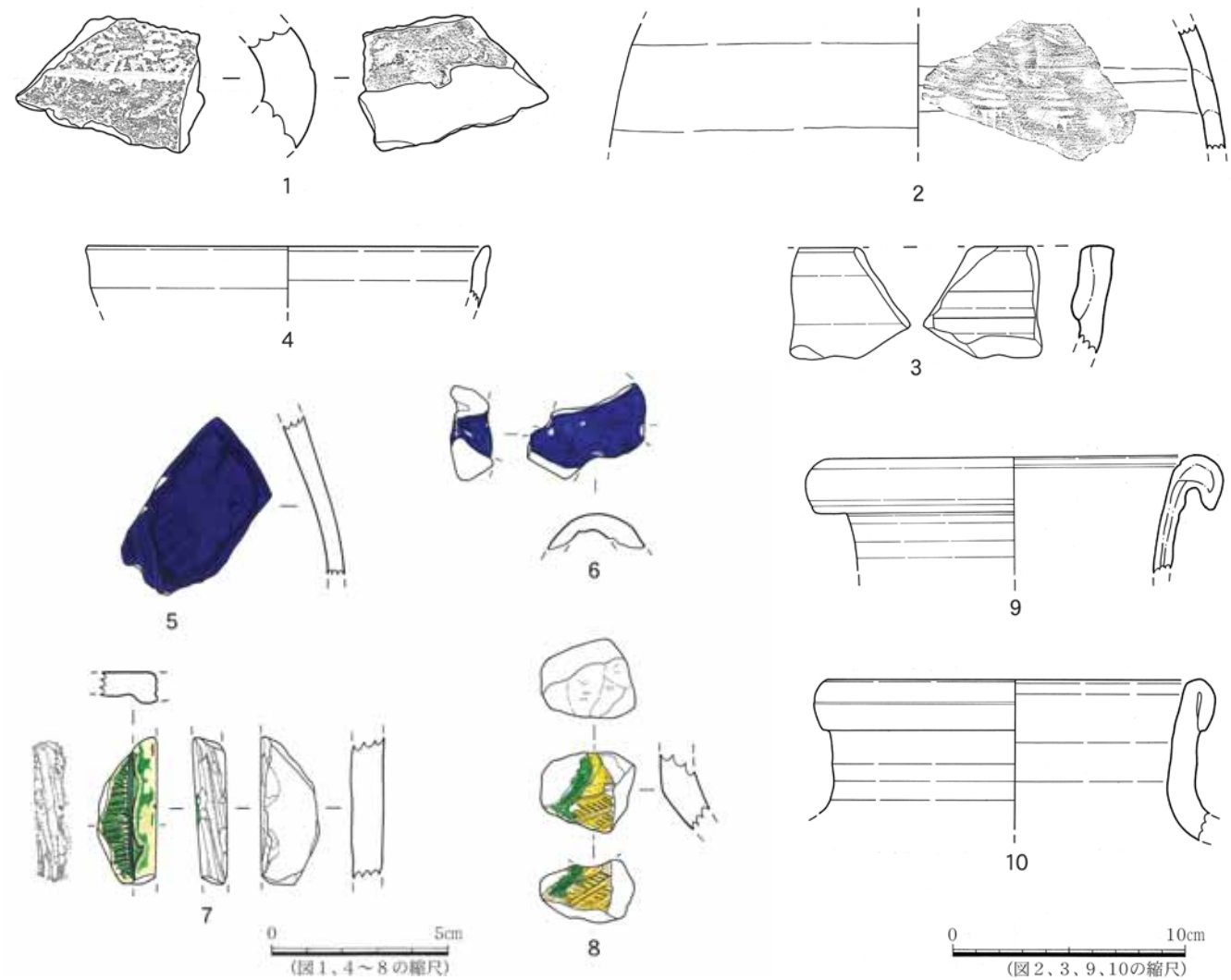
器種･部位＼出土地		SA19			SA20			SA19･20				SA28	合計
		東側ﾄﾚﾝﾁ栗石内	栗石	延長部分北壁側より表採	北側覆土	覆土	第1層	北	北側(第1層)淡褐色混礫土層	間栗石内	畦1層	ﾄﾚﾝﾁ2層覆土(直下)	
碗	口縁部	1											1
壺	口縁部		1						1				2
	胴部	1		1	2	2	1	1	2	1			11
壺or甕	胴部					1					2		3
不明	胴部											1	1
合　計		2	1	1	2	3	1	1	3	1	2	1	18

第42表a　土壙SK01(倉庫跡)覆土ほか 陶磁器類観察一覧

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称･仮称	素地・混入物・色調・釉色	観察事項等	出土地点 出土層
第69図 図版53 1	瓦質土器 鉢 胴部	素地は瓦質で細かい。胎土に微細な雲母･白色鉱物を多く含む。僅かに細かい黒色の鉱物を含んでいる。色調は淡灰色。沖縄産とみられる。	内湾する鉢の胴部片。胴部に直径1.8㎝の菊花文を型起こしによって文様を施し、その直下に区画の界線(幅1.5㎜)を施している。表裏面ともナデ仕上げであるが、内面は雑である。	SA19 ﾄﾚﾝﾁ 第1層
〃 〃 2	須恵器 (壺･胴部)	素地は茶紫色の細粒子。微細な白色鉱物(石英?)を多く含む。釉色は暗茶色の泥釉を外面にのみ残存する。	外面は轆轤痕を主体にして部分的に指ナデがみられる。内面は平行叩きをナデ消すが徹底しない。最大胴径26.6㎝。徳之島産のカムィヤキ須恵器か。	SA19･20 畦1層
〃 〃 3	中国産 褐釉陶器 (鉢か脚台)	素地は橙白色の細粒子。粗密な白色鉱物(長石)を多量に含み、僅かに微細な黒色鉱物が観察される。焼成は堅緻。	口縁部の形状からすると特殊な鉢や脚台などが考えられる。外面は丁寧なナデ仕上げ。内面の調整は雑なナデを主体に施す。内面の口縁途中で浅く凸帯状に盛り上がっている部分があり、この凸帯下端は幅広(7㎜)の篦状工具で押し引いている為、幅広の沈線状となる。	SA20 覆土
〃 〃 4	黒釉陶器 (天目茶碗･口縁)	素地は灰白色の細粒子。微細な黒色の鉱物を少量含む。釉色は茶褐色の釉。貫入はない。	口径の推算が11.5㎝を測る。口縁はひねり返している。口唇部は丸味を持たせて成形する。福州寧徳市飛鸞窯。	SA28 覆土
〃 〃 5	瑠璃釉 (瓶･胴部)	素地は灰白色の微粒子。釉色は藍色の釉。貫入はない。	胴部破片。金彩は確認できないが左側に型起こし、若しくは片切り彫りの様な幅広(4㎜)の文様が縦位の沈線となって確認される。中国景徳鎮窯。	SA19･20 階段遺構 (SA28 第2層)
〃 〃 6	瑠璃釉 (水注･ 注ぎ口)	素地は灰白色の微粒子。釉色は藍色の釉。貫入はない。	水注の注ぎ口で根本に近い部分の破片。型物の成形である。型を合わせた部分から割れている。金彩が僅かに確認できるが、構図は不明。型によって起こされた注ぎ口が龍や鯉なのかは不明。中国景徳鎮窯。	SA15 ﾄﾚﾝﾁ覆土

第42表b　土壙SK01(倉庫跡)覆土ほか 陶磁器類観察一覧

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	素地・混入物・色調・釉色	観察事項等	出土地点 出土層
第69図 図版53 7	三彩 (鶴形水注・胴部)	素地は黄白色の粗粒子。微細な黒色の鉱物が僅かに含まれているが、僅かながら細かい長石(0.5㎜前後)も確認できる。釉色は淡緑色。微細な貫入が観察できる。	中国華南三彩鶴形水注の底部近くの破片で、型を貼り合わせ部分から割れている。文様は青波文を型で起こしている。内面はナデ仕上げで丁寧である。劈開面に型の貼り合わせが容易となるように、櫛様(櫛の幅1～1.3㎜)の工具で深め(深さ1～2㎜)に引っ掻いている。	SA20 覆土
〃 〃 8	三彩 (鶴形水注・胴部)	素地は橙白色の粗粒子。微細な白色の鉱物が多量に含まれている。希に粗い白色や黒色の鉱物がみられる。釉色は黄色を主体に淡緑色の釉が確認できる。微細な貫入がある。	中国華南三彩鶴形水注の胴上部の破片。鶴の羽の最上段の文様が型から起こされている。その上部には注入口の根本部分が確認できる。内面に雑な指圧痕が観察できる。	SA20 覆土
〃 〃 9	沖縄産 無釉陶器 (壺)	素地は茶紫色の微粒子。粗密な白色鉱物(石英?)が少量混入。希に1.5㎜前後の白色鉱物が含まれている。劈開面に縞状に白色や茶褐色の陶土が入っている。内面に灰茶色の自然釉が掛かっている。	口縁端部の陶土を外側に大きく折り曲げて、玉縁状に疑似肥厚を作る。肥厚部の屈曲部分には轆轤の回転による絞り目が亀裂となって現れている。両面に回転擦痕を主体に部分的に指ナデが観察できる。透明釉が垂れている。推算口径は18.0㎝と求められた。	SA19 栗石
〃 〃 10	中世陶器 (備前焼壺)	素地は灰白色の粗粒子。粗密な白色鉱物(長石?)を多く含み、希に細かい茶黒色や灰褐色の鉱物がみられる。外面の頸下部に黄灰色の自然釉が掛かっている。	壺の口縁破片で、口縁は陶土を折り返して玉縁状に肥厚させている。肥厚帯下端を意識して強調する。内外面に回転擦痕が部分的に観察される。内面には指ナデもみられる。推算された口径は16.0㎝であった。	SA20 第1層



第69図　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか出土品①
瓦質土器、須恵器、中国産褐釉陶器、黒釉陶器、瑠璃釉、三彩、沖縄産無釉陶器、中世陶器

10. 陶質土器（第70図１）・(図版54－１）

ここで取り扱った陶質土器は、沖縄の壺屋で生産された所謂「アカムヌー」、或いは「アカモノー」と呼称れている土器である。鍋の把手破片が１点得られていたので、第70図１に図化した。特徴などは第43表に記した。

参考文献

○宮城篤正「陶器 第三章 生業 」『那覇市史 資料編 那覇の風俗』第２巻中の７那覇市 1979年３月。

11. 本土産磁器（第70図４）・(図版54－４）

本土産磁器として印判型紙刷りによる文様を施した瀬戸・美濃窯系の小碗が得られていたので、第70図４に図示した。特徴は第43表に記載した。

12. 円盤状製品（第70図５）・(図版54－５）

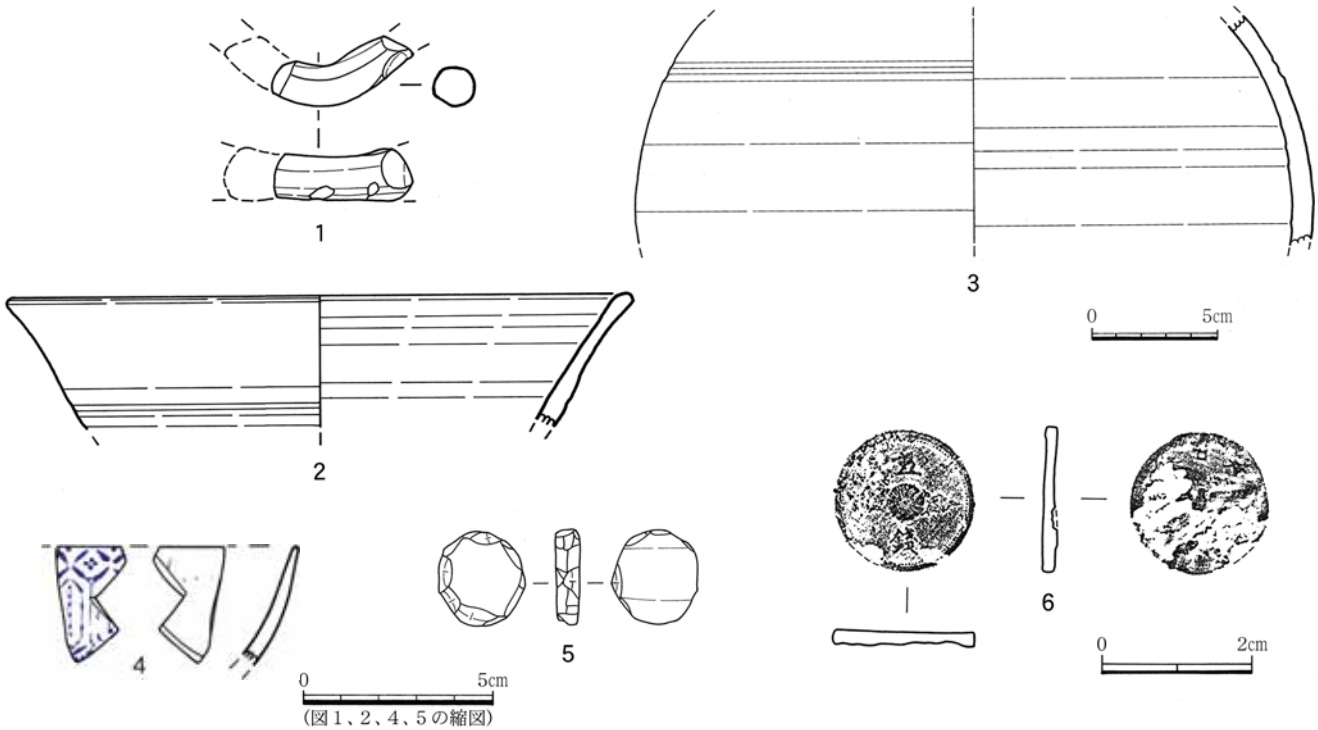
遊具の一種で中国産褐釉陶器壺の胴部片を円形状に打ち欠いた円盤状製品が２点（SA20覆土：１点、SA19・20畦１層：１点）出土している。この内の１点を第70図５に図化した。第43表に特徴などを記した。

参考文献

○上原 静「グスク時代・近世出土の円盤状製品」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第10号 1986年３月。

13. 近・現代の銭貨（第70図６）・(図版54－６）

昭和16（1941）年、若しくは昭和18（1943）年に鋳造されたアルミニウム製の五銭硬貨とみられるものが１点出土していたので、第70図６に図化した。観察事項などについては第43表に掲載した。



第70図　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか出土品②
陶質土器、沖縄産無釉陶器、本土産磁器、円盤状製品、近・現代の銭貨

第43表　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか 陶磁器類観察一覧

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	素地・混入物・色調・釉色	観　察　事　項　等	出土地点 出土層
第70図 図版54 1	陶質土器 （土鍋・把手）	素地は細かい。胎土に微細な雲母片、白色（石英）・茶色の鉱物を多く含む。僅かに細かい黒色鉱物を含んでいる。色調は淡橙色。焼成は良好で、硬い。	紐状に成形した把手を鍋の口縁部に貼り付けていたものである。把手のみ残存する。器面は全体的に摩滅するが、部分的にナデを主体に指圧痕、刷毛目、篦削りの痕跡が確認できる。把手中央の直径は1.06～1.12㎜。	SK01周辺 層不明
〃 〃 2	沖縄産無釉陶器 （碗・口縁）	素地は灰褐色の細粒子。微細な白色や黒色の鉱物を僅かに含む。希に細かい石英や粗い石英（1.2～2.3㎜）が観察できる。	口頸部から微弱に外反する直口口縁の碗。推算された口径は16.4㎝と求められた。外面の轆轤調整痕は口縁から頸部までは水引きの細目の回転擦痕で、頸下部が粗目の回転擦痕である。内面は粗目の回転擦痕が観察される。	SA19 東側ﾄﾚﾝﾁ 栗石内
〃 〃 3	沖縄産無釉陶器 （壺・胴部）	素地は灰褐色の細粒子。粗密な白色鉱物（石英）が少量混入する。希に細かい黒色鉱物が含まれている。劈開面から縞状の白色陶土が観察できる。外面にのみ茶褐色の泥釉とみられる物が塗布されている。	胴部の最大径が27.2㎝を測る小型壺の胴部片とみられる。胴上部に丸彫りの工具（幅2.2㎜と幅2.8㎜）で界線を二条施している。内面の調整は轆轤痕や回転擦痕が観察できる。外面は施釉のため判然としない。	SA19 延長部分 北壁側より 表採
〃 〃 4	本土産磁器 （碗・口縁）	素地は灰白色の微粒子。釉色は白色の透明釉。貫入はない。	印判型紙刷りによる文様を施した小碗の口縁破片。口縁はやや内側に内湾する。文様は口縁部に柳葉状の四つ葉文を横位に展開させるために弁先を小さな丸文で繋ぎ合わせて文様帯を作る。四つ葉文の間に菱形を上下左右に四つ組み合わせた四つ菱形の文様とする。口縁端部では、この四つ菱形の文様は下位の菱形文のみとなっている。四つ菱形の中には、小さな丸文を展開する。胴部下の四つ菱形の中にある小さな丸文までを細い線で区画し、その区画内に縦長の六角形があり、その内側に白抜きで縦長の扁楕円形の文様を縦位に5個配置して、この扁楕円形の文様を太めの線で連結させている。内面の文様はないが2・3箇所呉須が付着している。瀬戸・美濃窯系の所産。	SA20 覆土
〃 〃 5	円盤状製品 （遊具）	素地は灰白色の細粒子。粗密な白色や黒色の鉱物を多く含む。希に白色鉱物（長石?）が観察される。暗褐色の釉が両面に観察される。貫入はない。	中国産褐釉陶器の胴部破片を遊具として加工したものである。打割調整は、主に外面から加えられている。外面から8回程度打ち欠き、内面からは3・4回程度打ち欠いているようである。長軸2.4㎜、短軸2.2㎜、厚さ5.5～6.7㎜、重量4.97g。	SA20 覆土
〃 〃 6	近・現代の銭貨	アルミニウム製。	昭和16年鋳造、若しくは昭和18年鋳造の5銭硬貨。厚さや重量からすると昭和18年鋳造の5銭硬貨の可能性が高い。外面に陽刻の菊花紋章と瑞雲を型で起こす。内面の陽刻は「大日本」と「金鵄」の頭と右側の翼の一部が確認できる。裏面は大半が白色に腐蝕している。サイズ直径19.1㎜、厚さ1.8㎜、重量1.04g。	SA19 第2層一括 遺物に混在

14. 金属製品（第71図１～８、第72図９～22）・（図版55－１～８、図版56－９～22）

金属製品の出土状況については、種類別に分類して第44表を作成したように344点が出土している。これらの中には近・現代の丸釘や戦時中の砲弾破片も含まれている。なお、金属製品の分類に際しては、第Ⅴ章の第２節に掲載しているので参照されたい。

（１）**工具類・生産用具**（第71図１～７、第72図19）・（図版55－１～７、図版56－19）

工具類および生産用具として、釘（第71図１～５）・鎹（同図６）用途不明の板状製品（同図７）・鐶、若しくは紐金具（第72図19）が得られていたので、これを図化した。個々の特徴などは第45表①および第45表②に記した。その他に青銅製の針金が１点出土しているが、集計表にのみ現した。

（２）**祭祀用具**（第71図８）・（図版55－８）

祭祀用具として、鈴の１点（第71図８）を図化した。特徴などは第45表①に記した。

（３）**生活用具**（第72図９・10）・（図版56－９・10）

生活用具として、鍋の一種類が確認されている。口縁資料（第72図９）と形状の窺える資料（同図10）を２点図化した。特徴などについては、第45表①の観察表に記した。

（４）**武具**（第72図11～18）・（図版56－11～18）

武具は、畳具足か籠手甲（第72図11）・札（同図12～15）・鎖帷子（同図16）・籠手（同図17・18）の他に八双金物、兜鉢、化粧板、覆輪も得られているが、小破片のため図化を省略し、集計表の第44表で現した。個々の特徴などは、第45表①・第45表②に記した。

（５）**武器**（第72図20・21）・（図版56－20・21）

武器として、切羽と薙刀の逆輪（第72図20・21）が得られている。切羽は破片資料のため図化を省略した。薙刀の逆輪の特徴などについては、第45表②に記した。

（６）**用途不明**（第72図22）・（図版56－22）

中空きで面が三面で構成された筒金具が１点出土していたので、これを図化（第72図22）した。特徴などは第45表②に掲載した。

第44表　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか　金属製品出土状況

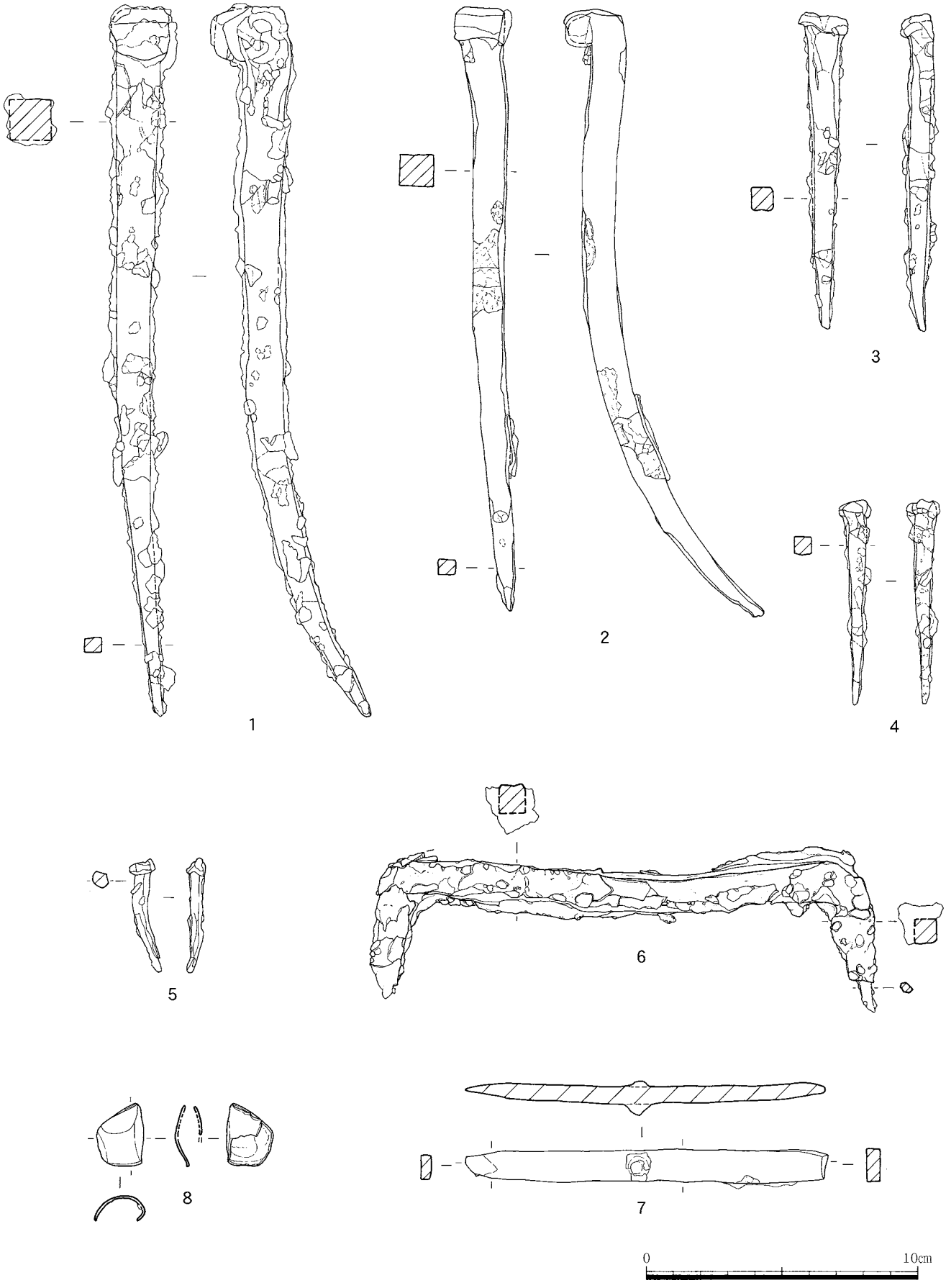
分類・種類					出土地	SA19						SA20					SA19・20									SA28			合計	
						第1層	栗石の畦	東側ﾄﾚﾝﾁ覆土	東側ﾄﾚﾝﾁ栗石内	中間栗石内撹乱	北側1層（客土）	栗石内	東壁表採	北側覆土	覆土	第1層	第2層～第5層	間の表採	北壁表採	間褐色土層	北側第1層（客土）	表採階段	畦	畦覆土	畦1層	覆土	ﾄﾚﾝﾁ第2層	ﾄﾚﾝﾁ第2層灰黄色土層（覆土直下）		
工具類・生産用具	丸釘	完形	中	鉄											1	1					3								5	
		先端部欠損	中	鉄										2				1											3	6
			小	鉄																		1	1						2	
			不明	鉄																								1	1	
		頭部欠損	中	鉄											1														1	2
			小	鉄											1														1	
		先端+頭部欠損	小	鉄																		4							4	
	角釘	完形	大	鉄					3																				3	56
			中	鉄					18						1	5	7					1	3	4				6	45	
			小	鉄					2							3	1					1		1					8	
		先端部欠損	中	鉄	3	1	2	14	5			1					12	2			3		4	3	4	1		15	70	110
			小	鉄	1			3								2	11							2				4	23	
			不明	鉄											2	1						8	5					1	17	
		頭部欠損	大	鉄				1																					1	37
			中	鉄				11				1					1			1				1	3		2	20	
			小	鉄	1			3								3	3						4					14	
			不明	鉄											2													2	
		先端+頭部欠損	中	鉄		1	2	7						1		6		4	1	1				3	7			1	34	52
			小	鉄																								3	3	
			不明	鉄				3							5	5										1		1	15	
	鏃			鉄																								1	1	
	板状製品			鉄								1		1															2	
	板状金具			青銅																				1					1	
	針金			青銅																					1				1	
祭祀用具	鈴			青銅												1													1	
生活用具	鍋			鉄							1										1								2	
武具	札			鉄	2										1							1	3	5				12	13
				青銅																							1	1	
	鎖帷子			鉄				2															2	1				5	6
				青銅																				1				1	
	畳具足か籠手甲			鉄																				1				1	
	八双金物			青銅																	1							1	
	籠手（大指の摘）			青銅																						1		1	
	籠手（摘手甲、大指の摘、摘）			青銅																		1						1	
	鐶・紐金具（調度品・総角付の鐶などの紐金具）			青銅												1												1	
	鎧の化粧板			青銅																				1				1	
	鎧の胴部			鉄												1												1	
	覆輪			青銅																			1	1				2	
	兜鉢			鉄																				1				1	
武器	薙刀の逆輪			青銅																			1			1		2	
	切刃			青銅																							1	1	
	砲弾片			鉄												3												3	4
				青銅																	1							1	
鍛冶関連(湯玉と鉄滓)				鉄																		1						1	
鍛冶関連(湯玉)				鉄																		1						1	
鍛冶関連(鉄滓)				鉄																			3					3	
用途不明				鉄			1																2				8	11	23
				青銅					1				1											9			1	12	
合　計					7	2	5	68	5	1	2	2	4	14	32	35	7	1	2	8	1	19	35	40	6	2	46	344		

注　釘のサイズは、大：5寸半以上（15.75cm以上）、中：1寸半～5寸まで（3.75cm～15.75cm未満）、小：1寸まで（～3.75cm未満）

第45表①　土壙SK01(倉庫跡)覆土ほか 金属製品観察一覧

単位：㎜/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・ 仮称	材質	残存 重量	残存長 (縦)	残存長 (横)	残存厚	頭頂		観察事項	出土地点 出土層
							縦	横		
第71図 図版55 1	工具類・ 生産用具 釘	鉄製品	247.9	272 (　9寸)	123.8	143.3	271.3	208.5	ほぼ完形の大型の角釘。全体的に錆で覆われている。身の中央付近から緩やかに反っている。全体的に剥離や罅割れが発生し、部分的も地金が露出している。地金にも錆が発生し、細かい罅割れが部分的に観察できる。釘の各部分には錆汁が凝固する際に付着した石灰岩の細片や炭の細片、貝殻片などがみられる。	SA19 東側ﾄﾚﾝﾁ 栗石内
〃 〃 2	〃 釘	鉄製品	186.8	242 (　8寸)	111.0	118.3	202.5	164.9	表面が完全に剥離し、地金が露出した状態にある角釘。身の中央付近から緩やかに反っている。全体的に剥離して、地金が露出している。地金から新たな錆が発生している。	SA19 東側ﾄﾚﾝﾁ 栗石内
〃 〃 3	〃 釘	鉄製品	41.8	115 (　3寸 8分)	95.2	103.3	112.0	184.3	頭部の大半を欠落する。身の先端が僅かに反っている。全体的に錆で覆われ、剥離や罅割れがみられる。また、部分的に地金の露出がみられる。地金からも錆の発生が観察できる。釘の各部分には錆汁が凝固する際に付着した石灰岩の細片などがみられる。	SA19 東側ﾄﾚﾝﾁ 栗石内
〃 〃 4	〃 釘	鉄製品	8.6	75 (　2寸 5分)	57.8	61.1	102.0	104.7	頭部の大半と先端が欠落する小型の角釘。全体的に錆で覆われている。身の中央付近から先端部分が僅かに蛇行することから使用時に身が変形したようである。部分的に剥離、罅割れ、錆瘤が観察できる。釘の一部分には錆汁が凝固する際に付着した石灰岩の細片などがみられる。	SA19 東側ﾄﾚﾝﾁ 栗石内
〃 〃 5	〃 釘	鉄製品	2.7	42 (　1寸 4分)	53.1	55.5	70.6	79.7	頭部の大半を欠落する。身の中央付近から「く」の字状に折れ曲がっている。先端は潰れて丸味を帯びている。全体的に錆で覆われ、剥離、罅割れ、錆瘤がみられる。その他に部分的な地金の露出したところがみられる。地金からも錆の発生が観察できる。	SA19・20 第2層～ 第5層
〃 〃 6	〃 鏃	鉄製品	198.3	20.0	185.0	18.0 4.0	—	—	建築部材(梁や柱など)を連結・接合の際に使用した大型の鏃。頭部となる長辺部分の中央付近が反っている。身部の左側と右側の先端が欠落する。全体的に錆の進行が著しく、罅割れや剥離が頭部や身部にみられる。特に身の右側は地金が錆によって細くなっている。地金への錆による腐蝕が著しい。	SA28 ﾄﾚﾝﾁ第2層 灰黄色土層 (覆土直下)
〃 〃 7	〃 板状製品	鉄製品	50.6	14.0	133.0	13.0 2.0	—	—	板状に成形された製品であるが、その用途は不明である。中央付近が目釘穴のような孔(直径4.8㎜)があり、孔内部に棒状のピン(断面が円形)が残っている。左縁辺部が刃物の切先状となっている。刃部の側面観は両刃である。刃部が機能していたとすれば、彫刻刀の様な機能やカンナなどが考えられる。右縁辺部は破損する。全体的に表面が剥離し、地金のみが露出した状況にある。	SA20 北側覆土
〃 〃 8	祭祀用具 鈴	青銅製品	2.2	23.0	17.0	2.0 0.7	—	—	球形の鈴の下部破片で、一文字の孔を境に割れている。正面下位は鈴上部とを組合わせる為の微弱なそり返しがある。裏面の上部には一文字孔があり、孔の両端にあった二股でハート形に加工された透かし孔の一部が残っている。	SA20 第1層
第72図 図版56 9	生活用具 鍋	鉄製品	13.3	24.0	41.0	9.0 2.0	—	—	玉縁状に口縁が肥厚するタイプの鉄鍋片。表面は器面の大半が剥落し器面の保持が悪く、地金が露出する。地金からは新たな錆汁や微細な錆瘤がみられる。裏面は錆で覆われ、錆汁の発生によってケロイド状となり、微細に砕けた鉄片が付着している。地金の浸食により身が痩せて、器壁が薄くなっている。	SA19・20 北側第1層 (客土)
〃 〃 10	〃 鍋	鉄製品	41.7	39.0	53.0	5.0 3.0	—	—	鉄鍋の胴部破片。胴下部で「く」の字状に屈曲する。表裏面とも錆で覆われて、若干罅割れが観察される。表裏面にも錆汁や錆瘤などがみられる。	SA19 北側第1層 (客土)
〃 〃 11	武具 畳具足か 籠手甲	鉄製品	10.2	36.0	45.0	3.0 2.0	—	—	畳具足の鎖腹当(第23図参照) や草摺、若しくは籠手の摘手甲(第23図参照)とみられる破片。表面の右側の右隅が隅丸状に成形されている。隅丸に加工された板材の下端に輪と鎖帷子の一部が残っている。裏面の左側にも輪三個取り付けられている。また、裏面中央付近に縦長の突起状のものが取り付けられていたようであるが、大半は剥落して正確な形状が把握できない。両面とも錆による影響を受けて錆汁の発生と再凝固などで地金が脆くなっている。全体的に錆に覆われケロイド状となっている。部分的に錆瘤が破裂した箇所もみられる。	SA19・20 畦第1層
〃 〃 12	武具 札	鉄製品	7.7	46.0	19.0	5.0 2.0	—	—	札(第20図・第24図参照)の下位を欠いた盛上げ札。孔の数は9孔が確認される。表裏面とも錆に覆われ、罅割れや剥離などがみられ劣化が著しい。	SA19・20 畦第1層
〃 〃 13	〃 札	鉄製品	15.8	69.0	24.0	5.5 2.0	—	—	碁石頭(第24図参照)の札。ほぼ完形であるが、孔の大半は錆で塞がっている。塞がった孔の部分の錆は浅く窪んだ状態にある。孔が開いた部分と孔が塞がったものを数えると2行4孔であった。表面は半分近く錆で剥離し、地金が露出している。裏面は錆で全体的に覆われ、錆の影響でケロイド状となっている。その他に錆脹れが発生し、その影響で細かい亀裂が発生している。	SA19・20 畦第1層

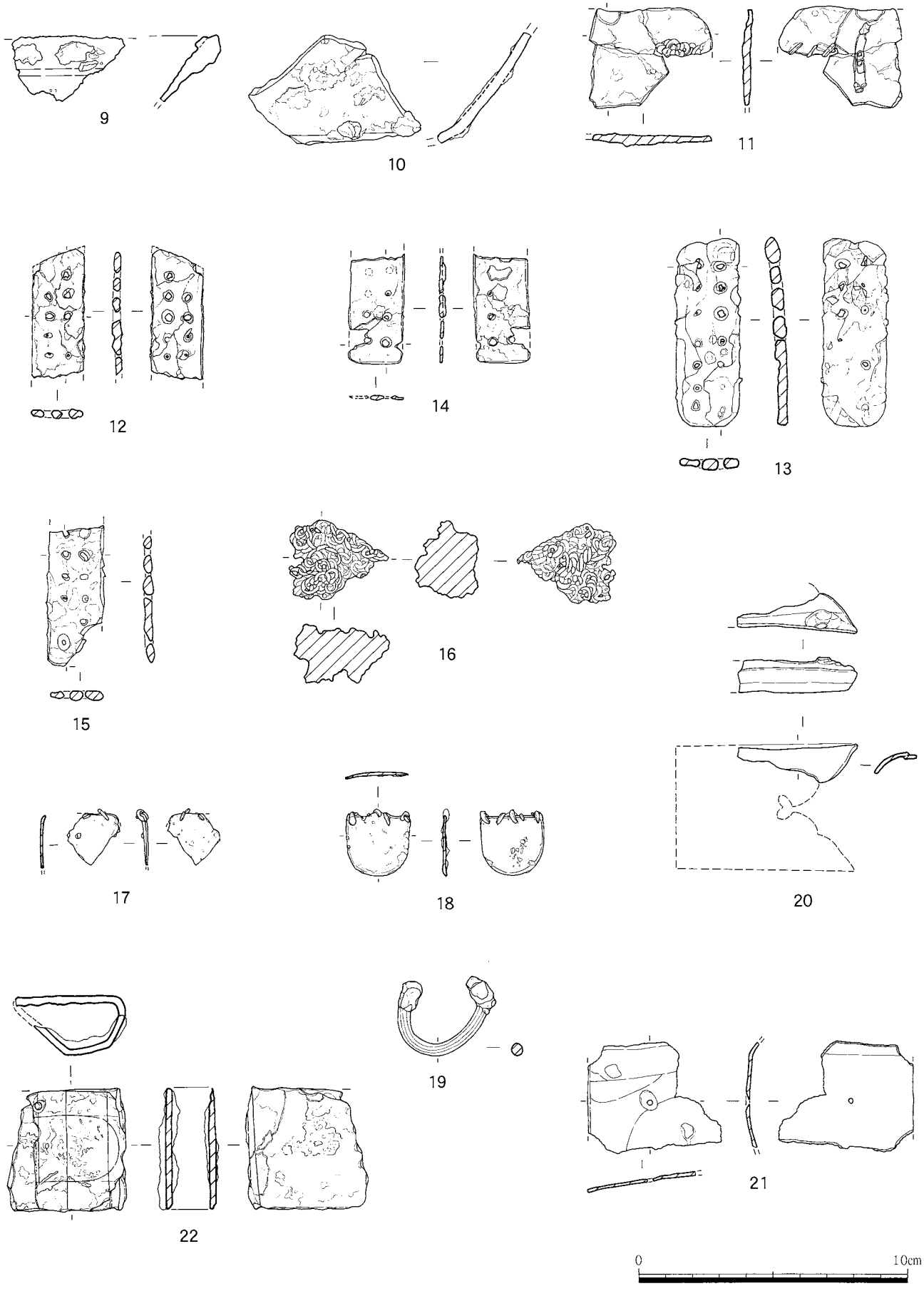


第71図　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか出土品③
金属製品

第45表②　土壙SK01(倉庫跡)覆土ほか 金属製品観察一覧

単位：㎜/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称・仮称	材質	残存重量	残存長(縦)	残存幅(横)	残存厚	観察事項	出土地点 出土層
第72図 図版56 14	武具 札	鉄製品	4.0	39.0	20.0	2.5 0.9	札頭(第20図参照)を欠いた資料。錆による損傷が著しく、地金が痩せ細って薄くなっている。孔の数は8孔が確認されるが、五つの孔は錆で塞がっている。表面は錆汁の影響でケロイド状となる。表面は錆の影響が強く、表面が剥離し、地金も侵食され薄くなっている。	SA19 第1層
〃 〃 15	〃 札	鉄製品	8.4	49.0	21.0	4.0 2.0	札頭(第20図参照)を欠いた資料。残存する孔の数は、孔の開いた部分及び錆で塞がった部分、そして欠落した孔を数えると、2行9孔を数える。残りの2孔は完全に錆で覆われ確認できないが、これを含めると2行11孔となる。表面は錆で脹れて、ケロイド状となり、細かい罅割れや剥離がみられる。裏面は器面の大半が錆で剥離し、地金の露出や錆汁の凝固がみられる。錆の影響で地金も浸食され薄くなっている。	SA19 第1層
〃 〃 16	〃 鎖帷子	青銅製品	17.6	29.0	35.0	2.0 6.0	溝のある円柱状の棒に針金を巻き付けて鑿で切り離して鎖の単体を作り、単体を連結した八重鎖(第23図参照)。鎖は三つ折り畳んだものが破損したようである。火災による火熱を受けて鉄素材の溶解・再凝固となっている。部分的に青銅製品が溶けて付着している。鎖の表面は剥離や微細な罅割れが観察できる。また、破損部分は素材が繊維状となって露出している。単体の鎖のサイズは、太さ1.3㎜、内径4.0㎜、外径7.0㎜を測る。	SA19・20 畦第1層
〃 〃 17	〃 籠手 (大指の摘)	青銅製品	2.8	25.0	25.0	2.5 0.8	大指の摘(第23図籠手参照)。親指を保護するための金具。正面形が親指の形状と合致するように下半部が半円形状に成型されている。正面の形状と合うように裏面の縁沿いは、微弱な反り返しを設けている。また、親指の表面の丸味に合うように裏面を浅く窪ませている。裏面上部の縁辺には5箇所の孔を穿ち、孔の中に鎖の輪を二個一組で連結していたようである。孔は隙間が錆で埋まっているが、鎖の輪(二個一組)の直径が1.8～2.0㎜程度を測ることから、孔は2.0㎜～2.5㎜未満が推定される。表面の錆は全体的に薄く被さる程度ではあるが、小規模な錆瘤の塊や錆汁による影響で表面がケロイド状となる箇所が僅かに観察できる。裏面は錆の影響が強く、錆脹れによって器面が盛り上がっている部分がある。部分的に錆の影響でケロイド状となっている。	SA28 ﾄﾚﾝﾁ 第2層
〃 〃 18	〃 籠手 (摘手甲、大指の摘、摘)	青銅製品	0.9	19.0	19.0	1.0 0.8	籠手の摘手甲、大指の摘、摘(第23図参照)のいずれかに当嵌まる細片。正面の上端から右上端までが金具の縁で、残存部位の形状と合うように縁沿いは、微弱な反り返しを設けている。手甲、親指、指のいずれかに該当し表面の丸味に合うように内面を浅く窪ませている。表面上部の縁辺には2箇所の孔が残っていて、孔の中に鎖の輪を一個ずつ入れて連結していたようである。孔は隙間が錆で埋まっているが、鎖の輪の直径が1.5㎜程度を測ることから、孔は1.5㎜～1.7㎜未満が推定される。表面は全体的に錆で薄く覆われ、錆汁の影響を受けてケロイド状となっている。また、小規模な錆瘤がみられる。裏面は錆の影響が強く、錆脹れによる剥離と錆汁の凝固がみられる。	SA19・20 畦
〃 〃 19	工具類・生活用具 鐶・紐金具 (調度品・総角付の環などの紐金具)	青銅製品	9.7	24.0	36.0	9.0 4.0	調度品(手箱などの引き手金具)・総角付の鐶座(第21・22図参照)・容器の把手・懸垂金具の紐、などが考えられた紐金具の資料である。紐金具の両端は二次的な火熱を受けて溶解した状態で固まっている。紐の内側と外側には鋳型の合わせて溶解した素材を流し込んだ際に発生した型を合わせの部分が稜線となって表面に僅かに突出している。この稜線沿いには鋳型からはみ出した青銅の一部が微細なバリとなって残っている。この稜を潰す目的で研磨を加えているが、研磨は徹底せず研磨面が筋状に残っている。緑青は火災による火熱で溶解した部分に集中してみられる。紐の部分の緑青は小規模で散発的にみられる程度である。	SA20 第1層
〃 〃 20	武器 薙刀の 逆輪	青銅製品	4.6	13.0	44.0	2.0 1.0	薙刀の逆輪(第24図及び第58図120参照)破片。薙刀の茎(なかご)を千段繁巻(藤や麻糸などで隙間なく巻き付け、漆で塗り固めた)にして柄の中に差し込んだ後に柄の口寄りの部分を逆輪で固定するようである。この逆輪は魚の尾鰭状に尖った部分の破片である。上面には帯状の段差(0.6㎜)があり、金属同士を継ぎ合わせるために段差を設けている。この段差は、裏面が幅4.8㎜、厚さ0.8㎜の板材を利用して継ぎ合わせている。表裏面とも緑青が部分的に観察される。裏面の一部はガラス製品が二次的な火熱を受けて溶解し、ガラスの塊となって付着している。このガラスの塊は溶解の際に同時に溶解した青銅をも取り込んで凝固している。	SA19・20 畦覆土
〃 〃 21	〃 〃	青銅製品	9.9	39.0	49.0	1.0 0.9	薙刀の逆輪(第24図及び第58図120参照)破片。逆輪の破片は、図化した資料以外に同一破片とみられる破片資料が23点得られている。これらの破片資料については接合を試みたが叶わなかった為、図化を省略した。逆輪の柄の口寄りの部分の破片で、表面面の上辺寄りは薙刀の形状に合わせた丸味が残っている。中央寄りの小さな孔は緑青によって浸食された孔である。表裏面とも緑青が部分的にみられる。	SA28 ﾄﾚﾝﾁ 第2層
〃 22	用途不明	青銅製品	39.2	46.0	46.0	7.0 3.0	表面は面取りがなされていて、縦位に稜線が二本確認される。面としては四面で構成される。表面の上端と下端には縁に沿うように横位方向に薄い鉄製の板材が取り付けられていたようである。その痕跡は帯状(幅9.5㎜)となり、鉄製板材が部分的に残存する。表面上端の左側に鉄製の丸鋲の身(直径3.2㎜)が折れたまま残っている。下位にも鉄製板材を取り付けた痕跡が認められ、鉄製板材の一部は地金まで錆によって侵食され、僅かに残っている程度である。残存する鉄製板材や帯状の痕跡から幅を推定すると上位が9.5㎜で、下位は11㎜が予測される。表面は緑青や鉄錆がみられ、緑青の影響で微細な錆瘤が集中する。この錆瘤の上に鉄錆の錆汁がかかって黒く変色する。鉄製板材は地金まで錆によって侵食され、僅かに残っている程度である。裏面は平坦面で緑青による浸食が進み、全体的に錆で脹れ、ケロイド状となり白く変色した部分が広がっている。変色した部分には、鉄錆の付着が一部で観察される。断面の形状などから用途を考えると、内部に木材を通して使用した締め金具などが想定された。	SA19・20 畦第1層



第72図　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか出土品④
金属製品

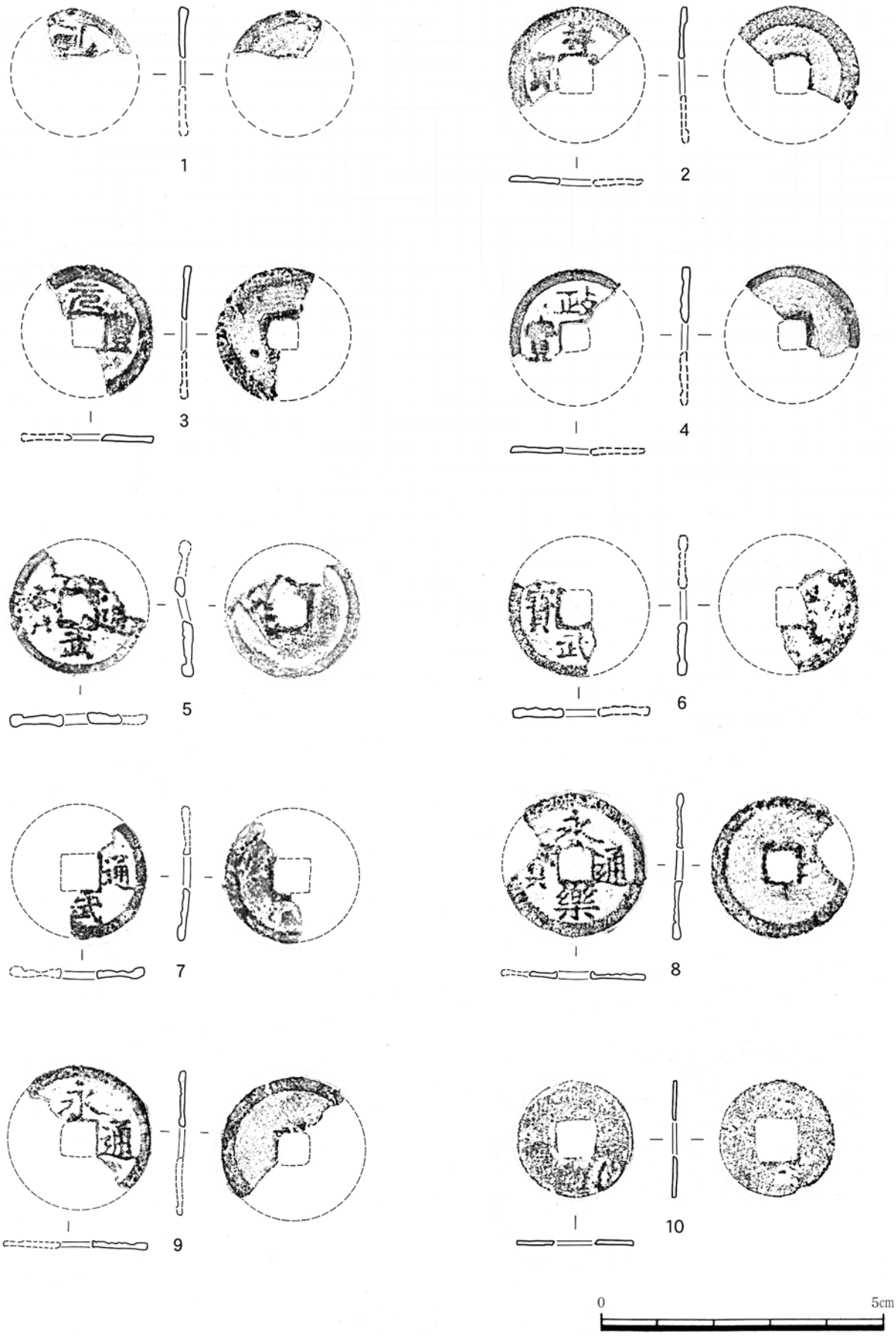
15. 銭貨（第73図１～10）・（図版57A１～10）

京の内倉庫跡（土壙SK01）の覆土や客土などから得られた銭貨は無文銭の完形品が１点のみ得られていて、残りの17点は全て破片資料であった。銭貨の出土状況は、第47表に呈示した。その中から良好な資料を第73図１～10に図示した。出土銭貨の種類として、乾徳元寶１点（前蜀：919年初鋳造）、祥符元寶１点（北宋：1009年初鋳造）、元豊通寶２点（北宋：1078年初鋳造）、政和通寶１点（北宋：1111年初鋳造）、洪武通寶３点（明：1368年初鋳造）、永樂通寶３点（明：1408年初鋳造）、無文銭５点、不明銭２点であった。銭貨の出現頻度をみると明銭（洪武通寶・永樂通寶）が６点と全出土量の33.3％を占めている。次いで北宋銭（祥符元寶、元豊通寶、政和通寶）の４点（22.2％）、そして無文銭の５点（27.7％）の順に減少する。

第46表　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか 銭貨観察一覧（計測部位は第34図参照）　　単位：㎜/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	銭種	鋳造種類	初鋳年	素材	読み方	状態	書体	肉郭外径 A B	肉郭内径 C D	方穿 E F	断面計測部位 ①	 ②	 ③	重量	観察事項	出土地点 出土層
第73図 図版57A 1	乾徳 元寶	不明	前蜀 919年	銅銭	回読	破損	行書	－ －	－ －	－ －	1.3	0.8	1.2	0.7	銭貨の1/4程度が残存。面・背は使用によって若干、摩滅する。面の文字は「乾」の一字がやや鮮明に確認できる。面の肉郭は幅2.2㎜を測る。	SA19 層不明 （第2・3層？）
〃 〃 2	祥符 元寶	公鋳銭	北宋 1009年	銅銭	回読	破損	行書	－ －	－ －	－ －	1.2	0.7	1.1	1.7	1/2近くが残存し、面・背の摩耗は軽微である。「祥」・「寶」の二文字が確認できる。面の孔郭（孔の縁）は「寶」の文字側で幅が0.5㎜と狭い。面の肉郭は幅2.8㎜を測る。	SA19 層不明 （第2・3層？）
〃 〃 3	元豊 通寶	公鋳銭	北宋 1078年	銅銭	回読	破損	篆書	－ －	－ －	－ －	1.5	0.8	1.2	2.1	半分程度残存し、面・背の摩耗は軽微である。緑青や錆瘤が僅かに観察される。「元」・「豊」の二文字が確認できる。面の肉郭は幅2.1㎜を測る。	SA19 層不明 （第2・3層？）
〃 〃 4	政和 通寶	公鋳銭	北宋 1111年	銅銭	対読	破損	楷書	－ －	－ －	－ －	1.1	0.6	1.1	1.3	半分程度残存し、面の摩耗は軽微で文字は鮮明であるが、背は面より摩耗が著しい。緑青が僅かに観察される。「政」・「寶」の二文字が確認できる。面の肉郭は幅1.7㎜を測る。	SA20 覆土
〃 〃 5	洪武 通寶	模鋳銭	明 1368年	銅銭	対読	破損	楷書	－ 24.2	－ 19.9	4.3 4.4	1.8	0.6	1.3	3.0	4/5程度が残存するが、火災による火熱の影響で素材の溶解と変形がみられる。面の肉郭や文字は鮮明で、面の文字鋳型（上面から面本体まで）の深さが0.8㎜を測るが、残存する三文字の中で「武」の一字のみ鮮明で、他の「通」・「寶」の二文字は溶解・腐蝕で判読しにくい状況にある。背には火熱を受けて溶解・凝固の際に他の銭貨の破片も取り込んでいる。緑青は背より面に多くみられ、地金の浸食が著しい。面の肉郭は幅2.0㎜を測る。	SA19 層不明 （第2・3層？）
〃 〃 6	洪武 通寶	公鋳銭	明 1368年	銅銭	対読	破損	行書	－ －	－ －	－ －	1.9	1.2	2.0	1.7	1/3程度が残存するが、背は火災による火熱の影響で溶解した他の青銅製品の素材が溶けて付着してケロイド状となる。面も若干、微細にケロイド状となるが面の肉郭や文字は鮮明である。「武」・「寶」の二文字が判読できる。面の肉郭は幅1.9㎜を測る。	SA19・20 階段表採
〃 〃 7	洪武 通寶	公鋳銭	明 1368年	銅銭	対読	破損	楷書	－ －	－ －	－ －	1.9	0.8	1.4	1.7	1/3程度が残存するが、背は火災による火熱の影響でケロイド状となる。面も若干、微細にケロイド状となるが面の肉郭や文字は鮮明である。「通」・「武」の二文字が判読できる。面の肉郭は幅1.9㎜を測る。	SA19・20 層不明 （第2・3層？）
〃 〃 8	永樂 通寶	公鋳銭	明 1408年	銅銭	対読	破損	楷書	25.6 －	21.0 －	5.6 5.1	1.6	0.7	1.2	2.8	文字の「寶」字の一部が欠落する程度であるが、両面と若干、火災による火熱の影響でケロイド状となる。肉郭や文字は鮮明である。「永」・「樂」「通」・「寶」の各文字が判読できる。面の肉郭は幅1.9㎜を測る。	SA20 覆土
〃 〃 9	永樂 通寶	公鋳銭	明 1408年	銅銭	対読	破損	楷書	－ －	－ －	－ －	1.3	0.7	1.1	1.8	1/2程度残存。火災による火熱の影響は軽微で、僅かに溶解した素材の瘡蓋状の小さな塊が確認できる程度である。肉郭や文字は鮮明で、「永」・「通」の二文字が鮮明に判読できる。面の肉郭は幅1.9㎜を測る。	SA19 層不明 （第2・3層？）
〃 〃 図版57B 10	無文銭	模鋳銭	不明	銅銭	不明	完形	不明	21.0 21.0	－ －	6.9 7.0	0.6 0.8	－	－	1.9	面・背ともに肉郭（外縁）と孔郭（穴の縁）のない無文銭である。面の右下に逆さ「ノ」字状の小枝様の浮き文がみられる。背には浮き文様で星とみられるものを「一」で表現しているようであるが判然としない。面の逆さ、「ノ」の字を軟X線（図版57B）でみると歪な逆さの「八」字となっている。この部分をルーペで観察すると磨り潰されたような痕跡がみられる。その他、孔郭の上下・左右も同様に痕跡が確認できるが、錆の影響を受けて判別ができなかった。仮に小枝様の浮き文が文字となった場合、中国東周（BC770～BC221年）の「寶化」などの銭貨の可能性もあるが判然としない。面・背とも全体的に摩耗し、緑青もみられる。背の一部には鉄錆が付着する。	SA20 北側覆土

注　「－」：計測不可



第73図　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか出土品⑤
銭貨

第47表　土壙SK01(倉庫跡)覆土ほか 銭貨出土状況

種類＼出土地		SA19	SA20		SA19･20			合計	
		層不明	覆土	北側覆土	層不明	畦	階段表採		
乾徳元寶	破損	1						1	
祥符元寶	破損	1						1	
元豊通寶	破損	1				1		2	
政和通寶	破損		1					1	
洪武通寶	破損	1			1		1	3	
永樂通寶	破損	2						3	
無文銭	完形			1				1	5
	破損	4						4	
不明	破損				2			2	
合　計		10	1	1	3	1	1	18	

16. 石器

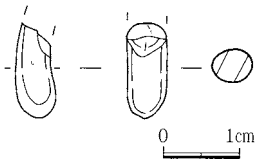
石器として石弾片、砥石片が出土しているが破片が小さかった為、図化を省略し、集計（第48表）のみ実施した。

第48表　土壙SK01(倉庫跡)覆土ほか石器出土状況

種類＼出土地	SA19･20		SA28	合計
	北側淡褐色土層	畦1層	覆土	
砥石	1		1	2
石弾		2		2
合　計	1	2	1	4

17. ガラス製品（勾玉）

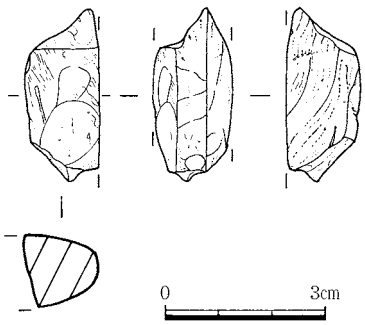
第74図に示した勾玉の破片が１点出土している。勾玉の頭部が欠落し、身部のみが残っている。色調は青緑色を呈す。全体的に粗密のある気泡痕が多く観察でき、アバタ状となる。外面や劈開面の観察からすると型成型の可能性が考えられる。サイズは長軸12.2mm、短軸4.9mm、重量0.72g。SA20覆土より出土。



第74図
土壙SK01(倉庫跡)覆土ほか
出土品⑥　ガラス製品(勾玉)

18. 骨製品

第75図に図示した１点のみSA20第３層から出土しているが、その用途は不明である。素材はウシかウマの肋骨を利用している。表裏面及び右側面を刃物で削り取って面とするが、加工面の削りは研磨が掛かったように摩耗し目立っている。サイズは長軸27mm、短軸19mm、重量0.8g。



第75図
土壙SK01(倉庫跡)覆土ほか
出土品⑦　骨製品

第５節　石積みSA33・34の出土遺物

京の内土壙SK01（倉庫跡）と同時期に機能していた石積みSA33・34の内側には、1459年に起きた失火による倉庫火災後の火事場の後始末により倉庫跡（土壙SK01）からはみだした陶磁器類が、当該遺構（SA33・34）にも一部が廃棄されたようである（第Ⅳ章第１節２.遺構）。石積みSA33・34の1459年に廃棄された陶磁器類以外に、廃棄後の整地に伴う客土や近世～現代の造成土に混在していた陶磁器類も発掘調査によって得られているので、これについても記述した。なお、資料整理を通して京の内土壙SK01と石積みSA33・34から出土した陶磁器類との接合関係で、接合が可能であることについては前回、報告（註１）したが、その後に報告された下之御庭跡一帯（註２）から出土した陶磁器類と上記の遺構（SK01、SA33・34）出土の陶磁器類が接合ができた資料についても本節で取り扱った。

註文献

註１．沖縄県文化財調査報告書第132集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）－』沖縄県教育委員会2001年３月。

註２．沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第３集『首里城跡－下之御庭跡・用持座跡・瑞泉門跡・瀧刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター2001年３月。

１．土器（第76図１）・(図版60－１)

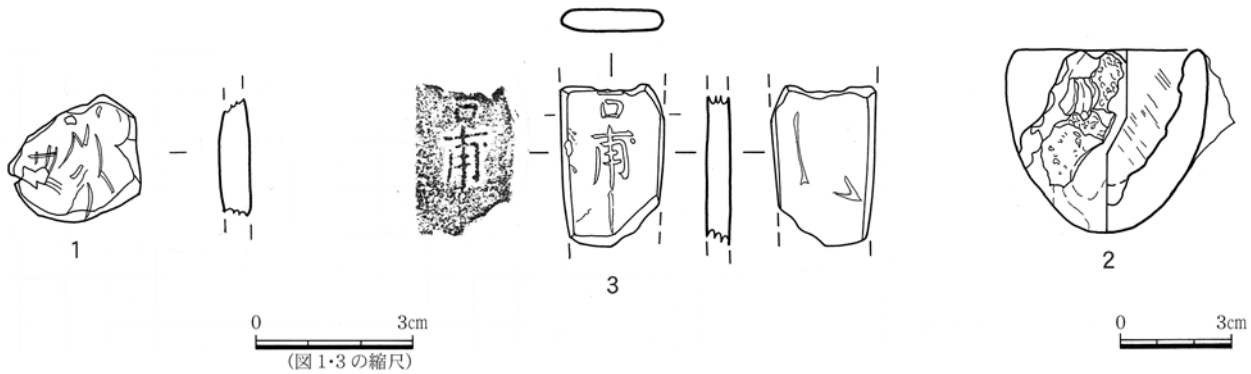
グスク土器の範疇にある胴部の破片が２点（SA34栗石直下から出土）得られている。その内の１点を第76図１に図化した。同図１は色調が橙白色～灰褐色を呈する。全体的に摩耗し、器面の調整も判然としないが外面よりも内面の調整が雑なようである。胎土は泥質で精選され細かい。混入物も微細なガラス質鉱物（石英）や灰色の物質を多量に含んでいる。稀に粗い茶褐色の物質（0.7mm×2.2mm）が観察できる。

２．坩堝（第76図２）・(図版60－２)

金属を溶解し、鋳型などに流し込んだ際に使用した坩堝が１点出土（SA34栗石直下）している。第76図２は尖り気味の丸底で、口縁部で直口する坩堝である。推定された口径は4.8cm、器高4.7cmが求められた。器色は外面が暗褐色、内面は茶褐色を呈する。表裏面とも軽石のような器面となっている。外面には全体的に緑青が疎らに付着していることから青銅製品を製作する際に素材となった鉱物などを溶かした坩堝とみられる。その他、外面には火災によって付着したとみられる中国産白磁片や溶解・凝固したガラスの塊が観察できる。胎土に含まれた混入物をみると粗い石英や稲藁とみられるものも観察できる。

３．土製品（第76図３）・(図版60－３)

荷札の一部とみられるのが１点（SA34栗石直下）出土している。第76図３は、外面に「甫」の一字が陽刻の型で起こされている。「甫」の文字の上にも欠落した文字が存在する。欠落文字の残存状況からすると「吉」・「合」などの文字が想定される。「吉甫」・「合甫」などの名称が想定される。恐らく陶磁器などの物品を送り出した地名（港名）、役所名などが考えられる。この荷札から土壙SK01から出土した陶磁器類の港名や役所名などが特定できる可能性がある。器色は暗褐色を主体とし、部分的に淡橙色を呈する。胎土は精選され非常に細かい。その他に微細なガラス質の鉱物が僅かに観察できる程度である。焼成は堅緻。サイズは残存長3.03cm、幅1.93cm、厚さ3.7mm、重量2.63g。



第76図　石積みSA33・34 出土品①
土器、坩堝、土製品

４．瓦質土器（第77図１～５）・(図版61－１～５）

瓦質土器（口縁破片１点）と瓦質土器製の蓋（第49表。25点）が出土している。以下に特徴などを記述する。

１）瓦質土器（第77図１）・(図版61－１）

第77図１は火鉢などの口縁、若しくは器台の破片とみられる資料である。逆さ「ハ」の字状に外傾し、直口する。表裏面とも色調が灰黒色を呈する。器面の調整は外面に目の細かい回転擦痕がみられる。内面は水ナデによる滑面となっていて、部分的に指圧痕や雑な擦痕が観察できる。胎土は細かく、素地は微細な白色鉱物や雲母などが僅かに確認できる。稀に貝殻の細片がみられる。良質の沖縄産か。SA34栗石内より出土。

２）瓦質土器製の蓋（第77図２～５）・(図版61－２～５）

瓦質土器製の蓋とみられる資料を４点図化した。蓋の４点中、１点のみ方形状を呈し、残り３点は円盤状の蓋である。蓋の資料は第49表に呈示した25点が得られているが、全て円盤状の蓋の破片資料であった。

(イ)．円盤状の蓋

第77図２は直径が23.8cmと推定された蓋の破片資料である。色調は暗褐色を主体とし、部分的に赤茶色を帯びる。胎土は細かく、細かい石英や茶褐色の物質を少量混入する。その他に籾殻の圧痕や細片化した稲藁とみられる植物の痕跡が窺える。外面は微弱な起伏をもって平坦に成形されているが調整方法が確認できない。内面は刷毛の目が不揃いの刷毛目様のナデで雑に器面を調整する。周縁部も雑な仕上げであるが表面と同様に細片化した稲藁？が観察された程度で、調整方法は不明である。当該製品は外面及び周辺部の観察や劈開面の状況から縞状に不規則な粘土が観察できる状況から判断すると円形状に加工された型に粘土を入れて製作されたようである。型からの切り離しを容易にする目的で剥離材として細片化した稲藁（籾殻や稲藁を型に敷いた）などを敷いたのかもしれない。SA33栗石内出土。

同図３も型に入れて製作された蓋とみられる資料である。色調は外面が灰白色で、裏面が灰色を呈する。外面は内面より摩耗が著しい。内面は雑なナデで仕上げている。内外面に籾殻の圧痕が観察できる。胎土は細かく、微細な灰褐色や茶褐色の物質を多く含む。籾殻や稲の茎？の圧痕が劈開面からも観察できる。SA34栗石内出土。

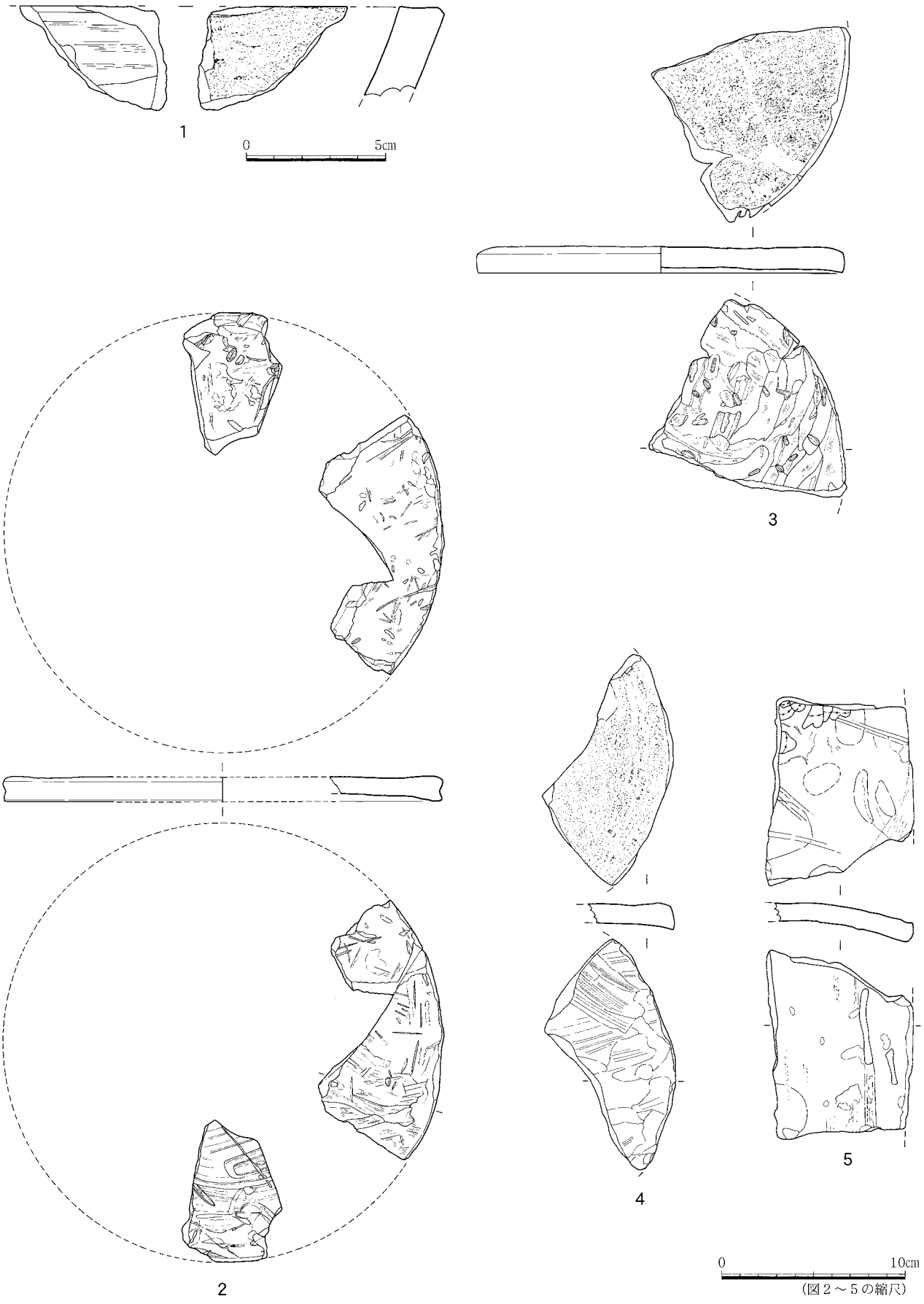
同図４も上記２・３と同様の型で製作された蓋とみられる。色調は淡橙色を基調とするが、部分的に赤紫色や褐色を帯びている。成形が雑であり、外面の縁沿いが浅く窪んでいる。また、細片化した稲藁？の痕跡がみられる。内面は雑な指ナデと篦削り、指圧痕が観察できる。胎土は細かく、細かい石英や茶褐色の物質（焼土？）を多く含む。内面にも籾殻の圧痕がみられる。SA34栗石内出土。

(ロ)．方形状の蓋

同図５は方形状の型枠を利用して製作された資料である。色調は灰褐色を基調とするが、部分的に黒褐色を帯びている。外面には粘土を継ぎ足した際に生じた歪な隙間や皺が多くみられる。また、細片化した稲藁とみられる植物の痕跡がみられる。外面に部分的に指ナデや篦削りが観察できる。内面は刷毛の目が不揃いの刷毛目様のナデで雑に調整する。部分的にナデ調整が実施されている。胎土は細かく、粗密な石英が多く含まれている。その他に、今までに報告例のなかった布地（生地は白濁色の糸が基本で、茶褐色の染め糸がみられ、折り目が非常に細かい）の細片（折目幅1.5mm。1.5mm目で縦糸が12～15本と、横糸17～21本程度数えられる。繊維の細さや折目の緻密さからすると絹織物が考えられる）が胎土に含まれている。SA34栗石内出土。

第49表　石積みSA33･34 瓦質土器出土状況

器種 ＼ 出土地		SA33 栗石内	SA33 栗石直下	SA33 集石直下	SA34 栗石内	SA34 栗石直下	SA33栗石内+SA33栗石	合計	
火鉢or器台	口縁部破片				1			1	
瓦質土器製の蓋	円盤状	3	4	2	10	4	1	24	25
	方形状				1			1	
合　計		3	4	2	12	4	1	26	



第77図　石積みSA33・34 出土品②
瓦質土器

5．青磁（第78図１～13、第79図14・15、第92図1･2、第93図１）・（図版62－１～15、図版74－1･2、図版75－１）

石積みSA33・34より青磁の破片が98点（第50表）出土している。確認された器種は、皿（49点：≒50%）、碗（28点：≒28.5%）、酒会壺（15点：≒15.3%）、大花瓶（２点：≒2.04%）、盤（１点：≒1.02%）、瓶（１点：≒1.02%）、大鉢（１点：≒1.02%）、大型壺（１点：1.02%）の８種類であった。これらの破片資料から大型の資料や特徴的な資料などを抽出して図化（第78図１～13、第79図14・15）を試みた。個々の特徴などについては、第51表①と第51表②に記載した。その他、第92図１、第93図１の資料については、「17.京の内（石積みSA33・34、土壙SK01）及び下之御庭跡ほか出土の接合された大型青磁」と項目を設けて記した。

第50表　石積みSA33･34 青磁出土状況

器種･部位 ＼ 出土地					SA33					SA34			合計		
					客土	栗石	栗石直下	集石直下	栗石内	覆土	栗石内	栗石直下			
碗	口～底部	外反	見込みに印花文								1		1	28	
	口縁部	直口	蓮弁	片切り彫り								1	1		
				線彫り	2							1	3		
			雷文	片切り彫り								2	2		
			波状文	櫛描	1								1		
			外-無文､内-有文不明							1			1		
			有文		1								1		
			無文							1			1		
		外反	無文				3						3		
		端反	無文				1						1		
	胴部	有文			1								1		
		蓮弁		ラマ式								2	2		
				線彫り						1	1	1	3		
		無文			3		2			1			6		
	底部	無文			1								1		
皿	口～底部	直口	外-蓮弁(片切り彫り)						1				1	45	49
			外-蓮弁(片切り彫り)､内-蓮弁				1						1		
		外反	無文						1				1		
	口縁部	口折	無文								2		2		
		直口	外-有文不明､内-無文								1		1		
			外-蓮弁(片切り彫り)､内-蓮弁						2				2		
			外-蓮弁(線彫り)､内-刻花文				2		2			1	5		
			外-蓮弁(線彫り)､内-無文						1				1		
			外-蓮弁(線彫り)､内-不明				1		1				2		
			内外-蓮弁(線彫り)								1		1		
			不明				1						1		
		外反	外-無文､内-有文不明		1								1		
			内外-無文				2	1	1				4		
			不明				3		1				4		
		内彎	内外-無文				1						1		
	胴部	内外-蓮弁(線彫り)									1		1		
		内外-刻花文					1						1		
		内外-不明							1			1	2		
		外-蓮弁(片切り彫り)､内-無文					1						1		
		無文					2		2				4		
	底部	印花文									2		2		
		有文不明					2						2		
		不明						1	2			1	4		
八角皿	口～底部	外-無文､内-雲文､底部-印花文					1						1	4	
	口縁部	外-無文､内-雷文帯+雲文				1			1				2		
	口縁部	外-無文､内-雲文+有文不明							1				1		
盤(大皿)	口縁部	ｶﾀﾞ状鍔縁	内外-不明									1	1		
大鉢	胴部	有文									1		1		
酒会壺	口縁部	有文不明							1				1	15	
	肩部	有文不明					1	1					2		
	胴部	外-蓮弁(線彫り)									1		1		
		外-刻花文					1		4				5		
		有文不明							1		3	2	6		
瓶	胴部	外-刻花文									1		1		
大花瓶	頸部										1		1	2	
	胴部								1				1		
大型壺	口縁部								1				1		
合計					10	1	26	3	25	4	16	13	98		

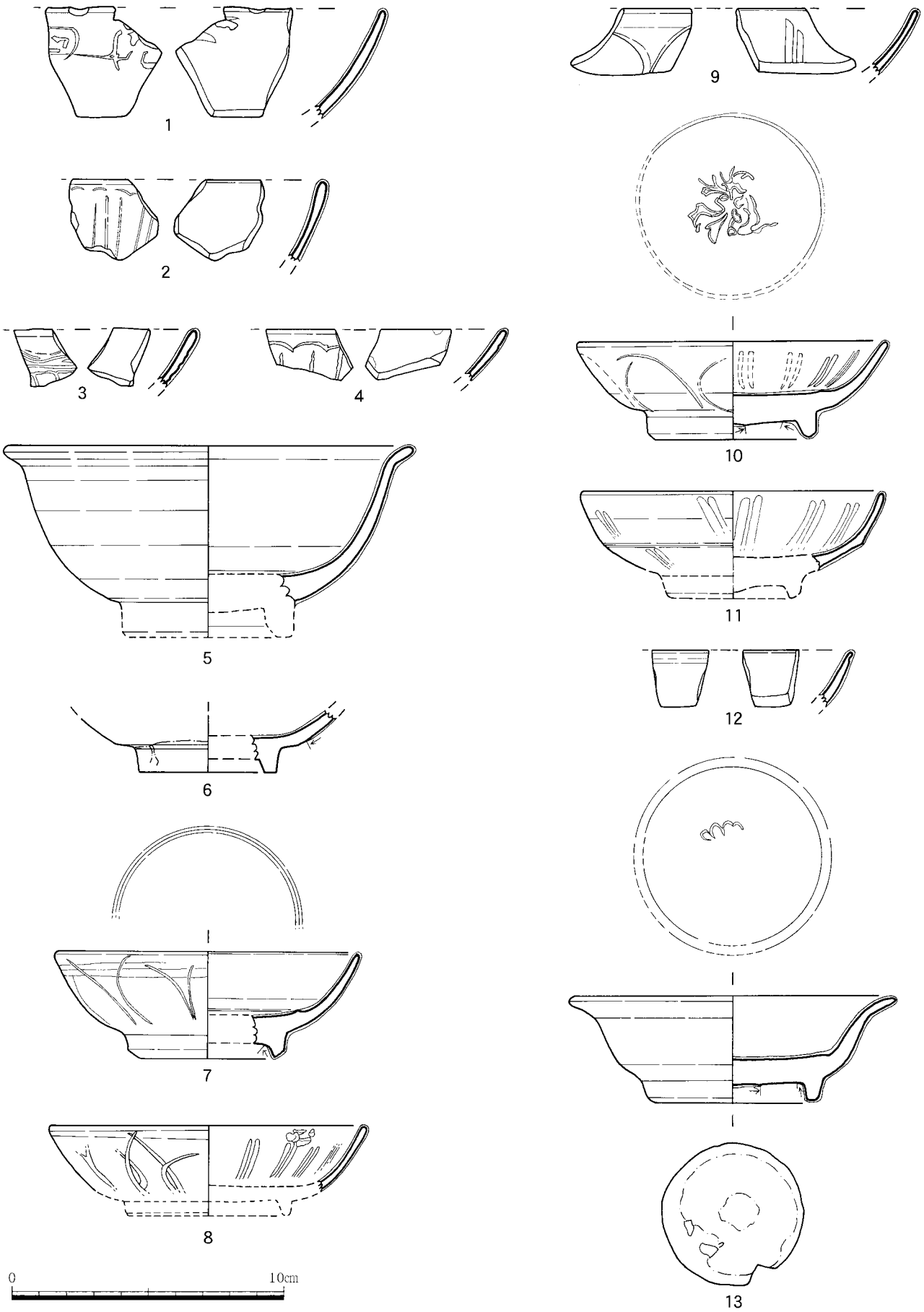
注　外－外面、内－内面、内外－内外面を表す。

第51表①　石積みSA33・34　青磁観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	器種	部位	口径 器高 高台径	素　地	釉色・貫入	器形・文様・施釉などの特徴	出土地点 出土層
第78図 図版62 1	碗	口縁部	— — —	淡灰色の微粒子。	明緑色の釉を厚く両面に施している。両面に細かい貫入がみられる。	直口口縁碗。外面の口縁には片切彫りの雷文を時計回りと反時計回りで描いている。内面口縁には片切彫りの刻花文を描いている。龍泉窯。14C後半～15C中頃。	SA34 栗石直下
〃 〃 2			— — —	灰白色の微粒子。	青灰色の釉を厚く両面に施している。両面に粗い貫入がみられる。	〃　。口縁端近くで器壁が4.3㎜(胴部)から4.9㎜と厚くなる。文様は線彫りで蓮弁文を粗密に描く。弁先も扁平な半円を横位に連結し、簡素化している。龍泉窯系15C後半～16C前半。	SA33 客土
〃 〃 3			— — —	黄白色の微粒子。微細な黒色鉱物が多く混入。	青白色の釉を厚く両面に施す。両面に粗い貫入がみられる。	〃　。口縁部に三本単位の櫛描で波状文を描き、その直下に二条一組の界線で区画する。この界線直下から線描きの蓮弁を描いているようである。福建・広東省の諸窯。15C後半～16C前半。	SA33 客土
〃 〃 4			— — —	灰白色の微粒子。	灰白色の釉を薄く両面に施している。貫入はない。	〃　。口縁部に片切彫りで蓮弁を描くが、弁先と弁軸が一致しない。弁先は扁平な半円形を連結させながら描いている。龍泉窯系。15C後半～16C前半。	SA34 栗石直下
〃 〃 5			15.0 (7.0) (6.0)	淡灰色の細粒子。微細な黒色や茶褐色の鉱物が多く混入。	灰緑色の釉を両面に施す。両面に破損時のものとみられる罅割れがみられる。	口縁端部を外側に「く」の字状に折り曲げ外反させた端反の碗。文様は内面の腰下部近くに陰圏線が途切れながら観察できる。龍泉窯系。14C後半～15C中頃。	SA33 栗石直下
〃 〃 6		底部	— — 5.0	淡灰色の細粒子。微細な黒色の鉱物が多く混入。	淡青緑色の釉を両面に施すが、外面のみ高台際まで釉を施す。両面に粗い貫入がみられる。	薄造りの碗の高台破片。高台際から削りだして高台を造る。畳付の幅が4.3㎜と狭い。高台の内刳りは浅い。龍泉窯系統の地方窯か。14C後半～15C中頃。	SA33 客土
〃 〃 7	皿	口縁部 ～底部	11.2 3.9 5.8	淡灰色の細粒子。微細な黒色や白色の鉱物を多く含む。	淡青緑色の釉を総釉後に外底面の釉を掻き取って露胎とする。貫入はない。	直口口縁皿。外面に片彫りの蓮弁文を高台際まで描く。見込みに陽圏線がみられる。龍泉窯系統の地方窯。14C後半～15C中頃。	SA33 栗石内
〃 〃 8		口縁部	11.6 (3.3) (6.0)	灰褐色の細粒子。微細な黒色鉱物が多く混入。	灰緑色の釉を両面に施す。両面に細かい貫入がみられる。	〃　。外面に片切彫りの蓮弁文を描く。粗雑な表現で弁先を描く。内面には幅広の叉状の工具で弁先が省略された蓮弁を描く。龍泉窯系統の地方窯。14C後半～15C中頃。	SA33 栗石内
〃 〃 9			— — —	淡灰色の細粒子。微細な黒色鉱物が少量混入する。	淡青緑色の釉を両面に施す。貫入はない。	〃　。外面に片切彫りの蓮弁文を描く。内面には幅広の叉状の工具で弁先を省略した蓮弁文を描く。龍泉窯系。14C後半～15C中頃。	SA33 栗石内
〃 〃 10		口縁部 ～底部	11.4 3.6 6.2	〃　。 〃　。	明緑色の釉を薄く総釉後に外底面の釉を蛇の目状に掻き取っている。貫入はない。	〃　。外面に幅広の蓮弁文を片切彫りで高台脇まで描く。内面には幅広の叉状の工具で弁先のない蓮弁文を描く。見込みには印花文と陽圏線がみられる。龍泉窯系。14C後半～15C中頃。	SA33 栗石直下
〃 〃 11		口縁部	11.1 (3.9) (4.5)	〃　。 〃　。	明緑色の釉が両面に施されている。貫入はない。	〃　。外面の腰部に陰圏線で上下を区画し、この陽圏線の上下に幅広の叉状工具で弁先を省略した蓮弁文を斜位に描く。内面にも幅広の弁先が省略された蓮弁文を片切彫りで腰下部まで描く。龍泉窯系。14C後半～15C中頃。	SA34 栗石直下
〃 〃 12			— — —	灰白色の微粒子。	淡青緑色の釉が両面に施されている。 〃　。	直口口縁皿。口縁端部を浅く削り出して小さな肥厚が作るが、厚い施釉により肥厚帯そのものが機能していない。龍泉窯系。14C後半～15C中頃。	SA33 栗石直下
〃 〃 13		口縁部 ～底部	12.0 3.9 5.8	淡灰色の微粒子。	明緑色の釉を薄く総釉後に外底面の釉を蛇の目状に掻き取っている。貫入はない。	無文外反口縁皿。口縁部が大きく緩やかに外反し、腰下部で丸味を持たせて成形する。内面の腰下部に陰圏線で囲繞し、見込みに印花菊文を施す。龍泉窯系。14C後半～15C中頃。	SA33 栗石内

注　(　)：推定、「—」：計測不可



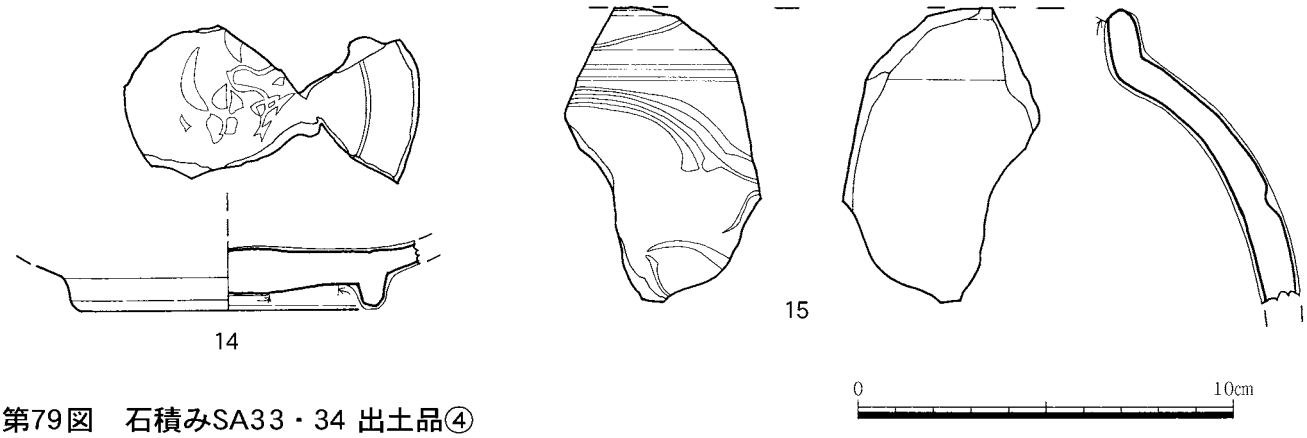
第78図　石積みSA33・34 出土品③
青磁

第51表②　石積みSA33･34　青磁観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称･ 仮称	部位	口径 器高 高台径	素　地	釉色･貫入	器形･文様･施釉などの特徴	出土地点 出土層
第79図 図版62 14	皿	底部	－ － 7.8	灰白色の微粒子。	明緑色の釉を両面に総釉後に外底面の釉を蛇の目状に掻き取っている。貫入はない。	皿の高台破片。見込みに陰圏線と印花文を施している。龍泉窯系。14C後半～15C中頃。	SA34 栗石内
〃 〃 15	酒会壺	口縁部	－ － －	灰白色の微粒子。	明緑色の釉を両面に総釉後に口唇部の釉のみ掻き取っている。貫入はない。	酒会壺の口縁破片。口縁に片切り彫りの文様を施すが構図は不詳である。胴部にも片切り彫りで牡丹唐草文とみられる文様を描いている。龍泉窯系。14C後半～15C中頃。	SA33 栗石内

注　（　）：推定、「－」：計測不可



第79図　石積みSA33・34 出土品④
青磁

6．白磁（第80図１～10）･（図版63－１～10）

石積みSA33・34より出土した白磁の破片は33点（第52表）を数えている。確認された器種は、碗（17点：≒51.5％）、皿（16点：≒48.5％）の２器種であった。白磁の中で大型破片や特徴的な資料を10点図化（第80図１～10）した。白磁碗の中で古手の資料は、第80図１に示した外反口縁碗で14世紀後半～15世紀前半に位置づけられている。その他に14世紀後半～15世紀前半に中国景徳鎮で生産されたとみられる枢府手の印花浮文（陽印花八宝文、若しくは亀を型で起こしている）の外反口縁碗（同図２）と、同タイプの碗の高台破片（同図３）が各々１点ずつ出土している。この二つのタイプに後続する白磁碗として、中国景徳鎮で15世紀後半～16世紀前半に生産された薄造りで型物成形の外反口縁碗（同図４・５）２点と、その高台破片（同図６）１点が出土している。碗に関しては15世紀中頃の資料が欠落した形となっているが、この空白期を埋める資料として福建省邵武窯系の抉入高台皿（15世紀中頃～16世紀）４点（同図７～10）が存在する。

第52表　石積みSA33･34 白磁出土状況

器種･部位 ＼ 出土地			SA33 客土	SA33 栗石内	SA33 栗石直下	SA33 裏込めの直下	SA34 栗石直下	SA34 覆土	SA34 栗石内	SA34 栗石	SA33･34 客土	SA33･34 栗石内	SA33 栗石内+SA33 栗石直下	SA21 覆土+SA33	合計	
碗	口～底部	外反							1						1	17
	口縁部	外反		3	2	1		1	1					1	9	
	胴部				3		1								4	
	底部			1			1					1			3	
皿	口～底部	直口					1				1				2	16
	口縁部	内彎		2					1						3	
		直口	1		1										2	
	胴部		1					4	1						6	
	底部									1		1	1		3	
合　計			2	6	6	1	3	5	4	1	1	2	1	1	33	

第53表　石積みSA33・34　白磁観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	器種	部位	口径 器高 高台径	素地	釉色・貫入	器形・文様・施釉などの特徴	出土地点 出土層
第80図 図版63 1	碗	口縁部	― ― ―	灰白色の微粒子。微細な黒色や白色の鉱物が少量含まれる。細かい気泡痕が多く観察できる。	灰白色の釉は外面の腰下部から高台際まで施釉。内面は総釉。貫入なし。	外反口縁の碗。森田勉分類（1982年）の碗C群に該当する碗。外面の頸下部と胴上部の境目に明瞭な稜がみられる。胴部の轆轤痕は顕著である。内面の成形は外面より丁寧に仕上げられている。中国南部福健省地方窯。14C後半～15C前半。	SA21 覆土 SA33
〃 〃 2		口縁部	14.0 (7.5) (6.0)	白色の微粒子。微細な気泡痕が少量観察できる。	淡青白色の釉が両面に施されている。両面に細かい貫入がみられる。	薄手の外反口縁碗。「枢府手」の範疇に入る碗とみられる。内面に型で起こされた印花八宝文、若しくは吉祥の亀とみられる文様がみられる。景徳鎮窯か。14C後半～15C前半。	SA33 裏込め石 の直下
〃 〃 3		底部	― ― 4.6	〃　　。 〃　　。	〃　　。 〃　　。	「枢府手」の範疇に入る小碗とみられる。上記2と素地・釉が一致する。釉は総釉後に高台外面下端から外底の釉を掻き取って露胎とする。高台の内刳りは斜位に削り取っている為、外底面中央で扁平な三角錐状となる。見込みを浅く窪ませて成形する。景徳鎮窯か。14C後半～15C前半。	SA34 栗石直下
〃 〃 4		口縁部 ～底部	12.5 5.6 5.1	光沢のある灰白色の微粒子。堅緻である。	淡灰白色の釉を総釉後に高台外面下端から高台内面下端までの釉を掻き取って露胎とする。貫入なし。	非常に薄く成形された外反口縁碗。外面や劈開面の観察からは轆轤成形などの痕跡が認められないことから型物成形の碗とみられる。見込みに陰圏線が型で起こされれている。景徳鎮窯。15C後半～16C前半。	SA34 栗石内
〃 〃 5		口縁部	12.4 ― ―	〃　　。 〃　　。	淡灰白色の釉が両面に観察できる。貫入なし。	非常に薄く成形された外反口縁碗。上記4と同一の個体である可能性が高い。外面や劈開面の観察からは轆轤成形などの痕跡が認められないことから型物成形の碗とみられる。景徳鎮窯。15C後半～16C前半。	SA33 栗石内
〃 〃 6		底部	― ― 5.2	〃　　。 〃　　。	淡灰白色の釉を総釉後に高台外面下端から高台内面下端まで釉を掻き取って露胎とする。両面に細かい貫入がみられる。	非常に薄く成形された外反口縁碗の底部とみられる。腰下部で強く丸味を持たせて、内側に閉じ気味に胴上部に移行する碗。外面や劈開面の観察からは轆轤成形などの痕跡が認められないことから型物成形の碗とみられる。景徳鎮窯。15C後半～16C前半。	SA33・34 栗石内
〃 〃 7	皿	口縁部 ～底部	10.0 2.45 4.6	白色の細粒子。微細な黒色の鉱物が少量含まれる。劈開面に細かい気泡痕が多く観察できる。	淡灰白色の釉を内面見込みから高台際まで施釉。両面に非常に細かい貫入がみられる。	直口口縁の小皿。口唇部を平坦に成形し、外面に雑な轆轤痕が観察できる。内面の成形は外面より丁寧な回転擦痕がみられる。見込みに重ね焼きの目痕が四箇所みられる。畳付を四箇所抉りとって割れ高台とする。福建省南平市邵武窯系か。15C中頃～16C。	SA34 栗石直下
〃 〃 8		口縁部 ～底部	9.4 2.2 4.5	〃　　。微細な黒色の鉱物が少量含まれる。劈開面に細かい気泡痕が多く観察できる。	〃　　。 〃　　。	直口口縁の小皿。口唇部を舌状に尖らせて成形する。外面に雑な轆轤痕が観察できる。内面の成形は外面より丁寧な回転擦痕がみられるが、見込みは轆轤の回転によって陶土が「の」の字状に残っている。また、重ね焼きの目痕が五箇所みられる。畳付を五箇所抉りとって割れ高台とする。福健省南平市邵武窯系か。15C中頃～16C。	SA33・34 客土
〃 〃 9		口縁部	10.2 ― ―	〃　　。微細な黒色や茶褐色の鉱物が少量含まれる。劈開面に細かい気泡痕が多く観察できる。	淡灰白色の釉を内面と外面の高台際まで施釉。両面に非常に細かい貫入がみられる。	直口口縁の小皿。口唇部を平坦に成形する。外面に雑な轆轤痕が観察できる。内面は外面より丁寧に成形する。福建省南平市邵武窯系か。15C中頃～16C。	SA33 栗石直下
〃 〃 10		底部	― ― 4.1	白色の微粒子。	淡灰白色の釉を内面見込みと高台際まで施釉。両面に非常に細かい貫入がみられる。	直口口縁の小皿の高台破片。外面に轆轤痕が観察できる。内面の成形は外面より丁寧に成形するが、見込みは轆轤の回転によって陶土が「三日月」の字状に残っている。その他に重ね焼きの目痕が五箇所みられる。畳付を五箇所抉りとって割れ高台とする。福健省南平市邵武窯系か。15C中頃～16C。	SA33・34 栗石内

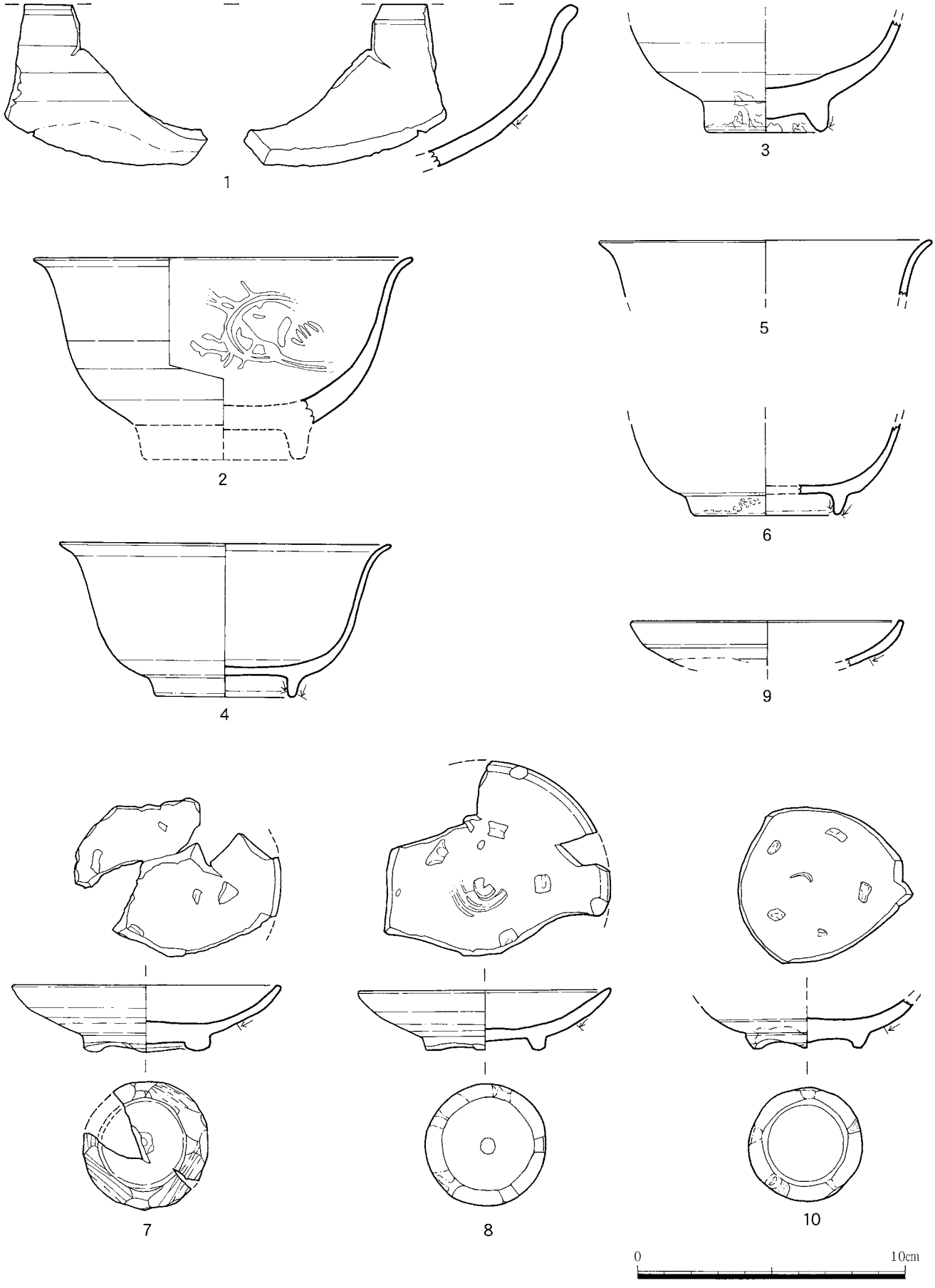
注　（　）：推定、「―」：計測不可

引用及び参考文献

1．森田 勉 1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会

2．金武正紀「今帰仁タイプ白磁とビロースクタイプ白磁」『中国福健の貿易陶磁と琉球－宋・元代を中心に－』第25回 沖縄県立埋蔵文化財センター文化講座 発表要旨 2007年５月19日。

3．金武正紀・島袋綾野「遺跡から出土する主な陶磁器早見表」『石垣市史考古ビジュアル版 陶磁器から見た交流史』第５巻 石垣市総務部市史編集課 2008年３月。



第80図　石積みSA33・34 出土品⑤
白磁

7．青花（第81図１～５）・（図版64－１～５）

石積みSA33・34より出土した染付の破片は25点（第54表）を数える。確認された器種は、碗（20点：≒80％）、皿（２点：≒8％）、瓶（３点：≒12％）の３器種であった。青花の破片資料の中には簡素化された波濤文帯を口縁部に描いた碗（15世紀末～16世紀中頃）や福建・広東系の碗（17世紀末～19世紀前半）に比定される資料も含まれているが、細片のため図化を省略した。比較的に大きな破片資料や良好な資料を第81図１～５に図化を試みた。個々の特徴などについては、第55表に示した。

第54表　石積みSA33・34 青花出土状況

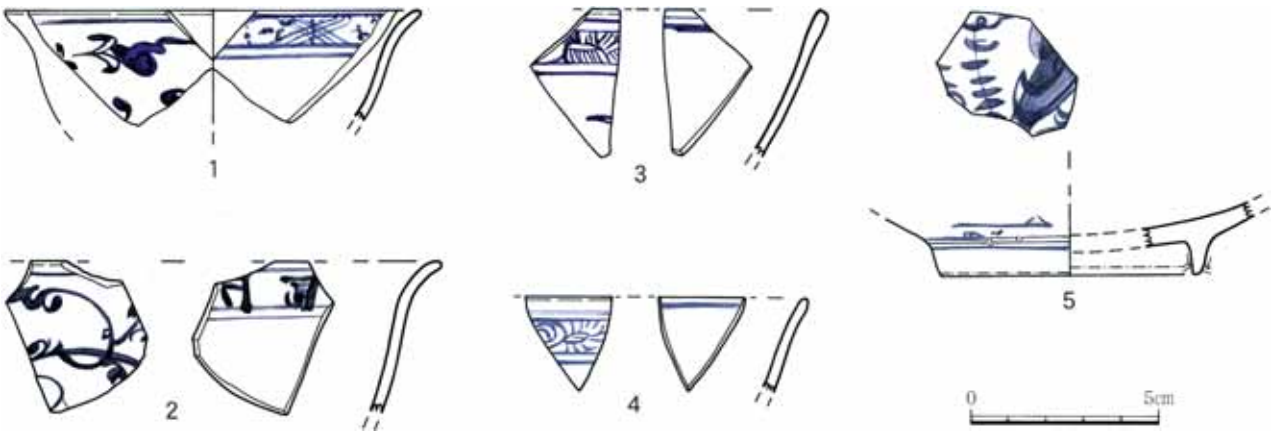
器種・部位＼出土地			SA33 栗石内	SA33 栗石直下	東SA33	SA34 覆土	SA34 栗石内	SA34 栗石直下	合計	
碗	口縁部	直口		3					3	20
		外反	1	1					2	
		端反り		1				1	2	
	胴部			7	2	3			12	
	底部							1	1	
皿	口縁部						1		1	2
	底部					1			1	
瓶	胴部						2	1	3	3
合　計			1	12	2	4	3	3	25	

第55表　石積みSA33・34　青花観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号 遺物番号	器種	部位	口径 器高 高台径	素地・釉色	施釉・呉須(藍色)の発色	観　察　事　項　等	出土地点 出土層
第81図 図版64 1	碗	口縁部	11.0 ― ―	淡灰白色の細粒子。微細な黒色鉱物が僅かに混入する。貫入はない。淡青白色の釉。	残存部は両面とも総釉。呉須はやや鮮明な濃青色で、呉須の一部は黒ずむ。	端反の碗。外面口縁に界線を施し、その直下に宝相華唐草文を描く。内面の口縁には四方襷文を界線で上下に区画する。下位の界線は二条を施す。景徳鎮。15世紀(1430年～1460年)。	SA33 栗石直下
〃 〃 2			― ― ―	淡灰色の微粒子。貫入はない。淡灰白色の釉。	〃　。呉須は鮮明な濃青色で、呉須の一部は黒ずむ。	〃　。〃　。内面の口縁にはパスパ文字を描き、界線で上下に区画する。下位の界線は二条を施す。景徳鎮。15世紀(1430年～1460年)。	SA34 栗石直下
〃 〃 3			― ― ―	淡灰白色の微粒子。貫入はない。淡灰白色の釉。	〃　。呉須は鮮明な濃青色。	直口口縁の碗。外面の口縁に波濤文を描き、二条一組の界線で上下を区画する。胴部にはアラベスク文の一部とみられる文様を描く。内面の口縁には二条の界線を施す。火災による火熱を受けていないので流れ込の可能性が高い。景徳鎮。16世紀前半～中頃。	SA33 栗石直下
〃 〃 4			― ― ―	淡灰白色の細粒子。微細な気泡痕が僅かに観察できる。貫入はない。淡青白色の釉。	〃　。呉須はやや鮮明な淡青色。	口縁が微弱に外反する碗。外面の口縁に波濤文(菊花?と渦巻き文)を描き、二条一組の界線で上下を区画する。内面の口縁には一条の界線を施す。火災による火熱を受けていないので流れ込の可能性が高い。景徳鎮。16世紀前半～中頃。	SA33 栗石直下
〃 〃 5	皿	底部	― ― 6.9	〃　。 〃　。 〃　。 〃　。	両面を総釉後に畳付を露胎(高台外面下端から高台内面下端まで)とする。呉須はやや鮮明な淡青色で、呉須の一部が黒ずむ。	畳付が平坦に成形された皿。高台が内側に閉じる。外面の界線は高台際(一条)と高台際(二条)を施す。高台際に草花文の一部とみられる文様を描いている。見込みには「志在書中」図を描く。景徳鎮。18世紀頃。	SA34 覆土

注　「―」：計測不可

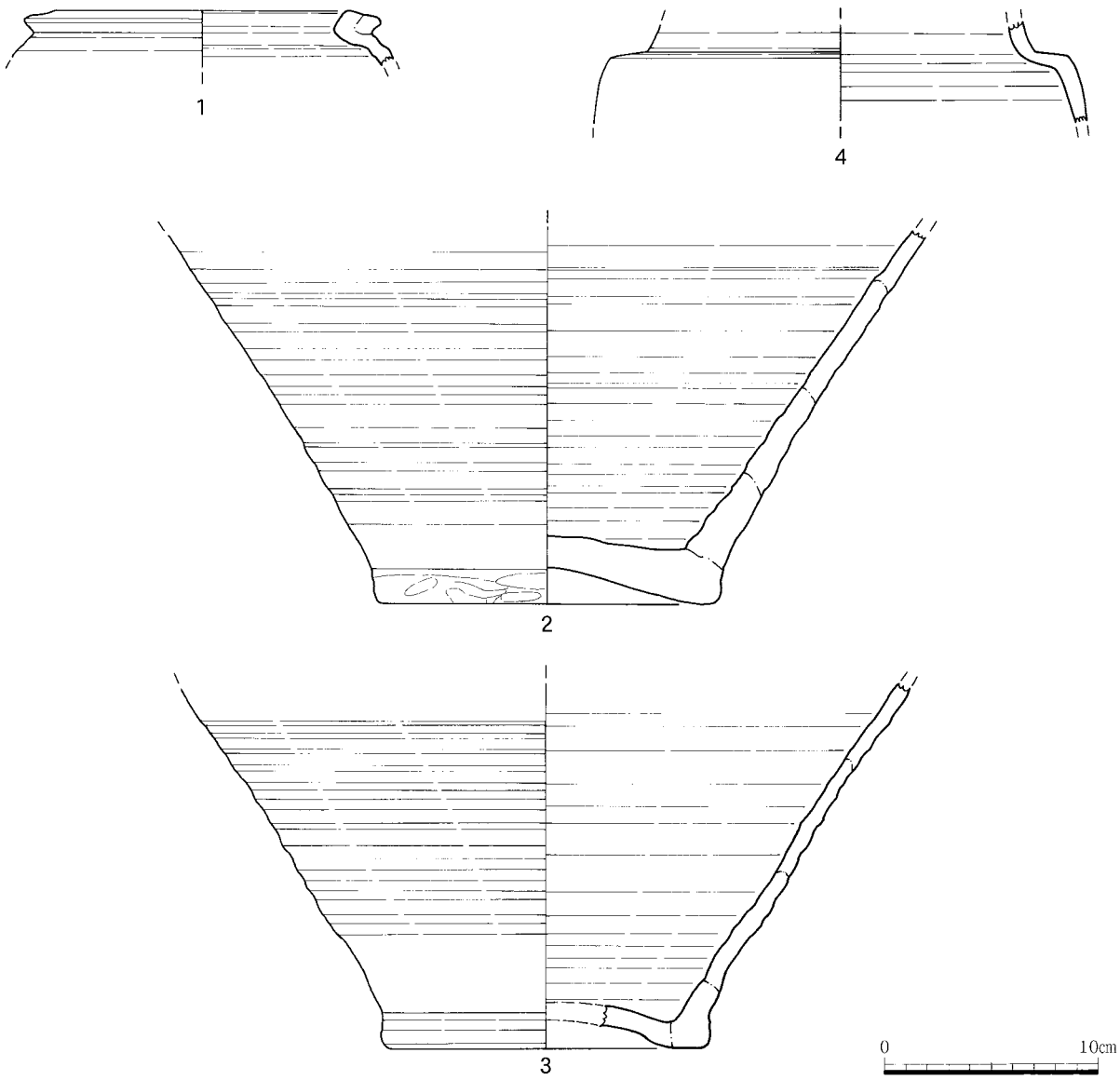


第81図　石積みSA33・34 出土品⑥
青花

８．中国産褐釉陶器（第82図１～４）・(図版65－１～４)

中国産褐釉陶器は、壺を主体に出土している。その他に擂鉢の頸部とみられる資料が１点出土しているが小破片の為、図化を省略した（第56表)。壺の中で比較的大型の資料や特徴的な資料を抽出して、図化を試みたのが第82図１～４に呈示した４点である。以下に特徴などを記す。

第82図１は口縁部の肥厚が歪な隅丸方形状を呈する壺の口縁破片で、推算された口径は16.6cmを測る。釉は茶褐色を帯びる。素地は灰褐色の細粒子で、粗密な長石や茶褐色の鉱物が少量含まれている。SA33栗石内出土。同図２は底径が15.6cmを測る壺の底部破片である。外面から外底面まで茶黒色の釉を施している。内面には灰白色の釉を総釉する。素地は茶紫色の細粒子で粗密な長石を多く含んでいる。外底面の縁辺部に三箇所、砂目（粗い長石を主体とする）が付着する。希に2.5～４mm内外の粗い長石がみられる。SA34栗石内・SA28第２層出土。同図３も上記２と同一タイプの壺の底部破片で底径が15.4cmと求められている。両面及び外底面に黄茶色の釉を施している。素地は茶紫色の細粒子で、粗密な長石が多く含まれている。外底面の縁辺部に砂目（粗い長石を主体とする）が付着する。



第82図　石積みSA33・34 出土品⑦
中国産褐釉陶器

第82図４は茶入れ壺の胴部破片で胴部での最大胴径が17.2cmと求められた資料である。肩部が怒り肩となるタイプである。茶褐色の釉を薄く外面の頸下部から胴部に施している。施釉は雑であり、部分的に露胎する。内面は釉の一部が垂れ流れた状態で残っている。素地は茶紫色の微粒子で、微細な長石が僅かに観察できる。希に粗い長石がみられる。SA33栗石内直下より出土。

第56表　石積みSA33･34 中国産褐釉陶器出土状況

種類＼出土地		SA33					SA34					SA34栗石内+SA34栗石直下+SA34栗石	SA33栗石+SA34栗石	SA34栗石内+SA28第2層	合　計	
		客土	栗石	栗石内	栗石直下	集石直下	覆土	栗石	栗石内	栗石下	栗石直下					
壺	口縁部		6	1	6				3		1	1			18	
	頸部			1		5									6	
	肩部			13	1					9					23	948
	胴部	11	69	55	154	261	15	30	153		141		1		890	
	底部				3		2	1	1	2	1			1	11	
茶入れ壺	胴部				1										1	
擂鉢	頸部		1												1	
合　計		11	76	70	165	266	17	31	157	11	143	1	1	1	950	

９．三彩（第83図１～４）・(図版66－１～４）

中国華南地域で生産された三彩の破片が４点（第83図１～４）出土している。その内訳は三彩鶴形水注２点、三彩仙人塑像（註１）の一部とみられるもの１点と荒磯形水滴１点である。以下、個々の特徴を記す。

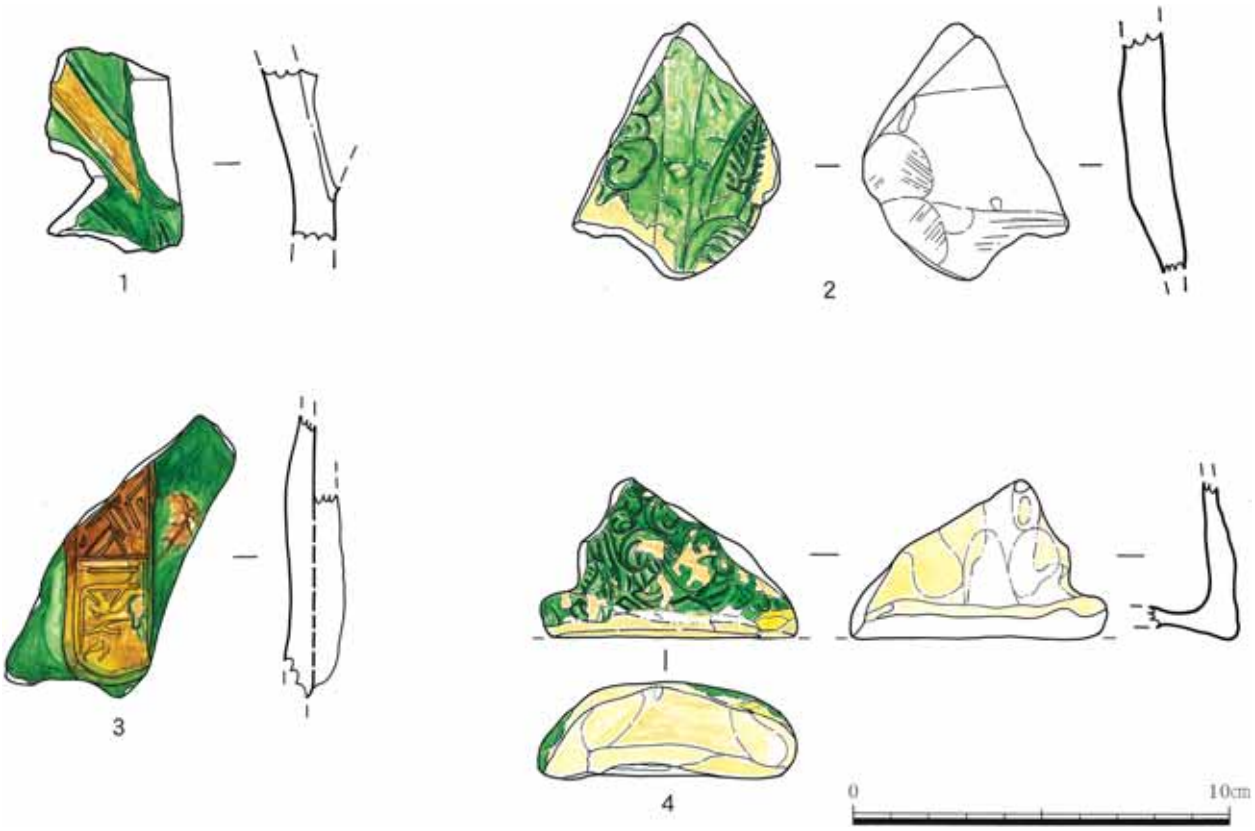
第83図の１は鶴形水注の把手が貼り付けられた胴部片で、鶴の羽先部分が型で起こされている。型を貼り合わせた繋ぎ目から割れている。裏面には指ナデや指圧痕が観察できる。釉は淡緑色と黄色の二種類が確認できる。素地は淡黄白色の粗粒子で、微細な茶褐色の鉱物が僅かに観察できる程度である。SA34覆土より出土。同図２は鶴形水注の底部近くの破片で、鶴が水辺で羽を休めた構図（註２）をデザインとして採用されたものであり、同図２は鶴の脚の周辺に配置された蓮葉や波濤文が型で起こされている。釉は緑色のみ残存する。素地は淡黄白色の粗粒子で、微細な白色鉱物を主体に多くみられ、希に細かい茶褐色の鉱物や１mm前後の粗い長石が観察できる。内面は刷毛目が主体的に施されている。部分的にナデを加えている。SA33栗石内より出土。同図３は三彩仙人塑像の破片。八仙人の一人である張果老（若しくは張国老とも言う）の所持品である魚鼓（木魚）の一部とみられるものが、型で起こされている。釉は緑色を主体に黄色と茶色の三色を施す。内面は左上がりの指ナデが同一方向に丁寧に施されている。素地は淡黄白色の細粒子で、細かい長石が僅かに観察できる。SA33栗石内より出土。同図４は荒磯形水滴（註３）の底部破片とみられる資料である。器壁が1.7～5.2mmと不均一である事と残存する底径が4.4cmを測る事などから荒磯形水注（注口が奇怪な顔の大魚が波濤から踊り出てくる姿の水滴）と判断した。表面に波濤文が型で起こされている。釉の下に白化粧土を塗布し、その上から淡緑色の釉を主体に黄色の釉を部分的に施しているようである。型を貼り合わせた繋ぎ目から割れている。内面にナデと指圧が観察できる。素地は淡黄白色の細粒子で、半磁胎の軟質である。素地に微細な長石や茶褐色の鉱物を少量含んでいる。希に粗い長石（0.8～1.9mm）がみられる。SA33客土より出土。

註文献

註１．亀井明徳「久米島における華南三彩陶の新資料」『紀要』第８号 久米島文化センター2008年３月。

註２．金城亀信「豊見城村内確認の明代三彩鶴型水注」『文化課紀要』第６号沖縄県教育委員会1990年３月。

註３．尾崎直人『インドネシア・スラウェシ島に渡った三彩―交趾焼展―本多弘氏コレクションによる―』財団法人富山佐藤美術館2001年４月。



第83図　石積みSA33・34 出土品⑧
三彩

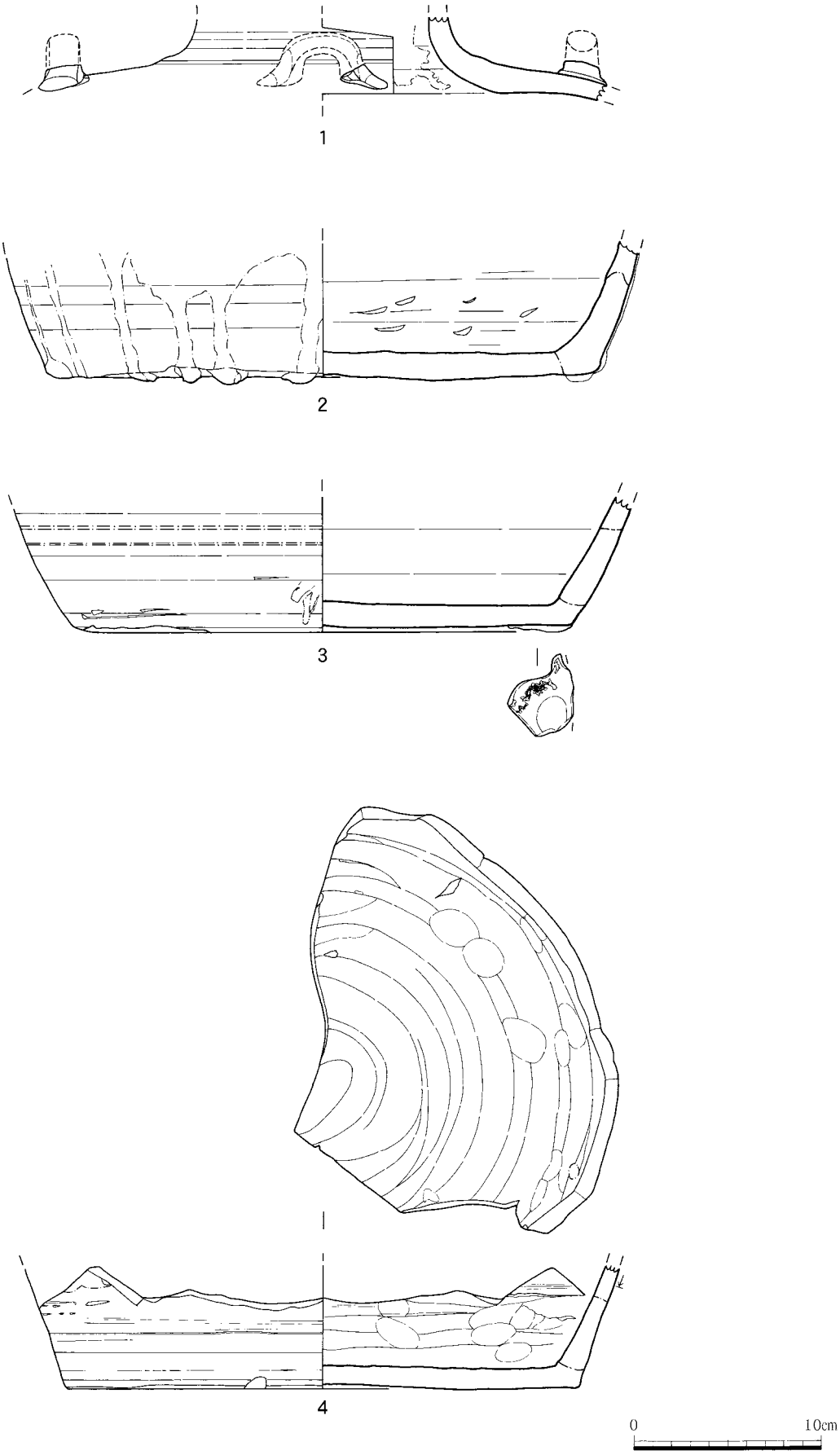
10. タイ産褐釉陶器（第84図・図版67A－１～４）

タイ産褐釉陶器壺の破片が第57表に示したように1346点出土しているが、口縁部は細片化した破片資料が62点得られているものの、図化にたえうる資料がなく、割愛した。その中から特徴的な資料や大型の破片資料を抜き出して図化を試みたのが第84図に示した４点である。第84図１は大きな紐状の把手（把手横の外幅79.2mmと内幅33.3mm、把手縦16.8mm、把手厚み13.9mm）を貼り付けている。怒り肩の壺で頸下部に陽圏線で囲繞する。陽圏線から下４cmの位置から把手を貼り付けている。陽圏線部分での復元された直径は17.8cmを求めた。器面調整は、内面の頸部から肩上部までは回転擦痕がみられ、肩下部には指圧痕が集中する。この指圧痕は把手貼り付け時に内側から指で押し付けた際のものである。釉は茶褐色や黒褐色を呈し、外面にのみ施す。素地は淡い灰紫色の細粒子で、粗密な白色や茶褐色の鉱物を多く含んでいる。SA33栗石直下より出土。

第57表　石積みSA33･34 タイ産褐釉陶器出土状況

器種･部位＼出土地		SA33							SA34				SA33栗石+SA34栗石内	SA33栗石直下+SA34栗石内	SA33栗石+SA33栗石直下+SA34栗石	SA33栗石+SA34栗石内+SA24栗石	合計
		客土	栗石 西側トレンチ	栗石	栗石内	栗石直下	集石直下	覆土	栗石	栗石内	栗石直下						
壺	口縁部		1	13		31	3		4	2	3	3	1	1		62
	頸部			27		2				14						43
	肩部			3		43			20	1						67
	胴部	5		472	41	295	15	7	20	60	226					1141
	底部			20		1					4				1	26
	耳			4	1	1			1							7
合計		5	1	539	42	373	18	7	45	77	233	3	1	1	1	1346

同図２は大型壺の底部破片で、直径が29.6cmを測った。外面は篦削りを雑なナデで消しているが消えきっていない。外底面は全面に鉄分の多い泥を塗布（赤茶色を呈する）したとみられ、その上から黄灰色の剥離剤（藁灰か）を施している。黄灰色の剥離剤は自然釉として残っていて、剥離剤を「の」の字状に半時計回りに中心から外側に向かって渦巻き状に残っている。内面は篦削りを主体とし、部分的にナデが施されている。内底面は轆轤



第84図　石積みSA33・34 出土品⑨
タイ産褐釉陶器

や回転台の回転を利用した指ナデが施されている。同心円状に反時計回りに指ナデが深目に施されている。素地は茶紫色の細粒子で、粗密な白色鉱物（長石）や細かい茶褐色の鉱物を多量に含んでいる。SA34栗石直下より出土。

同図３も大型壺の底部破片で、推算された底径が26.6cmと求められた。黒褐色の釉が外面に僅かに残っている。内面には黄緑色の釉が垂れている。器面の調整は外面が篦削りを主体にナデが施されている。外底面は平坦な面であるが、底面に藁などを敷いて焼成した為か、藁灰とみられるものが全体的に被さって調整痕が観察ができない。外底面の縁辺部に胎土目の目痕がみられる。内面は篦削りを丁寧にナデ消しているが、消し忘れた部分もみられる。内底面はやや雑なナデで仕上げている。素地は灰褐色の細粒子で、細かい白色や茶褐色の鉱物が多くみられる。その他に劈開面に微細な気泡痕が多くみられる。SA33栗石より出土。

第84図４は底径の推算が27.4cmと求められた大型壺の資料である。外面に黄褐色の釉が部分的に観察される。外面の調整は篦削りのみが施されている。外底面は全体的に微細な起伏でアバタ状となる。僅かに指ナデや指圧痕が確認できる程度である。内面は雑な篦削りとナデがみられる。内底面は轆轤や回転台の回転を利用した指ナデが深目に施して仕上げている。同心円状の指ナデは反時計回りに実施されている。素地は茶紫色の細粒子で、粗密な長石と茶褐色の鉱物が多く含まれている。SA33栗石直下より出土。

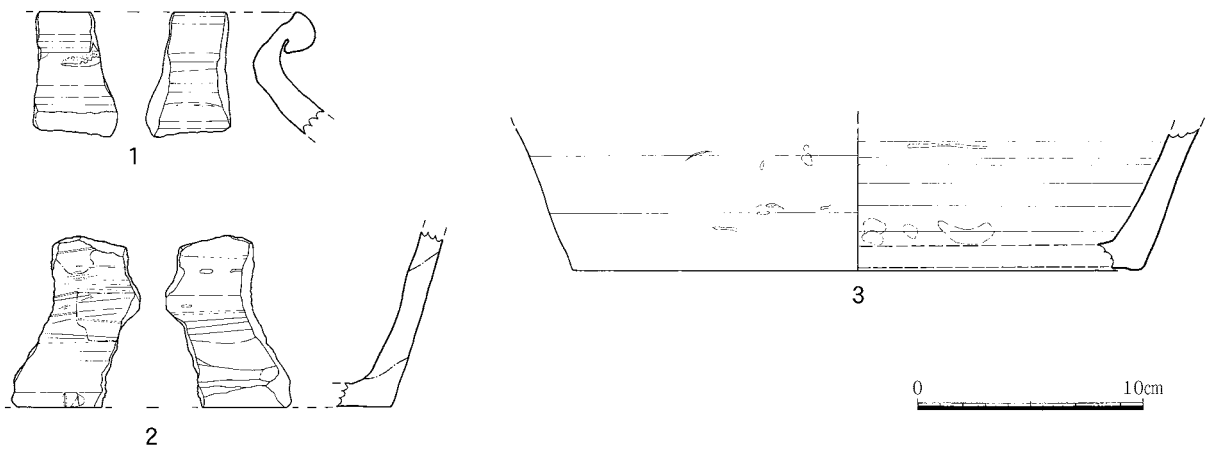
第58表　石積みSA33・34 中世陶器出土状況

器種・部位 ＼ 出土地		SA33	SA34		合計
		栗石直下	栗石内	栗石直上	
壺（備前）	口縁部			1	1
	胴部	6		1	7
	底部	1	1	2	4
合　計		7	1	4	12

11. 中世陶器（第85図１～３）・（図版67B－１～３）

備前焼の壺の口縁破片と底部破片が３点得られていたので、これを図化（第85図１～３）した。

第85図１は壺の口縁部が縦位に割れた破片資料である。口頸部の形状が「く」の字状に折れ、口縁端部の陶土を折り返して半円形状に肥厚させている。形状から判断するとタイ産褐釉陶器壺を模倣した可能性も考えられる。素地は灰褐色の粗粒子（光沢のあるセメントに近い）で、粗密な長石？が多くみられる。希に細かい茶褐色や灰褐色の鉱物が含まれている。素地や混入物が第69図10と類似する。外面の頸部から頸下部には自然釉とみられる黄緑色の釉が途切れながら残っている。釉は火熱を受けて気泡痕が多く観察できる。同様の釉は内面の口縁部にも観察できる。内面の調整は横位に雑な指ナデを施している。SA34栗石直下より出土。同図２は細片化した壺の底部破片。内外面には雑な擦痕とナデが観察できる。底面は器面の保持が悪く、微弱な起伏がみられるが、部分的に指圧痕やナデがみられる。素地は淡灰色の粗粒子で、粗密な長石？が多く含まれている。SA34栗石より出土。同図３は推算底径が25.2cmと求められた資料である。両面ともナデを主体に施しているが、部分的に擦痕が確認できる。底面は器面の保持が悪く、微弱な起伏がみられる程度で調整方法は不明である。素地は淡灰色の粗粒子で、粗密な長石？が多量に含んでいる。SA33栗石直下より出土。



第85図　石積みSA33・34 出土品⑩
中世陶器

12. 陶質土器・沖縄産無釉陶器・沖縄産施釉陶器（第86図１～６）・（図版68－１～６）

第59表～第61表に呈示したように沖縄産の陶質土器と無釉陶器及び施釉陶器が出土している。破片資料が多く、特徴的な資料や形状の窺える資料を第86図１～６に図化した。

第86図１は陶質土器の鍋の口縁破片である。口唇部が7.8mmと幅広で、口頸部は器壁が薄く4.3mmとなる。口縁部には部分的に煤が付着している。両面とも回転擦痕とナデがみられる。口唇部は摩耗して判然としない。色調は淡橙色を呈する。素地は精選され微細である。混入物として微細な石英や茶褐色の物質が多く含まれている。希に粗い石英が含まれている。SA34覆土より出土。

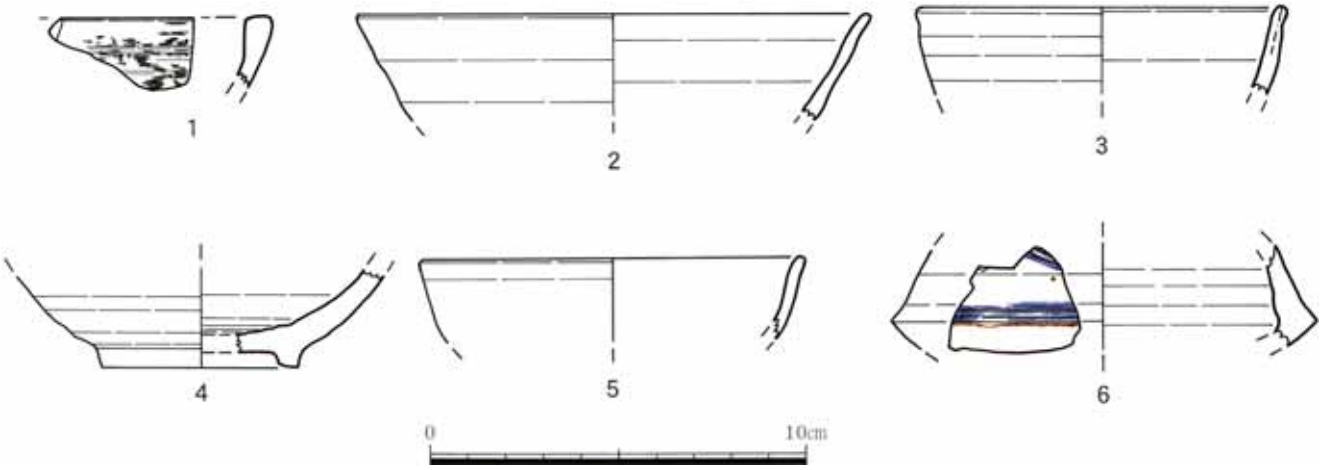
同図２～３は無釉碗の破片資料である。同図２は推算口径が13.6cm、同図３の口径が9.8cmと求められている。同図４は高台の推算径が5.2cmと求められた。釉は同図１に黄茶色の自然釉とみられるものが外面にのみ観察できる。色調は１が灰褐色を基調とする。２は表裏面とも黄白色を主体とし、部分的に灰褐色を帯びている。３は外面が灰色で、内面が茶褐色を帯びている。器面調整は１の内面が丁寧な回転擦痕がみられる。２は外面が篦削りで、内面は雑な指ナデが横位に入る。３は高台際に目の粗い回転擦痕、内面は雑な指ナデが横位に入っている。高台の内刳りは丁寧で、平坦に仕上げているが、畳付は雑な削りで歪な平坦面となる。素地は三点とも微粒子である。１は粗密な石英を僅かに含む程度である。２は細かい石英や茶褐色の鉱物を少量含む。劈開面に白色の陶土や気泡痕がみられる。４も細かい石英や茶褐色の鉱物を少量含むが、希に粗い石英（直径２mm）がみられる。１はSA34栗石内から出土し、２・３がSA34覆土より出土している。

同図５は両面に茶褐色の釉が施された碗の破片で、口径が10.2cmと求められている。素地は光沢のある淡黄灰色の微粒子で、粗密な白色や茶褐色の鉱物を多く含んでいる。SA33客土より出土。

同図６はカラカラと俗称されている泡盛を入れた酒注（酒器）の胴部片で、線彫り染付と称される資料である。外面に白化粧土を施した後に叉状工具で斜沈線と界線を胴部や屈曲部の上部に施し、この文様の上から藍色の呉須で文様をなぞって描き、その上から透明釉を掛けている。釉には細かい貫入がみられる。内面は露胎し、轆轤の回転を利用した指ナデと轆轤痕が明瞭に観察できる。素地は淡橙色の細粒子である。劈開面から微細な気泡痕が僅かに観察できる程度であり、混入物が観察できない。SA34覆土より出土している。

第59表　石積みSA33・34 陶質土器出土状況

器種・部位 ＼ 出土地		SA34 覆土	SA34 栗石直下	合計	
鍋	口縁部	1		1	2
	胴部	1		1	
火炉	肩部		1	1	
不明	底部	1		1	
合　計		3	1	4	



第86図　石積みSA33・34 出土品⑪
陶質土器、沖縄産無釉陶器、沖縄産施釉陶器

第60表　石積みSA33・34 沖縄産無釉陶器出土状況

器種・部位 ＼ 出土地		SA33			SA34		合計	
		客土	栗石内	集石直下	栗石内	覆土		
碗	口縁部					2	2	5
	胴部	1				1	2	
	底部					1	1	
壺	胴部		1	1	5	1	8	
不明	胴部			1		5	6	8
	底部					2	2	
合　計		1	1	2	5	11	20	

第61表　石積みSA33・34
沖縄産施釉陶器出土状況

器種・部位 ＼ 出土地		SA33	SA34	合計	
		客土	覆土		
碗	口縁部	1		1	2
	胴部		1	1	
酒器	胴部		1	1	
合　計		1	2	3	

13. **タイ産土器**（第87図１～３）・（図版69－１～３）

タイ産土器の蓋が第62表に示したように14点が得られている。この中から形状が窺える資料や特徴的な資料を図化（第87図１～３）した。なお、第62表中の「撮A」や「Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ・不明」とあるものは、前回報告（註１）の撮分類と蓋端部の形態分類に準じたものである。詳細は報告書を参照されたい。

第87図１は落とし蓋で、撮分類のAに入る。蓋縁分類のⅠ類の範疇にある資料である。端部の直径は12.8cm、高さは4.5cmを測る。蓋内面は丁寧な同心円状のナデが施されている。撮は指ナデで仕上げているが撮の大半が剥離する。外面は中央から外側に向かって雑な篦削りで丸く仕上げているが、縁沿いはナデが集中する。縁辺部を浅く圏線状に窪ませて成形する。色調は淡橙色を基調とするが、部分的に暗褐色を呈する。胎土は灰褐色の細かい泥質の粘土で、胎土に粗密な石英？や茶褐色の物質（酸化鉄？）が多く含まれている。SA33客土より出土。

同図２は撮を欠いた資料である。蓋縁分類のⅡ類の範疇に含まれる。器面の調整は内面は丁寧なナデで仕上げているが、外面は主に篦削りを擦痕でナデ消している。縁沿いは部分的に指ナデがみられる。色調は淡橙色であるが、外面が部分的に淡茶色となる。胎土は淡灰色の細かい泥質の粘土で、胎土に粗い石英？を多量に含んでいる。SA34栗石内より出土している。

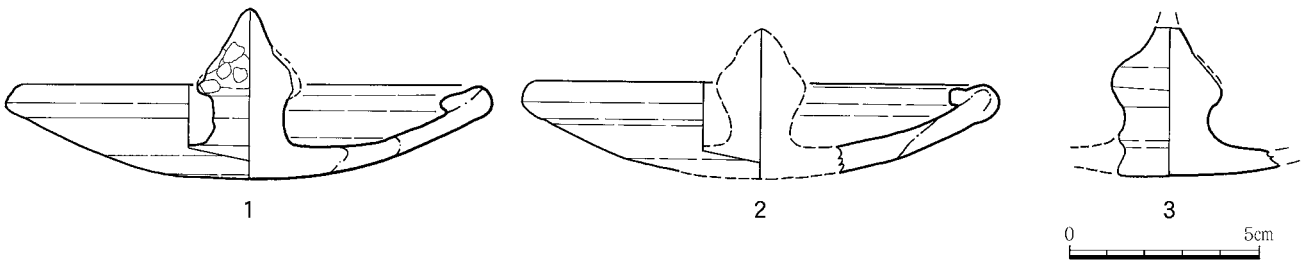
同図３は撮の破片資料である。撮分類のAの範疇にあるものである。内面は丁寧なナデで仕上げている。撮部分は顕著な指ナデが観察できる。外面は篦削りと擦痕がみられる。色調は内面が黄白色で、外面は淡橙色を帯びている。胎土は淡灰白色の細かい泥質の粘土で、胎土に細かい石英？を多量に含んでいる。希に粗密な黒色や灰色の鉱物が含まれている。SA34客土より出土。

第62表　石積みSA33・34 タイ産土器
出土状況

部位・分類 ＼ 出土地		SA33		SA34		合計	
		客土	栗石直下	栗石内	客土	栗石内		
落とし蓋	A－Ⅰ類	1					1	
撮	A				1		1	
蓋端部	Ⅰ類		1	1	1		3	12
	Ⅱ類	1		1		1	3	
	Ⅲ類			1			1	
	Ⅳ類			1			1	
	Ⅵ類		1				1	
	不明	2	1				3	
合　計		4	3	4	2	1	14	

註文献

註１．沖縄県文化財調査報告書第132集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）－』沖縄県教育委員会1998年３月。



第87図　石積みSA33・34 出土品⑫
タイ産土器

14. 金属製品（第88図１～14、第89図15～23）・（図版70－１～14、図版71－15～22）

石積みSA33・34より出土した金属製品の出土状況については、第63表のとおり197点が出土している。これらの中には近・現代の丸釘や戦時中の砲弾破片なども含まれている。なお、金属製品の分類に際しては、第Ⅴ章の第２節に掲載しているので参照されたい。

（１）工具類・生産用具（第88図１～11）・（図版70－１～11）

工具類および生産用具として、釘・留め金具の２種類が確認されている。その中から比較的良好な資料や特徴的な資料を図化した。釘は同図１～10までの10点、留め金具１点（同図11）が図示した。個々の特徴などは第64表①に記した。

（２）祭祀用具（第88図12）・（図版70－12）

祭祀用具として、鈴が１点のみ出土していたので、これを図化（同図12）した。特徴などは第64表①に記した。

（３）武具（第88図13・14、第89図15～20・23）・（図版70－13・14、図版71－15～20・23）

武具として、兜鉢の立物（同図13・14）、札（第89図15～19）、八双金物（同図20）、籠手金具の大指（同図23）、の４種類が確認されている。良好な資料や特徴的な資料を第88図13・14と第89図15～20・23に図示した。個々の特徴などについては、第64表①・第64表②に記した。

（４）武器（第89図21）・（図版71－21）

武器の破片資料として、薙刀の銅金具とみられる資料１点得られていたので、これを図化（同図21）した。当該製品の特徴などについては、第64表②に記した。

（５）近・現代の接続金具（第89図22）・（図版71－22）

「U」の字形に加工された鉤状の接続金具が出土していたので、同図22に図化を試みた。観察事項は第64表②に記した。

第63表　石積みSA33・34 金属製品出土状況

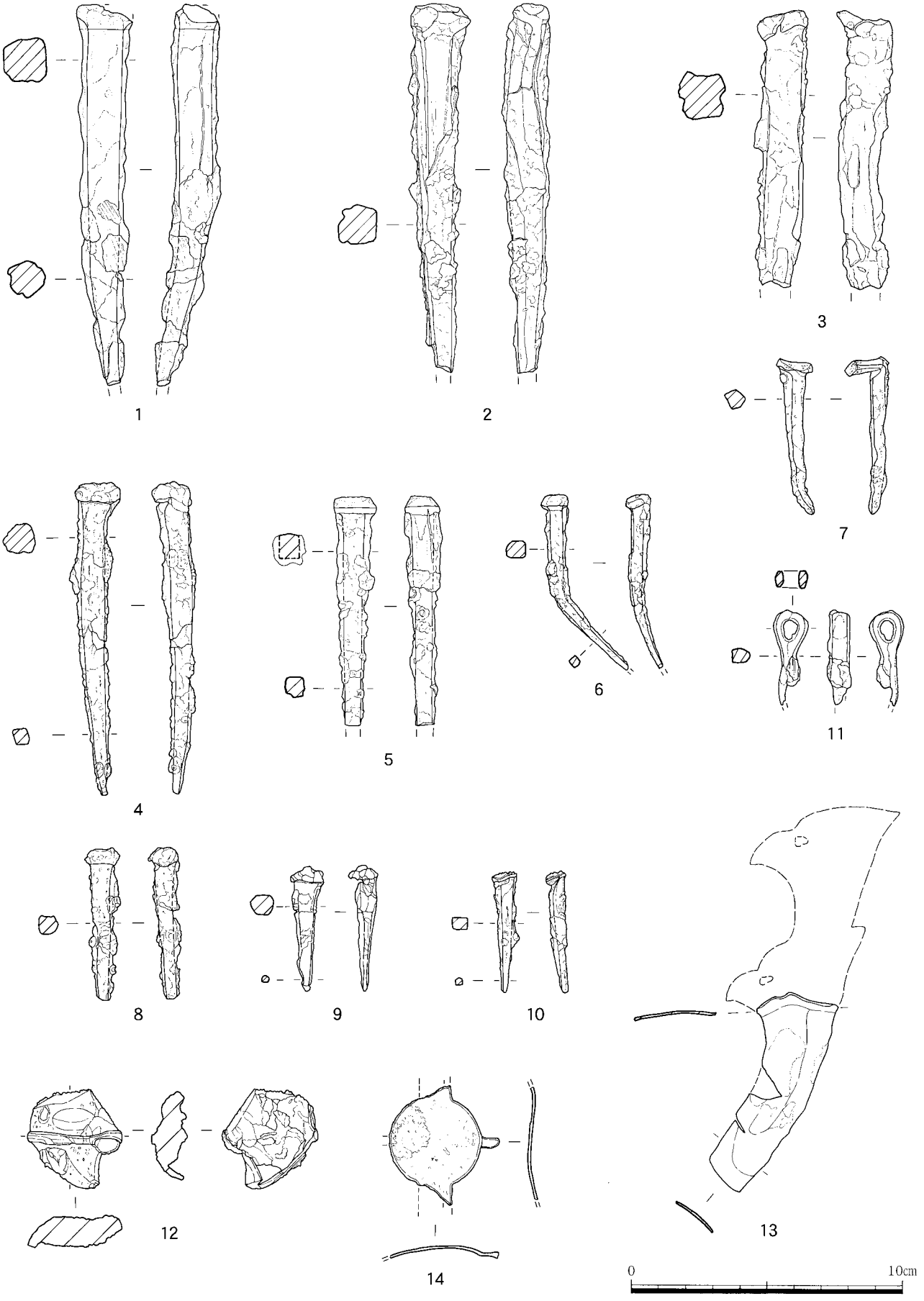
分類・種類 ＼ 出土地					SA33				SA34			合計	
					客土	栗石内	集石直下	栗石直下	覆土	栗石内	栗石直下		
工具類・生産用具	丸釘	先端+頭部欠損	中	鉄						1		1	
	角釘	完形	中	鉄	1	1	1	8	3	12	2	28	167
			小	鉄		1				3		4	
		先端部欠損	大	鉄						1		1	
			中	鉄		13		20	1	22	2	58	
		頭部欠損	中	鉄		2		3		4	3	12	
			小	鉄				1	1			2	
		先端+頭部欠損	中	鉄		23		17	1	19		60	
			小	鉄		1		1				2	
	接続金具			鉄					1			1	
	留め金具			鉄						1		1	
祭祀用具	鈴			青銅					1			1	
武具	札			鉄		2		2		1		5	9
	八双金物			青銅				1				1	
	立物			青銅				2				2	
	籠手金具（大指）			鉄						1		1	
武器	薙刀の銅金			青銅		1						1	8
	砲弾片			鉄					1		2	3	
				青銅					1	3		4	
用途不明				鉄		1		2	1	1	1	6	9
				青銅	1					2		3	
合　計					2	45	1	57	11	71	10	197	

注　釘のサイズは、大:5寸半以上(15.75cm以上)、中:1寸半～5寸まで(3.75cm～15.75cm未満)、小:1寸まで(～3.75cm未満)

第64表① 石積みSA33･34 金属製品観察一覧

単位:㎜/g

挿図番号 図版番号 遺物番号	名称 仮称	材質	残存 重量	残存長 (縦)	残存幅 (横)	残存厚	頭頂		観察事項	出土地点 出土層
							縦	横		
第88図 図版70 1	工具類･ 生産用具 釘	鉄製品	72.2	142(≒4寸6分)	16.2	16.8	15.2	20.7	頭部の大半が欠落した角釘。全体的に錆で覆われている。身の中央付近から緩やかに反っている。全体的に大きな罅割れが縦方向に走っている。先端近くでは地金が露出し、新たに発生した錆がみられる。各部分には錆汁が凝固する際に付着した木材や炭の細片が観察される。	SA34 栗石内
〃 〃 2	〃 釘	鉄製品	70.4	134(≒4寸4分)	13.6	15.6	12.3	19.8	頭部及び先端が欠落した角釘。全体的に錆で覆われ、正面の一部で地金が露出し錆が発生している。身の反り返しは微弱で目立たない。全体的に大きな罅割れが縦方向に走っている。表面には小規模な錆瘤が所々で観察できる。その他に錆汁が凝固する際に付着した炭の細片が観察される。	SA34 栗石内
〃 〃 3	〃 釘	鉄製品	65.6	101(≒3寸3分)	16.0	15.4	18.3	17.2	頭部及び身の下半部を欠いた角釘。全体的に錆で覆われ、剥離箇所が目立っている。また、罅割れも著しく脆弱な状態にある。身の反り返しは全体的に緩やかに反っている。表面に存在した4･5箇所の錆瘤は既に破裂し、地金まで損傷を与えている。その他に錆汁が凝固する際に付着した炭の細片がみられる。	SA34 栗石内
〃 〃 4	〃 釘	鉄製品	30.4	114(≒3寸7分)	10.9	11.8	13.2	16.3	頭部の一部を欠いた角釘。全体的に錆で覆われ、地金が半分程度露出し、地金まで剥離や罅割れが及んでいる。身の反り返しは緩やかで目立たない。身の先端は尖っている。錆汁が凝固する際に付着した中国産褐釉陶器の細片や石灰岩の細片が観察される。	SA33 栗石直下
〃 〃 5	〃 釘	鉄製品	22.6	84(≒2寸8分)	10.7	11.9	11.1	15.2	頭部の大半と身の下半部を欠いた角釘。全体的に錆で覆われているが、半分程度は地金が露出する。地金を含めて罅割れや錆瘤が観察できる。身の反り返しは微弱で目立たない。その他に錆汁が凝固する際に付着した炭の細片がみられる。	SA34 栗石内
〃 〃 6	〃 釘	鉄製品	7.6	74(≒2寸5分)	5.2	6.9	8.9	8.7	頭部は使用により潰れた状態であるが、ほぼ完形に近い角釘である。身の中央から「く」の字状に折れ曲がっている。全体的に錆で覆われていて、小さな剥離や罅割れが部分的にみられる。一部には石灰分の付着や細片化した木片の付着がみられる。	SA33 栗石直下
〃 〃 7	〃 釘	鉄製品	10.2	60(≒2寸)	5.8	6.2	14.0	11.7	頭部を平坦に加工した特殊な角釘。頭部の平面観が長方形状(長軸13.8㎜×短軸11.7㎜)で、厚さも薄く2.5㎜を測る。身の先端部の保存は比較的に良好であり、鈍角ではあるが尖っている。全体的に錆で覆われている。小規模な錆瘤が部分的に観察できる。その他部分的に石灰分が付着する。	SA33 栗石直下
〃 〃 8	〃 釘	鉄製品	9.2	55(≒1寸8分)	9.8	8.9	9.7	11.8	頭部は使用により潰れ、身の先端部を欠いた資料である。身の反り具合は微弱で目立たない。全体的に剥離が著しく、地金も含めて錆で覆われている。部分的に罅割れがみられる。錆汁によって表面がケロイド状となる。小さな錆瘤が所々で観察される。一部においては石灰分の付着や細片化した木片の付着がみられる。	SA33 栗石内
〃 〃 9	〃 釘	鉄製品	4.1	46(≒1寸5分)	5.8	6.0	6.5	12.0	ほぼ完形の角釘で、身の2/3程度に木材の木目が錆によって取り込まれ木質が鉄分に置換され茶褐色に変色している状況から判断すると、木材に打ち込まれたままの状態で廃棄されたのではないかと考えられた。身の1/3は錆の影響で脹れ、黒ずみ小さな錆瘤が多く発生する。小規模な罅割れや錆瘤の破裂がみられる。	SA33 栗石直下
〃 〃 10	〃 釘	鉄製品	3.1	45(≒1寸5分)	5.1	5.3	6.7	8.3	頭部は使用により潰れてはいるが、ほぼ完形の角釘である。身の反り具合は緩やかで微弱で目立たない。全体的に錆で薄く覆われているが、錆の影響で小さな罅割れが部分的にみられる。上記9と同様に身の中央部分に木材の一部が錆によって木質が鉄分に置換された部分がある。表面がケロイド状となる。一部においては石灰分の付着がみられる。	SA34 栗石内
〃 〃 11	〃 留め 金具	鉄製品	3.2	35.0	13.0	3.1 2.2	－	－	厚さは2.5㎜、幅6.2㎜程度の細い板材の先端を斜位に切り落とした鉄板を輪状に加工した環状の受け金具。受け金具の頭の内径は5.6㎜、外径が11.7㎜を測る。二股に折れた屈曲部から先端までの長さは23㎜を測る。二股の身の先端の片方は折れている。先端部分の側面観は斜位に加工されている。身の一部分には木材の一部が錆によって木質が鉄分に置換された部分がある。全体的に錆で覆われ、黒ずんでいる。部分的に小規模な錆瘤がみられる。一部分は錆瘤の破裂が認められる。	SA34 栗石内
〃 〃 12	祭祀 用具 鈴	青銅製品	19.2	36.0	34.0	12.0 1.6	－	－	球形の鈴が火熱を受けて変形し、押し潰されたような状態にある。全体的に火熱の影響を受けてケロイド状となり、緑青で覆われている。鈴の下部にみられる一文字の孔や二股のハート形の透かしが確認できない。鈴下部には火熱で溶解した別の青銅製品の一部が溶けて付着する。	SA34 覆土
〃 〃 13	武具 立物	青銅製品	9.2	74.0	30.0	1.5 0.9	－	－	立物の鍬形破片。三鍬形台に差し込まれる部分と鍬形の付け根の一部に該当する破片である。全体的に僅かながら内側に湾曲する。鍬形の下部付近で幅19.4㎜から18.5㎜と幅が減少する箇所が付け根にある。この付け根から先端までの長さが19.9～24.4㎜を測る。先端部の幅は16.5㎜を測る。緑青は全体的に広がり、錆の影響でケロイド状となる。表面には薄く石灰分で覆われている部分がみられる。その他に炭の細片が付着する。	SA33 栗石直下
〃 〃 14	〃 立物	青銅製品	6.0	43.0	40.0	1.1 1.0	－	－	三鍬形台中央の祓立台に取り付けられた立物中央部(中心)にあたる円形文の破片。この円形文は日輪(太陽)を表現したものと判断される。円形文の上下･左右に延びる枝板四本が折れている。表裏面は緑青が途切れながら全体に広がっている。鍍金は既に剥落している。	SA33 栗石直下

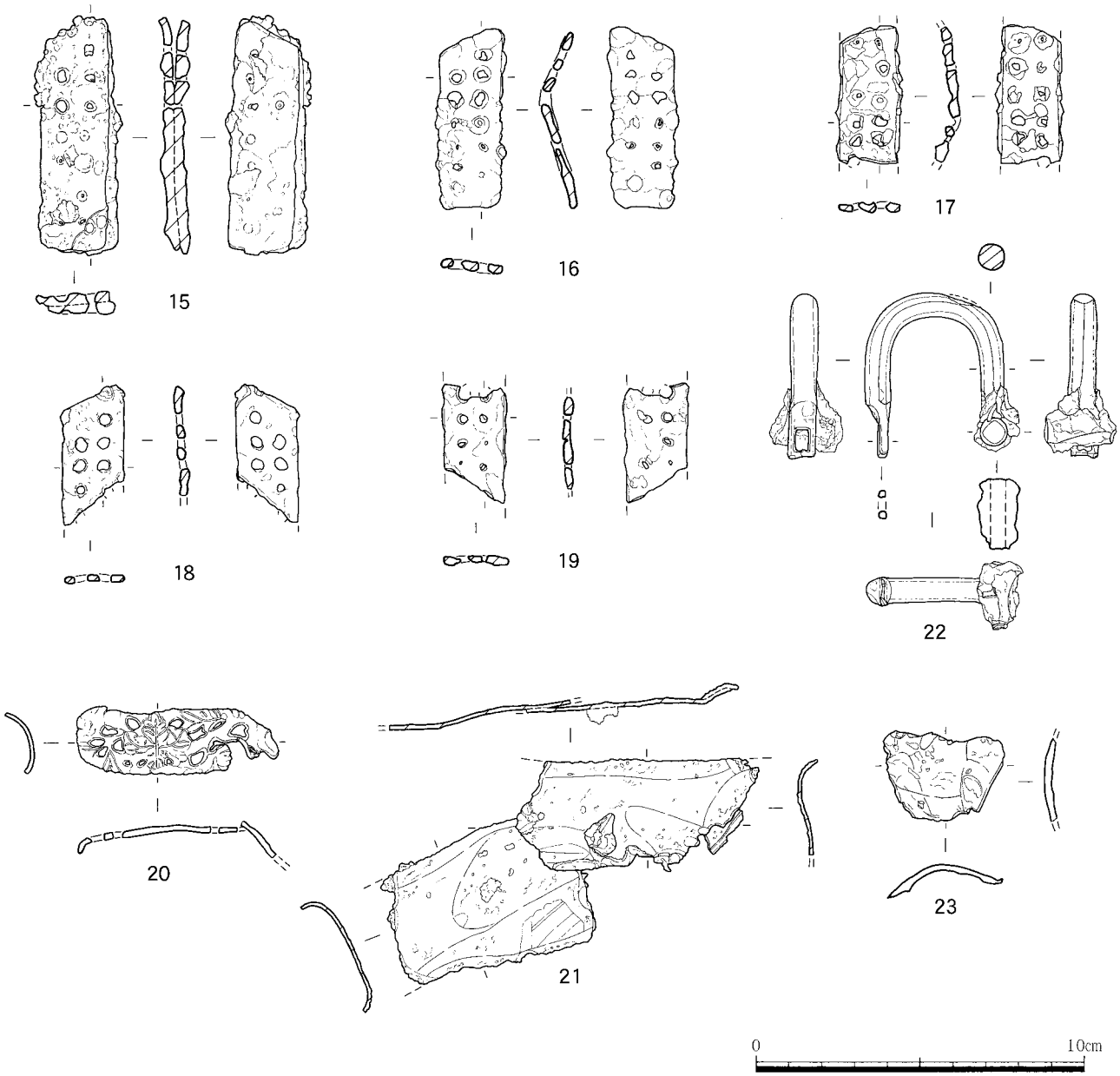


第88図　石積みSA33・34 出土品⑬
金属製品

第64表② 石積みSA33･34 金属製品観察一覧

単位:㎜/g

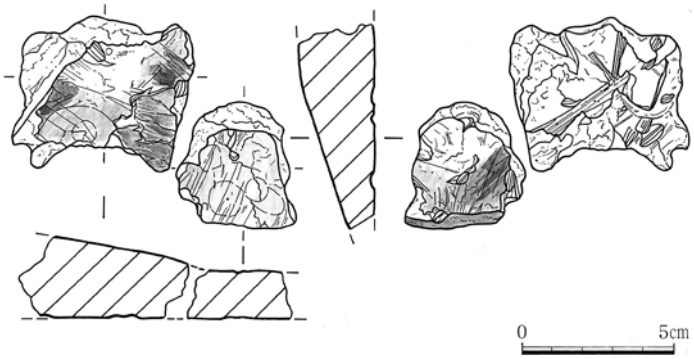
挿図番号 図版番号 遺物番号	名称 仮称	材質	残存 重量	残存長 (縦)	残存幅 (横)	残存厚	観 察 事 項	出土地点 出土層
第89図 図版71 15	武具 札	鉄 製 品	19.5	72.0	24.5	7.5 2.0	盛上札(第24図参照)。札が二枚重なった資料で、正面の資料は札頭(第20図)を欠いている。正面の資料は錆で孔の大半が塞がっているが、孔の部分は錆が浅く窪んでいる事から孔の位置の推定は容易であり、札頭近くの半欠した資料を含めると、2行13孔を数える裏面は完形である。孔は3孔のみ開いていて、残りは錆で塞がっている。左側の行は前記した3孔を除いて孔の部分が錆で浅く窪んだ状態にある。右側の行は孔が塞がっているものが1孔あり、他は完全に孔の位置が判らないが、左側の錆で塞がった孔の位置関係などから2行13孔が推定できる。両面とも錆で覆われていて、正面では疎らに小規模な錆瘤が観察できる。裏面でも一部分で小規模な錆瘤がみられ、錆汁が染み出して凝固した箇所もみられる。その他、両面では石灰分の付着が孔の周辺で確認されている。	SA33 栗石直下
〃 〃 16	〃 札	鉄 製 品	8.7	54.0	19.0	3.0 2.0	〃　。完形の札であるが、なわめの孔の近くで「く」の字状に折れ曲がっている。孔は5孔のみ開いていて、孔のサイズは最大で3.6㎜を測る。残りの孔は錆で塞がっているが、孔の部分は錆が浅く窪んでいる状況から孔の位置が容易に確認できることから孔の数を推定すると孔は2行13孔であった。両面の下半分には青銅製品が火熱で溶解した素材が付着し、緑青で覆われている。この緑青の下から鉄錆による錆瘤が発生している。他は両面とも錆で覆われ、錆脹れが発生し表面では小さな罅割れがみられる。全体的に錆の影響でケロイド状となる。	SA33 栗石内
〃 〃 17	〃 札	鉄 製 品	5.8	42.0	19.0	3.0 2.0	〃　。札頭及び札足(第20図参照)が欠損した資料である。中央付近で「く」の字状に折れ曲がっている。孔は6孔のみ開いていて、孔のサイズは最大で3．7㎜を測った。残りの孔は錆で塞がっているが、孔の部分は錆が浅く窪んでいる状況から孔の位置や孔の数を特定することが可能であった。推定された孔は2行10孔であった。表裏面とも錆で覆われ、裏面の孔は錆汁の影響で小さな錆瘤が形成されている。また、錆汁が凝固する際に石灰岩の細片を取り込んでいる。表面の孔の一部においては石灰分の付着がみられる。	SA33 栗石内
〃 〃 18	〃 札	鉄 製 品	3.6	35.0	18.0	2.5 2.0	〃　。札の下半部を欠損する。孔は6孔のみ開いていて、孔のサイズは最大で4．2㎜と大き目である。残りは孔が半欠し錆で塞がっている。この孔を含めると2行7孔を数える。表裏面とも錆で覆われ、錆の影響で部分的に小さな罅割れや剥離がみられる。	SA33 栗石直下
〃 〃 19	〃 札	鉄 製 品	3.7	34.0	19.0	2.5 1.5	〃　。札頭及び札足(第20図参照)が欠損した資料である。中央付近で「く」の字状に折れ曲がっている。孔は5孔のみ開いていて、孔のサイズは最大で3㎜を測った。残りの孔は錆で塞がっていて、これを含めると6孔となる。また、正面の上と下にある半分程度に割れた孔を含めると2行9孔を数える。表面の右下には細片化した木片が付着し、木片に鉄分が染み込んで鉄に置換されている。表裏面とも錆で覆われ、錆の影響で表面がケロイド状となっている。裏面は錆汁が凝固する際に細片化した炭や石灰岩の細片を取り込んでいる。	SA34 栗石内
〃 〃 20	〃 八双金物 (出八双)	青 銅 製 品	9.0	20.0	58.5	1.0 2.0	甲冑の化粧板に取り付けられた八双金物、若しくは調度品などの八双金具とみられる資料である。文様は浮き文で、四つ葉と唐草文を透彫りで表現する。左側の縁辺部の上下は隅丸となっている。裏面の透彫りによる透かし部分の縁沿いが微弱に盛り上がっている。表裏面は全体的に緑青がみられる。右側の破損部分は火熱を受けて溶解して、角が潰れ丸くなっている。また、溶解物により部分的にケロイド状となっている。	SA33 栗石直下
〃 〃 21	武器 薙刀の銅 金	青 銅 製 品	30.1	43.0	123.0	6.0 1.0	薙刀の銅金(第24図参照)の破片とみられる資料である。薙刀の柄の中央近くを緊縛する金具とみられる。柄の縦断面の形状に合わせて扁楕円形状に丸味をもたせて成形されていたものが、金具の継ぎ目があった上下の接合部分から縦方向に半分に割れて分離して、破片同士が再度、錆で付着したようである。表裏面とも全体的に緑青で覆われている。表面の一部には、別の青銅製品が火熱の影響で溶解した青銅素材が溶けて付着している。その他に錆汁が凝固する際に石灰岩の細片も取り込んでいる。裏面には部分的な石灰分の付着や微細な錆瘤が若干みられる。	SA33 栗石内
〃 〃 22	近現代の 接続金具	鉄 製 品	30.1	42.0	34.0	22.0 7.0	「U」の字形の鈎状製品。正面右下端には鐶を作り、左下端は鐶と方向を90°に向きを変えて先端を方形状に加工し、方形状の孔を開いている。方形状の孔は縦5．5㎜、横3．8㎜を測った。鐶の大半が朽ちて、鐶内部にあった鉄が残っている。鉄の頭は方形状の可能性もあるが、錆で判断しがたい。身も折れているが、その断面のサイズは直径5㎜を測る。全体的に鉄錆で覆われていて、地金が露出している。地金には微細な罅割れや剥離がみられる。当該製品の用途は、連結鎖(チェーン)などの先端に取り付けられた簡易的な留め金具などが用途として考えられる。	SA34 覆土
〃 〃 23	武具 籠手金具 大指	鉄 製 品	4.7	26.0	36.0	3.0 1.0	鉄製の籠手金具で、大指(第23図参照)とみられる。正面の左右の縁沿いは微弱に外側に折り曲げられている。上下端は破損している。横断面が外側に弓状に湾曲させている。表面には緑青が一部付着する。表面の大半は錆で脹れ、錆汁によってケロイド状となっている。一部には鉄錆や細片化した木片(鉄成分に置換)が付着し、その下から石灰分の付着と形成がみられる。錆による地金が浸食され浅く窪んだ箇所もみられる。裏面は全体的に石灰分が付着し、部分的に鉄錆がみられる。	SA34 栗石内



第89図　石積みSA33・34 出土品⑭
金属製品

15. 壁材（第90図・図版72）

壁材（塗り壁）や瓦の接合剤などに使用されたとみられる製品で、明確な用途については判然としない資料である。取り敢えず壁材として報告する。今後の資料の増加や研究の進展で解明される資料であろう。素材は瓦質の蓋製品と同じものを使用している。壁材の破片が２点出土しているが、同一個体と判明した為、第90図に示した。



第90図　石積みSA33・34 出土品⑮
壁材

第90図は同一破片の資料であるが、個体同士が接合ができなかったため、図を二点並列させた。器色は外面が主に暗褐色を呈し、部分的に黄白色を帯びている。裏面は淡橙色を帯びている。素地は細かく、微細な石英や雲母片が少量確認される。希に粗い貝殻片や茶褐色の物質がみられる。劈開面には素地の粘土に混ぜた稲藁や籾殻が多く観察される。その他に粘土が縞状に重なっている部分が観察できる。器面の調整は外面が刷毛目様のナデを右斜め上がりと、調整方向がほぼ一定する。内面は調整痕が確認できないが、平坦な面である。裏面には細片化した稲藁や籾殻の圧痕が観察できることから瓦質製の蓋（第77図２～５）に近似する手法で型枠などに粘土を押し込んで製作されたか、或いは石壁などに直接貼り付けたのかどうかについては判然としない。SA34栗石内出土。

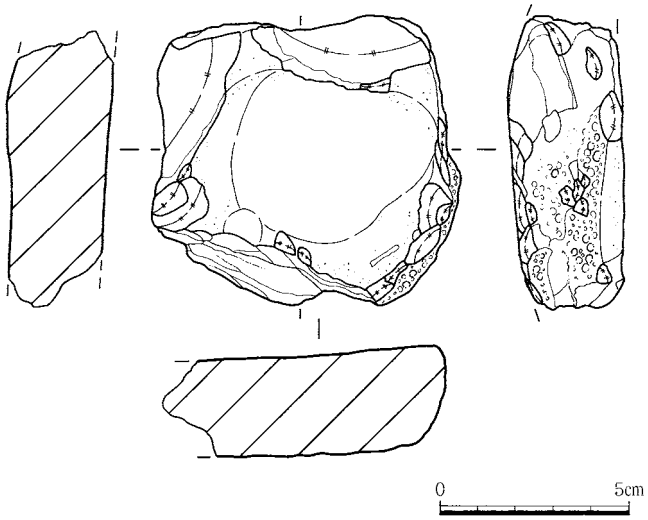
16. 石器・石製品（第91図・図版73）

石器及び石製品が３点得られている。図化に耐えられる石器として、第91図に示した砥石片を掲載した。

第65表　石積みSA33・34
石器・石製品出土状況

種類＼出土地		SA34 栗石内	合計
石器	砥石	2	2
石製品	硯片	1	1
合　計		3	3

第91図は砥石の破片で、表面が砥面で中央付近で浅く窪んでいる。破損後も使用されたようであり、剥離面の縁沿いや破損部の縁沿いの摩滅、そして剥離面の一部までが砥面となっている部分が確認できる。右側面の下半分は剥離面と敲打痕が観察できる。裏面は自然面であるが、一部は砥面となっている部分が確認できる。また、左側面の一部は磨面となる箇所が確認できる。サイズは縦7.6cm、横8.1cm、厚さ2.8cm、重量260g。石質は礫質砂岩製。SA34栗石内出土。



第91図　石積みSA33・34 出土品⑯
石器（砥石）

17. 京の内（石積みSA33・34、土壙SK01）及び下之御庭跡ほか出土の接合された大型青磁

平成６（1994）年度に実施した京の内地区の発掘調査（註１）と平成元（1989）年度～平成２（1990）年度実施の下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡、一帯（以下、「下之御庭跡ほか」と表記する）の発掘調査（註２）により出土した陶磁器類については、接合資料が存在する事については、前章で記したとおりである。

ここでは、京の内石積みSA33・34、土壙SK01から出土した大型青磁の破片と下之御庭跡ほかより出土した大型青磁で接合ができた資料を３点（第92図１・２、第93図１）について報告する。この３点（大型花瓶２点、大型壺１点）の中には下之御庭跡ほかの報告書に掲載されていない新資料もあり、これについては、実測図を新たに作成し、図化をおこなった資料も含まれている。以下に個々の特徴などを記す。

第92図１ｃ（図版74－１）は大型花瓶の口頸部の破片資料で、口径の推算が23.6cmと求められた。口縁部をラッパ状に大きく外側に外反させている。口縁から頸上部までを篦状の工具をもちいて陽界線を７条浮き立たせている。この陽界線直下に蕉葉文を線彫りで丁寧に描いている。内面の轆轤痕は顕著である。素地は光沢のある淡灰白色の微粒子であるが、劈開面に小さな気泡痕が観察される。釉色は緑白色で両面に釉がみられる。貫入はない。龍泉窯系の所産。14世紀後半から15世紀前半。口縁部は用物座跡・廣福門跡より出土、頸部は京の内石積みSA33栗石内及び用物座跡・城郭より出土。

同図２（図版74－２）は上記１と同一タイプの大型花瓶の破片で、口径が23.6cmと推算された。口縁部の外反は同図１ｃと同様に大きく外側に開いている。頸部の締まり具合は上記１ｃより締まっていない。頸部には篦状工具で削りだして陽界線を表現している。陽圏線７条で囲繞する。この陽圏線直下に上記１ｃと同様に蕉葉文を線彫りで描いているが、表現が雑である。釉色・素地などは上記１ｃとほぼ一致する。貫入はない。龍泉窯系の所産。14世紀後半から15世紀前半。口縁部は京の内石積みSA34栗石内、用物座跡・漏刻門跡・城郭より出土。頸部は京の内SA28第２層・石積みSA34栗石内から出土。

第93図１は長胴の大型壺で、類似資料が首里城二階殿地区の発掘調査（註３）で５個体（二階殿地区報告書掲載の第24図153～156、第25図157）出土しているが、同報告書掲載の酒会壺と報告された資料にも大型壺の口縁とみられる資料が３点（二階殿報告書掲載の第25図158・159・164）が含まれているようであり、これを含めると８点が二階殿地区から出土していることになる。その他に前回報告した京の内報告書掲載の第50図２は、当時は類似資料が皆無であった事と口頸部が欠落していた事などから大花瓶として報告したが、その後に刊行された前述の二階殿地区の資料で肩部に逆さのラマ式蓮弁文が確認されている状況から京の内資料にみられた肩部への逆さの蓮弁文を描いていることなどから同一の器形であると判断された。従って、京の内跡の土壙SK01（倉庫跡）からは大花瓶２点の内、１点は大型壺が出土していたことになる。

今回、新たに京の内石積みSA33・34栗石内出土の口縁から胴部（第93図１a）と下之御庭跡・用物座跡・漏刻門跡・城郭から出土した胴部及び高台破片（同図１b）が接合できたので、これを図上で復元した資料が同図１ｃである。以下に特徴などを記す。

第93図１ｃ（図版75）の図上で復元されたサイズは口径21.4cm、器高54.2cm、高台径20.2cmと推定された。胴継ぎが胴部でなされていて、底は落とし底である。長胴の大型壺である。口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、頸部が短くなる。いわゆる短頸壺の範疇にある。口縁を玉縁状に肥厚させて口唇部を平坦に仕上げている。頸部から高台近くまでは緩やかな丸味を持たせながら若干、窄まっている。高台近くには大きな三角形状の凸帯で囲繞する。高台は若干、外側に「ハ」の字状に開き、高台外端を内側方向へ斜位に削り取って仕上げている。畳付を平坦に仕上げ、畳付の内端から高台の内面を斜位に削り出している。文様は頸下部に陰圏線を二条施し、その直下に片切り彫りで逆さのラマ式蓮弁文とみられる文様を描いている。このラマ式蓮弁文とみられる文様の下に二条の陽圏線を廻らしている。胴部の上半部には主文となる花唐草文を片切り彫りで描いている。胴部中央には間隔のある太めの陽圏線を二条で囲繞した文様区画があり、この区画内に五本櫛と片切り彫りの波濤文を描いている。胴下半部は鎬蓮弁文を高台近くの大型の三角凸帯まで片切り彫りで描いている。内面の轆轤痕は胴下部で顕

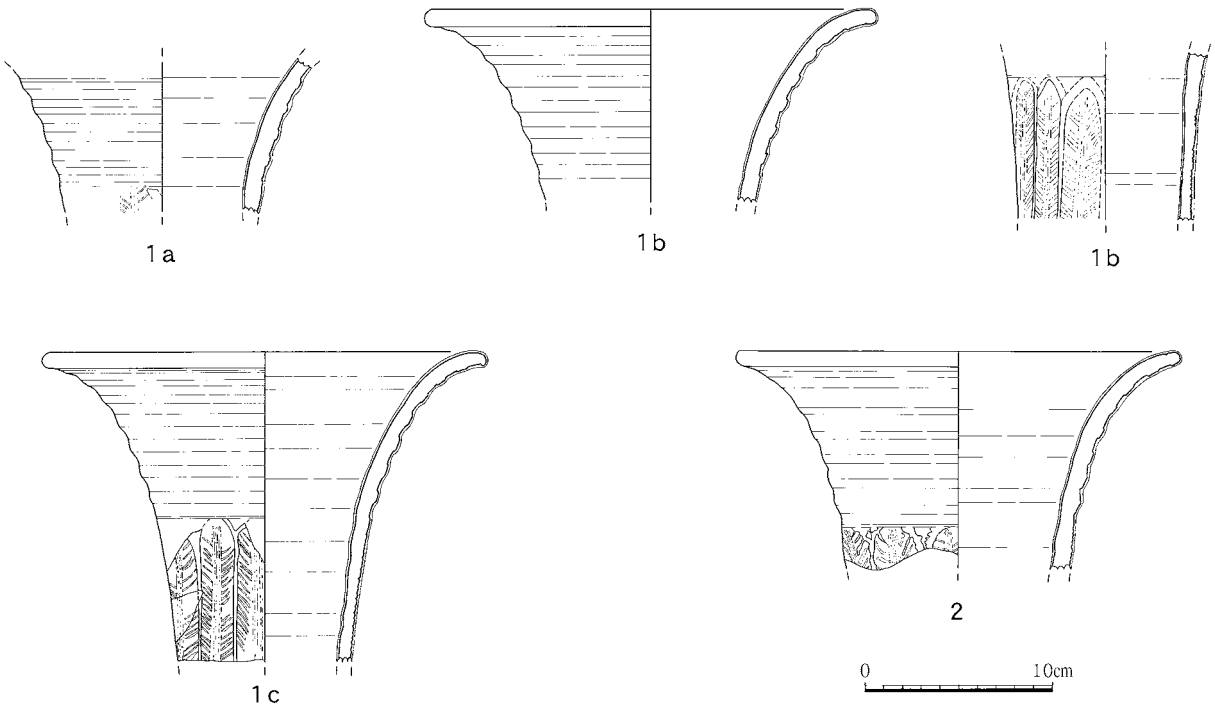
著にみられる。素地は光沢のある淡灰白色の微粒子であるが、劈開面に小さな気泡痕が多く観察される。釉色は灰緑色を呈し、口唇部と畳付及び高台内外端を露胎とする。落とし底の内底面の釉は蛇の目状に掻き取り、露胎とする。この露胎となった箇所に別の製品を置いて焼成したようであり、この部分に目跡がみられる。目跡の直径は7.3cmを測る。貫入はない。龍泉窯の所産。14世紀後半から15世紀前半。

註文献

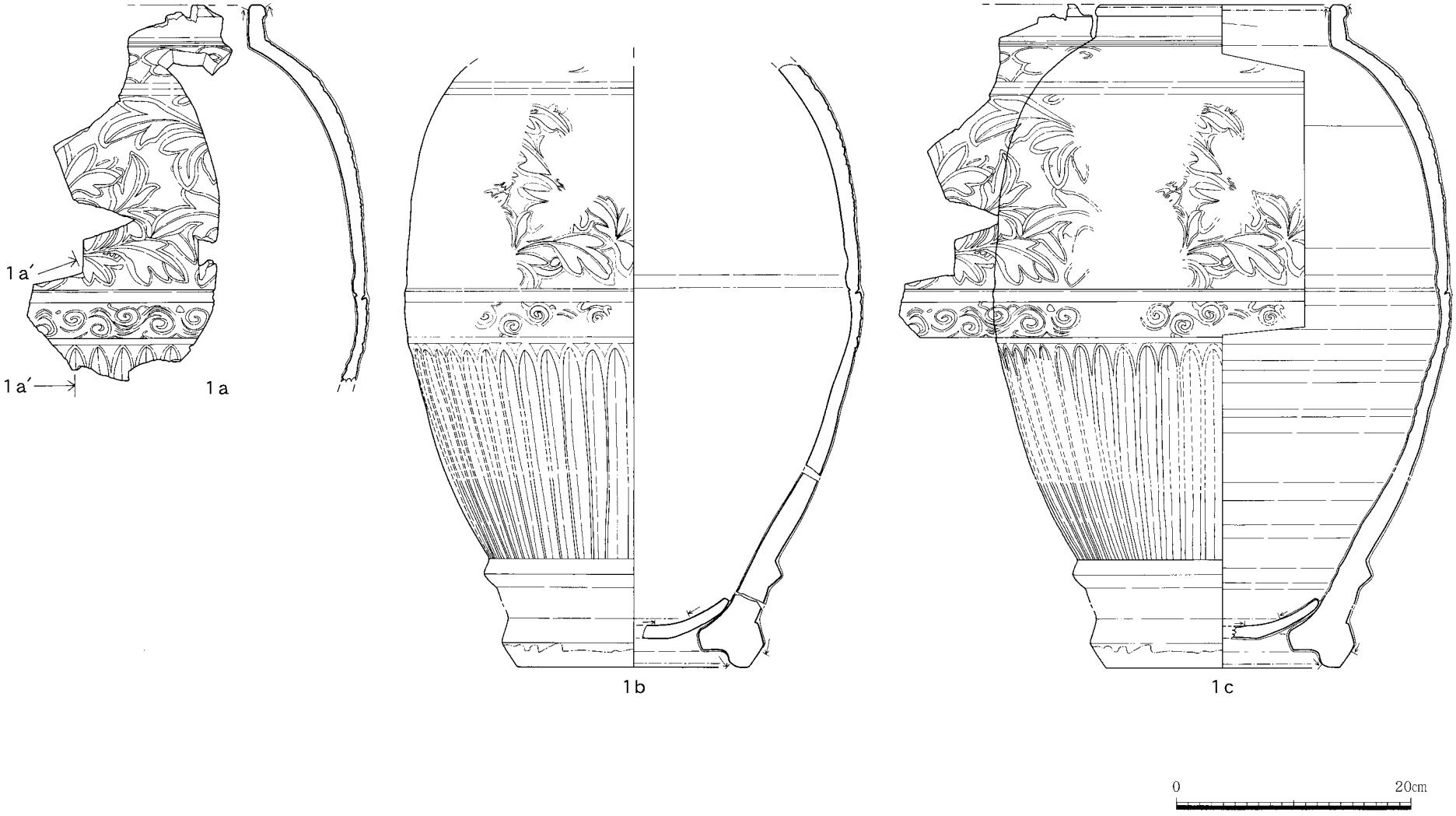
註１．沖縄県文化財調査報告書第132集『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）－』沖縄県教育委員会1998（平成10）年３月。

註２．沖縄県立埋蔵文化財センター第３集『首里城跡－下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター2001（平成13）年３月。

註３．沖縄県立埋蔵文化財センター第29集『首里城跡－二階殿地区発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター2005（平成17）年３月。



第92図　石積みSA33・34 出土品⑰
1a:京の内地区石積みSA33･34出土、1b:下之御庭地区出土、1c:同一個体の1a･1bを図上で復元
2:京の内地区SA33･34･土壙SK01(倉庫跡)出土と下之御庭地区出土の同一個体を図上で復元



第93図　石積みSA33・34 出土品⑱
1a：京の内地区石積みSA33・34出土、1a´・1b：下之御庭地区出土、1c：同一個体の1a・1a´・1bを図上で復元

第６節　植物種子

京の内土壙SK01（倉庫跡）より植物種子が第66表に示した57点が検出された。種子の分類については、『シリーズ沖縄の自然㉗木の実・木のたね』（註１）・『沖縄の野山を楽しむ　植物の本』（註２）・『日本植物種子図鑑』（註３）などを参考にしながらおこなった。

その他、可能な限り現生の植物種子や穀物種子を入手して比較検討をしながら種子類を特定した。種子分類体系は、新エングラー体系（註４）に準じて、保存状態の良好な資料や不明種子を第67表および図版76～図版79に示した。

第66表に呈示した種子類57点の内訳は以下のとおりであった。

１）種子名が特定されたもの８種

和　名（科・属・種名）	学　名（科・属・種名）
センダン科センダン属センダン	MELIACEAE　Melia L.　Melia azedarach
ブドウ科ブドウ属エビズル	VITACEAE　Vitis L.　Vitis ficifolia
パパイア科パパイア属パパイヤ	CARICACEAE　Carica L.　Carica papaya
ムラサキ科チャシノキ属チャシノキ	BORAGINACEAE　Ehretia L.　Ehretia　ovalifolia
ゴマ科ゴマ属ゴマ	PEDALIACEAE　Sesamum L.　Sesamum　indicum
イネ科オオムギ属オオムギ	POACEAE　Hordeum L.　vulgare
イネ科コムギ属コムギ	POACEAE　Triticum L.　Triticum aestivum
イネ科イネ属イネ	POACEAE　Orayza L. o. sativa

２）その他、該当する種子の可能性があるもの５種

和　名（種名）	学　名（種名）
テンニンカ？	Rhodomyrtus tomentosa？
シマウリノキ？	Alangium premnifolium？
リュウキュウコクタン？	Diospyros ferrea？
ナガミボチョウジ？	Psychotria manillensis？
モンパノキ？	Argusia argentea？

３）特定された種子でいずれかに属する種子１種（オオムギorイネ）

オオムギ（vulgare）？orイネ（o.sativa）？

４）不明１種

上記の植物種子名が特定された種子で、県内遺跡の出土例を挙げて以下に記す。

パパイヤ：竹富島新里村跡（註５）。

チャシノキ：宜野湾市・北谷町にまたがる新城下原第二遺跡（註６）。

オオムギ：那覇市那崎原遺跡（註７）、中城村中城城跡（註８）・新垣グスク（註９）、今帰仁村シイナグスク（註10）。

コムギ：那覇市那崎原遺跡、中城村中城城跡・新垣グスク、今帰仁村シイナグスク、宜野座村前原貝塚（註11）。

イネ：豊見城市平良グスク（註12）、南城市糸数城跡（註13）、那覇市那崎原遺跡、竹富島新里村跡、中城村中城城跡・新垣グスク、今帰仁村シイナグスクほか多数。

註

註１．澤岻 安喜 『シリーズ沖縄の自然㉗木の実・木のたね』 有限会社 新星図書出版 1983年12月。
註２．屋比久 壮実『沖縄の野山を楽しむ 植物の本』 おきなわフィールドブック１ アクアコーラル企画 2004年２月。
註３．中山至大、井之口 希秀、南谷忠志『日本植物種子図鑑』 東北大学出版会 2006年３月。
註４．UTC、URL、：http：//ja．wikipedia．org「新エングラー体系詳細」『フリー百科事典ウィキペディア日本語版』 2007年11月18日
註５．金城亀信（14）その他の自然遺物 b.植物遺体「近世の墓跡とその周辺遺物」『竹富島新里村跡』 沖縄県文化財調査報告書第97集 沖縄県教育委員会1990年３月。
註６．高宮広土「第20節 植物遺体」『新城下原第二遺跡』 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第35集 沖縄県立埋蔵文化財センター 2006年３月。
註７．高宮広土「古代民族植物学的アプローチによる那崎原遺跡の生業」『那崎原遺跡 - 那覇空港ターミナル用地造成工事に伴う緊急発掘調査報告 -』 那覇市文化財調査報告書 第30集 那覇市教育委員会 1996年３月。
註８．本吉 恵理子・岡田 文男「３．炭化植物遺体」『中城城跡－北の郭西側城壁及びウフガー周辺の整備に伴う発掘調査報告－』 中城村の文化財第４集 中城村教育委員会 2002年３月。
註９．中城村の文化財 第３集『新垣グスク』 中城村教育委員会　1992年３月。
註10．宮城弘樹「第Ⅴ章 シイナグスク出土の植物遺体」『シイナグスク－範囲確認調査報告－』 今帰仁村文化財調査報告書第17集 今帰仁村教育委員会 2004年３月。
註11．宜野座村の文化財17集『前原貝塚－村道サー原線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』 宜野座村教育委員会 2005年３月。
註12．金城亀信「23．平良グスク（第４表 平良グスク 穀類等炭化物出土表）」『豊見城村の遺跡－村内遺跡詳細分布調査－』 豊見城村文化財調査報告書第３集 豊見城村教育委員会1986年３月。
註13．金城亀信 「第Ⅶ章 自然遺物 １．穀類等炭化物」『糸数城跡－発掘調査報告書Ⅰ－』 玉城村文化財調査報告書　第１集 玉城村教育委員会 1991年３月。

第66表　植物種子出土状況

種子名＼出土地			SA19		SA20			SA19･20						合計	
			一括遺物3層	一括遺物4層	一括遺物2層	第3層	第4層	畦	畦床面清掃	畦1層	畦2層	畦3層	畦4層		
センダン	種子	破片								1				1	
エビヅル	種子	完形							1				1	2	
パパイア	種子	完形											1	1	
テンニンカ？	胚乳	完形								1				1	
シマウリノキ？	種子	完形				5		1					1	7	27
		破片	1	2		3	3						11	20	
リュウキュウコクタン？	種子	破片		1										1	
ナガミボチョウジ？	種子	破片				1								1	
モンパノキ？	種子	完形									1			1	
チシャノキ	種子	完形		1										1	
ゴマ	種子	完形	1											1	
オオムギ	胚乳	完形							2					2	7
		破片	4			1								5	
コムギ	胚乳	完形				1								1	
イネ	胚乳	完形											2	2	3
		破片				1								1	
オオムギorイネ	胚乳	破片											2	2	
不明		完形			1							1	1	3	7
		破片	1	2						1				4	
合計			7	6	1	12	3	1	3	3	1	1	19	57	

第67表　植物種子観察一覧（新エングラー体系による分類）

図版番号 種子番号	和名	学名	門	綱	目	科	属	種	完破	種子計測(㎜) 京の内出土 残存長	残存幅	残存厚	現生種10個の平均値(注1) 長さ 最大	長さ 最小	幅 最大	幅 最小	厚さ 最大	厚さ 最小	観察事項	出土地
図版76-1	センダン	Melia azedarach L.	被子植物門 (Angiospermae)	双子葉植物綱(Dicotyledoneae) 古生花被植物亜綱 (Archichlamydeae)	ミカン目 (Rutales)	センダン科 (Meliaceae)	センダン属 (Melia)	センダン (Melia azedarach)	破片	8.3～ 9.0	2.5～ 3.5	2.40	－ (15.7±1.7)	－	－ (9.3±0.6)	－	－ (9.0±0.5)	－	種子の外観は、種皮の縮小により皺や陥没がみられ歪な形状となる。先端のへそ部分は空洞化している。全体的に黒褐色に変色し、部分的に灰白色や黄白色となる。	SA19・20 畦1層
図版76-2a	エビヅル	Vitis thunbergii Sieb.et Zucc.	被子植物門 (Angiospermae)	双子葉植物綱(Dicotyledoneae) 古生花被植物亜綱 (Archichlamydeae)	クロウメモドキ目 (Rhamnales)	ブドウ科 (Vitaceae)	ブドウ属 (Vitis)	エビヅル (Vitis ficifolia)	完形	4.00	3.00	1.87	－ (3.8±0.2)	－	－ (3.0±0.2)	－	－ (2.2±0.2)	－	種子の外観は本来の形をよく残しているが、種皮の状態は悪く種皮の剥落などによって子葉がアバタ状となるところが多く見られる。	SA19・20 畦 床面清掃
図版76-2b	エビヅル	Vitis thunbergii Sieb. et Zucc.	被子植物門 (Angiospermae)	双子葉植物綱(Dicotyledoneae) 古生花被植物亜綱 (Archichlamydeae)	クロウメモドキ目 (Rhamnales)	ブドウ科 (Vitaceae)	ブドウ属 (Vitis)	エビヅル (Vitis ficifolia)	完形	4.00	3.00	2.00	－ (3.8±0.2)	－	－ (3.0±0.2)	－	－ (2.2±0.2)	－	種子の先端部分が欠落するが、本来の形を窺い知ることができる資料である。種皮の剥落などによって子葉がアバタ状となっているところが多く見られる。	SA19・20 畦 4層
図版76-3	パパイア	Carica papaya	被子植物門 (Angiospermae)	双子葉植物綱(Dicotyledoneae) 古生花被植物亜綱 (Archichlamydeae)	スミレ目 (Violales)	パパイア科 (Caricaceae)	パパイア属 (Carica)	パパイア (Carica papaya)	完形	4.50	4.00	3.50	4.75 －	3.75	4.02 －	2.61	4.01 －	2.30	種子の乾燥などによって種皮の縮小が多く、全体的に皺	SA19・20 畦 4層
図版76-4	テンニンカ？	Rhodomyrtus tomentosa hassk	被子植物門 (Angiospermae)	双子葉植物綱(Dicotyledoneae) 古生花被植物亜綱 (Archichlamydeae)	フトモモ目 (Myrtiflorae)	フトモモ科 (Myrtaceae)	テンニンカ属 (Rhodomyrtus)	テンニンカ (Rhodomyrtus tomentosa)	完形	1.80	1.50	1.00	－ (2.3±0.1)	－	－ (2.5±0.1)	－	－ (0.8±0.1)	－	種子の本来の平面形状は隅丸台形状であるが、本資料の形状が隅丸方形状となっていることから疑問符号を冠した。種子の色合いは茶褐色を帯び種皮に砂粒が付着したような状態となっている。	SA19・20畦 4層
図版77-5a	シマウリノキ？	Alangium chinense Rehd. var.nipponicum Masamune	被子植物門 (Angiospermae)	双子葉植物綱(Dicotyledoneae) 古生花被植物亜綱 (Archichlamydeae)　離弁花類	セリ目 (Umbelliflorae)	ウリノキ科 (Alangiaceae)	ウリノキ属 (Alangium)	シマウリノキ (Alangium premnifolium)	破片	5.92	5.14	4.37	－ (8.8±0.2)	－	－ (6.0±0.2)	－	－ (4.9±0.3)	－	種子本来の平面形状は、ラグビーボール状の形となるものが主である。本資料は裏面の右側が欠落するが、形状が類似していることから疑問符号を冠した。種子の色合いは黒褐色を帯びる。種皮の厚さは0.3～	SA20 第3層
図版77-5b		Alangium chinense Rehd. var. nipponicum Masamune	被子植物門 (Angiospermae)	双子葉植物綱(Dicotyledoneae) 古生花被植物亜綱 (Archichlamydeae)　離弁花類	セリ目 (Umbelliflorae)	ウリノキ科 (Alangiaceae)	ウリノキ属 (Alangium)	シマウリノキ (Alangium premnifolium)	破片	5.78	5.26	4.19	－ (8.8±0.2)	－	－ (6.0±0.2)	－	－ (4.9±0.3)	－	種子の形状は、良く残っている。種子の平面観及び色合いは上記5aと近似する。子葉は残っていない。	SA20 第3層
図版77-5c		Alangium chinense Rehd. var. nipponicum Masamune	被子植物門 (Angiospermae)	双子葉植物綱(Dicotyledoneae) 古生花被植物亜綱 (Archichlamydeae)　離弁花類	セリ目 (Umbelliflorae)	ウリノキ科 (Alangiaceae)	ウリノキ属 (Alangium)	シマウリノキ (Alangium premnifolium)	破片	7.18	4.95	4.19	－ (8.8±0.2)	－	－ (6.0±0.2)	－	－ (4.9±0.3)	－	上記5a・5bと比較して最も保存状態が良く、形状も完全に残っている。上記5a・5bと同様に乾燥や炭化したことによって縮小する種皮も、黒褐色に変色し、皺や種皮の剥落がある。	SA20 第3層
図版77-6	リュウキュウコクタン？	Diospyros ferrea Bakh	被子植物門 (Angiospermae)	双子葉植物綱(Dicotyledoneae) 合弁花植物亜綱(Sympetalae)	カキノキ目 (Ebenales)	カキノキ科 (Ebenaceae)	カキノキ属 (Diospyros)	リュウキュウコクタン (Diospyros ferrea)	破片	8.94	5.0～ 5.8	5.5	12.93 (9.0±0.5)	8.62	6.70 (4.7±0.3)	4.44	5.64 (4.4±0.3)	3.69	先端にへそ(小果柄)が残っている。裏面は外面よりも種皮の保存が悪く、下半部が大きく欠損する。表面も皺が発生している。種子本来の形状が失われている。	SA19 一括遺物 4層
図版77-7	ナガミボチョウジ？	Psychotria manillensis Bartl	被子植物門 (Angiospermae)	双子葉植物綱(Dicotyledoneae) 合弁花植物亜綱(Sympetalae)	リンドウ目 (Gentianales)	アカネ科 (Rubiaceae)	ボチョウジ属 (Psychotria)	ナガミボチョウジ (Psychotria manillensis)	破片	—	5.5～ 6.0	2.5～ 4.0	－ (8.4±0.4)	－	－ (4.9±0.4)	－	－ (3.2±0.3)	－	種子の破片である。残存部分の右側に縦位に走る稜が3稜みられる。種皮は0.8～1.9㎜と厚い。	SA20 第3層
図版78-8	モンパノキ？	Argusia argentea H. Heine	被子植物門 (Angiospermae)	双子葉植物綱(Dicotyledoneae) 合弁花植物亜綱(Sympetalae)	シソ目 (Tubiflorae)	ムラサキ科 (Boraginaceae)	スナビキソウ属 (Argusia)	モンパノキ (Argusia argentea)	完形	3.20	3.40	2.60	－ (3.4±0.2)	－	－ (3.4±0.4)	－	－ (1.9±0.2)	－	種子の平面観や側面にみられる大きな窪みなどからモンパノキ？とした。色調は黒褐色を呈する。種皮は縮小して皺がみられる。	SA19・20 畦2層
図版78-9	チシャノキ	Ehretia ovalifolia Hassk.	被子植物門 (Angiospermae)	双子葉植物綱(Dicotyledoneae) 合弁花植物亜綱(Sympetalae)	シソ目 (Tubiflorae)	ムラサキ科 (Boraginaceae)	チシャノキ属 (Ehretia)	チシャノキ (Ehretia ovalifolia)	完形	3.00	3.00	1.40	－ －	－	－ －	－	－ －	－	種子の側面観や裏面の浅い窪みなどからチシャノキと推定した。種子の色合いは炭化して黒色となる。種皮正面左側は、種皮が剥落している。	SA19 一括遺物 4層
図版78-10	ゴマ	Sesamum indicum	被子植物門 (Angiospermae)	双子葉植物綱(Dicotyledoneae) 合弁花植物亜綱(Sympetalae)	シソ目 (Tubiflorae)	ゴマ科 (Pedaliaceae)	ゴマ属 (Sesamum)	ゴマ (Sesamum indicum)	完形	2.32	1.10	0.81	白ゴマ 3.23 黒ゴマ 3.40 －	1.67 2.65	1.84 1.86 －	1.49 1.42	1.22 0.68 －	0.57 1.12	種子の形状が現生のゴマと一致し、ゴマの中でも黒ゴマの可能性が高いようである。種皮が全体的に小さなアバタ状となっていることから火熱を受けたようである。	SA19 一括遺物 3層
図版79-11	オオムギ	Hordenm vulgare L.var. nudum Hook.f.	被子植物門 (Angiospermae)	単子葉植物綱(Liliopsida)	イネ目 (Poales)	イネ科 (Poaceae)	オオムギ属 (Hordeum)	オオムギ (vulgare)	完形	5.28	3.18	2.61	6.93 (6.6±0.3)	4.77	4.40 (3.4±0.2)	2.37	2.81 (2.7±0.2)	1.61	正面の浅い縦溝が火熱を受けて、溝が左右に大きく開いている。	SA19・20 畦 床面清掃
図版79-12	コムギ	Triticum aestivum L.	被子植物門 (Angiospermae)	単子葉植物綱(Liliopsida)	イネ目 (Poales)	イネ科 (Poaceae)	コムギ属 (Triticum)	コムギ (Triticum aestivum)	完形	3.41	2.68	2.37	4.56 －	3.78 －	3.27 －	2.62 －	2.14 －	1.72 －	正面の深い縦溝が若干火熱を受けて外側に開いている。裏面は種皮の一部(右側)が欠落する。	SA20 第3層
図版79-13	イネ	Oryza sativa L.	被子植物門 (Angiospermae)	単子葉植物綱(Liliopsida)	イネ目 (Poales)	イネ科 (Poaceae)	イネ属 (Oryza)	イネ (o.sativa)	完形	4.31	2.34	1.82	5.24 (5.6±0.2)	4.88	3.10 (2.0±0.1)	2.83	2.19 (2.9±0.1)	1.90	種皮は、炭化によって両側面に横位の亀裂が2・3条入っている。	SA19・20 畦4層
図版79-14	不明	—	—	—	—	—	—	—	破片	—	—	—	－ －	－	－ －	－	－ －	－	種子の欠落や残存部位の最大幅が0.9㎜と小さく、種子名が特定できなかった。種皮は縮小し、皺や陥没がみられる。	SA20 一括遺物 2層

(注1)カッコ内に表記されている数値は、下記の文献に記載された数値。

文　　献　中山至大、井之口希秀、南谷忠志『日本植物種子図鑑』東北大学出版会　2006年3月1日　改訂版第2刷。

参考資料　1. 澤岻安喜著『シリーズ沖縄の自然木の実・木の種』(有)新星図書出版　1983年12月10日　初版第1刷。
2. UTC.URL:　http://ja.wikipedia.org「新エングラー体系詳細」『フリー百科事典ウィキペディア日本語版』2007年11月18日(日曜日)14:42
3. http://nopa.sakura.ne.jp「エングラー体系科の一覧」『ノパの庭』　2008年8月25日

第７節　微小貝類遺存体

京の内土壙SK01（倉庫跡）から微小貝類（海産・陸産）も出土していたので、以下に記す。貝類の同定は、千葉県立中央博物館主席学芸員の黒住耐二氏に依頼した。明記して謝意を表す。

土壙SK01より出土した微小貝類については、第68表と第69表に海産と陸産の二種類に分けて呈示した。

確認された微小貝類は海産貝が３科３種・陸産貝10科13種で、全て巻貝であった。

１）海産微小貝類

第68表に示したように出土点数は、５個体であった。オニノツノガイ科ヒメムシロカニモリが２個体、フデガイ科チョウチンフデ、コゴメガイ科タカラコゴメ類似種、巻貝不明の各々１個体が得られている。

海産微小貝類は海草や貝類などに付着した状態で持ち込まれたのかもしれない。このような事例報告は竹富島新里村遺跡（註１）で報告されている。この考え方以外に次のような考え方を付け加えておきたい。これは、王城であった首里城内を普請する際に海岸より砂や砂利などを運んでくる際に砂や砂利などに紛れ込んで持ち込まれていた事である。

２）陸産微小貝類

陸産微小貝類は288個体（第69表）が出土している。最も多く出土している貝種はベッコウマイマイ科ハクサンベッコウマイマイ属？の一種であり130個体（全出土量の45.1％）と半数近くを占めている。次いでオカチョウジガイ科シリブトオカチョウジガイAの77個体（26.7％）であった。このハクサンベッコウマイマイ属？の一種とシリブトオカチョウジガイAの二種類の出土点数を合計すると207個体となり全出土量の71.8％を占めている。

陸産微小貝類の中で主体貝類となっているハクサンベッコウマイマイ属？の一種について、黒住耐二氏の現生分類（註２）に準じると「カテゴリーⅡ」の「沖縄島南部の自然林にも分布」（註３）する貝種である事から当時は良好な自然林が存在していたのではないかと推定されるところである。この事から推察すると京の内土壙SK01（倉庫跡）周辺に良好な自然林（御嶽林）があったのではないかと考えられるところである。

註文献

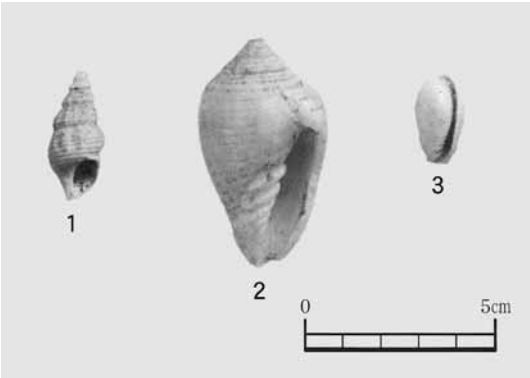
註１．金城亀信（C.微小貝）「(14) その他の自然遺物」『新里村跡－竹富島一周道路建設工事に伴う緊急発掘調査報告－』沖縄県文化財調査報告書第97集　沖縄県教育委員会 1990年３月。

註２．黒住耐二（第５表 平良グスク試掘調査で得られた陸産貝類の現在の分布状況に基づくカテゴリー区分）〔１．豊見城村の長嶺、保栄茂および平良グスク試掘調査により出土した貝類〕「第Ⅶ章 付編」『豊見城村の遺跡』豊見城村文化財調査報告書 第３集
豊見城村教育委員会 1988年３月。

註３．「沖縄島南部の自然林にも分布」とある自然林は、南城市玉城富里の「ヤンバル山」と称される地域一帯の自然林である。

第68表　微小貝(海産)出土状況

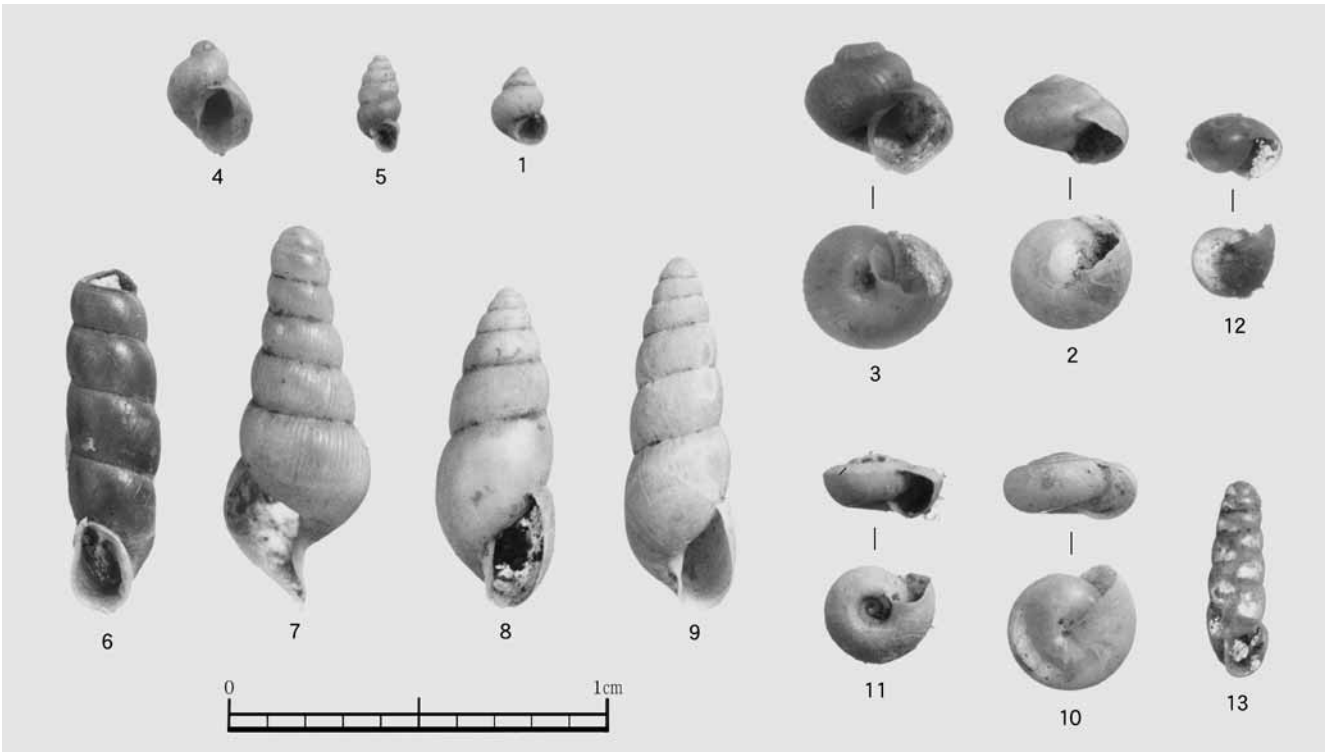
番号	科名	貝種名	SA20 第4層	SA19・20 畦2層一括遺物	SA19・20 畦4層	合計
1	オニノツノガイ科	ヒメムシロカニモリ			2	2
2	フデガイ科	チョウチンフデ	1			1
3	コゴメガイ科	タカラコゴメ類似種		1		1
4	巻貝不明				1	1
合計			1	1	3	5



図版７Ａ　微小貝　海産(番号は表と一致)

第69表　微小貝(陸産)出土状況

番号	科名	貝種名	SA19 2層	SA19 一括遺物3層	SA19 一括遺物4層	SA20 第3層	SA20 第4層	SA19・20 畦	SA19・20 畦床面清掃	SA19・20 畦覆土	SA19・20 畦2層一括遺物	SA19・20 畦2層	SA19・20 畦3層	SA19・20 畦4層	合計
1	ゴマオカタニシ科	フクダゴマオカタニシ		4		10			3			1		2	20
2	ヤマキサゴ科	オキナワヤマキサゴ			1	1				1	2				5
3	ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ			1					1			3	1	6
4	オカモノアラガイ科	リュウキュウオカモノアラガイ											1		1
5	キバサナギガイ科	シモチキバサナキガイ											1		1
6	キセルガイ科	ツヤギセル												1	1
7		ノミギセル							1						1
8	オカチョウジガイ科(オカクチキレガイ科)	シリブトオカチョウジガイA		11	17	13			13	6	4	1	3	9	77
9		シリブトオカチョウジガイB				1								1	2
10	ベッコウマイマイ科	ハクサンベッコウマイマイ属？の一種	1	16	42	8	1	2	13	9	5	4	10	19	130
11	オナジマイマイ科	オキナワウスカワマイマイかパンダナマイマイ			7	2			3					1	13
12		ウロコケマイマイ		1	2	7		1	3	4	2	2	6	2	30
13	ネジレガイ科(タワラガイ科)	ソメワケダワラガイ			1										1
合計			1	32	71	42	1	3	36	21	13	8	24	36	288



図版７Ｂ　微小貝　陸産(番号は表と一致)

第８節　貝類遺存体

京の内土壙SK01（倉庫跡）から出土した貝類で確認された貝種は、巻貝（腹足網）で23科55種（第71表）、二枚貝（斧足網）が16科31種（第72表）であった。

巻貝は、個体で1,735個体が得られている。この中で最も多い貝種は内湾－転石域に生息するオニノツノガイ科ウミニナカニモリが733個体（42.2％）で全体の半数近くを占めている。順次、内湾－転石域のサザエ科カンギク271個体（15.6％）、河口干潟－マングローブ域生息のフトヘナタリ科フトヘナタリ101個体（5.8％）、内湾－転石域のウミニナ科リュウキュウウミニナ80個体（4.6％）、外洋－サンゴ礁域岩礁／岩盤に生息するゴマフニナ科ゴマフニナ19個体（1.1％）と減じている。

上記の状況から巻貝の生息地別頻度をみると全体個体数1,735個体の内、内湾－転石域に生息するウミニナカニモリ（733個体）、カンギク（271個体）、リュウキュウウミニナ（80個体）の三つの貝種で62.4％を占める。これに河口干潟－マングローブ域に生息するフトヘナタリ（101個体）5.8％を加えると全体の68.2％に達する。貝類の採集場所が、主に河口干潟－マングローブ域から内湾－転石域に生息する貝類を主体におこなわれたようである。干潮時には外洋－サンゴ礁域岩礁／岩盤に生息するゴマフニナ科ゴマフニナ19個体、二枚貝については829個体が得られている。その中で最も多く出土したのは河口干潟－マングローブ域礫／砂／泥底に生息のマルスダレガイ科アラスジケマンガイ606個体（73.1％）、次いで外洋－サンゴ礁域の岩礁／岩盤生息するウグイスガイ科ミドリアオリ76個体（9.1％）、同じく外洋－サンゴ礁域岩礁の礫／砂／泥底生息のチドリマスオ科イソハマグリ41個体（4.9％）、内湾－転石域の礫／砂／泥底に生息するマルスダレガイ科ハマグリ類20個体（2.4％）の順位減じている。

二枚貝の生息地別頻度は、河口干潟－マングローブ域生息のアラスジケマンガイ606個体（73.0％）が全体の７割以上を占めている。

以上のような貝類の生息地別傾向を踏まえて、巻貝（1,735個体）および二枚貝（829個体）の貝種全体（2,564個体）で生息地別の頻度をみると、内湾－転石域に生息するウミニナカニモリ（733個体）、カンギク（271個体）、リュウキュウウミニナ（80個体）、ハマグリ類（20個体）の四つの貝種（合計1,104個体）で、全体の43.05％を占めている。次ぎに河口干潟－マングローブ域生息のアラスジケマンガイ（606個体）、フトヘナタリ（101個体）の二貝種（合計707個体）で27.57％となる。

出土した貝類の生息地別では、内湾－転石域（1,104個体）、河口干潟－マングローブ域（707個体）、合計1,811個体と全出土量（2,564個体）の70.6％を占めていることから当該地域での採集が集中していることが窺える。

次いで外洋－サンゴ礁域生息のミドリアオリ（76個体）、イソハマグリ（41個体）、ゴマフニナ（19個体）の三つの貝種（合計136個体）で5.30％と減少する事から河口干潟－マングローブ域から内湾的な場所の全面に広がるイノーやサンゴ礁域（リーフ）の干潮時の干瀬（リーフ）の範囲内までが貝類採集の対象地域となったものと推察されるところである。

採集された貝種で、沖縄貝塚時代後期遺跡から出土する大型多肉質のヤコウガイ（蓋６個体、殻２個体）やサラサバテイ（２個体）などの貝類の出土は非常に少なく、グスク時代の遺跡から出土する肉質の少ない小形種であるアラスジケマンガイ、カンギクのような小形種が多い。カンギクの場合は大量に食して補うのか。或いはウミニナカニモリやリュウキュウウミニナなどの小形種は出汁を取る程度の補足的な意味合いで採集したのかもしれない。

京の内土壙SK01（倉庫跡）より出土の貝類でハマグリ類があった。ハマグリ類も調査の際に大量の陶磁器片と一緒に出土していた為、貝合せの遊具（註１）などで使用されたのではないかと気がかりであった。

これについては、黒住耐二氏の教示を請うたところ次ぎのようなコメントを頂いたので記す。

「首里城等、沖縄本島南部の遺跡から出土する。・・・中略・・・ハマグリ類の分類は未着手で、今回のものも、歯切れが悪く、１）ヤマトからの持ち込み、２）在地の中城湾産のもの、の両方が考えられると思います。・・・中略・・・１）も持ち込みの場合、ア）本土産遺物との一括性の検討、イ）貝合せに用いた際の根拠

として内側に絵がかかられたものの発見が、カギになるかと思います。」とあることから土壙SK01出土のハマグリ類については今後、赤外線撮影などを実施してみたいところである。確認された場合は何らかの形で報告したい。

註1）．うるま市平安座島では、海岸から拾ってきた貝殻を利用して貝合せをおこなった例があり、本土のように裏側に絵を描いた例はないようである。貝合せで使用した貝殻はハマグリ類のようである。その他、ハマグリの利用例として蝉や鳥を捕獲際に粘着剤を入れた容器として使用した。

参考までにハマグリ類が出土した遺跡の例を挙げると中城村中城城跡北の郭外側（完形L56個・R48個、破片30個、合計134個。中城村教育委員会2002年３月）、首里城跡管理用道路地区（完形L63個・R65個、殻頂L77個・R66個、破片17個。県立埋蔵文化財センター2001年３月）などで報告されている。

第70表　貝類生息場所類型表

外洋～内湾		生息水深など		底質	
Ⅰ	外洋 ― サンゴ礁域	0	潮間帯上部（Ⅰではノッチ､Ⅲではマングローブ）	a	岩礁／岩盤
		1	潮間帯中・下部		
Ⅱ	内湾 ― 転石地	2	亜潮間帯上縁部（Ⅰではイノー）	b	転石
		3	干瀬（Ⅰにのみ適用）		
Ⅲ	河口干潟 ― マングローブ域	4	礁斜面及びその下部	c	礫／砂／泥底
Ⅳ	淡水域	5	止水		
		6	流水	d	植物上
Ⅴ	陸域	7	林内		
		8	林内・林縁部	e	淡水の流入する礫底
		9	林縁部		
		10	海浜部		
Ⅵ	その他	11	打ち上げ物		
		12	化石		

注：第70表は、黒住耐二「貝類遺体からみた伊礼原遺跡」『伊礼原遺跡』北谷町教育委員会2007年3月を参考にして作成。

第71表　貝類出土状況(1)　巻貝

				SA19																																										SA20																																	SK01 SA20			SA19・20											
			出土地	東側トレンチ覆土			東側トレンチ栗石内			東側トレンチ栗石直下			栗石の畦			裏栗の中一括遺物			裏栗の下一括遺物			第1層			第2層			第3層			一括遺物1層			一括遺物2層			一括遺物3層			一括遺物4層			一括遺物5層			覆土			北側覆土			栗石内			第1層			第2層			第3層			第3層(灰黄色土層)			第4層			一括遺物1層			一括遺物2層			一括遺物3層			3層			北側(第1層)淡褐色混礫土層			第1層			第2層			第3層		
番号	科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片
1	ユキノカサガイ科	リュウキュウウノアシ	Ⅰ-1-a		1																																																																																								
2	ニシキウズガイ科	ニシキウズ	Ⅰ-2-a																																1		1																								1	2	5																														
3		ギンタカハマ	Ⅰ-4-a																																																																									1																	
4		サラサバテイ	Ⅰ-4-a															1																								1					1																																														
5		オキナワイシダタミ	Ⅱ-1-b																																																											1	1				1																										
6	サザエ科	ヤコウガイ	Ⅰ-4-a									1									1												27			5			15			8						3						1			1			10			17			3						5			1			1									7			1			
7		ヤコウガイの蓋	Ⅰ-4-a																					1														1				1																																									1										
8		チョウセンサザエの蓋	Ⅰ-3-a							1									1																																		1		1			1			5			1			1																										
9		カンギク	Ⅱ-1-b	5			12	2		17	4												1								2				1		4					2				2	2	1							6	4	3	2			37	9	4	3	1		17	1	1				3									2			6								
10		カンギクの蓋	Ⅱ-1-b																						1			2												3															1						30						4												1	1													
11	アマオブネガイ科	コシダカアマガイ	Ⅰ-1-a																																																																																										
12		マルアマオブネ	Ⅱ-1-b																																					1																					1																																
13		アマオブネガイ科不明																																																																																											
14	オニノツノガイ科	オニノツノガイ	Ⅰ-2-c									1																																																		1																															
15		カヤノミカニモリ								2																											1			3	4	3				1									1						3	2					1	1					1												1								
16		ウミニナカニモリ	Ⅱ-1-b	6	6	4	16	21		27	29								4				1	1							1			2		1	2	5		2	6	2				1	1			2			1		19	16		2	3		58	66	4	8	4		33	39	2		1		4	2											7	1					1	3	
17		クワノミカニモリ	Ⅰ-1-a			1					2																										1									1									2			1			3	4					4	3					2									7			3								
18	ゴマフニナ科	ゴマフニナ	Ⅰ-1-a		1					3	1																																												1						2			1			2						1																				
19	ウミニナ科	リュウキュウウミニナ	Ⅱ-1-c	1	2						4			1																		2										1													1	4					3	8	3		1		1	6	2					1								1											
20	フトヘナタリ科	フトヘナタリ(イトカケヘナタリ)	Ⅲ-0-d								3																													1	3														1	1					15	22	6				2	3						1																			
21		ヘナタリ	Ⅲ-1-c																																									1																			1					1															1										
22		カワアイ	Ⅲ-1-c				1	1																																																																																					
23	ソデボラ科	ムカシタモト	Ⅰ-2-c																																																																																										
24		ネジマガキ	Ⅰ-2-c																																			1																																							1																
25		マガキガイ	Ⅰ-2-c																																			1		1	2					2			1						3	1					5	3	1	1	1		1	2						1								1				1							
26	スズメガイ科	アッキクスズメ	Ⅰ-3-a																																																																																										
27	タカラガイ科	ヤクシマダカラ	Ⅰ-2-a																																																																																										
28		ヒメホシダカラ	Ⅰ-2-a																																																																																										
29		ナツメモドキ	Ⅰ-2-a																																																																																										
30		ハナビラダカラ	Ⅰ-1-a																																																										1						1																										
31		キイロダカラ	Ⅰ-1-a					1																																																																																					
32		ハナマルユキ	Ⅰ-3-a						1																																																																																				
33	タマガイ科	ホウシュノタマ	Ⅱ-1-c																																																																1																										
34	フジツガイ科	シオボラ	Ⅰ-2-a																																																										2																																
35	アッキガイ科	ガンゼキボラ	Ⅰ-4-a				1																																																																																						
36		ウネレイシダマシ	Ⅰ-1-b																																																																																										
37		シラクモガイ	Ⅰ-3-a																																		1																																																								
38	オニコブシガイ科	コオニコブシ	Ⅰ-3-a					1																																																																																					
39	ムシロガイ科	イボヨフバイ	Ⅱ-1-c							1																																																																																			
40		ムシロガイ科不明																																																																																											
41	エゾバイ科	シマベッコウバイ	Ⅱ-1-c				6			2																														3															3						5	1					3						1																				
42	イモガイ科	クロフモドキ	Ⅰ-2-c																																																																																				1						
43		マダライモ	Ⅰ-1-a																																																																																		1								
44		サヤガタイモ	Ⅰ-1-a																																																																																										
45		サラサミナシモドキ	Ⅰ-2-a			1																																																																																							
46		ヤセイモ	Ⅰ-2-a				1																																																																																						
47		イボシマイモ	Ⅰ-2-a																																																																																										
48		イモガイ科不明																																													1																																														
49	ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	Ⅴ-8							1		1																									1																									2	2																					1									
50	キセルガイ科	ツヤギセル	Ⅴ-8																	1																																																																									
51	アフリカマイマイ科	アフリカマイマイ	Ⅴ-9								1																																																																																		
52	ナンバンマイマイ科	シュリマイマイ	Ⅴ-8							1																																																																																			
53		オキナワヤマタカマイマイ	Ⅴ-8	1																																																																																									
54	オナジマイマイ科	パンダナマイマイ	Ⅴ																																																																																										
55		イトマンマイマイ	Ⅴ-7																																																																																										
56	巻貝不明																																																																																						1						
合計				13	10	6	37	26	1	55	44	3	0	1	0	0	0	1	5	1	1	0	2	2	1	0	0	2	0	0	3	2	27	2	2	6	11	8	15	14	15	18	0	1	0	7	5	4	1	2	0	0	2	1	39	26	4	6	3	10	171	121	44	14	7	3	72	56	5	0	1	5	12	5	1	1	1	1	1	1	0	11	2	1	18	2	9	0	0	1	1	3	0

注　完形と殻長の数を足した合計を個体数とした。(破片でのみ出土した貝種については、最少個体数「1」として数えた)

第71表　貝類出土状況(1)　巻貝

			出土地	SA19・20																														SA28						SA28(SA19と20の間)												SK01－A									SK01－B			SK01－C			SA33												SA34									合計			個体数
				第4層			畦覆土			畦床面清掃			畦地山直上			畦			畦2層			畦3層			畦4層			畦5層(灰層)			畦一括遺物2層			覆土			トレンチ第2層灰黄色土層(覆土直下)			栗石			褐色土層			第1層(焼土面)			第2層～第5層			上層(第2層)			中層(第4層)			下層(第5層)			黒褐色土層(第1層)			淡褐色土層(上層)			客土			栗石内			栗石直下			集石直下			客土			栗石内			栗石直下						
番号	科名	貝種名	生息地	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	
1	ユキノカサガイ科	リュウキュウウノアシ	Ⅰ-1-a																																																																																	0	1	0	1
2	ニシキウズガイ科	ニシキウズ	Ⅰ-2-a					1	3												4	1	1			1	1																							1																							1																3	7	14	10
3		ギンタカハマ	Ⅰ-4-a					1																	1		1																																																													2	1	1	3
4		サラサバテイ	Ⅰ-4-a						2																												1																																																			1	1	4	2
5		オキナワイシダタミ	Ⅱ-1-b																					1																																																																	1	1	2	2
6	サザエ科	ヤコウガイ	Ⅰ-4-a						8			6						2			26		1	36			7			1			1						5																		1							6			3			1																		1		1	3			1	0	2	215	2
7		ヤコウガイの蓋	Ⅰ-4-a						4									1			2			8			3												1																							1		1							1		1	1													1						3	3	23	6
8		チョウセンサザエの蓋	Ⅰ-3-a				1			1									1			1		1				2																																																				2									19	1	1	20
9		カンギク	Ⅱ-1-b				12	2	2	15	8	6							13		4	35	8	3	10	5	2	1	1		3			1												1	1											1	1			6	1		2		1				1								1				1						220	51	31	271
10		カンギクの蓋	Ⅱ-1-b				24			8			1						6			94			10															1																																																		186	1	0	187
11	アマオブネガイ科	コシダカアマガイ	Ⅰ-1-a				1																																																				5																															6	0	0	6
12		マルアマオブネ	Ⅱ-1-b									1										1	1																																							1																											4	1	1	5
13		アマオブネガイ科不明																									1																																																																0	0	1	1
14	オニノツノガイ科	オニノツノガイ	Ⅰ-2-c									1								1	1						1																																																															0	2	4	2
15		カヤノミカニモリ					1												3	1		5	1		2	3																																						2			1	1																								28	13	3	41
16		ウミニナカニモリ	Ⅱ-1-b	1			17	3		18	24	4				2	1		21	23	6	53	62	1	22	20	3				3	4														1			3				5					1	1		11	16	2	11	5																	3	2	1				360	373	31	733
17		クワノミカニモリ	Ⅰ-1-a				10			1	2								5	2		1	2		5	1					2																						1					1																									1					49	18	1	67
18	ゴマフニナ科	ゴマフニナ	Ⅰ-1-a				2			1												2			1																																					1																												17	2	0	19
19	ウミニナ科	リュウキュウウミニナ	Ⅱ-1-c				3	3	2											7		3	18		3		3																																			1	3		1	1																		1					18	62	11	80
20	フトヘナタリ科	フトヘナタリ(イトカケヘナタリ)	Ⅲ-0-d				2				5	3							2	2		17	4		9	6	3																																				1																					1					49	52	12	101
21		ヘナタリ	Ⅲ-1-c																	1		1																																			1																																1	5	1	6
22		カワアイ	Ⅲ-1-c																																																																																				1	1	0	2
23	ソデボラ科	ムカシタモト	Ⅰ-2-c																									1																																																												1	0	0	1
24		ネジマガキ	Ⅰ-2-c																																																																																			0	2	0	2
25		マガキガイ	Ⅰ-2-c				1	1		1		1							4	3	2	2	2	1	5	3	4	1	1			1			1															1									1	2		2	1	2																	1						34	27	11	61
26	スズメガイ科	アッキクスズメ	Ⅰ-3-a																			1																																																																		1	0	0	1
27	タカラガイ科	ヤクシマダカラ	Ⅰ-2-a							1																																																																														1	0	0	1
28		ヒメホシダカラ	Ⅰ-2-a																																																							1																														0	0	1	1
29		ナツメモドキ	Ⅰ-2-a																1																																																																					1	0	0	1
30		ハナビラダカラ	Ⅰ-1-a			1													1																									1				1																																										4	1	1	5
31		キイロダカラ	Ⅰ-1-a																1																																																																					1	1	0	2
32		ハナマルユキ	Ⅰ-3-a																																																																																			0	0	1	1
33	タマガイ科	ホウシュノタマ	Ⅱ-1-c																																																																																		1	0	0	1
34	フジツガイ科	シオボラ	Ⅰ-2-a																																																																																		2	0	0	2
35	アッキガイ科	ガンゼキボラ	Ⅰ-4-a																																																																																		1	0	0	1
36		ウネレイシダマシ	Ⅰ-1-b																			2																																							1																												3	0	0	3
37		シラクモガイ	Ⅰ-3-a																																																																																		1	0	0	1
38	オニコブシガイ科	コオニコブシ	Ⅰ-3-a																			1																																																																		1	1	0	2
39	ムシロガイ科	イボヨフバイ	Ⅱ-1-c																																																																																		1	0	0	1
40		ムシロガイ科不明																					1																																																																0	1	0	1
41	エゾバイ科	シマベッコウバイ	Ⅱ-1-c							1												5			2			1			2																		2												2																					1						39	1	0	40
42	イモガイ科	クロフモドキ	Ⅰ-2-c																																																																																		0	0	1	1
43		マダライモ	Ⅰ-1-a																1																																							1																														2	0	0	2
44		サヤガタイモ	Ⅰ-1-a																1																																																																				2	0	0	2
45		サラサミナシモドキ	Ⅰ-2-a																																																																																			0	0	1	1
46		ヤセイモ	Ⅰ-2-a																																															1																																								2	0	0	2
47		イボシマイモ	Ⅰ-2-a																			1	1																																																																			1	1	0	2
48		イモガイ科不明				1					1	2																																																																											0	2	3	2
49	ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ	Ⅴ-8					2	3	1	1								1		1	4	2	3	1		1									1											1																									1									1						11	8	13	19
50	キセルガイ科	ツヤギセル	Ⅴ-8					2																																																																														0	3	0	3
51	アフリカマイマイ科	アフリカマイマイ	Ⅴ-9																																																																																			0	1	0	1
52	ナンバンマイマイ科	シュリマイマイ	Ⅴ-8																																																																																			1	0	0	1
53		オキナワヤマタカマイマイ	Ⅴ-8																																																																																			1	0	0	1
54	オナジマイマイ科	パンダナマイマイ	Ⅴ																1																																																																		1	0	0	1
55		イトマンマイマイ	Ⅴ-7																			1																																																																	1	0	0	1
56	巻貝不明																																																																																						0	0	1	1
	合計			1	0	2	74	15	24	48	41	24	1	0	0	2	1	3	62	40	46	231	104	54	71	39	30	6	2	1	10	5	1	1	1	1	1	0	6	1	0	0	1	0	0	2	3	0	7	1	0	0	6	1	0	1	1	11	3	8	27	22	7	15	7	2	1	0	1	2	0	1	1	0	0	0	0	1	2	0	1	7	7	4	0	0	1	1082	647	389	1735

注　完形と殻長の数を足した合計を個体数とした。(破片でのみ出土

第72表 貝類出土状況(2) 二枚貝

				SA19																													
				東側トレンチ覆土					東側トレンチ栗石内					東側トレンチ栗石直下					栗石の畦					裏栗りの中一括遺物					第1層				
				完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片
番号	科名	貝種名	生息地	L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R	
				あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お
1	フネガイ科	エガイ	Ⅰ-1-a																														
2		ベニエガイ	Ⅰ-2-a											1																			
3		リュウキュウサルボウ	Ⅱ-2-c																														
4	イガイ科	リュウキュウヒバリガイ		1																													
5	ウグイスガイ科	ミドリアオリ	Ⅰ-1-a	1	1	3	2		1							4	5																
6		ウグイスガイ科不明																															
7	マクガイ科	マクガイ科不明																															
8	イタヤガイ科	イササヒヨク																															
9	ウミギク科	メンガイの一種	Ⅰ-2-a																														
10	イタボガキ科	カキの一種																															
11	ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c	1													1																
12		ヒメツキガイ	Ⅰ-2-c																														
13	トマヤガイ科	クロフトマヤガイ	Ⅰ-2-a																														
14	ザルガイ科	カワラガイ	Ⅱ-2-c																														
15	シャコガイ科	ヒメシャコガイ	Ⅰ-2-a																														
16		シャコガイ科不明																															
17	チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ-1-c		1					1						1																	
18	フジノハナガイ科	ナミノコガイ													1																		
19		リュウキュウナミノコ	Ⅰ-1-c																														
20	シオサザナミ科	マスオガイ	Ⅱ-1-c																														
21	シジミ科	シレナシジミ	Ⅲ-0-c																														
22	マルスダレガイ科	ヌノメガイ	Ⅱ-2-c																														
23		アラスジケマンガイ	Ⅲ-1-c	3	8	2		1	9	5	3	5		15	13		4	4	5	2				1					2	2			1
24		ホソスジイナミガイ	Ⅱ-1-c						2	2				1	1																		
25		オイノカガミ	Ⅱ-1-c																														
26		イオウハマグリ	Ⅱ-1-c																														
27		リュウキュウアサリ																															
28		スダレハマグリ	Ⅱ-1-c																														
29		ハマグリ													1		1	1															
30		オキシジミ	Ⅰ-c															1															
31		ハマグリの一種										1	1																				1
32	二枚貝不明																																
合計				6	10	5	2	1	12	8	3	6	1	17	16	5	11	6	5	2	0	0	0	1	0	0	0	0	2	2	0	0	2

				SA19																									SA19				
				第2層					第3層					一括遺物1層					一括遺物2層					一括遺物4層					一括遺物5層				
				完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片
番号	科名	貝種名	生息地	L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R	
				あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お
1	フネガイ科	エガイ	Ⅰ-1-a																														
2		ベニエガイ	Ⅰ-2-a																														
3		リュウキュウサルボウ	Ⅱ-2-c																														
4	イガイ科	リュウキュウヒバリガイ																															
5	ウグイスガイ科	ミドリアオリ	Ⅰ-1-a								1													1			2						
6		ウグイスガイ科不明																				1											
7	マクガイ科	マクガイ科不明																															
8	イタヤガイ科	イササヒヨク																															
9	ウミギク科	メンガイの一種	Ⅰ-2-a																														
10	イタボガキ科	カキの一種																															
11	ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c																														
12		ヒメツキガイ	Ⅰ-2-c																														
13	トマヤガイ科	クロフトマヤガイ	Ⅰ-2-a																														
14	ザルガイ科	カワラガイ	Ⅱ-2-c																														
15	シャコガイ科	ヒメシャコガイ	Ⅰ-2-a																			1											
16		シャコガイ科不明																															
17	チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ-1-c																	1		1		1									
18	フジノハナガイ科	ナミノコガイ																															
19		リュウキュウナミノコ	Ⅰ-1-c																														
20	シオサザナミ科	マスオガイ	Ⅱ-1-c																														
21	シジミ科	シレナシジミ	Ⅲ-0-c																														
22	マルスダレガイ科	ヌノメガイ	Ⅱ-2-c																														
23		アラスジケマンガイ	Ⅲ-1-c	1				1						2	2	2		1	12	13	2	2	1	2	7	2	3	2	1				
24		ホソスジイナミガイ	Ⅱ-1-c																									1					
25		オイノカガミ	Ⅱ-1-c																														
26		イオウハマグリ	Ⅱ-1-c																														
27		リュウキュウアサリ																															
28		スダレハマグリ	Ⅱ-1-c																						1					1			
29		ハマグリ																		1				1	1								
30		オキシジミ	Ⅰ-c																														
31		ハマグリの一種																					1										
32	二枚貝不明																									1							
合計				1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	2	2	2	0	1	12	15	3	4	2	5	9	3	5	3	1	1	0	0	0

				SA20																													
				第1層					第2層					第3層					一括遺物1層					一括遺物2層					一括遺物3層				
				完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片
番号	科名	貝種名	生息地	L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R	
				あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お
1	フネガイ科	エガイ	Ⅰ-1-a												1		1																
2		ベニエガイ	Ⅰ-2-a		1																												
3		リュウキュウサルボウ	Ⅱ-2-c																														
4	イガイ科	リュウキュウヒバリガイ															1	1															
5	ウグイスガイ科	ミドリアオリ	Ⅰ-1-a			2										30	35	3				1											
6		ウグイスガイ科不明																															
7	マクガイ科	マクガイ科不明				1																											
8	イタヤガイ科	イササヒヨク																															
9	ウミギク科	メンガイの一種	Ⅰ-2-a													1																	
10	イタボガキ科	カキの一種													1																		
11	ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c	1	1									1											1								
12		ヒメツキガイ	Ⅰ-2-c																														
13	トマヤガイ科	クロフトマヤガイ	Ⅰ-2-a												3	1		2															
14	ザルガイ科	カワラガイ	Ⅱ-2-c																														
15	シャコガイ科	ヒメシャコガイ	Ⅰ-2-a																														
16		シャコガイ科不明																															
17	チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ-1-c	4	6									5	4	1	3		1	1													
18	フジノハナガイ科	ナミノコガイ		1			1								1																		
19		リュウキュウナミノコ	Ⅰ-1-c		1																												
20	シオサザナミ科	マスオガイ	Ⅱ-1-c																														
21	シジミ科	シレナシジミ	Ⅲ-0-c																														
22	マルスダレガイ科	ヌノメガイ	Ⅱ-2-c																														
23		アラスジケマンガイ	Ⅲ-1-c	21	29	5	8	7	5	4		1		54	50	37	31	19	1					10	10		1			1			
24		ホソスジイナミガイ	Ⅱ-1-c	1					1					2	4			2															
25		オイノカガミ	Ⅱ-1-c																														
26		イオウハマグリ	Ⅱ-1-c												1					1													
27		リュウキュウアサリ																															
28		スダレハマグリ	Ⅱ-1-c								1				1			1															
29		ハマグリ		1					1			2				1	1	2						2				2					
30		オキシジミ	Ⅰ-c																														
31		ハマグリの一種					1	3									1	3									1	1					
32	二枚貝不明																																
合計				29	38	8	10	10	7	4	1	3	0	62	66	71	73	33	2	2	0	1	0	12	11	0	2	3	0	1	0	0	0

				SA20																					SA20								
				覆土					北側覆土					栗石内					南2層					第3層(灰黄色土層)					第4層				
				完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片
番号	科名	貝種名	生息地	L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R		L	R	L	R	
				あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お
1	フネガイ科	エガイ	Ⅰ-1-a																														
2		ベニエガイ	Ⅰ-2-a	1																													
3		リュウキュウサルボウ	Ⅱ-2-c																														
4	イガイ科	リュウキュウヒバリガイ																														1	1
5	ウグイスガイ科	ミドリアオリ	Ⅰ-1-a																						1	1		1	2		1	5	
6		ウグイスガイ科不明																															
7	マクガイ科	マクガイ科不明																															
8	イタヤガイ科	イササヒヨク																															
9	ウミギク科	メンガイの一種	Ⅰ-2-a																														
10	イタボガキ科	カキの一種																															
11	ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c												1																	1	
12		ヒメツキガイ	Ⅰ-2-c																														
13	トマヤガイ科	クロフトマヤガイ	Ⅰ-2-a																														
14	ザルガイ科	カワラガイ	Ⅱ-2-c																														
15	シャコガイ科	ヒメシャコガイ	Ⅰ-2-a																														
16		シャコガイ科不明																												1					
17	チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ-1-c	1	1						1	1																	1	2			
18	フジノハナガイ科	ナミノコガイ																												1			
19		リュウキュウナミノコ	Ⅰ-1-c																					2									
20	シオサザナミ科	マスオガイ	Ⅱ-1-c																													1	
21	シジミ科	シレナシジミ	Ⅲ-0-c																				1										
22	マルスダレガイ科	ヌノメガイ	Ⅱ-2-c					1																									1
23		アラスジケマンガイ	Ⅲ-1-c	4	5		2		1	4		1		2	6	1								3	8		1	2	27	26	8	11	15
24		ホソスジイナミガイ	Ⅱ-1-c			1									2																		
25		オイノカガミ	Ⅱ-1-c																														
26		イオウハマグリ	Ⅱ-1-c																														
27		リュウキュウアサリ																															
28		スダレハマグリ	Ⅱ-1-c																														
29		ハマグリ		1																										1			
30		オキシジミ	Ⅰ-c					1																									
31		ハマグリの一種																															2
32	二枚貝不明																																
合計				7	6	1	2	2	1	4	1	2	0	2	9	1	0	0	0	0	0	0	1	5	9	1	1	4	30	30	9	19	19

注 完形と殻頂の右同士・左同士を足して、多い方を個体数とした。(破片でのみ出土した貝種については、最少個体数「1」と数えた)

第72表　貝類出土状況(2)　二枚貝

				SK01・SA20																																									SA19・20										SA28				
				第3層					畦覆土					畦床面清掃					第3層					第4層					畦1層					畦2層					畦3層					畦4層					畦5層(灰層)					北側(第1層)淡褐色紺					覆土				
				完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片
番号	科名	貝種名	生息地	L	R	L	R	片	L	R	L	R	片	L	R	L	R	片	L	R	L	R	片	L	R	L	R	片	L	R	L	R	片	L	R	L	R	片	L	R	L	R	片	L	R	L	R	片	L	R	L	R	片	L	R	L	R	片	L	R	L	R	片
				あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お
1	フネガイ科	エガイ	Ⅰ-1-a																																		1																										
2		ベニエガイ	Ⅰ-2-a											1																					1				1																								
3		リュウキュウサルボウ	Ⅱ-2-c																																			1																							
4	イガイ科	リュウキュウヒバリガイ								1			1																	1																															
5	ウグイスガイ科	ミドリアオリ	Ⅰ-1-a				1		1		6	8	3			1	1														1			1		3	6				7	6	2		1	1	1																
6		ウグイスガイ科不明																																																													
7	マクガイ科	マクガイ科不明																																																													
8	イタヤガイ科	イササヒヨク								1																																																				
9	ウミギク科	メンガイの一種	Ⅰ-2-a																																																												
10	イタボガキ科	カキの一種																																																													
11	ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c																																	1	1		1		1	1				3		1	1															
12		ヒメツキガイ	Ⅰ-2-c																																																												
13	トマヤガイ科	クロフトマヤガイ	Ⅰ-2-a																																																												
14	ザルガイ科	カワラガイ	Ⅱ-2-c																																																												
15	シャコガイ科	ヒメシャコガイ	Ⅰ-2-a																																																												
16		シャコガイ科不明																																																													
17	チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ-1-c												2			2											1					3	2		1	2	4	4		1		1	1	1								1	1								
18	フジノハナガイ科	ナミノコガイ																																					1																								
19		リュウキュウナミノコ	Ⅰ-1-c																																																												
20	シオサザナミ科	マスオガイ	Ⅱ-1-c									1																						1																													
21	シジミ科	シレナシジミ	Ⅲ-0-c																																																												
22	マルスダレガイ科	ヌノメガイ	Ⅱ-2-c																																																												
23		アラスジケマンガイ	Ⅲ-1-c						7	7	10	6	2	7	6	2	1	7				1					1		13	15	3	2	1	43	40	9	11	13	26	27	24	32	63	14	8	5	12	17	1	1	1			4	5	1	3	2	1	1			
24		ホソスジイナミガイ	Ⅱ-1-c														1	1																1								1	1												1								
25		オイノカガミ	Ⅱ-1-c																																			1																									
26		イオウハマグリ	Ⅱ-1-c																																2				1	1																							
27		リュウキュウアサリ																1																																													
28		スダレハマグリ	Ⅱ-1-c							1					1																													1																			
29		ハマグリ									1	1	1													1		1							1	3	1	3	2	2		1			2	2	3										1						
30		オキシジミ	Ⅰ-c																																		1					1				1																	
31		ハマグリの一種											1																				1					3					9			1																	
32	二枚貝不明																	1																							1	3	1																				
合計				0	0	0	1	0	8	10	17	16	8	8	9	3	3	12	0	0	0	1	0	0	0	1	1	1	14	16	4	2	2	49	47	16	21	24	35	35	33	45	76	16	15	11	17	18	1	1	1	0	0	5	7	1	4	2	1	1	0	0	0

				SA28					SA28(SA19と20の間)															SK01－A										SK01－B					SK01－C					SA33					SA34										合計					個体数
				トレンチ第2層灰黄色土層					褐色土層					第1層(焼土面)					第2層～第5層					上層(2層)					下層(第5層)					第1層(黒褐色土層)					淡褐色土層(上層)					栗石直下					覆土					栗石内										
				完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	完形		殻頂		破片	
番号	科名	貝種名	生息地	L	R	L	R	片	L	R	L	R	片	L	R	L	R	片	L	R	L	R	片	L	R	L	R	片	L	R	L	R	片	L	R	L	R	片	L	R	L	R	片	L	R	L	R	片	L	R	L	R	片	L	R	L	R	片	L	R	L	R	片	
				あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	あ	い	う	え	お	
1	フネガイ科	エガイ	Ⅰ-1-a																																1																									0	2	0	2	0	4
2		ベニエガイ	Ⅰ-2-a																																			1																						4	2	0	0	1	4
3		リュウキュウサルボウ	Ⅱ-2-c																																																									0	0	0	0	1	1
4	イガイ科	リュウキュウヒバリガイ																																																									1	2	0	2	3	4
5	ウグイスガイ科	ミドリアオリ	Ⅰ-1-a																																	1					2																		7	3	64	73	9	76
6		ウグイスガイ科不明																																																									0	0	0	1	0	1
7	マクガイ科	マクガイ科不明																																																									0	0	1	0	0	1
8	イタヤガイ科	イササヒヨク																																																									0	1	0	0	0	1
9	ウミギク科	メンガイの一種	Ⅰ-2-a																																																								0	0	1	0	0	1
10	イタボガキ科	カキの一種																																																									0	1	0	0	0	1
11	ツキガイ科	ウラキツキガイ	Ⅱ-2-c																1																				1																				5	8	2	3	2	11
12		ヒメツキガイ	Ⅰ-2-c																																1																								0	1	0	0	0	1
13	トマヤガイ科	クロフトマヤガイ	Ⅰ-2-a																																																								0	3	1	0	2	3
14	ザルガイ科	カワラガイ	Ⅱ-2-c																		1																																						0	0	1	0	0	1
15	シャコガイ科	ヒメシャコガイ	Ⅰ-2-a																																																								0	0	1	0	0	1
16		シャコガイ科不明																																										1																0	0	0	0	2	1
17	チドリマスオ科	イソハマグリ	Ⅰ-1-c						1	2					1															1				3	1		2																						27	32	4	9	4	41
18	フジノハナガイ科	ナミノコガイ																																																									2	3	0	1	0	4
19		リュウキュウナミノコ	Ⅰ-1-c																																																								2	1	0	0	0	2
20	シオサザナミ科	マスオガイ	Ⅱ-1-c																																																								1	0	0	2	0	2
21	シジミ科	シレナシジミ	Ⅲ-0-c																																																								0	0	0	0	1	1
22	マルスダレガイ科	ヌノメガイ	Ⅱ-2-c																													1							1																				0	0	1	0	3	1
23		アラスジケマンガイ	Ⅲ-1-c						7	7				2	2			1	7	9	1		2			1		1	110	99	12	21	7	12	12	7	2	3	2	2	1	3	4							1				3	4	1			440	441	140	165	177	606
24		ホソスジイナミガイ	Ⅱ-1-c		1					1																				1		1							1																				9	13	1	3	5	16
25		オイノカガミ	Ⅱ-1-c																																																								0	0	0	0	1	1
26		イオウハマグリ	Ⅱ-1-c																										1			1											1																2	5	0	1	1	6
27		リュウキュウアサリ																																																									0	0	0	0	1	1
28		スダレハマグリ	Ⅱ-1-c									1																						2	1																								3	6	1	1	1	7
29		ハマグリ																			1		1								1													1															9	9	10	11	11	20
30		オキシジミ	Ⅰ-c																																																								0	0	1	2	2	2
31		ハマグリの一種											1																									1																					0	0	1	4	28	4
32	二枚貝不明																																																										0	0	2	3	2	3
合計				0	1	0	0	0	8	10	0	1	1	2	3	0	0	1	8	9	3	0	3	0	0	1	0	1	111	101	14	23	7	17	16	8	4	6	4	2	3	3	6	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	3	4	1	0	0	512	533	232	283	257	829

注　完形と殻頂の右同士・左同士を足して、多い方を個体数とした。(破片でのみ出土した貝種については、最少個体数「1」と数えた)

第９節　動物遺存体

京の内土壙SK01（倉庫跡）より出土した動物遺存体の内容は、甲殻類・魚類・爬虫類・鳥類・哺乳類の５類が確認されている。以下に各類ごとに記す。

検出された動物遺体種名表

節足動物門　Phylum ARTHROPODA
　甲殻綱　Class Crustacea
　　十脚目　Order Decapoda
　　科・属不明　Fam.et gen.indet
脊椎動物門　Phylum VERTEBRATA
　硬骨魚綱　Class Osteichthyes
　　ウナギ目　Order Anguilliformes
　　　ウツボ科　Famiry Muraenidae
　　　　属・種不明　Gen.et sp.indet.
　スズキ目　Order Perciformes
　　ハタ科　Family Serranidae
　　　属・種不明　Gen.et sp.indet.
　　タイ科　Family Sparidae
　　　ヘダイ　*Sparus sarba*
　　　クロダイ　*Acanthopagrus schlegeli*
　　　属・種不明　Gen.et sp.indet.
　　フエフキダイ科　Family Lethrinidae
　　　ヨコシマクロダイ　*Monotaxis grandoculis*
　　　ハマフエフキ　*Lethrinus nebulosus*
　　ベラ科　Family Labrdae
　　　コブダイ　*Semicossyphus reticulatus*
　　　タキベラ　*Bodianus perditio*
　　　属・種不明　Gen.et sp.indet.
　　ブダイ科　Family Scaridae
　　　ナンヨウブダイ　*Scarus gibbus*
　　　属・種不明　Gen.et sp.indet.
爬虫綱　Class Reptilia
　カメ目　Order Testudines
　　ウミガメ科　Family Chelonidac
　　　属・種不明　Gen.et sp.indet.
　有鱗目（ヘビ亜目）　Order Ophidia
　　科・属不明　Fam.et gen.indet
鳥綱　Class Aves
　キジ目　Order Galliformes
　　キジ科　Family Phasianidae
　　　ニワトリ　*Gallus gallus var. domesticus*
　　　属・種不明　Gen.et sp.indet.
哺乳綱　Class Mammalia
　齧歯目　Order Rodentia
　　ネズミ科　Family Muridae
　　　属・種不明　Gen.et sp.indet.
海牛目　Order Sirennia
　ジュゴン科　Family Dugongidae
　　ジュゴン　*Dugong dugong*
奇蹄目　Order　Perissodactyla
　ウマ科　Family Equidae
　　ウマ　*Equus caballus*
偶蹄目　Order Artiodactyla
　イノシシ科　Family Suidae
　　ブタ　*Sus scrofa var. domesticus*
　ウシ科　Family Bovidae
　　ウシ　*Bos Taurus*

１．甲殻類（第75表）

カニの可動指・不動指・指の破片が出土しているがカニの種類と個体数については判然としないが、２・３個体が想定される。

２．魚類（第73表）

確認された魚類は第73表に示したように２目６科９種（ウツボ科の一種、ハタ類、ヘダイ、クロダイ、ヨコシマクロダイ、ハマフエフキ、コブダイ、タキベラ、ブダイ科）で、出土個体数が31個体が推定されている。

出土した個体数で最も多く出土しているのは、フエフキダイ科（ハマフエフキ、ヨコシマクロダイ）の15個体（全体の48.3％）であった。順次、ベラ科（コブダイ、タキベラ、ベラ科の一種）の５個体（16.1％）、ブダ

イ科（ナンヨウブダイ、ブダイ科の一種）４個体（12.9％）、ハタ科ハタ類の４個体（12.9％）などの順に少なくなる。魚類の中でもウナギ目ウツボ科の一種が１個体相当が出土しているのが注目された。

フエフキダイ科やベラ科が数量的に優位にあることから樋泉岳二氏の暫定分類「サンゴ礁海岸」（註１）のグループから集中的に捕食されたものとして考えられる。

３．爬虫類（第76表・第77表）

属・種不明のウミガメの肋骨板と属・種不明のヘビ脊椎骨が出土している。出土した部位からウミガメとヘビの推定個体数は各々１個体が考えられる。

ウミガメの資料から土壙SK01（SA19・20）観察用畦第２層より出土した肋骨板と石積みSA34栗石内から出土した肋骨板が接合できていることから両遺構は、陶磁器と同じように土壙SK01（SA19・20）の倉庫や石積みSA34がほぼ同時期に機能していたのではないかと考えられるようである。

４．鳥類（第78表・第79表）

キジ科のトリが出土しているが、個体数については判然としない。

５．哺乳類（第74表・第80表～第85表）

ネズミ科・属・種不明（推定２個体）、ジュゴン（推定１個体）、ウマ（推定１個体）、ブタ（推定３個体）、ウシ（推定１個体）の５種が確認されている。

これらの動物遺存体の中にはジュゴンが１点含まれている。このジュゴンが土壙SK01（倉庫跡）から出土していることから考えると、盛本 勲氏の論文（註２）に記された琉球王国時代は肉を国王へ献上されたものが納められたのかもしれない。

ジュゴンを含めた食用となった肉類を遠距離地域から搬出する際は壺などの容器に入れて塩漬けにする方法や肉類を乾燥させて乾物にして納める方法などが考えられるが、県内遺跡から塩漬けや乾物であった事を示すような物的資料の出土や報告はない。今後、動物遺存体からの理化学分析などから塩漬けや乾物などの保存用食料の痕跡を検証・確認されれば当時の食文化や流通も含めてより解明できるのではないかと考えられる。

註

註１．樋泉岳二「伊礼原遺跡から出土した脊椎動物遺体群」『伊礼原遺跡－伊礼原B遺跡ほか発掘調査－』北谷町文化財調査報告書　第26集　北谷町教育委員会 2007年３月。

註２．盛本 勲「ジュゴン骨に関する出土資料の集成（暫定）」『紀要 沖縄埋文研究 ２』沖縄県立埋蔵文化財センター2004年３月。

第73表　魚類出土量（1）

目・科・種名・部位 ＼ 出土地						SA19																SA20																	
						東側トレンチ		東側トレンチ覆土		東側トレンチ栗石		東側トレンチ栗石下		東側トレンチ栗石直下		第1層		第4層		一括遺物1層		一括遺物3層		一括遺物4層		一括遺物5層		北側覆土		第1層		第2層		第3層		第4層		第5層		一括遺物1層		一括遺物2層		南2層		畦2層		畦3層	
ウナギ目	ウツボ科	ウツボ科の一種	歯骨(左右不明)																																						
スズキ目	ハタ科	ハタ類	前上顎骨	R	L																																				
			歯骨	R	L																											2										
	タイ科	ヘダイ	前上顎骨	R	L																																				
		クロダイ	前上顎骨	R	L																																				
		タイ科の一種	主上顎骨	R	L																											1										
	フエフキダイ科	ヨコシマクロダイ	歯																																						
		ハマフエフキ	前上顎骨	R	L								2										1									7	2									
			歯骨	R	L		1																									1		1								
			主上顎骨	R	L																				1							2	1									
			口蓋	R	L			1													1			2						2				1	3		1						
			角骨	R	L				1													2	1	1										3	2								
			A 方骨	R	L																													1	2								
			B 方骨	R	L																																					
			舌顎	R	L											1							1							1	1			2	1								
			前鰓蓋骨	R	L																													1		1				1		1	
	ベラ科	コブダイ	前上顎骨	R	L																													1								
			歯骨	R	L																											1	1	2	1	1				1			
			上咽頭骨	R	L																														1								
			下咽頭骨																			1																				
		タキベラ	上咽頭骨	R	L																																				
			下咽頭骨																																						
		ベラ科の一種	主上顎骨	R	L																													1								
			歯																															1								
	ブダイ科	ナンヨウブダイ	上咽頭骨	R	L																																				
		ブダイ科の一種	前上顎骨	R	L								1																				1									
			歯骨	R	L											1				(1)															1						1		
			口蓋	R	L																														1								
			方骨	R	L																																					
科・種不明			鋤骨																															1								
			角骨	R	L																													1	1								
			背鰭棘(第1or2)			1																2										6		6								5
			臀鰭血管間棘																			1										1										
			脊椎骨			2			1			6					1				9	3	1	1	1	4	117		9			1		5							
			尾椎							1										1					1	3			1											
合　計						4		2		1		4		6		2		1		2	21	5	1	1	5	5	170		21		1		1		7		1		1		5	

注（）:破片

第73表　魚類出土量（2）

目・科・種名・部位 ＼ 出土地					SA20	SA19・20											SA28	SA28	SK01	SK01 -A	SK01 -B	SK01 -C	合　計		個体数
					畦4層	畦		畦覆土		畦床面		畦床面清掃		第1層		第2層		第3層		第4層		畦2層		畦3層		畦4層		トレンチ第2層灰黄色土層（覆土直下）	第3層	一括遺物1層	下層（第5層）	黒褐色土層（第1層）	淡褐色土層（上層）			
ウナギ目	ウツボ科	ウツボ科の一種	歯骨(左右不明)									1																					1		1
スズキ目	ハタ科	ハタ類	前上顎骨	R																					1									0	1	4
			歯骨	R																						1				1				4	0	
	タイ科	ヘダイ	前上顎骨	R																					1									0	1	1
		クロダイ	前上顎骨	R																			1											0	1	1
		タイ科の一種	主上顎骨	R																														1	0	―
	フエフキダイ科	ヨコシマクロダイ	歯														1																	1		1
		ハマフエフキ	前上顎骨	R		1								1						2	1	1	1	1	2	1	1						1		1		14	12	14
			歯骨	R		1	1				1													3		3	1	1							10	4	
			主上顎骨	R																1	2	1		1	2	1	5						1		8	10	
			口蓋	R			1						1							1	1		1			1	1								6	12	
			角骨	R												1				2	1					1									10	5	
			A 方骨	R																1	1														2	3	
			B 方骨	R												1															1				1	1	
			舌顎	R																	3				1			1							4	8	
			前鰓蓋骨	R														1																	3	2	
	ベラ科	コブダイ	前上顎骨	R																				1	1										2	1	3
			歯骨	R																			1												3	3	
			上咽頭骨	R																															1	0	
			下咽頭骨																					1		1									3		
		タキベラ	上咽頭骨	R																	1					1									0	2	2
			下咽頭骨																					1											1		
		ベラ科の一種	主上顎骨	R																						1									1	1	―
			歯																											1				2		
	ブダイ科	ナンヨウブダイ	上咽頭骨	R																			1								1				0	2	4
		ブダイ科の一種	前上顎骨	R			1															1													1	3	
			歯骨	R						1						1								1				1							4	4	
			口蓋	R																					2										0	3	
			方骨	R						1	1																								1	1	
科・種不明			鋤骨																															1		―
			角骨	R																				1											1	2	
			背鰭棘(第1or2)										7						1		2		4							1				35		
			臀鰭血管間棘																1		1									1				5		
			脊椎骨		2			9				9					2	8	30		100		52							13	4	1	391		
			尾椎					1							1						1		1							1				12		
合　計					2	5		10		4		11		8		4		4	25		38		121		81		1	1	1	20	6	2	611		31

第74表　ブタ出土量

出土地 / 部位		SA19															SA20									SA19・20																											SK01－B			SK01－C			SA19			SA34						合計		
		東側トレンチ覆土			東側トレンチ栗石下			裏栗石一括			一括遺物3層			一括遺物4層			一括遺物2層			第3層			第4層			畦			畦覆土			畦床面			畦2層			畦3層			畦4層			畦5層			第4層			一括遺物5層			黒褐色土層（第1層）			淡褐色土層（上層）			一括遺物2層+3層			客土			栗石					
部位		右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明
頭骨	頭頂骨								1																																																											0	1	0
下顎骨	下顎骨																																																									1									1	0	0
	関節突起										1																											1																														2	0	0
椎体	仙骨												1																																																						0	0	1
肋骨	近位～					1																																																														0	1	0
	破片						2															2																																								1				0	0	5
肩甲骨	近位部																																					1																														1	0	0
	骨体																						{1}																																													1	0	0
	遠位端																																					1																														1	0	0
	破片																																						1																													0	1	0
上腕骨	近位骨端のみ																																								1																											1	0	0
	遠位骨端のみ																																												(1)																							0	1	0
橈骨	近位端～骨体																																											1																								1	0	0
	遠位端																																								1																											1	0	0
尺骨	近位骨端のみ																																								1																											1	0	0
	近位骨端はずれ																														1																																					1	0	0
	遠位骨端のみ																															1																																				0	1	0
手根骨	尺側																																									1																										0	1	0
中手骨	Ⅱ																		1												1																									1												3	0	0
	Ⅲ		1																																																																	0	1	0
	Ⅴ																												1																																							0	1	0
脛骨	近位部																		1																																																	1	0	0
	遠位骨端はずれ												〈1〉																																																							0	0	1
	破片																									1																																										0	1	0
腓骨	近位骨端はずれ																																						1																													0	1	0
	骨体																																		1				1																													0	1	1
	遠位骨端はずれ																																						1																													0	1	0
踵骨																																																		1																	0	1	0
距骨												1																																																								0	1	0
足根骨	中心											1												1															1																													0	3	0
	第4																				1			1																																												0	2	0
中手・中足骨																						2																																3			1											0	0	6
中足骨	Ⅲ																																															2																				0	2	0
	Ⅳ										1																																																									1	0	0
	Ⅴ																												1																																							0	1	0
基節骨		1				2															2																				1	2																										2	6	0
中節骨																					1																		1			2												1														1	4	0
末節骨																	1			1	1						1														2													1												1			6	2	0
合計		1	1	0	0	3	2	0	1	0	2	2	2	0	0	0	1	0	0	3	5	4	1	2	0	0	2	0	0	2	0	2	1	0	0	1	0	3	5	1	6	5	0	1	1	0	0	2	0	0	1	0	2	0	3	1	0	1	1	0	0	0	0	1	1	0	0	25	34	14

注 {}:幼、〈〉:半欠、():破片

第75表　カニ出土一覧

部位	右/左	出土地	個数
可動指	右	SA19・20 畦覆土	1
		SA20　第4層	1
	左	SA19・20　畦3層	1
		SA19・20　畦4層	1
		SA20　第3層	1
不動指	左	SA19・20　畦3層	1
		SA19・20　畦	1
		SA20　第3層	1
指破片	不明	SA19・20　畦覆土	1
		SA20 第3層	2

第76表　ウミガメ出土一覧

部位	出土地	個数
肋骨板	SA19・20　畦2層	2
	SA19・20　畦2層 +SA34 栗石内	1
	SA34 栗石内	3

注　+:接合の意

第77表　ヘビ出土一覧

部位	出土地	個数
脊椎骨	SK01-B 黒褐色土層(第1層)	1

第78表　トリ出土一覧

部位	出土地	個数
破片	SA19 東側トレンチ栗石下	1
	SA19・20　畦3層	1
	SA20　第3層	1
	SK01－C 淡褐色土層(上層)	1
	SK01－A 下層(第5層)	1

第79表　ニワトリ出土一覧

部位	右/左	残存部位	出土地	個数
烏口骨	左	完存	SK01内　第3層	1
		完存	SA20　第3層	1
	右	近位端	SA19・20　第1層	1
肩甲骨	左	遠位端	SA20　第1層	2
尺骨	左	近位端～骨体	SA20　第2層	1
大腿骨	右	近位部～骨体	SA19・20　畦3層	1
脛骨	左	遠位端	SA33　栗石	1

第80表　ネズミ出土一覧

部位	右/左	出土地	個数
上腕骨	右	SA19・20　畦4層	1
	左		1
寛骨	左	SA19・20　畦4層	1
大腿骨	右	SA20　第3層	1
	左	SA19・20　畦4層	1
	左	SA20　第4層	1
脛骨	右	SA19・20　畦4層	1

第81表　ジュゴン出土一覧

部位	出土地	個数
肋骨	SA19・20　一括遺物1層	1

第82表　ウマ出土一覧

部位	右/左	残存部位	出土地	個数
肋骨	破片		SA19・20　第1層(焼土)	1
			SK01-A 下層(第5層)	1
手根骨	右	第2	SA20　第3層	1
距骨	右	完存	SA20　第3層	1
膝蓋骨	左		SK01-A 下層(第5層)	1
種子骨			SA19・20　畦3層	1

第83表　ブタ歯出土一覧

部位	右/左	残存部位	出土地	個数
上顎骨	右	I^1	SA20　第3層	1
	左	I^1	SK01－C 淡褐色土層(上層)	1
		I^1	SA20　第4層	1
		犬歯♀	SK01-A 下層(第5層)	1
下顎骨	右	M_3	SA19　一括遺物2層+3層	1
			SA20　第3層	1

注　+:接合の意

第84表　ウシ出土量

部位＼出土地		SA19						SA19・20									SA20			SK01-A									SK01-C			SK01			SA34			合計		
		一括遺物3層			一括遺物5層			畦1層			畦2層			畦4層			南2層			上層(2層)			中層(4層)			下層(5層)			淡褐色土層(上層)			東側第5層			栗石内					
		右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明
頭骨	角突起												(2)																									0	0	2
上顎骨	破片									1																												0	0	1
肋骨	第一							1																														1	0	0
	破片												2			1			1			2			1			1										0	0	8
肩甲骨	骨体																①																					1	0	0
尺骨	骨体																1																					1	0	0
寛骨	坐骨部																													①						①		0	2	0
脛骨	遠位部																	①																				0	1	0
基節骨					1																																	1	0	0
中節骨		1																															1						2	0	0
合　計		1	0	0	1	0	0	1	0	1	0	0	4	0	0	1	2	1	1	0	0	2	0	0	1	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	1	0	6	3	11

注　○:キズあり、( ):破片

第85表　ウシ歯出土一覧

部位	右/左	残存部位	出土地	個数
上顎骨	右	M3	SA19・20 畦3層	〈1〉
下顎骨	右	M2	SA20 南2層	1
上下不明	不明	歯 破片	SK01-B 黒褐色土層(第1層)	1

注　〈 〉:半欠

第Ⅵ章　調査の成果

1．はじめに

首里城の別称（聖名）として「首里杜ぐすく」或いは「真玉森ぐすく」とも称しているがこの「森」の意味合いを神道の面から考えた場合、菅田正昭氏によると森は神々が降臨するところが、森（杜：和製漢字で同義語）であり、森と神社とは密接な関係にある（註１）と述べている。

この神道における森と神社との密接な関係と類似するかのように首里城内の「森」と位置付けられるものが「首里森ぐすく（真玉森ぐすく）」であり、神々が降臨する「首里（真玉）」の森があった。即ち首里城内の最も神聖な「森」が首里森（真玉森）であり、聖域であった「京の内」一帯の森であったと解釈ができる。仮にこの解釈から神社を御嶽に置き換えて、平易に考えると「神社」に相当する御嶽が「首里森御嶽」・「真玉森御嶽」、そして「京の内之三御嶽」となる。更に多くの神々が降臨する首里森（真玉森）がある「京の内」の森には、多くの神社（御嶽）があったと解釈することができる。このように考えると神道における「森」と「神社」の概念と沖縄の「森」と「御嶽」の概念において、神道との共通要素が見い出せるのかも知れない。

2．祭祀遺跡の定義と京の内出土品の取扱について

祭祀遺物の概念的な定義として、寺村光晴氏は「厳密な意味からすれば、神霊奉祀の跡を示す場所、すなわち祭祀の遺跡において検出され、祭祀に使用されたことが証される器物であるならば、すべてそれらを祭祀遺物ということができる。したがって、祭祀遺物は時代により、遺跡により決して一様のものではなく、またその内容も一定していない。たとえば福岡県沖ノ島遺跡出土の遺物にみられるように、古墳副葬品に優るとも劣らないようなものがあり、しかも、実用的遺物であっても、それが祭祀に使用されたものであるかぎり、これらは祭祀遺物として取り扱わなければならない。」（註２）とあり、首里城京の内跡土壙SK01（倉庫跡）から出土した陶磁器類1,162個体および金属製品・ガラス玉の一括資料は、京の内で神を迎えて歴代琉球国王の即位決定を初め、国王への託宣、王国の重要な祭祀や儀式で使用されたと考えれば祭祀遺物として取り扱っても問題はないものと思慮されるところであるが、それ以外に金武正紀氏は中国皇帝の使者であった冊封使（註３）が、来琉し新しく琉球王国となった新王への冊封をおこなった際に宴用の器や城内での諸宴用として同器種大量出土陶磁器を使用されたとする（註４）。実際、1456年に尚泰久の冊封のために中国明王朝の皇帝の使者として冊封正使李秉彝（りへいい）や副使劉倹（りゅうけん）らの一行が来琉している（註５）ので、国王招待の宴が冊封使一行の来琉から帰国まで滞在期間中に複数回執り行われ可能性があり、その期間中に開催された宴に京の内の倉庫に納められていた陶磁器の中から優品（元青花八宝文大合子、青花龍文高足杯、紅釉水注、青磁酒会壺、青磁盤など）を中心に選択し使用したものとして考えられる。以上のような事実関係も踏まえて整理をすると、京の内倉庫跡出土の陶磁器類の取扱については、狭義は京の内で行われた琉球王国の重要な祭祀・儀式用の専用器物としての利用である。広義が狭義も含め、琉球国王が主催・招宴した冊封使の一行を歓待の宴や首里城内での諸宴用としての利用である。京の内倉庫跡出土の陶磁器類の取り扱いの基本は狭義であり、広義の範囲まで利用しても問題はないものと思慮される。

3．遺構

１）土壙SK01（SA19・20、SA28）、石積みSA33・34について

石積みSA19・20、SA28の遺構検出途中で陶磁器類を多量に含む包含層が検出された為、石積みSA19・20と平行させながら石積みSA28に擦り付けるような形で中央付近に観察用の畦を設定したが、石積みSA28部分では観察用畦の客土が薄く、陶磁器類の検出直後から崩れてきたため、第16図のような歪な畦となった。

観察用の畦が崩れた要因は石積みSA19・20、石積みSA28（後に土壙SK01と改名し、遺構の性格が明らかとなったことにより、以下、「倉庫」と表記）が、1459年の失火により焼失した倉庫（遺構）内にあった多量の陶磁器類を一括廃棄された、その厚みは60cmを有した土砂を一切含まない遺物包含層が形成された。火災で崩れ落ちた倉庫跡を火事場の清掃や整地目的で土砂や客土で覆い被せた程度のものであった。特に南側の階段部分

（石積みSA28）から廃棄された陶磁器類の一部がはみ出した。倉庫跡からはみ出した陶磁器類を処理する目的で、近くにあった石積みSA33・34に陶磁器類を移動し廃棄したものと考えられる。その為、階段部分の客土の堆積が薄くなったものと判断された。実際に階段部分の陶磁器類検出の際に客土は、非常に薄く観察用の畦もこの階段部分から畦が崩れた。前記したように土壙SK01（SA19・20、SA28）は、最終的に倉庫跡となったが本来の倉庫の規模については不明である。発掘によって検出された倉庫は、倉庫の南西隅のみが確認された。倉庫に出入りする階段が南西隅に設置され、その階段が3・4段残っていた。また、倉庫の西壁及び階段部分の小振りの切石は、火災によって火熱を受けて脆くなり、切石の一部は赤く変色した部分や黒く煤けた部分もみられた。倉庫跡の下部構造は小振りの切石を利用した壁や階段を構築しているが、上部構造については後代の造成土や削平により不明である。次に火災で焼失された倉庫跡より火事場の清掃などにより倉庫跡から陶磁器類が移動・廃棄された石積みSA33・34は琉球石灰岩の窪みを利用しながら岩盤の一部を削平して平坦面（床面）を確保してから平坦面や琉球石灰岩の岩盤を利用しながら粗加工の野面石で石積みを施しているようである。石積みはSA33を積み上げた後に石積みSA33と石積みSA34が直交するような形で擦り付けている。石積みSA33・SA34の交差する部分の石積みの外面や根石が乗った岩盤の一部が廃棄された際の陶磁器類に付着した灰や煤などが雨などによって石積みや岩盤に付着・浸透して変色したのではないかと考えられる。石積みSA33・SA34が、構築された時期は、京の内倉庫跡から移動・廃棄された陶磁器類などから15世紀前半から倉庫火災前の1459年以前が考えられる。石積みの機能としては、現段階では京の内空間を区画する区画石積みが考えられる。

4．主要遺物

A．陶磁器

平成10（1998）年に京の内倉庫跡から出土した陶磁器類については、既に報告（註6）したが、平成元（1989）年度に発掘調査が実施された下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡（調査面積5,240㎡）の発掘調査報告書が平成13（2001）年に刊行（註7）された。この平成元年度に実施された発掘調査範囲は京の内地区までおよんでいた。その状況を示す痕跡が倉庫跡の北側部分の損壊（第16図）からも窺える。また、倉庫跡の北壁にも調査終了後に敷き積めた白砂層が認められた事から京の内と隣接する下之御庭跡ほかの地域から京の内倉庫跡から出土した陶磁器類との接合ができる可能性もあるのではないかと想定していたが、刊行された下之御庭跡ほか報告書の中から明らかに京の内倉庫跡から出土した元青花龍文高足杯の破片や元青花八宝文大合子の破片、明青花松梅樹文双耳瓶の破片などが掲載されていることが判明した事から文化庁美術学芸課の担当官との調整や指導を踏まえて下之御庭跡と京の内倉庫跡、そして石積みSA33・34の陶磁器類の中でも大型品や優品などを中心に接合を試みた。中・小型の陶磁器類については時間の制約などもあって実施しなかった。その結果、青磁小型壺（第39図1a～1c）、青磁大鉢（第39図2a～2c）、青磁瓶（第40図3a～3c）、元青花龍文高足杯（第40図4a～4c）、元青花八宝文大合子（第41図5a～5c：第47図1の大合子中蓋の口縁形態は指定された重要文化財の中蓋と口縁の厚みなどが異なっている事から別個体と判断）、明青花松梅樹文双耳瓶（第42図6a～6c）、中国金朝の口禿白磁杯（第43図7a～7c）、中国景徳鎮窯の褐釉磁器碗（第43図8a～8c）、ベトナム青花鳥型水注（第43図9a～9c）、ベトナム青花瓶（第44図10a・10b：別個体と判明）、紅釉水注（第45図11a・11b：別個体と判明）、青磁唐草文大壺（第44図1a～1c）、の12点が接合並びに個体の識別ができた。接合及び検討の結果、元青花龍文高足杯1個体、元青花八宝文大合子2個体、明青花松梅樹文双耳瓶2個体、ベトナム青花瓶2個体、紅釉水注2個体、青磁小型壺1個体、青磁大鉢1個体、青磁瓶1個体、口禿白磁杯1個体、褐釉磁器碗1個体、ベトナム青花鳥型水注1個体、青磁唐草文大壺1個体が推定された。

B．土壙SK01（倉庫跡）出土の金属製品

土壙SK01より出土した金属製品で特に注目された資料として兜鉢の立物、長柄付の銚子、鈴について以下に取り上げてみることにする。

（1）祓立台の立物に取り付けられた「瑞雲日月星文」の解釈について

今回、県内で初めて確認された兜鉢に取り付けられた三鍬形台の中央の祓立台に差し込まれる立物の飾り金具

の文様意匠において、管見の限りにおいて類例がないタイプと判断され、中世日本の立物の影響を受けながら琉球独自に立物の意匠を考案し、製作されたものと理解された。

これまで祓立台に差し込まれる立物の飾り金具の形状を窺うことのできた資料は、首里城跡の南殿跡・北殿跡の発掘調査で出土している。南殿跡では、「鎧金具」として報告（註８）されていて、第94図１に立物の「三日月」・「日輪（太陽）」の破片１点、同図２が立物の中央から左右に延びる小さな鍬形を上下に配置し、小さな鍬形の間に「星」を左右に二個施したものが１点出土している。両資料とも金箔を施していたことが確認されている。また、第94図３の北殿跡から出土した資料は、「透し有板状飾り金具」（本来は金箔の加飾が想像できる）として報告されている。同資料は立物の中央から先端部分が出土していて先端に「瑞雲」、その下に「日輪（太陽）」、「日輪（太陽）」の左右に「星」を配置し、「三日月」が省略されているところが、京の内跡出土資料や南殿跡出土資料とは異なっている。これらの立物については具体的に整理し、以下に記す。

京の内倉庫跡から出土した三鍬形台の形状、立物の鍬形の形状、祓立台の立物の飾り金具の文様などの特徴を列記すると、

① 鍬形台と祓立台が一体化したものを三鍬形台とし、直接兜鉢の眉庇に鍬形台を鋲などで固定する（第94図４）。

② 立物左右の鍬形は、先端の鍬形と同じ鍬形をデザイン化した二重鍬の形状となる（同図５・６）。

③ 三鍬形台中央の祓立台に取り付けられた立物の飾り金具のデザインは、最上段から漸次下へ説明を行うと、最上段（同図７）が「如意頭雲文」、次に同図８の「月（三日月）」、中央に大きな円（同図９）の「日（太陽）」と左右の小さな円（同図10・11）に「星」、最下段には小さな「鍬形」（同図12）の内側に左右対称の小さい「星」（同図13）で構成されている事から当時の琉球における信仰（オボツ・カグラ、ニライ・カナイなど）や神観念（テダ思想、太陽＝按司・王）などの政治的要素と宗教的要素が組み合わさって、抽象的なシンボルに置き換えて表現されているものと現段階で想定される。

これらの文様を立物中央のシンボルとなる主文から「瑞雲日月星文」と仮称したい。

③の祓立台に取り付けられた前立物の飾り金具の文様である「瑞雲日月星文」名称の根拠については、管見の限りで先学の研究論文等を基にして解釈を試みる。

記載の順序は、便宜的に①「雲」、②「日輪」、③「月」、④「星」、⑤「その他」と項目を設定し、齟齬がないように引用文をそのまま明記する。

最初に「雲」や「日輪」などに対する古琉球の観念について、比嘉 実氏の論文（註９）が参考となるので、比嘉論文より引用する。

①「雲」

最初に「雲」に関する古琉球の概念として『おもろさうし』（註10）の「522　きこへこはせりきよみやりほしやかふし（第十一十二）・・オモロ原文省略・・一　聞ゑ差傘が　よけ　よう　世直せ　世直さ　又　鳴響む差傘よ　又　今日の明けどまに　又　今日の明け立ちに　又　東方に見やれば　又　太陽の穴に　見やれば　又　紫の綾雲　又　紫の虹雲（横雲）　又　島中根　通り又　国中根　通り」大意：名高き差傘の神女が、今日の夜明けに東方を遙かに望むと紫色の綾雲、紫色の横雲がたなびき、村の中心を通り過ぎて行く（豊穣を象徴する瑞雲だ。さあ、世直しの祭祀にとり行わん、の意）を例示し、また、「雲」に関する民俗行事として、久米島在住の仲原善秀氏からの内容を次のように掲載している。「朝焼けの空にたなびく綾雲と見る観念は久米島にも存在した。元旦の早暁村を一望する丘に登って村の上にたなびく雲で村の一年の吉凶を占う民俗事例があったという。」更に比嘉氏は、次のような二首の琉歌を例示している。

（１）あがり立つ雲やよがほしによくゆり　やがて明け方の近くなゆさ

大意：東方の空にたなびく雲は豊年を準備する（豊穣を予徴し、やがて夜明けだ。以下、省略）。

（２）あがり立つ雲やよがほうしによくゆり 遊びしによくゆる二十めやらべ

大意：東方の空にたなびく雲は豊年を予徴し、二十ごろの娘達は、豊年踊りの準備をする。

以上のオモロや民俗行事、琉歌の内容から、「かつて琉球諸島に、早暁の東方の雲で吉凶を判断する習俗や観念があったことは間違いない。」と結論づけている。早暁の「雲」が豊穣をもたらす「瑞雲」、あるいは「吉祥雲」

とする概念が成立していたものと判断される。また、比嘉氏は「オモロにあらわれた紫雲に対する瑞雲観は中国の紫雲に対する考え方に近い。・・・紫雲に対する日本や琉球の観念はおそらく・・・中国思想の影響で形成されたものではないかと考えられる。・・・従って、琉球の日輪双鳳雲文には、オモロの紫雲観に見られる豊穣への期待と鳳凰文と同様に帝王の出現、英明な主君の出現を期待する古琉球の人々の心性が刻まれているのである。」と解釈を行っている。

参考までに『おもろさうし』の中で鳳凰について、比嘉氏は次のように記している「825 きゝみあくむかふし（第十三－八〇）　一　東方(あがろい)の大主(ぬし)　あけまもどろ見(み)れば　紅(へに)の鳥(とり)の舞(ま)ゆへ　見物(みもの)　又　太陽(てだ)が穴(あな)の大主(ぬし)」の「紅(へに)の鳥(とり)」の解釈ができなかった頃に外間守善氏が久高島の古謡調査で採録した「ビンヌスイヌティルル」の囃子で謡われていた「アキマムルル　ビンヌスイヌ　マイヌチュラサ」が神女の所有する「日輪双鳳雲文」に囃子の言葉の謎解きがあるとの言い伝えから「アキマムルル」「ビンヌスイ」がオモロ語の「あけまもどろ」と「へにのとり」に対応することを発見したことを紹介し、鳳凰と解釈されている。比嘉氏はオモロに掲載された鳳凰を「へにのとり」（紅の鳥）とし、「ふゑのとり」を「日(ふゑ)の鳥(とり)」の鶏(にわとり)ではなく、笛の鳥（簫のように鳳凰が鳴く中国的伝承）と解釈している。オモロ語の和語的用語法背景には中国的鳳凰観が色濃く反映しているものと解釈されている。

京の内出土の祓立台に取り付けられた飾り金具最上段の「如意頭雲文」について、岡登貞治氏は「如意」（註11）の文様説明で次のように記している「如意は説法・購読・法会の席で、講師の持つ威儀の僧具である。本来は思うように痒い所を掻くものであったが、いつ頃からか仏具とされ、・・・」また、「如意頭」（註11）の文様で「如意は中国では僧具とする・・・道教の隆盛に伴って霊芝や祥雲を象って頭とし、またそれが吉祥であることから頌祝の品とされるようになった。」とある。「雲文」（註11）の説明では「・・・常に浮動して千変万化の極みをつくす雲を中国では古くから文様化し、その形色、雲の生じる時刻などから吉凶を判断することまで行われた。・・・雲のけはいによって瑞祥を感ぜらるるものを瑞雲とし、・・・殊に仏教思想にからんで様々の形に表現された。」と記している。京の内出土の祓立台に取り付けられた飾り金具最上段の「如意頭雲文」は岡登氏の文様解説に挿図された「如意」や「如意頭」の文様と非常によく似ているため、仏教や道教由来の文様を採用したものとして解釈ができる。

②「日輪」

次にオモロに現れた「太陽(てだ)」の観念について、比嘉氏の論文（註９）によると以下のような解釈をおこなっている。比嘉氏によるとオモロでは、太陽を意味する言葉にテダ以外にテルカハ、テルシノが使用され、現代の沖縄方言はテダ系統であることを記している。オモロでは太陽以外の意味として、次のように比嘉氏は、記している「統一国家が成立する以前、沖縄各地に割拠していた地方豪族を讃仰したオモロに、豪族をさす言葉としてテダが使用されている。」例として「棚原のてた」、「宜野湾のてた」、「若てた」などを挙げている。群雄割拠の時期は、「テダ」は地方豪族を意味する表現から統一国家の成立により次第に王家が独占的に使用する。この時期が第二尚氏王朝の尚真王代（1465年～1526年）と位置付けている。具体的に比嘉氏は、第二尚氏王朝は国王を「てだが末按司添い〈太陽の末裔なる王〉」と称し、実在の最初の代表的支配者英祖の末裔であることを強調する。英祖以来の万世一系を強調することによって、支配者としての系譜、血の聖性を正当化する。と同時に、次のオモロのように太陽と国王をともにテダという言葉で表現して、両者の同一性、親近性を強調する思想をも確立していくのである。例として「212おちいちへしよりちよわちへからのふし（第五－一）・・オモロ原文省略・・一　首里の太陽と　天に照る太陽と　共におわしませ　又 御愛し太陽と　天に照る太陽と　天に照る太陽と　又 太陽一郎子と　天に照る太陽と　又 太陽八郎子と　天に照る太陽と」のオモロを挙げ結論として、次のように述べている「古琉球時代にあって、地方豪族は国王や日神を意味した。しかし、尚真期から太陽は王家とだけ結びつく傾向を一段と強めていく。」と記している。

③「月」

「月」に関しては、伊波普猷の記した『つきしろ考』（註12）の中で、「第一尚氏の発祥地佐敷の苗代へ行ってみると、三山統一の英主尚巴志が産湯を使ったという屋敷の跡があって、そこに「つきしろ」という石神が祀

ってある・・・「つきしろ」が「月代」の義で、御月ぎやなしのヨリマシであることはいうまでもない・・・古得声大君の神御名および佐敷の境内の馬天祝女の神名に、つきしろに対立するてだしろ（日代）があった・・・つきしろに月代即ち月神の憑依するものの義のあることは、もはや疑う余地がありません。・・・一の巻の五のオモロに・・・聞得声大君が武装して月代を奉じ、巫覡を先頭に立てて、進軍した意味が、おのずから釈然としてきます。・・・オモロ詩人が何故第一尚氏の軍神「つきしろ」をそこに入れて歌ったかということです。・・・『中山世鑑』の劈頭に出ている開闢の伝説・・・アマミキヨが創造した八嶽の中、五嶽までが第一尚氏の根拠地東四間切に・・・それから守護神君真物が現れて、烏富津加久羅の神（天神）・にらい・かないの神（当世の神）・君手摩（天神）・新懸（海神）・荒神（海神）・浦巡（天神）・与那原公事（陰陽を包んだ神）・月公事（天神）・かないの君真物（海神）がつぎつぎに現れたことを述べた。」と記している。その他、嘉手苅千鶴子氏は「月しろ」（註13）の意味を月の異名で、神名。神女名とし月を擬人化して〈月しろの大主〉と呼ぶ例があると記している。

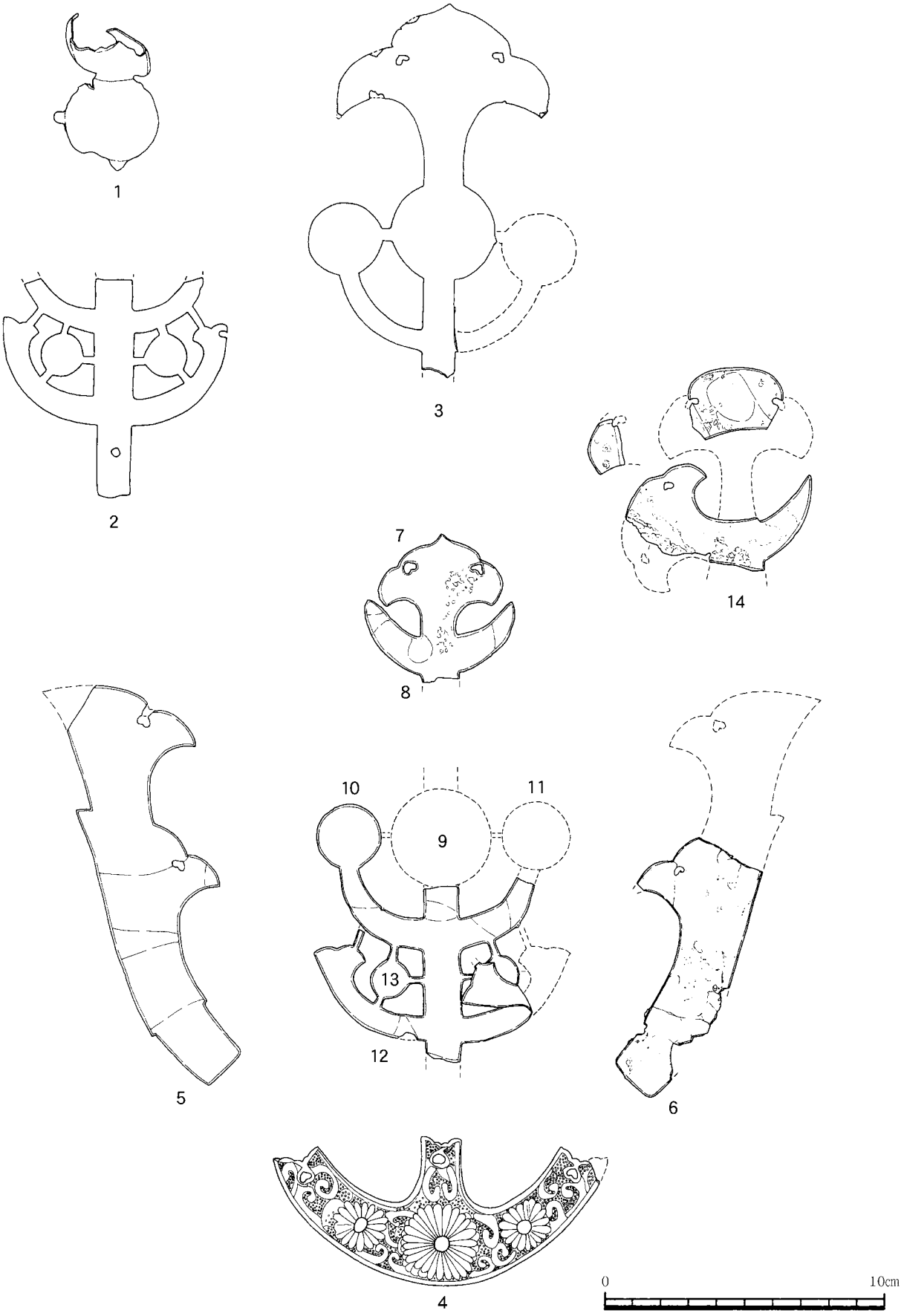
④「星」

過去においては、漁民が夜間の漁業や航海の際に、星の観察で位置や航路などで活用している。特に漁民の町と知られている糸満市字糸満での星の名称について『糸満の民俗』（註14）から引用すると、ニーヌワブシ（北極星）、クガニブシ（北斗七星）、タテーブシ（オリオン座の３ツ星）、ブリブシ（プレヤデス星図）、ユーアカーブシまたは、アガリヌウウブシ（明の明星）、ユーバンクェーブシまたは、イリーヌウウブシ（宵の明星）、ティンガーラ（天の川）、ユシアーブシ（サソリ座アンタレス）、イリガンブシ（彗星）、フシヌヤーウチー（流星）がある。この名称を参考にして、読谷村教育委員会・読谷村立歴史民俗資料館が報告した『沖縄の成女儀礼－沖縄本島針突調査報告書－』（註15）から南島にかつては流布していた女性（施術年齢８歳～30歳）の指や手の甲、そして手首に施されたハジチ（針突）にみられた「星」には、左右の手の甲の中央に大きく施された円形文様が「マルブシ（丸星）」、右手首に菱形を中心に左右に三角を上下に組み合わせた文様を「イチチブシ（五星）」、左手首に大きな円形の文様「マルブシ」を施している。その他、大きな円形の文様を「プシ（月）」、「ヒトツブシ（一つ星）」、「ツキ（月）」、「オツキサマ」、「トートーメー」、「チクメー」、「ティミヤー」、「テーナブシ」、「キシダマ」、「テーマー」、「マト（的）」など多くの呼称が記録されているが、前記した菱形を中心に左右に三角を上下に組み合わせた文様を「イチチブシ（五星）」以外の呼称として、「ブリブシ（群星）」、「イチチガタ」の二例しかないようである。ハジチの文様の中で天文の星座名と関係する呼称はないが、満天の星々を表現する「ブリブシ（群星）」の名称が存在する。その他、大きな丸形文様を「星」以外の呼称として「ツキ（月）」・「オツキサマ（お月様）」と表現していることが確認できる。

仲松弥秀氏は、『神と村』（註16）の中で・・神とは「人間に善をもたらすセジの顕現者」という観念に傾斜していくはずである。このようなセジの顕現者が部落（子孫）の守護神であり、また水の神、火の神、海の神などあって・・・次ぎは間接的に影響をおよぼすセジの顕現者も神々とするようになる。日神、月神などの天体神がそれで、遠洋に航海するようになると星の神、とくに子の端星（北極星）神が重んじられてくる。・・・神に祈願する場合には、一つの神にのみではなく、その神に各々の機能を持つ他の神々のアイチへ（協力）が得られれば、一層効果が挙がると思っていたようである。首里王府の神官（女）の正月祈願に「カワルメノイベ司」への祟べ言が「琉球国由来記」巻五に記されている。その祈言の中に次の語がある。「・・・天ヂ通シメシヤウチへ、御月、御日ノ御前、三星、七星御前ト、アイチへ成リメシヤウチへ・・・」と記している。これからすると神々の協力（アイチへ）は、「月」・「太陽」以外に「子の端星（北極星）」・「三星（オリオン座の三つ星）」・「七星（北斗七星）」などの星も神となり、信仰の対象となっていたことが窺える。

ところで、首里城京の内跡から出土した祓立台の立物飾り金具の「瑞雲日月星文」文様の丸形を「星」と解釈した理由は、ハジチ（針突）の丸形と同様の「星」文であることを早い時期（註17）から拙者が理解していたからである。

星文については、岡登貞治氏は次のように記している「・・太陽・月についで不思議であり驚異であり神秘であって、それがやがて信仰の対象となり、慰安雅遊の資ともされた。これを具象するにわが国では古来小さい円



第94図　立物　1・2.首里城跡南殿出土の立物（祓立台に入る中央の立物）、**3.首里城跡北殿出土の立物**（祓立台に入る中央の立物）、**4～14.首里城跡京の内跡SK01（倉庫跡）立物**
（4.三鍬形台、5・6鍬形、7～14.祓立台に入る中央の立物）

形を用いた。近代に至り五つの角のあるものを星形と称するが、これはいうまでもなく西洋の星表現である。」（註11）とある。

⑤「その他」

民俗学的及び文献史学などの見地から「太陽」と「月」などについて、研究者の報告例を挙げてみる。

最初に、村武精一氏の『神・共同体・豊穣』（註18）に収録されている「南部琉球における象徴的二元論」（註19）で、八重山諸島における重要な祭祀で米または粟などの穀物収穫の後におこなわれるプール（pu:ru）の祭りに姿を現す来訪神であるアカマタ・クロマタの小浜島及び新城島上地村落の祭祀から象徴的対置を以下のようなかたちで要約している。

〈アカマタ〉	〈クロマタ〉
赤	黒
男神	女神
父と子	母と娘
東	西
太陽	月
長槍	二股の槍

次に村武氏は、「琉球村落の社会的・象徴的秩序―親族・村落・偉人―」（註20）で糸満市字真栄里と字名城の村落の社会的・象徴的秩序の調査から以下のような象徴的二元論を展開し整理をおこなっている。

糸満市字真栄里の綱曳き事例

〈西　組〉	〈東　組〉
西の草分け宗家	東の草分け宗家
西（または南）	東（または北）
左	右
女性（雌綱と雌獅子）	男性（雄綱と雄獅子）
海	山
この世	あの世
社会的首長（または王）	弥勒神
旧王家の紋章	竜
儀礼的・霊的劣位	儀礼的・霊的優位

字名城の場合は、村落の七つの父系出自集団（七バラ）の中で、大殿内：国元、神差：嶽元、海勢頭：海元の三つの基本宗家と出自集団において展開された村落祭祀などの調査から以下のように整理をおこなっている。

〈海元〉	〈嶽元〉
海（水）の草分け宗家	山（陸）の草分け宗家
西または南	東または北
左	右
来訪神	滞在神（男系始祖をふくむ）
よそもの（異人）	地のもの（身内）
女性	男性
海の幸	山の幸
生もの	料理されたもの

次ぎに真栄平房敬氏の著書である『首里城物語』（註21）に以下のように記載がみえる。

章立て国王の章には「そのあと王は女官大勢頭部を従えて正殿大庫理に行き、御日（ウフィヌウメー）の御前、御火鉢（ウフィファチ）の御前（ウメー）と称する固有信仰の神に参拝した。」とあり、首里城正殿の二階が大庫理と称され、東南隅の「おせんみこちゃ」（註22）と称された部屋で、御日（ウフィヌウメー）の御前（日神）、御火鉢（ウフィファチ）の御前（ウメー）（火の神）に国王親族の繁栄や国家の安穏などを祈

願したようである。また、天地御祭の章では「夏至、冬至の日に首里城内で天地を祭る国王の親祭があり、この祭りは、中国皇帝が天壇で天を祭り豊作をいのることに倣ったものと思われ、天地御祭と称された。・・・『聞得大君御殿并御城規式次第』の八月十五日の条に「天地の御祭」と出ているが、それは中秋の名月の夜の御月御祭（俗称ウマチチウマチ）のことで、内容、形式ともに夏至、冬至の日に行われる天地御祭とは異なるものであった。夏至、冬至の日の天地御祭が首里城のどこで行われたかは不明である。・・・天地御祭を守りつづけた。そして1940年（昭和15）前後は尚泰王の末子尚時が名代となり、沖縄戦の前年まで継承していた。この祭りは限られた世界の中での国王親祭であるため、昭和期になっても名代以外の男性は参加せず、女性は聞得大君・・・明治末期に、聞得大君御殿の祭神を中城御殿に遷座した際、二階の南側の別室を天地を祭る聖所として、「天地の御側（ティンチヌウスバ）」とよんだ。・・・天地の神に祈る場所であるとされている。それで拝む対象物も祭壇もない。ただ天空だけが拝される窓辺に黄塗りの台がすえられ、その上に天に向けて香炉一つが置かれているだけであったという。・・・板書の祈願文は・・・「天地の御神々の御慈悲、御元祖の御功徳により・・・国中諸離れに至るまで、陰陽五行おそなわり賜り、毛作（ムジュクイ。諸作物）の世果豊（ユガフウ）、諸船の嘉利吉（カリユシ）、これひとへに御神徳の至りと仰ぎ奉り候。・・・『球陽』の尚穆王十八年（1769）六月の「特に中秋の拝月を定む」の条に、「往昔は毎年八月十五日夜、禁中の後庭に於て月を拝す。此の礼廃れて既に久し、今年より後拝月の礼を行ふ」とあるのが、それにあたるとあり、国王をはじめ聞得大君を頂点とする最高神女を中心にして、琉球固有の信仰、そして中国の影響などを受けながら日神、月神、などの天地の神々や火の神、水の神などの万物の神々、ニライ・カナイの神々に対して祭祀が執り行われたことが読み取れるところである。

以上のような状況を踏まえて立物の「瑞雲日月文」文様についての解釈を大雑把であるが、文様に関する意味合いや宗教的概念など整理すると第86表のような形となる。

首里城京の内倉庫跡出土の「瑞雲日月星文」文様は、琉球古来の信仰や宗教的思想などを基本にして第一尚氏王統期（1406年～1469年）にデザイン化して、これを採用・製作したものとして考えられる。

同様に今後、各地のグスクから領主であった按司達が琉球古来の信仰や宗教的思想（地方豪族であった按司をテダと称して、讃えていた。地方の支配者＝太陽崇拝と重ねた：テダ思想。）などをモデルに兜鉢の立物中央祓立台などのデザインに按司を意味する「日輪（太陽）」、神女を象徴とする「月」文、星を信仰の対象とした「星」文、吉祥文の「瑞雲」などの文様を採用した立物や、その一部が出土してくる可能性は高いものとみられる。

或いは、既にグスクや周辺遺跡から出土していたものが、その解釈がつかなかったことから単に「円形文」・「丸文」・「三日月」などの文様を施された資料として処理された可能性もあるのではないかと考えられる。例として具志川グスクから出土した立物の破片は「円形」文として紹介されている（註23）。立物の破片資料も地域の支配者であった按司達の存在や琉球古来の思想などを知る上で、非常に重要な資料であることから今後、留意すべきものと判断されるところである。

なお、左右の鍬形の上寄りに先端の鍬形と同じ鍬形をデザイン化して二重鍬の形状となる点と祓立台に取り付けられた立物の飾り金具の中にある最下段には小さな「鍬形」の意味合いについては、判然としないが「鍬」の重ねるという意味と祓立台に取り付けられた前立物の飾り金具の中にある最下段には小さな「鍬形」鍬による耕

第86表　祓立台立物飾り「瑞雲日月星文」文様の宗教及び思想的背景とその影響

文様名称	宗教及び思想的背景とその影響
瑞雲	ニライ・カナイの固有信仰や思想などから吉祥をもたらす雲として、仏教の「如意」を採用し、デザイン化。
日（日輪）	日神（太陽）。テダ思想。地方豪族の意味表現から統一国家の成立により国王を意味。男神。日輪を大きな円で表現。
月	月神（月）。「月しろ」は月の異名で神名。神女名とし月を擬人化して〈月しろの大主〉。女神。月を三日月（日輪や星と区別するため）で表現。
星	「子の端（ねは）星（北極星）」・「三星（オリオン座の三つ星）」・「七星（北斗七星）」などの星も信仰の対象。 星を小さな円で表現。

作をデザインとして採用されたとも考えられるが、植物の新芽と解釈するのであれば農耕との兼ね合いで作物豊穣（世果豊）を祈願しているものとも考えられる。

京の内倉庫跡から出土した祓立台に取り付けられた立物の文様パターンを先端部から中央部分に限って、大雑把に整理すると以下のような意匠をもったタイプが存在する事となるが、前記した首里城北殿跡出土の立物（第94図３）を加えると以下のような四つのタイプが存在したようである。但し、Bタイプは「瑞雲」や「雲隠れの三日月」の部分のみの破片で、明確なものは、AとCタイプの二種類である。

立物京の内Aタイプ：立物の先端に「瑞雲」、「瑞雲」の下に「月（三日月）」、そして「月」の下に中心となる「日（日輪）」と「日（日輪）」の左右に「星」、更に左右の「星」下に同じく「星」を左右に配置して、意匠とするもの。（第94図７～12）。

立物京の内Bタイプ：立物の先端にある「瑞雲」の雲の先端が丸味を帯びた雲となるもので、此より下に「月（三日月）」と「瑞雲」を重ねた「雲隠れの三日月」を意匠とするもの（同図14）。

立物北殿跡Cタイプ：京の内Aタイプから「月（三日月）」を省略したもので、先端から「瑞雲」、「日（日輪）」、そして「日（日輪）」の左右に「星」を配置して意匠とするもの（同図３）。

立物北殿跡Cタイプは表土より出土しているため、変遷・編年的研究はできないが単純に文様の意匠を考えた場合、以下のようなことが今のところ考えられた。

①AタイプからCタイプへ移行すると仮定した場合にBタイプは、AタイプからCタイプへの意匠の変遷によって最終的に固定化する過程の中で、登場したタイプとして考えられる（時間軸による編年的考え方）。

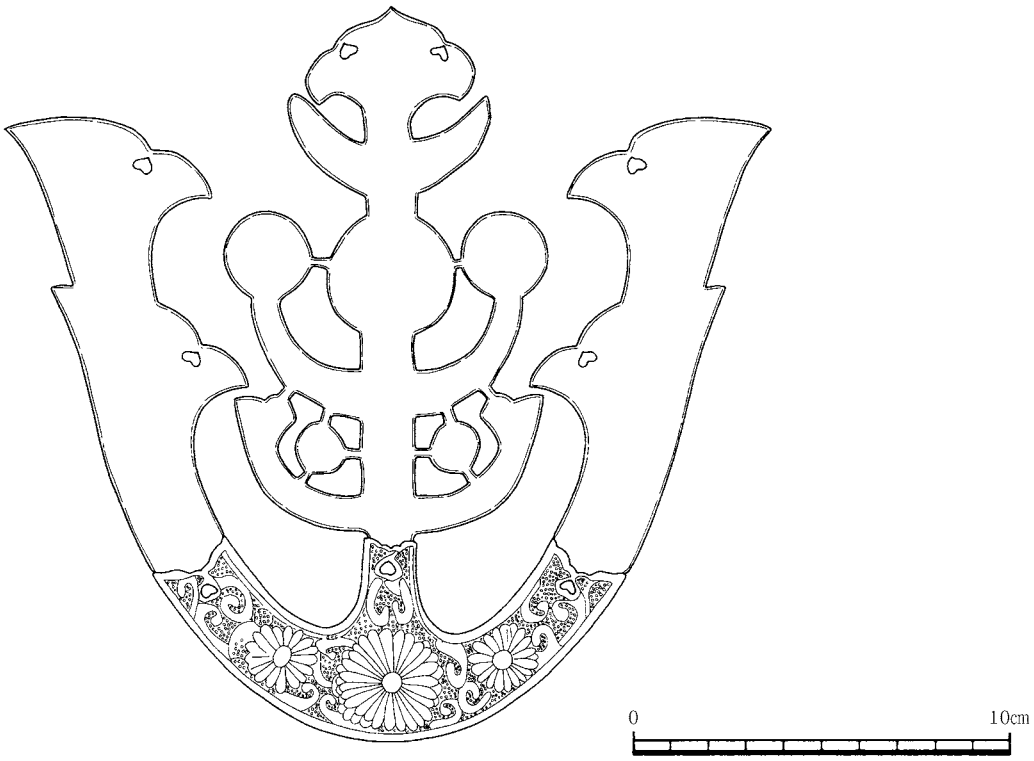
②これらのA～Cまでの三つのタイプが全てが基本的な意匠として成立したと仮定した場合は、普遍的に三つのタイプが意匠として、固定化されずに併存したと考える（時間軸を無視した併存的考え方）。

③立物北殿跡Cタイプの出土が表土層ではあるが、首里城正殿と共に1426年に消失した倉庫跡であったと仮定した場合、後世の火事場清掃やその後の正殿火災及び、沖縄戦によって本来の遺物包含層が攪乱され表層まで遺物が動いたと考えるとCタイプが京の内Aタイプより先行する事となる。この場合は、立物の文様変遷がCタイプの簡素な文様構成となる。文様は先端から下位に向かって「瑞雲」、「日（日輪）」、そして「日（日輪）」の左右に「星」を配置するCタイプから京の内Aタイプの「月（三日月）」、京の内Bタイプの「変形の瑞雲」、「雲隠れの三日月」が文様に追加（加飾）されたものとして考えられる（文様変遷による考え方）。

最近になって立物京の内Aタイプとサイズも近似する資料が、首里城城郭西のアザナの調査（註24）から出土していることが判明した。上原 静氏の研究によると西のアザナ周辺で15世紀～16世紀に青銅製品の加工生産（砂岩製の羽口、金鋏、坩堝、鋳型）や鋳銭生産（枝銭、銭棹）があった事を示す資料などの他に鍍金された祓立台に取り付けられた立物の先端部分が報告（註25）されている。これによると西のアザナの立物は、「瑞雲」と「月（三日月）」の先端部分が残存する程度であるが、立物京の内Aタイプとサイズが近似することから同一の規格で製品化されたものと推定されることから首里城内で製作されたものと判断される。以上のような事から前段で記したように兜鉢に取り付けられた三鍬形台の中央の祓立台に差し込まれる立物の飾り金具の文様意匠においては、中世日本の影響を受けながら琉球独自の意匠でもって考案・製作されたものと理解される。

今回の報告で首里城内から出土した金銅製立物の残片は多く出土しているが、完全に立物の形状を把握し、復元するまでには至っていなかった。立物（第95図１）を明確に推定復元し、図示することができたのが大きな成果でもあった。

ところで、兜鉢の矧板（第21図参照）は鉄で製作されるのが基本のようであるが、鉄製の矧板以外に第28図15・16、第54図44・45・48の５点にみられるように鉄製矧板の上から青銅製の矧板を重ねて鋲で固定する二重構造の兜鉢が確認された事は、大きな成果である。鉄と青銅の矧板を組み合わせた二重構造の兜鉢は、今のところ琉球独特の技法である可能性が高いのではないかと考えられた。その他に矧板の表面が青銅製の矧板を使用したとなると鍍金がされた兜鉢の存在を窺わせたが、残念ながら上記、５点については鍍金は確認されなかった。兜鉢の鍍金は火災によって消失した可能性が高いようである。



1

第95図　1．推定復元の立物

（2）長柄付片口銚子について

第27図11・12は長柄付片口銚子（註26）の身部（胴部）および口縁部に取り付けられた把手であるが、長柄の柄部は検出されていない。発見当初は特殊な兜鉢と考えていたが、これらの資料を実見した京都国立博物館学芸課工芸室長の久保智康氏の同定結果を踏まえて長柄付の銚子と改めたものである。久保氏によると身部（胴部）に小枝状の貼り付けがなされている点などから琉球独特の長柄付片口銚子であるとの教示を頂いた。

当該資料も管見の限りにおいて、県内遺跡で初めての出土であり、長柄付片口銚子（以下、「柄杓」と標記。）として確認されたものである。柄杓の具体的な用途を『おもろさうし』（註10）から抜き出してみると九首程度謡われていて、その中から例として二首のオモロを以下に記す。

第六巻　「うちいでは大きみ御まへが節」

330「一 君加那志（きみがなし） 夏（なつ） 立（た）てば 命神（ゑのちかみ） このみしよわちへ 又 我（わ）が大里（うふざと） 夏 立てば 又 玉御柄杓（たまみしゃく） 又 玉御（たまみ）ねぶ」

（大意：君加那志神女が、お祈りします。我が大里も、夏になると、神の恵みを受けて栄えるであろう。美しい立派な柄杓を神に捧げて、お祈りをしよう。）

第十六巻「あおりやへが節」

1134「一 勝連（かつれん）の阿麻和利（あまわり） 玉御柄杓（たまみしゃく） 有（あ）りよな 京（きや） 鎌倉（かまくら） 此（こ）れど 言（い）ちへ 鳴響（とよ）ま 又 肝高（きむたか）の阿麻和利（あまわり） 又 島知（しまぢ）りの御袖（みそで）の按司（あんじ） 又 国知（くにし）りの御袖按司（みそあんじ） 又 首里（しゅり） おわる てだこす 玉御柄杓（たまみしゃく） 有（あ）りよわれ」

{大意：勝連の阿麻和利、肝高の阿麻和利は、神酒を注ぐ玉御柄杓を持っているよ。大和の京、鎌倉にまで、これをぞいい囃して鳴り轟かそう。島を、国を支配し治める高貴な按司様、首里にまします国王様こそ、神酒を注ぐ玉御柄杓を持ち給うのだ。（阿麻和利を首里の国王と並べて讃えたおもろ）}

以上のようなオモロから柄杓は、単なる水汲みや酒を入れる道具ではなく、それ以外の宗教的な意味をもった

特殊な霊力、或いは不可視の霊力を象徴するものとして信じられていたようである。琉球において柄杓は、特殊な霊力を持つと同時に、各地の按司が柄杓を保持・所有することは一種のステータス・シンボル（権力者の象徴）でもあったようである。

その他、本土の中世においては酒以外に薬湯を煎じる際に使用した例や金属以外に朱漆製（木製）の柄杓も登場するようである（註26)。

今後、この種の柄杓が県内のグスクから発見されるとすれば神女達が祭祀をおこなった拝所（御嶽）や祭祀と関係する倉庫跡、そして按司が酒宴をおこなったであろう主郭（一の郭）などの地域、台所跡などから出土してくる可能性が高い。

（3）鈴について

鈴の出土例については、第Ⅳ章で記したように今帰仁城跡志慶真門郭（註27）や天界寺跡（註28）などで報告がなされている。その用途については、単純に遊具や装飾的なものとして解釈がなされるところであるが、出土した香炉や鏡などの祭祀具を納めた倉庫跡（土壙SK01）である事から管見の限りで文献資料などを精査した結果、以下のような用途が浮かび上がってきた。

神道における鈴の持つ意味合いや概念的な位置付けとして、菅田正昭氏によると次のように記している「神社によくある賽銭箱の真上に吊された鈴。・・・拝礼するときはその緒を引いて鈴を鳴らすが、こうするようになった由来については、一説によると古来から鈴には魔除けの霊力があるとされ、それが転じて、神事のときに鈴を鳴らすようになったという。・・・その音に込められた神霊の力で自分の罪穢れを祓い清める。「鈴祓い」とも呼ぶのはそのためだ。・・・また、巫女が神楽舞を舞うときに、手にもって鳴らす神楽鈴の音には神を招来する役割があったとされる。・・・神前で鳴らす鈴も、この神楽鈴に由来しており、拝礼するにあたって、鈴のその清らかな音色で、これから祈願を申し上げますという、一種の合図のような役割をも果たしているのである。」（註１)。この考え方も参考にして『おもろさうし』（註10）から鈴と関連するオモロを検索する中で興味深いオモロが二・三首確認できたので、これを以下に記す。

第十三巻「あけしののかみにしやが昆金よらちへの節」

790「一 鈴金や 神にしや もちよる 歩まちへが　見物 清らや　又 頭黒親御船は 押し浮けて 又 按司御船や 金せひ 押し立て・・・」

（大意：鈴金神女、神にしや神女がきらめき輝いて美しいことよ。船を走らせている様が見事に美しい。頭黒親御船を押し浮かべて、按司のお船は立派な帆柱を押し立て、・・・・）

第五巻「あおりやへが節」

226「一 嶽の鈴鳴りや 果報 揃ゑわちゑ 吾が成さい子後勝り 手摩て 又 君の望月ぎや」

（大意：御嶽の鈴鳴り、望月神女は、豊穣、幸福を揃え給いて、我らが父なる後勝り様は、国の繁栄をお祈りします。）

第十五巻「やまきたらすざべが節」

1095「一 嘉数鈴鳴りや 天底の金庭に　降れ欲しや　又　見物鈴鳴りや」

（大意：嘉数鈴鳴り神女は、天底の立派な神庭に降りたがっていることよ。）

この三首のオモロのとおり、「鈴金」・「嶽の鈴鳴り」・「嘉数の鈴鳴り」と「鈴」の付く名称があり、いずれも神女名となっているとなっている事から「鈴の音の清らかな音」に由来しての神女名となったのかは不明であるが、前記したように巫女が神楽舞を舞う際に手に持って神楽鈴のような形での使用なのか。或いは神を招来する鈴としての使用なども考えられる。実際に京の内での祭祀や儀式で高級神女が鈴を使用したのかもしれない。その他に祭祀や儀式以外での鈴の使用例をオモロから抜き出してみると以下のオモロがあ挙げられる。

第十一巻「しのくりやわよなれがみの節」

627「一 みるや仁屋　世馴れ神やれば・・・金若子 紐鈴は 下げて 又 金みさき 鳴り鈴は 下げて」

（大意：みるや仁屋は、世馴れ神、・・・金若子、かねみさきに美しい紐鈴、鳴り鈴を下げている。）

※ 金若子・かねみさきは、刀の美称で、この刀の装飾品として紐付きの鈴を下げているようである。

とあるように刀の柄頭に取り付けられた金物の猿手などに紐付きの鈴を下げていたのかもしれない。以上のようなオモロや本土における神社などでの鈴の使用例を考えると祭祀や儀式、そして刀剣類の柄頭に有る猿手などに紐付きの鈴を下げて使用していたものと予測はされるが、鈴が広く普及すれば、その用途は幅広く多様に利用（鳴子に代わる代用品、家畜などの管理目的での使用など）されたものと考えられる。この鈴と類似する鳴り物として風鈴がある。県内での風鈴の出土例は糸数グスク（註29）、今帰仁城跡主郭（註30）から出土しているが、鈴と同様に少ないようである。

C. ガラス玉について

京の内の倉庫火災により火熱を受けてガラス製の数珠玉の束が溶解・再凝固した塊が5個体出土している。他に数珠から火災によって分離した単独のガラス小玉552点（内訳：図化したもの47点、写真のみ掲載505点であるが保管・管理の面から２・３個癒着したものも１点と数えた。）が出土している。その他、勾玉１点が出土しているが火熱を受けて形状が崩れて、紐通しの孔も火熱により孔の一部が塞がっている。

国指定の重要文化財となっているガラス玉一括資料の中にはガラス玉の塊（第35図69、図版28－69）があり、この塊には数珠玉を保管した際に使用した布袋などの繊維（図版28－69の拡大）が溶けたガラスの中に取り込まれていることが観察できる事から次のような事が想定される。数珠を京の内の倉庫に保管する際は、数珠を布袋などに入れてから丸櫃などに収納して保管していたのかもしれない。この数珠の塊は、倉庫火災の際に丸櫃の中に布袋などに入れられたガラスの数珠がゆっくりと加熱で溶けながら布袋などを取り込んだ後に再度凝固したものと考えられる。

ガラス製の数珠玉などを丸櫃に保管した例は、沖縄県教育委員会が刊行した『昭和54年度 県内漆器・陶器遺品調査報告書』（註31）に収録されている。同報告書に掲載された県指定文化財の「黒漆双鳥菊花七宝繋沈金丸櫃」があり、説明には「千代の真首玉」（曲玉）入れと記されている。同じく県指定文化財の「緑漆鳳凰雲点斜格子沈金丸櫃」があり、これには尚真王から拝領した「千代の真首玉」（曲玉）入れとの伝承があると説明がなされている。

次に真栄平房敬氏の著書である『首里城物語』（註21）の百人御物参の項に「 百人御物参　通称「ムムス」とよばれる祈願祭である。毎年正月と四月に日を選んで、聞得大君御殿から始まって、首里城内、首里城正殿のおせんみこちやの御火鉢御前、城中十嶽、城外二嶽を巡拝して、国王の健康、王家の繁栄、中国、日本、先島往還の船の安全、国土の安泰、五穀の豊穣などを祈る公儀の祭祀である。・・・祭祀当日は公儀から御祝物（御供物、通称ウサギムチ）の外に、おみこし（刀）一振を捧持し、更に美玉（ンチャマ、曲玉の美称）二貫をみさしくい（ミサシクィー、朱漆沈金の蓋付丸櫃で、巴紋、牡丹七宝繋紋が施されている）一対に入れて家来赤頭が捧持し、親方以下筑登之に至る三十七人が首里城を出発し、聞得大君御殿に参詣した。・・・聞得大君御殿での儀式については『聞得大君御殿并御城御規式次第』・・・「正月百人御物参」の条に次のように記している。・・・一、正月百人御物参日撰言上相済、当日三平等之大主部（方言、ウフスヌメー。三平等の大あむしられの通称）、掟、佐事あん、親方部、下庫理当、勢頭、筑登之た（た＝複数を表わす接尾語）にて、御主加那志前美ちゞ御へし（ミチジウフェーシ。改め直して新品同様にするという意に使われることば）、美玉（ンチャマ。曲玉の美称）、美御津可い（ヌンチュケー。お迎えて案内する意の敬語）にて、・・・御座着被成候事。一、同時、聞得大君加那志美ちゞおへし美玉御髪差（ンチャンジャシ。曲玉の上に黄金龍花大簪をのせてある）は御床（王家では神棚をさして御床とよぶ）の上・・・百人御物参の記述の中にある「聞得大君加那志美ちゞおへし美玉御髪差は御床の上」について説明すると、儀式がはじまる前に聞得大君が曲玉を手でかきまわした後、その上に黄金龍花大簪と黄金長女簪をのせて御床に供える儀式があった。この儀式は、もともと曲玉や貫玉などを一々チェックする曲玉改めの儀式であったものが次第に簡略化されて、手で曲玉をかきまわすだけの儀礼になったと思われる・・・ちなみに聞得大君自身がチェックされる曲玉とは別に、首里城正殿の大庫理（二階）で君々（女神官）の曲玉をチェックしたことが女官御双紙に記されている。・・・大庫理で誰が曲玉を改めたかは不詳だが、もし国王みずからが改められたとすれば、それが史料の「御主加那志前美ちゞ御へし美玉」にあたると考えられる。と記している事からも現存する丸櫃の中に曲玉などを保管していたものと理解される。また、上記の真栄平

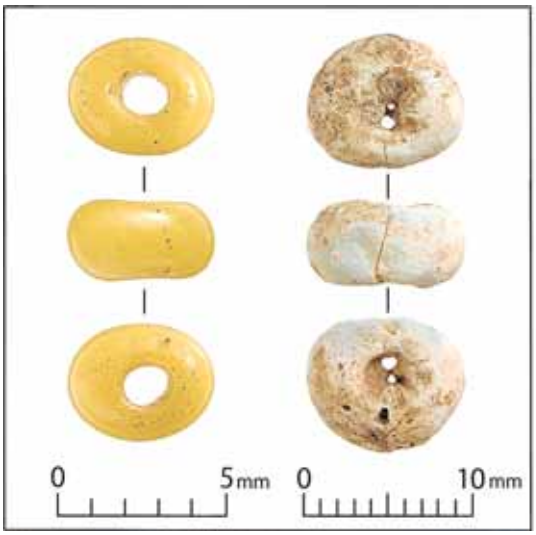
氏が記している曲玉などを入れた容器が朱漆沈金蓋付丸櫃（巴紋、牡丹七宝繋紋）があり、聞得大君による曲玉などの破損状況の点検「曲玉改めの儀式」があり、簡素化され手でかきまわす事や首里城内の神女官が所持する曲玉などの点検の執行者が琉球国王自身がおこなっていたのではないかと考察している。

その他に京の内出土のガラス小玉の塊を実見した研究者の意見を拝聴すると県立博物館などに収蔵されている御玉貫（うたますき）〔祭事などに酒器として利用された錫製徳利の表面をガラスや陶器の小玉（６～７色の小玉を縫い合わせて文様を表現）で編んだものを徳利に被せたもの〕（註32）ではないかとする意見もあるが、その可能性は低いようである。

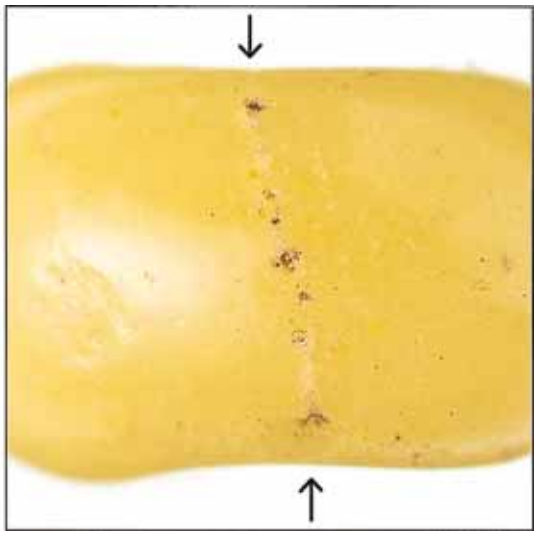
京の内出土のガラス小玉とは比較にならないが、参考までに現存する今帰仁阿応理屋恵ノロ勾玉の点数は52個（勾玉22個、丸玉30個）を数えている（註33）。

（３）ガラス小玉の技法と瓦質土器製の蓋について

ガラス小玉の製作技法には巻きつけ法、吹きガラスの法、鋳型法（註34）などがある。報告した資料の大部分が巻き付け技法によるものであるが、特殊な引き伸ばし法が確認されている。これはガラスを棒状に引き伸ばして、溶けたガラスの両端を切断し、両端を合わせて製作された技法である。この技法に拠る資料が２点（図版８a）確認されている。県内遺跡からの出土や報告例がなく、今後注目される技法とみられる。

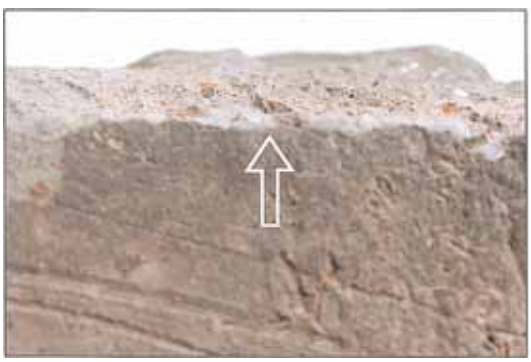


図版８a ガラス小玉の端し合わせ技法の拡大
（左：第65図A34、右：第65図B37）

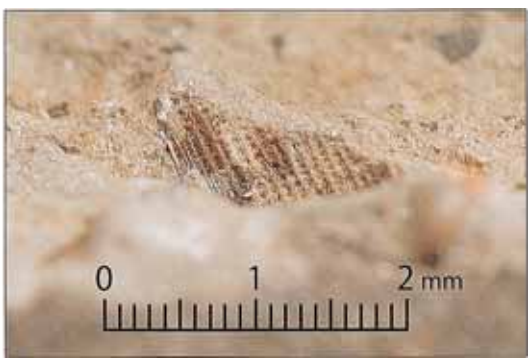


図版８b ガラス小玉の端し合わせ技法の拡大
（第65図A34）矢印が合わせの箇所

瓦質土器製の蓋（第77図２～５）については、その製作方法が判然としなかったが、今回報告した資料から型枠などを利用し、型枠からの剥離剤として稲藁の灰を利用したことが推定された。また、蓋の破損面（劈開面）から布切れが確認（図版９a・ｂ）されたことも重要な発見である。これについても県内遺跡から出土例や報告は皆無である。15世紀中頃の繊維研究に役立つ貴重な資料とみられる。



図版９a 瓦質土器製の蓋(第77図5)の劈開面で混入物として確認された細片化した布切れ



図版９b 図版９aの布切れの拡大

註および参考文献

註１．菅田正昭「作法の知識参拝の仕方⑪「鈴鳴らし」は罪穢れを祓い清める」『学校で教えない教科書　面白いほどよくわかる神道のすべて』株式会社 日本文芸社　第８刷発行　2007年１月25日。

註２．寺村光晴「祭祀遺物製作遺跡―特に滑石製模造品製作の遺跡について―」『神道考古学講座』第５巻 祭祀遺跡特説 雄山閣出版株式会社 第２版 1982年10月。

註３．冊封とは、中国では諸侯、太子、皇后などを任命することをいうが、琉球では中国皇帝が琉球国中山を封ずる。この冊封を受けて初めて琉球の進貢貿易が許された。中国からの冊封は、中国明王朝が建国された1368年直後の1372年の冊封使楊載の来琉によって中国へ進貢し、1404年の冊封使時中が中山王武寧や南山王汪応祖を封じて、最後の琉球国王となった尚泰を1866年に冊封正使：趙新、副使：于光甲らが封じている。1404年～1866年までの462年間に22回の冊封を受けている。冊封使の滞在期間は４ヶ月～８ヶ月におよぶ。その人数は正副使に伴って兵役・従人・舟人・諸技術者など数百人規模で訪れた。
引用：・島尻勝太郎「冊封」・「冊封使」『沖縄大百科事典』中巻 沖縄タイムス社 1983年５月。
・平成18年度企画展 重要文化財公開『首里城京の内跡出土品展～冊封がもたらした陶磁器～』沖縄県立埋蔵文化財センター 2007年１月16日。

註４．金武正紀「第Ⅴ章 今帰仁城跡と首里城跡出土の陶磁器について」今帰仁村文化財調査報告書第25集『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅱ』今帰仁村教育委員会 2008年３月。

註５　ａ．富島壮英『冊封使－中国皇帝の使者－』沖縄県立博物館 1989年３月。
ｂ．富島壮英「冊封使－中国皇帝の使者－」『首里城復元期成会 会報』第23号 2005年７月。

註６．沖縄県文化財調査報告書第132集 『首里城跡－京の内跡発掘調査報告書（Ⅰ）－』沖縄県教育委員会 1998年３月。

註７．沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第３集『首里城跡－下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター2001年３月。

註８．矢沢秀雄・上原 静「付編１ 南殿跡・北殿跡出土の金属製品」沖縄県文化財調査報告書第133集『首里城跡 御庭跡・奉神門跡の遺構調査報告』沖縄県教育委員会1998（平成10）年３月。

註９．比嘉 実 『古琉球の思想』タイムス選書Ⅱ ５ 沖縄タイムス社 1991年５月10日。

註10．外間守善校注 『おもろさうし』（上・下）〔全２冊〕株式会社 岩波書店 2006年11月６日 第３刷発行。

註11．岡登貞治編『文様の事典』東京堂出版　平成10（1998）年２月25日 ３版発行。

註12．伊波普猷「つきしろ考」『をなり神の島１』全２巻　東洋文庫227　株式会社平凡社　1989年２月28日　初版第７刷発行。

註13．嘉手苅千鶴子「月しろ」『沖縄大百科事典』中巻　沖縄タイムス社　1983年５月30日初版発行。

註14．金城 善「民俗知識」『糸満の民俗－糸満漁業民俗資料緊急調査－』沖縄県文化財調査報告書　沖縄県教育委員会 昭和49（1974年）３月。

註15．知花春美・名嘉真宜勝ほか「沖縄本島の針突き習俗分類」『沖縄の成女儀礼－沖縄本島針突調査報告書－』読谷村教育委員会・読谷村立歴史民俗資料館　1982年３月。

註16．仲松弥秀 『神と村』伝統と現代社 1977年４月25日 第一版第二刷発行。

註17．祖母（金城カメ）の両手の甲や手首は完全形態のハジチ（針突）を施していたので、文様について質問し、文様の説明を受けた。

註18．村武精一『神・共同体・豊穣－沖縄民俗論－』株式会社未来社　1975年８月15日第１冊印刷。

註19．註18の文献に再収録。Muratake, S., 1954/55 "Dualism in the Southern Ryu kyus" Archiv fur Volkerkunde, 19：120―128.

註20．註18に再収録。村武精一「琉球村落の社会的・象徴的秩序―親族・村落・偉人―」『奄美―自然・文化・社会―』九学会連合奄美調査委員会編　日本学術振興会 1959年。

註21．真栄平 房敬『首里城物語』ひるぎ社　1991年５月15日４版。

註22．首里城研究グループ編（高良倉吉・吉川 清・中本 清・福島 清・山口洋子・平良 啓・宮城栄治）
『首里城入門－その建築と歴史－』ひるぎ社　1989年９月15日初版。

註23．沖縄県文化財調査報告書 第146集 『沖縄の金工品関係資料調査報告書』沖縄県教育委員会 2008年３月。

註24．上原 静「首里城城郭、西のアザナの調査」『文化課紀要』第10号 沖縄県教育庁文化課 1994年３月。

註25．上原 静「琉球国と鋳銭」出土銭貨研究会 第15回研究大会『出土銭貨からみた環シナ海と琉球史』《大会資料集》出土銭貨研究会 第15回研究大会実行委員会 2008年11月１日～３日。

註26．鈴木規夫「酒器」『日本の美術７』第266号 監修 文化庁 東京国立博物館／京都国立博物館／奈良国立博物館 発行 至文堂 1988年７月。

註27．今帰仁村文化財調査報告 第９集 『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』今帰仁村教育委員会 1983年３月。

註28．沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第２集『天界寺跡（Ⅰ）―首里杜館地下駐車場入り口新設工事に伴う緊急発掘調査―』沖縄県立埋蔵文化財センター 2001年３月。

註29．玉城村文化財調査報告書第１集『糸数城跡―発掘調査報告書Ⅰ―』玉城村教育委員会 1991年３月。

註30．今帰仁村文化財調査報告 第14集『今帰仁城跡発掘調査報告Ⅰ』今帰仁村教育委員会 1991年３月。

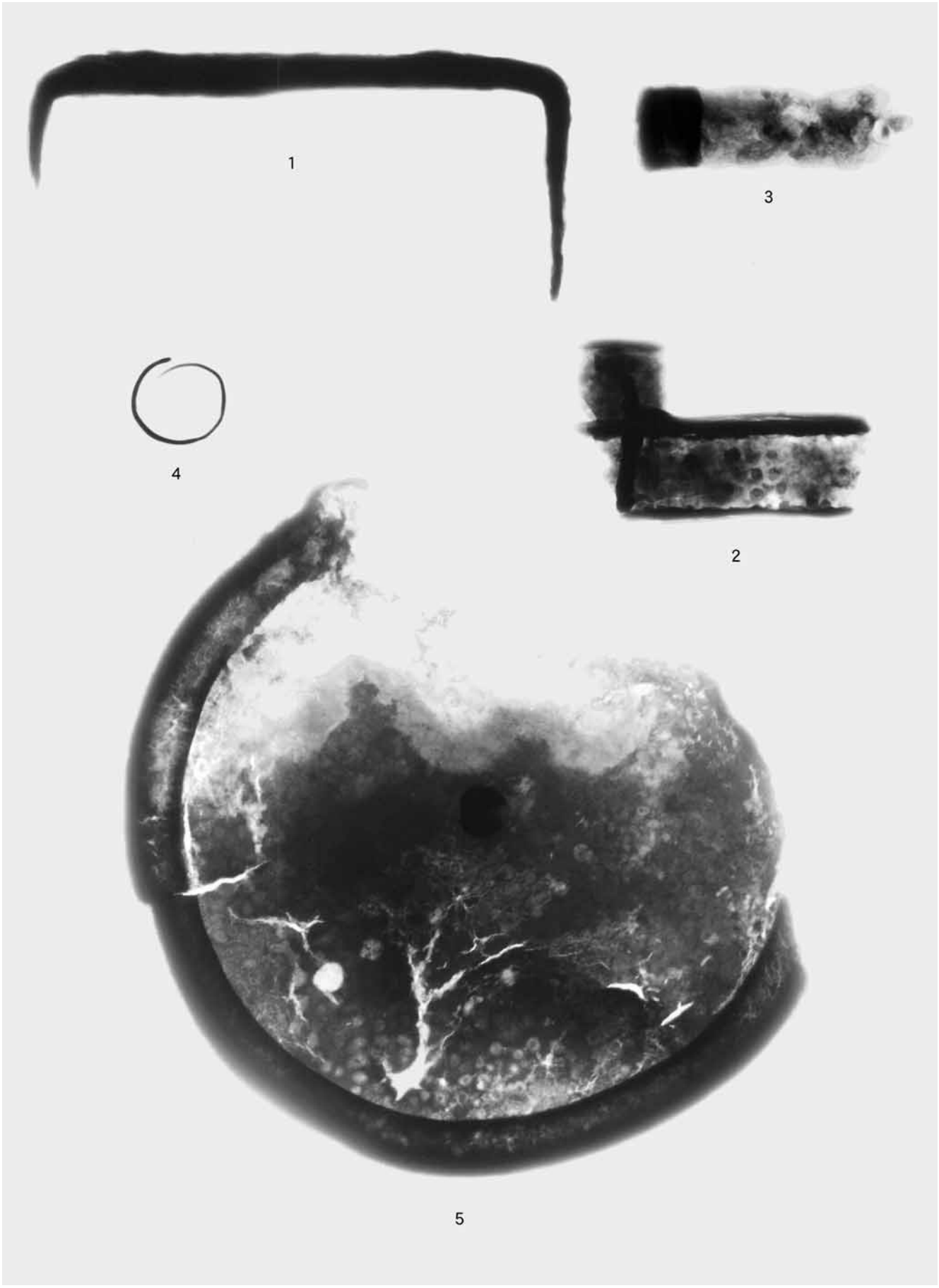
註31．沖縄県文化財調査報告書 第26集 『昭和54年度 県内漆器・陶器遺品調査報告書』1980年３月。

註32．上江洲安亨「47 御玉貫」首里城公園開園10周年記念企画展『琉球王朝の華－美・技・芸－』財団法人海洋博覧会記念公園管理財団 2002年10月１日。

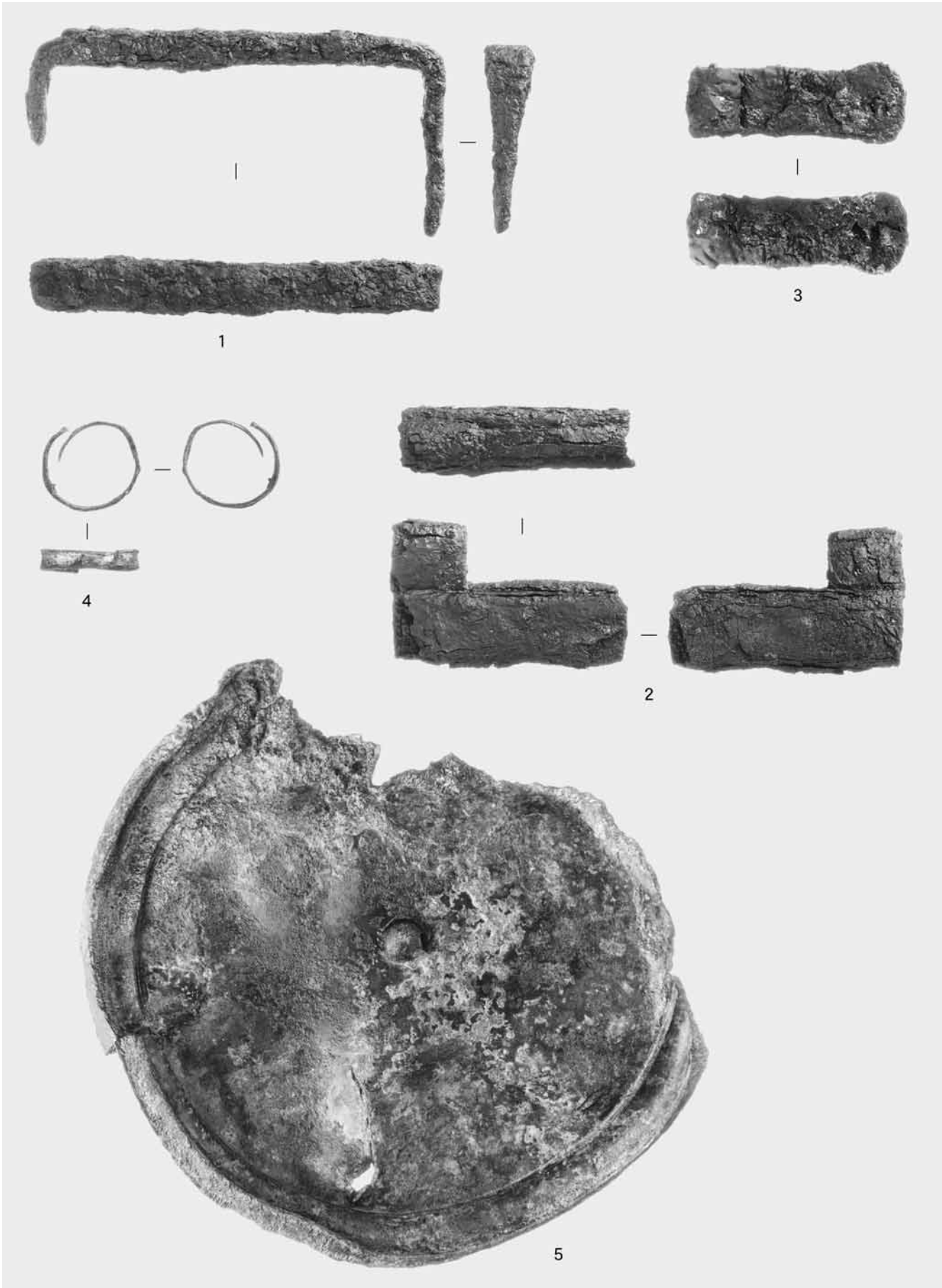
註33．宮城弘樹「第６節 今帰仁阿応理屋恵勾玉について」今帰仁村文化財調査報告書第20集『今帰仁城跡周辺遺跡Ⅱ－今帰仁城跡周辺整備事業に伴う緊急発掘調査報告－』今帰仁村教育委員会 2005年７月。

註34．「古代のガラス玉」『これなあに？』考古分野http://www.pref.iwate.jp/～hp0910/korenanani/kouko 岩手県博物館ホームページより。

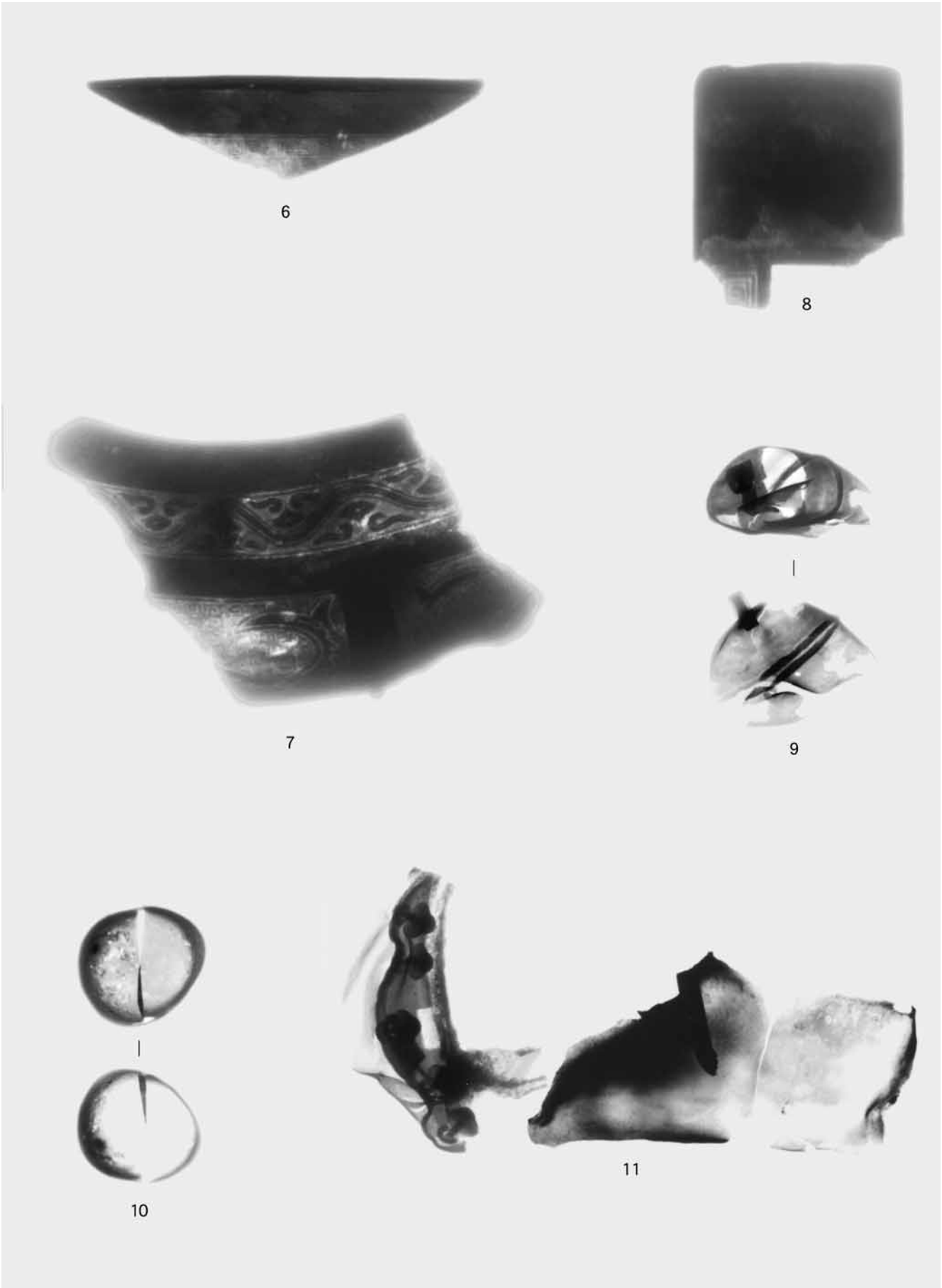
図　　版



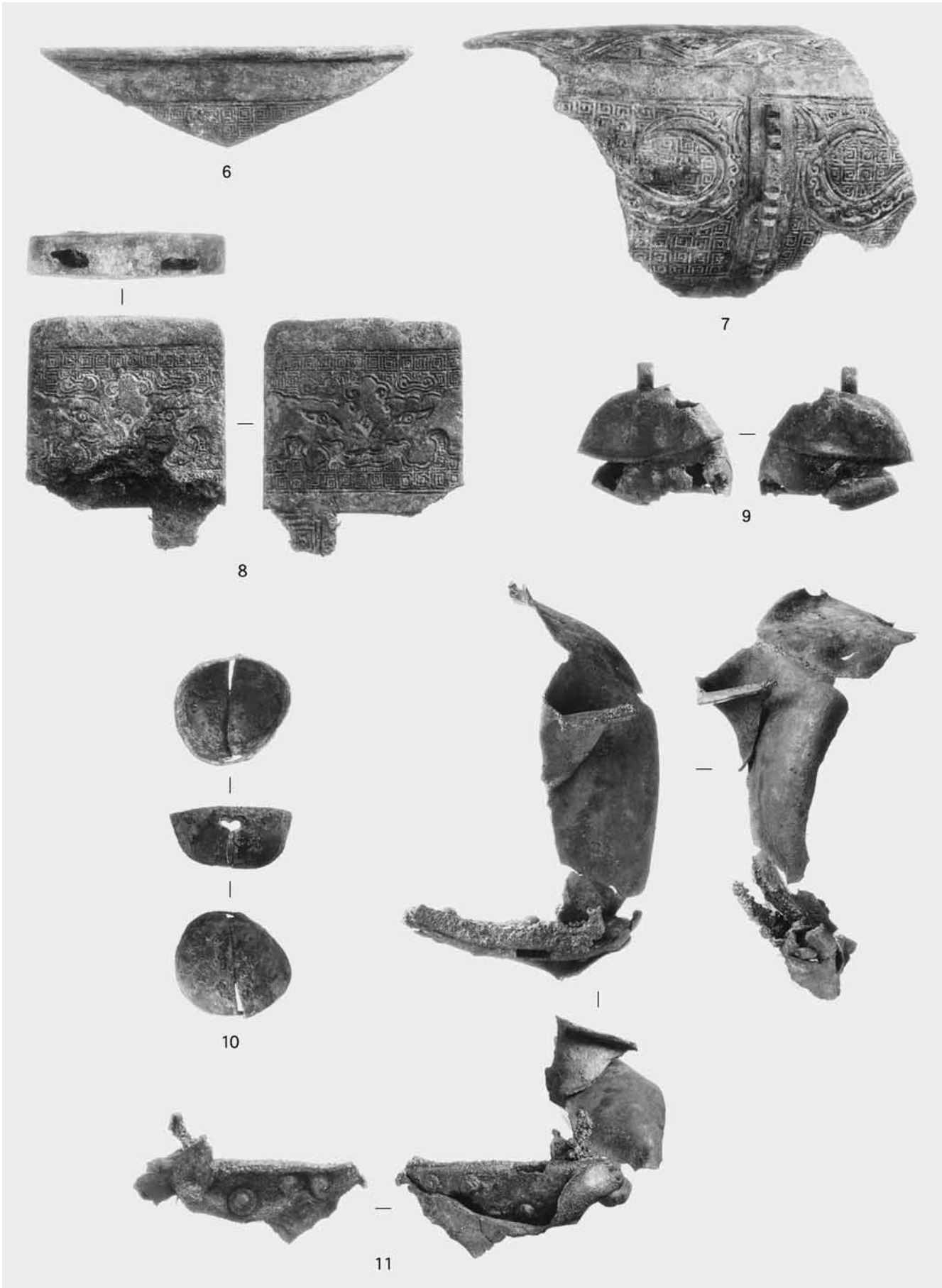
図版10　国指定重要文化財（保存処理済み）軟X線写真
金属製品（1 鎹、2 錠、3 蝶番、4 金銅製環状製品、5 鏡）



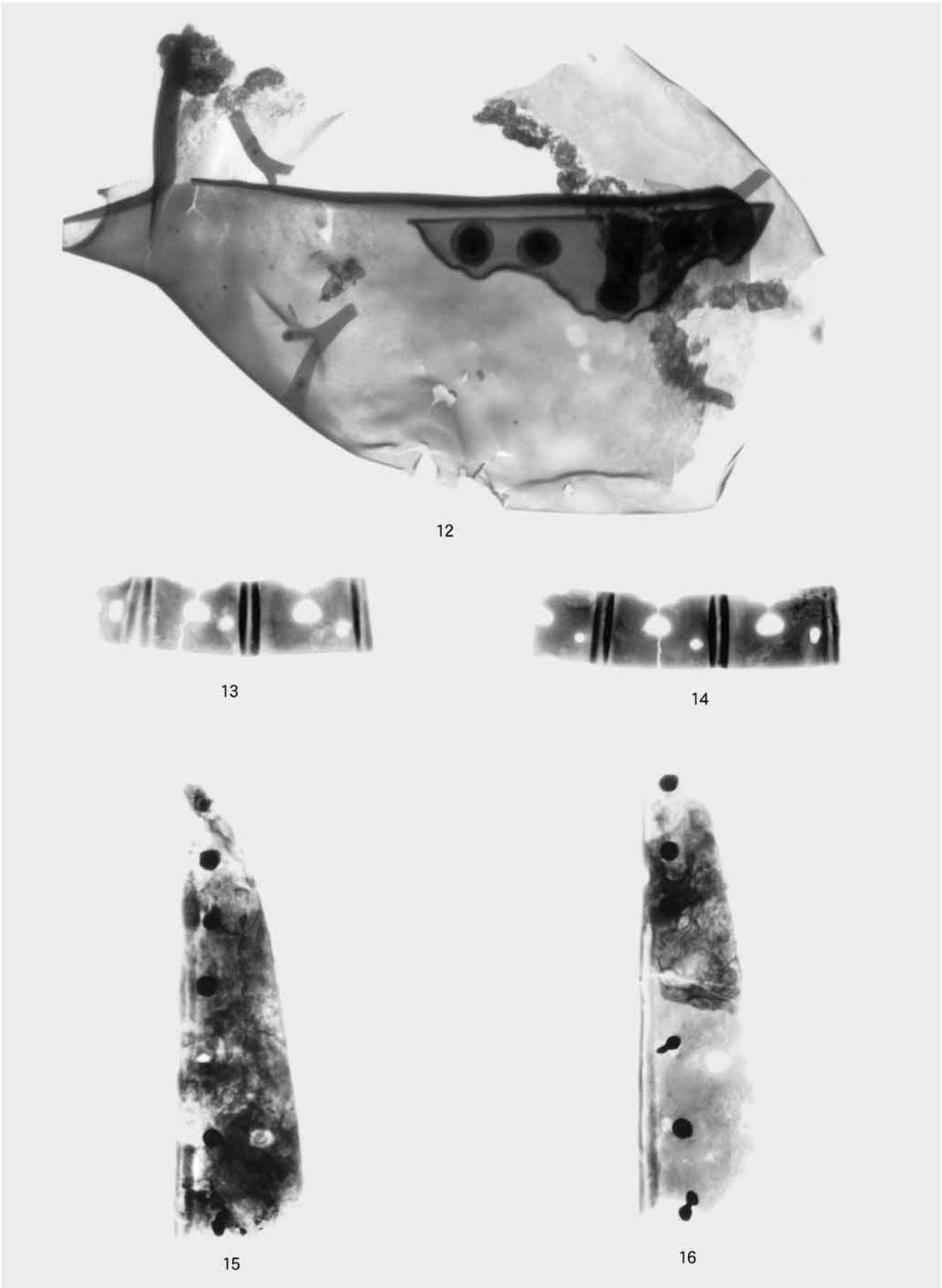
図版11　国指定重要文化財（保存処理済み）
金属製品（1 鏃、2 錠、3 蝶番、4 金銅製環状製品、5 鏡）



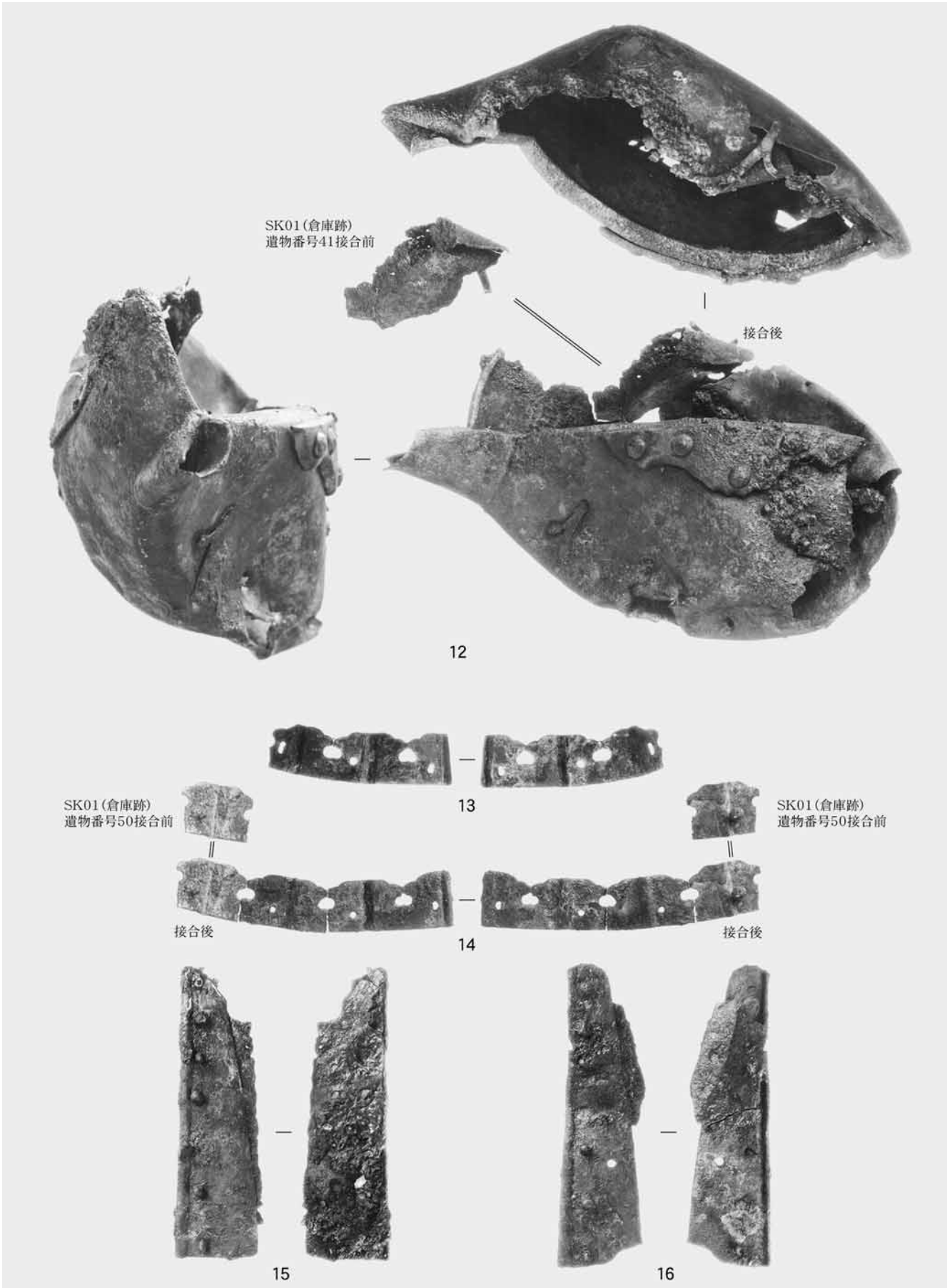
図版12　国指定重要文化財（保存処理済み）軟X線写真
金属製品（6 香炉口縁、7 香炉胴部、8 香炉把手、9・10鈴、11長柄付片口銚子の容器）



図版13　国指定重要文化財（保存処理済み）
金属製品（6 香炉口縁、7 香炉胴部、8 香炉把手、9・10鈴、11長柄付片口銚子の容器）

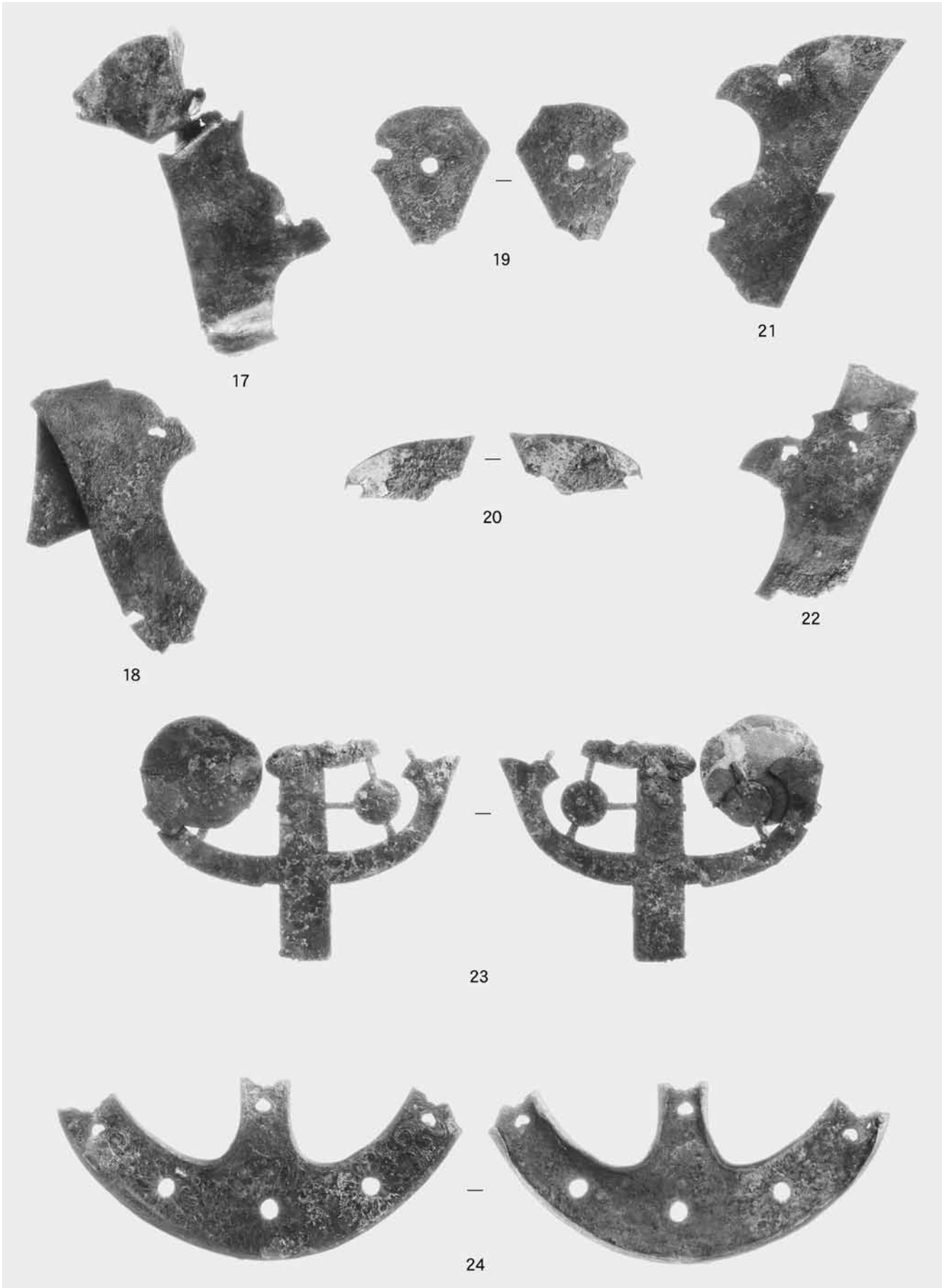


図版14　国指定重要文化財（保存処理済み）軟X線写真
金属製品（12長柄付片口銚子の容器、13･14兜鉢斎垣、15･16兜鉢の矧板）

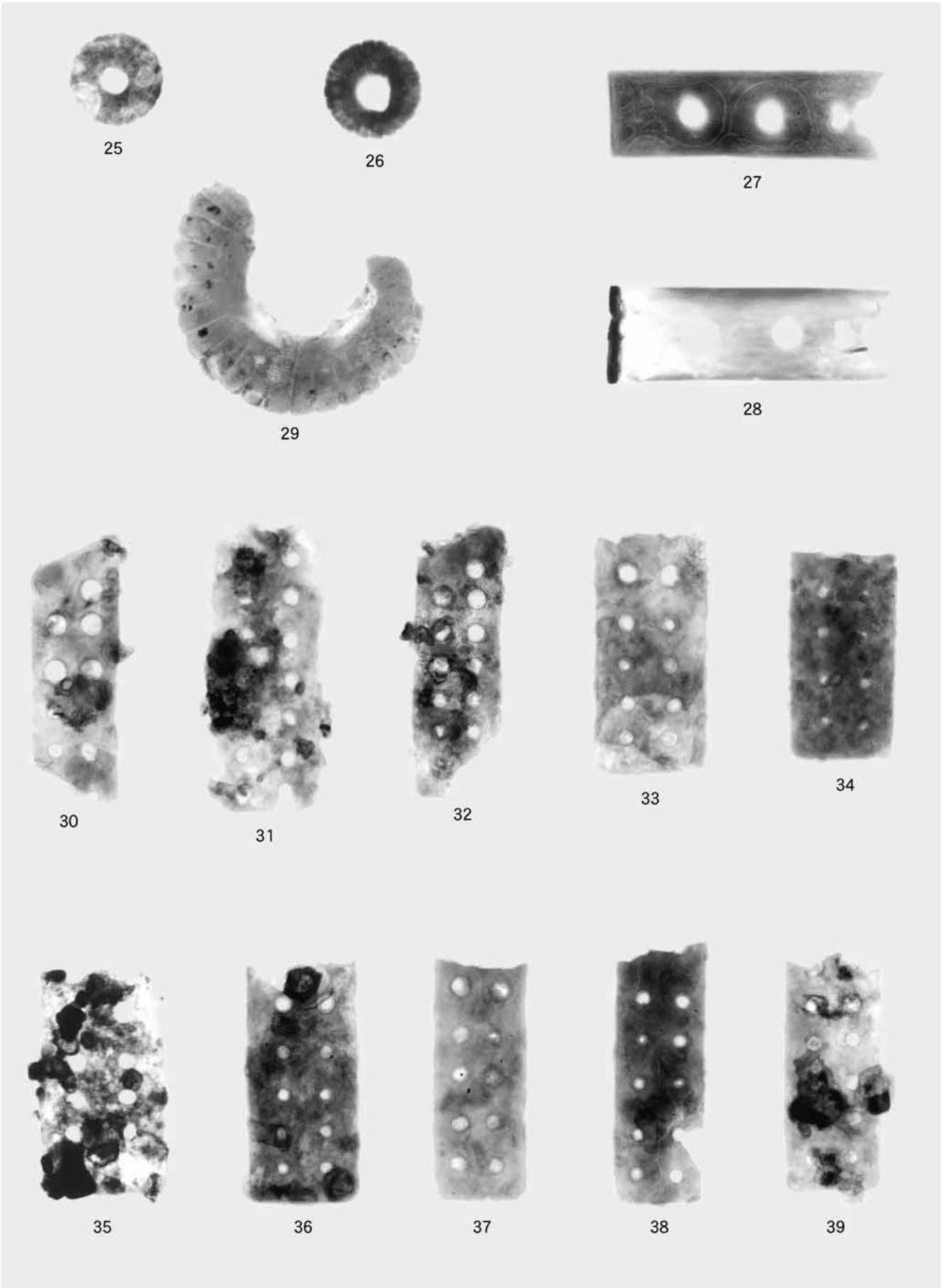


図版15　国指定重要文化財（保存処理済み）
金属製品（12長柄付片口銚子の容器、13・14兜鉢の斎垣、15・16兜鉢の矧板）

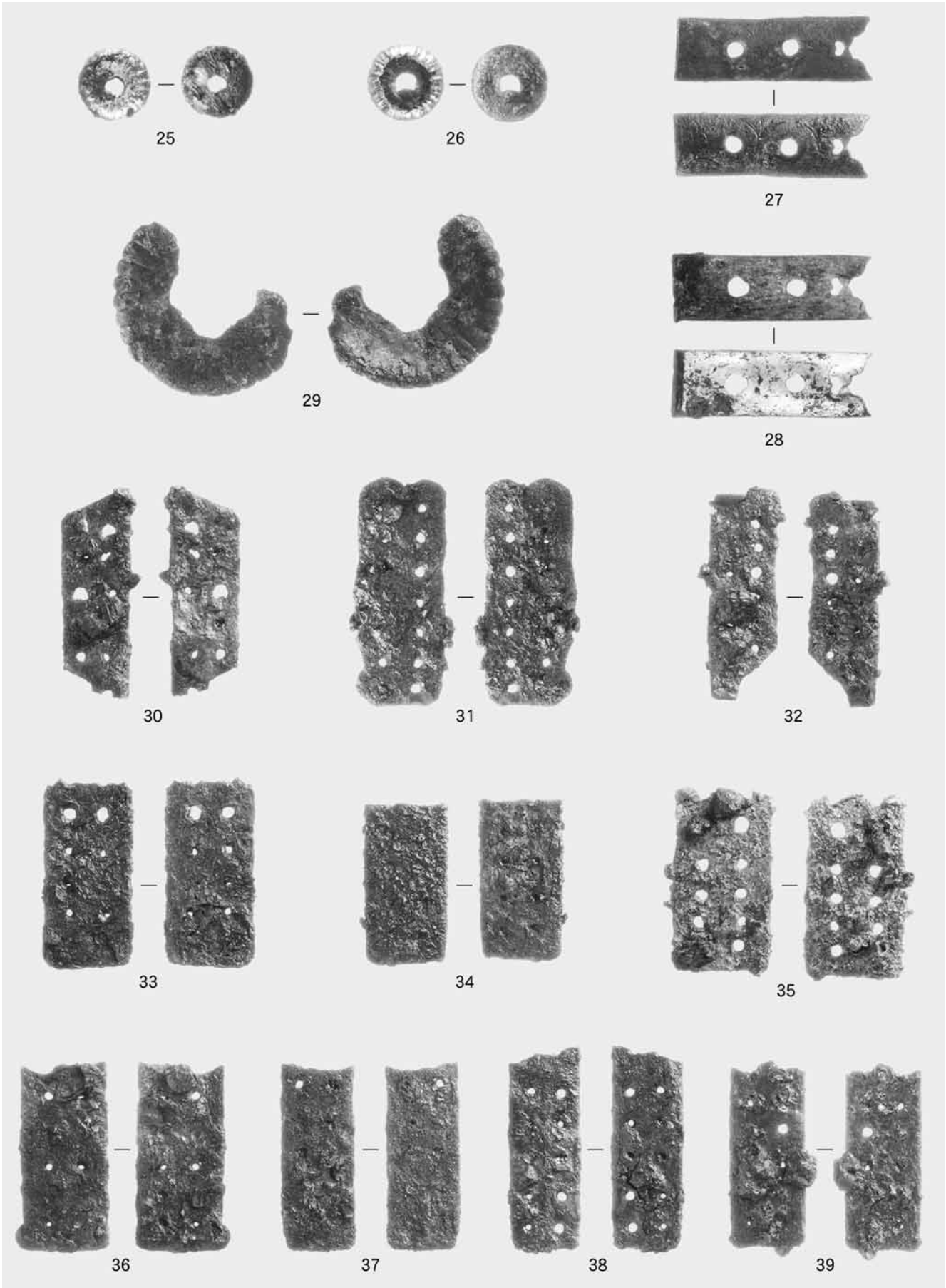
図版16　国指定重要文化財（保存処理済み）軟X線写真
金属製品　武具　立物（17～22鍬形、23立物中央飾り、24三鍬形台）



図版17　国指定重要文化財（保存処理済み）
金属製品　武具　立物（17～22鍬形、23立物中央飾り、24三鍬形台）

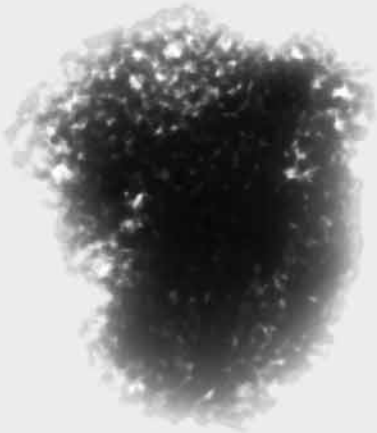


図版18　国指定重要文化財（保存処理済み）軟X線写真
金属製品　武具（25･26八双金物の留め金具、27･28八双金物、29据文金物の菊座、30～39札）

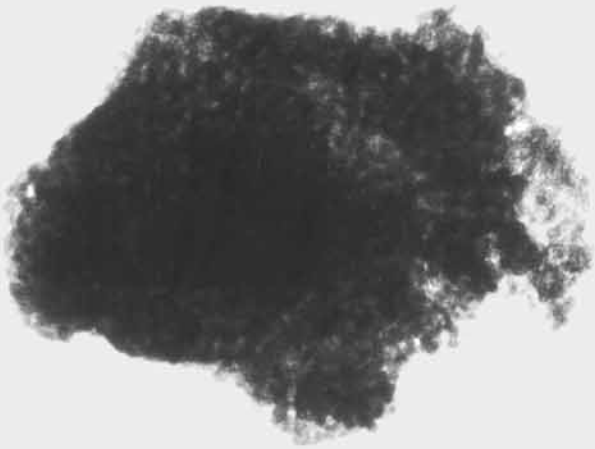


図版19　国指定重要文化財（保存処理済み）
金属製品　武具（25･26八双金物の留め金具、27･28八双金物、29据文金物の菊座、30～39札）

40



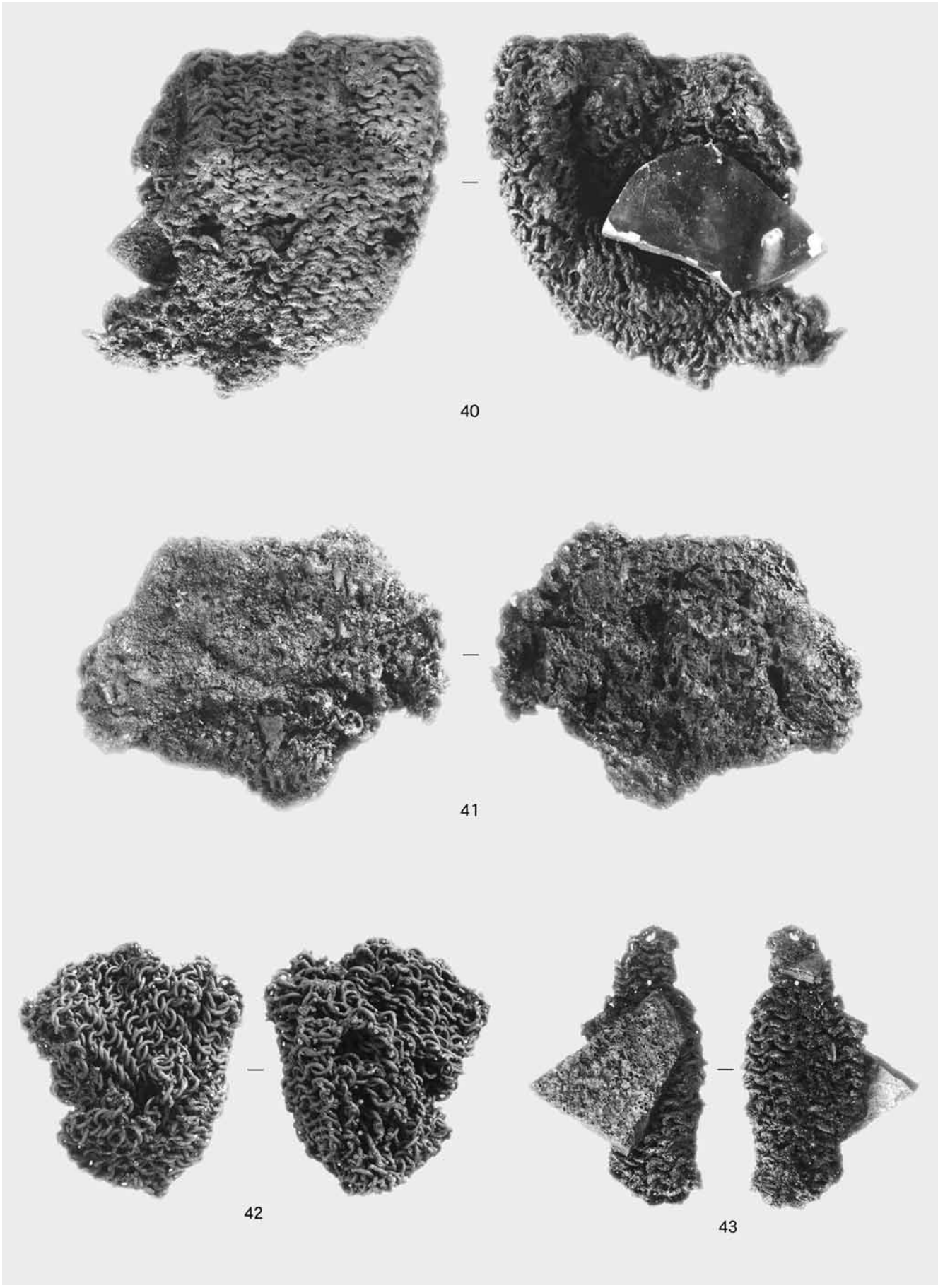
42



41

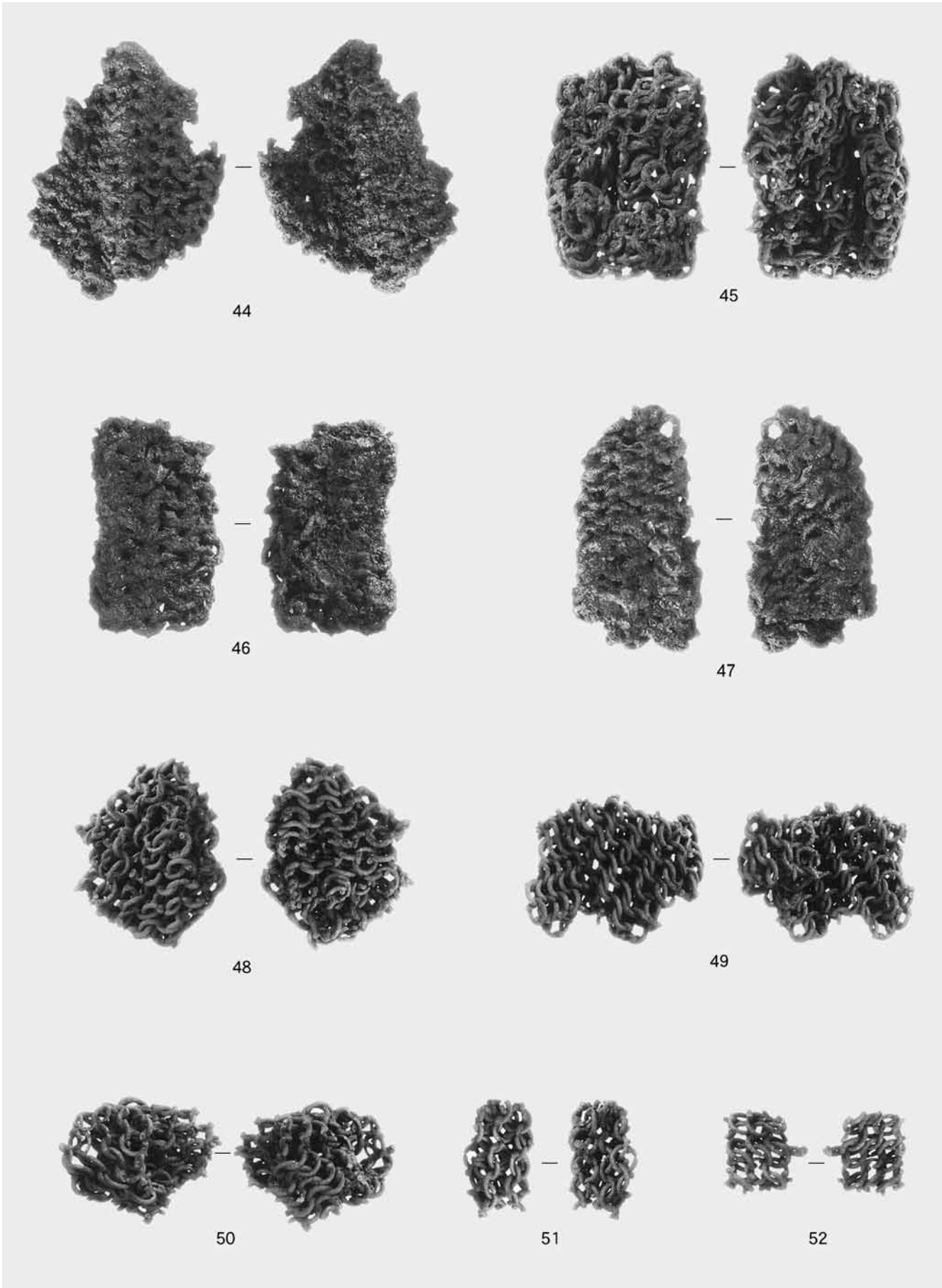
43

図版20　国指定重要文化財（保存処理済み）軟X線写真
金属製品　武具（鎖帷子）

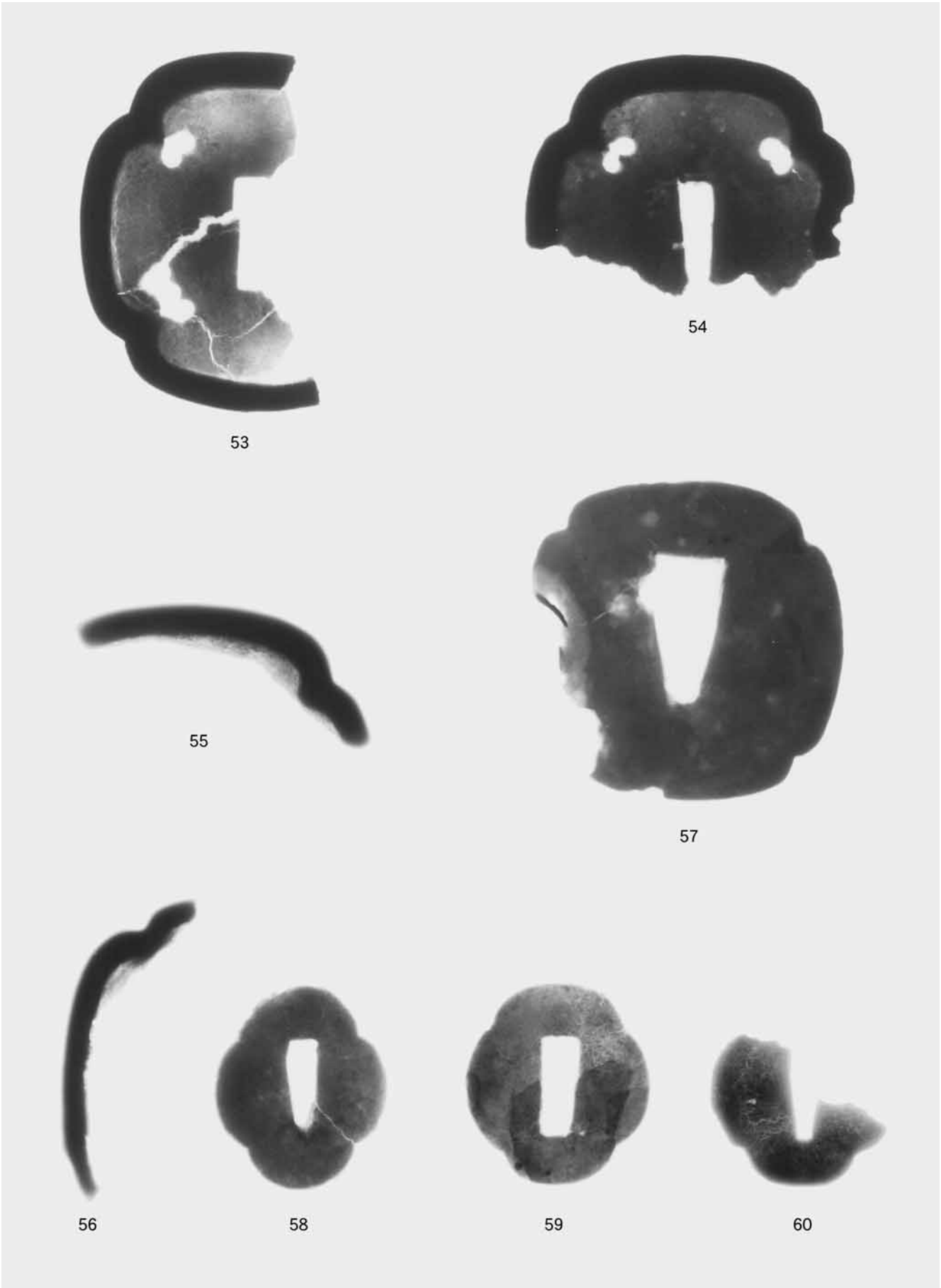


図版21　国指定重要文化財（保存処理済み）
金属製品　武具（鎖帷子）

図版22　国指定重要文化財（保存処理済み）軟X線写真
金属製品　武具（鎖帷子）



図版23　国指定重要文化財（保存処理済み）
金属製品　武具（鎖帷子）



図版24　国指定重要文化財（保存処理済み）軟X線写真
金属製品　刀剣（53～57鍔、58～60切羽）

図版25　国指定重要文化財（保存処理済み）
金属製品　刀剣（53～57鍔、58～60切羽）

61（修復前）

61（修復後）

62

63

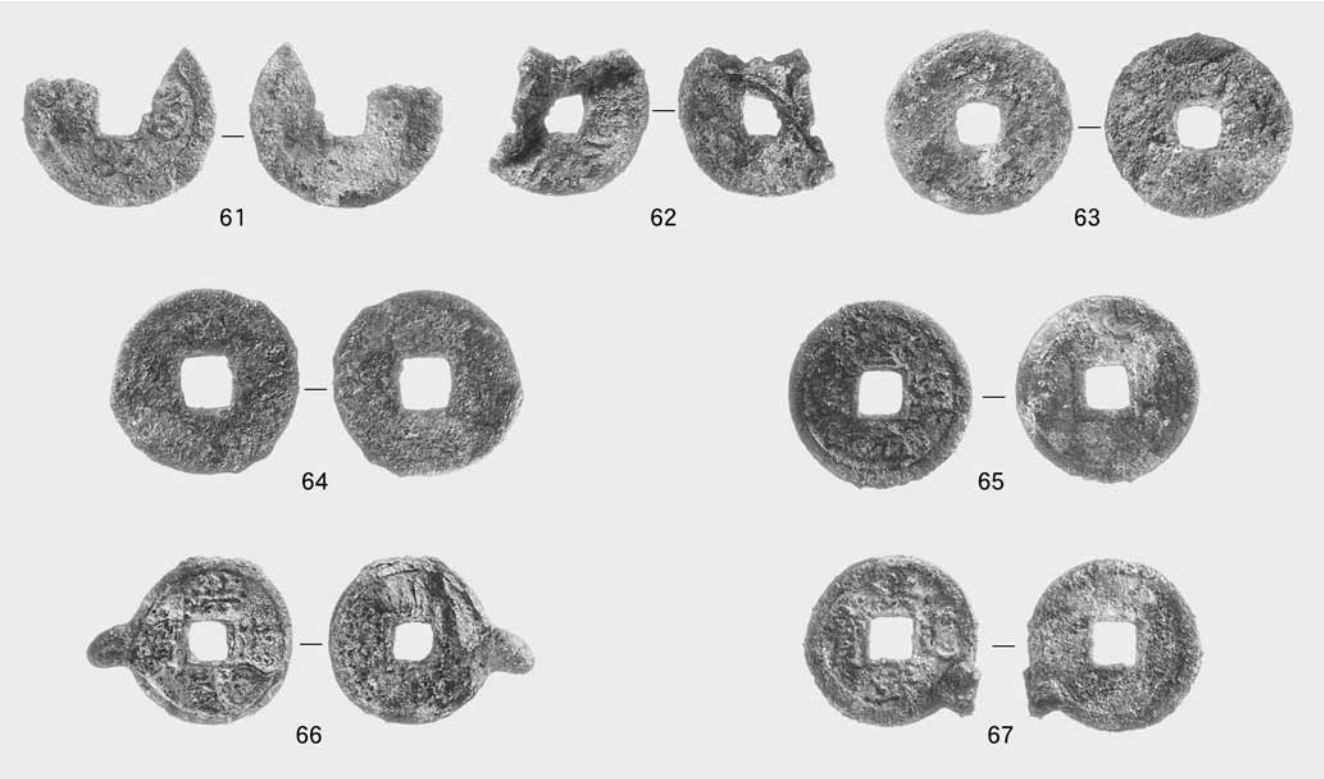
64

65

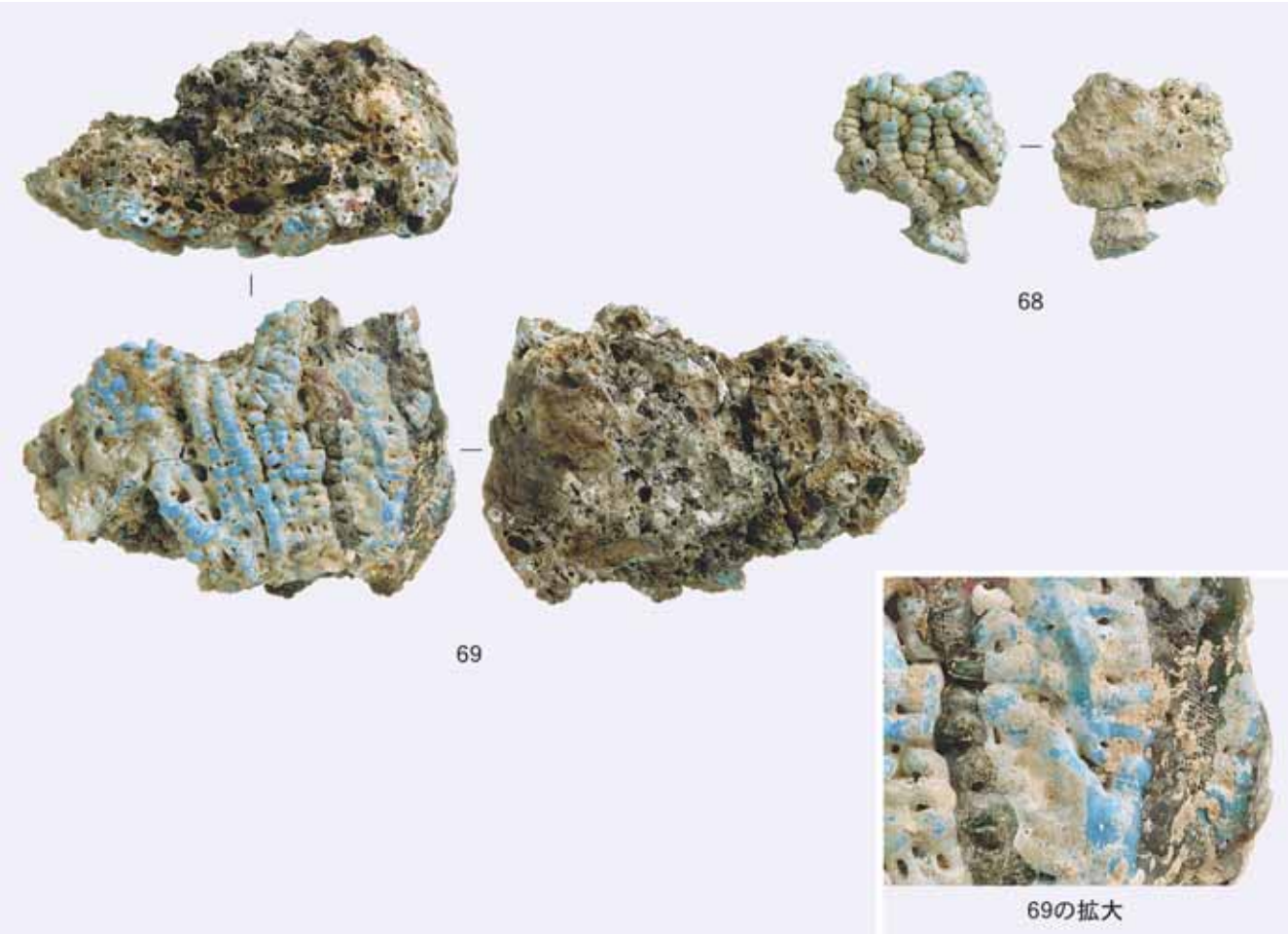
66

67

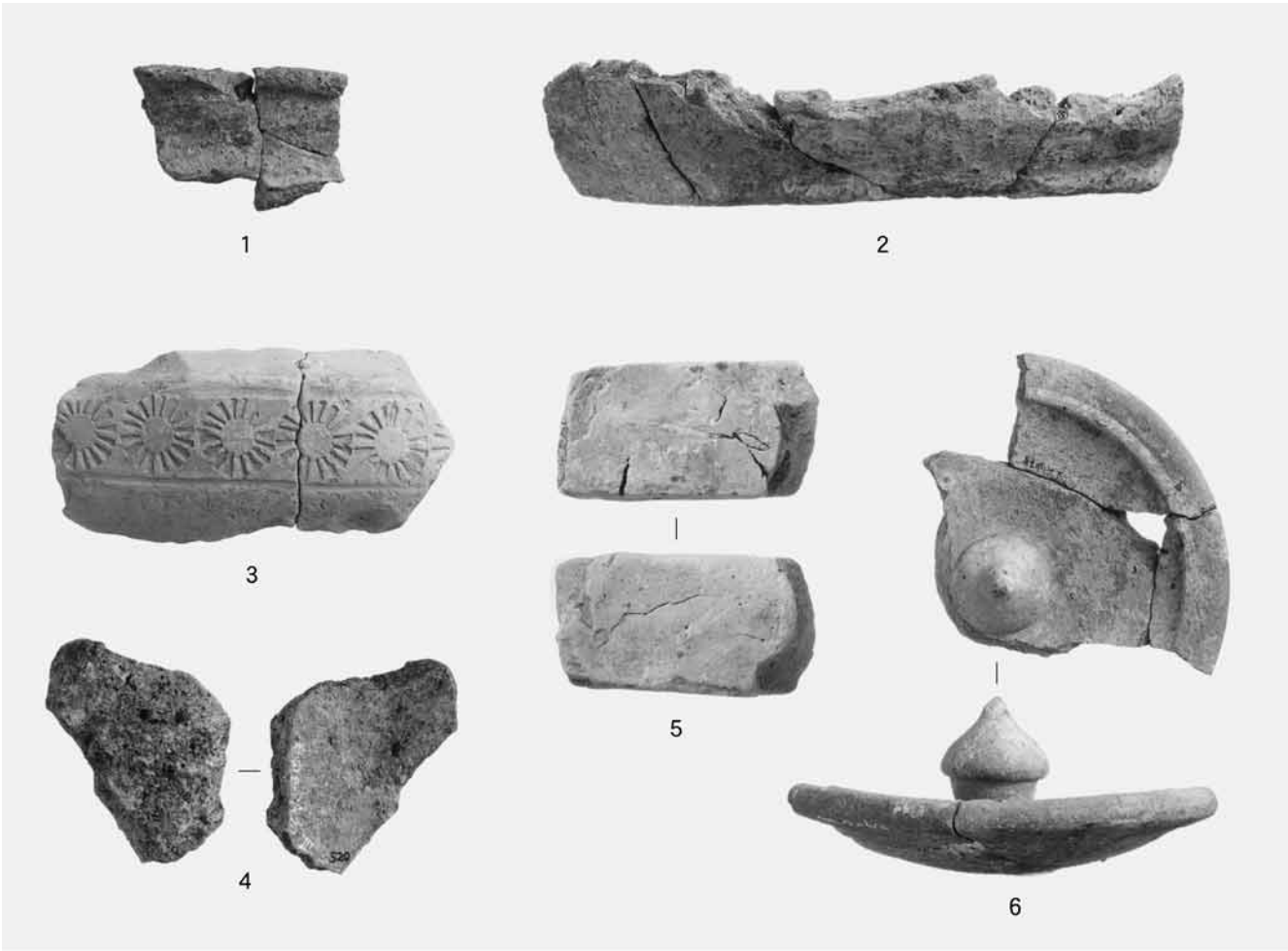
図版26　国指定重要文化財（保存処理済み）軟X線写真　銭貨



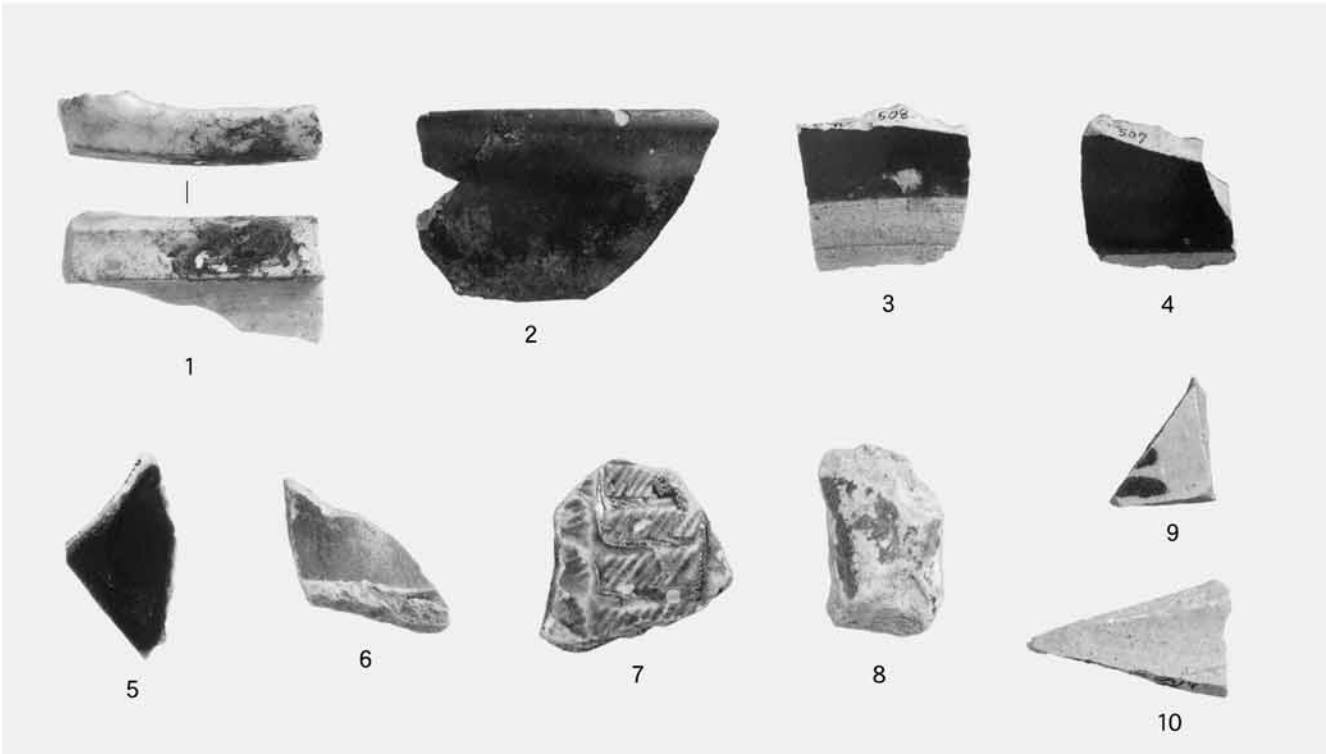
図版27　国指定重要文化財（保存処理済み）　銭貨



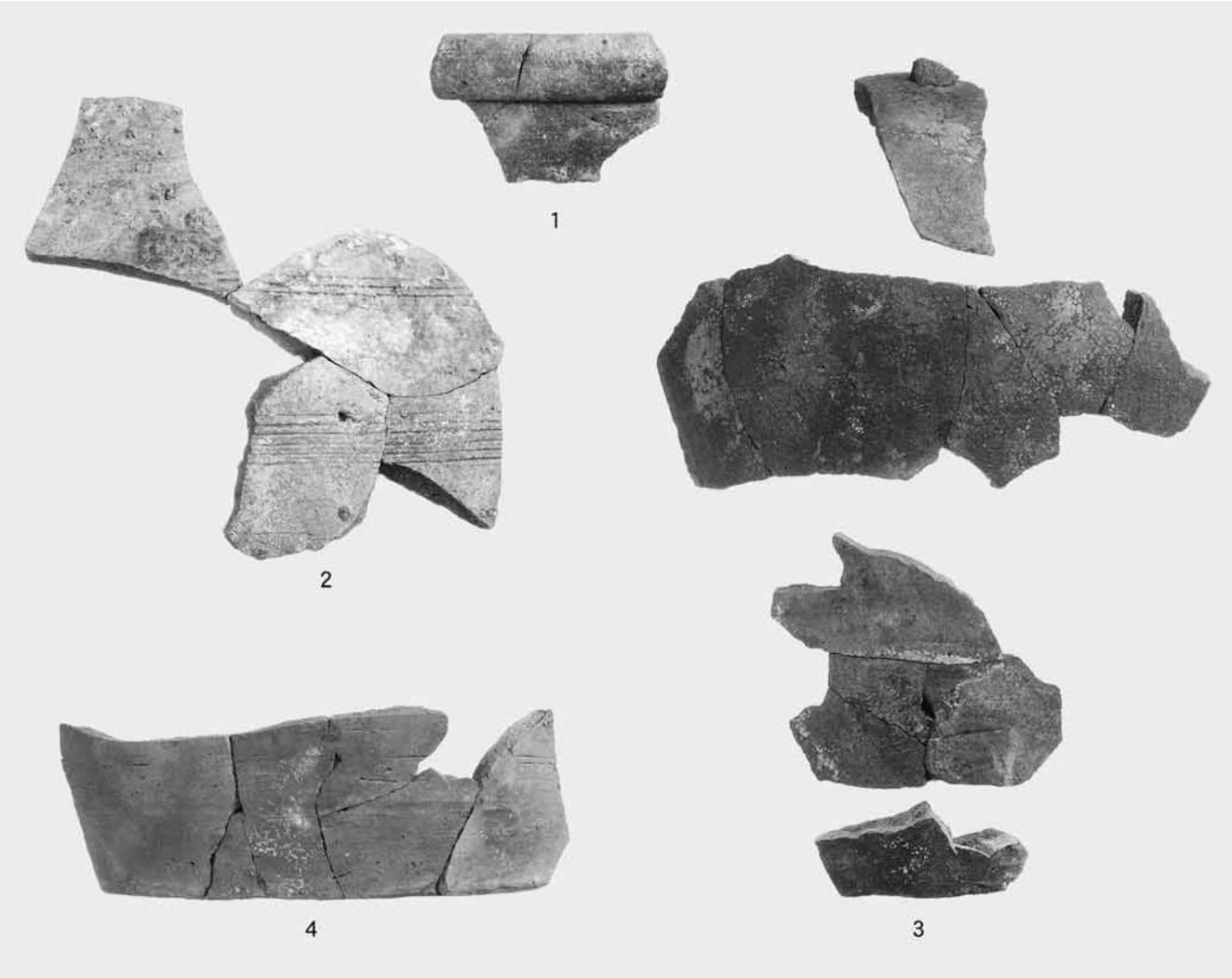
図版28　国指定重要文化財（保存処理済み）　ガラス玉（ガラス玉の塊）



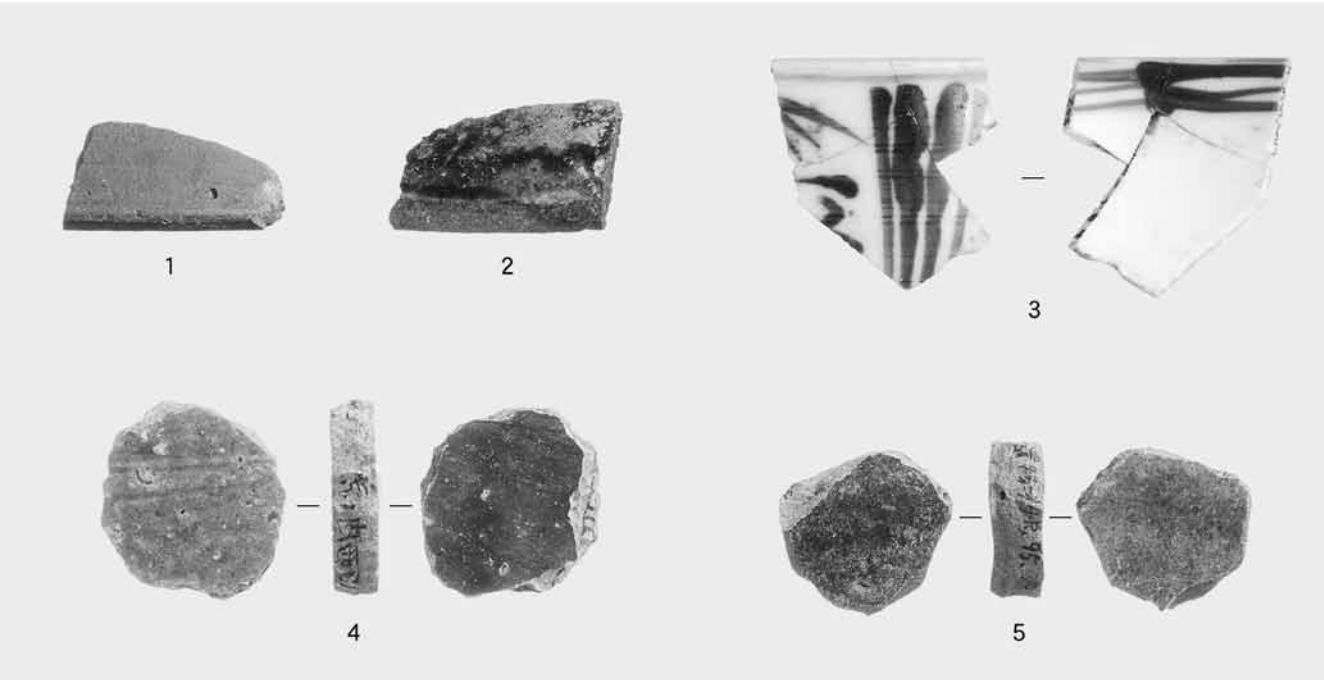
図版29　土壙SK01（倉庫跡）
土器、瓦質土器、坩堝、瓦製品、タイ産土器



図版30　土壙SK01（倉庫跡）
元青花、黒釉陶器、瑠璃釉、三彩、中国産陶器、ベトナム産陶器

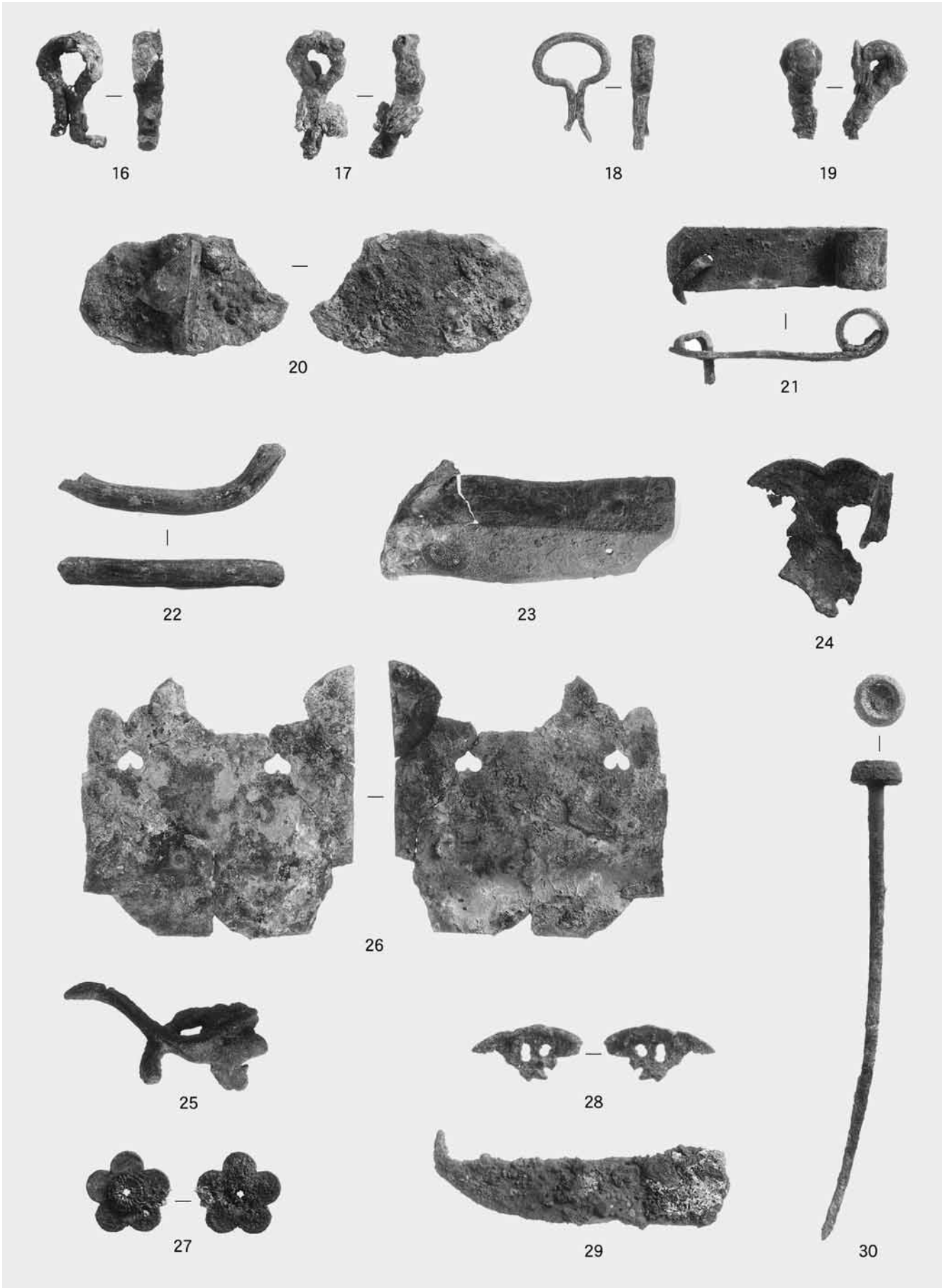


図版31　土壙SK01（倉庫跡）
中世陶器

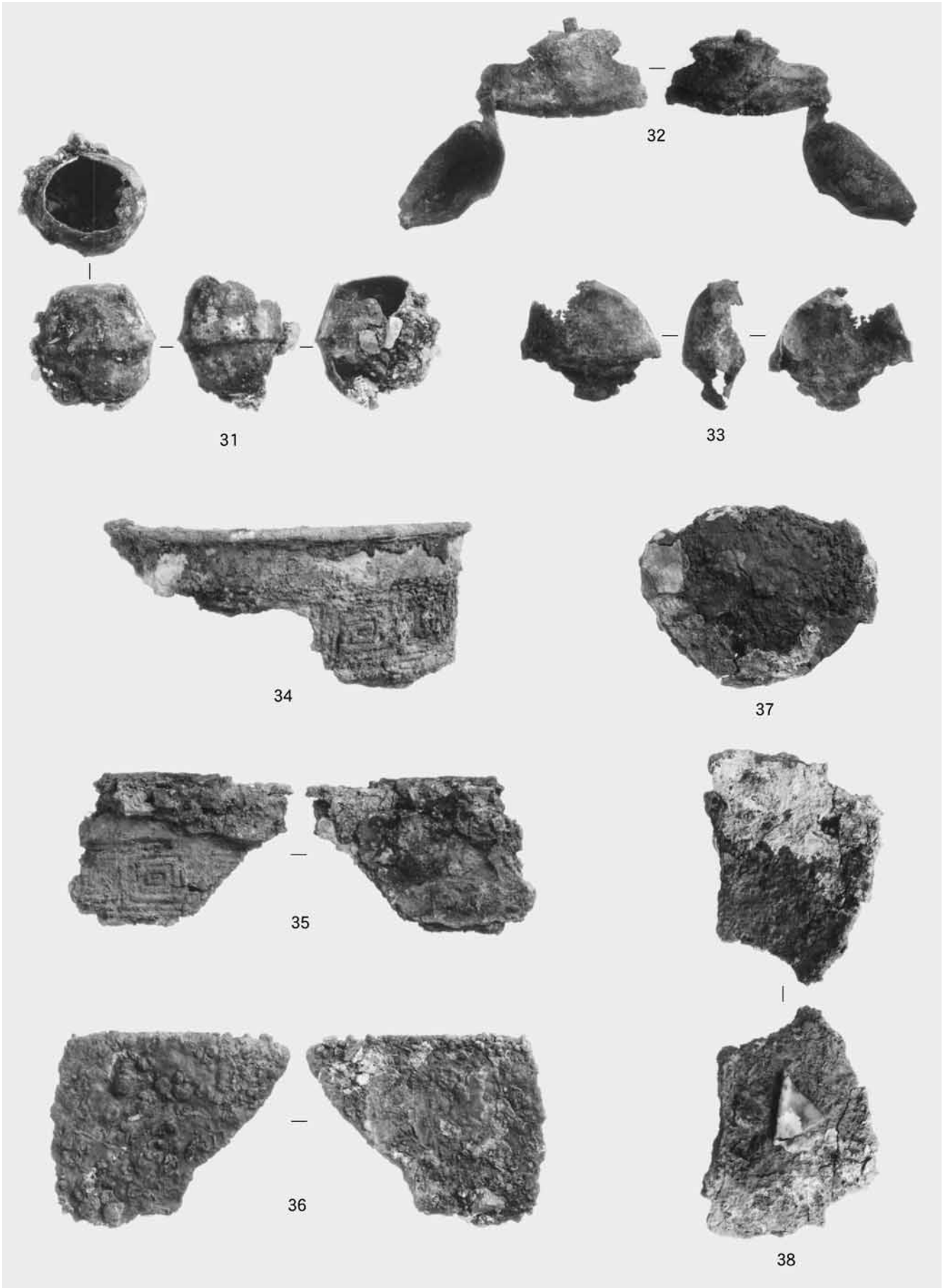


図版32　土壙SK01（倉庫跡）
沖縄産無釉陶器、本土産磁器、円盤状製品

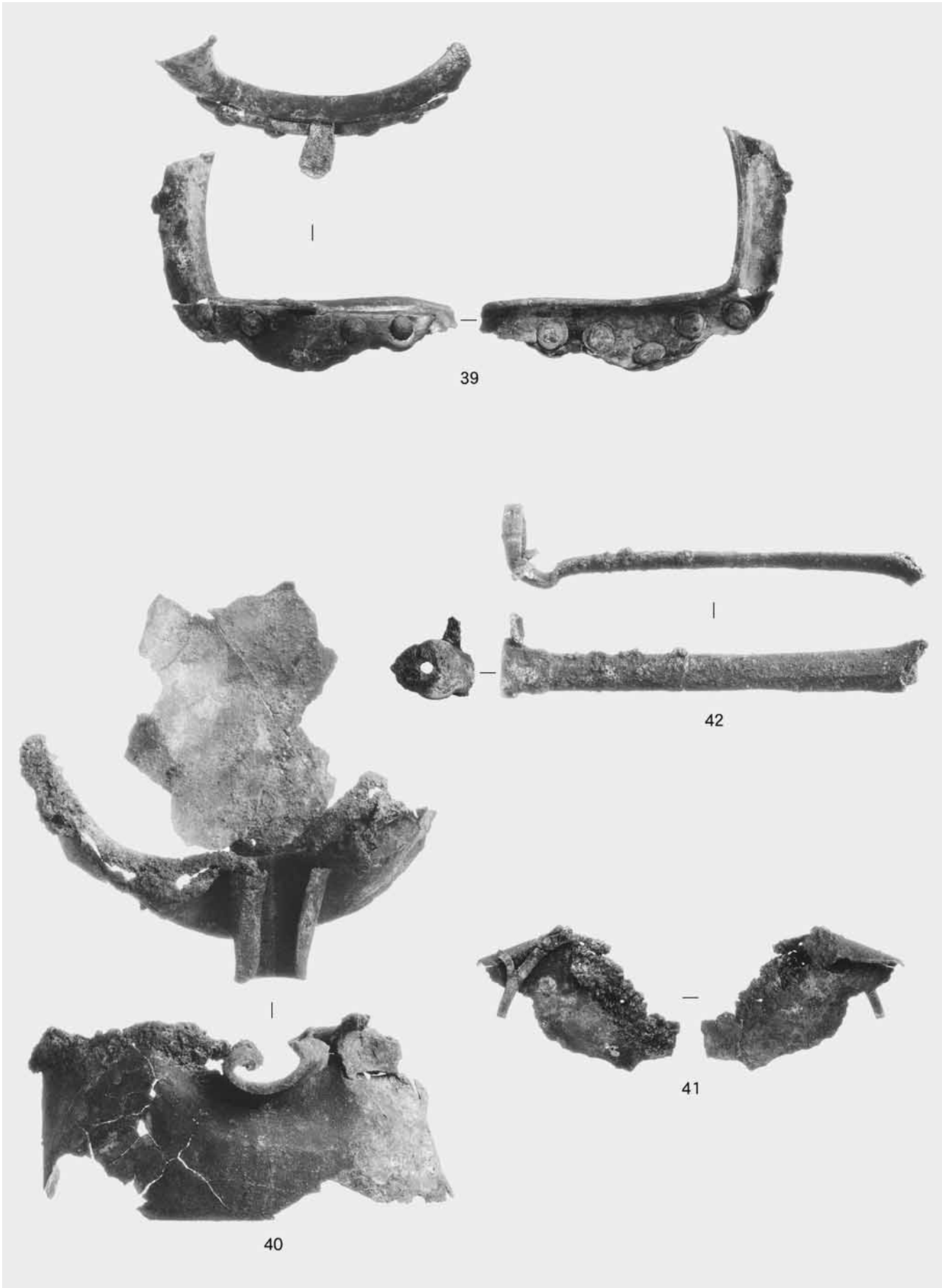
図版33　国指定重要文化財（保存処理未）①
金属製品



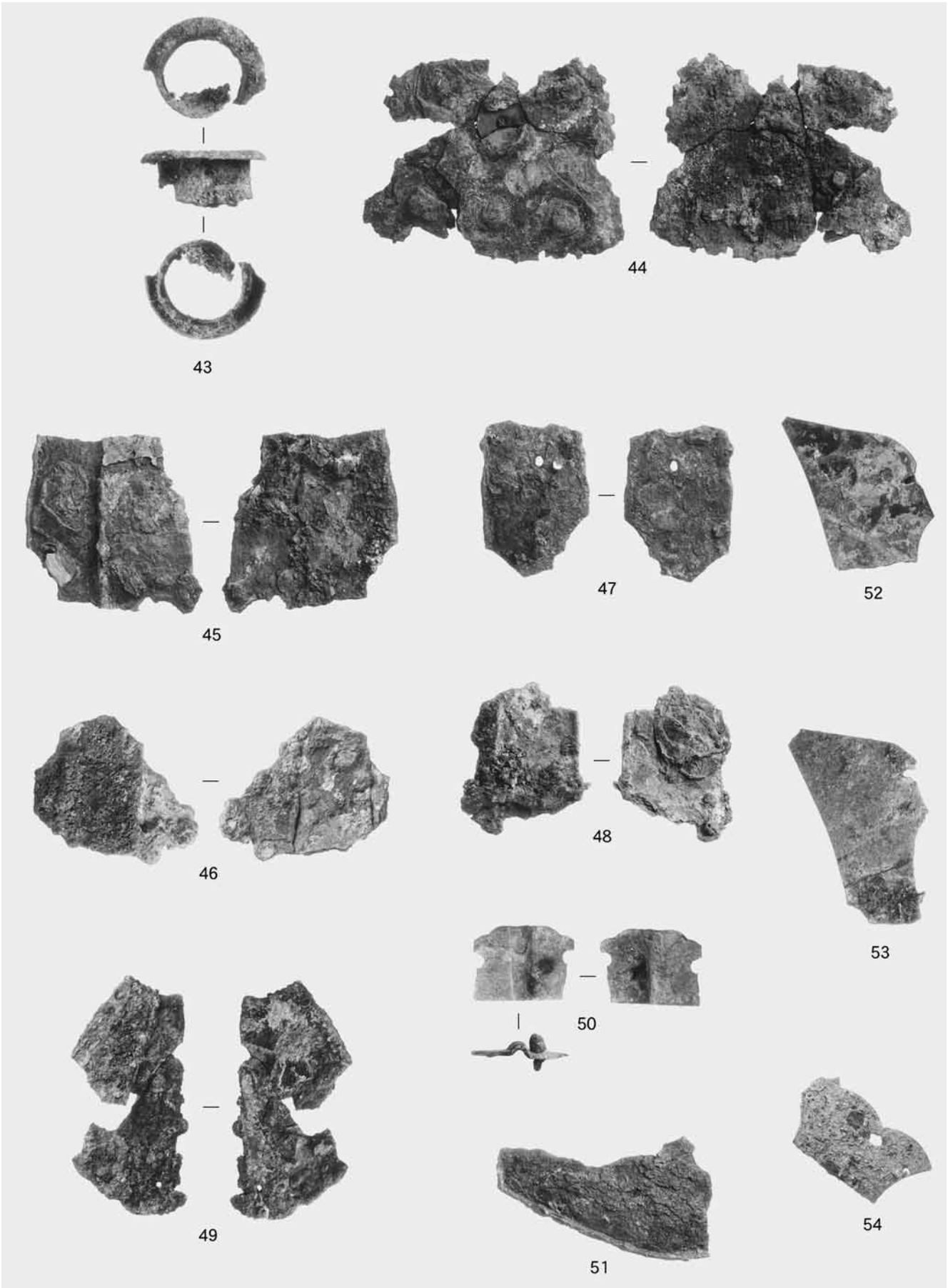
図版34　国指定重要文化財（保存処理未）②
金属製品



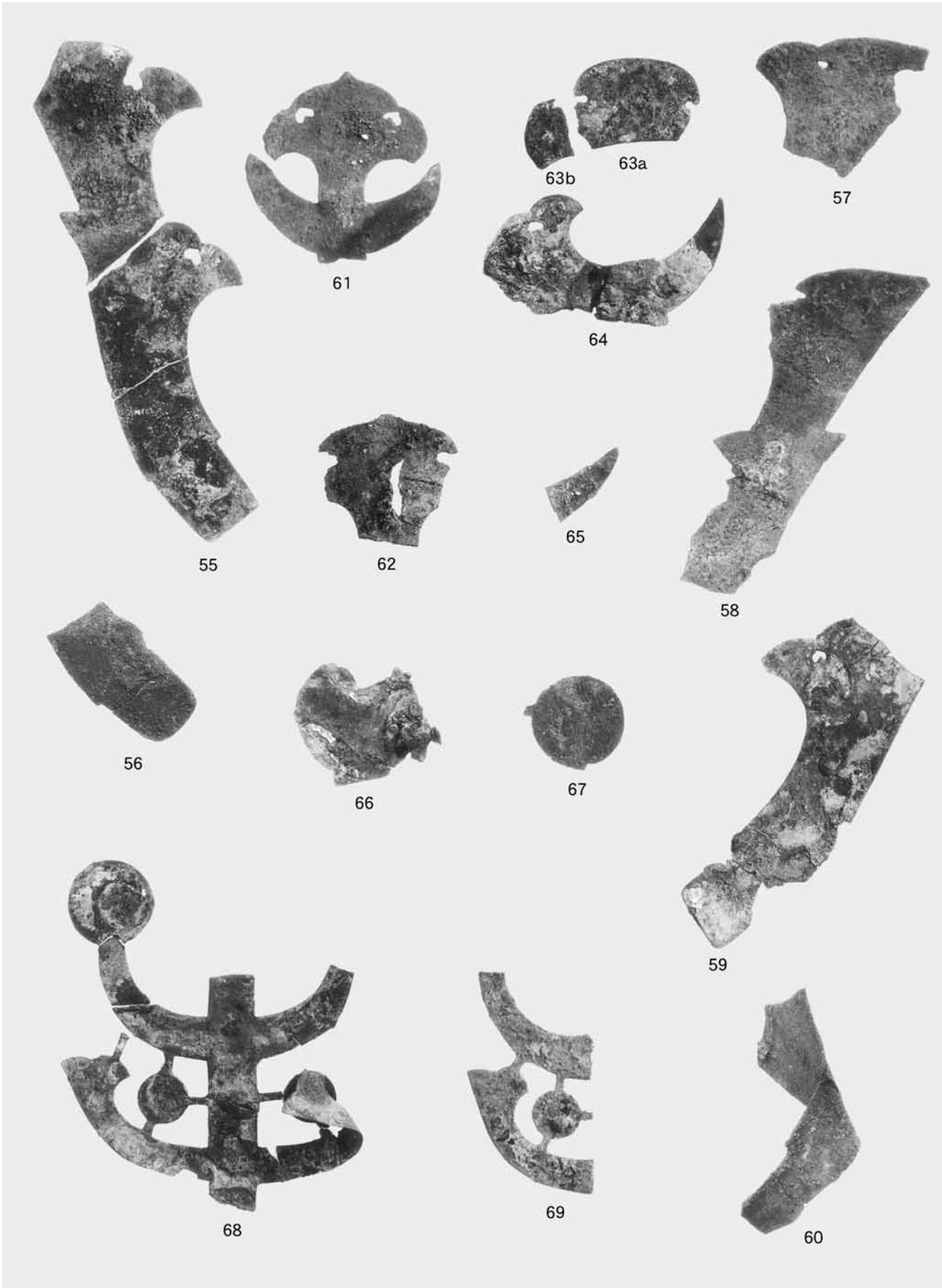
図版35　国指定重要文化財（保存処理未）③
金属製品



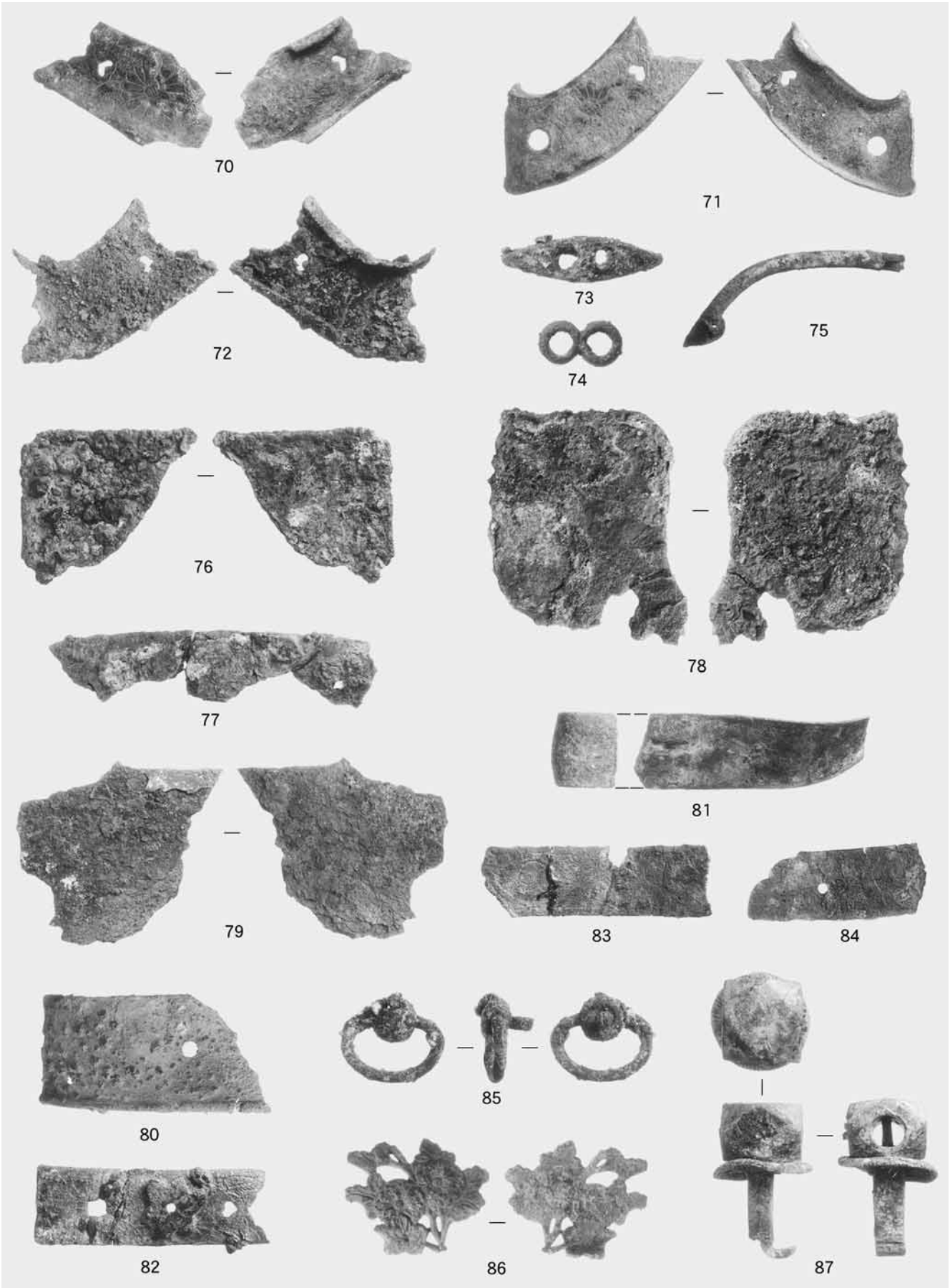
図版36　国指定重要文化財（保存処理未）④
金属製品



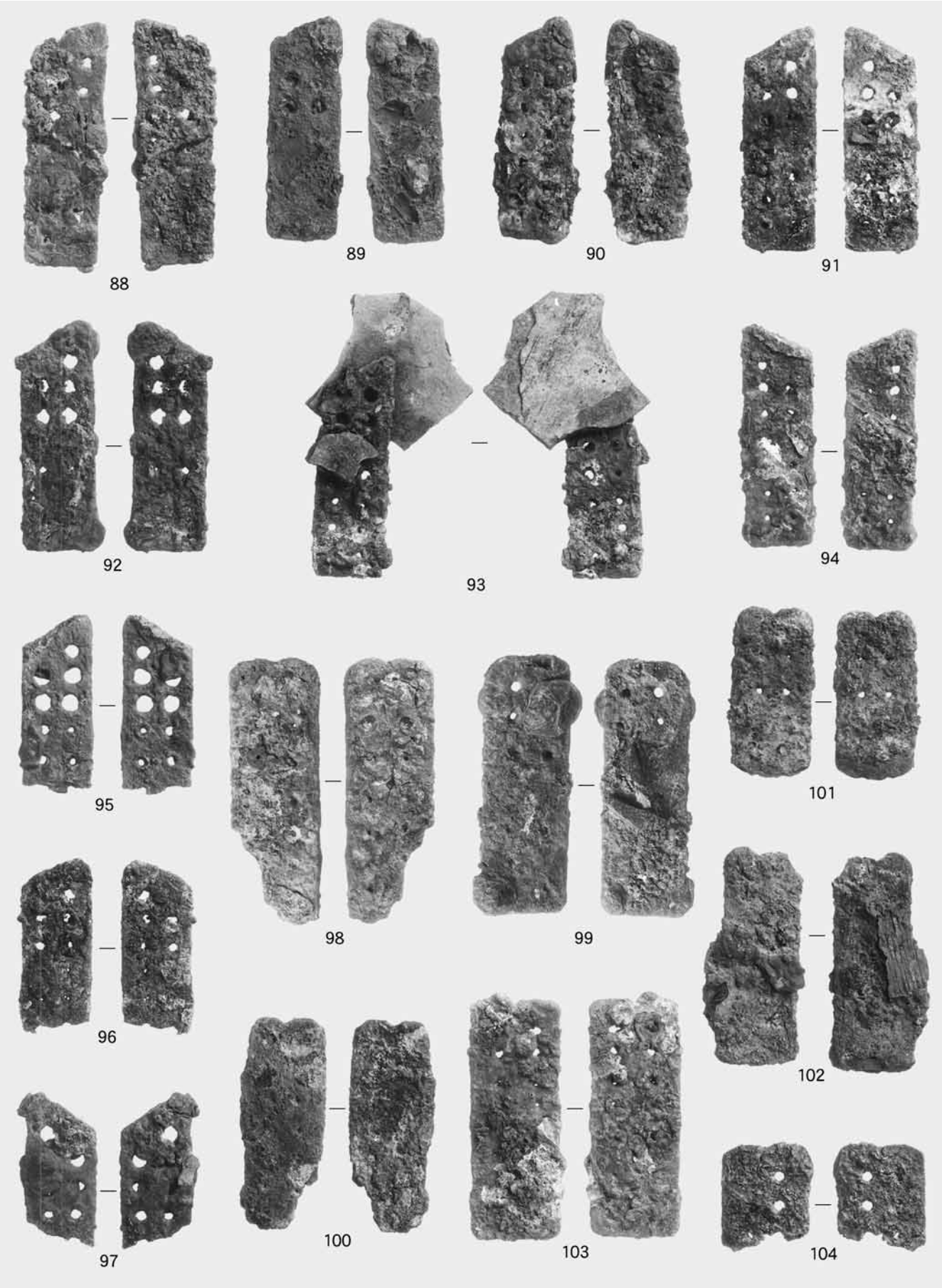
図版37　国指定重要文化財（保存処理未）⑤
金属製品



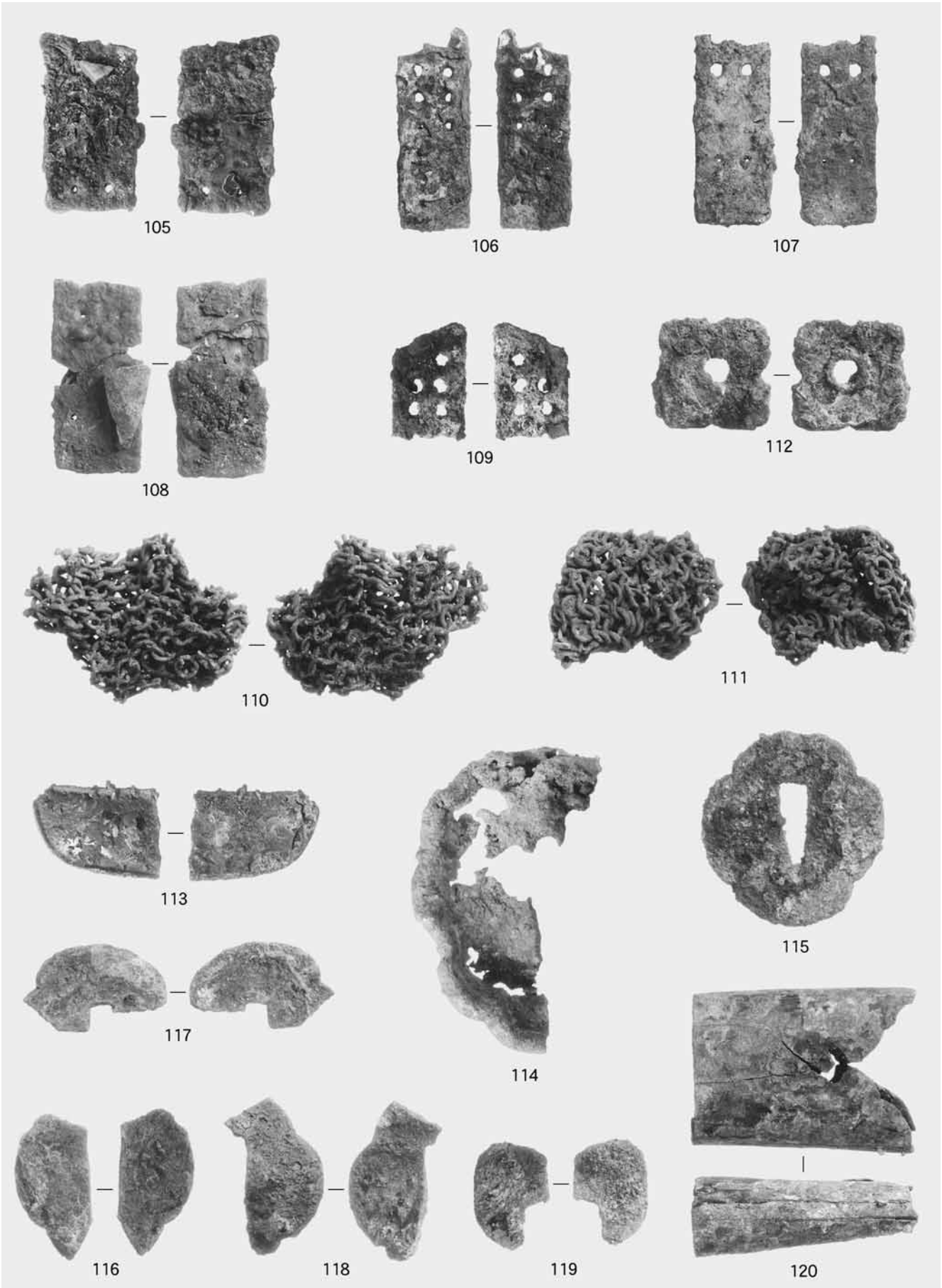
図版38　国指定重要文化財（保存処理未）⑥
金属製品



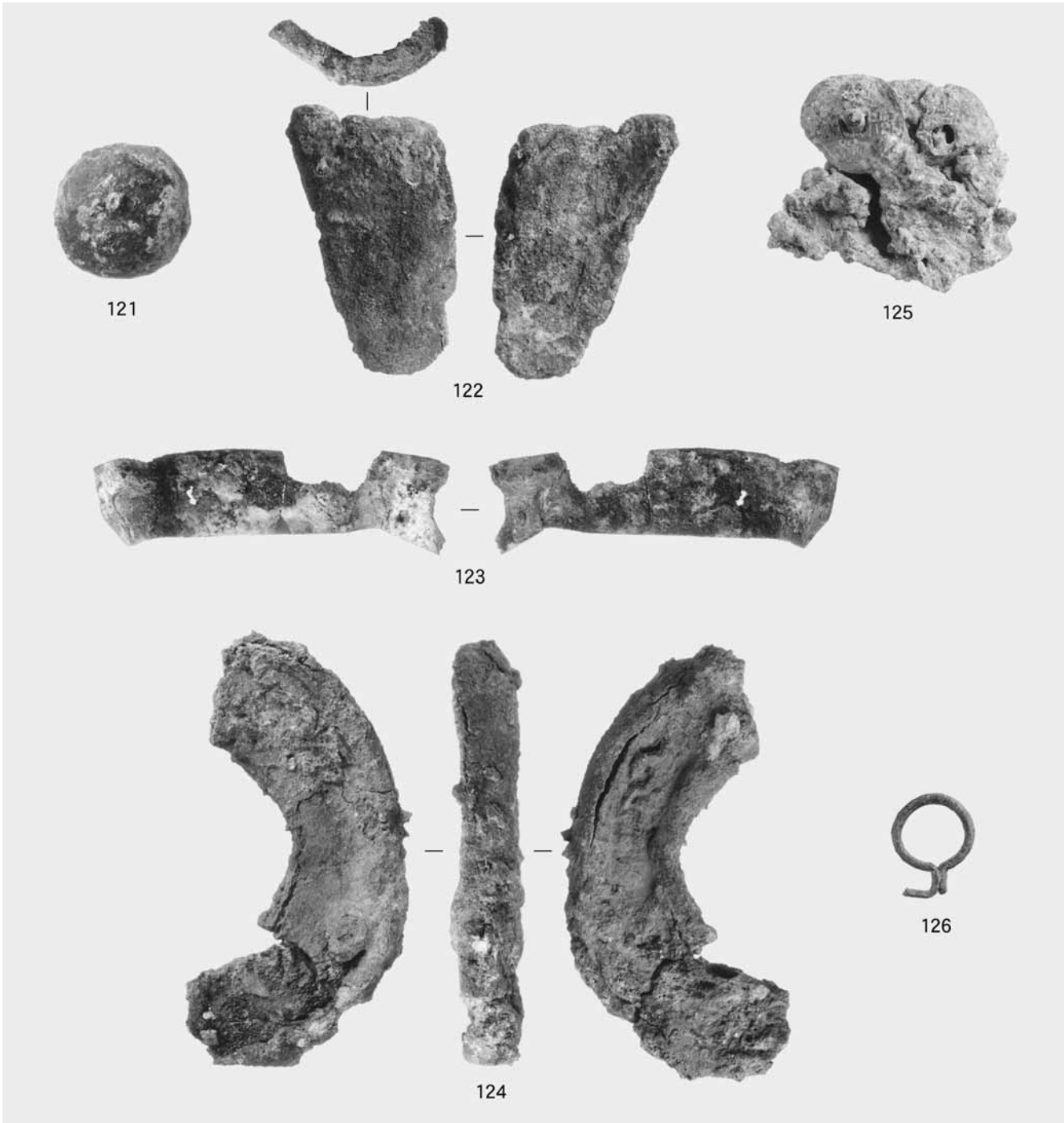
図版39　国指定重要文化財（保存処理未）⑦
金属製品



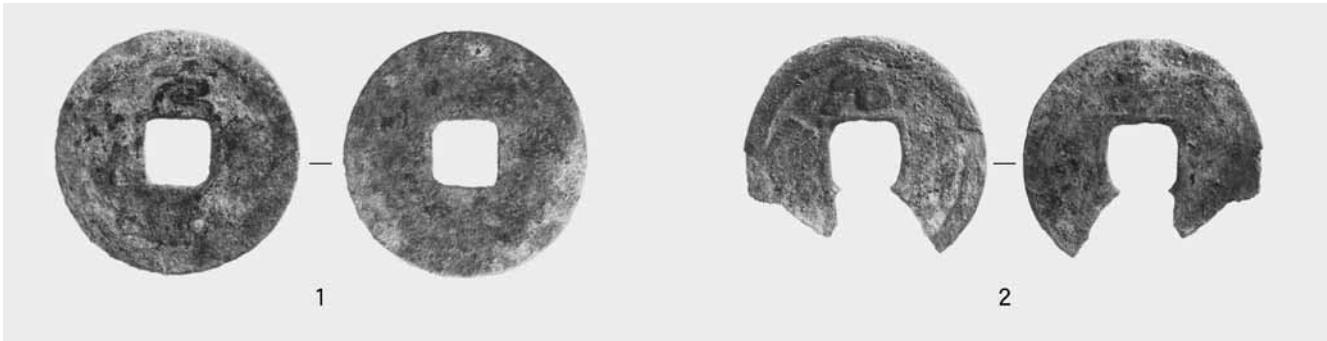
図版40　国指定重要文化財（保存処理未）⑧
金属製品



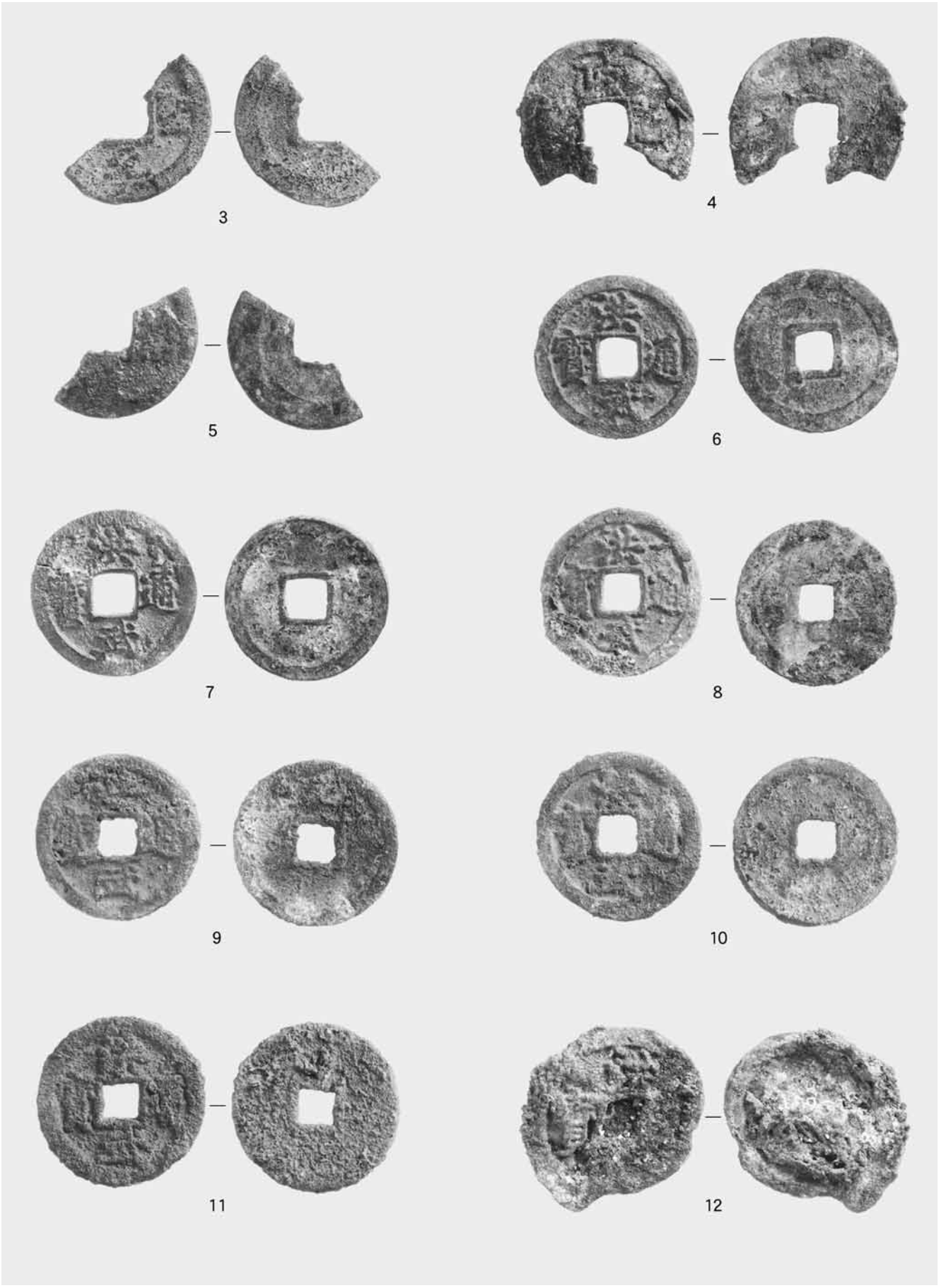
図版41　国指定重要文化財（保存処理未）⑨
金属製品



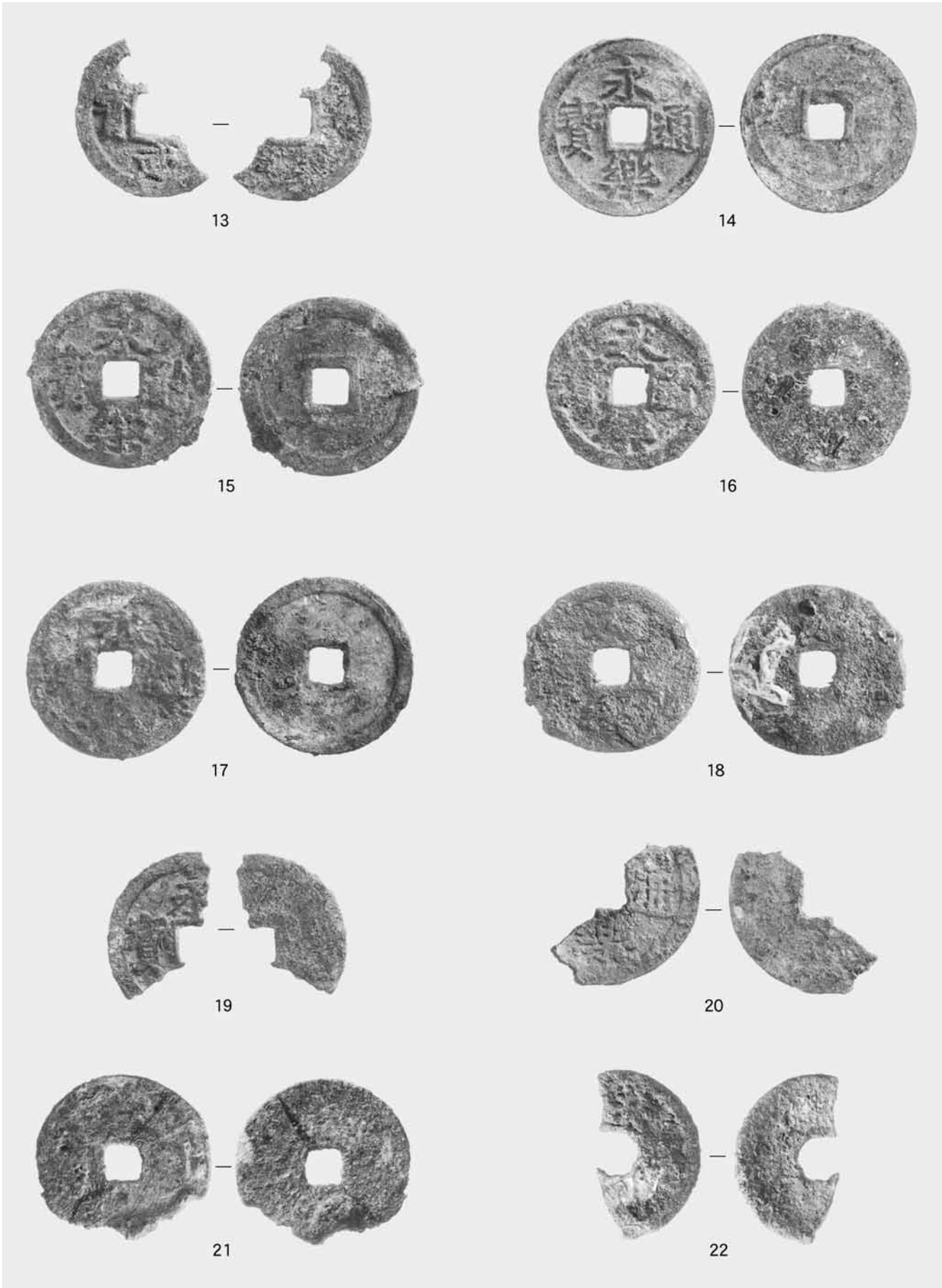
図版42　国指定重要文化財（保存処理未）⑩
金属製品



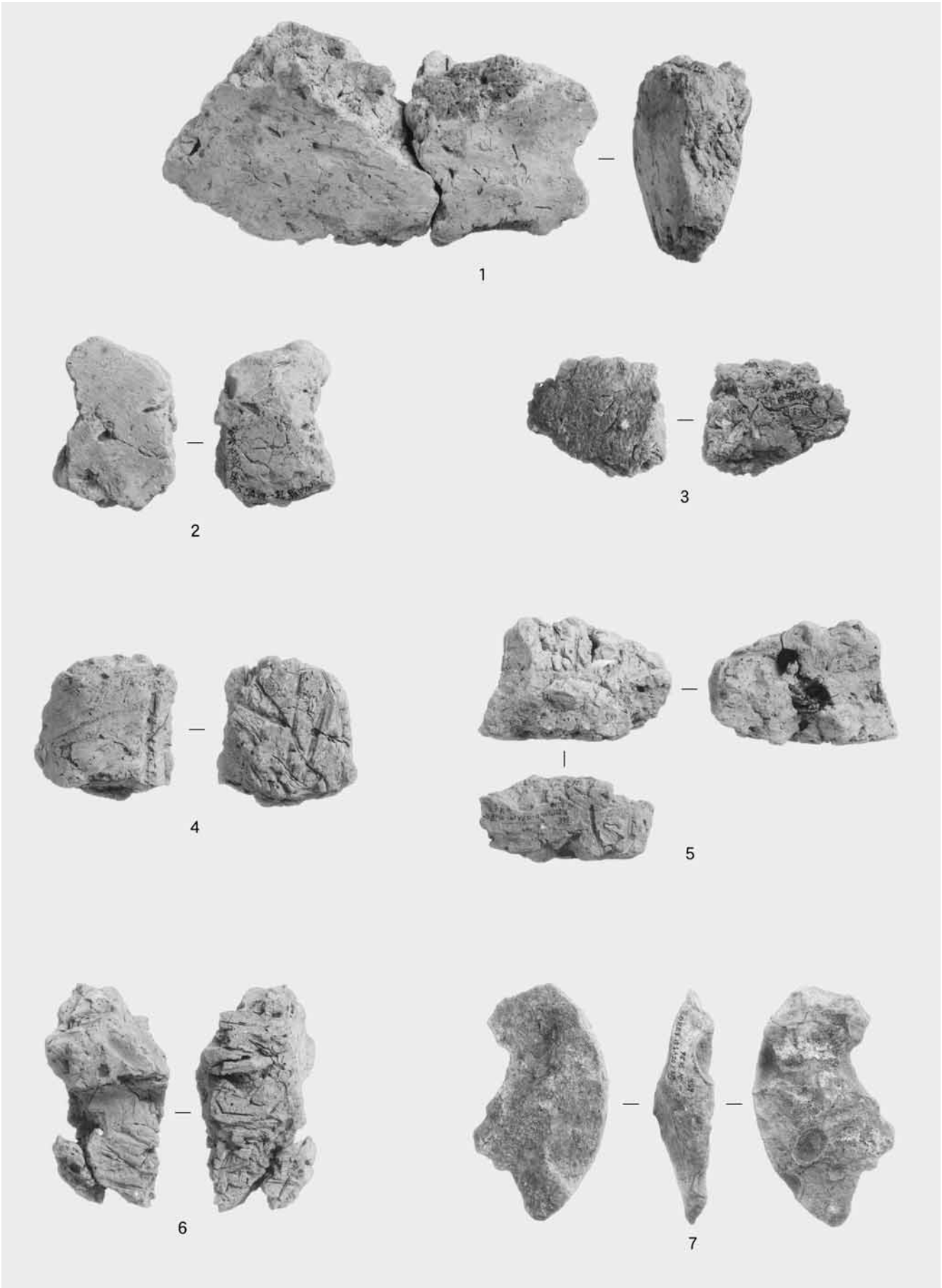
図版43　国指定重要文化財（保存処理未）⑪
銭貨



図版44　国指定重要文化財（保存処理未）⑪・⑫
銭貨

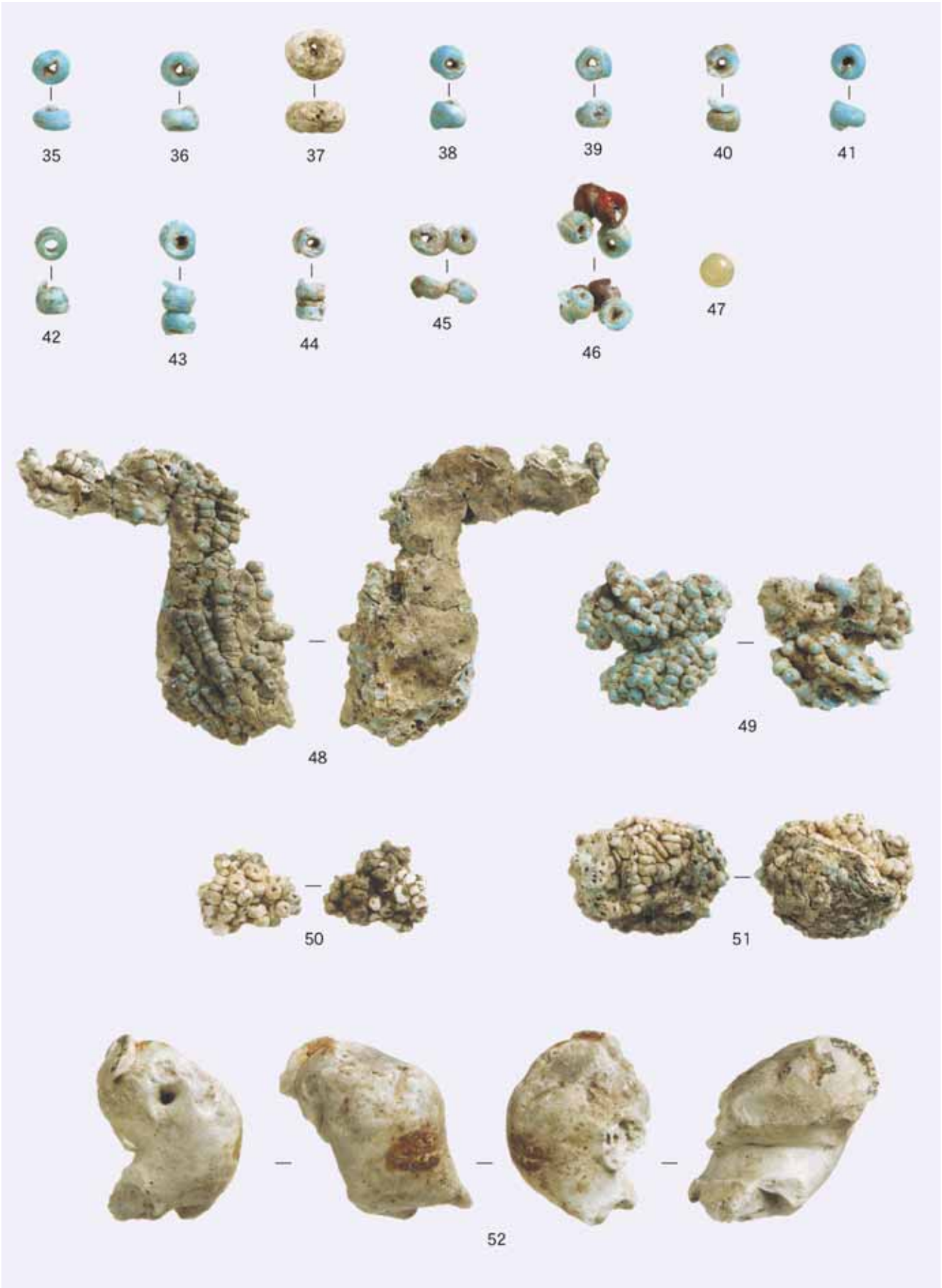


図版45　国指定重要文化財（保存処理未）⑫-⑬
銭貨

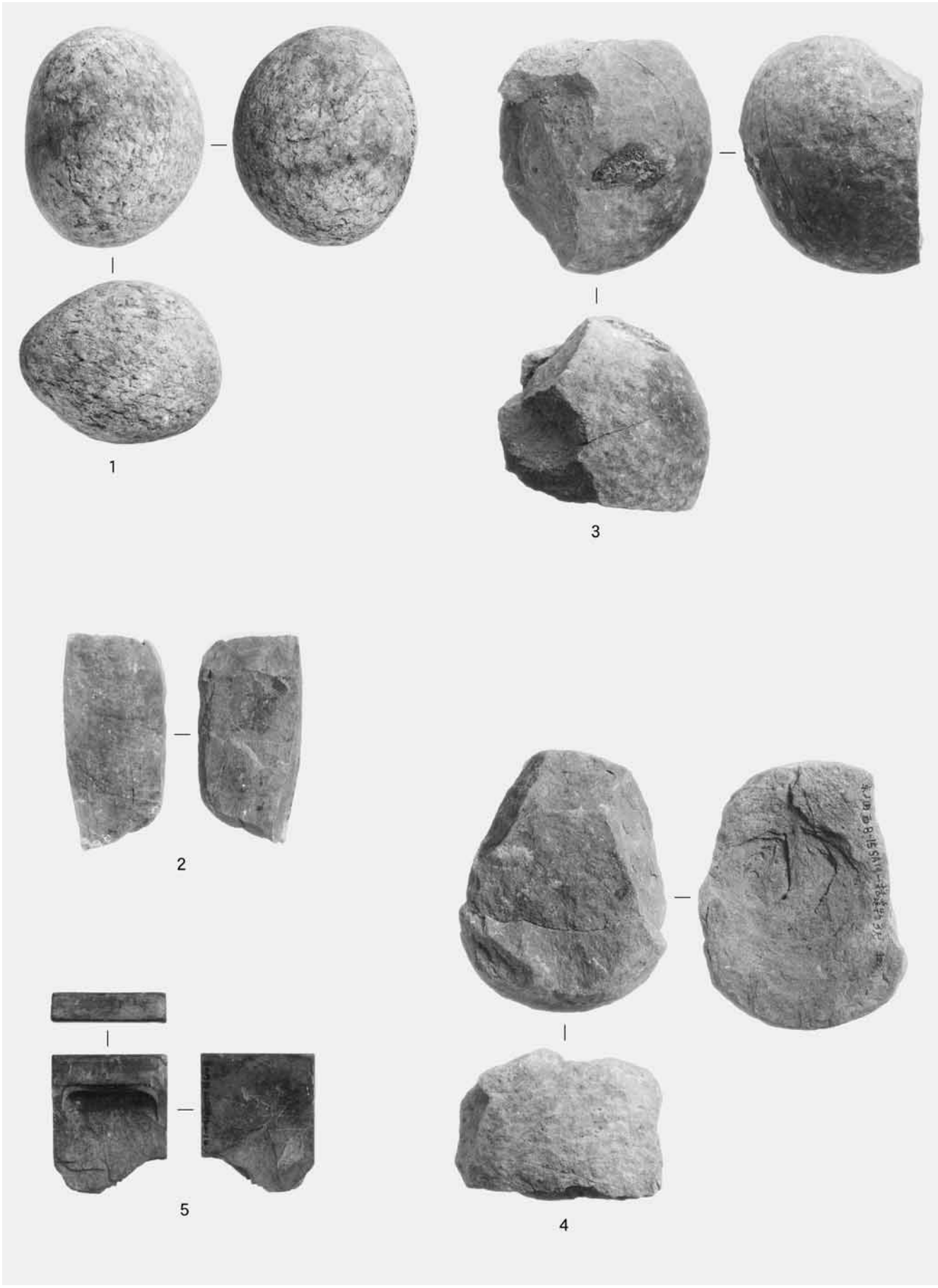


図版46　土壙SK01（倉庫跡）
炉壁、羽口

図版47　国指定重要文化財（保存処理未）⑭
ガラス玉



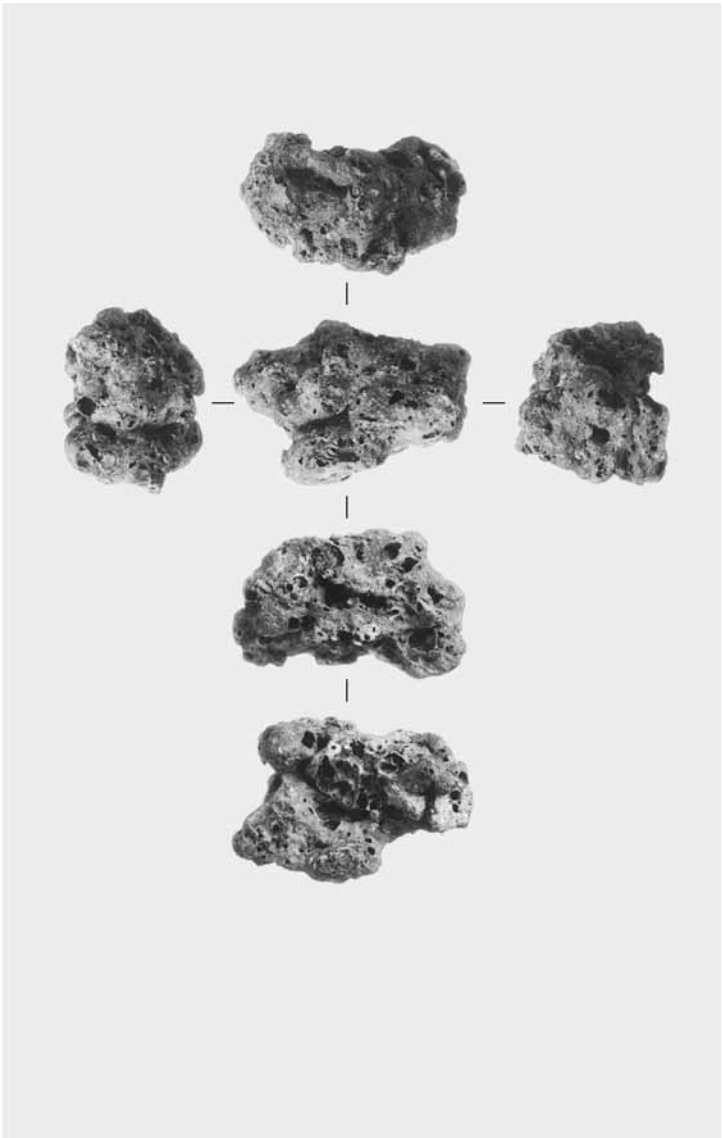
図版48　国指定重要文化財（保存処理未）⑮
ガラス玉



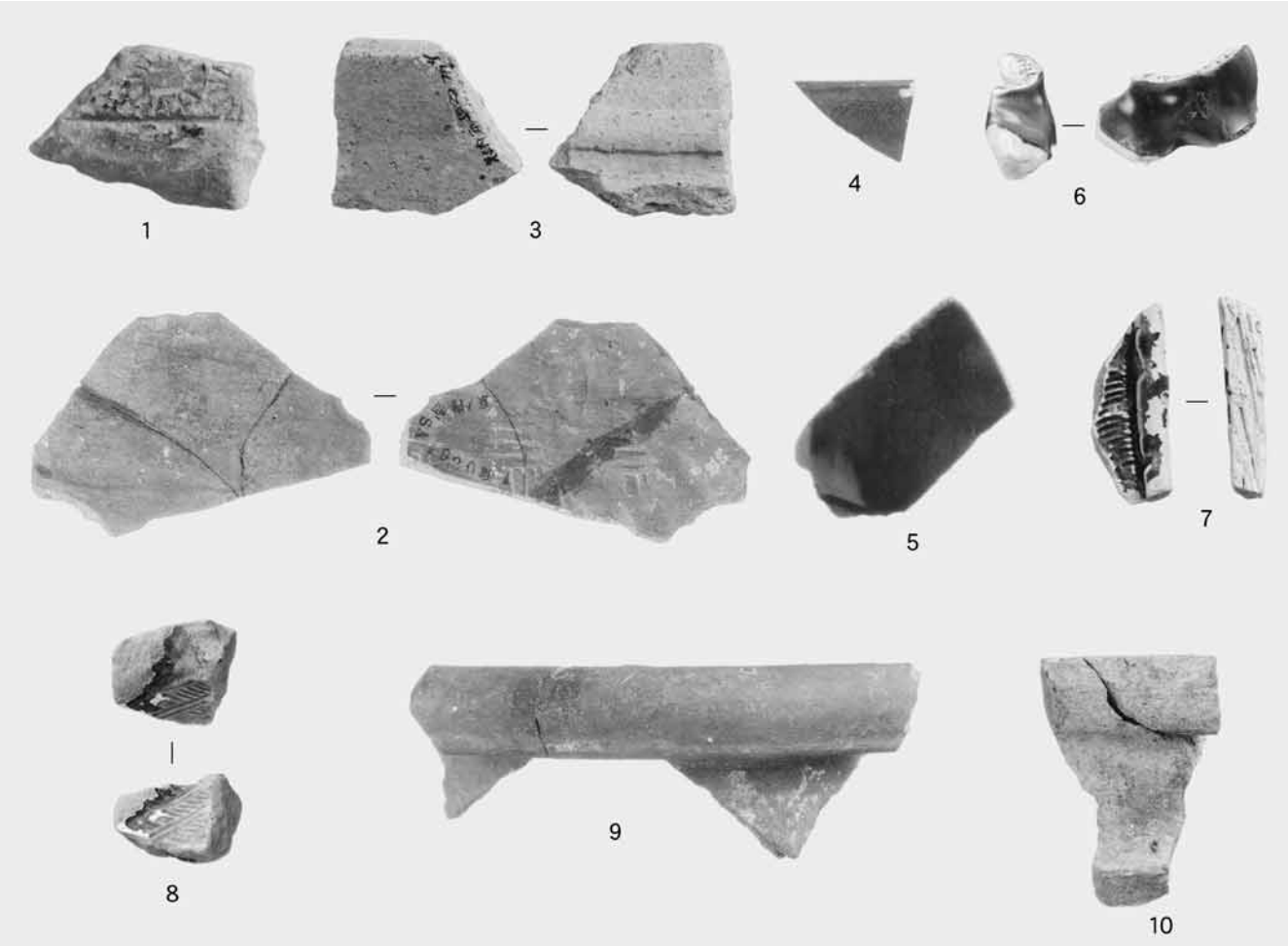
図版49　土壙SK01（倉庫跡）
石器・石製品

図版50　土壙SK01（倉庫跡）
木製品

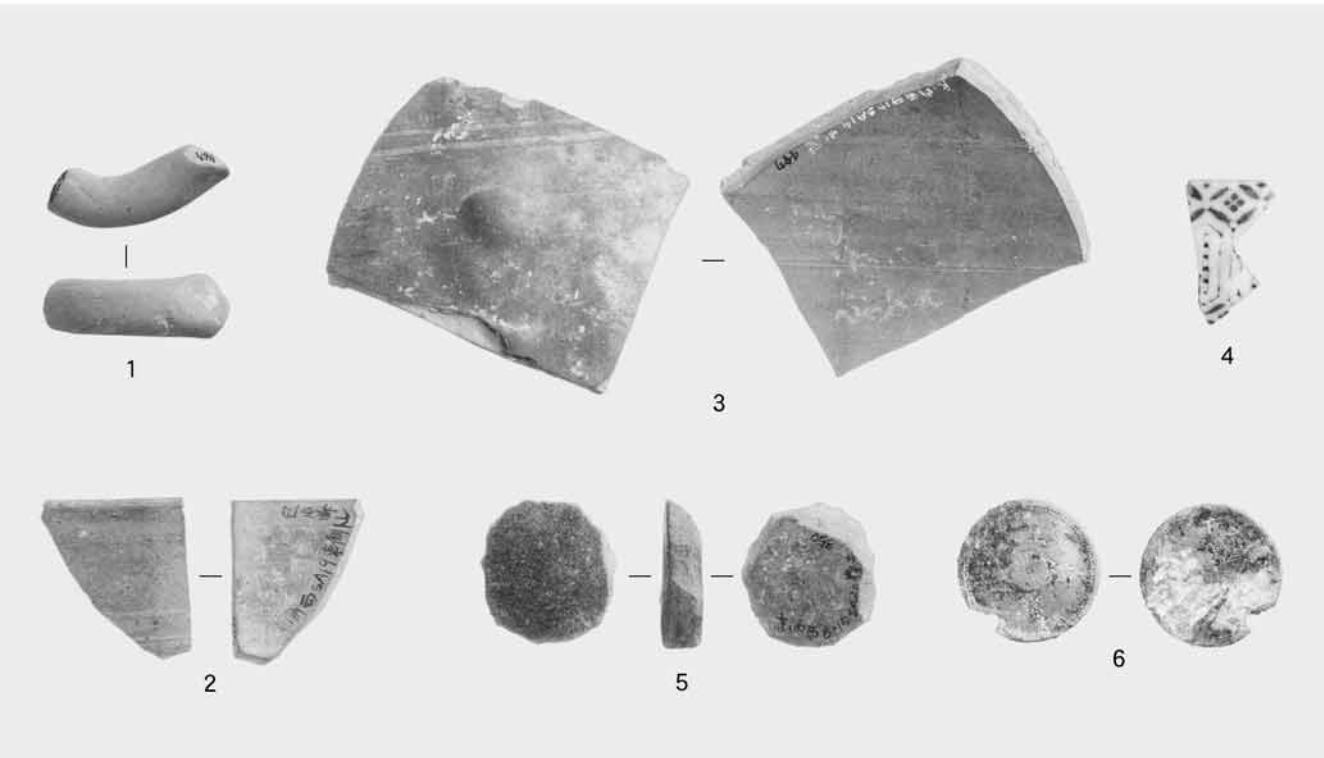
図版51　土壙SK01（倉庫跡）
骨製品



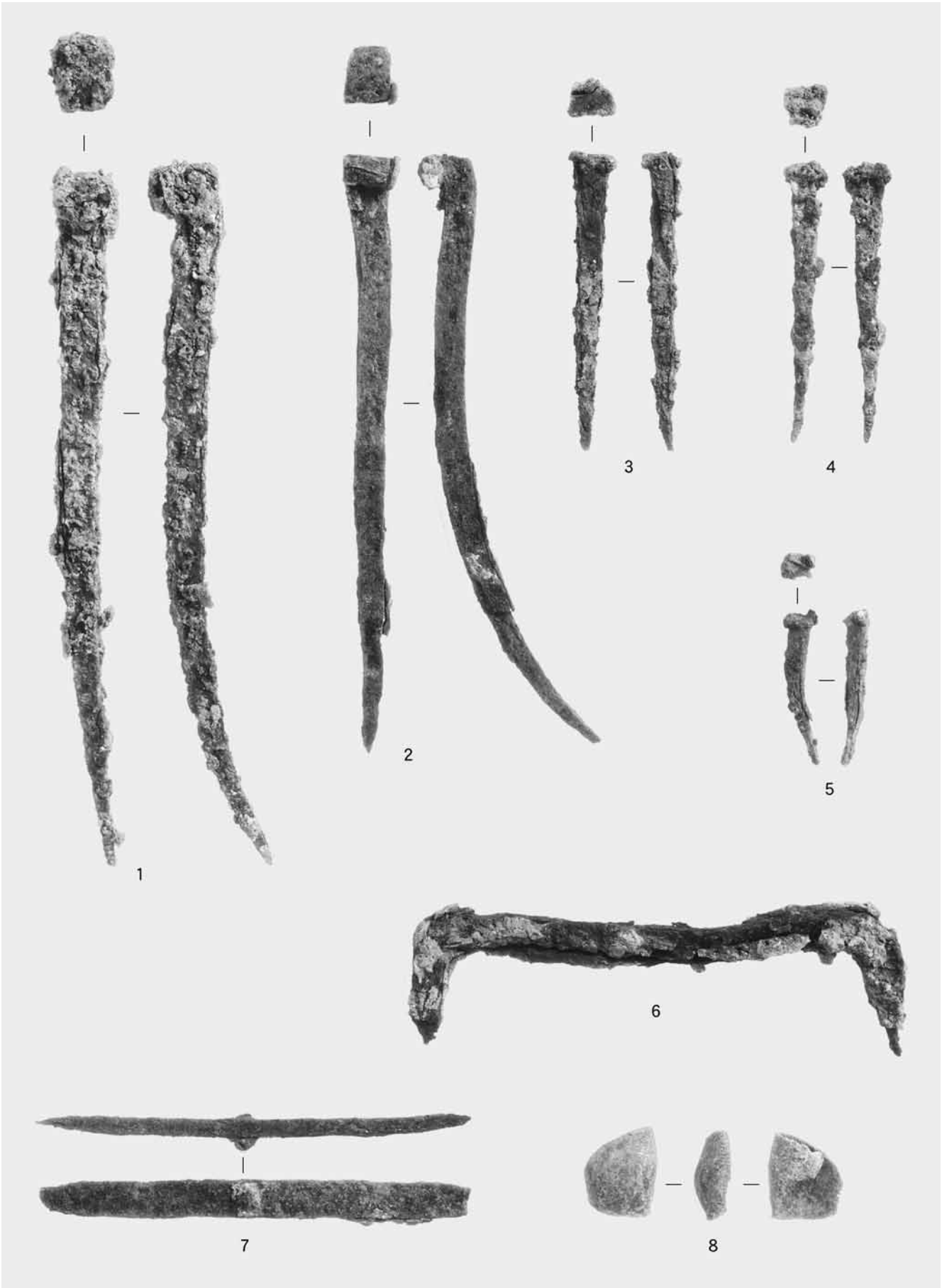
図版52　土壙SK01（倉庫跡）
ガラス質の滓



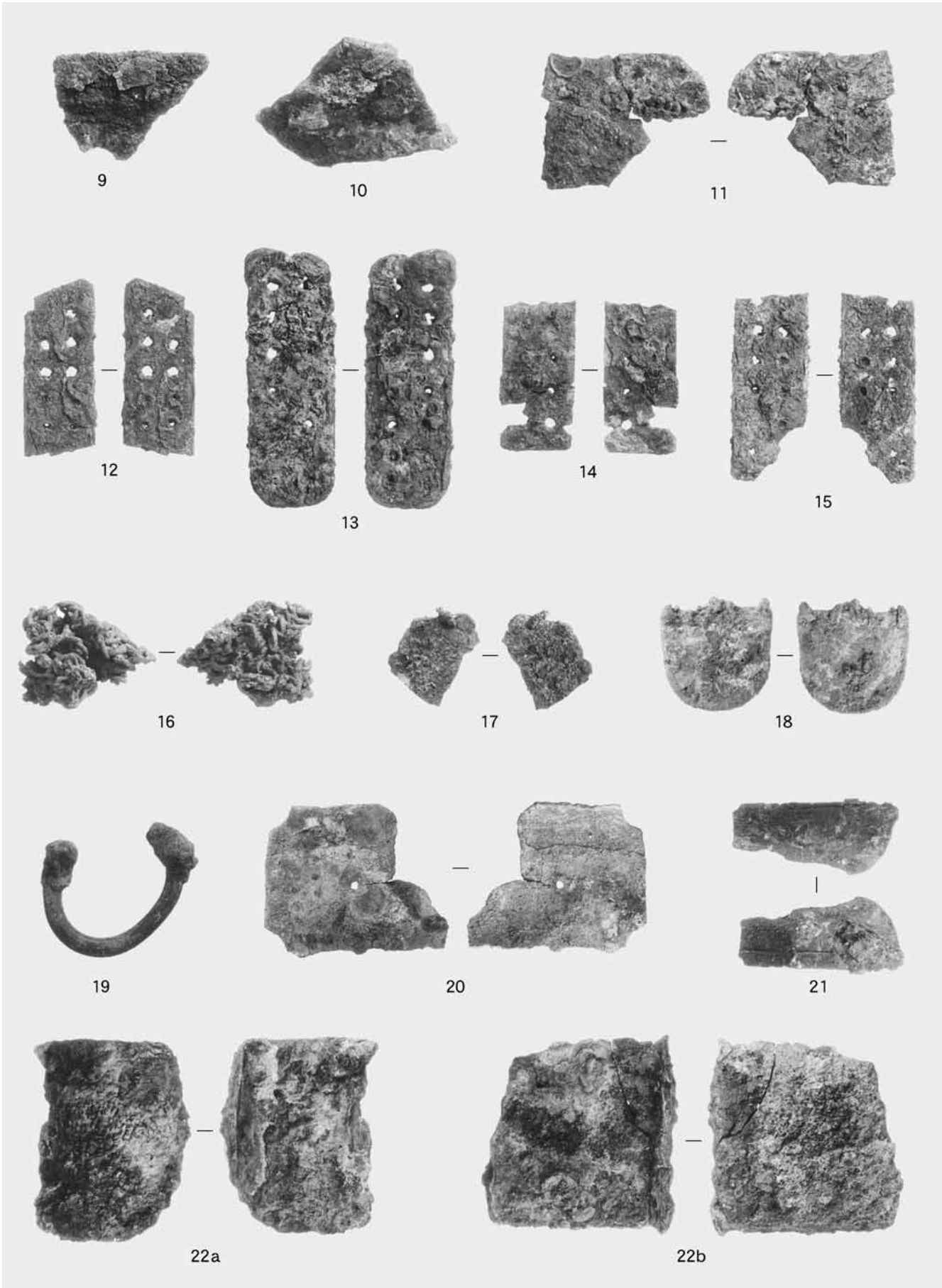
図版53　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか出土品①
瓦質土器、須恵器、中国産褐釉陶器、黒釉陶器、瑠璃釉、三彩、沖縄産無釉陶器、中世陶器



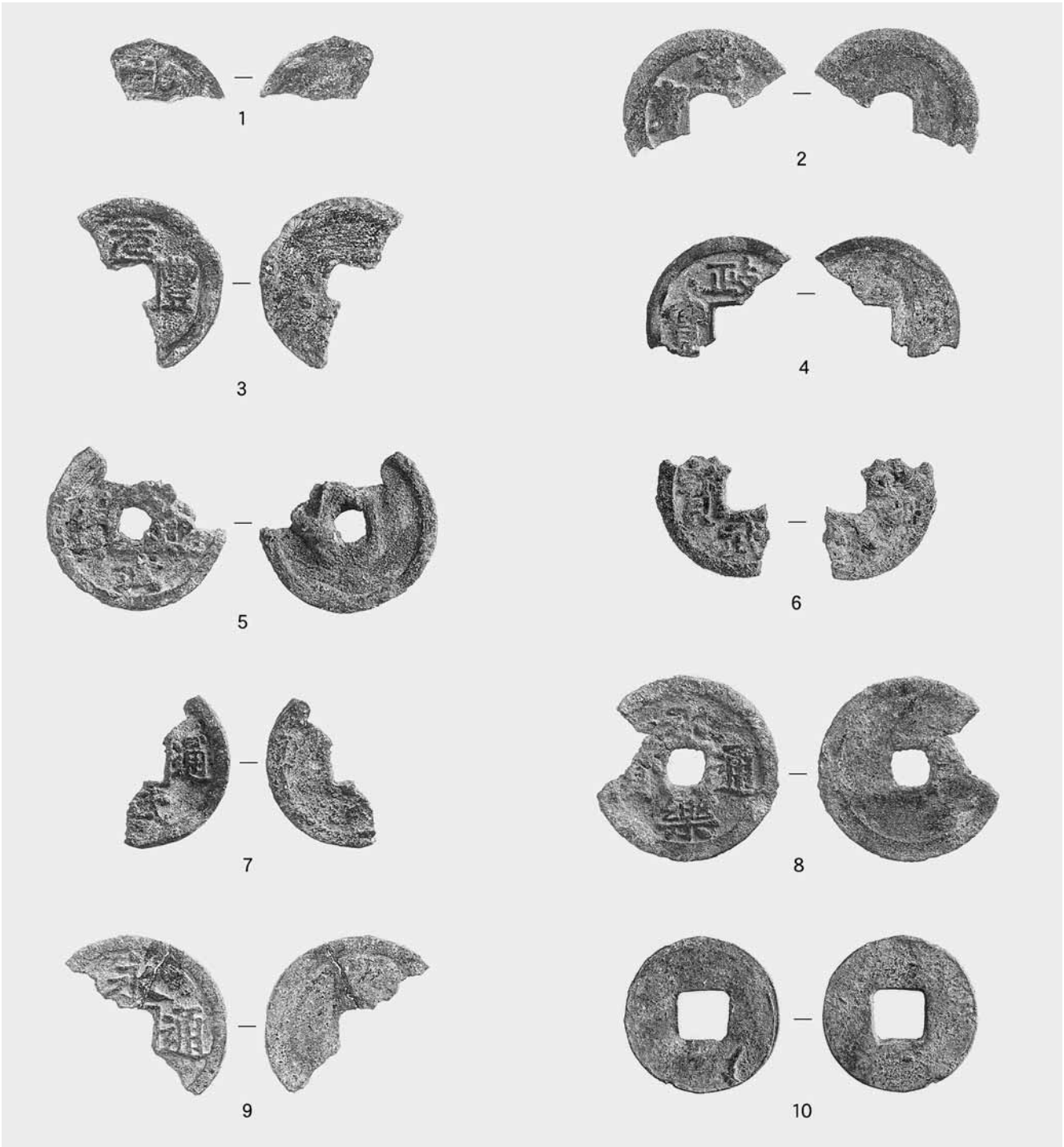
図版54　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか出土品②
陶質土器、沖縄産無釉陶器、本土産磁器、円盤状製品、近・現代の銭貨



図版55　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか出土品③
金属製品



図版56　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか出土品④
金属製品

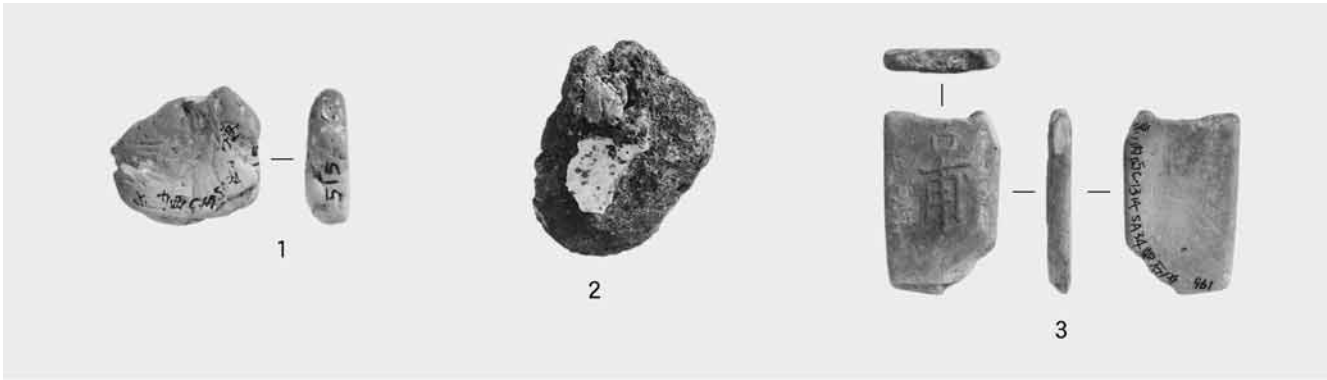


図版57A　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか出土品⑤
銭貨

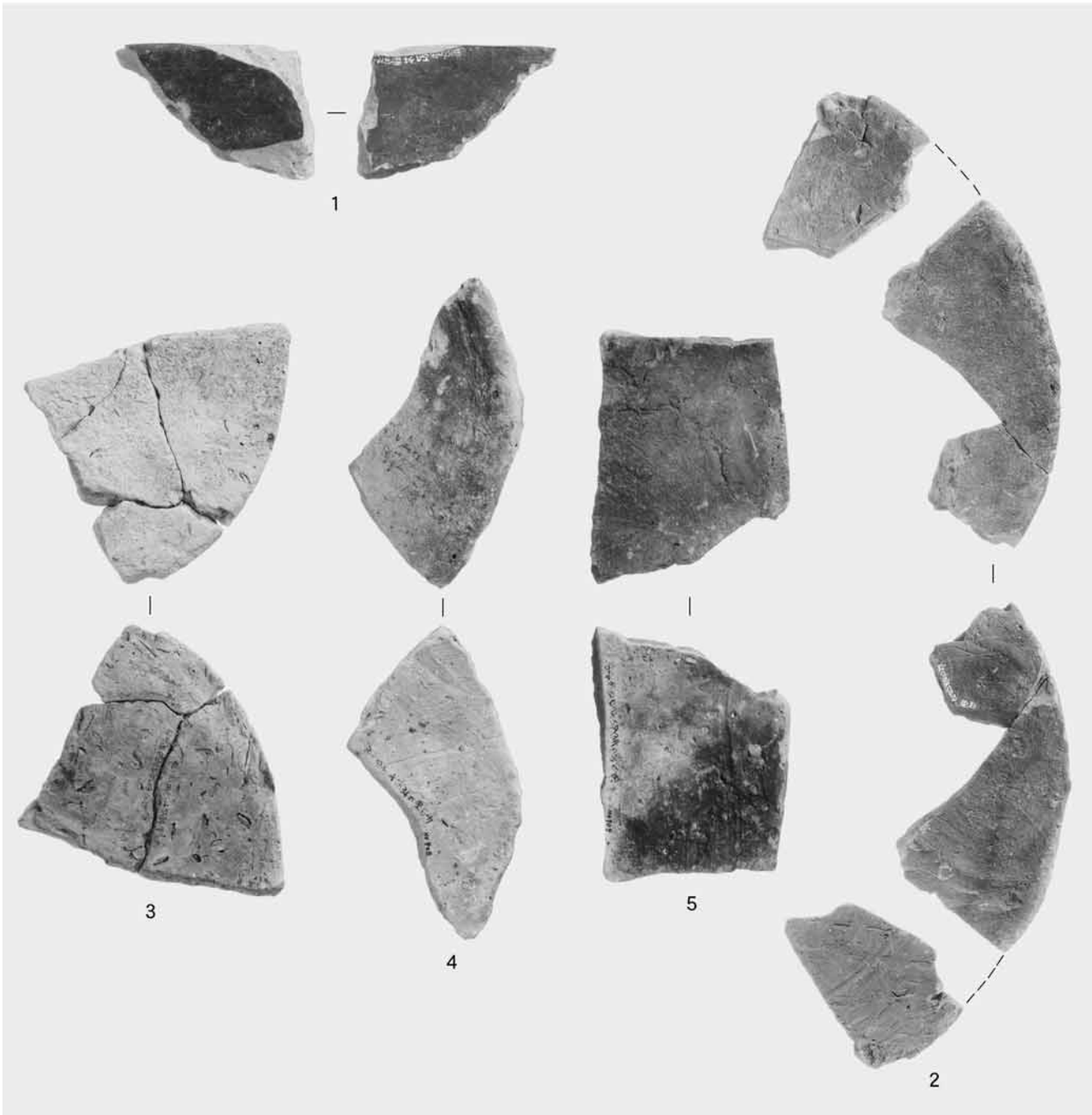
図版57B
図版57A掲載銭貨10の
軟X線透過写真

図版58　土壙SK01（倉庫跡）
覆土ほか出土品⑥
ガラス製品（勾玉）

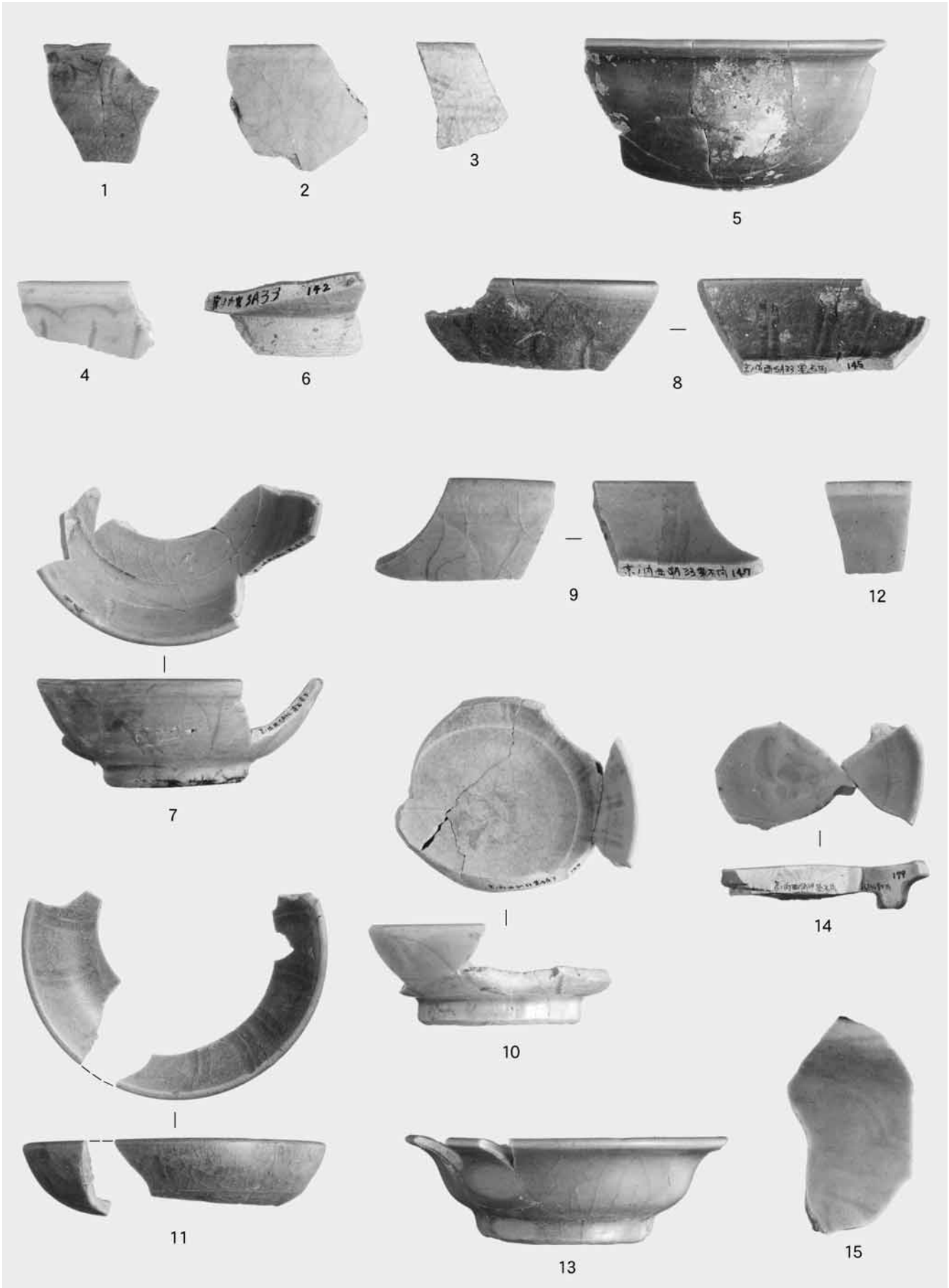
図版59　土壙SK01（倉庫跡）覆土ほか
出土品⑦　骨製品



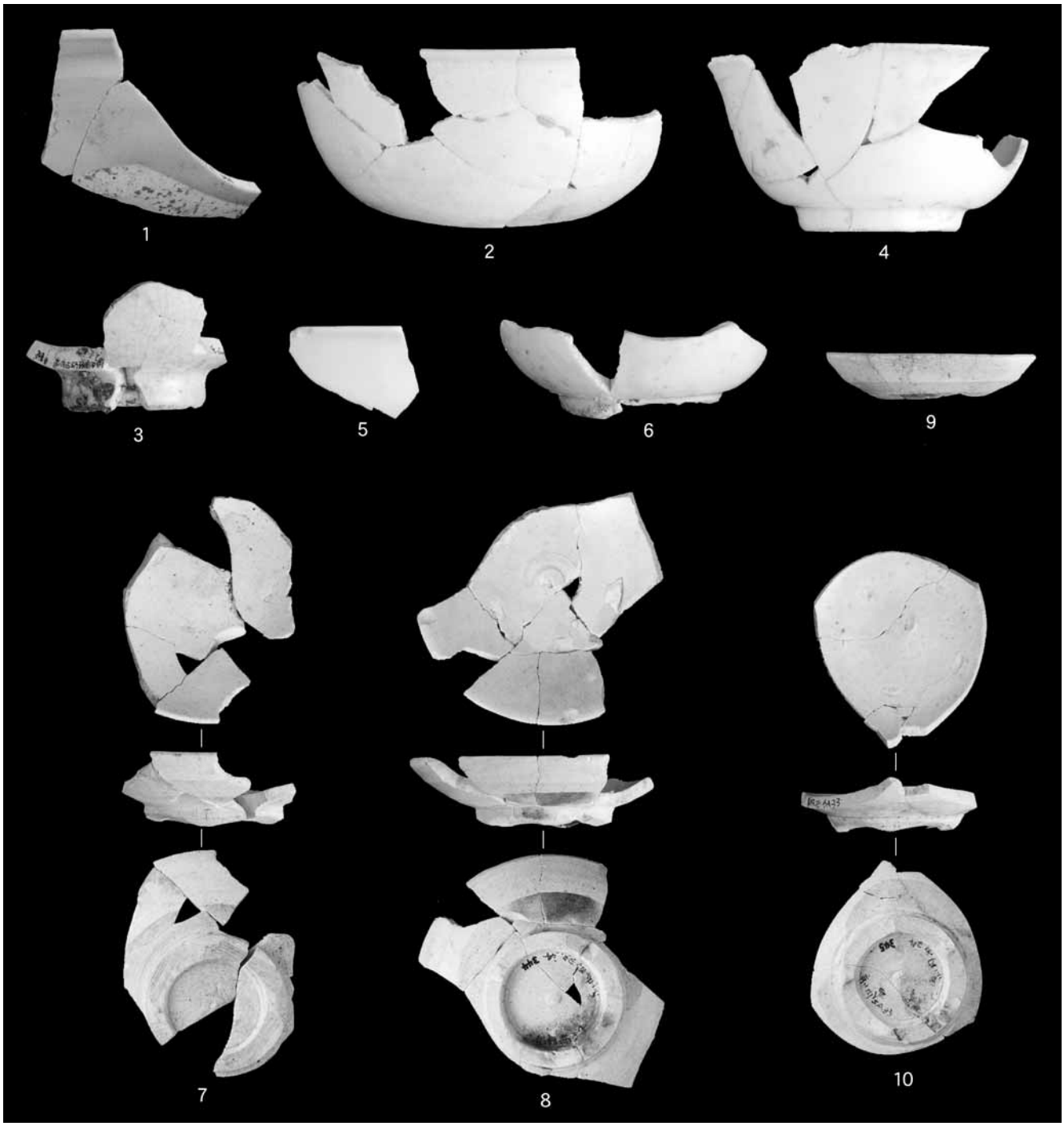
図版60　石積みSA33・34出土品①
土器、坩堝、土製品



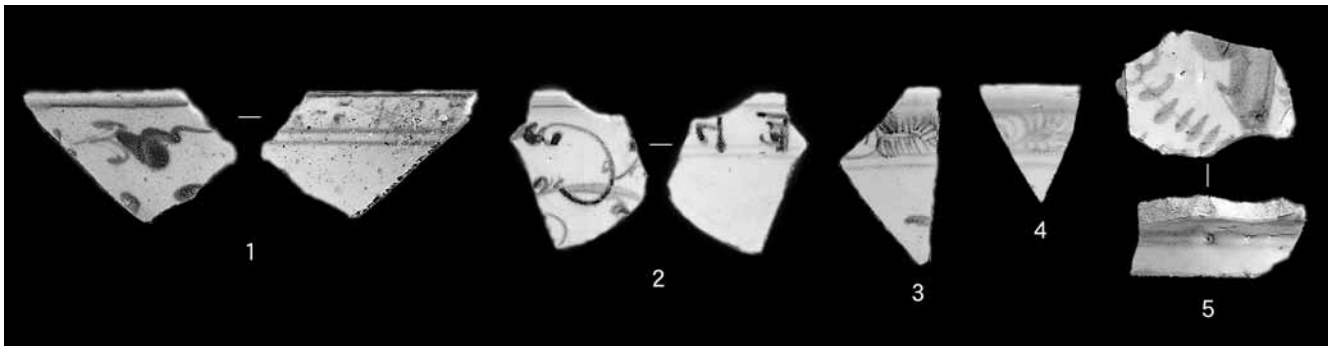
図版61　石積みSA33・34出土品②
瓦質土器



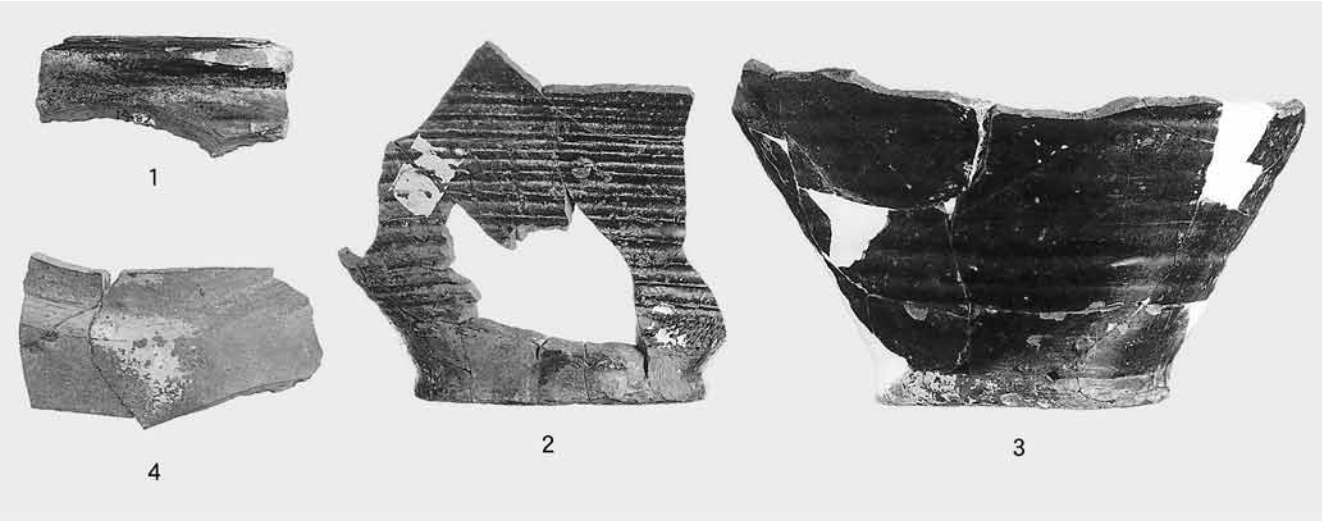
図版62　石積みSA33・34出土品③・④
青磁



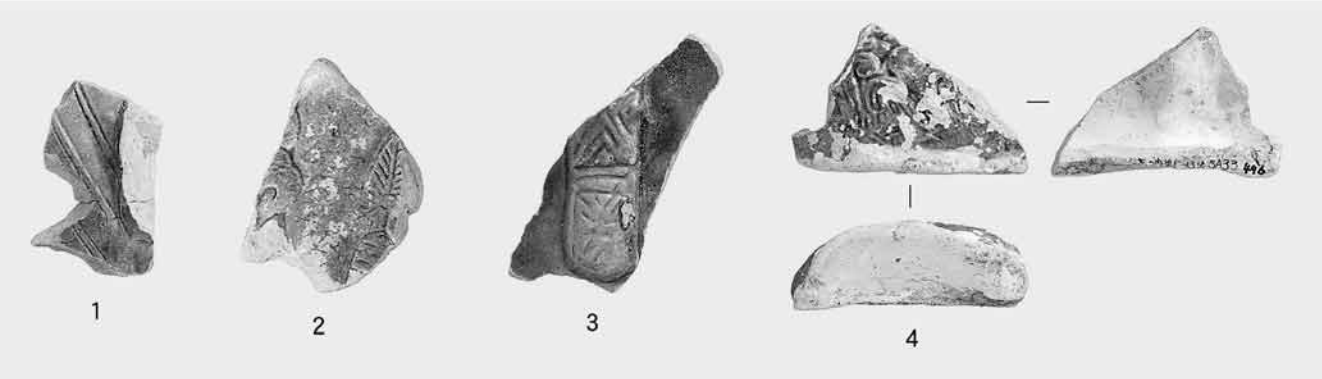
図版63　石積みSA33・34出土品⑤
白磁



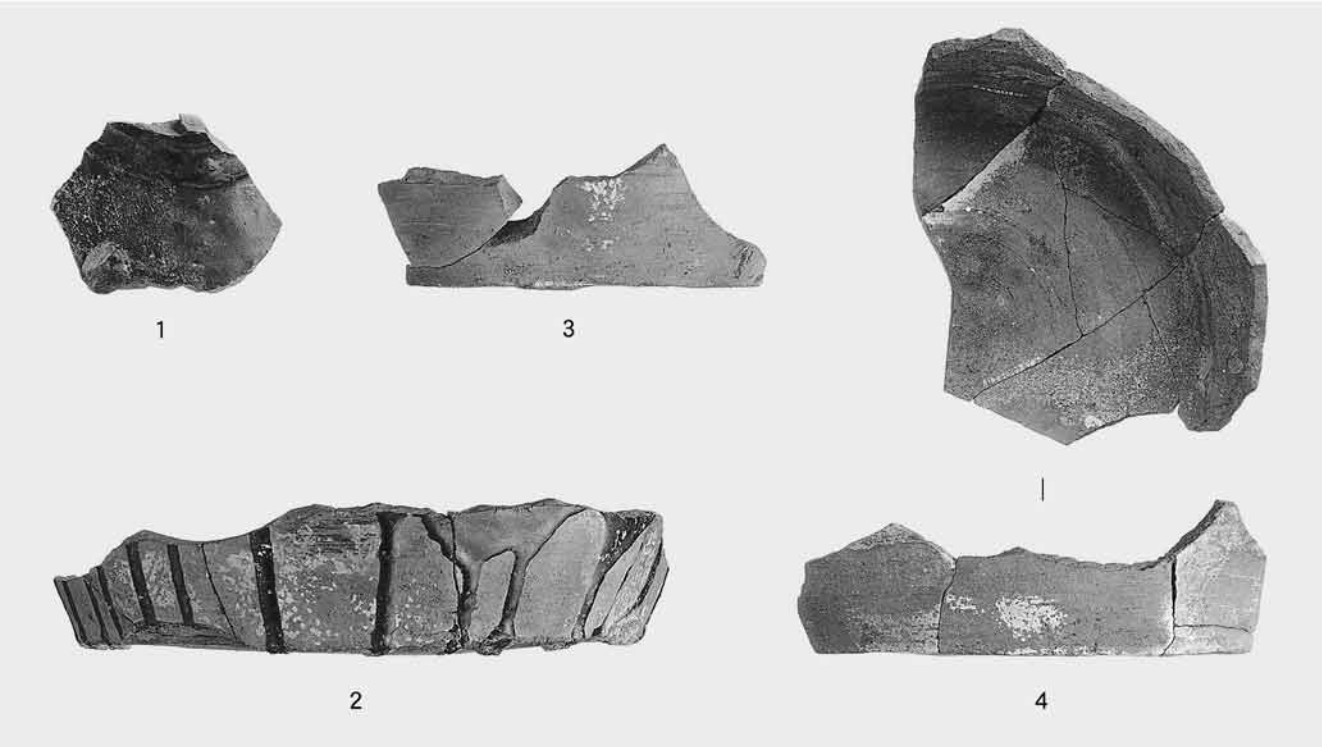
図版64　石積みSA33・34出土品⑥
青花



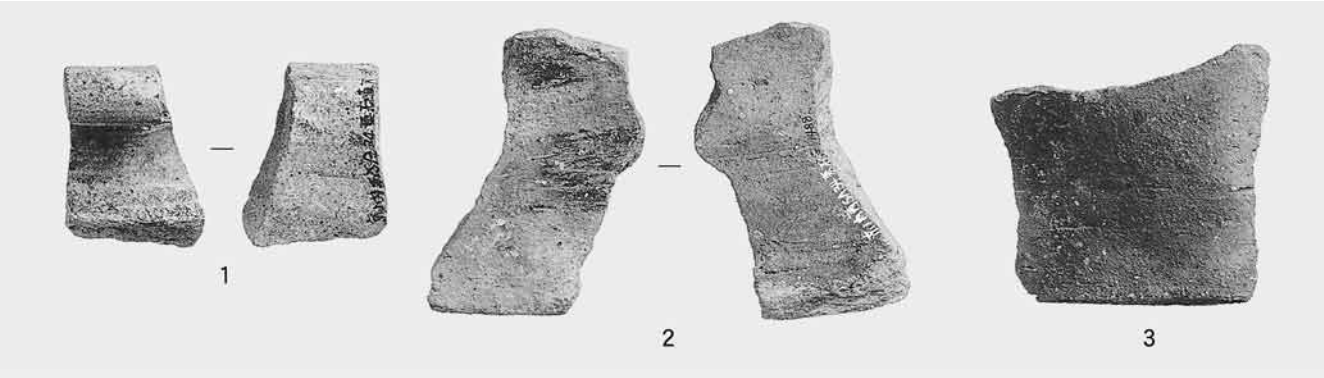
図版65　石積みSA33・34出土品⑦
中国産陶器



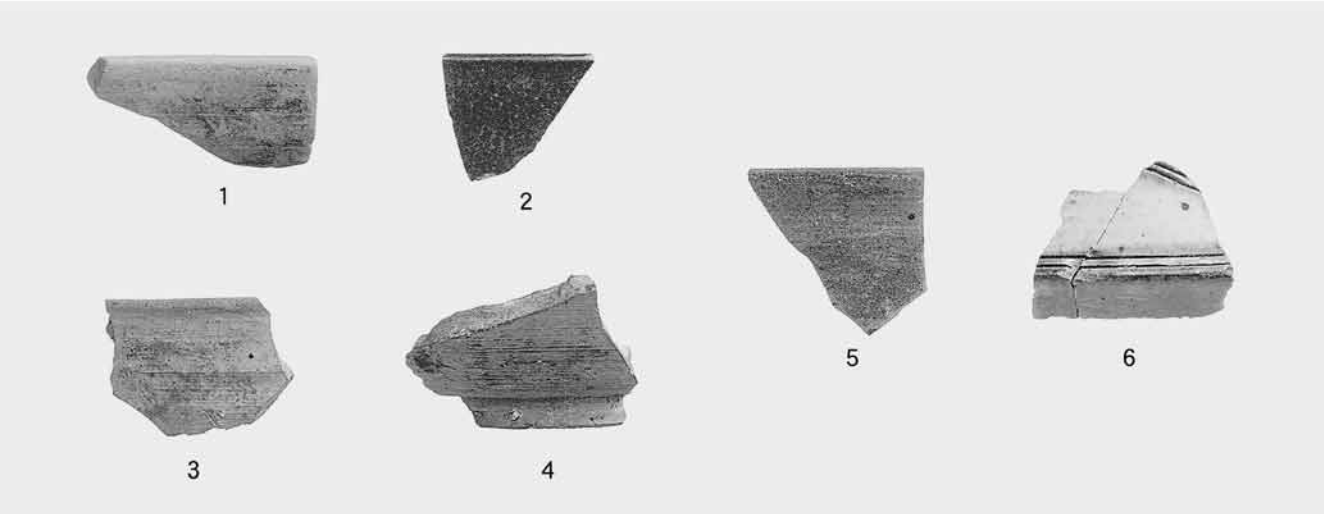
図版66　石積みSA33・34出土品⑧
三彩



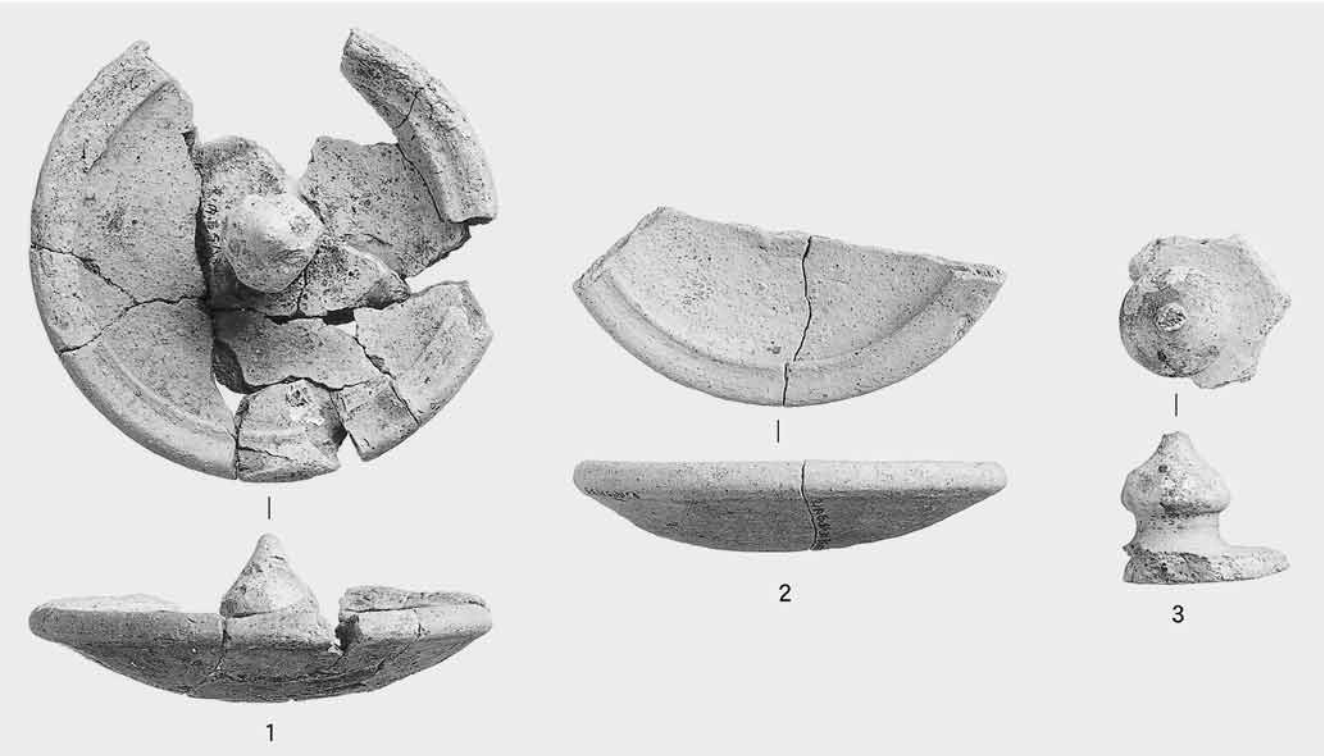
図版67A　石積みSA33・34出土品⑨
タイ産褐釉陶器



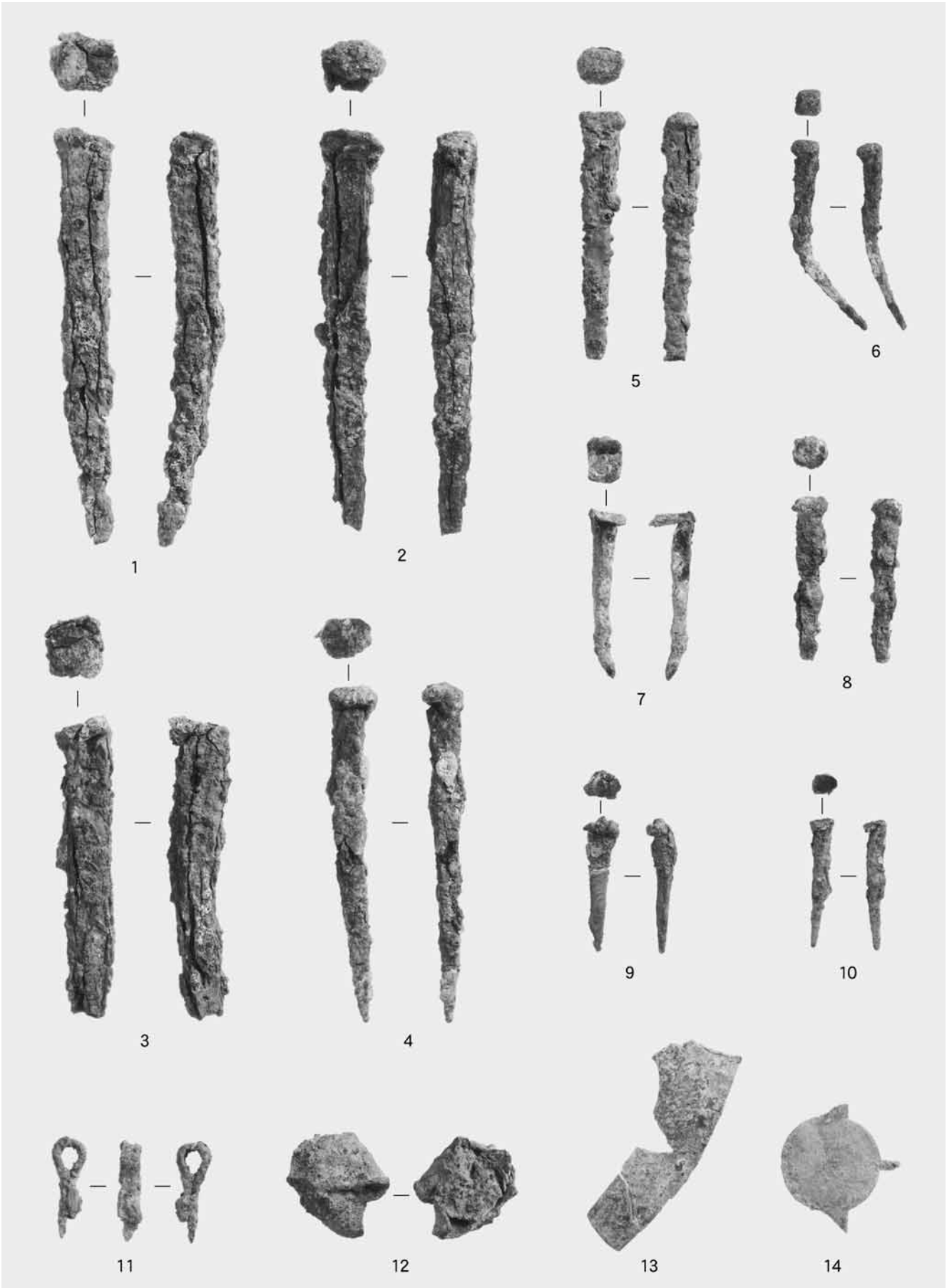
図版67B　石積みSA33・34出土品⑩
中世陶器



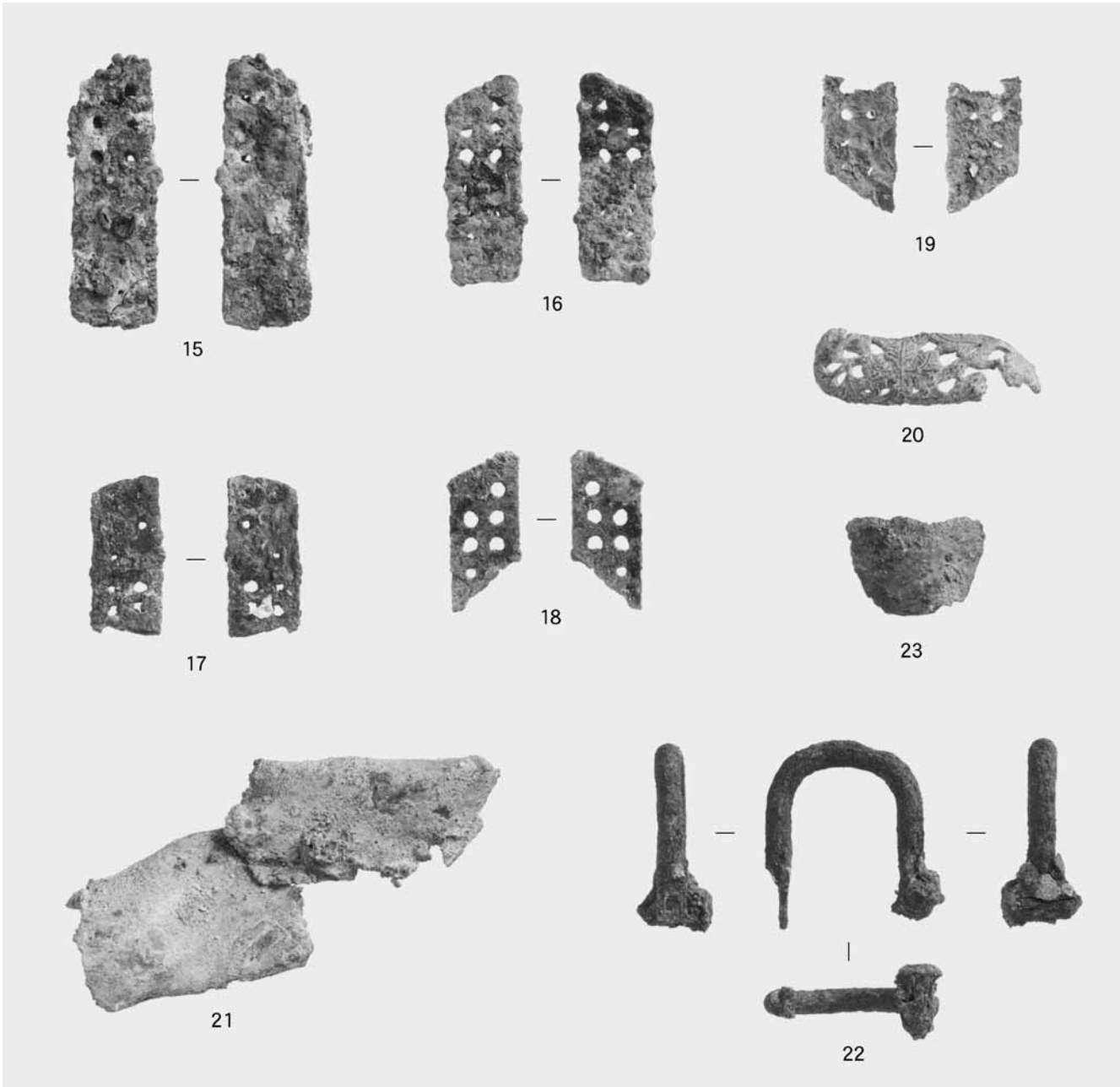
図版68　石積みSA33・34出土品⑪
陶質土器、沖縄産無釉陶器、沖縄産施釉陶器



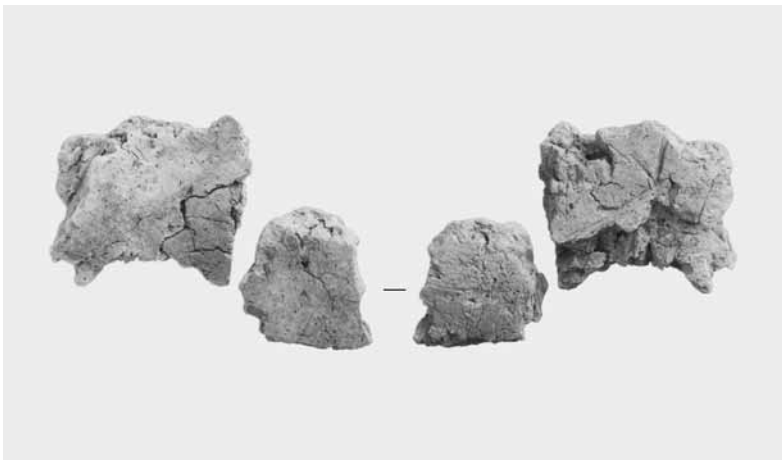
図版69　石積みSA33・34出土品⑫
タイ産土器



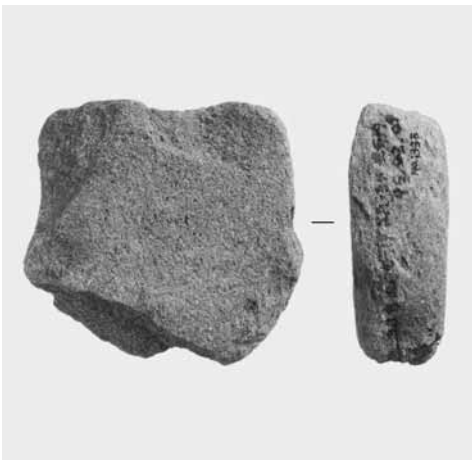
図版70　石積みSA33・34出土品⑬
金属製品



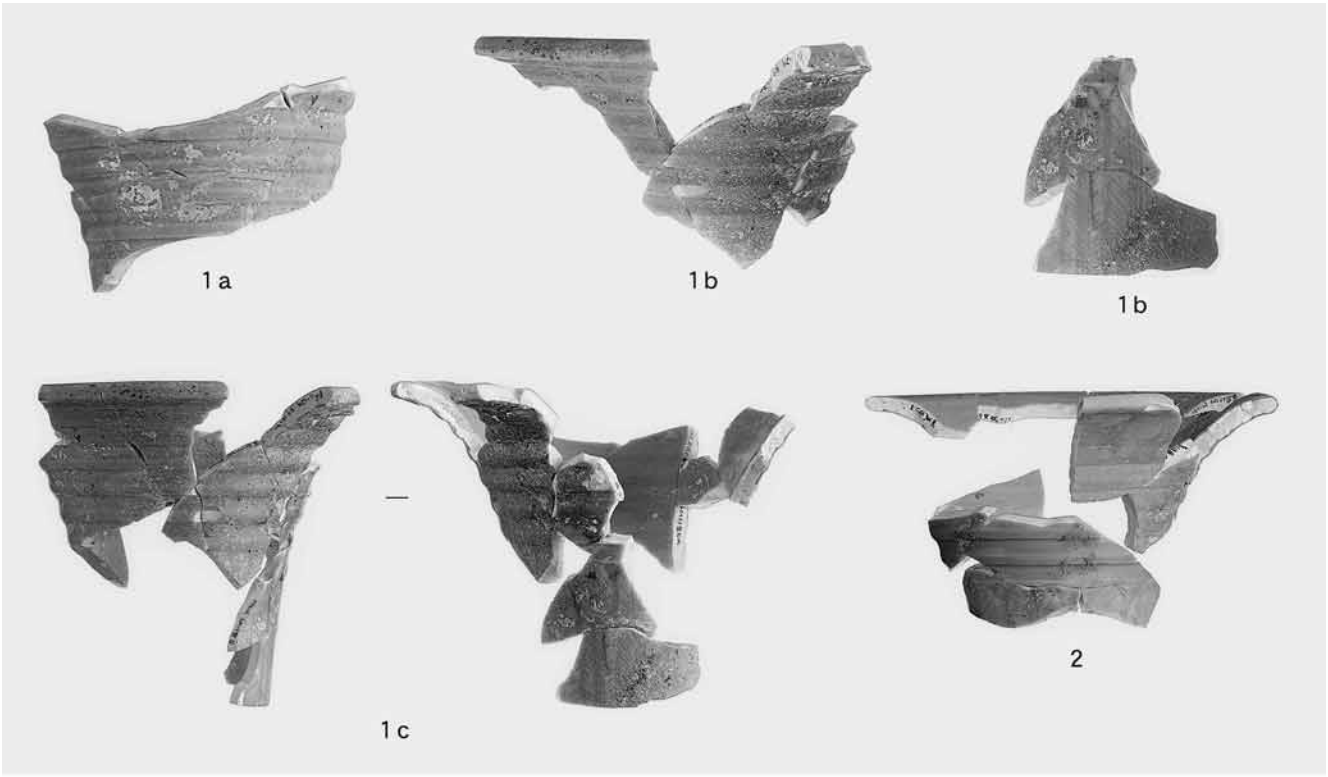
図版71　石積みSA33・34出土品⑭
金属製品



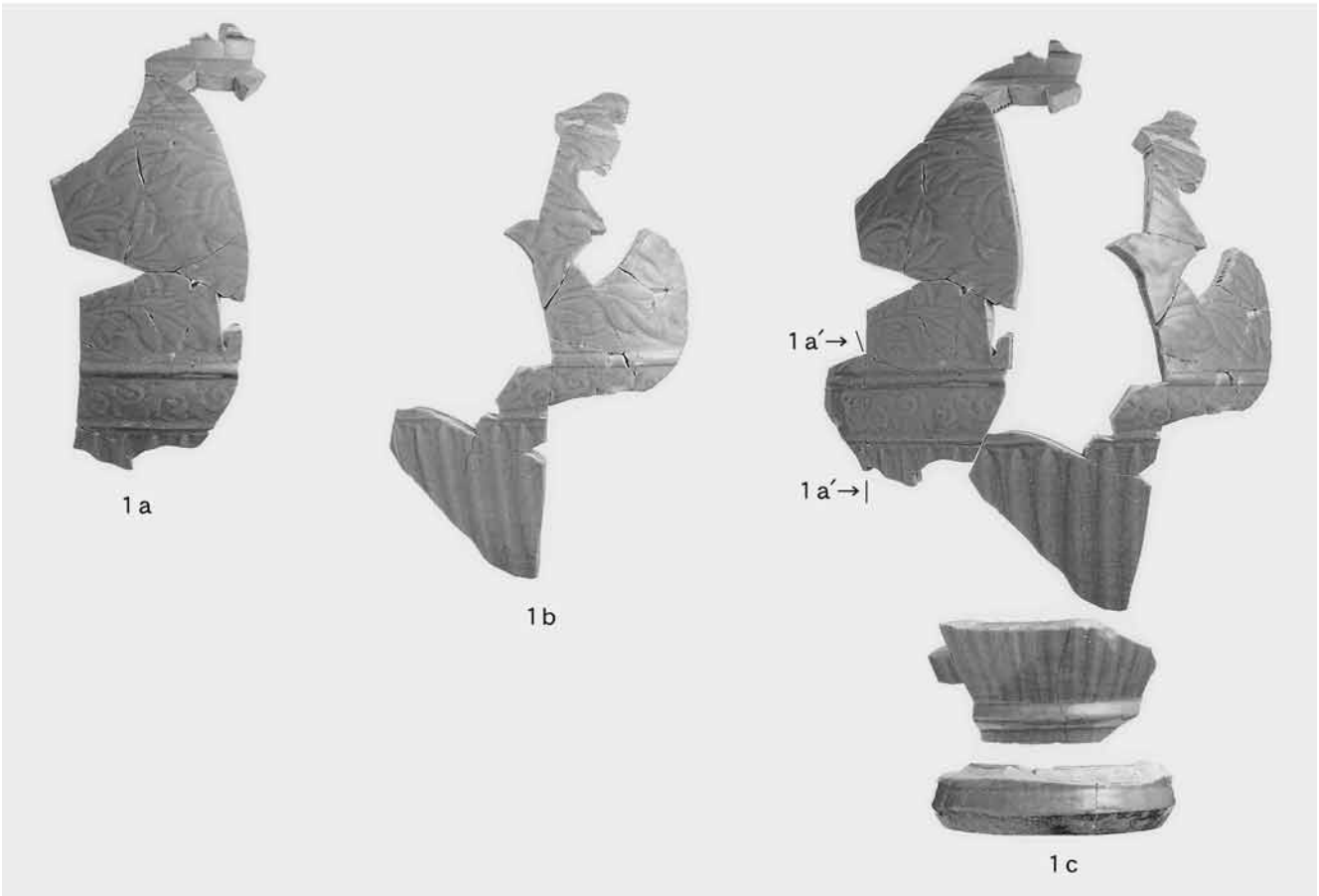
図版72　石積みSA33・34出土品⑮
壁材



図版73　石積みSA33・34出土品⑯
石器（砥石）



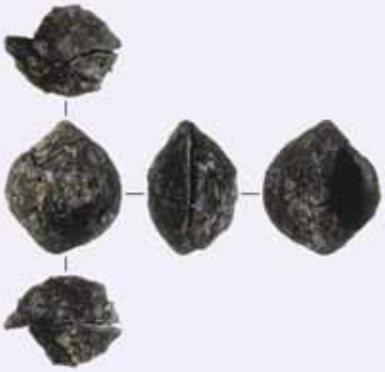
図版74　石積みSA33･34出土品⑰
1a：京の内地区石積みSA33･34出土、1b：下之御庭地区出土、1c：同一個体の1a･1bを図上で復元
2：京の内地区石積みSA33･34、土壙SK01（倉庫跡）出土と下之御庭地区出土の同一個体を図上で復元



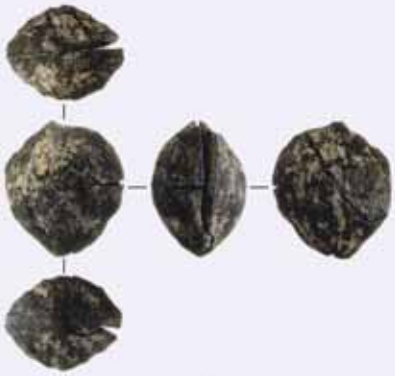
図版75　石積みSA33･34出土品⑱
1a：京の内地区石積みSA33･34出土、1a′･1b：下之御庭地区出土、
1c：同一個体の1a･1a′･1bを図上で復元

1．センダン
0
5mm
4．テンニンカ？
0
3mm
2a．エビズル
0
5mm
2b．エビズル
3．パパイア
0
5mm
3．現生のパパイア

図版76　植物種子（1）



5a. シマウリノキ？



5b. シマウリノキ？

5c. シマウリノキ？

7. ナガミボチョウジ？

0 5mm

6. リュウキュウコクタン？

0 5mm

（5a・b・c, 6）

6. 現生のリュウキュウコクタン？

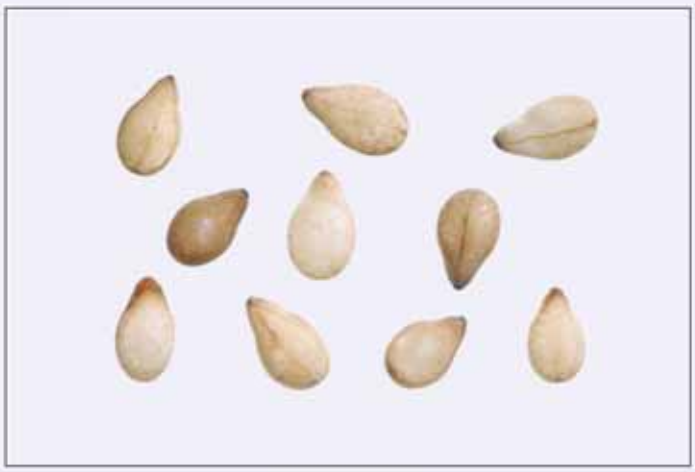
図版77　植物種子（2）

8．モンパノキ？

9．チシャノキ？

10．ゴマ

10．現生の黒ゴマ

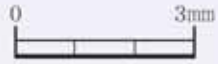


10．現生の白ゴマ

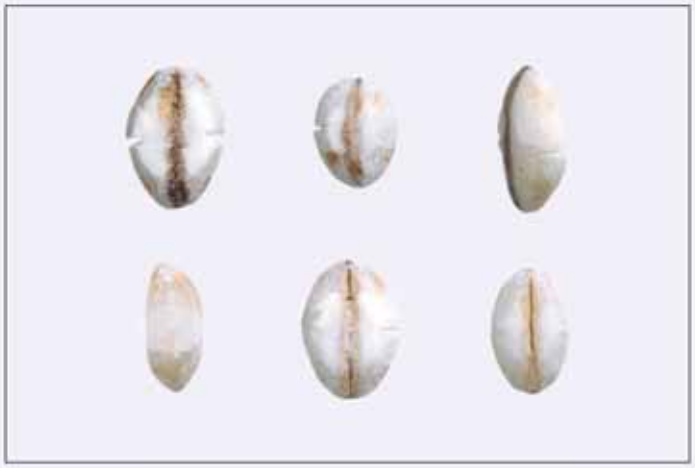
図版78　植物種子（3）

11. オオムギ

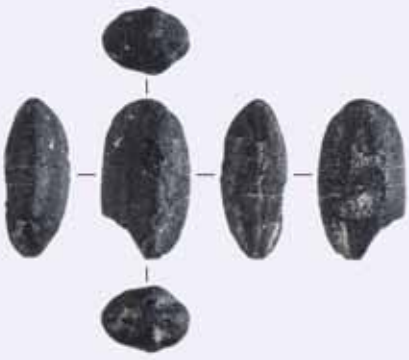
14. 不明



12. コムギ



12. 現生のマルムギ（コムギを精白したもの）

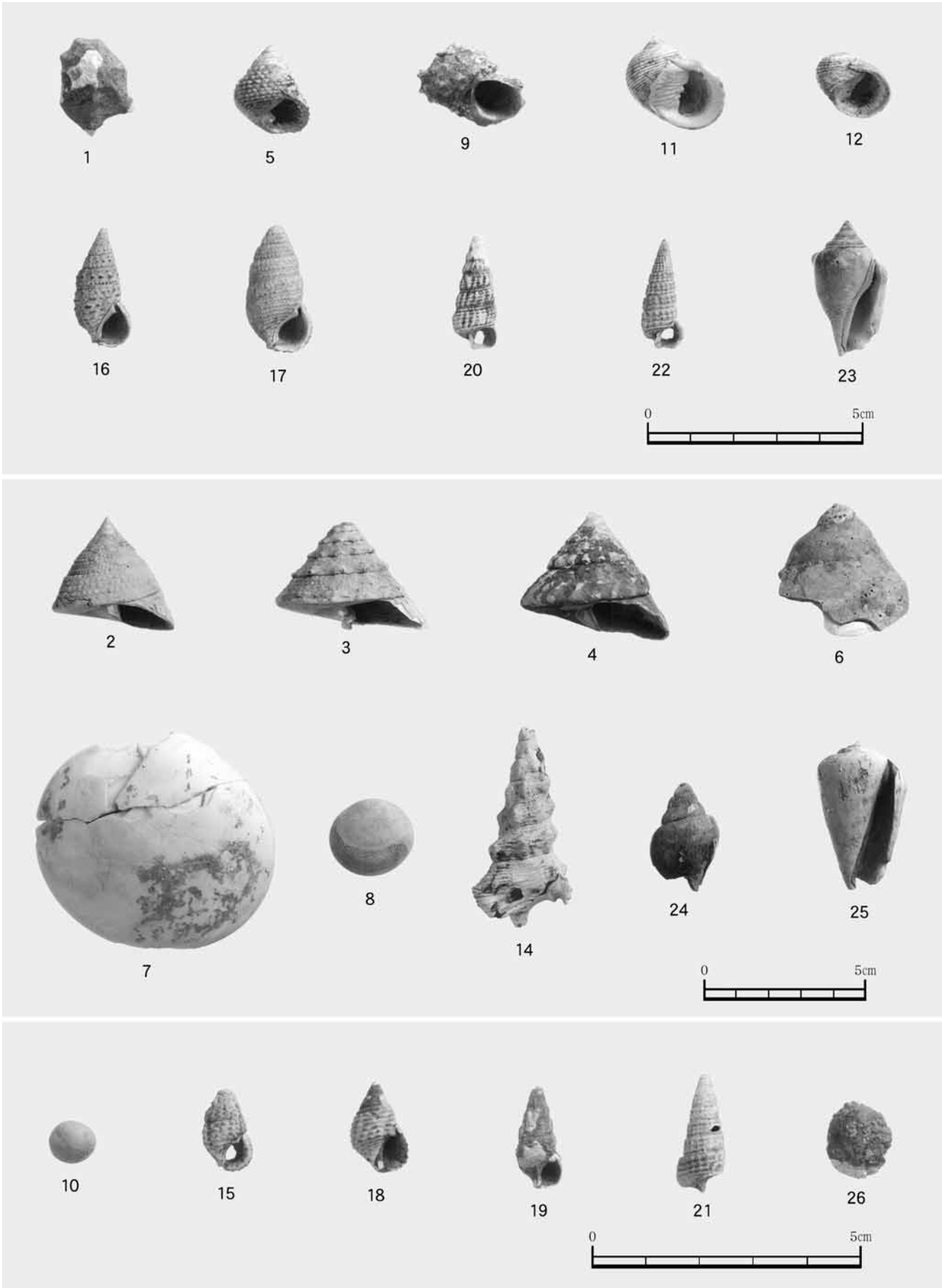


13. イネ

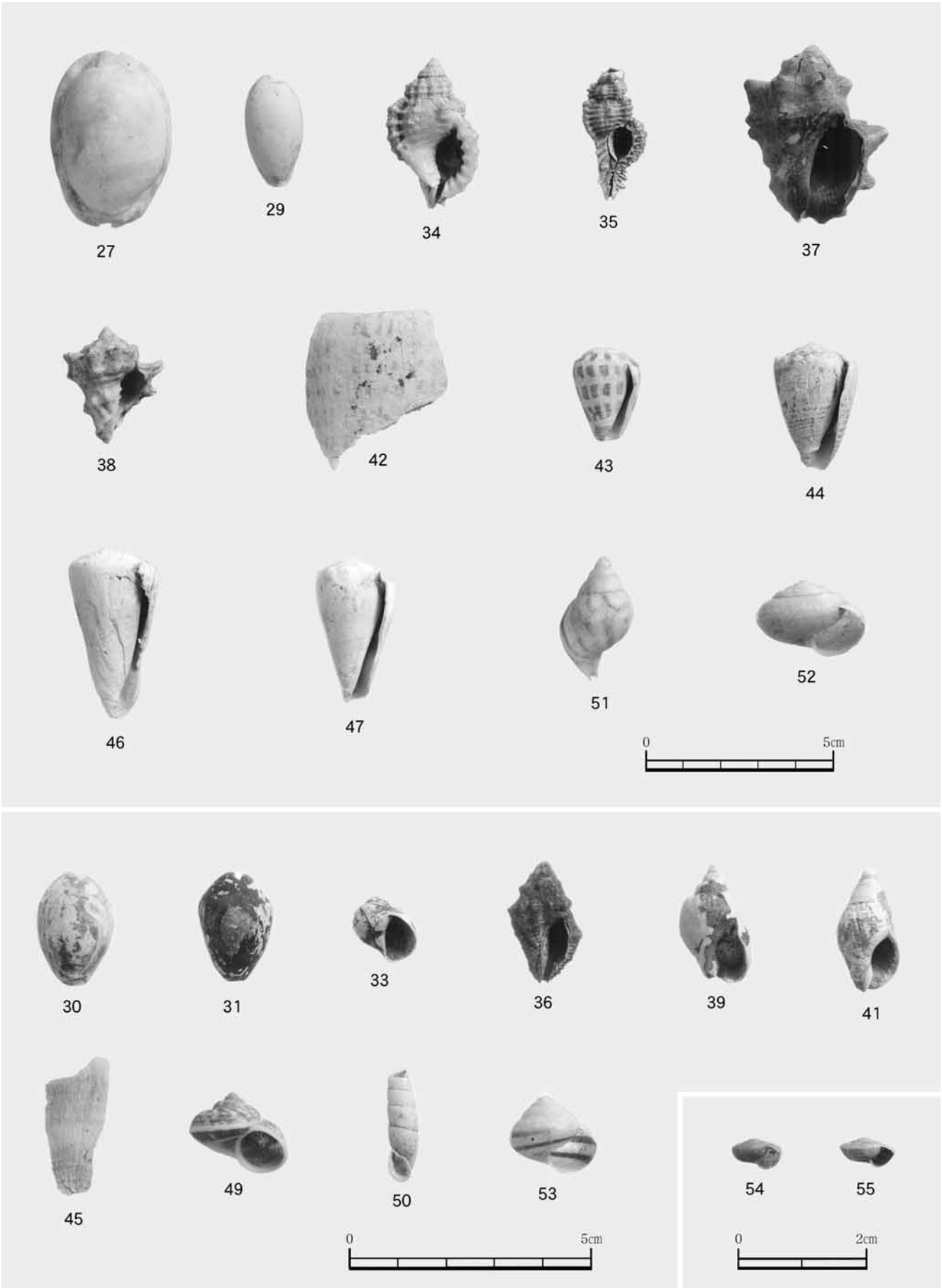
13. 現生のイネ

(11, 12, 13)

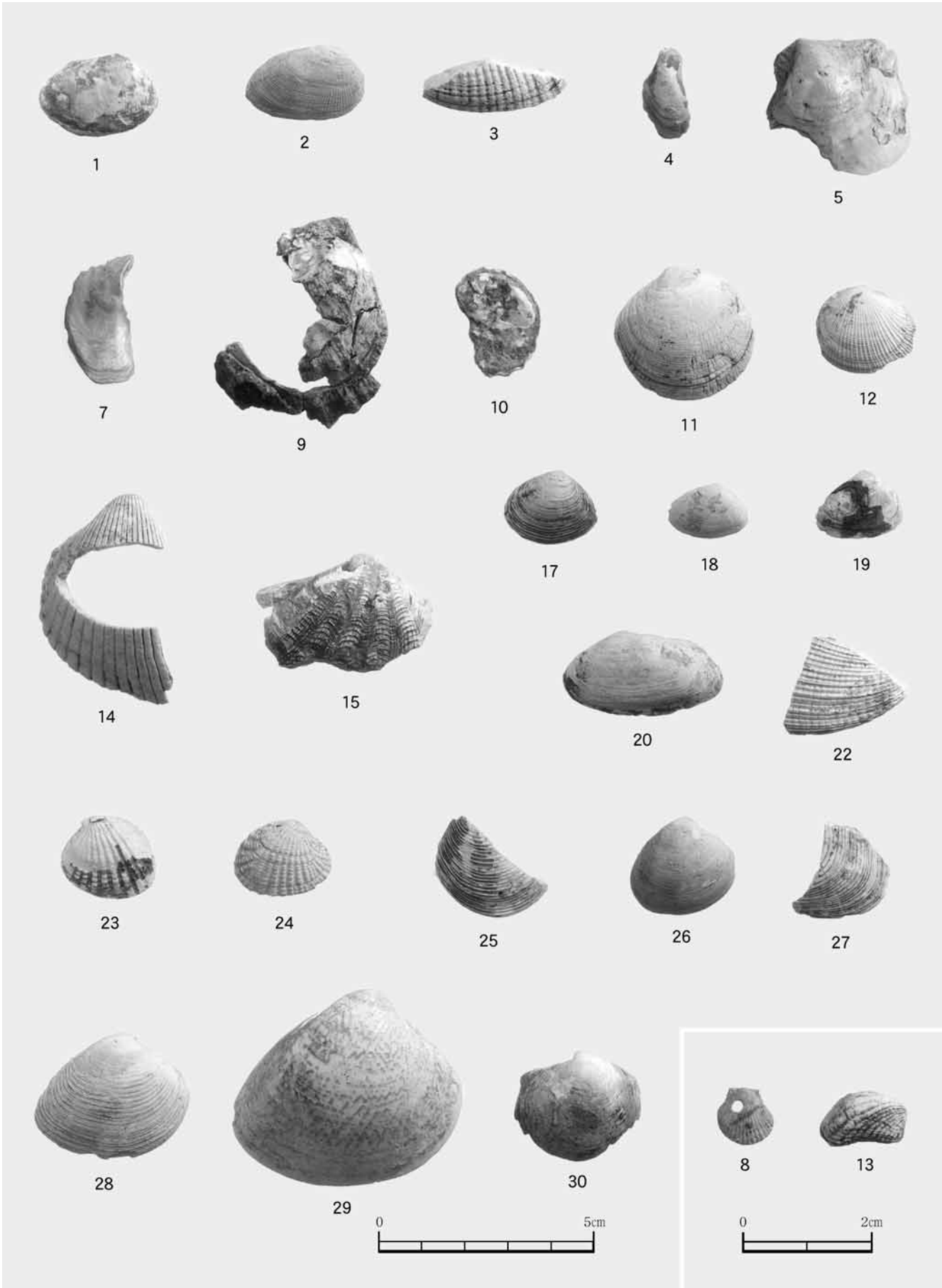
図版79　植物種子（4）



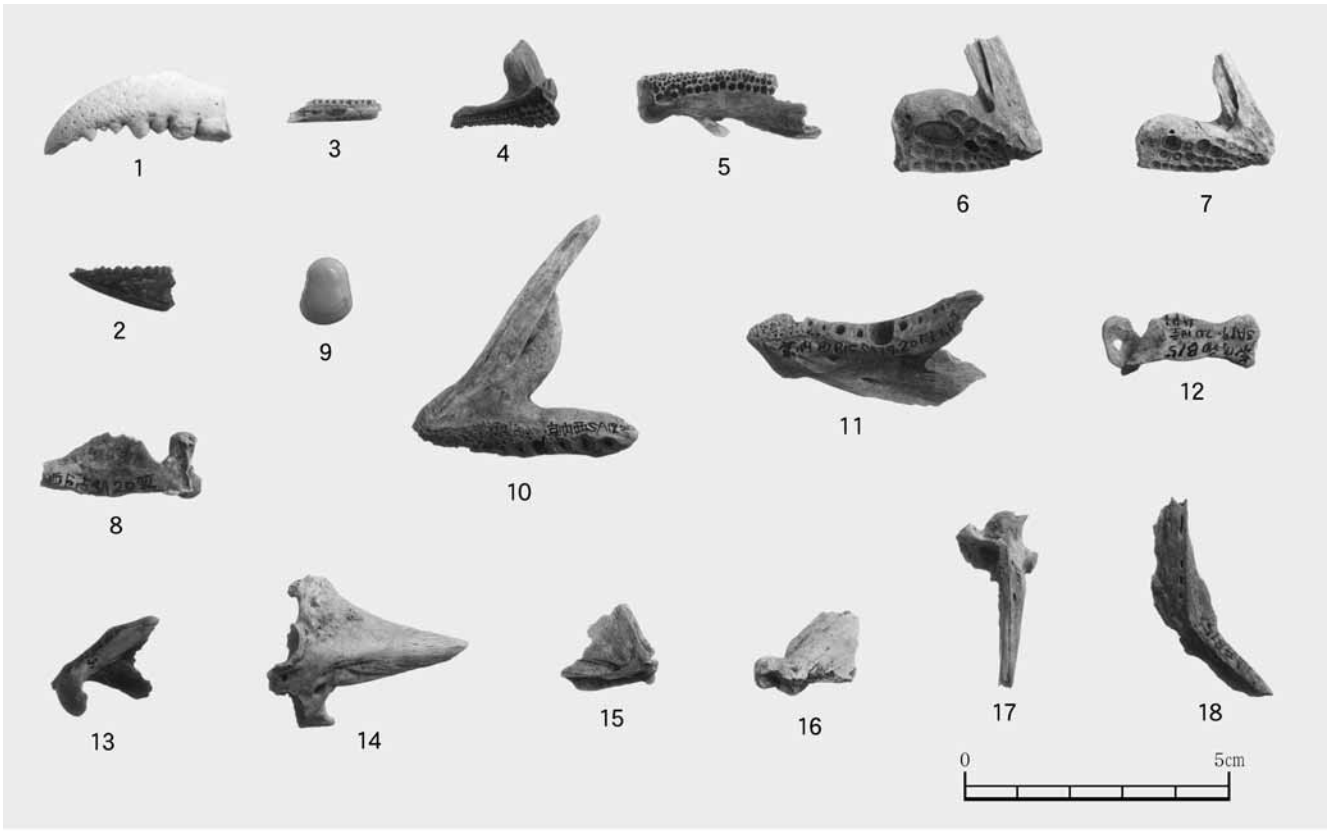
図版80　貝類（1）巻貝（番号は表と一致）

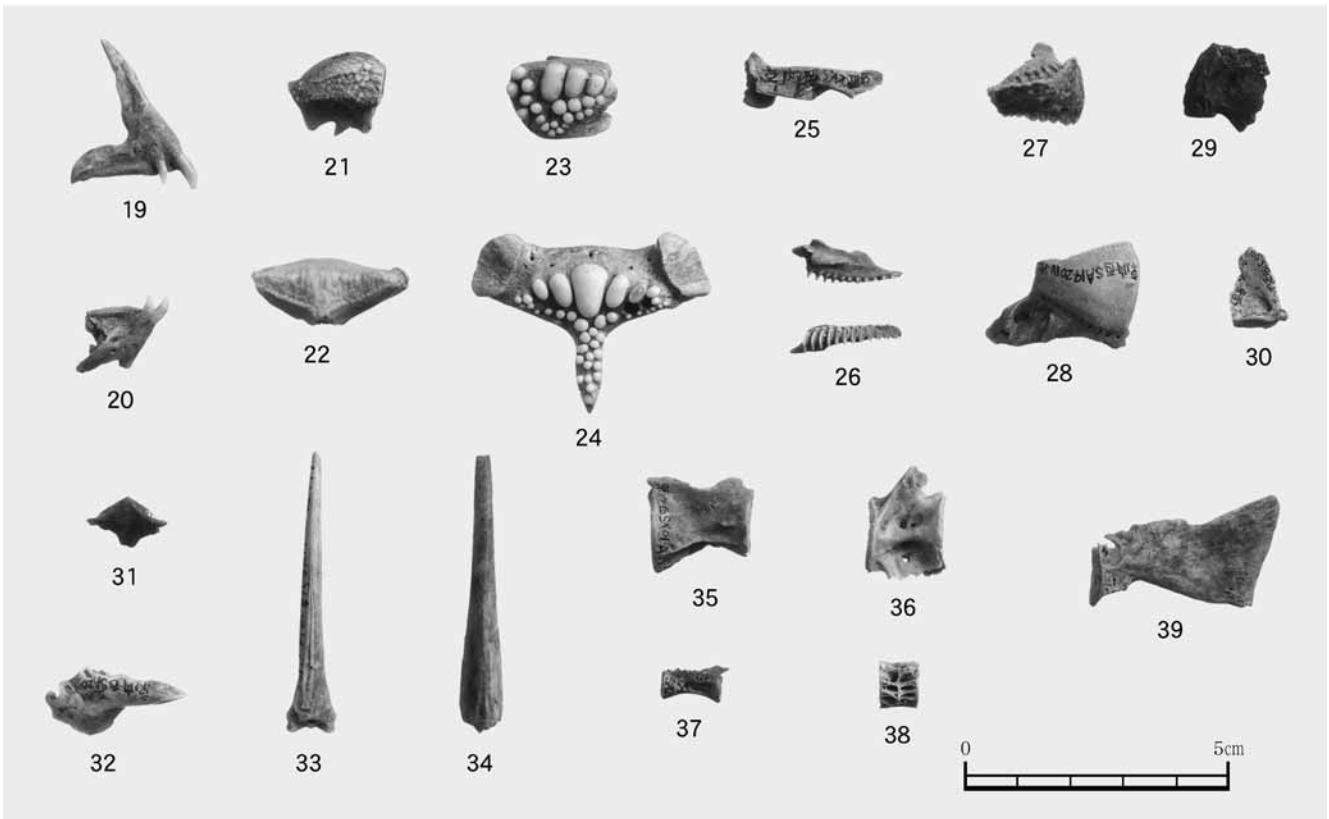


図版81　貝類(2) 巻貝（番号は表と一致）



図版82　貝類(3)　二枚貝（番号は表と一致）

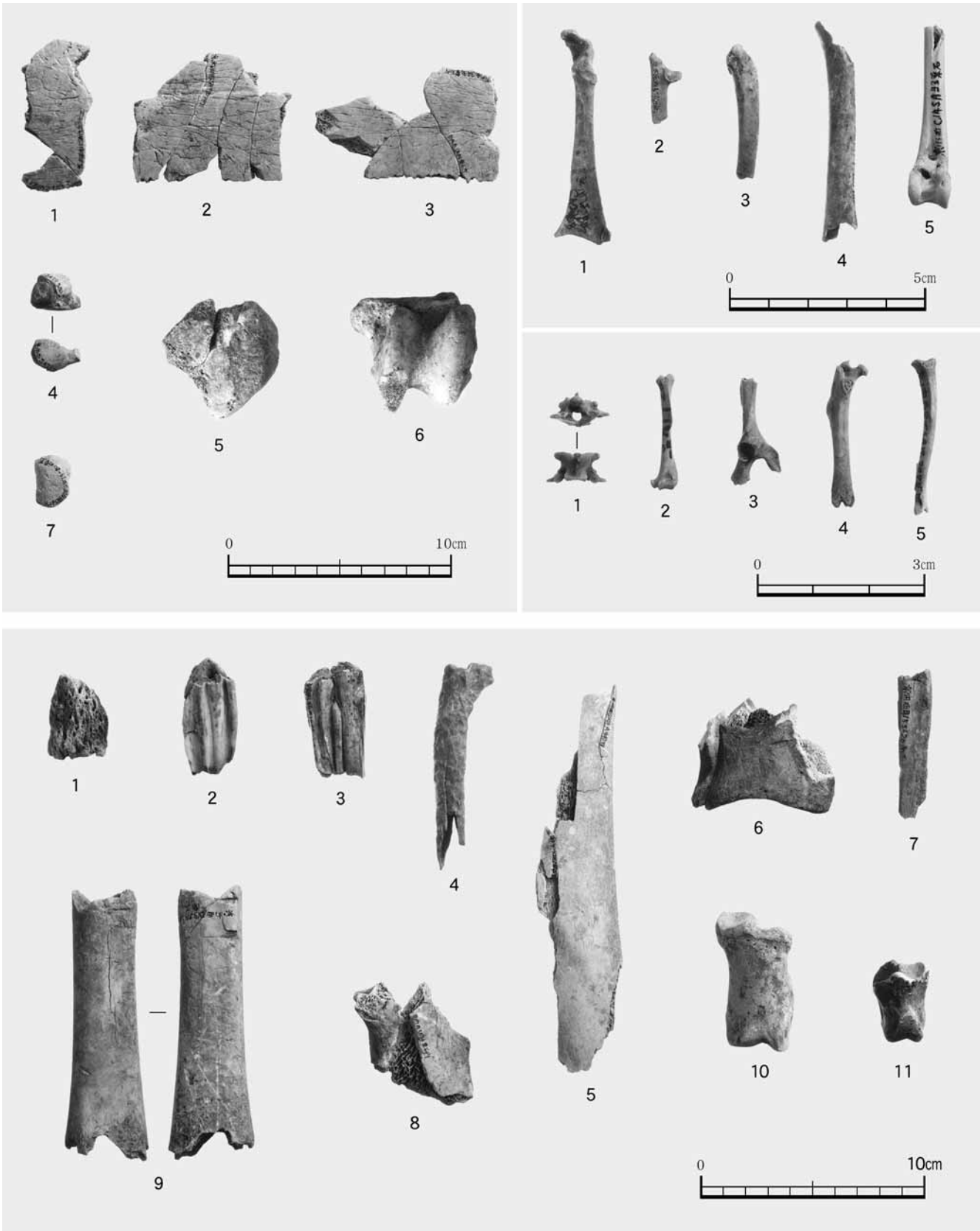




図版83　骨（1）

サカナ　上：**カニ** 1.左 可動指 2.左 不動指 **ウツボ科** 3.歯骨 **ハタ科** 4.左 前上顎骨 5.右 歯骨 **ヘダイ** 6.左 前上顎骨 **クロダイ** 7.左 前上顎骨 **タイ科** 8.右 主上顎骨 **ヨコシマクロダイ** 9.歯 ハマフエフキ 10.右 前上顎骨 11.右 歯骨 12.左 主上顎骨 13.左 口蓋 14.右 角骨 15.左 方骨A 16.左 方骨B 17.左 舌顎 18.右 前鰓蓋骨

下：**コブダイ** 19.右 前上顎骨 20.右 歯骨 21.右 上咽頭骨 22.下咽頭骨 **タキベラ** 23.左 上咽頭骨 24.下咽頭骨 **ベラ科** 25.右 主上顎骨 **ナンヨウブダイ** 26.左 上咽頭骨 **ブダイ科** 27.右 前上顎骨 28.右 歯骨 29.左 口蓋 30.右 方骨 **種不明** 31.鋤骨 32.右 角骨 33.背鰭棘（第1or2） 34.臀鰭血管間棘 35～38.脊椎骨 39.尾椎



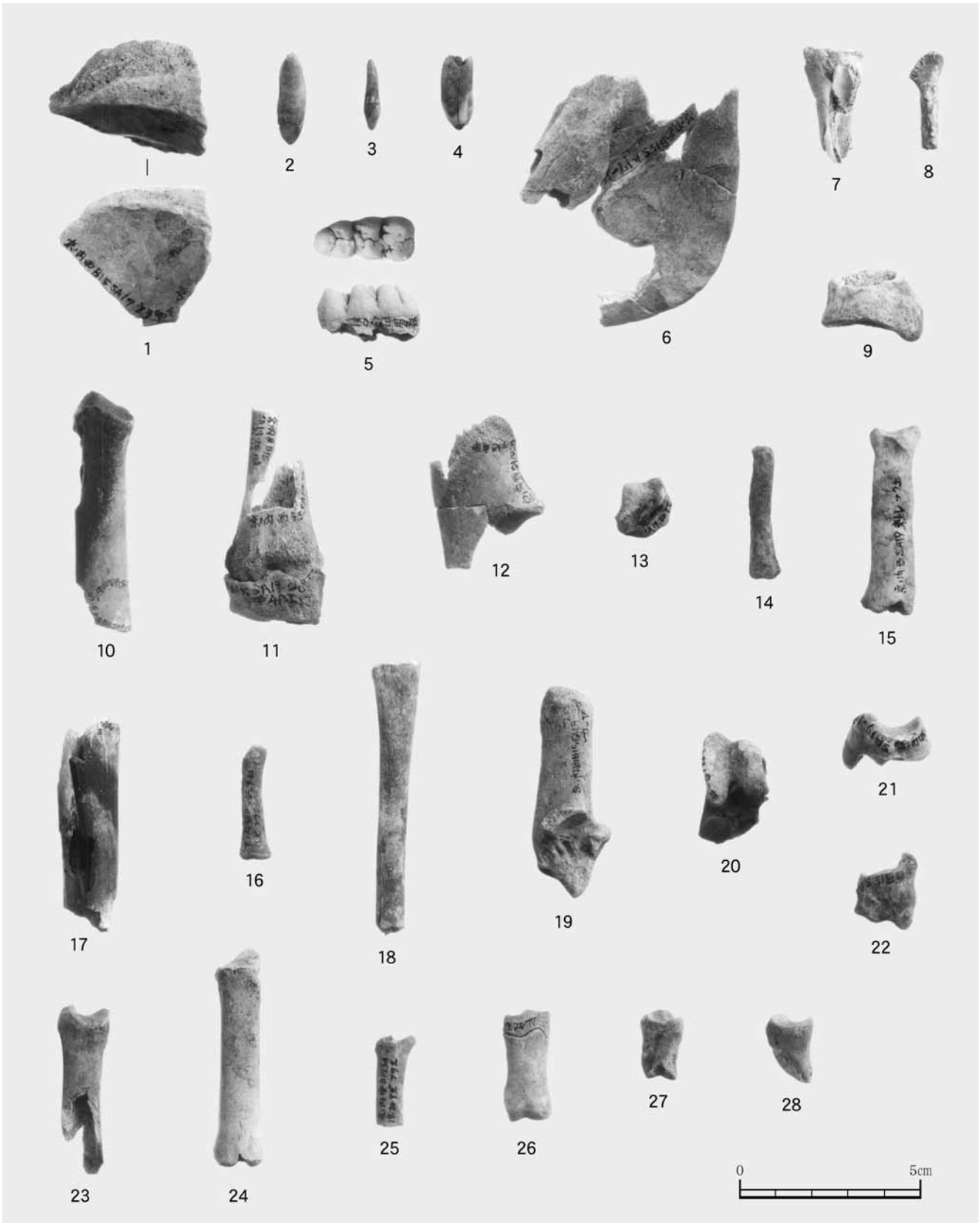
図版84　骨（2）

左上：ウミガメ　1～3.肋骨板　**ウマ** 4.右 第2手根骨 5.左 膝蓋骨 6.右 距骨 7.種子骨

右上：ニワトリ　1.左 鳥口骨 2.左 肩甲骨 3.左 尺骨 4.右 大腿骨 5.左 脛骨

右下：ヘビ　1.脊椎骨　**ネズミ** 2.左 上腕骨 3.左 寛骨 4.左 大腿骨 5.脛骨

下：ウシ　1.頭骨 角突起 2.左 上顎骨 M^{3} 3.右 下顎骨 M_2 4.右 第一肋骨 5.肋骨 6.右 肩甲骨 キズあり 7.右 尺骨 8.左 寛骨 キズあり 9.左 脛骨 キズあり 10.右 基節骨 11.中節骨



図版85　骨（2）

ブタ　1.左 頭頂骨 2.右 上顎骨 I' 3.左 上顎骨 i' 4.左 上顎骨 犬歯 ♀ 5.右 下顎骨 M_3 6.右 下顎骨 M_3 7.仙骨
8.左 肋骨 9.右 肩甲骨 10.右 橈骨 11.右 橈骨 12.右 尺骨 13.左 尺側手根骨 14.右 中手骨Ⅱ 15.左 中手骨Ⅲ
16.左 中手骨Ⅴ 17.右 脛骨 18.左 腓骨 19.左 踵骨 20.左 距骨 21.左 中心足根骨 22.左 第4足根骨
23.左 中足骨Ⅲ 24.右 中足骨Ⅳ 25.左 中足骨Ⅴ 26.左 基節骨 27.左 中節骨 28.右 末節骨

附　　編

平成16年度・17年度
国宝重要文化財等保存整備費
沖縄県立埋蔵文化財センター委託

平成16年度・平成17年度
「重要文化財」沖縄県首里城京の内跡出土品（附一、金属製品）保存修理

報　告　書

業務名称　平成16年度・17年度「重要文化財」沖縄県首里城京の内跡出土品
（附一、金属製品）保存修理

業務内容	平成16年度	平成17年度
	金属製品保存修理	１．金属製品保存修理
		２．金属製品保存用桐箱作成
		３．陶磁器保存用桐箱作成
業務委託	沖縄県立埋蔵文化財センター	
業務完了期日	平成17年３月18日	平成18年３月17日
業務受託	株式会社　芸　匠	

＊本表紙は、平成16・17年度の業務内容等を整理して表記した。

重要文化財沖縄県首里城京の内跡出土品（附一、金属製品）保存修理の概要について

１．はじめに

平成６（1994）年度の首里城跡京の内地区の遺構確認調査で検出された土壙SK01（倉庫跡）から多量の陶磁器片と共に出土された金属製品およびガラス玉の一括資料についても平成12（2000）年６月27日付けで文部省告示第120号により「沖縄県首里城京の内跡出土陶磁器 518点 附 一、金属製品一括　附 一、ガラス玉一括」として国の重要文化財（考古資料の部）で指定されている。

京の内跡土壙SK01（倉庫跡）より出土した金属製品については、検出直後から速やかに蓋の付いた瓶やタッパーウェアーに金属製品を入れ、アルコールに浸したまま長らく保存していたが、タッパーウェアーの劣化やアルコールの蒸発などによって一部の金属製品が空気に触れ、錆の発生や地金の劣化が一部の製品で確認された為、一時的な応急措置として金属製品を真空パックで保存するなどの措置を講じた。

このような現状を踏まえて金属製品の保存と活用を含めて、文化庁美術学芸課の担当調査官の指導助言を受けながら重要文化財に指定されている金属製品を文化庁の国庫補助事業（国宝重要文化財等保存整備費）「重要文化財首里城京の内跡出土品（附一、金属製品）保存修理」事業を平成16年度から平成17年度までの二カ年実施した。

金属製品の保存修理に際しても文化庁美術学芸課の担当調査官からの助言や指導を受けながら国宝・重要文化財の保存処理と修復のできる信頼と実績のある業者に委託した。

この金属製品の保存処理を終えて、はじめて素材の不安定な金属製品や脆い金属製品の図化（実測の作成）が可能となったことは言うまでもない。また、金属製品のクリーニング前に実施された軟X線写真撮影の結果を受けて、錆や不純物が除去され、不明瞭であった文様や輪郭を抑える事が可能となり、金属製品の図化作業が円滑に実施された。

なお、金属製品の保存処理で撮影・使用された軟Ｘ線写真については、今回の報告書で処理後の写真と軟X線写真が比較研究ができるように掲載し活用した。

参考までに金属製品の保存処理前と処理後の状況写真を図版１～図版６に掲載した。

２．平成16年度 金属製品保存処理と修復について

当該年度は、第１表・第２表に呈示したように青銅製品22点と鉄製品16点について保存処理と修復を委託した。委託に際しては、金属製品（青銅製品）22点と鉄製品16点の現状把握を目的とした採寸〔残存長（縦）・残存幅（横）・最大厚〕と重量の計測、そして外観からの肉眼観察で錆の有無などの状況を把握した後に保存処理の方針を決定して、下記の内容で委託業務を依頼した。

（1）青 銅 製 品

鼎形香炉	３点	長柄付片口銚子	３点
銅鏡	１点	刀の切羽	２点
刀の鍔	３点	兜の三鍬形台	１点
兜の鍬形（金塗布）	１点	銭貨	７点
八双金物	１点		

1．写真撮影	(現状確認) 写真だけではなく遺物の状態を目で確認。
2．X線写真撮影	
3．クリーニング	錆落とし。デザインカッター、リューターなどで錆を落とす。 (一部アルコールの中でのクリーニング)
4．脱塩処理	ウォーターバスに純粋を50～60℃に設定し、湯煎の要領で浸漬。 塩分が完全に純粋の中に出なくなるまで (硝酸銀で確認) 毎日取り替える。
5．脱塩後	アルコールに約２日間漬ける。
6．乾燥	常温又は熱風乾燥機で乾燥。
7．緑青安定化処理	デシケーターで減圧含浸。ベンゾトリアゾール溶液に１週間浸漬。 処理後表面をアルコールで洗浄。
8．乾燥	処理効果判定・乾燥後約１時間放置し確認。
9．樹脂含浸	真空状態のところに約１時間。その後常圧状態で約１時間置く。 (インクララック 15～20％キシレン溶液)
10. 接合・充填	シアノアクリレート系接着剤・エポキシ系樹脂で接合・充填。
11. 写真撮影	(完成)
12. 報告書作成	

（2）鉄 製 品

鎧の札　　１０点　　鎖帷子　　６点

1．写真撮影	(現状確認) 写真だけではなく遺物の状態を目で確認。
2．X線写真撮影	
3．クリーニング	デザインカッター、リューター等で錆落とす。 (一部アルコールの中でのクリーニング)
4．脱塩処理	ウォーターバスに純粋を50～60℃に設定し、湯煎の要領で浸漬。 塩分が完全に純粋の中に出なくなるまで (硝酸銀で確認) 毎日取り替える。
5．乾燥	常温又は熱風乾燥機で乾燥。 処理効果判定・乾燥後約１時間放置し確認。
6．樹脂含浸	真空状態のところに約１時間。その後常圧状態で約１時間置く。 (パラロイドNAD―10・25～30％ソルベントナフサ溶液)
7．乾燥	常温又は熱風乾燥機で乾燥。処理効果判定・乾燥後約１時間放置し確認。
8．接合・充填	シアノアクリレート系接着剤・エポキシ系樹脂で接合・充填。
9．写真撮影	(完成)
12. 報告書作成	

第1表　平成16年度　重要文化財　沖縄県首里城京の内跡出土品「附一、金属製品」保存修理
青銅製品一覧

No.	遺　物　名	残存長 縦(cm)	残存幅 横(cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考(特徴など)
1	鏡	22.0	19.0	0.3	759.3	無文三角縁鏡。全体的に緑色の錆発生。 ヒビ割れ、捲れ、小孔あり。
2	香炉口縁	12.6	4.7	0.6	70.9	香炉の口縁破片？。部分的に緑色の錆発生。
3	香炉胴部	16.0	10.5	0.3	386.0	鼎形香炉の胴部破片。表裏面に緑色の錆発生。
4	香炉把手	8.0	6.5	1.5	207.0	鼎形香炉の把手破片。全体的に緑色の錆発生。
5	長柄付片口銚子1	14.0	7.5	0.1	68.2	破片3枚、接合可能。両面に緑色、緑白色の錆で地金が変色。
6	長柄付片口銚子2	11.2	7.4	3.2	372.5	兜鉢？。両面は全体的に緑色や緑白色の錆で覆われる。火熱で変形。
7	長柄付片口銚子3	22.0	13.8	8.2	132.7	兜鉢？。表裏面に緑色、緑白色、白色 (地金腐食？)の錆が著しい。
8	兜の鍬形(金塗布)	4.0	1.8	0.1	1.8	両面の一部分で鍍金が観察できる。錆が発生。
9	三鍬形台	11.6	5.2	0.1	27.2	完形。両面に部分的な錆が発生し、緑白色や白色に変色。
10	八双金物(鍍金)	5.4	2.0	0.1	6.5	完形。全体的に鍍金。部分的に緑白色の錆。
27	刀の鍔1	7.8	5.0	0.9	75.5	半欠。裏面は錆や腐食により茶色、緑色、白色に変色。
28	刀の鍔2	7.3	5.0	0.9	82.3	半欠。裏面は茶色、緑白色に錆で変色。
29	刀の鍔3	6.8	6.7	0.3	70.5	ほぼ完形。錆は微弱で目立たない。
30	刀の切羽1	4.5	3.8	0.4	20.9	完形。両面に部分的な錆により緑白色に変色。
31	刀の切羽2	4.5	4.0	0.2	16.5	完形。裏面の錆は著しく緑白色に変色。
32	銭貨1「至道元寶」	復元径2.7	復元径2.6	0.1	2.3	破損。接合可。錆発生。
33	銭貨2「治平元寶」	残存径2.1	残存径1.8	0.1	2.9	破損。破損部が火熱で溶ける。錆発生。
34	銭貨3「元豊通寶？」	2.5	2.4	0.2	3.6	完形。全体的に錆発生。
35	銭貨4「紹聖元寶？」	2.5	2.5	0.1	4.0	完形。全体的に錆発生。
36	銭貨5「聖床元寶」	2.5	2.4	0.2	4.2	完形。全体的に錆発生。
37	銭貨6「洪武通寶」	2.3	2.3	0.1	4.4	完形。鋳造時のバリが残る。
38	銭貨7「洪武通寶」	2.3	2.4	0.1	3.5	完形。鋳造時のバリが残る。全体面に錆発生。

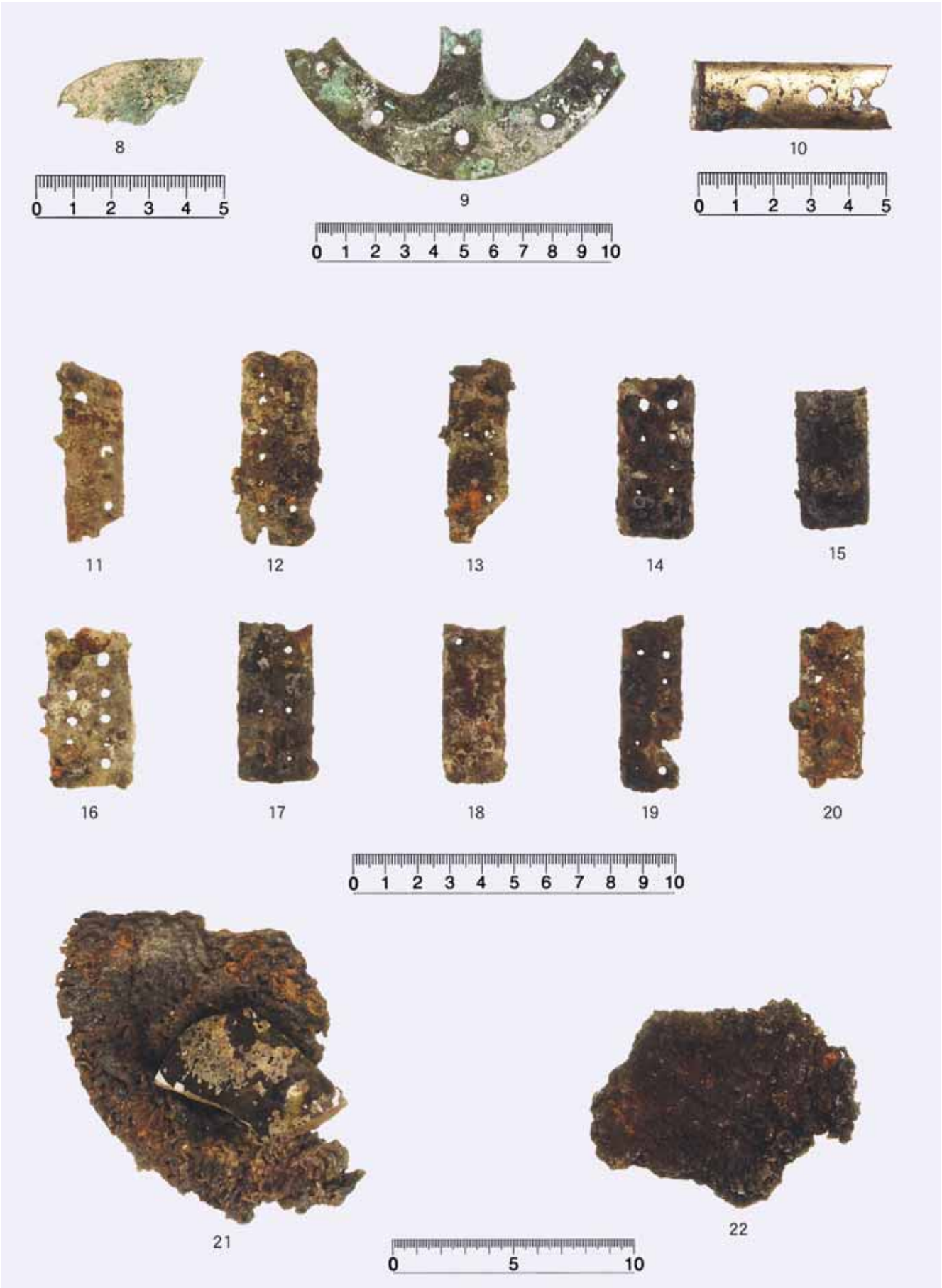
※欠落番号は第２表に収録。

第2表　平成16年度　重要文化財　沖縄県首里城京の内跡出土品「附一、金属製品」保存修理
鉄製品一覧

No.	遺　物　名	残存長 縦(cm)	残存幅 横(cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考(特徴など)
11	鎧　の　札　1	5.6	2.0	0.2	6.4	両面は錆の進行が著しい。半欠の孔を含め4ケ所孔がある。上下端部が斜位となる歪な台形状。
12	鎧　の　札　2	6.1	2.5	0.4	10.8	同上。半欠の孔を含め9孔あり。下端と左側面の一部を欠く。上端は丸味の有る「W」の字状。
13	鎧　の　札　3	5.7	2.3	0.3	8.1	同上。孔は4孔あり。右下端を欠く。
14	鎧　の　札　4	5.0	2.4	0.3	8.8	同上。孔は7孔あり。方形状。
15	鎧　の　札　5	4.3	2.5	0.4	10.4	同上。上端を欠く。孔は錆で塞がれる。方形状。
16	鎧　の　札　6	4.9	2.5	0.2	9.2	同上。孔は7孔あり。歪な方形状。
17	鎧　の　札　7	5.1	2.5	0.3	10.6	同上。上端を欠く。孔は6孔あり。右下端が錆で脹れて突起状となる。歪な方形状。
18	鎧　の　札　8	5.1	2.0	0.3	7.9	同上。上端を欠く。孔は1孔のみ。
19	鎧　の　札　9	5.6	2.0	0.3	8.9	同上。半欠の孔を含め7孔あり。上端は歪な段上破損、右側の破損ヶ所は「V」の字状。歪な短冊形。
20	鎧　の　札　10	5.4	2.2	0.2	8.2	同上。孔は2孔あり。上端を歪に欠いた短冊形。
21	鎖　帷　子　1	14.5	11.6	5.3	523.4	陶器が付着。一辺が丸味を帯びた三角形。
22	鎖　帷　子　2	11.1	8.5	1.6	217.5	歪な五角形。
23	鎖　帷　子　3	8.3	5.3	2.0	54.9	陶器が付着。歪な三角形状。
24	鎖　帷　子　4	6.2	4.7	2.2	36.6	歪な五角形。
25	鎖　帷　子　5	5.4	3.0	3.4	31.0	歪な長方形状。
26	鎖　帷　子　6	6.3	3.5	1.5	36.0	歪な台形状。

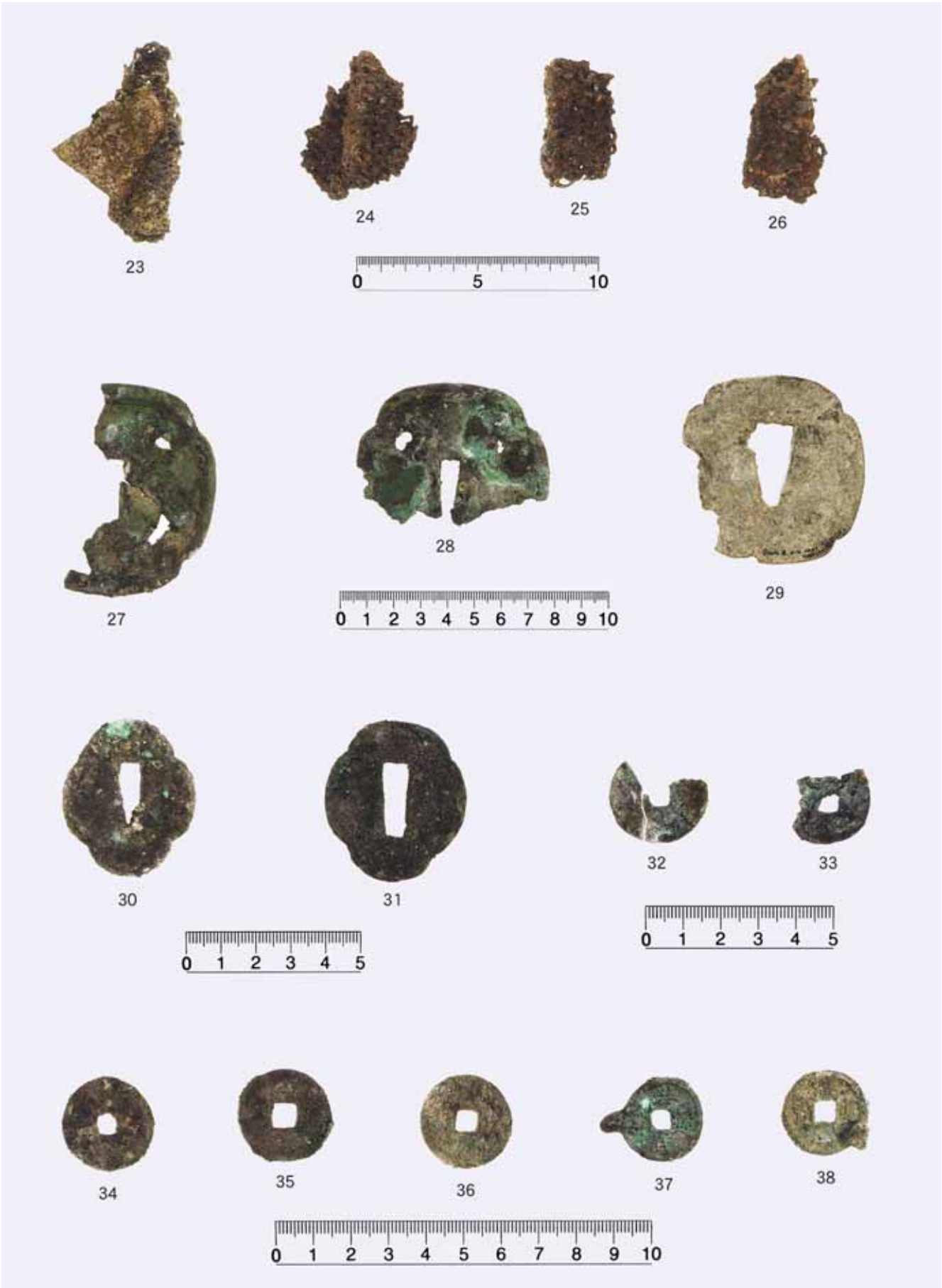
図版 1　国指定重要文化財　平成16年度 金属製品保存修理（修理前）
1.鏡、2.香炉口縁、3.香炉胴部、4.香炉把手、5～7.長柄付片口銚子の容器

図版２　国指定重要文化財　平成16年度 金属製品保存修理（修理後）
1.鏡、2.香炉口縁、3.香炉胴部、4.香炉把手、5～7.長柄付片口銚子の容器



図版３　国指定重要文化財　平成16年度 金属製品保存修理（修理前）
8.鍬形、9.三鍬形台、10八双金物、11～20.札、21･22.鎖帷子

図版４　国指定重要文化財　平成16年度 金属製品保存修理（修理後）
8.鍬形、9.三鍬形台、10八双金物、11～20.札、21･22.鎖帷子



図版５　国指定重要文化財　平成16年度 金属製品保存修理（修理前）
23～26.鎖帷子、27～29.鍔、30･31.切羽、32～38.銭貨

図版６　国指定重要文化財　平成16年度 金属製品保存修理（修理後）
23～26.鎖帷子、27～29.鍔、30･31.切羽、32～38.銭貨

３．平成17年度 金属製品保存処理と修復について

平成17年度は、第３表・第４表に呈示したように青銅製品20点と鉄製品10点について保存処理と修復を委託した。委託に際しては、金属製品（青銅製品）と鉄製品の現状把握の方法については、平成16年度に準じて採寸（残存長縦・残存幅横・最大厚）と重量の計測の他に外観からの肉眼観察で錆の有無などの状況を把握し、保存処理前の写真撮影をおこなった。個々の観察事項や撮影後に保存処理の方針を決定して、下記の内容で委託業務を依頼した。

（１）青 銅 製 品

金銅製環状製品	１点	鈴・１	１点	鈴・２	１点
兜斎垣・１	１点	兜斎垣・２	１点	兜鉢の矧板・１	１点
兜鉢の矧板・２	１点	兜の鍬形・１	１点	兜の鍬形・２	１点
兜の鍬形・３	１点	兜の鍬形・４	１点	兜の鍬形・５	１点
立物中央飾り	１点	八双金物の留め金具・１	１点	八双金物の留め金具・２	１点
八双金物	１点	据文金物の菊座	１点	刀の鍔・１	１点
刀の鍔・２	１点	切　羽	１点		

合計２０点

１．写真撮影	（現状確認）写真だけではなく遺物の状態を目で確認。
２．Ｘ線写真撮影	
３．クリーニング	錆落とし。ブラシ・デザインカッター・リューター等で錆を落とす。 （一部アルコールの中でのクリーニング）
４．脱塩処理	ウォーターバスに純粋を50～60℃に設定し、湯煎の要領で浸漬。 塩分が完全に純粋の中に出なくなるまで（硝酸銀で確認）毎日取り替える。
５．脱塩後	アルコールに約２日間漬ける。
６．乾燥	常温又は熱風乾燥機で乾燥。
７．緑青安定化処理	デシケーターで減圧含浸。ベンゾトリアゾール溶液に１週間浸漬。 処理後表面をアルコールで洗浄。
８．乾燥	処理効果判定・乾燥後約１時間放置し確認。
９．樹脂含浸	真空状態のところに約１時間。その後常圧状態で約１時間置く。 （インクララック 15～20％キシレン溶液）
10．接合・充填	シアノアクリレート系接着剤・エポキシ系樹脂で接合・充填。 兜鉢の矧板・１　（接合・樹脂充填）　兜鉢の矧板・２（接合） 兜の鍬形・３・５（接合・樹脂充填）立物中央飾り（接合・樹脂充填） 兜斎垣・１・２　（接合・樹脂充填） 鈴・１（接合）　　鈴・２（充填）
11．写真撮影	（完成）
12．報告書作成	

第3表　保存処理委託用遺物　サイズ表
青銅製品

No.	遺　物　名	残存長 縦(cm)	残存幅 横(cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備　　考
4	金銅製環状製品	2.4	2.2	0.12	2.4	鍍金
5	鈴1	4.6	4.2	0.10	14.3	
6	鈴2	3.0	3.2	0.20	11.1	ブロンズ病
7	兜斎垣1	6.1	1.7	0.05	6.5	
8	兜斎垣2	6.9	1.8	0.25	9.2	
9	兜鉢の矧板1	11.0	3.2	0.90	45.7	鉄付着。ブロンズ病
10	兜鉢の矧板2	11.3	3.3	0.68	37.1	鉄付着。ブロンズ病
11	兜の鍬形1	9.5	4.1	0.06	11.9	変形のために一部折れ曲がる
12	兜の鍬形2	7.9	5.5	0.17	22.7	変形のために一部折れ曲がる
13	兜の鍬形3	4.1	3.2	0.09	4.2	
14	兜の鍬形4	8.8	3.9	0.07	12.8	鍬形
15	兜の鍬形5	7.4	4.2	0.18	10.1	鍬形
16	立物中央飾り	9.1	6.3	0.07	23.2	
17	八双金物の留め金具1	1.4	1.4	0.06	0.7	鍍金
18	八双金物の留め金具2	1.5	1.5	0.07	1.2	鍍金
19	八双金物	5.2	1.7	0.13	6.5	
20	据文金物の菊座	4.8	4.8	0.10	5.2	
28	刀の鍔1	5.7	2.3	0.69	19.5	
29	刀の鍔2	6.0	2.0	0.56	13.4	
30	切羽	4.0	3.4	0.21	11.2	

※欠落番号は、第４表に収録。

（2）鉄 製 品

鋏	１点	錠	１点	蝶番	１点
鎖帷子・１	１点	鎖帷子・２	１点	鎖帷子・３	１点
鎖帷子・４	１点	鎖帷子・５	１点	鎖帷子・６	１点
鎖帷子・７	１点				

合計１０点

１．写真撮影　　(現状確認) 写真だけではなく遺物の状態を目で確認。
２．Ｘ線写真撮影
３．クリーニング　　ブラシ・デザインカッター・リューター等で錆落とす。
(一部アルコールの中でのクリーニング)

4．脱塩処理　　ウォーターバスに純粋を50～60℃に設定し、湯煎の要領で浸漬。
塩分が完全に純粋の中に出なくなるまで（硝酸銀で確認）毎日取り替える。
5．乾燥　　常温又は熱風乾燥機で乾燥。
処理効果判定・乾燥後約１時間放置し確認。
6．樹脂含浸　　真空状態のところに約１時間。その後常圧状態で約１時間置く。
（パラロイドNAD―10・25～30％ソルベントナフサ溶液）
7．乾燥　　常温又は熱風乾燥機で乾燥。処理効果判定乾燥後約１時間放置し確認。
8．接合・充填　　シアノアクリレート系接着剤・エポキシ系樹脂で接合・充填。
錠（樹脂充填）
鋏（接合・充填）
9．写真撮影　　（完成）
12. 報告書作成

以上のような方針で金属製品（青銅製品・鉄製品）の保存処理および修復をおこなった。

参考までに平成17年度に実施した金属製品保存処理作業の中で脱塩処理状況（塩素イオン濃度変化と脱塩処理回数を明示）を図版７～図版12に示した。

平成16・17年度の国指定重要文化財「沖縄県首里城京の内跡出土品（附一、金属製品）保存処理」事業に際しては、次の方々にご指導・ご協力を戴いた。明記して謝意を表したい。

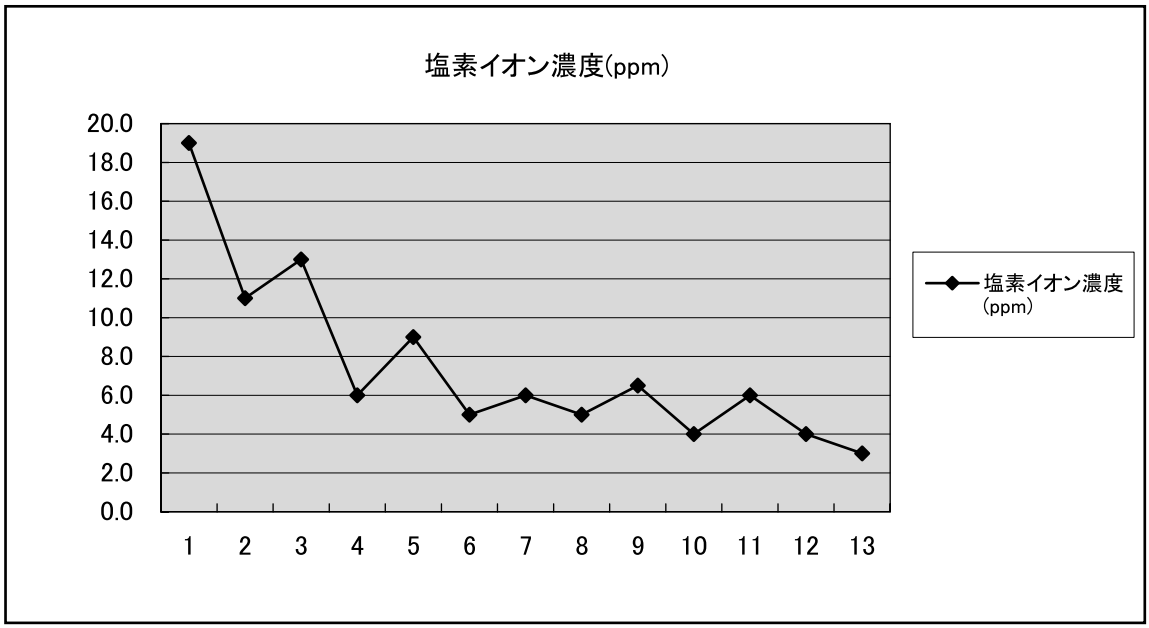
・文化庁 美術学芸課 考古資料部門 調査官・文化財管理指導官　原田 昌幸
・株式会社 芸　匠（文化財修理・複製）
・株式会社 文化財サービス　青山 奈緒（元沖縄県立埋蔵文化財センター調査課専門員。出土品保存処理および写真撮影）

第4表　保存処理委託用遺物　サイズ表
鉄製品

No.	遺物名	残存長縦(cm)	残存幅横(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	
1	鋏	13.2	6.2	1.5	113.4	
2	錠	7.5	5.2	0.7	69.3	内部空洞
3	蝶番	6.9	2.8	0.8	34.8	
21	鎖帷子1	7.8	6.6	4.8	153.0	
22	鎖帷子2	5.4	3.8	2.4	40.9	
23	鎖帷子3	4.2	3.3	1.0	15.3	
24	鎖帷子4	3.7	2.6	2.2	15.1	
25	鎖帷子5	4.3	3.5	2.1	23.8	
26	鎖帷子6	2.8	1.5	0.8	4.1	
27	鎖帷子7	1.8	2.1	5.6	2.4	

※欠落番号は、第３表に収録。

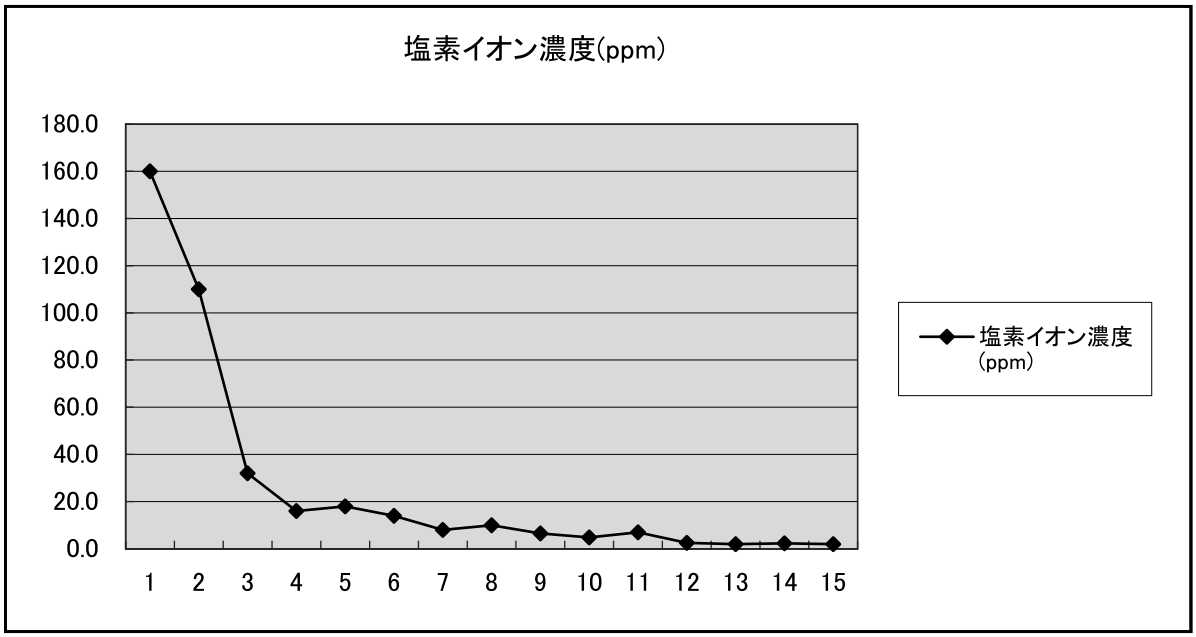
H17 沖縄県脱塩処理グラフ



脱塩回数	塩素イオン濃度(ppm)
1	19.0
2	11.0
3	13.0
4	6.0
5	9.0
6	5.0
7	6.0
8	5.0
9	6.5
10	4.0
11	6.0
12	4.0
13	3.0

脱塩方法	ソックスレー
脱塩水量	2000ml
測定装置	東亜DKK社製
	IM－5S
遺跡名	首里城京の内跡
遺物内容	刀装具等、銅製品
遺物点数	20点

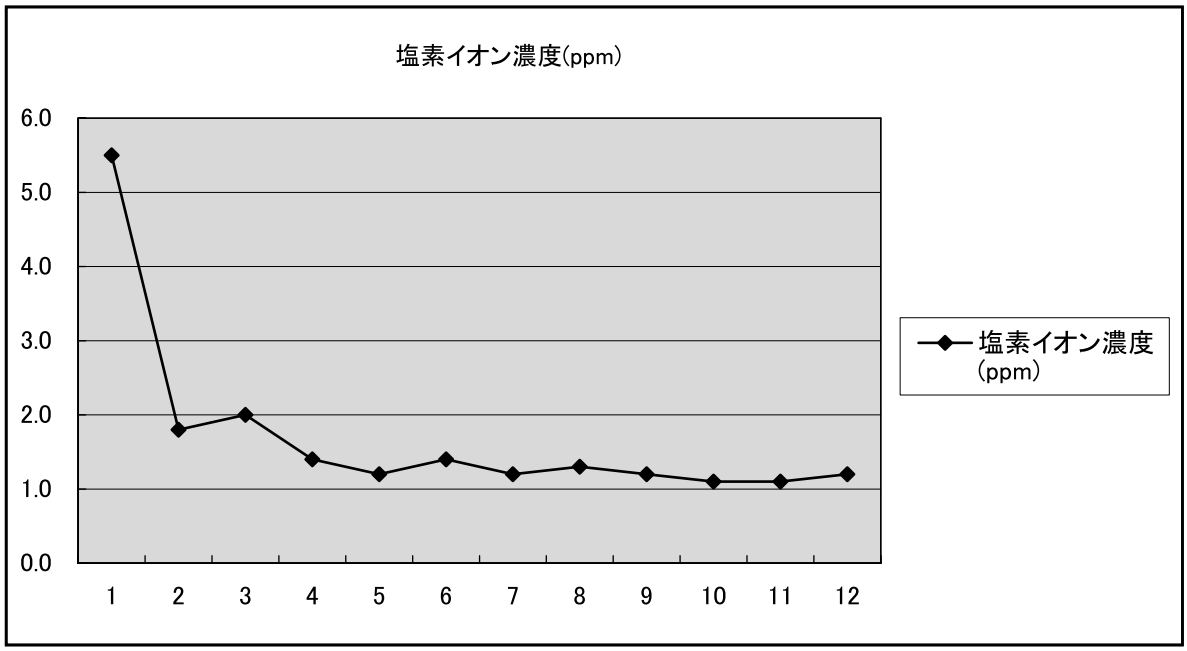
H17 沖縄県脱塩処理グラフ



脱塩回数	塩素イオン濃度(ppm)
1	160.0
2	110.0
3	32.0
4	16.0
5	18.0
6	14.0
7	8.0
8	10.0
9	6.5
10	4.8
11	7.0
12	2.5
13	2.0
14	2.3
15	2.0

脱塩方法	ソックスレー
脱塩水量	2000ml
測定装置	東亜DKK社製
	IM－5S
遺　跡　名	首里城京の内跡
遺物内容	鎹等、鉄製品
遺物点数	3点

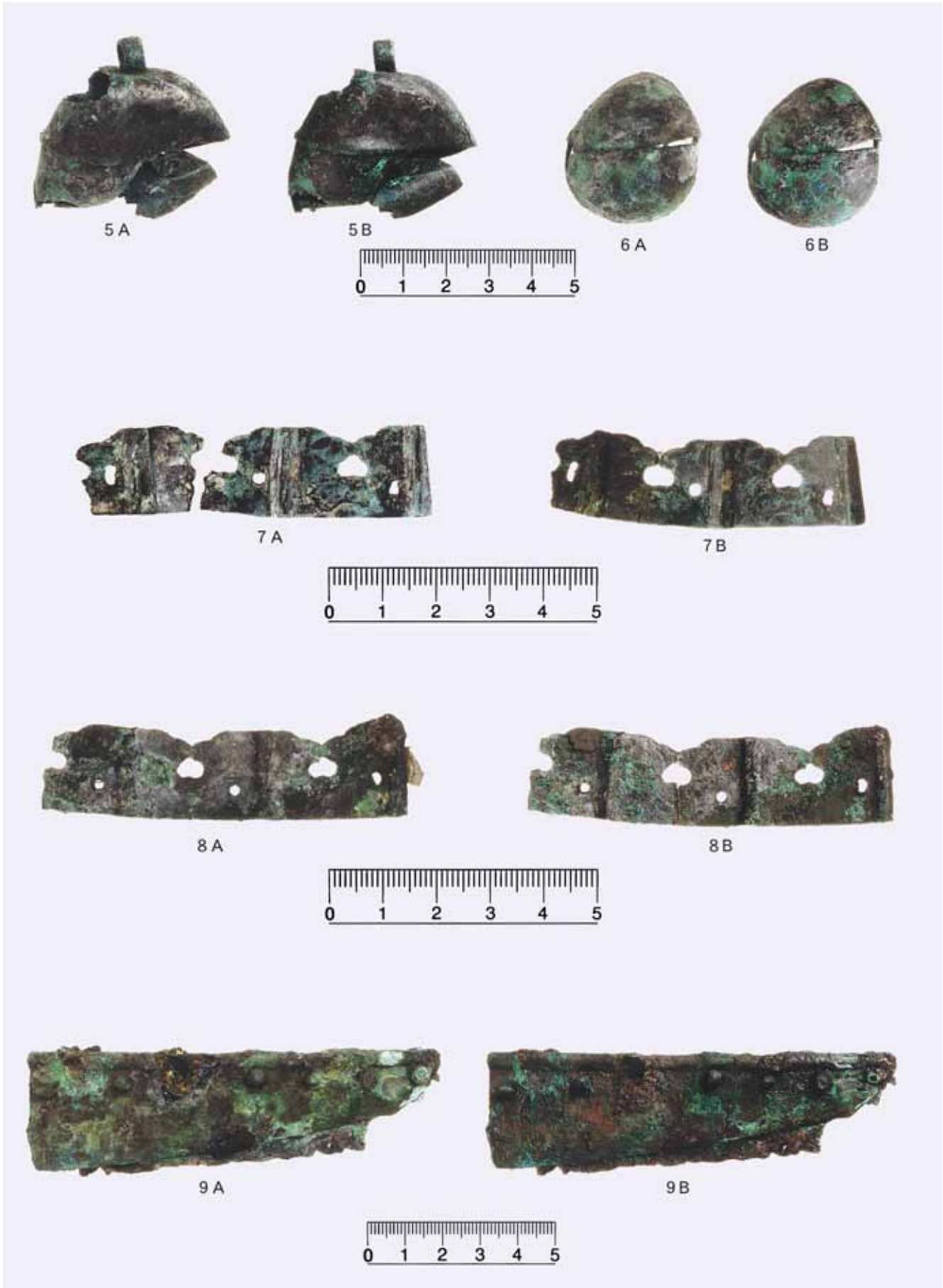
H17 沖縄県脱塩処理グラフ



脱塩回数	塩素イオン濃度(ppm)
1	5.5
2	1.8
3	2.0
4	1.4
5	1.2
6	1.4
7	1.2
8	1.3
9	1.2
10	1.1
11	1.1
12	1.2

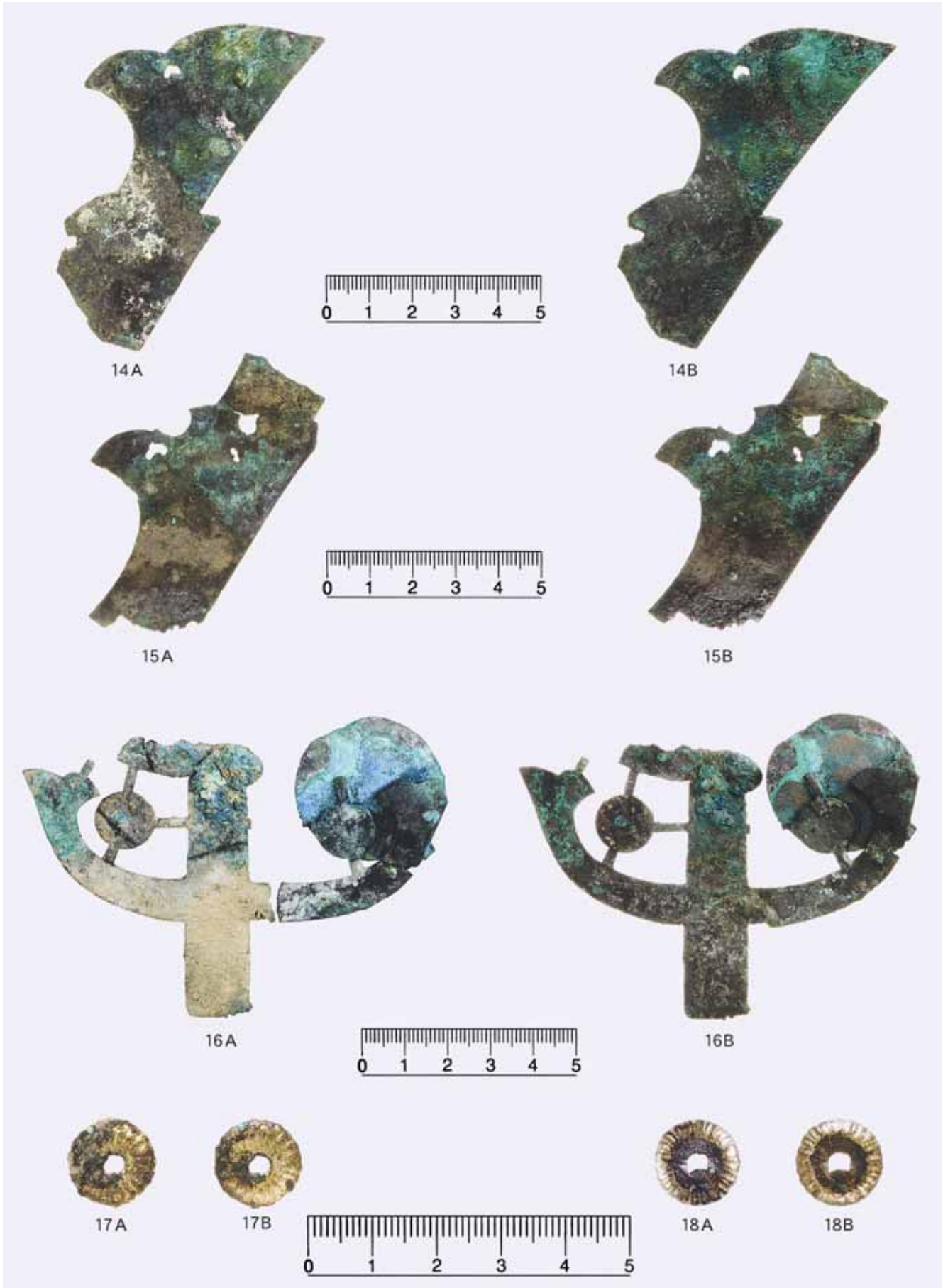
脱塩方法	ソックスレー
脱塩水量	2500ml
測定装置	東亜DKK社製
	IM－5S
遺跡名	首里城京の内跡
遺物内容	鎖帷子
遺物点数	8点

図版７　国指定重要文化財　平成17年度 金属製品保存修理
1.鏃、2.錠、3.蝶番、4.金銅製環状製品（A：修理前、B：修理後）

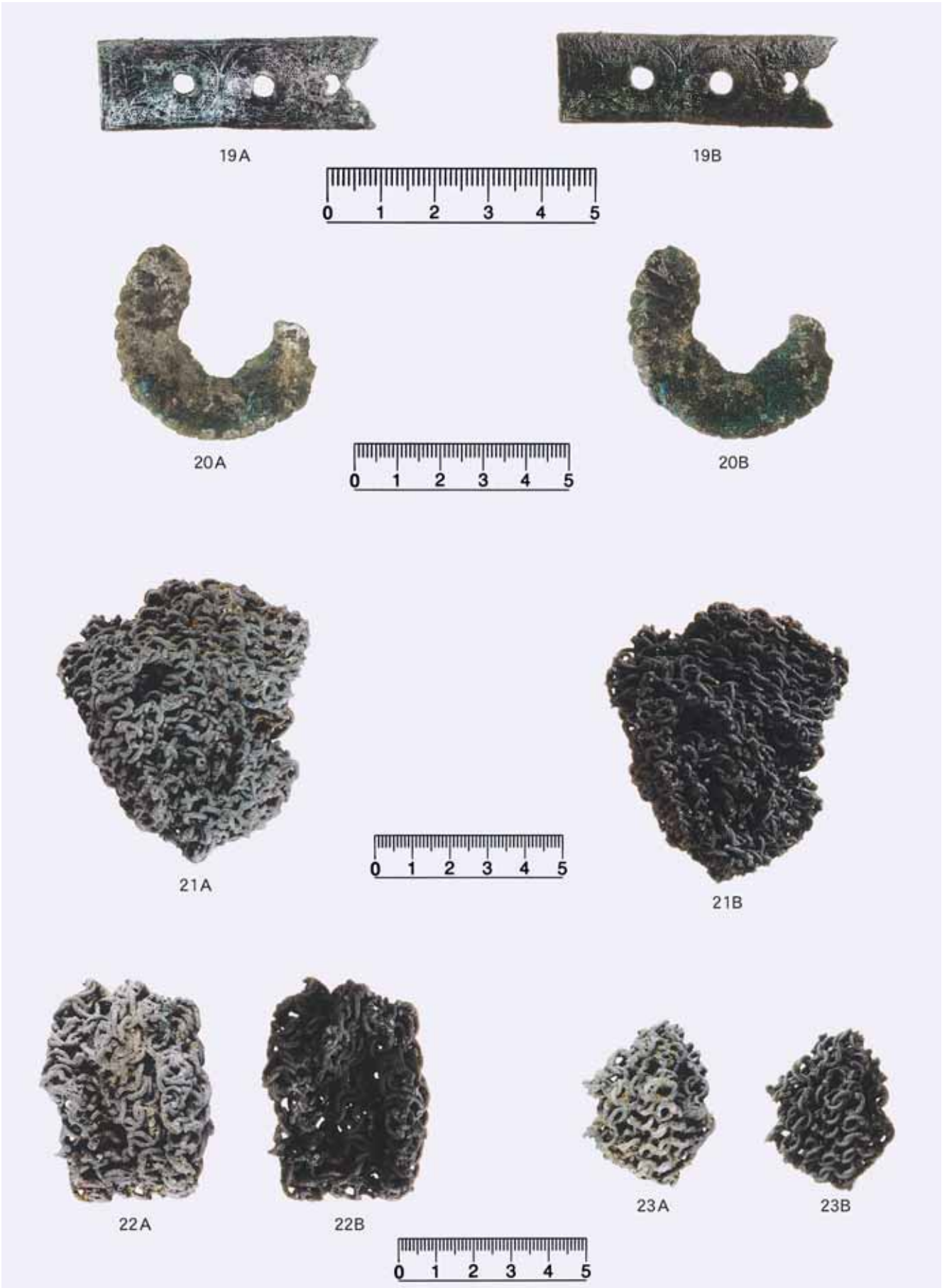


図版８　国指定重要文化財　平成17年度 金属製品保存修理
5･6.鈴、7･8.兜鉢の斎垣、9.兜鉢の矧板（A：修理前、B：修理後）

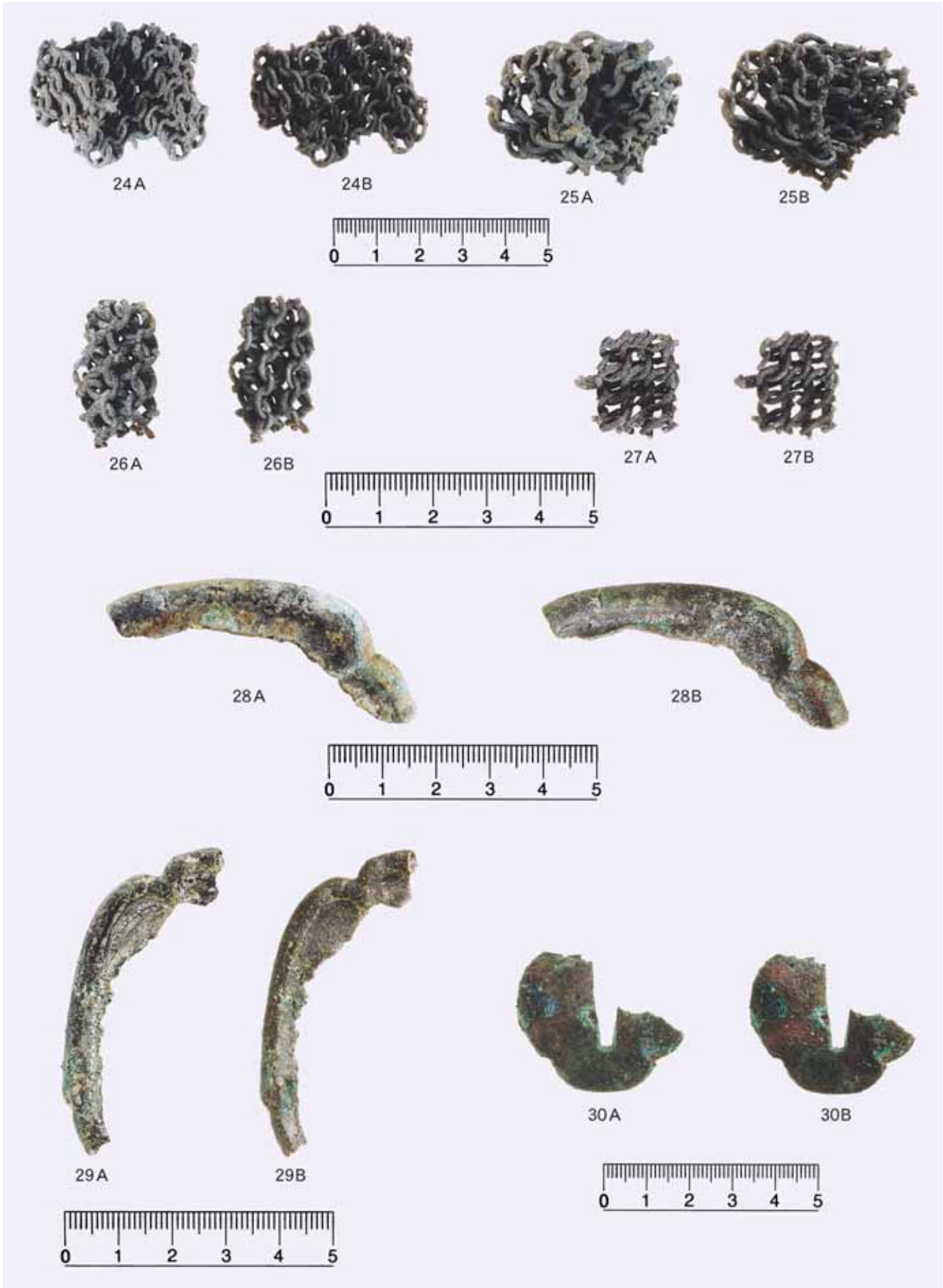
図版９　国指定重要文化財　平成17年度 金属製品保存修理
10.兜鉢の矧板、11～13.鏃形（A:修理前、B:修理後）



図版10　国指定重要文化財　平成17年度 金属製品保存修理
14･15.鍬形、16.立物中央飾り、17･18.八双金物の留め金具（A：修理前、B：修理後）



図版11　国指定重要文化財　平成17年度 金属製品保存修理
19.八双金物、20.据文金物の菊座、21～23.鎖帷子（A：修理前、B：修理後）



図版12　国指定重要文化財　平成17年度 金属製品保存修理
24～27.鎖帷子、28･29.鍔、30.切羽（A：修理前、B：修理後）

琉球王国・首里城関係年表（１）

西　暦	日本年号	中国年号	王　統	事　　項	日　本　・　世　界
600年	推古　8	開皇 20			遣隋使派遣(『隋書』)。
604年	12	仁寿　4			隋の煬帝即位。十七条の憲法制定。
605年	13	大業　1		隋の海師何蛮、流求を訪れる(隋書)。	
607年	15	3		隋の煬帝、朱寛を流求に遣わす(隋書)。	小野妹子を隋に派遣。法隆寺建立。
616年	24	12		掖玖人、大和朝廷に朝貢する。	
618年	26	武徳　1			隋の煬帝殺され、唐興る(～907年)。
625年	33	9		この頃『隋書』(流求国伝)編集(～656年)。	
630年	舒明　2	貞観　4			遣唐使始まる(～894年廃止)。
645年	大化　1	19			大化の改新。
663年	天智　2	龍朔　3			白村江の戦い(唐・新羅と百済・日本軍との間で戦われた。敗戦の結果、四世紀以来の日本と百済との連盟は消滅し、日本国内では対外防備用の山城が多く築かれた)。
672年	弘文　7	咸亨　3			壬申の乱(大海人皇子と大友皇子による皇位継承をめぐる内乱。673年に大海人皇子が即位)。
676年	天武　4	儀鳳　1			統一新羅成立(～935年)。
701年	大宝　1	嗣聖 18			大宝律令完成。
708年	和銅　1	景龍　2			和銅開称を鋳造。
710年	3	景雲　1			平城京遷都。
712年	5	4			『古事記』成立。
714年	7	開元　2		太朝臣遠建治等、奄美・信覚・球美等の島人52人を率いて大和に帰朝する(続日本書紀)。	
720年	養老　4	8			『日本書記』成立。
751年	勝宝　3	天宝 10			タラス河畔の戦い(製紙法の伝播)。
753年	5	天宝 12		遣唐使阿倍仲麻呂・唐僧鑑真、阿児奈波島に漂着する。翌月、多褶を指して出帆する(唐大和上東征伝)。	
794年	延暦 13	貞元 10			平安京遷都。
804年	23	20		僧空海の『性霊集』に留求の二字が初めてみられる。	
809年	大同　4	元和　4			薬子の乱(嵯峨天皇と平城天皇による政治的事件。平城天皇は出家、藤原薬子は自殺)。
838年	承和　5	開成　3			最後の遣唐使派遣。
853年	仁寿　3	大中　7		智澄大師を乗せた船、入唐の途中琉球国に漂着(元亨釈書)。	
894年	寛平　6	乾寧　1			遣唐使廃止。
907年	延喜　7	(後梁) 開平　1 (遼) 太宗　1			節度使朱全忠、唐を滅ぼす。五代十国(後梁・後唐・後晋・後漢・後周、907～960年)。
918年	18				高麗王朝興る(918～1392年)。
939年	天慶　2	会同　2			承平・天慶の乱(平将門・藤原純友の乱)。
960年	天徳　4	建隆　1			趙匡胤(太祖)、後周を滅ぼし宋(北宋)を建国(～1127年)。
997年	長徳　3	至道　3		太宰府、奄美人が管内諸国に乱入して人物を奪取したことを奏する(小右記)。	
998年	4	4		太宰府言上す、貴駕島(喜界島)に南蛮を捕え進むるの由を下知する(日本記略)。大和朝廷が太宰府の出先機関を奄美群島の「貴駕島」(喜界島)に設置(城久遺跡群：８世紀末～14世紀)。	
1051年	永承　6	天祐垂聖　2			前九年の役(～1062年。奥羽で起きた安倍氏の反乱。陸奥守兼鎮守府将軍源頼義と出羽国仙北の俘囚長藤原清原が鎮定)。
1083年	永保　3	元豊　6			後三年の乱(～1087年。奥羽安倍氏の旧領をも領有した奥羽最大の豪族となった藤原清原の内紛に陸奥守源義家が介入し、藤原氏を滅ぼす。朝廷は義家の私戦として恩賞を与えず奥羽を去る。以後100年間、奥羽は安倍・清原両氏に縁ある藤原清衡を祖とする奥州藤原氏によって支配)。
1127年	大治　2	建炎　1			高祖(欽宗の弟)、江南に逃れ南宋(～1279年)建国。
1156年	保元　1	紹興 26			保元の乱〔皇室(崇徳上皇と後白河天皇)および摂関家(藤原忠通・頼長)の内部対立による内乱。上皇側が敗北し、上皇は讃岐に流された〕。
1159年	平治　1	29			平治の乱〔後白河上皇の近臣間で、藤原通憲と藤原信頼が対立し、1158年二条天皇即位で天皇親政側の藤原経宗・惟方が勢力をのばし、これに、平清盛・源義朝の武士の対立が絡んだ。戦は平清盛が勝利し、その後、後白河上皇のもとで朝廷は安定したかにみえたが、平家一門が勢力をのばし武士の時代に転換。
1166年	仁安　1	乾道　2		舜天生まれる(～1237年？)。	
1180年	治承　4	淳熙　7		舜天、浦添按司になる。淳熙生間に利勇の乱起こる。	
1185年	元暦　2	12		舜馬順熙生まれる(～1248年？)。	平家滅亡(壇ノ浦の戦いで源氏が勝利し、1189年には奥州藤原氏を滅ぼして源頼朝が全国を平定)。
1187年	文治　3	14	舜天　元	舜天王即位と伝わる。この頃、初めて夏正(暦)が用いられる。	
1192年	建久　3	紹熙　3	6		鎌倉幕府成立(1192～1333年)。
1206年	建永　1	開禧　2	20	義本生まれる。	
1221年	承久　3	嘉定 14	35		承久の乱(後鳥羽上皇とその近臣が鎌倉幕府打倒に挙兵した事件)。
1222年	貞応	15	36		ジャワ、シンガサーリ朝成立(～1292年)。

琉球王国・首里城関係年表（２）

西　暦	日本年号	中国年号	王　統	事　　項	日　本　・　世　界
1225年	嘉禄　1	(南宋) 宝慶　1 (元) 太宗 20	39		ベトナム、陳朝大越国成立(～1400年)。
1229年	寛喜　1	紹定　2	8	英祖生まれる(～1299年？)。	
1231年	寛喜　3	4	45		蒙古、高麗に侵入。
1238年	暦仁　1	嘉熙　2	舜馬順熙　1	舜馬順熙 即位。	
1243年	寛元　1	淳祐　3	舜馬順熙　6	長崎の渡宋者一行、琉球に漂着。	
1249年	建長　1	9	義本　1	義本即位。	
1257年	正嘉　1	宝祐　5	9		タイ、スコータイ朝成立(1257～1350年)。
1259年	正元　1	開慶　1	11		高麗王高宗、蒙古に降伏。
1260年	文応　1	景定　1	英祖　1	英祖王即位。	
1261年	弘長　1	(南宋) 景定　2 (元) 中統　2	英祖　2	この頃、浦添極楽山に墓を築く(浦添ようどれ)。	
1264年	文永　1	(元)至元　1	英祖　5	久米・慶良間・伊平屋の各島、初めて中山に入貢。	
1265年	2	2	6	この頃(咸淳年間：1265年～78年)僧禅鑑浦添に極楽寺を建立。	
1266年	3	3	7	大島諸島、中山に入貢。この頃、泊に公館(泊御殿)と公庫築造。	
1267年	4	4	8	英慈生まれる(～1313年？)。	
1271年	8	8	12		蒙古、国号を元とする(1271～1368年)。
1273年	10	10	14	「癸酉年高麗瓦匠造」銘入りの高麗瓦製作される(1153年・1393年説あり)。	
1274年	11	11	15		元軍、日本来襲(文永の役)。
1275年	12	12	16		マルコ・ポーロ、中国に至る(～1295年)。
1279年	弘安　2	16	20		元、厓山の戦いで南宋を滅す。
1281年	4	18	22		元軍、日本来襲(弘安の役)。
1282年	5	19	23		元軍、第一次チャンパー(占城、ベトナム南部)遠征暴風雨で退却。
1284年	7	21	25		元軍、第二次チャンパー(占城、ベトナム南部)遠征はベトナム(陳朝大越国)の抵抗にあい失敗。
1287年	10	24	28		元軍、ビルマ遠征(パガン朝は滅び、分裂)。
1291年	永仁　4	28	32	元の世祖(フビライ汗)、楊祥に6000の兵を率いらせ瑠求を討つが失敗。	
1292年	正応　5	29	33		元軍、ジャワ侵攻に失敗。
1293年	永仁　1	30	34		ジャワ、マジャパヒト王国成立(～1520年頃)。
1296年	永仁　4	元貞　2	37	元の成宗、張浩を遣わし再び瑠求を討つが失敗、130人余を捕虜にして引きあげる(沖縄本島に元軍来襲)。	
1300年	正安　2	4	大成　1	大成即位。	
1309年	延慶　2	至大　2	英慈　1	英慈即位。	
1314年	正和　3	延祐　元	玉城　1	玉城即位、この頃から三山対立。	
1317年	文保　1	4	4	婆羅公管下密牙古人中国温州に漂着(『元史、温州府志』)。	
1321年	元亨　1	至治　1	8	察度生まれる。	
1323年	3	3	10		日元貿易船、韓国新安沖で沈没。
1328年	嘉暦　3	致和　1	15	西威生まれる。	
1333年	元弘　3	元統　1	20		鎌倉幕府滅亡。
1337年	延元　2	3	西威　1	成威即位。	
1338年	3	4	西威　2		室町幕府開く(1338～1573年)。
1350年	正平　5	至元 10	察度　1	察度王即位(浦添按司から王となり首里へ)。	タイ、アユタヤ朝成立(1350～1767年)。
1356年	11	16	7	武寧生まれる。	
1368年	23	(明) 洪武　1	19		元滅び明興る(1368～1644年)。明の海禁政策(私貿易・海外渡航の禁止)。
1369年	24	2	20		景徳鎮珠山山麓に御器廠を設置し監督官を置き焼造、一説にこの年景徳鎮御器廠設置。
1372年	文中　元	5	23	明の太祖、楊載を遣わし招諭、中山王察度、明へ進貢。尚巴志生まれる(～1439年)。	
1374年	3	7	25	明の太祖、刑部侍郎李浩を遣わし、陶器７万・鉄器1000を以って馬・硫黄を購入。	
1376年	天授　2	8	27	李浩等、琉球より馬40匹・硫黄5,000斤を購入して帰る。泰期等、李浩に従って進貢する。	
1377年	3	10	28	中山王察度元旦を賀し、馬16匹・硫黄1,000斤を明へ貢す(使者泰期)。	
1378年	4	11	29	中山、明に進貢。	
1380年	6	13	31	中山、明へ進貢。山南王承察度、初めて明へ進貢する(使者師惹)。	
1382年	弘和　1	14	33	中山王察度、明に馬・硫黄を貢す(使者泰期、亜蘭匏)。太祖、路謙に命じて進貢使を琉球まで送らせる。路謙、明に帰朝し三山の抗争を報告する。	
1383年	弘和　3	16	34	中山進貢(使者亜蘭匏)し、鍍金銀印を賜う。山南王承察度進貢(使者師惹)。山北王怕尼芝、初めて明へ進貢(使者模結習)。	洪武帝、日本との通交を絶つ。
1384年	元中　1	17	35	中山・山南・山北、明へ進貢。	

琉球王国・首里城関係年表（３）

西　暦	日本年号	中国年号	王　　統	事　　項	日　本　・　世　界
1385年	元中　2	18	36	明の大祖、山北王怕尼芝、船一隻を下賜。同じく明の太祖、山南王承察度へ船一隻を下賜。山南・山北王、駝紐鍍金銀印を賜う。	
1386年	3	19	37	中山、馬124頭・硫黄11,000斤を貢す(使者亜蘭匏)。	
1387年	4	20	38	中山(使者亜蘭匏)・山南王承察度及び山南王叔汪英紫(使者耶師姑)、明へ進貢。	
1388年	元中　5	21	39	明の太祖(朱元璋)、元朝17代天元帝の次男「地保奴」と妃・娘を捕らえ、多くの資財を与えて琉球に配流(明実録)。宮古の与那覇勢頭豊見親真佐久白川浜より中山に上る。山北(使者甚摸結致ら)・中山・南山、明へ進貢。	明の太祖(朱元璋)、元の遺子地保奴を琉球国へ配流(明実録)。
1389年	6	22	40	中山王、完玉之を高麗(朝鮮)に遣わす(朝鮮と通好)。高麗、報聘使金允厚等を琉球に派遣。	
1390年	7	23	41	八重山はじめて中山に入貢(宮古の与那覇勢頭豊見親真佐久とともに)。中山・山北(使者李仲ら)、明へ進貢。察度、高麗へ使者を派遣。	
1391年	元中　8 明徳　2	24	39	山南王叔汪英紫、明へ進貢(使者耶師姑、寿礼給智)、中山王世子武寧、馬・方物を貢す(使者亜蘭匏、嵬谷致)。	
1392年	元中　9 明徳　3	25	43	中山王察度、高世層理殿を建造し遊観する。察度、朝鮮へ２度使者派遣。中山、明へ進貢し、官生(日孜毎、潤八馬、仁悦慈を送る)を派遣。山南王承察度、明へ進貢し、官生(三五郎尾、実他廬尾、賀段志)を派遣。中国閩人三十六姓来琉と伝わる。	李氏朝鮮成立(1392～1910年)。
1393年	明徳　4	26	44	中山王察度、倭寇にさらわれていた朝鮮人を送り返すついでに、山南王子の承察度が朝鮮亡命を知り、その帰還方を願う。中山、明へ進貢。寨官子段子苺を留学させる。山南王叔汪英紫、明へ進貢(使者不里結致)。	
1394年	応永　1	27	45	中山王察度、亜蘭匏を明へ派遣進貢し、王位冠帯を請わしめる。亜蘭匏、王相となる。山南王叔汪英紫、明へ進貢。察度、朝鮮へ使者派遣。山北王怕尼芝、明へ進貢。	
1395年	2	28	46	中山・山南王叔汪英紫・北山王珉、進貢。	
1396年	3	29	武寧　1	武寧、中山王に即位。中山、明へ進貢、寨官の子２名留学。北山王珉没し、攀安知が即位。山北王攀安知(使者善佳古耶)・山南王承察度及び山南王叔汪英紫、明へ進貢。	
1397年	4	30	2	中山・山南王叔汪英紫・北山王攀安知(使者恰宜斯耶)、明へ進貢。察度、朝鮮へ使者派遣。	足利義満、金閣寺を建立。
1398年	応永　5	31	3	中山・山北王攀安知、明へ進貢。山南王温沙道、家来15名と朝鮮へ亡命(10月に客死)。	この頃、マラッカ王国成立(14世紀末～1511年)。
1400年	応永　7	建文　2	5	察度。朝鮮へ使者派遣、世子武寧も方物を献ず(李朝実録)。	
1402年	9	4	7	佐敷按司尚巴志、島添大里按司を滅ぼし東四間切一帯に勢力を伸ばす。	
1403年	10	永楽　1	8	中山、明へ進貢。山北王攀安知(使者善住姑那)、明へ進貢し、冠帯衣服を賜ることを請い許される。山南王汪応祖、明へ進貢(この頃、汪応祖山南王に即位)。	
1404年	11	2	9	明国皇帝の冊封使、はじめて来琉。シャム(タイ王国)船渡来し交易。成祖、冊封使を派遣し汪応祖を山南王に封じる。中山・山北王攀安知(使者亜都結制ら)、明へ進貢。	明との勘合貿易開始。
1405年	12	3	10	中山王、明に襲封を謝し、進貢。山北王攀安知(使者赤佳結制ら)、明に進貢。山南王汪応祖、明に進貢し李傑を留学させる。	鄭和の南海遠征(1405～1433年)。
1406年	13	4	尚紹　1	尚巴志、中山王武寧を滅ぼし、父思紹を王とする(第一尚氏王統始まる)。この頃、首里城瑞泉門(1406～1469年)が創建。中山・山南、明へ進貢。山北王攀安知、明へ進貢。	
1407年	14	5	2	中山王尚思紹、使者を明に送り武寧の訃を報告、武寧の世子と称し襲封を請う。成祖より冊封の詔を賜う。中山・山南、進貢。	ベトナム、明に服属。
1408年	15	6	3	中山王進貢、襲封を謝す(使者阿勃吾斯)。山南王、馬を明へ貢す。	
1409年	16	7	4	中山王、明へ進貢、万寿聖節を賀す。山南王、馬を明へ貢す。朝鮮へ阿乃佳結制を派遣。	
1410年	17	8	5	中山、明へ進貢、官生模都古等３人を派遣。山南王、明へ進貢し、万寿聖節を賀す。朝鮮へ模都結制を派遣。	
1411年	18	9	6	中山、明へ進貢、祖魯古・懐得、明に留学。王茂、国相となる。	
1412年	19	10	7	中山、明へ進貢、万寿聖節を賀す。山南、明へ進貢。	
1413年	20	11	8	中山、明へ進貢、志久等を留学せしむ。山南、明へ進貢。	
1414年	21	12	9	中山、明へ進貢。山南王汪応祖、兄達勃期に殺害され諸按司が連合してこれを討ち他魯毎が山南王となる。	
1415年	22	13	10	中山、明へ進貢。山南王他魯毎、明へ進貢し襲封を請う。冊封使陳季芳が来琉し、他魯毎を山南王に封ずる。山北王攀安知、明へ進貢。将軍足利義持、尚思紹へ〈りうきう国よのぬしへ〉の文書送る。	
1416年	23	14	11	尚巴志、北山王攀安知を滅ぼす。	
1417年	24	15	12	中山・山南他魯毎、明へ進貢。浙江にて撥到せる瑞安千戸所の仁字号海船一隻を下賜。	

琉球王国・首里城関係年表（４）

西　暦	日本年号	中国年号	王　　統	事　　項	日　本　・　世　界
1418年	25	16	13	中山・山南、明へ進貢。福建にて撥到せる洸字号海船一隻を下賜。	
1419年	26	17	14	中山、明へ進貢。	
1420年	27	18	15	中山王、佳期巴那をシャム(タイ)に遣わす(通事梁復)。	
1421年	28	19	16	中山王尚思紹没。パレンバン(インドネシア)との交易はじまる。	
1422年	29	20	尚巴志　1	尚巴志即位。次男尚忠を北山監守に任ずる。中山、明へ進貢(使者模都古)。この頃、美福門(1422～1439年)創建。	
1423年	30	21	2	中山、明へ進貢(使者阿不察都)。	
1424年	31	22	3	成祖、尚思紹の訃を聞き周彝を遣わして祭賻を賜う。下天妃廟建設。中山・山南、明へ進貢。	
1425年	32	康熙　1	4	冊封使柴山来琉し、尚巴志を中山王に封ずる。中山、明へ進貢、永字等号海船二隻、修理を乞う。山南王、恭字号海船の修理を乞う。	
1426年	33	2	5	中山王、明の宣宗宣徳帝の即位を賀し進貢(使者佳期巴皮那)。	
1427年	34	宣徳　2	6	龍潭を堀り安国山を築く、安国山樹華木之記碑建立。明より柴山来琉し、尚巴志に弁冠服を賜う、また生漆・磨刀石を銅銭で買いつける。中山・山南他魯毎、明へ進貢。	
1428年	正長　元	3	7	建国門(中山門)を創建。中山、宣宗へ皮弁冠服の賜与を謝し、進貢。	ベトナム、黎朝大越国(1428～1527年、1532～1789年)。
1429年	永享　元	4	8	中山・山南王他魯毎、明へ進貢。中山王尚巴志、山南王他魯毎を滅ぼし三山を統一。	
1430年	2	5	9	中山王、南者結制をジャワ(インドネシア)に遣わす。この頃、首里城美福門(1422～1439年)が創建。中山王、明に三山統一を告げ勅語賜る。明の使者(柴山、阮某)を琉球に遣わし、中山王に尚姓を賜う。	
1432年	4	7	11	漫泰来結制、林恵は荒字号船の修理を乞う、明朝より工部に命じて海船一隻を下賜。	
1450年	宝徳　2	景泰　1	尚金福　1	進貢船が漂着し、琉球負担で建造することを許可(造船して還る)。小型の銃砲「火筒」(石火矢)が記録される。この頃、中国式陶窯伝来す。	
1451年	3	2	2	国相懐機、長虹堤を築く。	
1453年	享徳　2	4	4	王位継承争い「志魯・布里の乱」起こる。首里城焼失。	
1454年	3	5	尚泰久　1	琉球銭貨、「大世通寶」が初めて鋳造。尚泰久即位の1454年～56年の間に板葺き屋根の首里城正殿を再建(『李朝実録』の琉球漂着済州島民の報告)。	
1456年	康正　2	7	3	『李朝実録』、この年既に漏刻門があり時を太鼓で報じる。朝鮮済州島の船が久米島に漂着。	
1458年	長禄　2	天順　2	5	護佐丸・阿麻和利の乱。「万国津梁の鐘」鋳造され首里城正殿にかける。	
1459年	3	3	6	王府失火で倉庫(京の内倉庫跡)などを焼く。	
1461年	寛正　2	5	尚徳　1	琉球銭貨、「世高通寶」が初めて鋳造。	
1462年	3	6	2	朝鮮人８人、宮古島に漂着。	
1463年	4	7	3	マラッカ(マレーシア)へ使者を派遣。	
1466年	文正　1	成化　2	6	琉使、室町幕府将軍足利義政に謁して辞去に際し「火砲」(石火矢)を鳴らして京人を驚かす。尚徳王、喜界島に遠征し、凱旋して八幡宮を建立。	
1467年	応仁　1	3	7		応仁の乱起こる(1467～1477年)。
1470年	文明　2	6	尚円　1	金丸、王位に就き尚円と号し、第二尚氏王統始まる。 琉球銭貨、「金圓通寶」が初めて鋳造。	
1471年	3	7	2	李氏朝鮮成宗王の命で申叔舟『海東諸国記』を著す(御物グスクが「寶庫」と記載)。	李氏朝鮮成宗王の命で申叔舟『海東諸国記』を編む。
1472年	4	8	3	マラッカへ派遣船(七洋州にて貨物・船を漂失す。船隻を補造し回国する)。	
1473年	5	9	4	シャムへ派遣船(広東に漂着し、船隻を補造して回国する)。	
1474年	6	10	5	福建にて使者馬勘比、通事梁澤順、船隻を補造して回国する。	
1475年	7	11	6		ベトナム占城国と安南国の戦いで、琉球船占城国に味方し、安南側を攻撃。
1477年	9	13	尚宣威　1 尚真　1	尚宣威王位に就くが、尚真に位を譲る。 朝鮮済州島民金非衣ほか三名、与那国島に漂着、首里に転送、朝鮮へ護送される。 この頃(1477～1526年)、歓会門、久慶門、白銀門ができる。	
1484年	16	20	8	永楽に賜う船が三隻となり、福建にて補造する。	
1490年	延徳　2	弘治　3	14	パタニ(タイ)との交易開始。	
1494年	明応　3	7	18	円覚寺建立(1494年竣工)。	
1497年	6	9	21	多良間島民愁可伝導花ら八名、琉球に紅花献納の帰り大風に遭い朝鮮済州島に漂着する。	スマトラ、アチェ王国成立(15世紀末～20世紀初)。
1500年	9	7	24	八重山、オヤケアカハチの乱が起き中山軍に平定。宮古、仲宗根豊見親アカハチ征伐の途次に仲屋金盛に与那国に出兵し、ドナンバル村(与那原遺跡)やタティク村(伝タティク村跡遺跡)を襲撃して村を焼き払い按司を殺害するがサンアイ・イソバに撃退される。	

琉球王国・首里城関係年表（５）

西　暦	日本年号	中国年号	王　　統	事　　項	日　本　・　世　界
1501年	文亀　1	14	25	玉陵を築く。	
1502年	2	15	26	円覚寺の前に圓鑑池を造り、弁財天堂を建し朝鮮王から贈られた方冊藏経を納める。琉球の使臣を福健に送って、船の補造する。	
1504年	永正　1	17	28	宮古藏設置と伝わる。	
1506年	3	正徳　1	30	久米島、具志川按司を征討。宮古の仲宗根豊見親、川満大殿に下地橋道を造らす(～1564年)。正徳年間に首里城北殿が創建。	
1507年	4	2	31	入貢の小船二隻を修造と補造する。	
1508年	5	3	32	首里城正殿に石造欄干造営(中国的様式)、北殿創建、一対の大龍柱(中国産貴石：輝緑石)を設置。	
1511年	8	6	35		ポルトガル、マラッカ占領。
1513年	10	8	37	宮古の金志川那喜多嗣津、大般若経を中山より求む。	
1517年	14	12	41		ポルトガル、広州入港。
1518年	15	13	42		ポルトガル、スリランカ占領。
1519年	16	14	43	園比屋武御嶽石門・弁ヶ嶽の石門創建。	
1521年	18	16	45		マゼラン、フィリピンで殺される。
1522年	大永　1	嘉靖　1	46	与那国島の鬼虎、宮古の仲宗根豊見親ら征伐軍に討たれる。忠導氏玄屯、初めて宮古平良の頭となる。真珠湊碑文(仮名書きのミセセルが書かれる)建立し、軍事兼用の真珠道整備と真玉橋橋架、那覇港防禦を明記。石門(真珠道)の東側へ国王頌徳碑建立(宮古の仲宗根豊見親玄雅、宝剣治金丸などを献上し国王の徳讃え、殉死を禁じる)。1522年創建の真玉橋は木橋五座(中央が真玉橋、北側が世寄橋、南は世持橋、両端に無名の二座)。この頃(1527～1555年)、龍樋、首里門(守礼門)を創建。	
1523年	大永　2	嘉靖　2	47	諸按司を各間切のグスクから首里城下に移住させ、各地に按司掟を派遣し統治させる。	寧波の乱(中国に派遣された細川氏と大内氏の使節が寧波で争乱を起こす)。
1524年	3	3	48	西塘、竹富大首里大屋子(頭)拝命し、竹富島に公蔵(蔵元)創設。	
1528年	享禄　1	7	尚清　2	待賢門(後の守礼門)建立。	
1531年	4	10	5		ビルマ、トゥングー朝成立(～1752年)。
1532年	天文　1	11	6	『おもろさうし』巻一編集。宮古、大嶽城の変(金志川死亡、豊見親制廃止)。	一向一揆、越前朝倉氏を敗る。
1537年	6	16	11	尚清王、兵を発して大島の与湾大親を征討。	
1540年	9	19	14	海船四隻を補造する。	
1543年	12	22	17	八重山藏元竹富島より石垣に移転する。	ポルトガル人、種子島漂着(鉄砲伝来)。
1544年	13	23	18	首里城東南側の城壁工事始める。	
1546年	15	25	20	首里城東南側城壁工事完成し、城壁が二重となる。継統門を築き、添継御門之北之碑文・同南の碑文を建立。朝鮮済州島民12人琉球に漂着。	
1549年	18	28	23		ザビエル、鹿児島に来る(キリスト教伝来～)。
1553年	22	32	27		川中島の戦い(～1564年。武田信玄と上杉謙信の抗争)。
1554年	23	33	28	那覇港に屋良座森城が築城、碑文が建立される。	
1555年	弘治　1	34	29	入貢の使臣、海上の民船を購入。	倭寇、韓国全羅道を侵す。
1556年	2	35	尚元　1	尚元即位、倭寇来襲し尚元王、兵を率いてこれを破る。	明が倭寇の禁圧要求。
1560年	永禄　3	39	5		桶狭間の戦い(織田信長、今川義元を破る)。
1562年	5	41	7	首里城奉神門前の石欄干を建てる。	
1565年	8	44	10		スペイン、フィリピン征服開始。
1571年	元亀　2	隆慶　5	16	大島を征服する。円覚寺に廟を建立。	スペイン、マニラ建設(～1898年)。
1573年	天正　1	万暦　1	尚永　1	尚永即位。	室町幕府滅亡。
1574年	2	2	2	人頭税制定(粟納、のちに一部反布納)。	
1575年	3	3	3		長篠の合戦 (織田信長・徳川家康の連合軍が武田勝頼軍を破った)。
1579年	7	7	7	首里門に「守礼之邦」の扁額を掲げる。	
1581年	天正　9	9	9	明国人渡嘉敷三良、真玉橋村で製陶する(1588年説あり)。	
1582年	10	10	10		本能寺の変。大友・大村・有馬、ローマ教皇に少年使節を派遣(～1590年)。
1584年	12	12	12		スペイン商船平戸来航。
1585年	13	13	13		唐津焼が天正13年(1585)銘の木簡と共伴(堺環濠都市遺跡)。
1590年	18	18	尚寧　2		豊臣秀吉、全国統一。
1592年	文禄　1	20	4		豊臣秀吉、朝鮮出兵(1592～1598年)。
1596年	慶長　1	24	8		オランダ人、ジャワ島に到達。
1597年	2	25	9	浦添から首里に至る道路が開通し、大平橋(平良橋)が石橋に改築。明より甘藷持ち帰ると伝わる。	慶長の役(1597～1598年)。ジャワ、マタラム王国成立(16世紀末～1755年)。
1598年	3	26	10		この頃、秀吉の朝鮮出兵の時に連れ帰った陶工によって砂目積の窯積技法が九州に伝わった。胎土目積から砂目積に変わり、磁器が焼成される。
1600年	5	28	12		関ヶ原の戦い。イギリス、東インド会社設立。
1603年	8	31	15		徳川家康、江戸幕府を開く。
1605年	10	33	17	湧田瓦窯で「萬暦三十三年」銘入り瓦質土器が焼成。野国総官、福州より甘藷を持ち帰る。	
1609年	14	37	21	薩摩軍(3000の兵)侵攻、浦添極楽寺、弁財天堂破壊し、尚寧王薩摩へ連行(～1611年帰国)。	幕府、島津家久に琉球を賜う。オランダ商館、長崎平戸に設置。対馬、朝鮮と通商条約を結ぶ。

琉球王国・首里城関係年表（６）

西　暦	日本年号	中国年号	王　　統	事　　項	日　本　・　世　界
1610年	15	38	22	薩摩、琉球検知。尚寧王徳川家康に拝謁。	
1614年	19	42	26	八重山の権現堂、桃林寺完成(茅葺き)する。宮古の諸村にブンミャー(番所)を設ける。	大坂冬の陣。
1615年	元和　1	43	27		大坂夏の陣。
1616年	2	44	28	薩摩より朝鮮陶工一六〔張献(献)功・仲地麗伸に改名し、湧田に宅を賜う〕および一官、三官が薩摩苗代川から招かれ、朝鮮式陶法を伝授(一官、三官は帰国し、一六は湧田村で作陶)。弁財天堂再建。この頃、首里城南殿(1621～1627年)が創建。	満州王朝興る。
1623年	9	天啓　3	尚豊　3	『おもろさうし』巻三以下成る。	イギリス、平戸の商館を閉ざす。
1624年	寛永　1	4	4		オランダ、台湾占領(1624～1661年)。
1628年	5	崇禎　1	8	首里城南殿創建。	
1629年	6	2	9	宮古在番設置。	
1634年	11	7	14	将軍への使節として江戸上り「慶賀使・謝恩使」が始まる。	長崎に出島を築く。
1635年	12	8	15	七世阿邦英(中国名)中城親方守真、瓦奉行職に就く。八重山キリシタン事件の石垣永将、渡名喜島で処刑。	
1636年	13	9	16	国吉、明から螺鈿の法(漆器装飾法)を学んで帰国。	満州王朝、国号を清とする。
1637年	14	10	17		島原の乱(～1638年)。
1638年	15	11	18	張献(献)功・仲地麗伸死去。	
1639年	16	12	19	地震があり、城壁崩壊し、修復工事をおこなう。	
1641年	18	14	尚賢　3	八重山に大和在番を設置(～1649年廃止)。宿藍田(平田典通)生まれる。	オランダ、ポルトガルよりマラッカを奪い占領。オランダ人を出島へ移転、鎖国の完成。
1644年	正保　1	順治　1	4	各所に遠見番(烽火の制)を設置。	明王朝滅亡、清が興る。
1649年	慶安　2	6	尚質　2	四世昭弼(阿波根親方)瓦奉行職に就く。	
1650年	3	7	3	向象賢、『中山世鑑』を著する。	
1656年	明暦　2	13	9	当間(伊地知)重陳、鳩目銭を鋳造。	
1660年	万治　3	17	13	首里城、火災で炎上し正殿その他が全焼する。	
1661年	寛文　1	18	14	慈恩寺橋が龍潭に移設されて世持橋となる。	鄭成功、台湾に拠る(鄭氏台湾)。
1665年	5	康熙　4	18	平田典通ら諏方仲左衛門より上焼物秘伝書を譲り受け、各地の「焼物薬種並白土」を調べる。	シャム、清に朝貢。大阪城天守閣焼失。
1667年	7	6	20	平田典通、茶壺と茶碗を製作。	
1668年	8	7	21	「大清康熙七年」墨書銘の焼締御殿方厨子甕製作される。	
1670年	10	9	尚貞　2	首里城正殿再建工事により瓦葺きに改める。平田典通(宿藍田)中国より「五色玉諸焼物薬掛け」(上焼き)手法を習得する。「真和志間切安謝村・・康熙九年・・読谷山ニテ焼申候」銘の喜名焼厨子甕製作される。	イギリス、アモイに商館設置。
1671年	11	10	3	「康熙拾年」銘の喜名焼厨子甕製作される。平田典通(宿藍田)、中国福州で陶法を学ぶ。	
1672年	12	11	4	平田典通、閩に赴き五色玉諸焼物薬掛の法を学び帰国し、御城御庭用の大壺製作。「寛文十二年」銘の喜名焼徳利製作される。	
1673年	13	12	5	壺大工の花城親雲上、御城の御飾り用の天水甕を美里間切知花村に窯を仕立て焼き調える。	
1674年	延宝　2	13	6	「大清康熙十三年」銘の知花焼酒甕製作される。	
1676年	4	15	8	平田典通、孔子及びその弟子４人の像を製作。	
1677年	5	16	9	東苑(御茶屋御殿)が創建、首里金城の石橋が完成する。	
1680年	8	19	12	平田典通、赤焼家口十炉、茶家五對、天目八、茶壺七、屋良部之葉形茶皿一束、以上白薬を掛け製作。この頃、皿・鉢類に高台内を蛇の目状に釉ハギする技法が始まる。	
1681年	天和　1	20	13	中山門が瓦葺に改修される。平田典通、御進上物の玉大硯屏を製作する。	
1682年	2	21	14	平田典通、首里城正殿(百浦添)の五彩彫賞(龍頭彫賞)および御冠の玉、唐衣装用の堤鳴玉を製作。那覇湧田・首里宝口・美里知花の三窯場の陶工を牧志村壺屋に集住させ、陶窯が一ヶ所に統合。	江戸大火(八百屋お七の火事)。
1683年	3	22	15		鄭氏が降伏し、台湾が清の領土となる。
1685年	貞享　2	24	17	宮古蔵元を瓦葺きとする。	アルバジンにて清軍、ロシア軍と戦う(～1686年)。
1690年	元禄　3	29	22	平田典通、嘉数筑登之親雲上・高江洲筑登之・小禄二也に釉薬などを伝授。	
1694年	7	33	26	石火矢橋(豊見城城跡東側の饒波川に橋架)を木橋から石橋に改築。八重山在番所の要請で瓦細工の瀬名波にや八重山に出向く。	
1695年	8	34	27	蔵元を瓦葺きにするため、八重山で瓦細工が名蔵窯を開き、造瓦法を島民に伝授。	中国、紫禁城大和殿なる。
1696年	9	35	28	八重山の蔵元、始めて瓦葺きとなる。八重山桃林寺社宮を重修し、瓦葺きにする。	オランダ、ジャワで始めてコーヒーを栽培。
1699年	12	38	31	宮古に観音堂建立する。	
1702年	15	41	34	用啓基・一世致元、仲村渠筑登之親雲上致元壺屋細工に就任。	18世紀前半を中心にコンニャク伴(印刷法)や型紙摺の装飾法が流行する。
1703年	16	42	35	八重山権現堂、瓦葺きに改める。八重山桃林寺、瓦葺きに改修する。	
1704年	17	43	36	平田典通、百浦添の補修のため、彫甍と龍瓦を製作。	
1706年	宝永　3	45	38	平田典通、炉茶屋に對、玉焼を製作。	
1707年	4	46	39	真玉橋石橋に改修。	

琉球王国・首里城関係年表（７）

西　暦	日本年号	中国年号	王　　統	事　　項	日　本　・　世　界
1708年	5	47	40	「前任龍福寺法林和尚 康熙四十七年・・・作細工和久田(湧田)村渡口仁也」銘の湧田焼獅子型骨壺製作される。	
1709年	6	48	41	首里城正殿・北殿・南殿焼失。はじめて墨を造る。	
1710年	7	49	尚益　1	馬艦船建造はじまる。	
1712年	正徳　2	51	3	首里城再建が本格化し、1715年に完了する。	
1713年	3	52	尚敬　1	宿徳業・二世典寛、平田親雲上典寛、唐衣装のために玉焼を製作。	
1714年	4	53	2	平好仁、はじめて石硯を造る。	
1717年	享保　2	56	5	平田典寛、冠の玉(「玉御冠之御玉」)・衣装用の玉焼を製作。	
1721年	6	60	9	円覚寺大殿(龍淵殿)などが炎上する。	台湾、朱一貫の乱。
1722年	7	61	10	平田典通死去。	
1723年	8	雍正　1	11	仲村渠致元、陶法を会得し伝授する。	
1724年	9	2	12	仲村渠致元、八重山の山田平等に窯を造り壷および上焼を伝授。	
1726年	11	4	14	八重山の阿香花窯(山田平等)より「雍正四年丙午」銘入り無釉陶器が焼成。	
1727年	12	5	15	仲村渠致元、八重山より帰島する。「法司翁氏・・大清康熙五十三年・・卒、盛方室式氏・・・大清康熙五拾七年・・卒、同雍征五年丁未卒秋日、納骨」銘の知花焼壺型厨子甕製作される。	カンボジア船、長崎に来航。中国、ロシアとキャフタ条約を結ぶ。
1728年	13	6	16	仲村渠致元、須焼南京家、香合を製作。	
1729年	14	7	17	首里城正殿重修され、「御差床」の位置を中央に移設。珠永輝・一世 仲宗根筑登上喜、平田典寛より磁器の陶法を学び、「建盞志武喜御茶入及御天目」を製作する。仲村渠致元、「白焼物」を作り奉上す、以後国中に広まる。また、瓦控を壺控に改造する。	
1730年	15	8	18	**仲村渠致元、薩摩の立野(竪野)で三代星山仲次(金豊、初代は金海)と林新右衛門に師事し陶法を伝授される。その後、苗代川にて滞龍官から「雨水壺大鉢焼物之陶法」を伝授される。八重山の黒石川において蔵葺き用の瓦を焼き成功し、名蔵窯を留めて慶田川壺窯で瓦を焼成する。比謝橋の板橋三座を石橋に改修（五座全て石橋となる。）**	
1731年	16	9	19	仲村渠致元、薩摩式の窯を築く。この窯は特定できないが、「古波蔵村山野内」に築窯し、舟で白土・薪等を運ぶ記述あり(『用姓家譜』)。一説では古波蔵村(真和志間切)の窯築造は1743年説がある。仲宗根喜元(珠永輝)、平田典寛から五色玉之法を学ぶ。	清人沈南蘋、長崎に来て画法を伝える。
1732年	17	10	20	佐敷御殿を継世門内に築き、世誇宮の東に蔵を建て、宝物を収蔵。仲宗根喜元、平田典寛に随行して国頭中頭嶋尻などを巡り、玉薬及び磁器薬の採取を学ぶ(『新参珠姓家譜』)。「雍正十年癸丑」銘の八重山焼黒釉壺型厨子甕製作される。	中国、大甲蕃の乱を平定する。
1733年	18	11	21	仲宗根喜元、大和御用の大花鉢を製作。	華僑、タイのアユタヤ王宮を侵す。
1734年	19	12	22	「・・雍正十二年・・喜物」銘の八重山焼水甕製作される。	
1735年	20	13	23	八重山の黒石川窯より雍正13年銘入りの陶片が採集。	
1736年	元文　1	乾隆　1	24	首里城北殿老朽化により改修。仲村渠致元および仲宗根喜元、薩摩への献上品として煙草盆の火取と灰吹を製作(『用姓家譜』・『新参珠姓家譜』)。	
1737年	2	2	25	仲宗根喜元、御書院所用の器具として「大花瓶一個、大丁子風呂炉一個、茶入一個、御天目一対」を製作する。また、内府へ「御濃茶御茶碗御花入」を製作し献上する(『新参珠姓家譜』)。	
1738年	3	3	26	仲村渠致元、花入一個を製作。仲宗根喜元、「薬焼湯煎鑵」を内府に献上する(『新参珠姓家譜』)。 「乾隆三年」銘の島瓦(男瓦)製作される。	
1739年	4	4	27	首里城漏刻門前に日時計を設置し看守役人を置く。	
1740年	5	5	28	「阿氏西平築親雲上守良・・乾隆五・・」銘の八重山焼厨子甕製作される。	中国、湖南苗族の乱。
1741年	寛保　1	6	29	「雍正十九年」銘の八重山焼厨子甕製作される。	
1742年	2	7	30	仲村渠致元、薩摩への献上品として煙草盆の火取と灰吹を製作する。また、大碗・飯碗・美碗を中国陶法にて製作し奉上する(『用姓家譜』)。	ロシア、イルクーツルに日本航海学校を建つ。
1743年	3	8	31	仲宗根喜元、平田典寛について「五色玉」「各様之玉」「白鹽焙焼法」「龍瓦薬掛之法」を習熟する(『新参珠姓家譜』)。また、釉薬を施した龍瓦て製作。	
1745年	延享　2	10	33	『球陽』『遺老説伝』完成。仲宗根喜元、唐焼物主取となる(『新参珠姓家譜』)。	
1748年	寛延　1	13	36	仲宗根喜元、南京茶家および湯煎鑵、茶庫などを焼いて内府へ献ず(『陶工家譜』)。	
1751年	宝暦　1	16	39	仲村渠致元、尚穆王の祝儀のため、土器陶を製作。	
				仲村渠致元、数々の功績により新家譜を賜り士籍となる(『用姓家譜』)。	ビルマ、コンバウン(アラウンパヤー)朝成立(～1885年)。
1752年	2	17	尚穆　1		
1753年	3	18	2	首里城寝廟殿・世添御殿創建される。	中国、ポルトガル人のマカオ割譲再要求を拒否。
1754年	4	19	3	中国の制に倣い、首里城奉神門を改修。仲村渠致元死去。仲村渠致元の子致英(中国名：用續功)上焼物主取となる(『陶工家譜』)。	

琉球王国・首里城関係年表(８)

西　暦	日本年号	中国年号	王　　統	事　　項	日　本　・　世　界
1758年	8	23	7	「乾隆二三年」墨書銘のパナリ焼壺製作される。	オダンダのジャワ支配。
1760年	10	25	9	大地震があり、首里城城壁57ヶ所が損壊。	
1765年	明和　2	30	14		オランダより初めて金銀銭輸入。
1767年	4	32	16		タイ、アユタヤ朝滅亡(1351～1767年)。
1768年	5	33	17	地震の被害にあった首里城正殿を重修。	朝鮮に銅を輸出。ロシア、イルクーツクに日本語学校建つ。
1771年	8	36	20	明和の大津波(宮古・八重山で遭難者11,861人)。	
1773年	安永　2	38	22	首里城北殿改修。	
1776年	5	41	25		アメリカの独立宣言。
1781年	天明　1	46	30		蛇の目釉ハギ開始、広東碗（高高台）が1781～1788年頃に登場し、高台内中央を円く削り込み、その周辺の釉を蛇の目状に掻き取る。中国、甘粛の回教徒反乱。
1782年	2	47	31		天明の大飢饉(～1787年)。タイ、ラタナコーシン(チャクリ・バンコク)朝成立、清に朝貢。
1787年	7	52	36		寛政の改革。
1789年	寛政　1	54	38		フランス革命。ベトナム、黎朝大越国が西山朝に滅ぼされる。
1792年	4	57	41		ロシア使節ラクスマン、根室に来る。
1796年	8	嘉慶　1	尚温　2		中国、白蓮教徒の乱(～1804年)。
1797年	9	2	3	宮古多良間島沖で英国艦船プロビデンス号(船長ブロートン)難破し、同年那覇に寄港する。「嘉慶二年」墨書銘の古我知焼壺型厨子甕製作される。	イギリス船、蝦夷地に来航。
1798年	10	3	4	首里中城御殿に公学校所(国学)創設。	近藤重蔵、エトロフ島探検。
1799年	11	4	5	識名園(南苑)が造営される。	東蝦夷地を直轄領とする。エトロフ航路が開かれる。
1800年	12	5	6		伊能忠敬、蝦夷地を測量。
1801年	享和　1	6	7	公学校所を龍潭池畔に移転し国学と改める。	
1802年	2	7	8		阮福暎(映)、西山朝を滅ぼしベトナムを統一(阮朝成立)。蝦夷地奉行を置く。
1803年	3	8	尚成　1	「嘉慶八年」墨書銘の古我知焼厨子甕製作される。	アメリカ船、長崎に来航し、通商要求。
1804年	文化　1	9	尚灝　1		ロシア使節レザノフ、長崎に来航し、通商を要求。阮朝、国号を越南と称す(阮朝越南国)。
1806年	3	11	3	首里城広福門改修。「嘉慶拾一年」銘の八重山焼燈籠製作される。	ロシア人、樺太千島来襲。
1808年	5	13	5		日本、フェートン号事件(イギリス軍艦フェートン号がオランダ国旗を揚げて長崎湾内に侵入)。イギリス、マカオ攻撃。間宮林蔵、樺太探検。
1809年	6	14	6	真玉橋(北側の世寄橋)が大雨で決壊。「嘉慶十四年」墨書銘の古我知焼鉢および壺型厨子甕製作される。	
1811年	8	16	8	首里城正殿重修。	イギリス、ジャワ占領(～1816年)。
1813年	10	18	10	「嘉慶十八年」銘のパナリ焼壺製作される。	中国、天理教徒の乱。
1816年	13	21	13	英艦船ライアン号・アルセスト号来航し、42日間滞在。	
1820年	文政　3	25	17	大東島(ボロジノ島)イギリス海軍ボナフィデン大佐に発見。	中国、宣宗道光帝即位。中国、回教徒の乱。
1824年	7	道光　4	21	仲村渠致元の三世致安(中国名：用徳文)上焼物主取となる。(『陶工家譜』)	第１次ビルマ戦争(～1826年)。
1825年	8	5	22		日本、異国船打払令。
1827年	10	7	24	英国船ブロッサム号来航する。	
1832年	天保　3	12	29		福建、台湾反乱。
1836年	7	16	尚育　2	真玉橋重修(北側の世寄橋のアーチを大きくし、その北側に世済橋を新たに新設。北から南へ、世済橋、世寄橋、真玉橋)。	
1837年	8	17	3	重修真玉橋碑文建立(1522年の木橋を石橋に改修した記念碑文、1708年と1837年の二次の改修の事が一つの碑文に記す)。	中国、イギリス人がアヘン3,400函をもたらす。大塩平八郎の乱。
1838年	9	18	4	仲村渠致元の四世致眞(中国名：用崇禮)中国福州にて「彩色並満花其他色々之焼物」の陶技を学ぶ(『陶工家譜』)。	
1840年	11	20	6		アヘン戦争(～1842年)。
1842年	13	22	8		南京条約(香港島割譲ほか)。
1844年	弘化　1	24	10	フランス軍艦アルクメール号那覇入港し、宣教師フォルカードを残して去る(聖現寺に逗留)。	
1845年	2	25	11	英国艦サマラン号八重山地方を測量し、那覇に到来。	
1846年	3	26	12	英国船スターリング号那覇に到来し、英国宣教師ベッテルハイム来琉(９年間滞在)。首里城正殿重修。首里城外郭の歓会門、久慶門、継世門を二重扉とする。仏艦クレオパートル号ほか二隻来航し、フォルカードを乗せて去る。「道光二六年」銘の八重山焼縄目文水甕製作される。	
1849年	嘉永　2	29	尚泰　2	「道光二九年」銘の八重山焼縄目文水甕および八重山焼甕製作される。	
1851年	4	咸豊　1	4	異国人(英国人等)が滞在につき、城の防備を固めるため城壁の積み目に石灰を塗り固める。	太平天国の乱(～1864年)。
1852年	5	2	5		第２次ビルマ戦争(～1853年)。
1853年	6	3	6	米海軍提督ペリー、サスケハナ号以下三隻で来琉し首里城訪問。	ロシア使節プチャーチン長崎来航、通商要求。
1854年	安政　1	4	7	琉米修好条約が調印される。ロシアのプチャーチン提督パルラダ号で来航。	日米和親条約(下田・函館の開港)。

琉球王国・首里城関係年表(９)

西　暦	日本年号	中国年号	王　　統	事　　項	日　本　・　世　界
1855年	2	5	8	仲村渠致元の四世致命(中国名：用思明)上焼物主取となる(『陶工家譜』)。	日露和親条約締結。フランス、パリ万国博覧会開催。
1856年	3	6	9		アロー戦争(第２次アヘン戦争)、～1860年。
1857年	4	7	10	中城御殿(世子殿)を当蔵へ移転。宮古多良間島高田の浜沖にオランダ商船ファン・ポッセ号(船長ハーゲマン)漂着、那覇へ転送後オランダ商船ヤン・ダニエル号(船長ハーガス)が迎える。	日米条約(下田条約)締結。インド、セポイの反乱。英仏連合軍、中国広東を占領。
1858年	5	8	11		日米修好通商条約。安政の大獄(～1859年)。仏越戦争(～1862年)。
1860年	万延　1	10	13		桜田門外の変(水戸・薩摩両藩の浪士が大老井伊直弼を暗殺)。
1862年	文久　2	同治　1	15		生麦事件(横浜の生麦村で島津久光の行列に遭遇したイギリス商人リチャドソンら四人が薩摩藩士に殺傷)。
1863年	3	2	16		薩英戦争(生麦事件の賠償交渉不調によるイギリス艦隊の鹿児島砲撃事件)。
1864年	元治　1	3	17		四カ国連合艦隊、下関砲撃。
1867年	慶応　3	6	20	「同治六年」銘の八重山焼甕製作される。	江戸幕府倒れる。
1868年	明治　1	7	21		王政復古、明治と改元。
1869年	2	8	22	弁財天堂が焼失する。壺細工高江洲筑登之親雲上、上焼物御厨子弐つ御仕立て主取に申し付けられる。	五稜郭の戦い終り、戊辰戦争終結。スエズ運河開通。
1871年	4	10	24	平良頭忠導氏玄安ら中山の帰途台湾で遭難し、54人惨殺される。	ドイツ帝国成立。岩倉具視らを欧米に派遣。日清修好条約締結。
1872年	5	11	25	琉球藩設置。政府、太陽暦の使用、24時間制の採用を命ずる。	新橋―横浜間に鉄道開通。
1873年	6	12	26	ドイツ商船ロベルトソン号宮古島宮国村沖合で難破し、８名を救出。	キリスト教の禁を解く。地租改正条例布告。
1874年	7	13	27		日本の台湾出兵。
1876年	9	光緒　2	29	ドイツ皇帝軍艦クロープ号を派遣し、博愛記念碑を宮古島に建立。	日朝修好条規調印。
1877年	10	3	30		西南戦争。
1879年	明治 12	5	32	尚泰王、首里城明け渡し(廃藩置県)、450年に及ぶ琉球王国崩壊。熊本鎮台分遣隊首里城駐留、琉球処分。沖縄県誕生、鍋島直彬県令着任。	
1880年	13	6		竹添進一郎、天津にて〈分島・増約〉に関する口上書を李鴻章に呈示、李鴻章、増約案に不満を示し、「琉球三分説」を呈示。	中国、李鴻章海軍を創設。京城に日本公使館設置。
1881年	14	7		県庁を首里から那覇の西村に移転。	明治14年の政変。
1882年	15	8		この頃、旧三司官富川盛奎ら、数人脱清。田代安定、沖縄地理・旧慣調査に来県。	
1884年	17	10		中城御殿ほか21ヶ所の敷地・建物など尚泰の私有財産と確定。御物(グスク)城跡に博物館開設。糸満の玉城保太郎、水中眼鏡を考案。	清仏戦争、実質上始まる。
1885年	18	11		田代安定、再び八重山を訪れる。	
1889年	22	15		瓦葺きの制限解除。	大日本帝国憲法発布。
1890年	23	16		玉置半右衛門、大東島開墾許可をえて上陸。	府県制・郡制公布。
1891年	24	17		中学校を、旧中城御殿跡に移転。	
1893年	26	19		笹森儀助、来県調査(宮古・八重山を含む)。バジル・ホール・チェンバレン来県、民俗・言語の調査を実施。	
1894年	27	20		清国貿易に関する船舶の那覇港への出入及び貨物積卸しを許可。	日清戦争はじまる。
1897年	30	23		沖縄師範学校、首里城から当蔵に移転。「沖縄県間切吏員規程」施行され、間切・島番所は役場に改称、地方役人(頭・与人・首里大屋子・大目差・大筆者など)大幅減員。	朝鮮の国号を大韓と改める。
1898年	31	24		**徴兵令施行。首里の士族ら11人、兵役を免れようと中国亡命を図るが宮古で逮捕。**	フィリピン、スペイン領からアメリカ領と成る。アギナルド、フィリピンの独立宣言(1899年共和国)。
1900年	33	26		玉置半右衛門、南東島開墾開始。 この頃、県下の人口465,470人。	
1904年	37	30		鳥居龍蔵、荻堂貝塚を発見し、川平貝塚を調査。	日露戦争はじまる。
1905年	38	31		鳥居龍蔵、八重山の先史時代における一群の土器を「外耳土器」と命名する。	日本海海戦。日露講和条約(ポーツマス条約)調印。
1906年	39	32		加藤三吾、『琉球の研究』刊行。	ロシアより樺太南半を受領。
1908年	41	34		首里城中山門、老朽のため52円余で売却撤去。沖縄県及び島嶼町村制を施行。	中国、宣統帝溥儀即位。
1909年	42	宣統　1		首里城、首里区に払い下げられる。	
1912年	45 大正　元	民国　1		首里城内に第一小学校ができ、広福門、奉神門撤去。 県立第二中学校、首里城の仮校舎より嘉手納に移転。	中華民国成立。孫文、臨時大総統。 宣統帝退位、清朝の滅亡。
1914年	3	3			第一次世界大戦はじまる(～1918年)。
1919年	8	8		松村 瞭、荻堂貝塚の発掘調査を行う。	パリ講和会議開催。
1920年	9	9		大山 柏ら伊波貝塚を発掘調査する。	国際連盟成立。
1923年	大正 12	12		首里市会、首里城正殿の解体を決議する。首里城伊東忠太・鎌倉芳太郎来県、首里城の調査研究を行い文部省に保存を訴える。明刀銭、城岳貝塚から発見される。	関東大震災。

琉球王国・首里城関係年表(10)

西　暦	日本年号	中国年号	王　　統	事　　項	日　　本　・　世　界
1924年	13	13		沖縄神社創建し首里城正殿を拝殿とする。	モンゴル人民共和国成立。
1925年	14	14		首里城正殿を国宝に指定。国勢調査(人口557,993人)。	
1927年	昭和　2	16		国庫補助により首里城正殿の解体修理工事着手。	
1931年	6	20		首里城正殿解体修理工事完成。多和田真淳『沖縄薬用植物薬効』を刊行。	満州事変おこる。
1932年	7	21		多和田真淳、長浜貝塚・喜屋武マーブ遺跡発見。国吉真哲・浦崎康華、崎樋川貝塚を発見。	満州国建国。元清国皇帝溥儀満州国執政となる。
1933年	8	22		首里城歓会門・瑞泉門・白銀門・守礼門ほか国宝指定。	国際連盟より脱退。
1934年	9	23		首里城北殿の修理始まる(～1936年完成)。	
1936年	11	25		伊東忠太・鎌倉芳太郎、首里城跡・浦添城跡・照屋城跡・南山城跡の発掘調査(～1937年)。徳永重康、伊江島ガタ原洞窟遺跡を調査。首里城内に郷土博物館開館。末吉宮本殿国指定。	
1937年	12	26		田辺 泰・巌谷不二雄『琉球建築』を刊行。守礼門の「昭和12年」銘入りの鬼板瓦が製作され、守礼門解体修理。伊東忠太・鎌倉芳太郎『南海古陶瓷』刊行。	蘆溝橋事件(日中戦争勃発)。
1939年	14	28		弁ヶ嶽石門、国宝指定。小葉田 淳『中世南島交貿易史の研究』刊行。	
1941年	16	30		東恩納寬淳『黎明期の海外交通史』刊行。	第二次世界大戦はじまる(～1945)。
1944年	19	33		首里城地下に第32軍司令部壕が構築される。	
1945年	20	34		首里城正殿を含む建造物群や石積み等、沖縄戦で焼失・崩壊。	広島・長崎に原爆投下。ポツダム宣言受諾(無条件降伏)。
1946年	21	35		GHQ、日本と南西諸島を行政分離宣言。バックマスター海軍少佐、軍政府長官就任。米軍政府、戦前の市町村長を原則として市町村長に任命。	日本国憲法公布。
1951年	26	40		首里城跡に琉球大学開学。	サンフランシスコ対日講和条約、日米安全保障条約調印。
1952年	27	41		琉球政府発足、初代行政主席に比嘉秀平任命。	アメリカ、水爆実験。
1953年	28	42		奄美群島日本復帰。	
1957年	32			園比屋武御嶽石門を復元する。	
1958年	33			守礼門を復元する。	東京タワー完工。関門トンネル開通。
1966年	41			全琉の人口934,166人。	
1967年	42			首里城跡を含む戦災文化財の復元整備計画立案。大山盛保、「港川人」人骨発見。	
1968年	43			八重山の高山窯、桃林寺の花瓦の製造を最後に窯を閉じる。	小笠原諸島日本に復帰。
1972年	47			米民政府解散、沖縄本土復帰(沖縄県となる)。首里城歓会門復元整備着手(～2001年度までに外郭石積み、木曳門、世継門などの各門が完成)。	
1980年	55			県人口は1,106,595人。	
1982年	57			首里城跡より琉球大学移転。	
1984年	59			沖縄県が「首里城公園基本計画」策定。	
1985年	60			首里城正殿跡の発掘調査に着手(～1986年度まで実施)。	
1986年	61			首里城内郭の約4haを「国営沖縄記念公園首里城地区」を沖縄復帰記念事業として復元整備をおこなうことが閣議で決定。	
1988年	63			北殿・南殿・御庭地区の発掘調査が開始。	
1989年	平成　1			首里城正殿及び南殿、番所、北殿、奉神門復元工事に着手。	
1992年	4			首里城正殿、北殿、南殿ほか復元整備完了し一般公開。	
1994年	6			首里城京の内地区の発掘調査開始(～1997年度)、1459年に火災により焼失した倉庫跡(明実録掲載)が発見される。	
1997年	9			首里城下之御庭の首里森御嶽復元竣工。	
1999年	11			首里城二階殿復元竣工(平成10年度より敷地造成・外構整備・工事着手)。	
2000年	12			沖縄サミット開催。首里城京の内地区倉庫跡(1459年火災で焼失)出土陶磁器518点ほかが戦前・戦後をとおして初めて考古資料の部で国の重要文化財に指定される。首里城跡、園比屋武御嶽石門を含む９資産(玉陵、今帰仁城跡、座喜味城跡、勝連城跡、中城城跡、識名園、斎場御嶽)がユネスコの世界遺産に登録される。首里城系図座・用物座復元竣工。	
2003年	15			首里城京の内復元竣工(平成13年度より工事着手)。	
2008年	19			首里城書院・鎖之間復元竣工(平成15年度：外構整備、平成16年度：建築工事着手)。	

〈 参考資料 〉

1. 池間栄三『與那国の歴史』大晃印刷所 1972年(再版)。
2. 宮城栄昌・高宮廣衞 『沖縄歴史地図』〈歴史編〉 柏書房 1983年。
3. 沖縄大百科事典刊行事務局『沖縄大百科事典』 別巻 沖縄タイムス社 1983年。
4. 日本史料編纂会『中国・朝鮮の史籍における 日本史料集成 明実録之部1』国書刊行会 1979年。
5. 知念 勇・池田榮史・江藤和幸「灰釉碗からみた近世沖縄古窯の編年」『沖縄県立博物館紀要』第14号 1988年。
6. 池田榮史・津波古 聡 「灰釉碗の話」『沖縄県立博物館』第17号 1991年。
7. 沖縄県教育委員会『重新校正 中山世鑑』1983年。
8. 沖縄県教育委員会『湧田古窯跡(Ⅰ)』1993年。
9. 阿利直治「沖縄県石垣市山田等窯址、慶田川窯址、黒石川窯址」『黒石川窯址』石垣市教育委員会 1993年。
10. 沖縄県教育委員会「首里城の歴史概略」『首里城 -南殿・北殿跡の遺構確認調査-』1995年。
11. 兵庫埋蔵銭調査会『日本出土銭総覧』1996年。
12. 『平良市の文化財』平成9年度平良市文化財要覧 平良市教育委員会 1997年。
13. 石井進・田村晃一ほか『日本史広辞典』日本史広辞典編集委員会 株式会社 山川出版社 1997年第一版。
14. 沖縄県教育委員会『首里城跡 -京の内跡発掘調査報告書(Ⅰ)-』1998年。
15. 鈴田由紀夫「沖縄のやきもの年表」『平成10年度企画展 沖縄のやきもの-南海からの香り-』佐賀県立九州陶磁文化館 1998年9月11日。
16. 津波古 聡 「沖縄の陶器関係年表」『沖縄の陶器類関係資料調査報告書』沖縄県文化財調査報告書第142集 2003年。
17. 『ニューステージ 世界史詳覧』 株式会社浜島書店 2002年10月1日改訂版、2006年印刷。
18. 金田明美「多良間沖で難破したオランダ商船ファン・ボッセ号の歴史的考証」『日蘭学会 会誌』第26号 通巻48号 2001年10月。
19. 文部科学省科学研究費補助金特定領域研究『中世考古学の総合的研究 -学融合を目指した新領域創生-』平成18年度 シンポジウム『古代・中世の境界領域 -キカイジマの位置付けをめぐって-』資料集 2007年2月10・11・12日 奄美市中央公民館 喜界町自然休養村管理センター
20. 上里隆史『最新歴史コラム 目からウロコの琉球・沖縄史』有限会社 ボーダーインク 第1刷 2007年2月25日。
21. 「沖縄の歴史」・「琉球王国とは」 (財)海洋博覧会記念公園管理財団 首里城公園管理センター ホームページ 2007年6月
22. 石井龍太「八重山諸島における琉球近世瓦関係文献資料の集成と諸問題の検証-琉球近世瓦の研究-」『よのつぢ』浦添市文化部紀要 第3号 2007年3月。
23. 山田浩世「古琉球における海船の変遷とその状況-進貢・東南アジア派遣船を中心に-」『よのつぢ』浦添市文化部紀要 第3号 2007年3月。

中国(元・明・清代)年代表

Periods of Chinese History(Yuan, Ming and Qing Dynasties)

元 時 代 ・ (Yuan Dynasty)	1271年～1368年		
明 時 代 ・ (Ming Dynasty)	1368年～1644年		
洪 武 ・(Hong-wu)	1368年～1398年	弘 治 ・(Hong-zhi)	1488年～1505年
建 文 ・(Jian-wen)	1399年～1402年	正 徳 ・(Zheng-de)	1506年～1521年
永 楽 ・(Yong-le)	1403年～1424年	嘉 靖 ・(jia-jing)	1522年～1566年
康 熙 ・(Hong-xi)	……1425年	隆 慶 ・(Long-qing)	1567年～1572年
宣 徳 ・(Xuan-de)	1426年～1435年	万 暦 ・(Wan-li)	1573年～1620年
正 統 ・(Zheng-tong)	1436年～1449年	泰 昌 ・(Tai-chang)	……1620年
景 泰 ・(Jing-tai)	1450年～1457年	天 啓 ・(Tian-qi)	1621年～1627年
天 順 ・(Tian-shun)	1457年～1464年	崇 禎 ・(Chong-zhen)	1628年～1644年
成 化 ・(Cheng-hua)	1465年～1487年		
清 時 代 ・ (Qing Dynasty)	1644年～1911年		
順 治 ・(Shun-zhi)	1644年～1661年	道 光 ・(Dao-guang)	1821年～1850年
康 熙 ・(Kang-xi)	1662年～1722年	咸 豊 ・(Xian-feng)	1851年～1861年
雍 正 ・(Yong-zheng)	1723年～1735年	同 治 ・(Tong-zhi)	1862年～1874年
乾 隆 ・(Qian-long)	1736年～1795年	光 緒 ・(Guang-xu)	1875年～1908年
嘉 慶 ・(Jia-qing)	1796年～1820年	宣 統 ・(Xuan-tong)	1909年～1911年

引用・参考文献

1. 東京国立博物館『東京国立博物館 図録目録・中国陶磁篇Ⅱ』 1990年刊行を基に再編集をおこなった。
2. 沖縄県教育委員会『首里城跡 -京の内跡発掘調査報告書(Ⅰ)-』1998年。

山北・山南（北山・南山）の王統譜

山北（北山）王統

王 統	王 名	西 暦	中国年号	日本年号
北山王統 3代 33年	1. 怕 尼 芝	1383 ～1390年	洪武16～洪武28年	弘和 3～元中 7年
	2. 珉	1390 ～1395年	洪武23～洪武28年	元中 7～応永 3年
	3. 攀 安 知	1396 ～1416年	洪武29～永楽14年	応永 4～応永23年

参 考 文 献

1. 今帰仁村史編纂委員会『今帰仁史』今帰仁村役場 1975年7月。
2. 今帰仁村歴史文化センター『今帰仁の歴史』なきじん研究 3 今帰仁村教育委員会 改訂第2刷 1999年3月。
上記、2. による今帰仁の時代区分は以下の8時期区分され、試みられている。

1. グスク時代（狭義）・・・11,12世紀～13世紀末。	5. 第二監守時代（後期）・・・1610年～1665年。
2. 北山王時代（怕尼芝、珉、攀安知）・・・1322年～1416年。	6. 間切時代（前期）・・・1666年～1879年。
3. 第一監守時代（1422年～1469年）	7. 間切時代（後期）・・・1880年～1908年。
4. 第二監守時代（前期）・・・1470年～1609年。	8. 村政時代・・・1908年～現在。

山南（南山）王統

王 統	王 名	西 暦	中国年号	日本年号
南山王統 4代 47年	1-a. 承察度（大里按司）	1380～1387年	洪武13～洪武20年	？？ ～元中 4年
	1-b. 汪英紫（王の叔父）	1387～1397年	洪武20～洪武30年	元中 4～応永 4年
	2. 汪 応 祖（王の弟）	1405～1415年	永楽 3～永楽13年	応永12～応永22年
	3. 他 魯 毎	1415～1427年	永楽13～宣徳 2年	応永22～応永34年

註文献	王 名	西 暦	推定の居城・拠点	備 考
①	1-a. 承察度（山南王）	1380～1387年	南城市・大里グスク	別称：大里按司
②	1-b. 汪英紫（王の叔父）	1387～1397年	南城市・大里グスク	別称：しものよのぬし
③	承察度（山南王の子）	1392年	—	朝鮮亡命
④	温沙道（山南王）注	1398年	—	家来15名と朝鮮亡命（客死）
⑤	2. 汪 応 祖（王の弟）	1405～1414年	豊見城市・豊見城グスク～糸満市・大城森グスク～糸満市・南山城跡	汪応祖、兄の達勃期に殺害され、諸按司が連合して、これを討ち他魯毎が南山王となる。
⑥	3. 他魯毎（汪応祖の子）	1415～1427年	糸満市・南山城跡	

註文献：①・②、⑤・⑥：

A. 島尻郡教育部会員『島尻郡誌』島尻郡教育部会 二葉株式会社 1960年10月10日再版発行。
B. 「島尻郡誌（続）」編集委員会『島尻郡誌（続）』財団法人 南部振興会 1977年5月15日。

註文献：②・③：

訳注者 嘉手納宗徳『李朝実録琉球史料（一）』訳注松涛書屋史料叢書全三十巻 第一巻 沖縄史料館
松涛書屋 1982年5月20日。

注、温沙道は、「上里按司」或いは「大里按司」とも解され、後者の「大里按司」となると「承察度」が亡命した事になる。

※『大里の文化財』（注1）によると「島添大里グスクは、東大里グスクと称し、島添大里按司によって増改築された。島添とは「島々（村々）を支配する」という意味であり、当時の島添大里按司は島尻地域の東四間切（大里・佐敷・知念・玉城・与那原は大里）を支配下に置く・・・・・自らを「下の世の主」と称した。」と掲載している。

（注1）大里村文化財保護資料第3集『大里の文化財［第三版］』 大里村教育委員会 社会教育課 2001年3月。

王 統 年 代 表

王 統	王 名	西 暦	中国年号	日本年号
舜天王統 3代 93年	1. 舜 天	1166～1237年	乾道 2～嘉熙 1	文治 3～嘉順 3
	2.舜天順康熙	1185～1248年	淳熙12～淳祐 8	暦仁 1～宝治 2
	3. 義 本	1206～1259年	開禧 2～宝祐 71	建長 1～正元 1
英祖王統 5代 90年	1. 英 祖	1260～1299年	景定 1～**元**大徳 3	応文 1～正安 1
	2. 大 成	1300～1308年	大徳 4～至大 1	正安 2～延慶 1
	3. 英 慈	1309～1313年	至大 2～皇慶 2	延慶 2～正和 2
	4. 玉 城	1314～1336年	延祐 1～至元 2	正和 3～延元 1
	5. 西 威	1337～1349年	至元 3～至正 9	延元 2～正平 4
察度王統 2代 56年	1. 察 度	1350～1395年	至元10～洪武28	正平 5～応永 2
	2. 武 寧	1396～1405年	洪武29～永楽 3	応永 3～応永12
尚思紹王統 (第一尚氏) 7代 64年	1. 尚思紹	1406～1421年	永楽 4～永楽19	応永13～応永28
	2. 尚巴志	1422～1439年	永楽20～正統4	応永29～永享11
	3. 尚 忠	1440～1444年	正統 5～正統 9	永享12～文安 1
	4. 尚思達	1445～1449年	正統10～正統14	文安 2～宝徳 1
	5. 尚金福	1450～1453年	景泰 1～景泰 4	宝徳 2～享徳 2
	6. 尚泰久	1454～1460年	景泰 5～天順 4	享徳 3～寛正 1
	7. 尚 徳	1461～1469年	天順 5～成化 5	寛正 2～文明 1
尚円王統 (第二尚氏) 19代 410年	1. 尚 円	1470～1476年	成化 6～成化12	文明 2～文明 8
	2. 尚宣威	1477(6ヵ月)年	成化13	文明 9
	3. 尚 真	1477～1526年	成化13～嘉靖 5	文明 9～大永 6
	4. 尚 清	1527～1555年	嘉靖 6～嘉靖34	大永 7～弘治 1
	5. 尚 元	1556～1572年	嘉靖35～隆慶 6	弘治 2～元亀 3
	6. 尚 永	1573～1588年	万暦 1～万暦16	天正 1～天正16
	7. 尚 寧	1589～1620年	万暦17～48(泰昌1)	天正17～元和 6
	8. 尚 豊	1621～1640年	天啓 1～崇禎13	元和 7～寛永17
	9. 尚 賢	1641～1647年	崇禎14～順治 7	寛永18～正保 4
	10. 尚 質	1648～1668年	順治 5～**清**康熙 7	慶安 1～寛文 8
	11. 尚 貞	1669～1709年	康熙 8～康熙48	寛文 9～宝永 6
	12. 尚 益	1710～1712年	康熙49～康熙51	宝永 7～正徳 2
	13. 尚 敬	1713～1751年	康熙52～乾隆16	正徳 3～宝暦 1
	14. 尚 穆	1752～1794年	乾隆17～乾隆59	宝暦 2～寛政 6
	15. 尚 温	1795～1802年	乾隆60～嘉慶 7	寛政 7～享和 2
	16. 尚 成	1803(1年)	嘉慶 8	享和 3
	17. 尚 灝	1804～1834年	嘉慶 9～道光 7	文化 1～文化11
	18. 尚 育	1835～1847年	道光 8～道光27	文政12～弘化 4
	19. 尚 泰	1848～1879年	道光28～光緒 5	嘉永 1～明治12

参考資料

・多和田真重『沖縄の歴史 - 一千年の事件と文化が分かる - 』那覇出版社 2000年2月15日。

・沖縄タイムス『沖縄大百科事典』別巻 1983年。

報 告 書 抄 録

ふりがな	しゅりじょうあと
書名	首 里 城 跡
副書名	京の内跡発掘調査報告書（Ⅱ）
巻次	―
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第49集
編著者名	金城亀信・伊集ゆきの・瑞慶覧尚美・赤嶺雅子・又吉 純子
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター
所在地	〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原193-7　TEL　098-835-8751・8752
発行年月日	2009/3/30

ふりがな 収録遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	発掘面積 ㎡	調査原因
しゅりじょうあと 首里城跡	おきなわけんなはし 沖縄県那覇市 しゅりとうのくらちょう 首里当蔵町3丁目 ・きんじょうちょう 金城町1丁目	那覇市 47201	―	26° 12′ 31.32683″ 26° 12′ 32.15599″ 26° 12′ 32.35347″ 26° 12′ 32.97711″	127° 43′ 18.24229″ 127° 43′ 18.93019″ 127° 43′ 20.97267″ 127° 43′ 20.97684″	1994.11.21 ～ 1995.3.28	2,000	国営首里城公園 整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
首里城跡	祭祀 空間	中世	倉庫跡内	金属製品 兜鉢・鍬形台・鎧の小札・鞅・鎖帷子・刀の鍔および切羽・鏡・香炉・長柄の柄杓・倉庫の錠・釘・鋏・蝶番・銭貨等。 ガラス製品　小玉・勾玉	**1459年の火災により消失した倉庫跡が発掘された。この倉庫より陶磁器類を主体とする一括資料が得られた。陶磁器類の整理・分類の結果、推定で1,162個体を数えた。これらの出土品の中から平成12年6月27日付けで「沖縄県首里城京の内出土陶磁器518点　附一、金属製品一括　附一、ガラス玉一括」が考古資料の部で国の重要文化財に指定された。今回は、重要文化財の中で未報告であった金属製品及びガラス玉の一括資料と新たに重要文化財の陶磁器との接合資料が確認された為、これらの資料も報告する。併せて火災によって焼失した倉庫跡の火事場清掃で別途廃棄された石積み遺構内から出土した資料も網羅した。倉庫跡出土の金属製品には、県内遺跡で初めて出土した長柄の柄杓や兜鉢の鍬形台に取り付けられた鍬形及び立物が図上復元され、日本の影響を受けながら琉球王国独特の鍬形の立物であることが推定された。**
			倉庫跡の覆土	中国産（青磁・白磁・青花・褐釉陶器・白地鉄絵・瑠璃釉等） 中世陶器・カムイ焼須恵器 沖縄産（土器・瓦質土器・坩堝・壁材・石製品・骨製品等）	
			区画石積みSA33・34	**中国産（青磁・白磁・青花・褐釉陶器・三彩等）、タイ産褐釉陶器及び半練、中世陶器、沖縄産（土器・瓦質土器等）**	

要約	**昭和61年度に首里城公園計画区内約18haの内、首里城内郭の約4haが国営公園区域として整備することが閣議決定された。復元整備に伴う遺構確認調査は、昭和63年度から内閣府 沖縄総合事務局 国営沖縄記念公園事務所との委託を沖縄県教育委員会が受けて、南殿・北殿・御庭地区などの遺構確認調査を実施し、平成4年度に首里城正殿・南殿・北殿などが復元整備され一部が開園した。未整備地区であった「京の内」地区の復元整備が課題となり、整備に必要な基礎資料を得る目的で平成5年度から平成9年度までの四カ年間に亘って発掘調査実施され、その成果を基本にして平成13年度から京の内の復元整備がはじまり、平成15年度に復元整備を終えている。「京の内」は、正殿・南北殿・奉神門などの政治を執り行う建造物群とは機能が異なり、歴代琉球国王の即位決定の儀式や琉球王国の重要な祭祀及び儀式が執り行われた神聖なる空間であった。この空間内には、首里森御嶽・真玉森御嶽など重要な拝所があった。この地域で1459年の火災によって焼失した倉庫跡が発見された。**

沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第49集

首　里　城　跡

―京の内跡発掘調査報告書（Ⅱ）―

発 行 年　2009年（平成21）３月30日

発　　行　沖縄県立埋蔵文化財センター

編　　集　沖縄県立埋蔵文化財センター調査班
〒903-0125
沖縄県中頭郡西原町字上原193-7
TEL 098（835）8751・8752

印　　刷　合資会社　正美堂印刷所
〒901-2226
沖縄県宜野湾市嘉数３-21-15
TEL 098（898）4611

©　沖縄県立埋蔵文化財センター　2009 Printed in Japan
許可無く本書の無断複製、転載、複写を禁ずる。